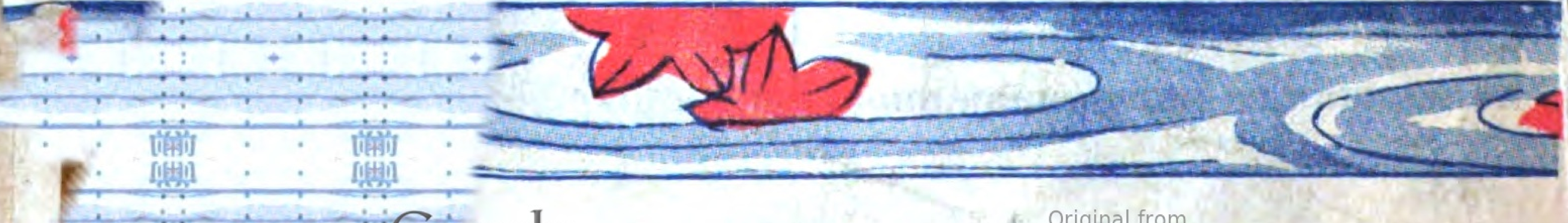
KING.
Published monthly by the **Dai Nippon Yubenkai Kodansha,** Tokio, Japan.
Entered as second class mailmatter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月十二日第三種郵便物認可　昭和四年九月三日印刷納本　昭和四年十月一日發行（毎月一回一日發行）







おん身の國は亡んだ、おん身の忠義もをはつた、宋に寄せた眞心をそのまゝに元に事へよ、事へなば宰相になれうと。だが天祥は涙の顔をあげていつた。國の亡ぶのを救ひ得ないといふ人臣の罪は死してもなほ足りない。それをどうして死を免れて二心を懐かれうと。竟に天祥は元の都に送られて、土窟の中に籠められたのである。その間にも、元の天子世祖は幾度となく人をして元に事へよ、事へてくれと諭させた。もとより天祥は耳を傾けない。じめじめとした窟の中をも安樂國と觀じてゐる彼である。靜に正氣の歌を誦する。

そして到頭かねての願ひがかなつて、死刑に處せらる事となつた。その時天祥は南の方、宋の故地に向つて、再拜し、わが事畢るとたゞ一語を殘し、從容として死んだ。

天地正氣あり、の句にはじまるあの歌、悲壯慷慨、忠義の氣千古とこしなへに存する。わが日本の國、維新の際、志士は皆日に高誦してやまなかつたのも此の歌である。

キング七月三四八・三四九 八月三六〇・三六一頁に發表された

救世的の肺病藥とは何か？

——効くと言ふ責任藥は只一つ——

一記者

汎ゆる科學の中で最も進歩したる近代醫學の力を以てしてさへ肺病ろくまくは尚不治の難症と言はれ今日でも五年十年或は一生治らぬものとして懊惱してゐる人が多くある様であります。それは恐ろしい病竈內の結核菌に對し直接に藥



力を發揮し作用して根本から治すと言ふ徹底的の療法を即ち責任を持つ妙藥が發見されない爲であります。

これでは肺病患者は永久に助からぬ何とか救ふ道はないかと斯界の大家ドクトル尾山瑞雄先生は既に米國在留の當時から有らゆる方面に亙つて研究に研究を積まれ其の苦心の結果として今迄にない奇蹟的強度の肺治療藥ツペルシンを完成されました。是を內服すると忽ち特殊の靈能が現はれて他藥では絶對に見られない特徴の第一は結核菌の蠟様皮膜を溶解して益々喰菌作用を促進します。第二の特徴としては結核菌を孤立せしめて諸他の病原菌との混合傳染を未然に防止します。特徴の第三は菌體の毒素を稀釋して患者の最も恐るべき身體の消耗衰弱を頓に喰止めます。從つて初期の輕症者は勿論二期三期の重症で永年病苦と戰つて悲觀のドン底に泣いて居た人達でも短時日の服藥で明瞭に食慾が進み出し苦しい不定の發熱も漸次順調に下降してくるし、ジメ〳〵と氣持の惡い盜汗もまた何時しか消退し、不眠の苦惱も除かれます。隨つて氣分も亦暗から明るみへ出たと同じ爽快さを覺えます。それ丈けでも患者の血色は自然々々と良くなり、喀血や血痰もピタリと止まり喀痰や咳嗽も次第に薄らぎ忘れた様になります。それで今迄は兎角減る一方であつた體重がメキ〳〵增加し再び健全な身體となつて人並に人生の快味が得られ幸福な新生涯に入る事が出來たと喜んで居る方々は實に澤山あります。此の『ツペルシン』には何等の副作用や害がありません。茲に於いて創成者たる尾山先生が日々親しく多數の患者に應用し愈よ其の確實さを見るに及んで初めて救世の爲に弘く公にせられたのであります。同時に斯界の大家土肥博士もツペルシンの効力に就て激賞されて居ります。從つて世に有りふれた研究藥とか家傳の秘方とか詐りの多い肺病藥とは質も違へば物も違ふのであります。皆様は『救世的肺病藥』といふ只一つ責任ある此の靈効に御注意下さい。

そして今少しでも同病の疑ひある人、ろくまく炎に惱む人、肺尖加答兒だと診斷された人は言ふ迄もありません。醫師が持て餘す様な腸結核に泣くも重症の人でも殊に寒さを前に控へた危險な今日此の頃こそツペルシンの服用が最も大切であります。そして一日も早く健康復活の一路へ御進み下さい。

▽ツペルシンは權威藥として東京市本鄉區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）で取扱つて居りますが二週間量七圓、五週間量十五圓、十二週間量卅二圓、送料內地十八錢、領土四十五錢です。初期の方なれば二週間量でもよいが、やゝ進んだ方は五週間量、重症の方なら最初から十二週間量を服用すれば得策です。

發送は振替又はカハセ着金次第尙又不便の地は代金引替小包でも取扱ひ何れも嚴重小包にて發送致します。

ドクトル 高木中麿先生藥效御證明並に顧問

月やく おろし 専門藥

滯りて御心配の方。他藥を用ひても効なきお方は一日も早く私方の秘藥で御安心下さい。キット通經の御滿足を得て戴きます。三錢切手封入御手紙下さい。詳しくお知らせします。

大阪市南區高津町三番丁一〇 和田山たつゑ

散歩に！旅行に

而も廉價な能力優秀



＝名刺形＝

金屬製取枠三個パックホルダー付
▽一揃函入 金十五圓（送料内地三十錢 鮮臺六十錢）
▽附屬用品一揃 金二圓五十錢
▽カメラ用革鞄 金二圓五十錢 送料内地二十錢 鮮臺八十錢

イーストカメラ

外部は金屬製、蛇腹は本革張り、シャッターは速寫、バルブ、開放しの三様式に働き、レンズは「よく寫る要素」を應用した特殊單玉に虹彩絞りを備へ最大絞りは軟焦點用、第二絞（1）以下で普通に極めて鮮鋭な描寫が出來ます。普通は名刺乾板を使用しますが、又二吋四分ノ一、三吋四分の一のフィルムパックを使用するパックホルダーも附して居りますから、申分なく實に重寶であります。特に學生用として本器は適當のものであります。

東京市本郷區駒込坂下町
大日本雄辯會講談社代理部
振替東京六六二九番



僅々十三貫より廿貫の健康を得た河野氏

慢性胃腸病―婦人病―一般虚弱體質改造に折紙付卽效！

二、三貫は樂々肥る！

藤巻醫學博士實驗推奬
西田醫學博士有效證明
醫學大家廿餘名實驗證明

五大特長
◆熱くなく痕がつかない
◆家庭で誰にも出來る
◆副作用や危險がない
◆無理な式で至極便利
◆消耗品僅少で經費低廉
◆體裁優美で價格低廉

専賣特許 ラヂウム溫灸治療器

溫灸治療器は舊來の灸術とは、全然別種な療法で「熱くなく痕の殘る心配もない」頗る氣持よく懐爐代用にもなり、その效力の實に顯著なる所から最近素晴しい流行を見るに至つた：：卽ち此の「ラヂウム溫灸治療器」は古來貴用せらるる溫灸艾と近代醫療藥物中の珠玉とも言ふべきラヂウム鹽類の放射能力を巧に結合應用し療法を以つて加療する故、如何なる難病にも效くのが當然、特に婦人病、冷性、及び胃腸病に比類なき卓效を奏し實驗者悉く驚喜感謝の有樣です。

申込次第説明実験録進呈

取扱所 大日本雄辯會講談社代理部
東京本郷駒込坂下町四八

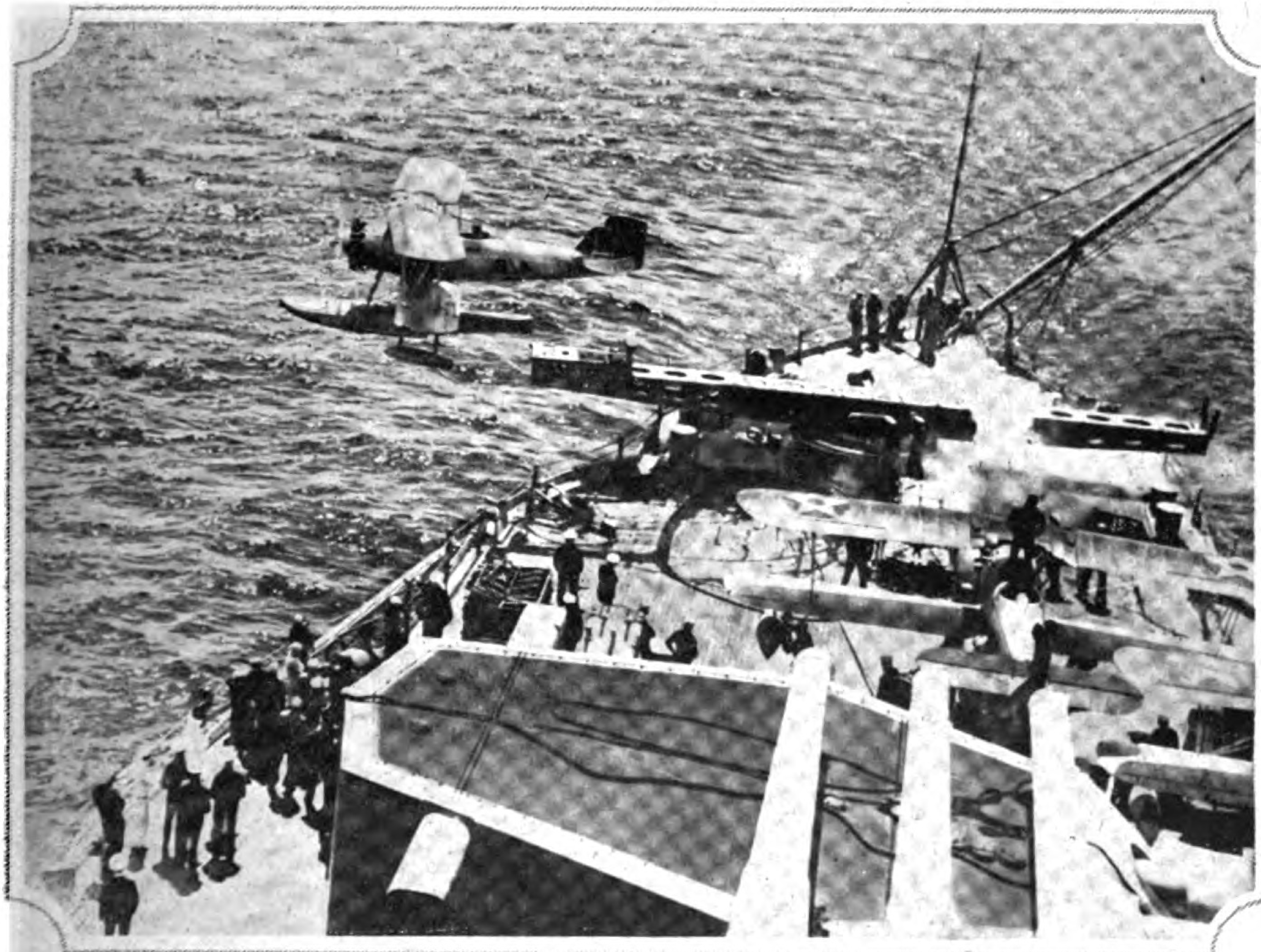


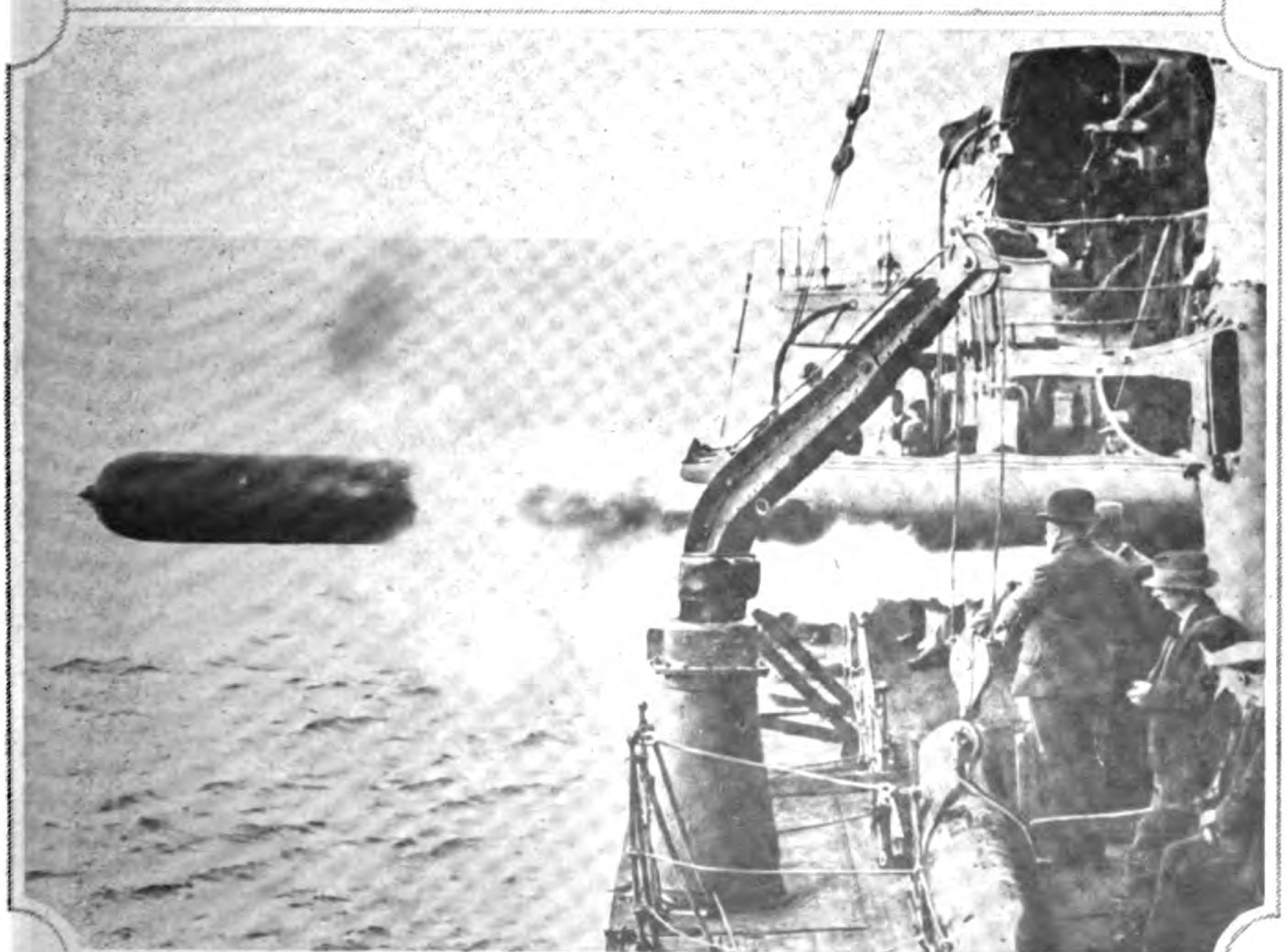
レッド　ボーイ

此繪の作者サー・トーマス・ローレンス（一七六九——一八三〇）は近代英國の生んだ最も偉大なる肖像畫家であります。十三歳にして既に美術協會より賞を受けた鬼才で、後年ローヤルアカデミーの會長となりました。歐洲の皇帝や大政治家の肖像で氏の手になつたものは頗る多くあります。此の繪は當時世界一の美少年として喧傳せられた英國のある伯爵の長男（年齡僅か十三で他界しました）をモデルにしたものです。最近米國から七十五萬圓を提供して此の名畫を買ひたいと申込んで來たので大評判となりました。

ローレンス筆

その一刹那





（上）軍艦の上に裝置した弩砲によつて戰鬪飛行機を打出した一刹那の光景。今では水上滑走などによらず、イザ鎌倉といふ場合はかうして幾臺でも發射する事が出來る。

（下）魚形水雷發射の壯觀。轟然一發、發射管を飛出すや否や間髪を入れずパチンーとカメラにをさめた珍らしい寫眞である。見よ魚雷は唸りをたてゝ飛んで行く。

田中醫學博士創製の
毛はへ藥フミナイン

△説明書進呈
發賣元へ申込次第詳細説明書進呈



男女を問はず頭髮や眉毛が薄いとか又は若ハゲの爲め、人前に出てどんなに恥かしい思ひをし肩身を狹くする事でせう。特に若い男女が年頃になつても無毛の爲め數知れぬ家庭悲劇が未だに繰り返されて居ります。從て毛生藥も夥しく發賣されてあるが世人を滿足せしむるに足るものが一として之れ無かつたのであります。然るに此のフミナインは吾國皮膚科の泰斗田中博士が多年苦心研究の結果發見創製されたもので、その適確なる効果は、世人を狂喜せしめて居ります。元來毛髮は毛根の有る限りは生へるのが當然でありますが、微細な黴菌、皮膚の障害或は榮養素の缺乏等の爲發育を防げられて生へないのであります。フミナインは强烈な殺菌作用で毛根部の有害黴菌を殺して皮膚を健康化し、興奮作用で毛根部に適當の刺戟を與へて毛生機能を促進し又榮養作用で毛根毛母に特殊の榮養素を與へるのであります。この三大作用に依つて春になると草木の芽が伸びるやうに、發毛を促して生毛も濃く、脫毛もピタリと止つて艶々とした美毛となるのであります。斯樣に其の實際的効果が著しいので毛生藥に對する世人の疑惑もフミナインの創製に依つて一掃され、各新聞紙等に於ても其の偉効が稱讚報道された最も權威ある製藥であります。

（適應症）

●禿頭病●若禿●腫物禿●枕禿●かもし禿●眉毛薄き●生際あしき薄毛●脫け毛●產前產後の脫け毛●男女あるべき所に毛なき又は薄き●總て毛の不足不格好の老若男女等……

藥價＝五十錢
九十錢　一圓
六十錢　三圓
五圓五十錢
送料內地十二錢

全國藥店にあり

賣切の節は下記へ…

發賣元

東京市芝區田村町一八
東京藥院
電話芝一八七四　振替東京三一八三

大阪市天王寺區石ケ辻町
東京藥院
電話南一二四六　振替大阪五〇八一八

大日本雄辯會講談社代理部でも御取次致します

蓮月尼



聖心畫譜　その十一　（裏面參照）　田村彩天筆

蓮月尼

文學博士　中村孝也

宿貸さぬ人の辛さを情にて
おぼろ月夜の花の下臥

幕末のあわただしい世の姿を外にして、京都西加茂の神光院に隠棲する尼があつた。名を蓮月といつた。

蓮月は世にありし頃の名を太田垣誠子といつた。父は光古といひ、京都知恩院の譜代侍であつた。誠子は夫を迎へて四人の子女を儲けたけれど、皆夭死し、夫も歿したので世を果敢なみ、三十歳の頃剃髪した。

彼女は千種有功に就いて歌道を修めた。そして手づから陶器を焼き自詠の歌を描いて鬻いだ。それが評判になつて多くの陶工が模造したけれど、筆跡の眞似が出來ない。彼女は快く歌を題して與へ、數十人の家族に糊口を立てさせて悦んでをつた。併し、色紙や短册を請はれるのが煩さいため、常に住居を移したので、「屋越の蓮月」と呼ばれた。宿を斷られて花の木陰に眠つたのは、その頃のことであつたらう。

彼女は喜捨を好み、多くの貧しい人々を賑はした。或冬の最中、淸水觀音に參詣する途中、御所の邊で單衣一枚の浮浪人がぶる〳〵顫へてゐるのを見て、上着を脱いで與へた。淸水の邊へゆくと一人のみすぼらしい老婆を見て、同情に堪へず、一枚脱いで與へ、下着ばかりになつて豪家富岡鐵齋の家を尋ね借着をして歸つた。

明治八年十二月歿した。壽八十五。

有明の霞に匂ふ朝もよし
きさらぎ頃の夕月もよし

蓮月尼もまたいつでも感じがよい。

痼疾の難症程キヽメの早い

ぜんそくと
百日せきの最良藥を
無料でお教へ致します

私は永年ガンコな喘息で死ぬほど苦しみましてあらゆる藥は言ふ迄もなく危險な注射まで試みましたがなんの効もなく十餘年來勤めた警察署も病の爲に辭めなければならない樣な不幸な身になりましたが

或る先輩に天保年間の偉人で有名な高野長英先生の遺方になる妙藥を教はりましたので早速服藥した處其の日から息切れも止まりタンも樂になりさしもの難症も不思議に僅かの間にケロリとなほりました

あんまりよく効く藥なので同病の知人や子供の百日咳にも試しました處早いのは二三日これはと思ふ難症でも二十日前後で皆全快致しまして皆樣からお禮の言葉を澤山頂いて居ります。氣候不順の今日此頃私が惱んだ時を思出し此の病氣でお困りの方に全治の悦びをお分ちしたいので廣告を出したのです。同病でお苦しみの方はスグ容態書を手紙でお送り下さい私のなほった妙藥や養生法を無料でお知らせ致します。

東京市外日暮里谷中本九九七

森本作市

大木のトンネル



奇岩怪石瀑布などで有名な米國ヨセミテ國立公園は又蒼鬱たる千古の處女林を以て誇つてゐる。寫眞は同公園内にある周圍百尺に達する大木のトンネルで御覧の通り大型の自動車でも樂に通行が出來る、

職業行進曲





これは倫敦で開かれた珍らしい競争です。職業となれば何でも辛いもの、これこそ生存競争の姿かも知れません。(上)は配達夫競争。各々大きなバスケットを抱ひ自轉車を走らせて白熱の接戦！第一等は五哩を八分三十秒で走つたさうです。(下)はこれも振つた女給さんの競争。大きなお盆にコーヒー茶碗を載せて一生懸命。おつと危い！茶碗が落こちさうです。

出たり！立志出世號！

偉くなりたい少年は見逃す勿れ！

少年倶樂部

十月号

◎少年諸君！偉くなつて下さい……鶴見祐輔
◎偉くなる人、辛抱する人………澤田謙
◎人並の事では人なみしか偉くならない　池田藤四郎
◎こんな少年なら喜んで採用する…　一流大會社頭取官廳その他
◎偉くなるもならぬも鉛筆一本……後藤靜香
◎名士の十四五歳頃はどんな境遇にゐたか？

◎こんな小僧はキツト偉くなる。
◎成功者に成功の秘訣を聞いたら…澤田謙
◎奮鬪する少年の手記……各方面から集めた物　澤山
◎お金の使ひ方、貯金の仕方
◎こんな生徒は偉くなりました…老教育家

この外面白くて爲になる出世物語を始め、大評判の小説等數十篇あり。

特別附錄　大日本全圖

新聞二頁大で極彩色のオフセツト印刷！トテモ素晴しい地圖之丈でも大變な値打

特別附錄　東京大繪圖

右の裏面、オフセツト印刷吉田初三郎先生苦心の傑作ステキな東京の大繪圖です

定價五十錢　送料本號に限り三錢



兩誌共　東京　大阪　大

またく素敵な附錄つき！

到る處の少女間で引ッ張り凧！

少女倶樂部

十一月號

◎ロビンフット繪物語……須藤重畫
◎學校美談『神の如く美し』
◎國歌物語（世界各國の國歌にまつはる感動感激のおはなし）
◎動植物不思議ばなし……

◎金子子爵の立志成功美談
◎面白いく笑話ニコく倶樂部
◎ふところ鏡（美容、衛生、裁縫、十訓）
◎乘物常識繪とき……新關青花
この外評判の大讀物數十篇あり！

特別附錄 明治天皇御製繪卷

タテ五寸長さ二尺六寸の大繪卷！少年少女方の修養の手引となる立派な大フロクです。

◎口繪 極彩色 **母の愛名畫集**

トテモ美しい目のさめるやうな名畫ぞろひ！

人氣の焦點 一流畫伯 苦心執筆

◎定價五十錢（送料三錢）



日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇

色白く地肌から美しくなる

專賣特許『ウテナ』を愛用して色白く眞に美しい幸福を迎へられた方々の歡び溢れる御報告



▼…色が黒くて悲觀してゐた私は『ウテナ』を愛用しそめてから、目に見えて垢ぬけして、自分ながら見違へるやうに美しくなりました。この嬉しい幸福は、すべて『ウテナ』のおかげと、心から感謝してをります。厚く〳〵お禮申上げます。（名古屋　深川きよ）

▼…私は非常に頑固なニキビのため、あらゆる賣藥や化粧品を試すこと數ケ年間でしたが少しも効無く困つてゐたものです。『ウテナ』を愛用してみて、その効果の著しいのに感心いたしました。頑固なニキビが、いつの間にか消えて、すつかり綺麗な顔になりました。ニキビが治つたのみでなく、『ウテナ』の愛用から、色が白く肌が美しくなりましたので非常に嬉しく感謝します。（島根　高松正）

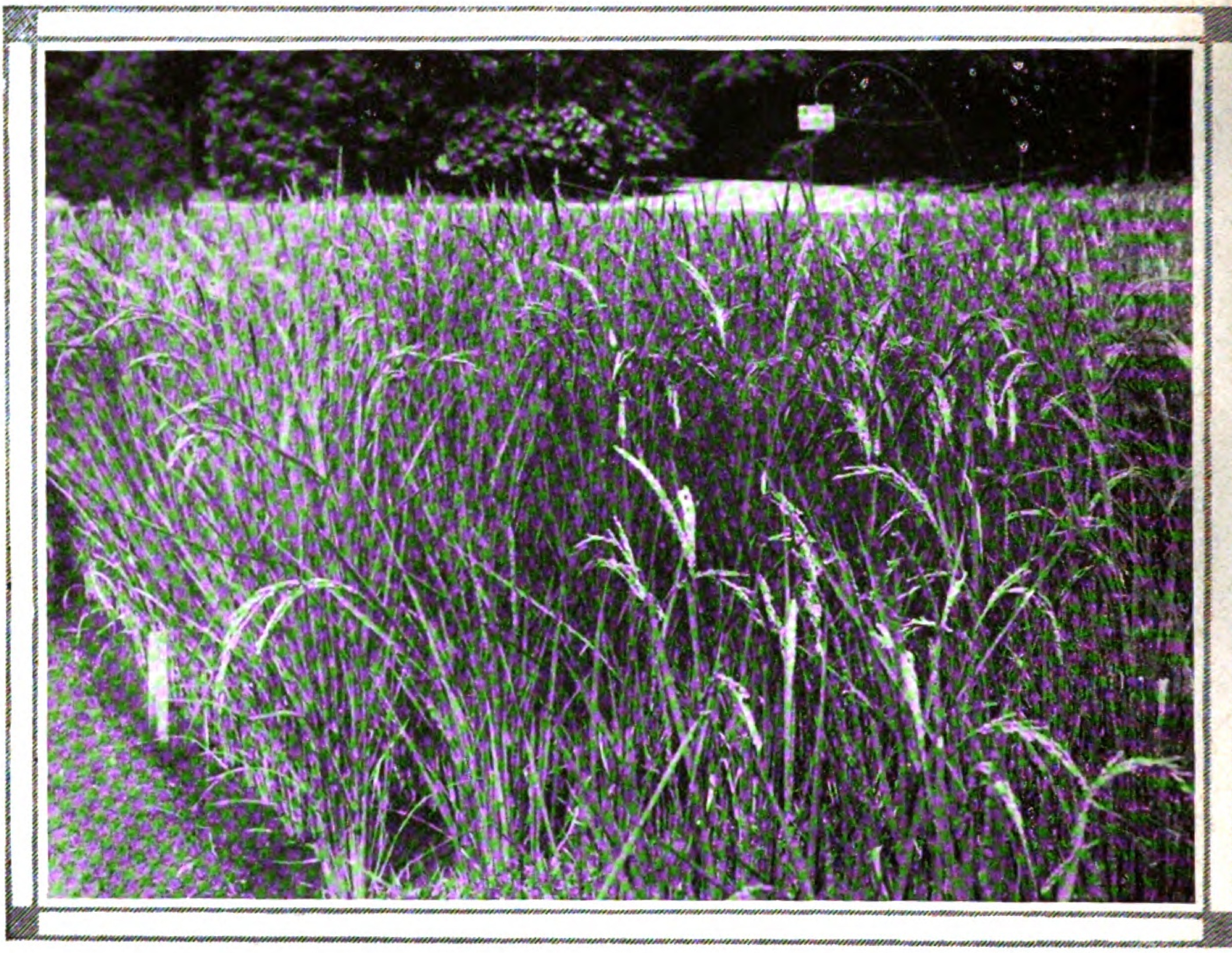
▼…大へん色が黒く、その上ニキビが出て困つてをりましたが『ウテナ』を愛用しそめましてから、目に見えて顔の色艶はよくなり、ニキビも治り、色も白くなつて、思はぬ幸福に喜んでをります。主人は、お前このごろ大へん綺麗になつたがどうしたのか？なんて申しますものですから、それや『ウテナ』の愛用者なんですもの…等と言つて樂しく笑ひます。ほんとに有り難うございました。お友達にもおすすめします。（呉　山村愛子）

▼…私は中年の主婦で、毎日多忙に暮してをるものでございます。お化粧など丁寧にしてゐる時間はとてもございませんが『ウテナ』を一日おきに使用いたしますおかげで、いつも顔がスベ〳〵として若々しい元氣が溢れてまゐります。（神戸　村治光代）

▼…去年の春學窓を出ました私は、顔が蒼黒くて、お化粧をしても引立たず、乙女心に苦にしてをりましたが『ウテナ』を使つてみますと、一回は一回と、地肌から色白くなり、お化粧も美しくできるやうになりました。深く感謝してをります。（高松　岡八重子）

大評判の『ウテナ』を愛用なさいませ

『ウテナ』は色を白く美しくする獨特の新發見から創製され、專賣特許權を二つも保有する科學的美白料で、皮膚科專門の大家醫學博士赤津誠内先生が有效を證明されます。色の黒い方、赤黒い方、蒼黒い方、垢ぬけせぬ方、ニキビ吹出物等のでき易い方、肌荒れを防ぎ美しい地肌を護られますやう、急いで『ウテナ』を愛用なさいませ。その効力はどなたにも、明かにわかるので大評判です。『ウテナ』は全國の藥店、化粧品店、大百貨店にあり――東京駒込大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）でもお取次します。定價一圓、二圓、三圓、送料十八錢です。



□御苑の稲

千葉胤明

ちからある御苑のいねのはしり穂にはやくも
見ゆる豊年のいろ

八束穂の足穂みのらむ大八洲みそのに茂る
いねにならひて

かしこしといはむもかしこ赤坂の御田にをり
〱立たす思へば

寫眞は赤坂離宮内に在る美事な御稲田で畏くも陛下の御手植になつたもので御座います。今回特にキングのために御貸下の榮を得ました。

名流婦人と

スポーツ！　スポーツ！　四肢に力張る心地よい秋です。私共の五體はスク〳〵と伸びて行きます。殊に最近婦人のスポーツ界進出は目覺ましいものがあります。(1)庭球界に隠れなき朝吹磯子夫人です。夫君は帝國生命の社長で、矢張り斯道の先輩であります。(2)法學博士鳩山秀夫氏の夫人千代子女史は熱心なゴルフ黨の一人でいら



1



2



3

スポーツ







つしやいます。(3)橋爪道子さんは今年十六、キューをとつては大人も及ばぬ程撞球に冴えた腕を持つてゐられます。お父様は鐘紡の重役。(4)前公使堀口九萬一氏令孃岩子さんは乘馬の名手で、嘗つてブラジルの馬術大會に一等になられた事もあるそうです。(5)山内侯爵夫人禎子様は昔床しい薙刀の使ひ手。庭前の颯爽たるお姿です。

盛大な休戰記念日





十一月十一日は歐洲戰爭の休戰日で、各國に於きましてはいづれも盛大な記念祭が行はれます。寫眞は第十回（一九二八年）記念祭の光景で、(上)英國ジョージ五世陛下が名譽の戰死者の爲に默禱を捧げてゐられる處。×印は陛下。(下)同じく休戰日の當日白耳義の戰死者記念碑の前に集つた顯官名士の雜沓ぶりです。

息子

佐々木邦先生 大快著

▲▲▲口繪挿繪▲▲▲

天下一品の稱ある田中比左良畫伯の大傑作名畫を多數挿入。見るからに面白くて情がある一新機軸を出した名編輯。

忽ち十九版



◎田中比左良畫伯裝幀
◎四六判布裝函入美本
◎定價金貳圓（送料十二錢）＝各地の信用ある書店で販賣！

發行所 東京本郷團子坂下 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

人目忍んで泣く色黒の顔!!

化粧液や塗藥を浴る程つけても治らない色黒ニキビソバカス赤顔油顔吹出物を治す歐米の新治療法

此新學說に基きて發見せられた有名な五大博士大家協力苦心研究の科學的白色美顔美身法無代進呈

色が白くなりたい！醜いニキビソバカス油顔赤顔吹出物を治したいと朝夕鏡を見る度に身の不幸を嘆く男女の方々が、ありとあらゆる化粧品塗藥を浴びる程つけても一向に效めなく、徒らに高い化粧料を浪費する許りなのは何故でせうか？ それは根本的に治療法を誤つてゐるからであります。何故かなれば從來色黑ニキビソバカス油顔赤顔吹出物等は皆皮膚の上部丈けの疾患と考へてゐたのですが、是等の原因は何れも氣候風土や飲食物の關係で胃腸内に發生した惡血毒素が……卽ち腸自家中毒の作用に依つて自然と顔面に吹出すものでありますから、無暗に塗り藥や化粧品をつけても治らないのは當然ではありませんか。歐米の醫藥



●學界では既に此學理に基いて完全な内服藥が發明されて、進取的なあちらの青年男女は化粧品等に見きりをつけてドシドシ此内服藥で治療して居りますので近頃では路上にニキビソバカス等の醜い男女の姿がメツキリ減つて來たとまで云はれて居ります。然し其程效力確實の外國藥も氣候風土、飲食物等の全く異つた吾々東洋人種には效めなく却つて髮の毛が赤くなる等の危險が伴ふので、其點を苦心研究の結果發明されましたのが我國唯一の完全なる内服美顔美身藥**ハルナー**であります。此榮譽ある協力發明者は人も知る有名な藥學博士島田耕一先生敷津先生越澤先生其他の五大博士大家であります。**ハルナー**は内服に依つて體内から色黑ニキビソバカス吹出物等の原因毒素を除き生れ變つた樣に色白く眞に美しく致しますので、從來化粧品や塗藥で更に效めなく煩悶された方が輕症の方は僅か二圓か三圓の御試驗で全く生れ變つた樣な色白美顔の御幸福を得られた事は日々幾多の御禮狀により實證されます。

本誌讀者へ特に

↓科學的白色美顔美身法書籍無代進呈

別記五大博士大家執筆の皮膚や肉體血液の關係、色を白くする法、ニキビの發現と除去法、毛髮の脫落と發生法等其他現代男女の必ず心得置くべき美容學上の大切な本書今回特に一人一書限り無代進呈しますから御遠慮なくハガキにキング愛讀者美書送れと記入御申込下さい。

百萬言も一の實行に如かず一時も早く御試驗の程お勸め致します。東洋到る處の信用ある藥店にて其特效を確認して賞讃的販賣す。藥價輕症向一圓二圓三圓重症向五圓拾圓等。本社へ直接御註文は爲替振替切手代用等にて送費特に無料目立たぬ樣送る。

東京市京橋區築地橋際 合資會社 **濟生堂製藥所** 電話京橋(56)一〇三七 振替東京一七二〇一

●**ハルナーは全國到る處の有名藥局藥店にあり。**

山路



黒川翠山撮影

キンググラフ

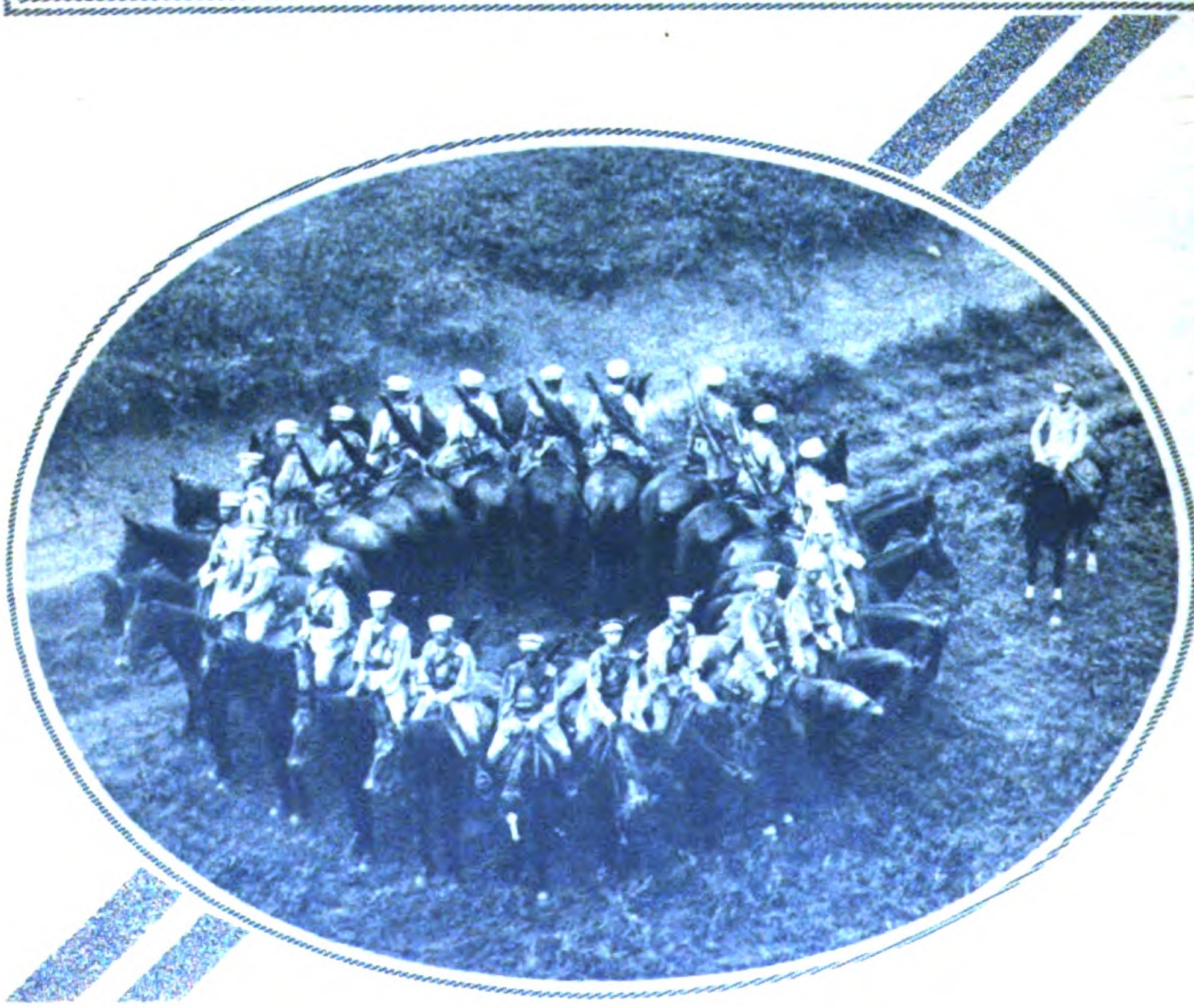
山霧の中に友呼ぶ杣の一聲、空しき谺となりて秋は愈よ寂寥。しつとりとしめつた大地に誰が打棄てたのであらう、焚火の跡にまろぶ瓢の紐は徒らに赤い。





疾風か怒濤か、習志野の原頭を壓して押寄せる騎馬の一隊！
見よ、長劍閃き鐵蹄躍る！　忽ちにして聞ゆる劉喨たる喇叭の
音、あゝ壯烈！　痛烈！　天地を搖がす突撃の喊聲！

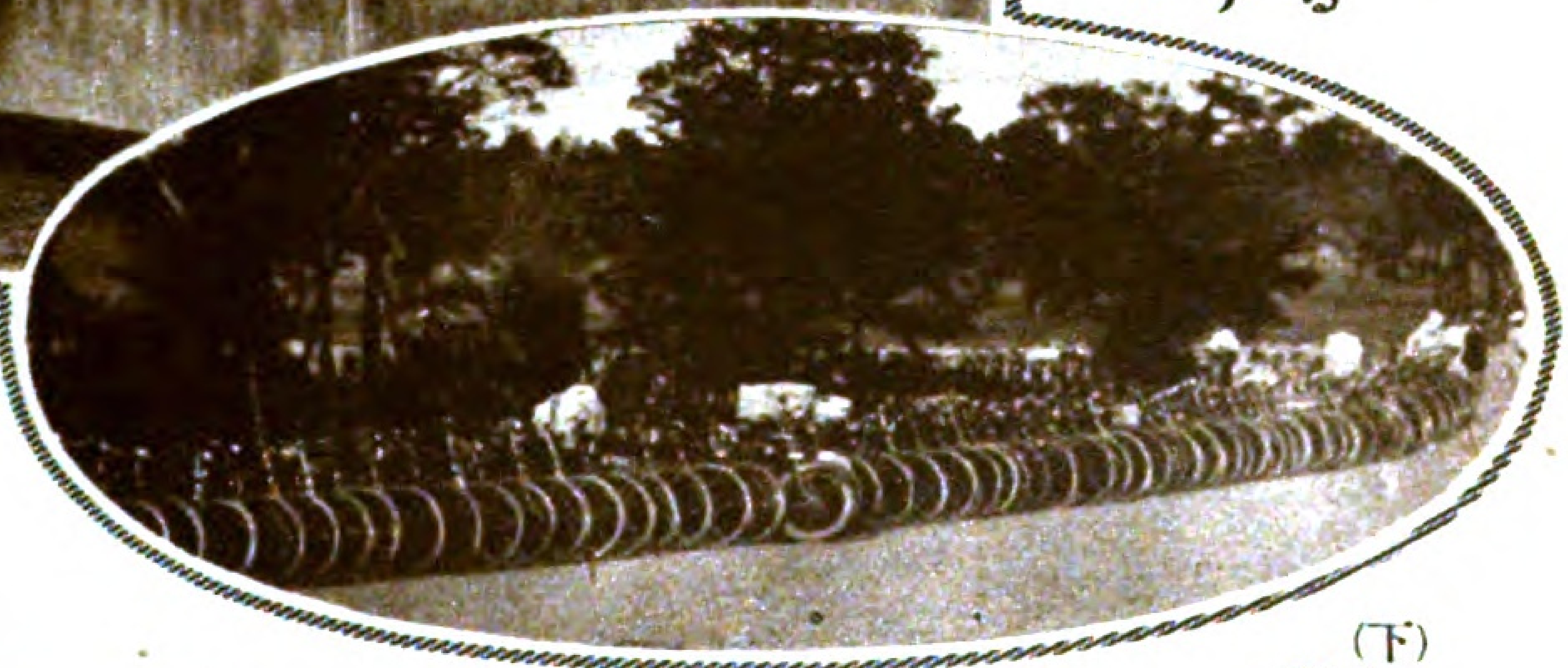




寫眞上は習志野騎兵聯隊に於ける襲撃の演習。下は同じく前驅集合、左は後驅集合。



萬雷のやうなどよめき！　嵐のやうな熱狂！　バットの一撃毎に數萬のファンの魂を躍らせるものは何といつても野球だ。見よこの盛況！　ファンの乘りすてた自轉車は蜿々として長蛇のやう。



(下)われこそは和製のラモン・ナバロで御座いと、天晴れ流行の尖端を以て任じてゐるモダーンボーイも、だん／＼元を洗つて見れば、終日繪葉書屋の店先を占領してゐる映畫ファンだとはナール程。



(左)家に病人があらうが用事があらうが今一番、今一番。好きな道はやめられぬと見える大道の將棋ファン。勝負の果てた頃は月西に傾いて思はずハクショーン。

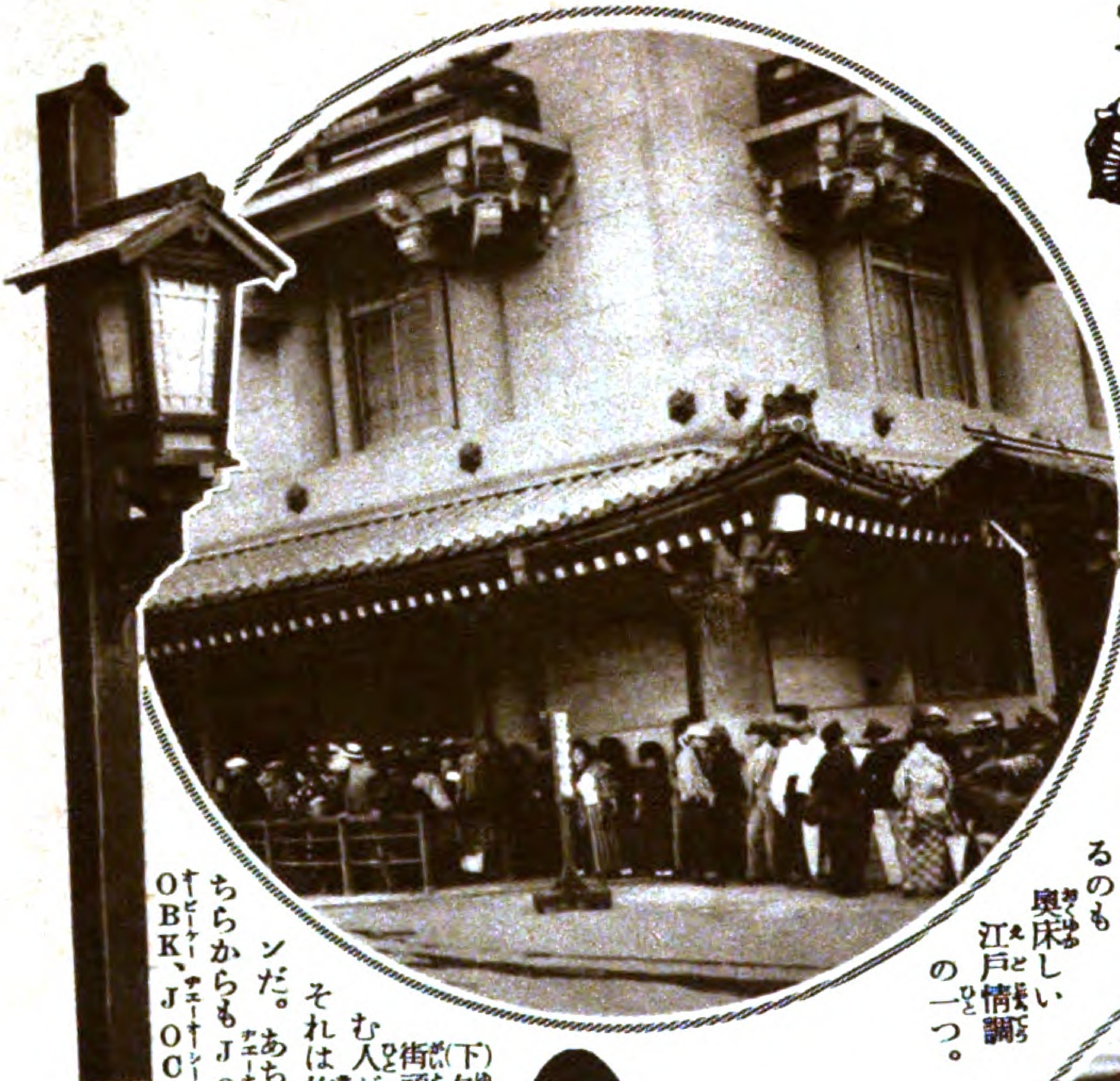




(左)どいた／＼と云つて見たところで誰も席を讓る者はない。人の股の間からのぞき見する

さまざま





(左)ジャズ文明全盛の今日でも流石は歌舞伎座だ。變り狂言毎に切符賣場は芝居ファンで目白押しの盛況。座席は椅子と變つても矢張りつゝましやかな日本髪が先代萩に涙をしぼつてゐるのも奥床しい江戸情調の一つ。

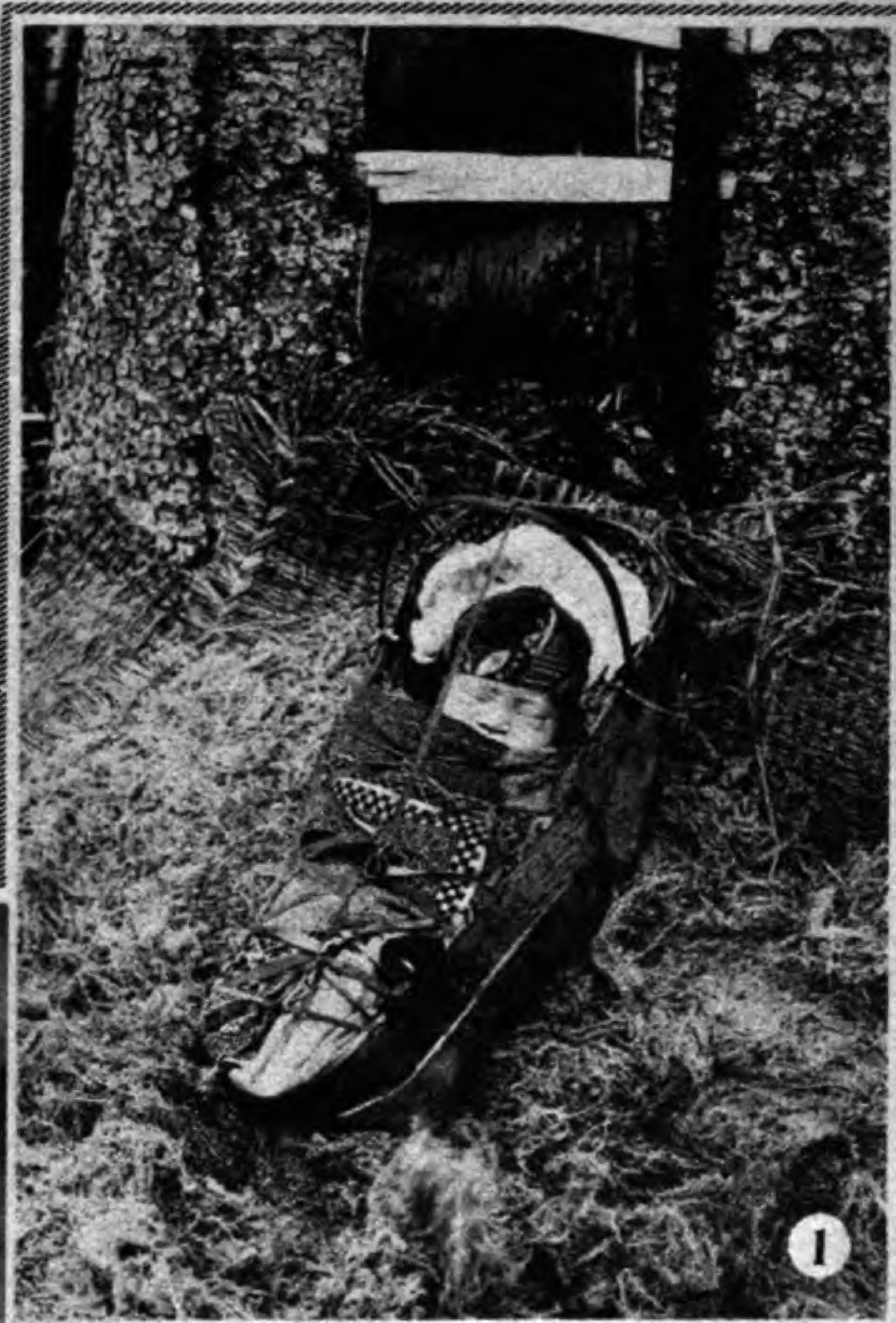




(下)夕方の街頭に佇む人があればそれは屹度ラヂオファンだ。あちらからもこちらからもJOAK、JOBK、JOCK…あゝ忙しい。



フットボールファンも中々並大抵の苦勞でない。







(1)樺太特有のチンドラの中に一人スヤ〳〵と眠る土人の子供です。母の姿も見えず子守歌も聞えない此の籠？の中にどんな夢を見てゐるでせう。(2)は樺太名物の山火事です。毎年春から秋にかけて氣候が乾燥する×

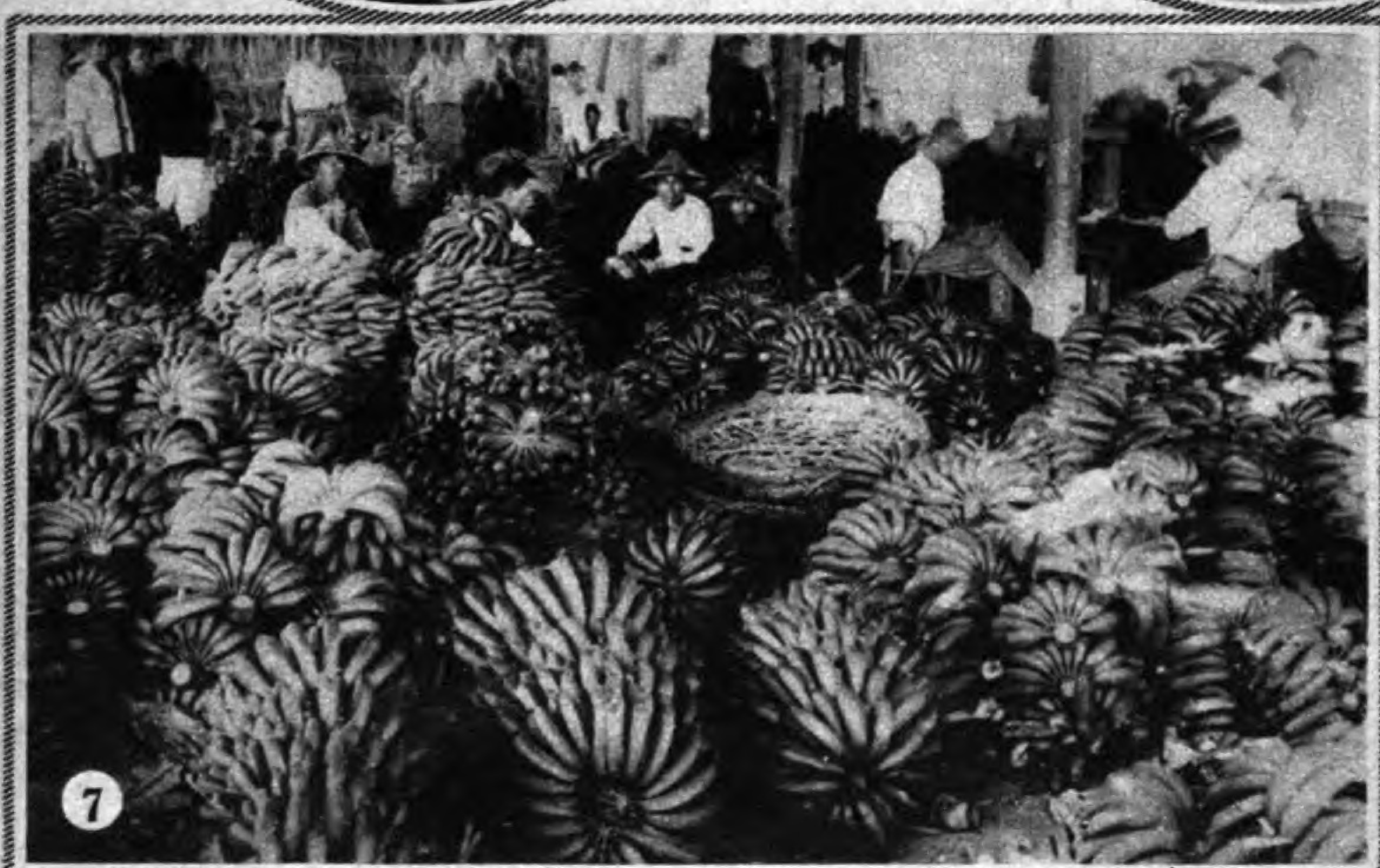


×關係上全島到る處に物凄い光景が見られます。これは昨年豐原附近に起つたものです。(3)結婚したアイヌの美人であります。口邊に刺靑をして居りますが、こんな風習はだん〳〵なくなりつゝあります。

北馬





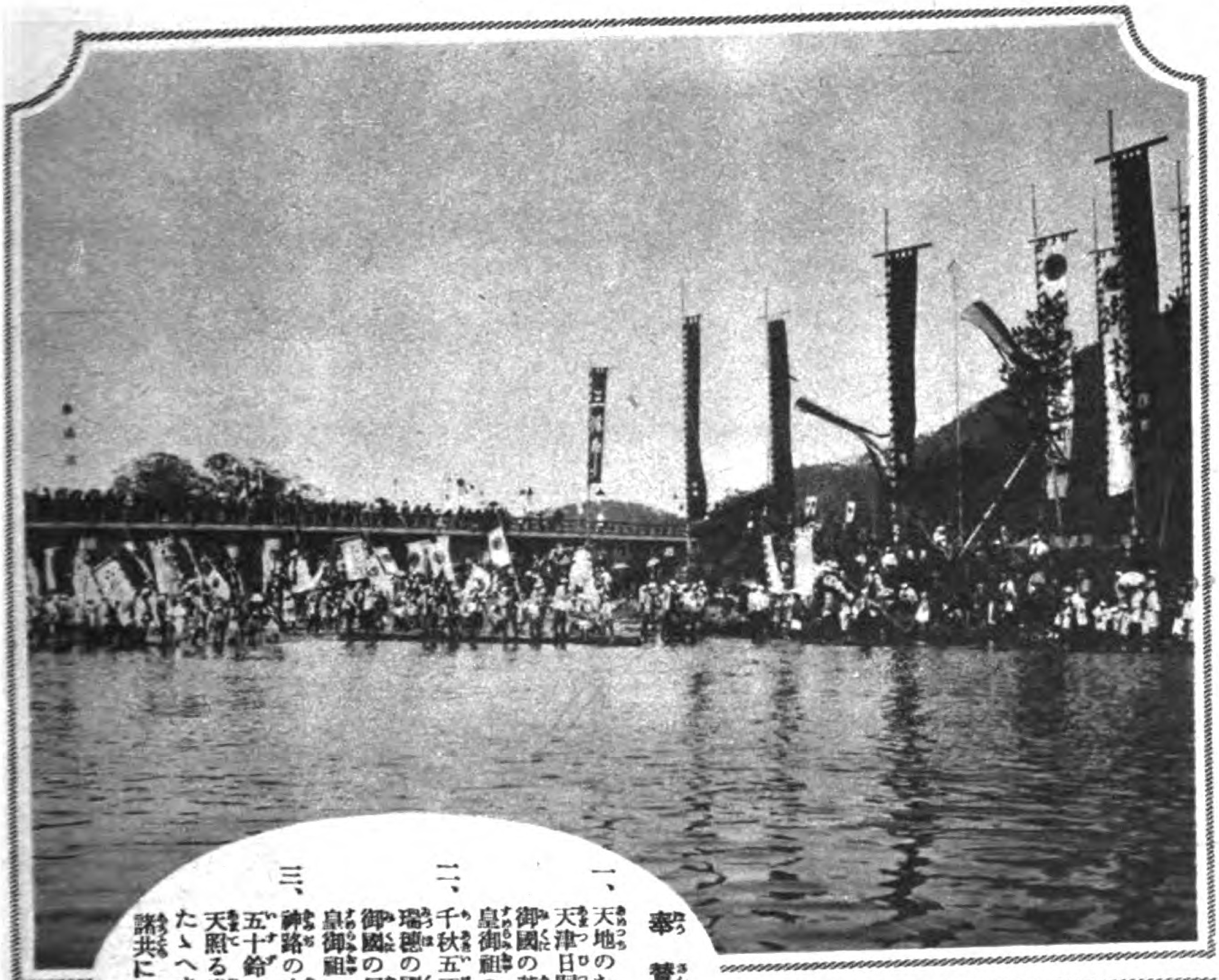


(4)明眸皓歯歌麿の繪を思はせるやうな朝鮮婦人です。(5)臺灣の蕃地深くに咲いた美しき蕃婦。(6)琉球女特有の髷であります。髪にさしたのは一種のピン。

(7)臺灣名物バナヽの山です。美事の房が果果としてゐます。(8)朝鮮國境の結氷の上で吾が警察官が警備の任に就いてゐる處です。



伊勢大神宮の第五十四回遷宮祭は今秋盛大に取行はれましたが、これに先立ちまして様々の御催物が御座いました。寫眞上は信濃、美濃の御料林から切り出した皇大神宮（内宮）の御用材を五十鈴川口より牽曳の光景。下は同じく豐受大神宮（外宮）の御用材を川上げの光景。共に先年行はれたものであります。



奉賛歌

一、天地のむた窮みなく
天津日嗣は榮えんと
御國の基建てませる
皇御祖のかしこさよ

二、千秋五百秋安らけく
瑞穂の國に幸あれと
御國の民を護ります
皇御祖の尊さよ

三、神路の山の彌高く
五十鈴の川の彌遠に
天照る光仰ぎつゝ
たゝへまつらん諸共に



痔疾患者に警告す!!

姑息、舊式の療法こそ眞に恐るべき結果を生む

東京肛門病院長　谷　泉　述



世界人類の六十パーセントは痔疾患者であるといふ、余の見聞する處に於ても特に印度支那方面の如きは殆ど全部の人々が大なり小なり痔疾に呻吟してゐる有様である。痔疾！この恐怖すべき肛門病こそ第二の亡國病として今更ながら戰慄に價する。しかして本症は、初期の裡非常な苦痛のない爲、患者は迂濶にも之を等閑に附する傾向多く、殊に婦人の如きは場所柄だけに之を隱ぺいするの風があり、爲に病魔は情容赦もあらばこそ、骨肉細胞の深きに入り、亦肺、肋膜、心臟病等の餘病併發の憂目を見、名狀すべからざる苦悶と慘狀を齎らすのである。

痔疾！痔疾！余は東京肛門病院にて多くの痔疾患者を診療するの時、常に念頭を離れざりしものは、種々なる事情の爲、責任ある醫師の治療出來ざる人、或は治療を嫌ふ人を如何にして救濟するかの問題であつた。即ち權威ある自宅療法藥の創製こそ！この氣の毒なる人々を救ふ最大の道ではないか！余は之を信じ、余の三十有餘年の實際的經驗と更に加ふるにドクトル・メチチーネ谷岩太氏の最新學說を斟酌し、價格を超越せる高貴藥を配して、痔疾ヒットを江湖に送つたのである。

ヒットは含有各藥物の完全なる效果を速進せしむべく、最も愼重に配劑され、從つてその鎭痛、消炎、防腐、殺菌、止血、吸收等の實際的治療效果を最も安全に、最も迅速に擧げ得るのであり、この點斷然一般市場の痔疾藥と選を異にしてゐる。かくてヒットは手術を欲せざる人、できざる人等に眞に理想の自宅療法藥として推奨するを憚らないのである。

世に痔疾患者多く、痔疾藥亦枚擧に暇なき程であるが、醫藥をその儘賣藥とせるものは蓋しヒットを以て最初とする。江湖幾萬の痔持に惱む方々よ！宣傳のみを生命とする舊式賣藥や家傳妙藥等と稱する駄藥に迷はず、速かにヒットによつて恐るべき肛門病を根本より掃蕩せられよ！初期輕症の人は勿論、いかなる重症者も決して悲觀は無用である。

（ヒットは三種あり。挿入、塗布、内服、挿入は内痔核、痔出血、内痔瘻等に適し、塗布は痒痔、裂痔、脫肛、痔核、痔瘻等の外部症狀に良し、内服は一般痔疾を輕快ならしむるの效著大なり。以上三種を以ていかなる痔疾と雖、自宅で自分獨りで安全に治療し得るのである、**ヒット**藥價、挿入藥、一圓、二圓、五圓、十圓、塗布、五〇錢、一圓、二圓、五圓、十圓、内服、一圓、二圓、五圓、尚治療速進に**ヒット式痔バンド**あり。一具一圓。全國到る處の各藥店にあり。發賣元は東京市銀座新肴町八（振替口座東京七二二二）大阪市西區新町通一ノ二（振替口座大阪一〇六〇）丁子堂藥房**（誌名記入御申込み次第說明書進呈）**

出世成功

「雄辯」の先驅者



見よ！滿天下青年諸君!!

雄辯は現代活躍成功の急所！

社會的生活が益々重大性を帶びて來るに從つて、多數を相手に意見を發表せねばならぬ機會は愈々多いのである

如何に意見が立派でも無言では人を動かし、事を成すわけにはゆかぬ。

中央大學川原教授曰く

『將來世に立つて大いに爲すあらんとする青年にして雄辯の必要を忘れるが如きは、武器を忘れて戰場に向ふが如きものと云はねばならぬ。………

雄辯は新時代の新武器なり』と。

事實之を語る！

永井柳太郎氏を見よ、鶴見祐輔氏を見よ其他各界活躍人物を見よ

見よ！雜誌『雄辯』！

修養と辯論の一大道場

而も常識大學、實力養生所

學生によし、青年によし、何人も來れ

新療法紹介

切らずに治る＝鼻病患者の一大福音

『湊式吸癒療法』の驚くべき偉效

▼恐るべき鼻の病氣

頭が常に重く又年中頭痛がするとか、又は物覺えが惡く何を考へても考へられないとか、物事がたいぎで少し何かすると、すぐ倦怠を覺えるといふやうな人は、大概鼻に病氣のある人である。今まで學校の成績の良かつた子供が、急に惡くなることがあるか、それ等も其原因が蓄膿症や其他の鼻の病氣にあつたといふことは好く聞く話である。鼻と腦とは薄い骨の膜一枚で隣り合つてゐるので、鼻に故障があれば直ぐ腦に影響するので、其結果は前述の如きいろ〳〵と腦に故障が起きて來るのである。昔から鼻は萬病の門といはれてゐるのは之がためで、若し皆樣の中に鼻汁の澤山出る人とか、鼻のつまる人とか、香氣や臭氣のわからぬ人とかあれば、それは、蓄膿症か肥厚性鼻炎等の鼻の病氣の前兆であるから、重くならぬ中に根治の方法をとらぬと、所謂腦の機能を害し、遂には神經衰弱や憂鬱症や不眠症に陥り、甚だしいのは白痴となることもあります。

▼理想的な家庭療法

處が今日鼻の病氣は切開手術による外はないことゝなつてゐるので、醫者に行くと直ぐ手術を勸めらるゝが、手術のためには兎に角一時は入院せねばならぬし、又鼻の手術は込み入つた處であるだけに手術料も相當に高く、且つ總ての手術中鼻の手術程嫌らしいものはないので、何人も鼻の手術と聞いて躊躇する次第であるが、湊式吸癒法はドクトル湊謙治氏が父子二代三十五年の長年月苦心研究の結果漸く完成せるもので、是等從來の療法に全く一新機軸を出せるもので、啻に切開手術の必要がないのみでなく、電車汽車中は勿論自宅にゐながらでも、勤務中でも煙草一本を吸ふと同じ位の手數と時間とで、どんな難治の鼻病をも見事に根治せしむることは驚くばかりである。

▼驚くべきその卓效

手術でも治らぬものが吸入などで治るものかと思ふ人もあるか知れませんが、湊式吸癒法は、革命的の新創製劑吸癒液を、獨特の裝置によつて、手術でも及ばぬ鼻腔内の隅々にまで送り込み、たゞれた粘膜に使用せしめて、殺菌と消炎の兩作用を併せ行はしむるので、手術よりも遙かに效果的確で、最初青いどろ〳〵した膿も次第に色薄く、遂には水のやうになつて、全く病氣らしい症狀がなくなつてしまひ、又頭痛とか鼻が臭くてつまるやうな症狀は、大概數日間位で止み、既に何回も手術をして思はしくなかつた人、又は其他一切の療法を一巡して何等の奏效なかつた人々で、湊式吸癒法によりて全快した例は枚擧に遑ありません。

湊式吸癒器一個金一圓五十錢、湊式吸癒液十瓦（六十日分）金參圓送料東京市内十二錢、内地廿五錢、滿鮮五十二錢 東京市麹町區下二番町一〇明光社（振替東京六八七九六番）又は大日本雄辯會講談社代理部へ申込めば御送り致します

詳細説明書

ハガキ一枚（インクで[illegible]記入し[illegible]明光社へ申込み[illegible]無代で[illegible]します



食後のまどゐ

ハチロー

ひらいた繪本は
何でせう
かちかち山か桃太郎か
それとも遠い
外國の
王子や小人のものがたり
白いおひげを
うごかして
それからそれへとおぢいさま
きいてる四人の
お目々八つ
おひざのご本をみてゐます
たのしい食後の
一時間
やさしくつゞく　ものがたり

（櫻井　隆　撮影）

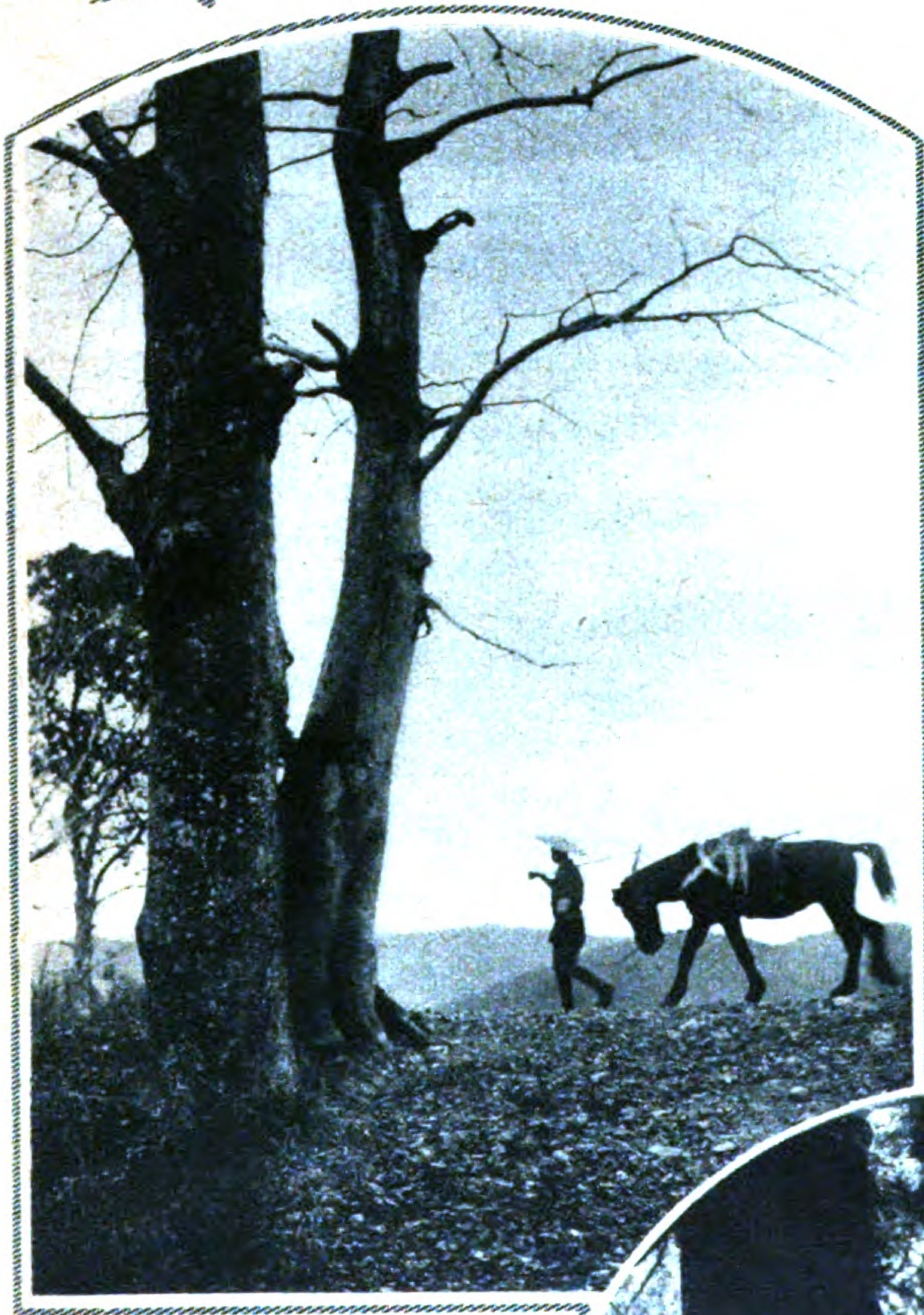




山の原露ふく風のひえびえとけさは身ぬちに沁み通りけり　新免忠

石投てばかはゆく小さき反響のおこれり秋の谷の淺水　尾上柴舟

聲







道のべに遊ぶ小鹿のまなざしの人に親しむこの獸あはれ　藤澤古實

六甲の山なみ日々にあたらしく晴れまさり見ゆ冬近からし　植松壽樹

(下) 伊藤小坡女史
—京都—
うつろ心に優しき虫の音を聞いて居られます。





(上) 島成園女史
—大阪—
女史は大の人形好き、上に釣つてあるのは住吉踊です。



(左) 有馬さとえ女史
—東京—
閑寂な生活に妙想を錬り藝術に精進して居られます。

女流畫家

（下）梶原緋佐子女史　―京都―
衣裳の柄には特別の御趣味があつて様々の考案をなさいます。

（左）上野秀薫女史　―東京―
可愛いお子様と可愛い小鳥、御家庭はいつもなごやかです。

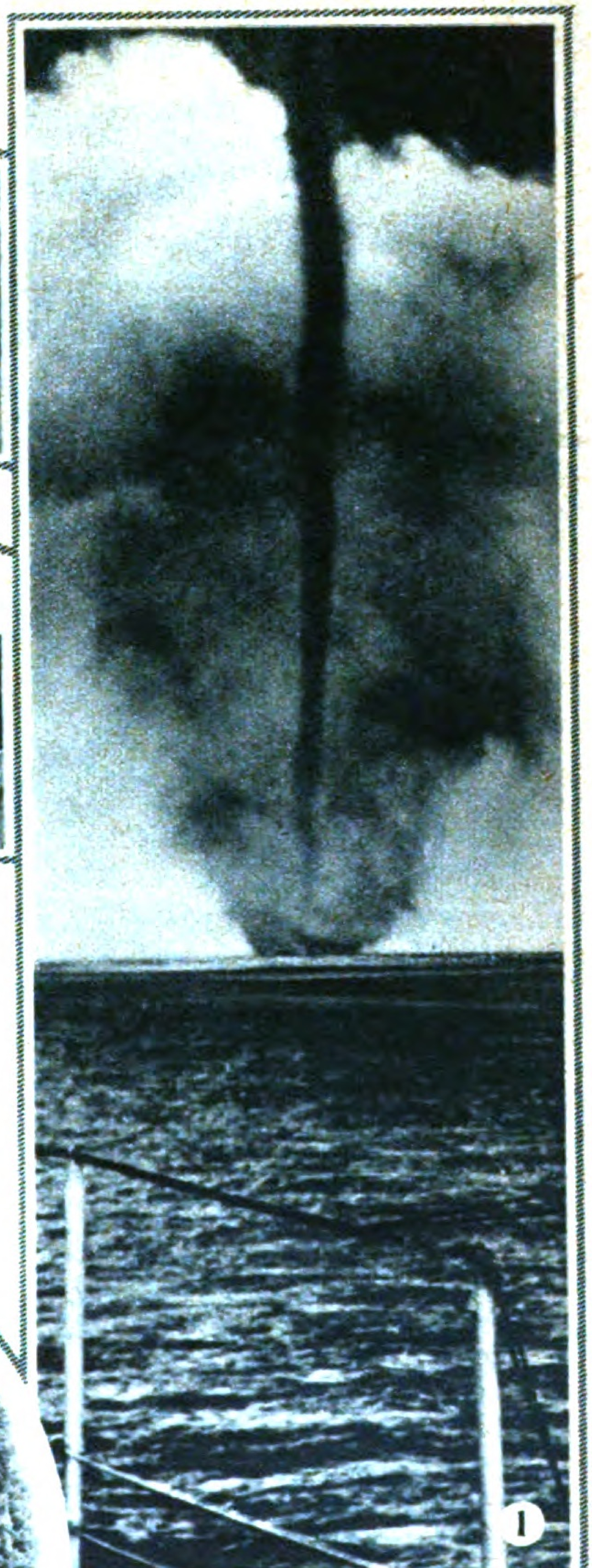




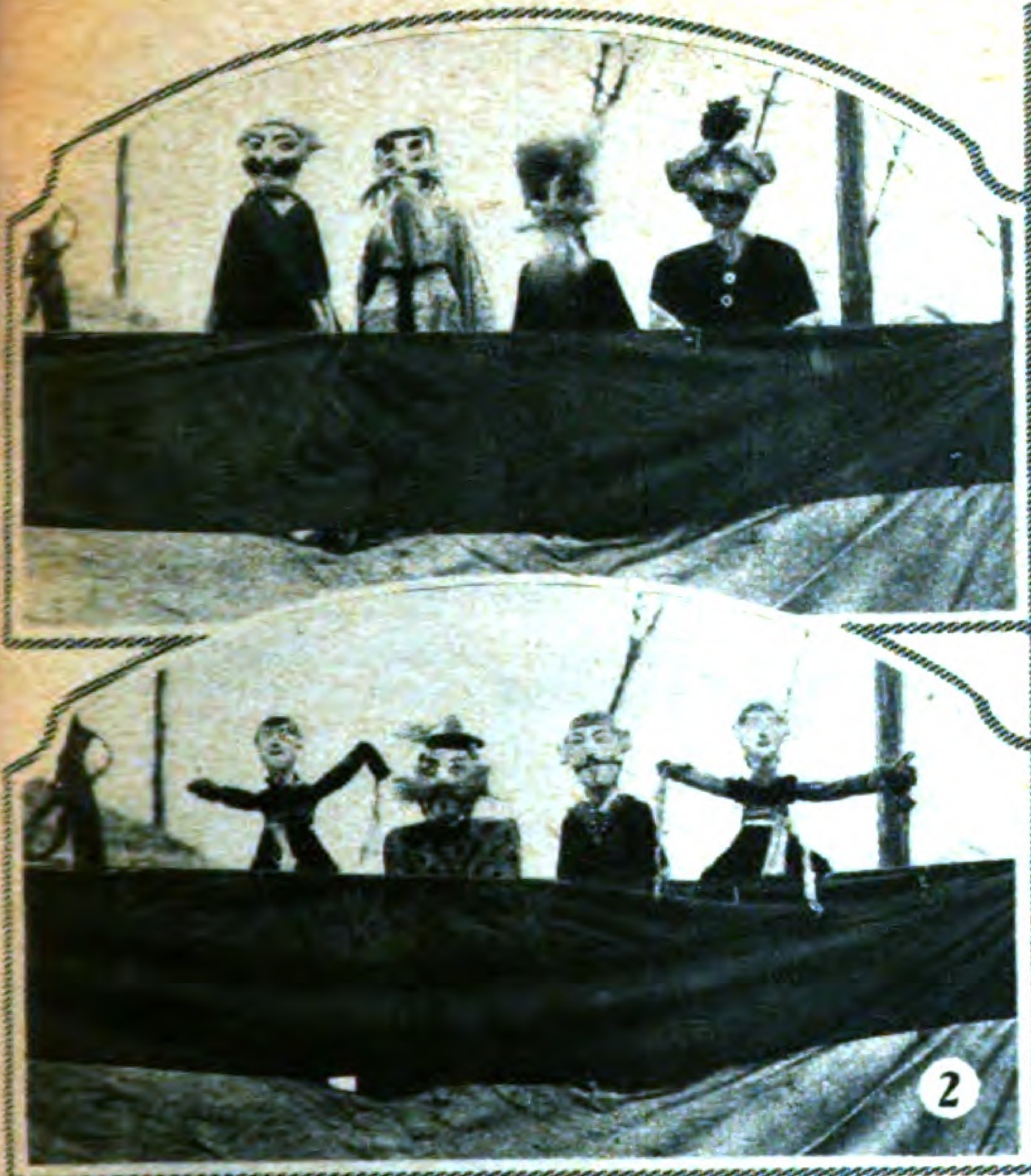


（左）上村松園女史　―京都―
女史は又鼓の名手、古雅な響を無限に愛して居られます。

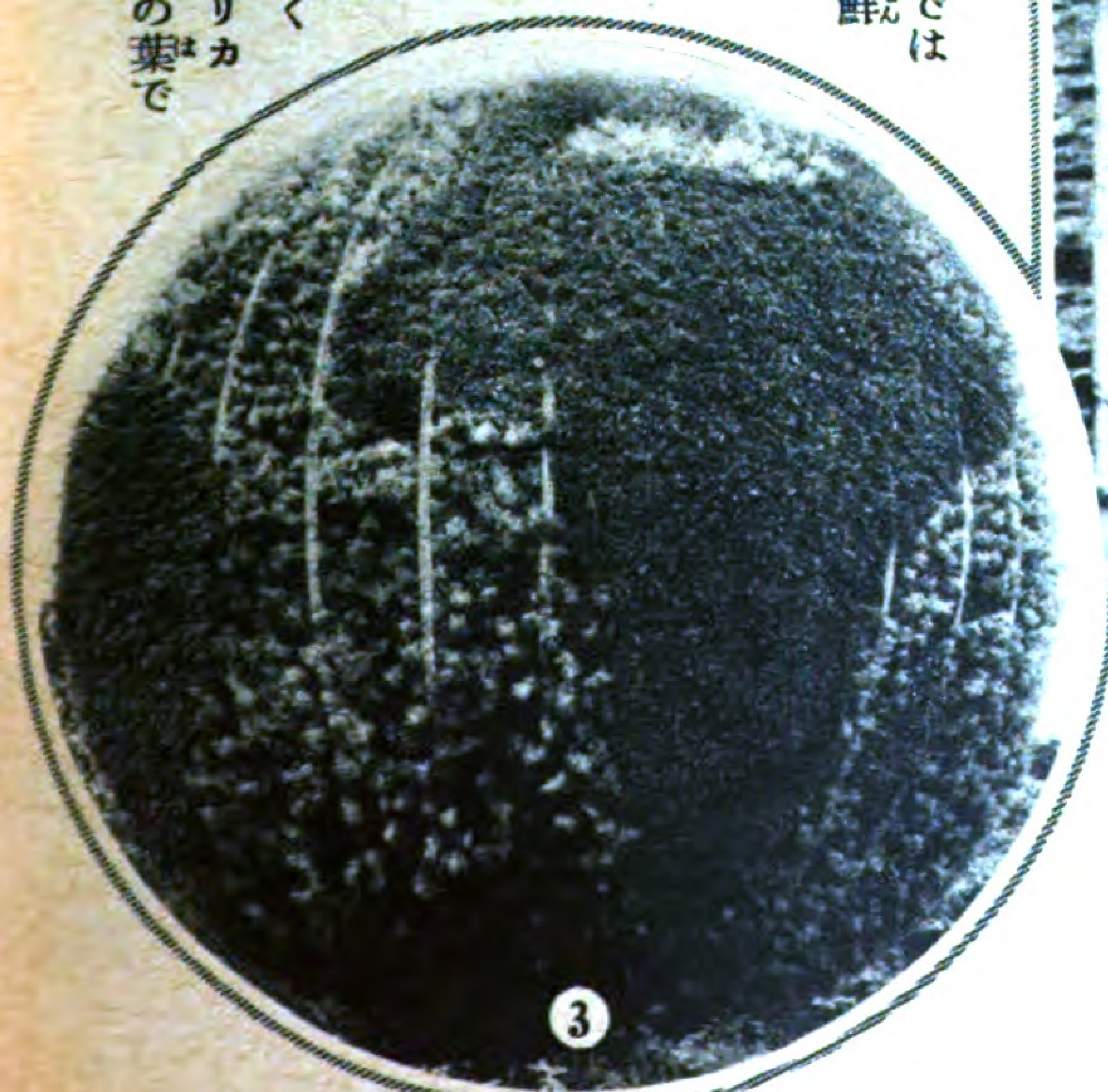
これは何



(1)世にも珍らしい龍巻の寫眞です。これは支那の揚子江附近に起つたもので、何百尺と云ふ高さに水を巻上げてゐる光景です。

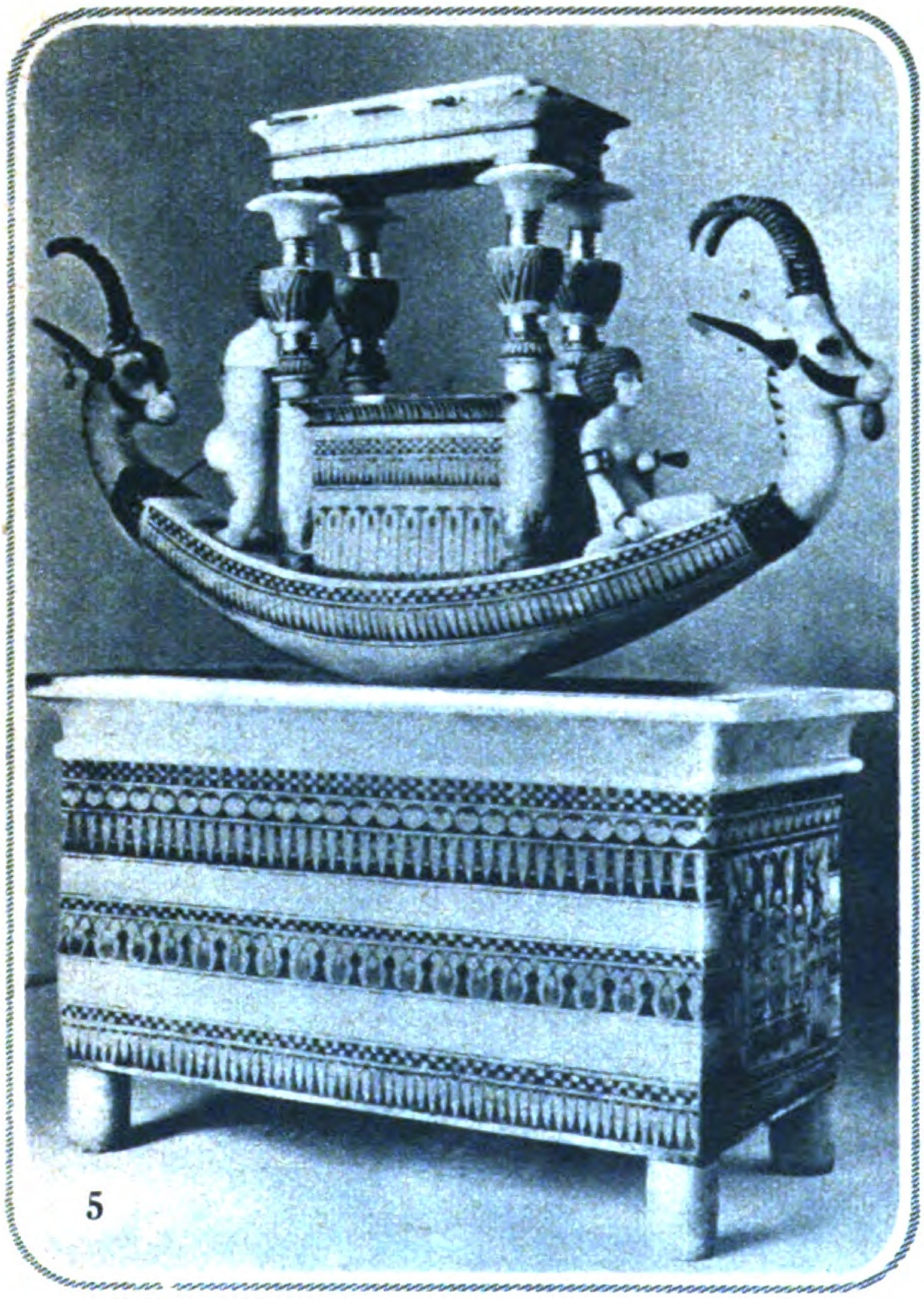


(2)何と奇拔な裝束ではありませんか。朝鮮の人形芝居は屋外で催され頗る野趣に富んだ面白いものです。



(3)これは米國カンサス州に出來た植木の地球儀ださうです。成程よくよく見れば南アメリカの形がチャンと木の葉で出來てゐます。

(4)猿か人かこの異形の怪物は今より約五萬年前氷河時代に住んだ人間ださうです。當時の遺骨を基礎として作つた模型であります。(5)見るからに華麗な此の彫刻は古代埃及王の墳墓から發見されたもので、二人の童子が舟に乗つてゐます。これは死者を葬ふために作つた一種の花生らしく舟の中には水を入れる部分があります。



5



4

(6)頭には牛の角と鳥の羽を飾つた此のもの〱しい男は南アフリカ土人の人力車夫です。二三人のお客を一時に乗せて韋駄天の如く走るさうです。



6





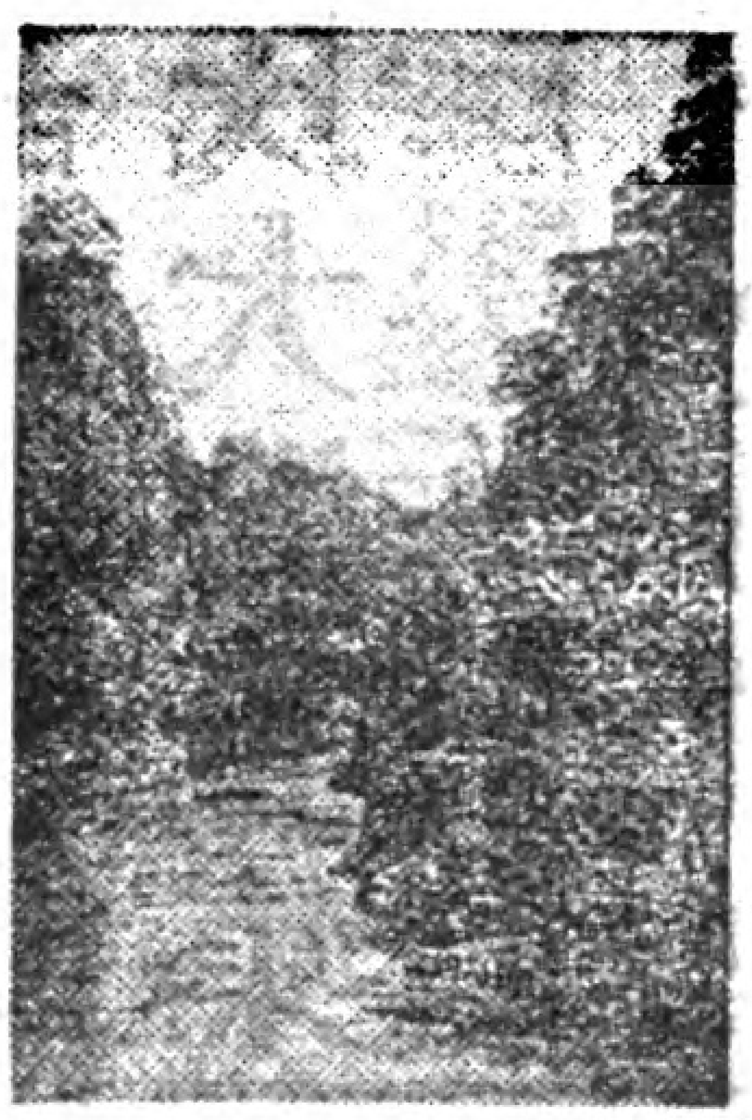
稿を改むる事十數度、野村愛正氏が苦心に苦心を重ねた畢生の力作『霧の中の曙』は出ぬ前から素晴らしい人氣でしたが愈よ本號から連載される事になりました。

(上)は野村氏。(下)は右の挿繪に畫筆を揮はれる林唯一畫伯。

慢性胃腸病と腦神經衰弱を全快した告白

茨城縣筑波郡〇村沼崎　大塚林平（本年二十一歳）

思ひ出は遠く二年前の春種々の草花が筑波山麓の農場を彩る頃私は胃病に犯され爾來一年有餘の間あらゆる醫藥賣藥に親しみました。其の間便秘はする肩がコル食慾はあつても胃痛を怖れて食事も控へ勝ちであるから意氣はいよ〳〵衰へる其の上神經衰弱まで併發して惡夢に迄もおそはれ一日として愉快な日を送つた事がありませんでしたが或醫學の本に蝮が種々の病氣に非常に効力ある樣に記載されてありましたからそれ以後は毎日の新聞廣告に注意して居りました所圖らずも天龍館の赤蝮の活性絞り汁に高山藥草七種によつて造られた養命酒のあるを發見し早速買ひ求め朝晩小盃に一パイ宛飲みはじめると一日毎に効力があらはれ其日から身體が溫まり數日にしてあれほど頑強な便秘も治り通常となり肩のコリも忘れるやうになりました今思ひ出しても全く夢の樣ですそしてグン〳〵目に見えて快方に向ひ其のキヽメには驚くより外ありませんでした飲用十數日にして血色もよくなり身體もメキ〳〵と肥えて來て飲用前より一貫五百目ばかり體重もまし日に〳〵健康の域に達しました。これ全く創製本舖たる鹽澤家に感謝する外ありませんでした丈に五週間分お送り願つて飲用する事一ケ月遂に病より脫し今では前にも增した健康體の持主となり久し振りで土に親しむ樂しさを取返しました。其の後は如何に働いても風邪一つ引かず益々靑年の意氣を發揮する事が出來ました、まづ健康をモツトーとする今日天龍館の養命酒を病める人々に飲用させて健康體になられん事を望み鹽澤家の益々御發展せられん事を祈りつゝ筆を擱きます。尙皆々樣の爲に特筆したい事はマムシの絞り汁と云つて氣味惡がる事は大間違ひで蝮の絞り汁に高山藥草七種を加へそれを滋養酒に釀造され數年間經たものであるから上等の葡萄酒よりも其の風味も香りもよいから女でも子供でも又どんな病人でも美味しく飲用出來ます。



信州天龍峽の奇影

「記者曰く」

信州天龍峽の鹽澤家は賴朝時代からの素封舊家で今でも現職海軍少將が出て居りますが今から三百年の昔十八代前の祖先鹽澤宗閑が赤石嶽特産の赤蝮蛇の絞り汁に高山藥草七種を加へ一種の藥酒を釀造して近鄉の病弱者の爲に無代で惠んで居りましたこれを鹽澤家では代々繼承して今日に至つたのでありますから世にありふれた蝮の燒酎漬や黑燒とは全く効力も違へば信用も違ひます畏くも　今上陛下　皇太子殿下の御砌御嘉納の光榮を賜うた天下一品の權威あるものです。各博覽會では金牌を受領し醫學博士阪口勇先生も横森賢次郎先生もこれを親しく來患者に薦られて居ります御希望の御方は東京澁谷町神宮通り一丁目七**天龍館東京出張所**（振替東京六八八五五番）へ御申込下さい、實費三週間分參圓、五週間分四圓で送料三十五錢、新領土六十五錢、代金引替實費ですが、御都合で講談社代理部（振替東京六六二一九番）へ申込まれてもよい。

◎無◎代◎進◎呈◎　「見本瓶詰」と說明書御希望の方はハガキで本舖へ申込下さい

辯論時代來る!!

新時代に活躍せんとする者は辯を煉れ！雄辯は立身成功の第一武器、經國濟世の第一要素、

見よ！古今大雄辯の熱誠迸る代表名演說！



壇上の花……鶴見氏

新人の叫び！

永井柳太郎氏大演說集

「西にレーニン東に原敬」「來たり、見たり、敗れたり」「人形乎、人間乎」以下十二篇代表的名演說のみ輯む。

百卅二版　四六判半裝　定價壹圓五拾錢　送料八錢

鶴見祐輔氏大講演集

見よ！世界的新人の大識見！「光明は布哇の上に」「排日感情に就て」「ウイルソンの生涯を憶ふ」以下名演說七篇。

卅三版　四六判クロス裝　定價貳圓貳拾錢　函入　送料十錢

尾崎行雄氏大演說集

有名な「桂公彈劾演說」「袞龍の御袖に隱るゝとは何ぞ」「一厘錢問答」「第二維新の序幕」を始め評判の大獅子吼を集む。

廿一版　四六判クロス裝　定價貳圓　函入　送料十錢

賀川豐彦氏大講演集

賀川氏曰ふ……私はどうかしてこの國を聖淨の輝く國にしたい一念で魂を火にして叫んでゐると。見よ！人格透徹の熱辯十八篇！

十六版　四六判クロス裝　定價貳圓　函入　送料十錢

高島米峰氏大演說集

佛教學者、社會教育家として米峰先生の名は天下に普し、政治に教育に宗教に社會問題に明快深刻なる一大痛棒を振ふ！

九版　四六判クロス裝　定價貳圓　函入　送料十錢

道重信教師大講演集

增上寺貫主として一世に仰がる高德の師が人生の惱みを救ひ畢生を說く大信念の切言！特に青年諸君の熟讀を望む。

四版　四六判洋裝函入　定價壹圓八拾錢　送料十錢

下村宏博士大講演集

見よ新聞界の巨人、學識文名天下に轟く海南博士の名講演「歐米より歸りて」を始め「忘れられた富の分配」外數十項！

七版　四六判洋裝函入　定價貳圓　送料十錢

中島德藏氏大講演集

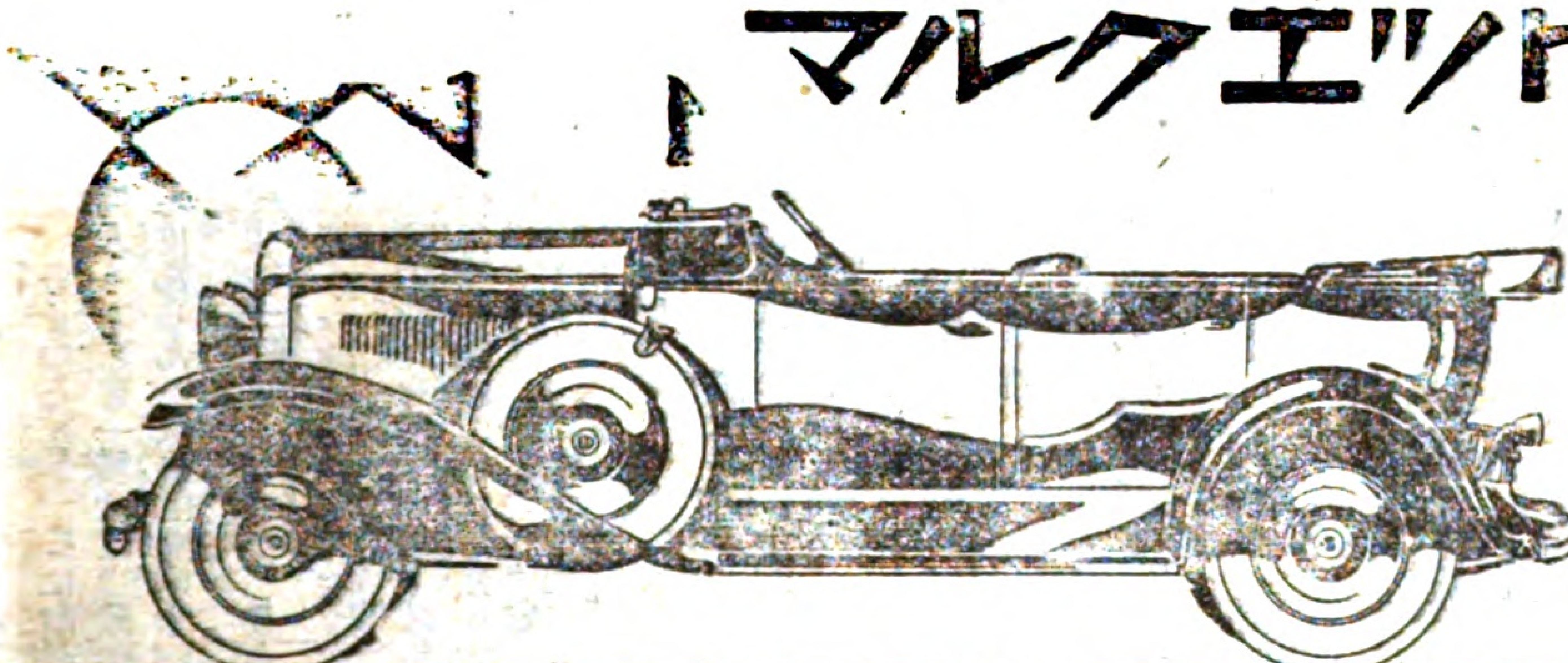
識見學德一世に高き先生の思想問題、婦人問題、修養問題其他各方面の熱論「青年日本來れ」「天下第一宗」以下數十篇。

五版　四六判洋裝函入　定價貳圓　送料十錢

東京本郷駒込坂下
大日本雄辯會講談社發行
（振替東京三九三〇）
▲全國書店にあり

Marquette

マルクエット



ビウイクの姉妹車
マルクエット號

歐米諸國では御婦人方でも郊外ドライヴは固より御買物にまで自動車を自分で運轉して行かれます。

操縦が極めて容易で、外觀が立派 、機械が精巧で、而かも値段が格安でスタイリッシュな自動車をと云ふ御註文に叶ふやうにこしらへましたのが、此のビウイクの姉妹車マルクエット號であります。

世界最大の試驗運轉場で猛烈な試運轉や檢査を首尾よくパスしました本車は、皆様の御用命を御待ちして居ります。

最寄の特約販賣店に陸續御註文下さい。

幌型	￥3,995.	(大阪渡)
セダン型	￥4,418.	(大阪渡)

マルクエット號はゼネラルモータース金融會社による月賦販賣の便あり

日本ゼネラル・モータース株式會社



湖上の月

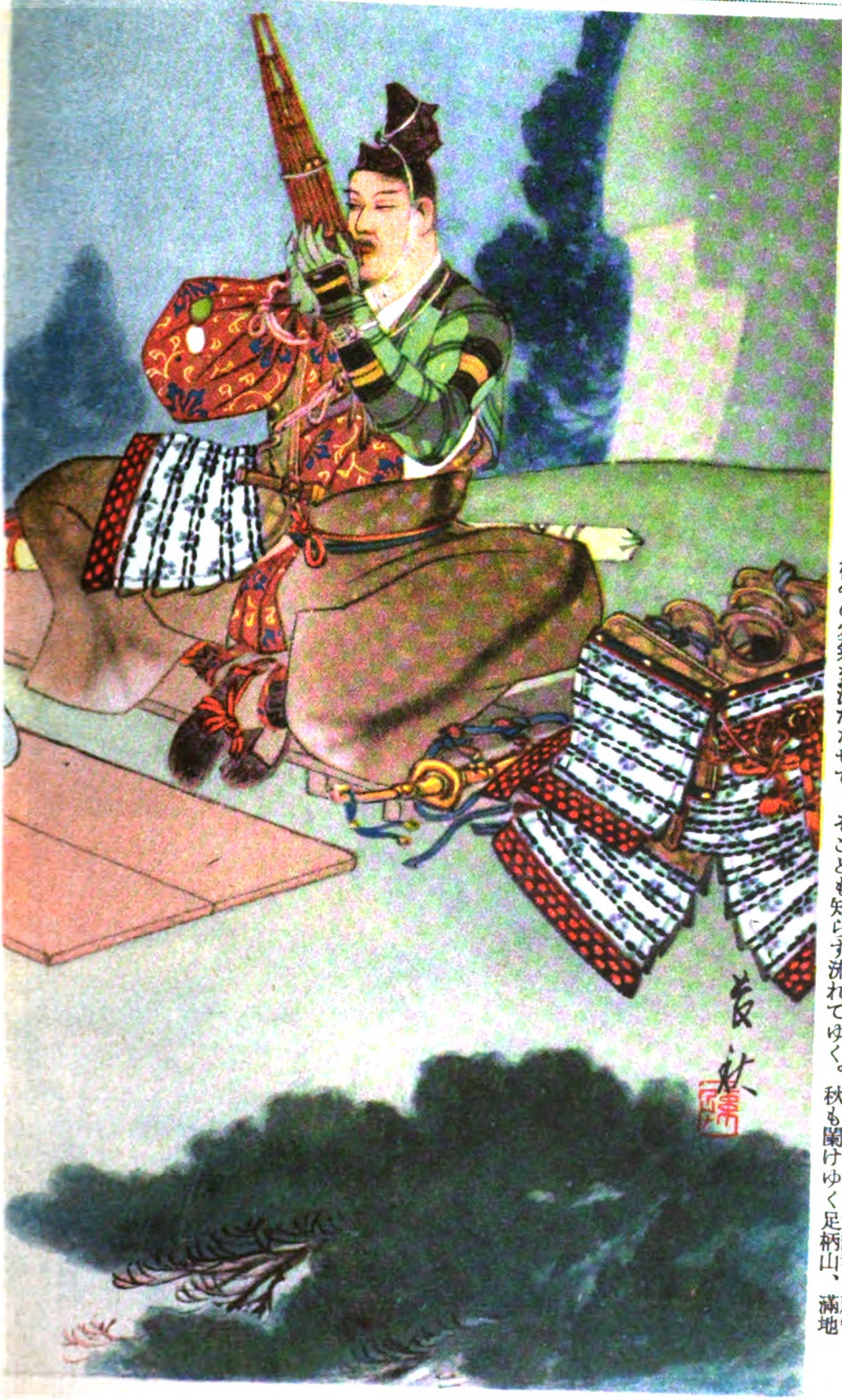
—紫式部—

月は東の山に上る。遠い湖の面が夢のやうに烟る。短檠の油が孳々と音を立てる。

紫式部は纖手を伸べて燈心を截つた。眼覺めたやうな明るさが、ぱつと浮几を照らした。几の上に繰りひろげられた紙に、水莖の跡が鮮かに浮ぶ。月は恍然として窓から覗いた。

源氏物語の名作は、このやうな美しい境地において筆を進められた。石山寺の秋月。それは式部の名によつて今も尚ほ澄みわたつてゐる。

（山川秀峰畫）



山上の月

—新羅三郎義光—

笙の音が漂ふ。瀏喨として冴えわたる妙なる調は、急がず、迫らず、高く、低く、夜半の空氣を浪だたせて、そことも知らず流れてゆく。秋も闌けゆく足柄山、滿地



の露、天上の光を宿して、尾花が末に風も動かぬ寂寞の境に、在るものはたゞ微妙なる旋律の流れ。我れも人も藝術の三昧に浸れる音の物語。新羅三郎義光、後三年の合戰に、奧州下向の途すがら、少年豐原時秋に、笙の祕曲、大食調入調を傳へたる美談。風流千古に傳へて、今も尚、人をして宛ら美神の懷に融け入る如き、感を懷かしめる。

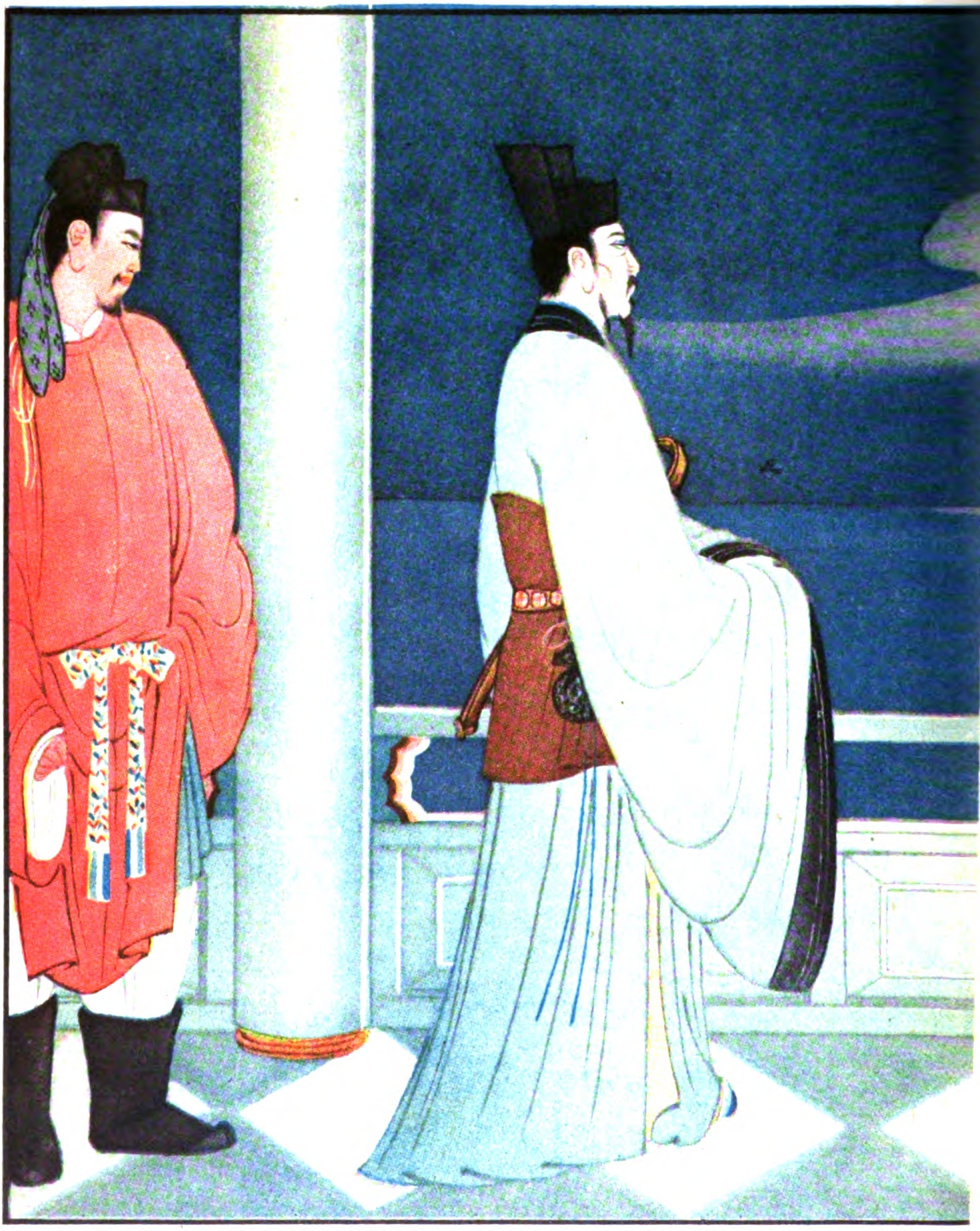
（磯田長秋畫）



海上の月

—安倍仲麻呂—

安倍仲麻呂は奈良朝の文人であつた。十六歳のとき、唐に渡つて學問を修め、姓名を朝衡と改め、玄宗皇帝の朝廷に仕へて高官に上り、名高い詩人達と交つて、多くの人々から尊敬されたけれど、故國を慕うて已むことなく、終に我が遣唐使の歸朝するのに從つて、玄宗に暇を請ひ、明州に到つて友人と



別離の盃を酌み交した。恰も秋の半ばであつて、漫々たる海上に澄みのぼる月影のすが〳〵しさ。仲麻呂は、そゞろに望郷の思ひにたへず、

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と詠じた。けれども天無情にして難船のため國に歸ることが出來ず。三笠山の月を仰ぐことなくして、終に唐に歿した。


（鴨下晁湖畫）

陣營の月

—上杉謙信—

上杉謙信は戰國第一の俠雄であつた。弱きを助け、強きを挫く氣魄が、つひに彼をして最大の成功者たる名譽を得しむるに至らずして終らしめた。併しながら、戰場の驅引は天下に敵無く、越中を略し、能登に入つて、やがて北陸道を席捲し、上洛の道を開かんとする





天正四年の秋、戰勝つて意氣軒昂。將卒幄を敷いて酒盃を擧ぐるところ、滿月高く天に懸る。忽ち聽く雁聲の相喚び相應へて過ぐるを。

霜は軍營に滿ちて秋氣清し
數行の過雁、月三更
越山併せ得たり能州の景
遮莫、家鄕遠征を憶ふ

一絕の名吟、英雄千古の韻事今も尙馨し。

（小山榮達畫）



舊都の月

—德大寺實定卿—

それは安德天皇治承四年夏の末のことであつた。前太政大臣平清盛入道淨海は、南都北嶺の僧兵どもの煩はしさを避けて、攝津の國、福原の里へ都を遷しまゐらせ、三歳の幼帝を奉じたてまつり、すべての月卿雲客を新都に引き移らしめた。土地は狹く、人は多く、造營の混雜の間に、いつの間にか秋が深くなつて、八月半ばの空に雁がねが鳴き渡るやうになつた。德大寺左大將實定卿は、ありし昔の懷しく、舊都の月を慕うて、たゞひとり上洛せられたところ、何事も皆變り果てゝ、數寄を凝らした邸宅も、蓬が杣、淺茅が原、鳥の臥所と荒れてしまつてゐる。無量の感慨を袖に包んで、黄菊紫蘭の野邊を踏み分けながら、尋ねける大宮御所、『舊き都に來て見れば、淺茅が原とぞ荒れにける。月の光は隈なくて、秋風のみぞ身にはしむ』と、押し返して歌ふ今樣に、庭前の蟲の音も、いとゞ哀れを添へた。（荻生天泉畫）

天下一品「名」づくし展覽會



名馬——吹雪

御料馬『吹雪』は本年十九歳、全身雪白の見るからに凛々しい馬であります。

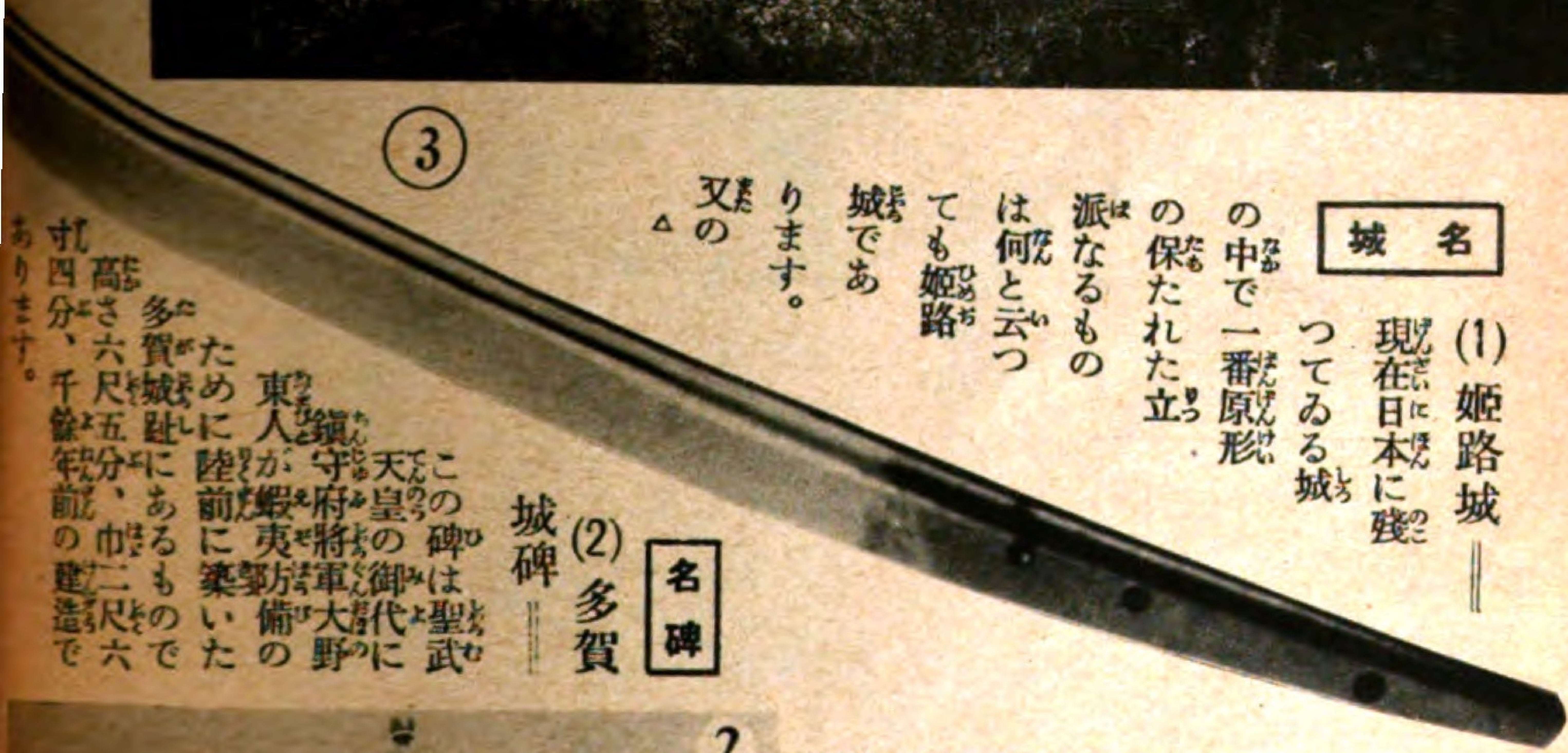
今上陛下が東宮殿下御當時よりの御愛馬で、觀兵式、大演習等には勿論、昨夏那須御登山の砌などにも常に陛下のお伴をして參りました。性質は極めて怜悧柔順で、觀兵式の際などには始より終り迄足一つ動かさないさうです。吹雪は大正十三年佛國にて御買上げになり、二年間ばかり遊佐中佐が調教いたしました。御料馬吹雪の姿は私達にとつてなつかしいもの丶一つであります。



1

名城

(1) 姫路城＝現在日本に殘つてゐる城の中で一番原形の保たれた立派なるものは何と云つても姫路城であります。又の△名を白鷺城とも云ひ、雪白の天主閣が巍然として聳えてゐる態は繪の如き美しさであります。姫路城はその始め赤松氏の築いたもので、豊臣秀吉、池田輝政によつて完成されました。城内にいろは四十八門があつて、幾回となく道が曲折し、何人も方角を失ふ事や、敵が城内に攻め込んで來ても悉く矢玉で殲滅出來る樣な構造になつてゐる事などは今日築城家の驚嘆してゐる處であります。



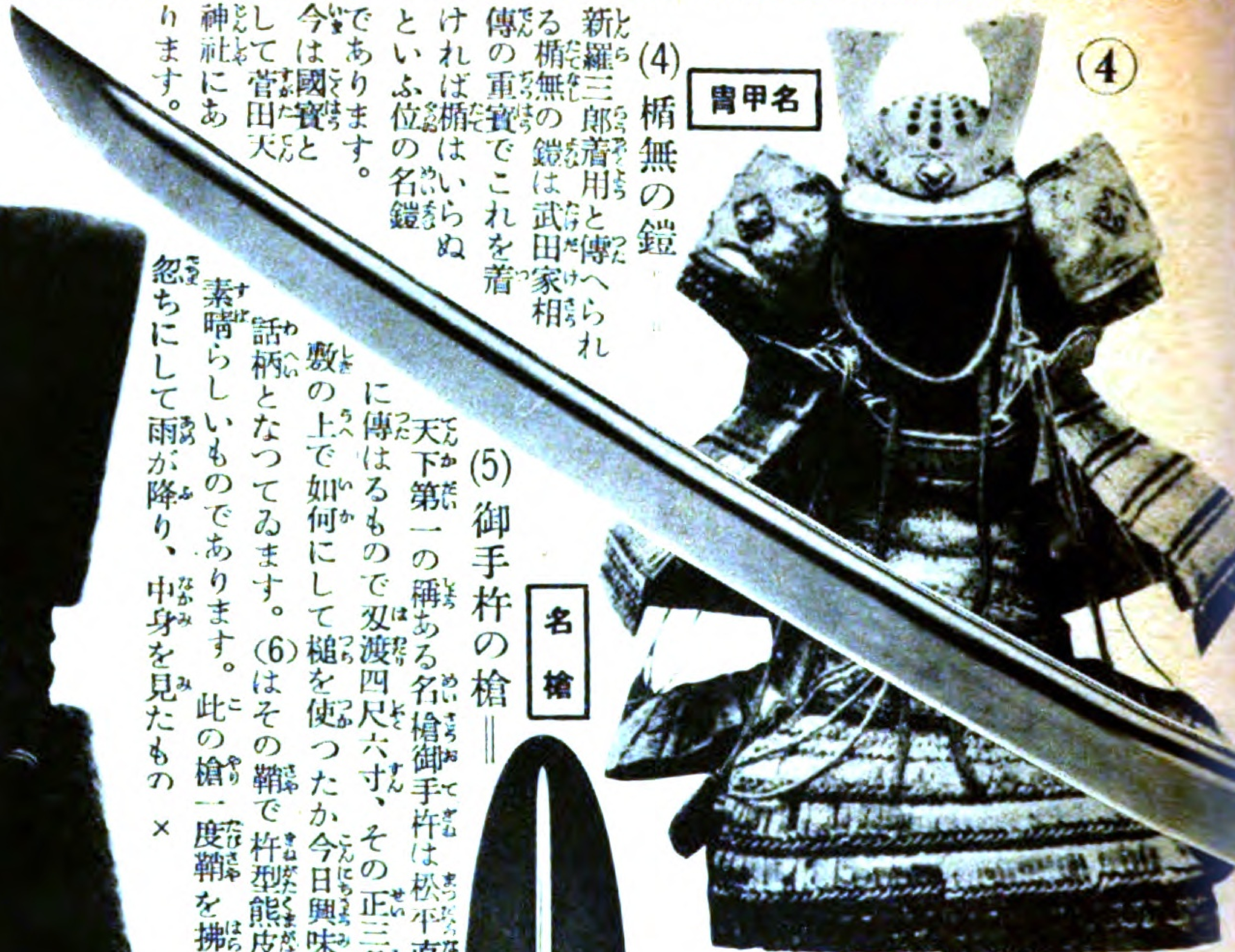
3

名碑

(2) 多賀城碑＝この碑は聖武天皇の御代に鎮守府將軍大野東人が蝦夷防備のために陸前に築いた多賀城趾にあるもので高さ六尺五分、巾二尺六寸四分、千餘年前の建造であります。



2



名甲冑

(4) 楯無の鎧――新羅三郎着用と傳へられる楯無の鎧は武田家相傳の重寶でこれを着ければ楯はいらぬといふ位の名鎧であります。今は國寶として菅田天神社にあります。



(6)

名槍

(5) 御手杵の槍――天下第一の稱ある名槍御手杵は松平直之伯家に傳はるもので双渡四尺六寸、その正三角形の仕上りは鐵敷の上で如何にして槌を使つたか今日興味ある話柄となつてゐます。(6)はその鞘で杵型熊皮製の素晴らしいものであります。此の槍一度鞘を拂へば忽ちにして雨が降り、中身を見たもの×

×は眼がつぶれるとさへ云ひ傳へられてゐます。



(5)

名刀

(3) 榊原正宗――今日日本に傳はる名刀中の名刀として聞え高いものは榊原秀政所持の正宗であります。長さ二尺二寸七分五厘、豪勇無双の康政が數度の合戰に所持したもので、二ケ所の刃こぼれと敵の刀を受けた數ケ所の跡があります。その出來は身巾の廣い切先の稍ゝ延びたもので、燒刃は華かな大亂れであります。此の刀は寛文七年榊原家から松平家に賣られましたが、その代金は驚く勿れ當時の金で二千三百二十九兩三分といふ莫大な金額であつた點から見ても如何に此の刀が重寶がられたかゞ解ります。

（松平直之伯爵家藏）



1



2

名木

(1) 富の松 ‖ 東京府下本田町淨光寺に珍らしい松があります。高さ一丈五尺位、左右に張つた枝の長さは實に二十三間に及んでゐます。徳川八代將軍吉宗が御鷹野の際この寺に休息され、富の松と命名されたと傳へられます。

(2) 高砂松 ‖ 『誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに』といふ古今集の歌や謠曲で有名な高砂の松は天然記念物で兵庫縣高砂町の高砂神社内に在ります。黒松と赤松との相生樹であるといふ事も緣起をかつぐ一つかも知れません。元祿年間姫路城主本多美濃守の植ゑたものであります。



3

名塔

(3) 藥師寺東塔 ‖ 白鳳時代の最も傑れた建物の一つは奈良藥師寺の塔であります。一見六重の塔に見えますがその實は三重であります。この形式は一寸他に類例のないもので、一部では龍宮造りとも云つて居ります。建立は今から千二百年前。



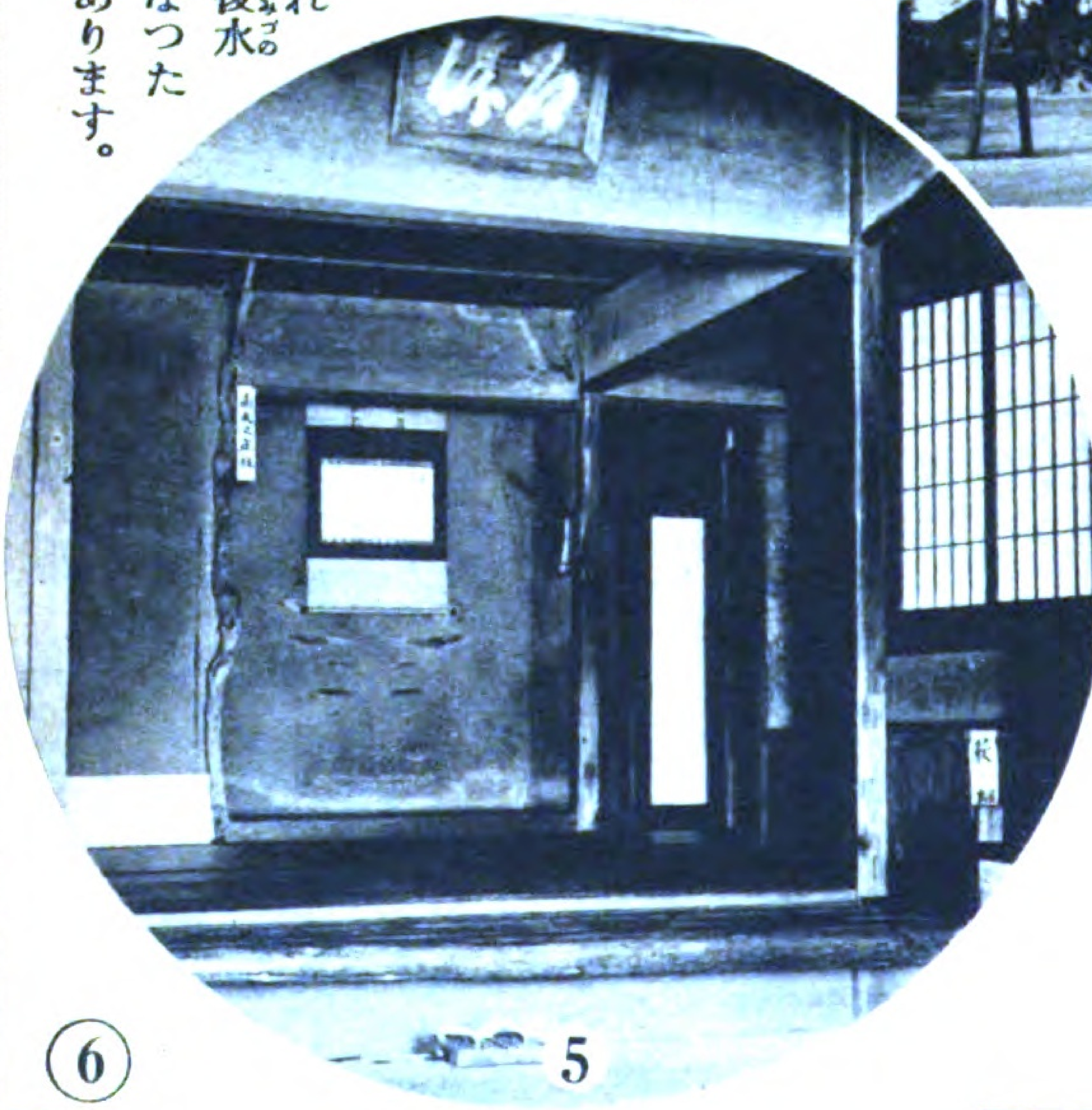
(4)法隆寺五重塔――日本最古の五重塔は聖德太子建立にかゝる奈良法隆寺の塔であります。高さ百十尺七寸、飛鳥式建築の粹で、その均整美は夙に定評のある處であります。大正十五年にその心柱の下に深さ十尺直徑三尺餘の空洞が發見され、謎の空洞として騷がれた事は人の記憶に新なるところであります。



4

名茶室

(5)夕佳亭――南天の床柱と萩の違ひ棚で有名な、夕佳亭は金閣寺に在り、小堀遠州の造るところと云はれて居ます。こゝは後水尾天皇の御遊びになつた由緒のある茶室であります。



5

名額

(6)筥崎八幡の額――福岡市外官幣大社筥崎宮は『敵國降伏』といふ額のあることで有名であります。この四字は畏くも醍醐天皇が石清水八幡の神勅により、紺紙に金泥を以て三十七葉宸書せられ、筥崎宮に納められたと傳へられます。筥崎宮は後年樓門造營の際、小早川隆景が謹んでその一葉を擴大して額としたものであります。

⑥




①


②

名彫

(1)十一面観世音像 ― 此の像は諸國國分尼寺の總本山である奈良法華寺の御本尊であります。身長三尺三寸、端麗の美は天平時代の代表的彫刻として好評嘖々たるもの。見るからに神々しい氣品があります。

(2)眠り猫 ― 日光東照宮には萬を以て數ふる彫刻物がありますが、その内で最も世人に知られてゐるのは此の眠り猫であります。これは奥殿に通ずる廻廊の蛙股の彫刻中にあります。さまで大きくはありませんが名匠左甚五郎作と傳へられてゐます。配するに牡丹を以てしたのは、牡丹の花の咲く頃は即ち猫も眠ると云はれてゐるからであります。

名鐘

(3)三井寺の鐘 ― 俵藤太秀郷は、龍王の頼みを受けて三上山の百足を退治した御禮に十種の寶物を貰つたが、此の鐘はそのうちの一つだといふ傳説であります。又辨慶が比叡山に引摺あげていつたところが『イノー、イノー』と響いたので大いに怒り『去にたければ勝手に去ね』と谷間に轉し込んだといふのもこの鐘です。今は三井寺名物の隨一に算へられて居ます。

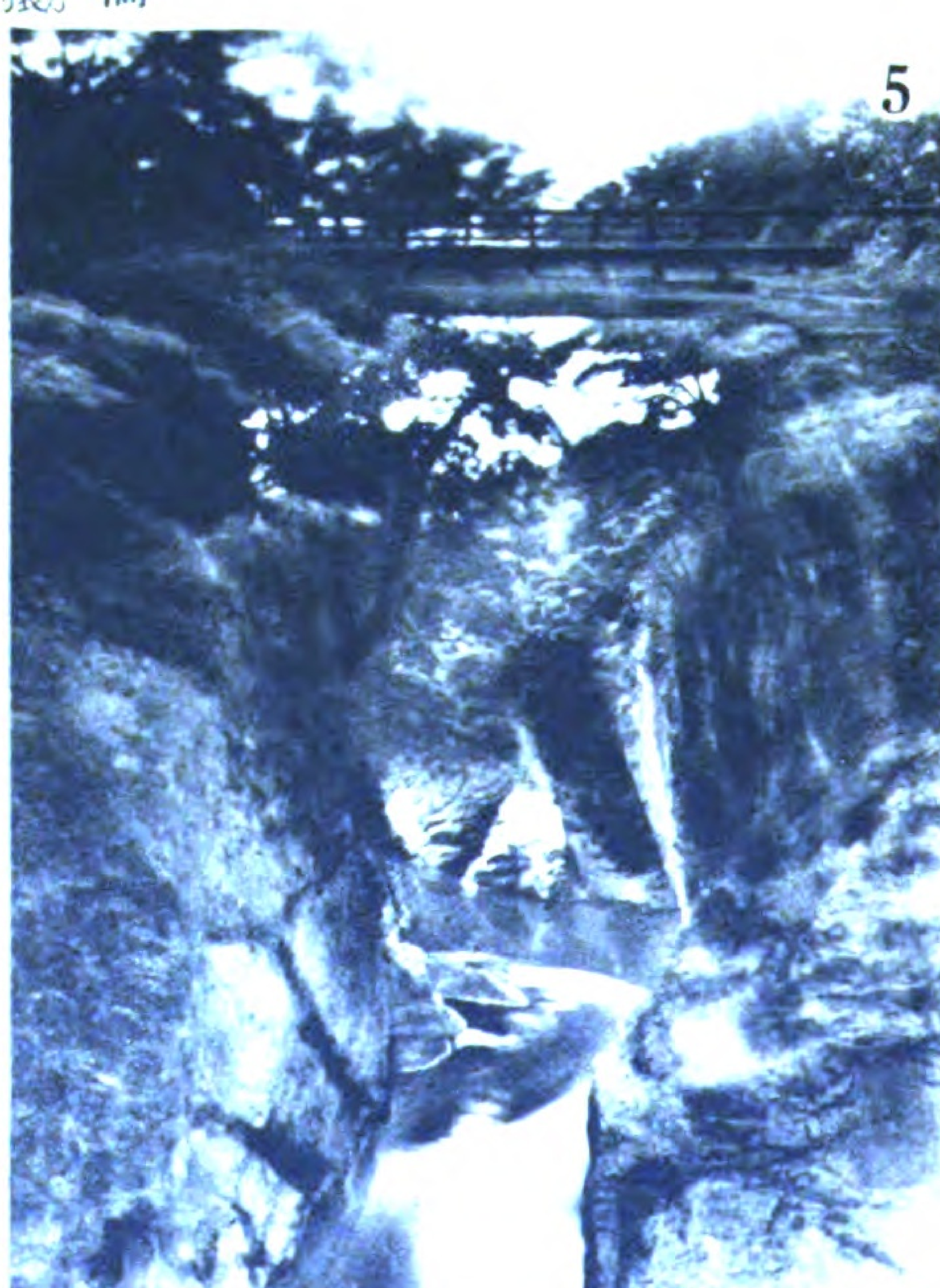

③



4

名橋

(4)錦帶橋――この名橋は算盤橋、五龍橋とも云ひ、今から二百五十年前岩國藩主で數學家として知られた吉川廣嘉の手になつたものであります。その巧妙なる設計は今尚人を驚かしてゐます。全長百二十五間餘、巾三間、弓狀の最も高い處は水面より六間に及び、四個の菱形の石臺の上に架した五つの虹形の木橋であります、橋板には全部厚さ二寸五分の檜材を用ゐてあります。



5

(5)猿橋

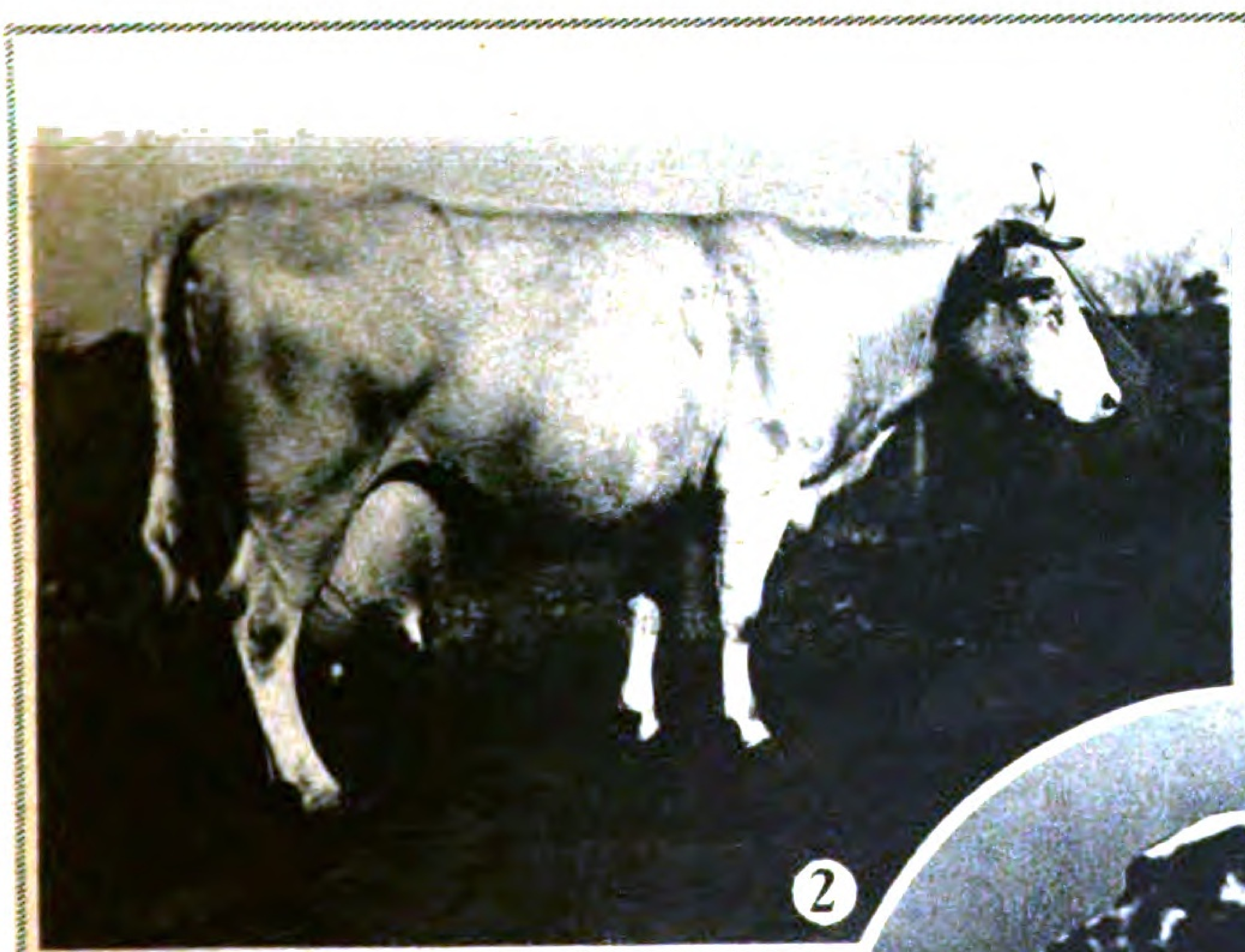
甲州の猿橋は奇橋中の代表的のもので、長さ十七間、巾十一尺、さまで大きいものではありませんが、流れから十二三間の斷崖に架して、橋下に一柱もない、その架け方が奇とせられてゐます。物徂徠や廣重などは文筆、彩筆によつて此の橋を天下に紹介してゐます。



名牛

(1)牡牛 ― 農林省畜産試験場に居る名牡牛サー・プリリー・コランサ・デリーメード號は本年五歳、體重二百五十貫、日本の代表的のものであります。これは大正十五年木村場長が米國カーネーション牧場から三萬圓で購入して來たもので、種牡牛として既に五十餘頭の父となつて居ます。

(2)牝牛 ― 矢張畜産試験場に居る第六グルーチエ・ホワイト號（ホルスタイン種）は日本に於ける代表的の乳牛で、搾乳量の最高記録は一日に一二二・六封度に及んで居ます。嘗つて世界的名牛として『乳が出ました四斗二升二合米の四斗俵は何のその』と歌はれた八丈島のコランサ號と並びたつ名牛であります。





名犬

(3)リト・リバー ― 伏見宮家御愛犬リト・リバーは殿下が御滯英中に親しく御購求ありしもので、吾が國に於ては勿論、歐洲各地の品評會で多くの優良杯を得た世界的名犬であります。

名鳥

(4) 長尾鷄 ― 土佐國の特産、長尾鷄は世界的に有名な鳥であります。『さゞなみ』とも云ひ鷄の一變種で尾の長さは四米から六米といふ素晴らしいものです。色は大抵銀灰色、褐色、白色の三種に分れて居ります。寫眞は白色長尾鷄で、歐米に輸出され盛んに愛玩用として飼育されて居ます。この鳥は尾の長い關係上常に高い枝等を好み、地上を歩くときは後から人が尾を持つてやらねばならぬといふ有様です。

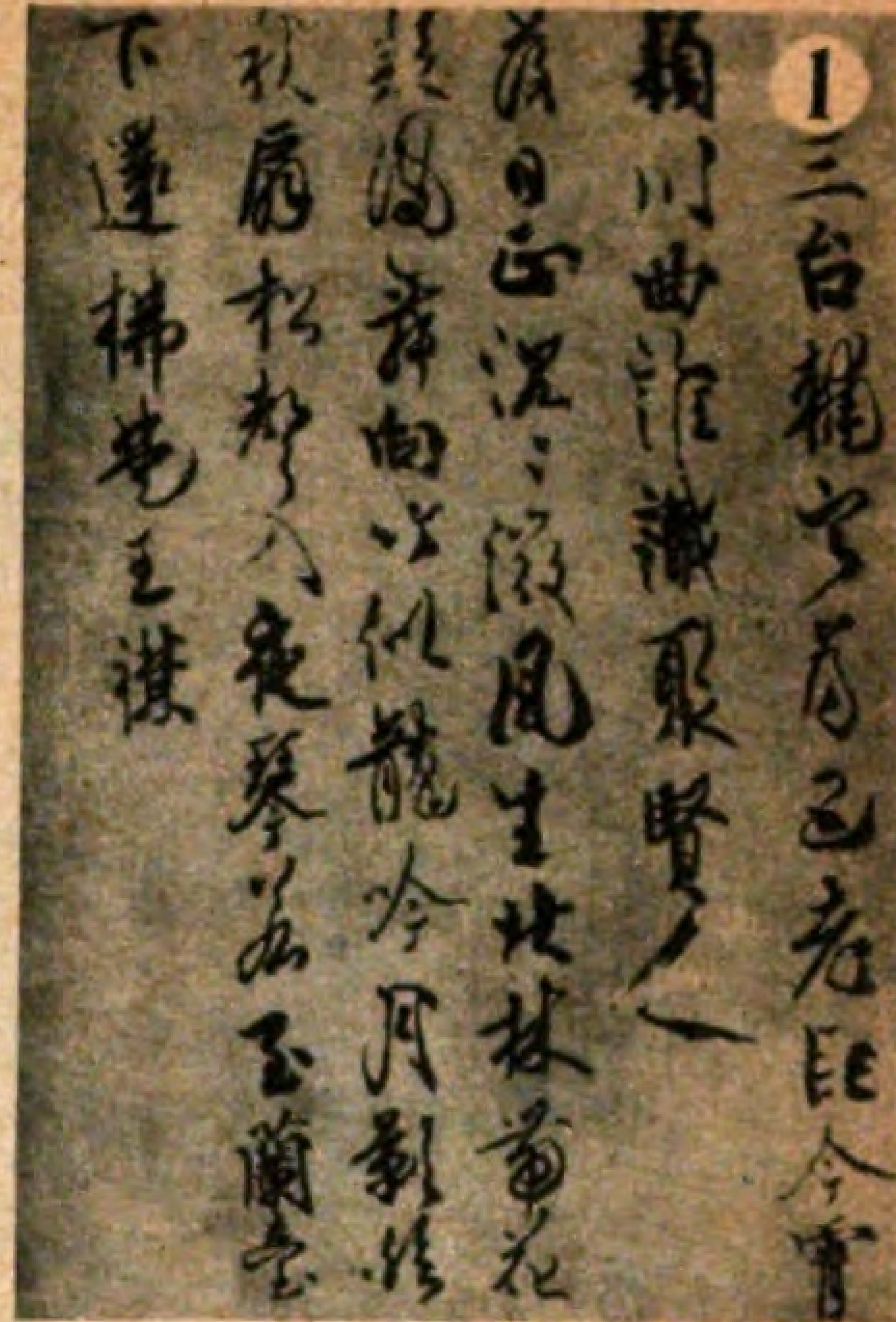


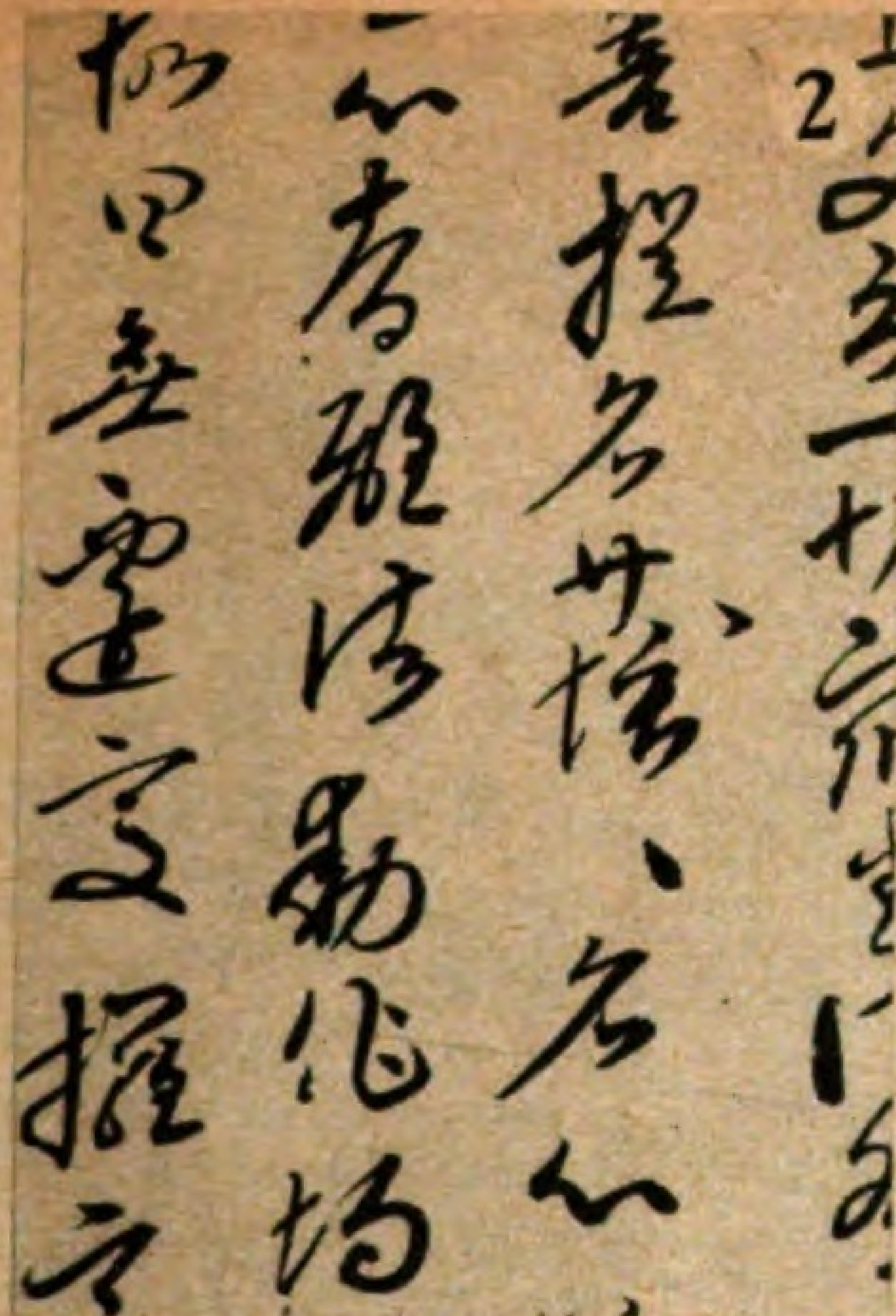
④

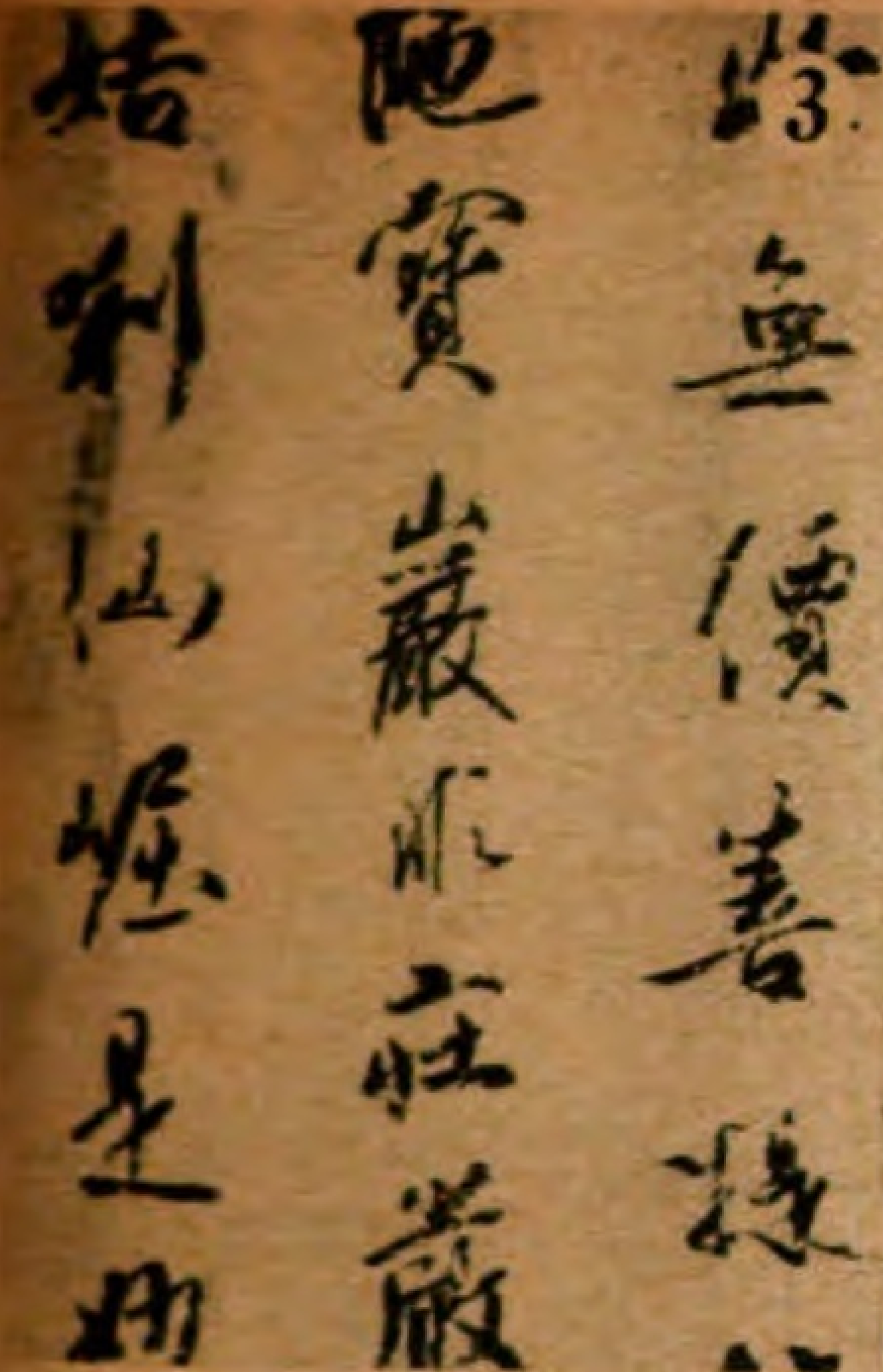


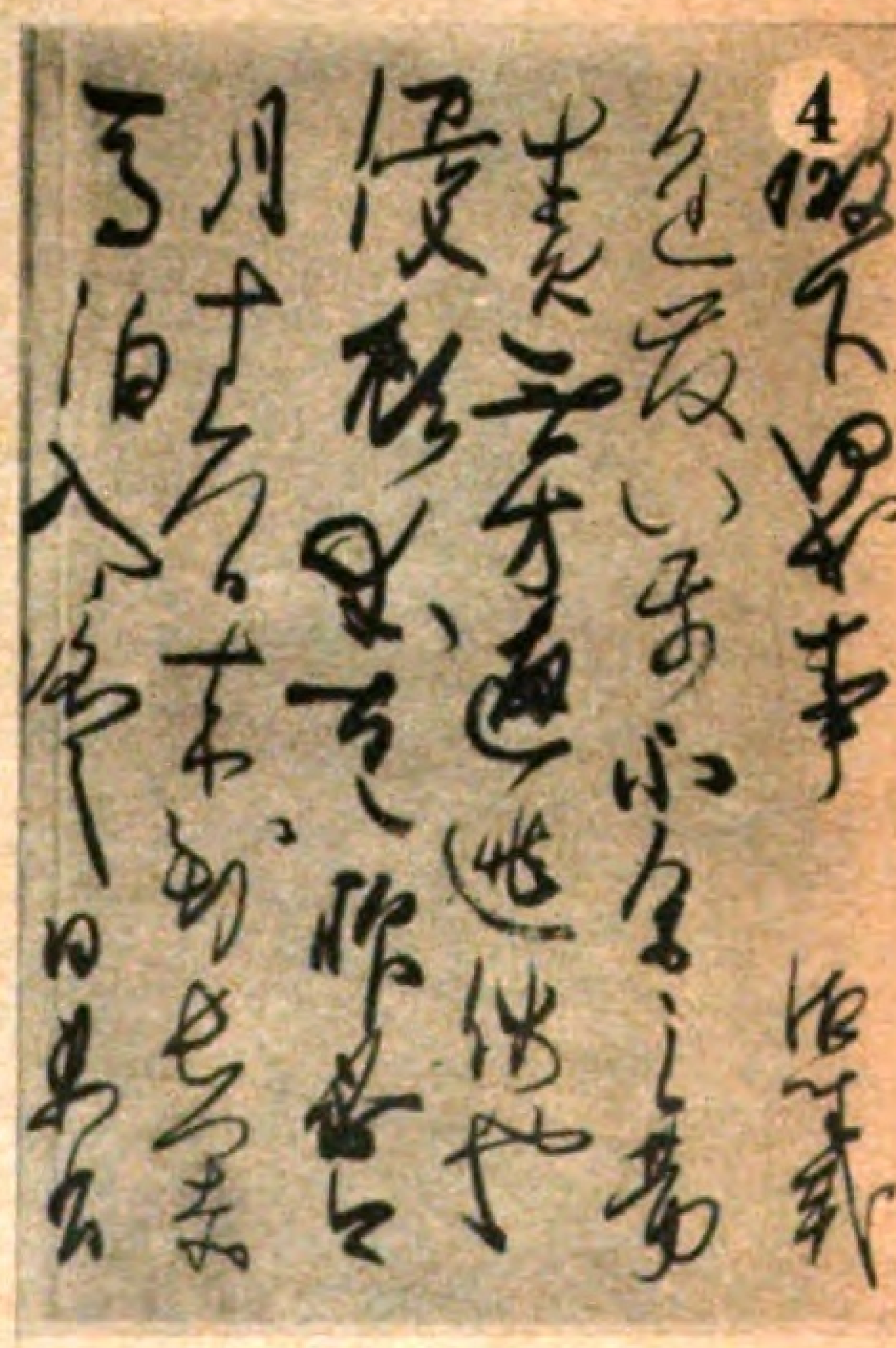
⑤

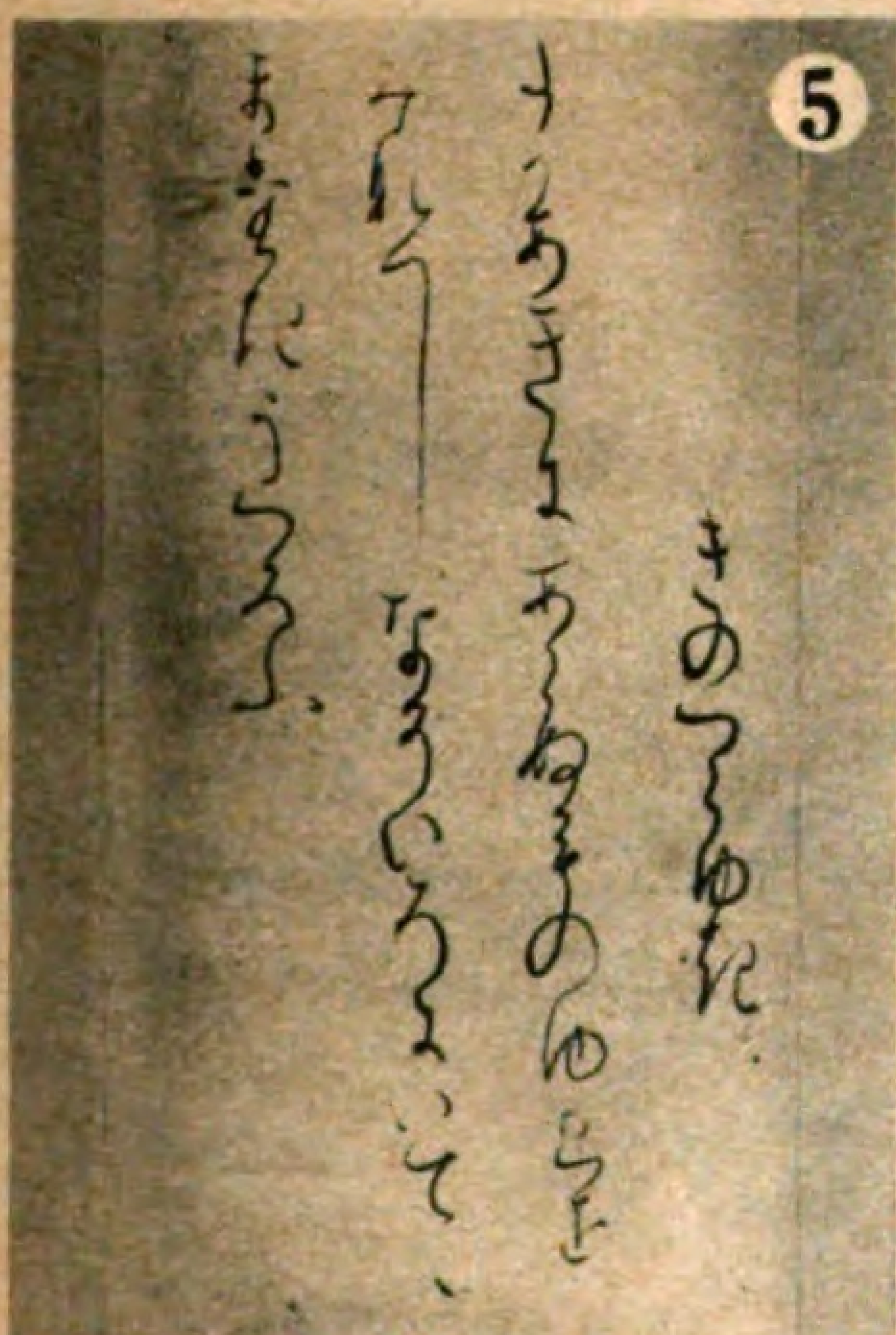
(5) 鷄 ― 畜産試驗場飼育牝鷄白色レグホン種No.8―58は昨年二月孵化、同年七月二日から本年七月一日迄滿一年間に産卵數三二二個で、從來の最高公認記錄三〇六を見事破つて第一位になりました。此の成績をあげるために試驗場では隨分その優生的改良に苦心したそうです。

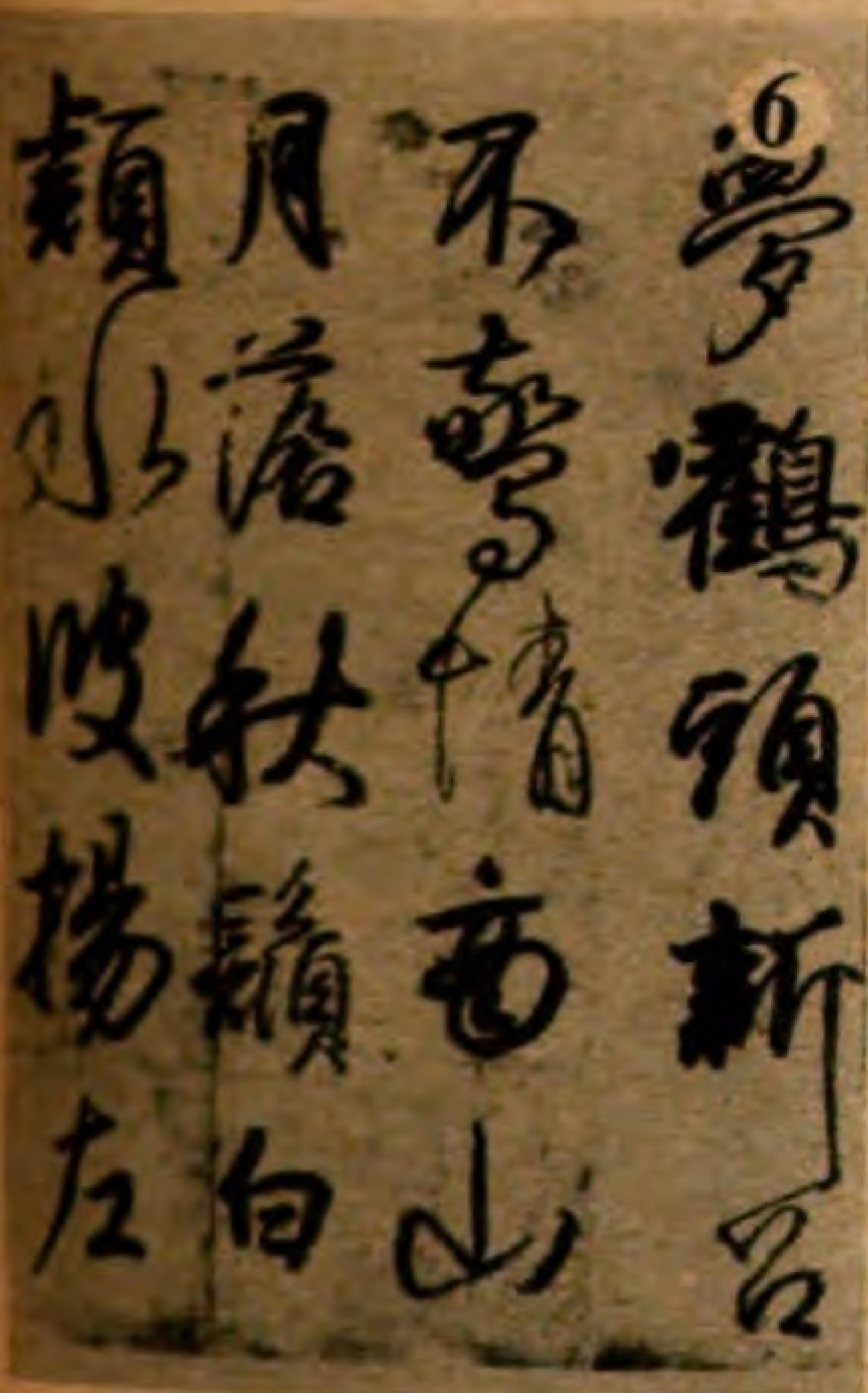












名筆

(上) 三筆三蹟 ―― 古來書道に特に優れた人を各〻三人宛をあげて三筆三蹟と呼んで居ります。三筆とは嵯峨天皇、弘法大師、橘逸勢の三人で、三蹟とは小野道風、藤原行成、藤原佐理の三人であります。嵯峨天皇は草書隷書に於て秀でさせ給ひ、弘法の書は大師流として聞え、道風は草書をよくし、柳に飛びつく蛙の逸話は巷間に有名であります。

寫眞 (1)嵯峨天皇御筆 (2)弘法大師筆 (3)橘逸勢筆 (4)藤原佐理筆 (5)藤原行成筆 (6)小野道風筆。



名畫

(7)燕子花屏風

――尾形光琳の繪は豪奢華麗を以て世に聞えてゐます。桃山時代の代表的畫家で花鳥人物を得意としました。その畫風は飽迄斬新潤達、しかも色彩の絢爛目を奪ふものがあつて一世を驚倒せしめました。その當時の女子が光琳團扇を持つてゐる事を誇りとし、又士君子は光琳印籠を持つてゐる事を得意としてゐた點から見ても如何に彼が當時の人氣を一身に蒐めたかを知る事が出來ます。此處に掲げました燕子花はその傑作中の一つで裝飾的、圖案的の立派なものであります。

名燈籠

(8)水螢形の燈籠

――京都桂離宮にある水螢形の燈籠は高さ僅かに二尺五寸ですが、茶人の頗る珍重するものであります。二個の三角形の孔からもれる火影は、螢の戯れるやうに見えるので此の名稱があります。


⑨


⑧

(9)平等院の燈籠

――宇治平等院鳳凰堂前に在る燈籠は關白賴通好みの型で、俗に平等院型と云はれてゐます。日本の石燈籠中最古のものとして有名であります。端麗の形、高雅の趣掬すべきものがあります。





1

名刹

(1)東大寺――奈良の東大寺は世界最大の木造建築であります。創立當時は高さ十五丈六尺、東西二十九丈、南北十七丈と大佛記に＊

＊あります。東大寺は聖武天皇の天平十七年に造營に着手してこれが完成迄に十數年を費しました。大佛の開眼供養のあつたのは天平勝寳四年であります。現在の伽藍は元祿、寳永年間に再建したもので、始めより幾分小さくはなつて居ますが矢張り世界一であります。



2

(2)善光寺――『善光も初手には河童かと思ひ』といふ古川柳にもあります通り、善光寺本尊の佛像は敏達天皇の御代に神佛二派の爭の犧牲となつて難波の堀江に投ぜられましたが、推古天皇の御代に信濃國の住人本多善光に依つて引上げられたものであります。今の善光寺には山門、大勸進、大本願等があつて、大本願は高さ百尺、東西四十一間、南北六十二間であります。



名園


3

(3)桂離宮の御庭

――京都桂離宮の庭園は江戸時代初期に完成された廻遊式庭園中の傑作であります。全部人工を以て計畫的に造りあげられたもので全體的にも局部的にも技巧の優れた世界的名園であります。

(4)西芳寺の庭

――洛西、西芳寺の庭は夢窓國師の工夫したものと云はれ、將軍足利義政の好んで遊んだところであります。

(5)銀閣寺の庭

――銀閣寺は矢張り政義退隱の棲家として名高いところであります。相阿彌の作と傳へられてゐます。いづれも數寄を凝らした點で名高いものであります。


5


4



1

名宮

(1)出雲大社 ―― 古來緣結びの神として『あらまあ大變出雲が燒けるむすびの帳面茶々もくちや』などいふ唄もある程出雲の大社は有名で×ありります。こゝは吾が國最古の神社で、現在の社殿も千木高く空に聳え、その構造に頗る特徴があります。



2

(2)金刀比羅宮 ―― 四時參詣者の絶えない金刀比羅宮は樹木鬱蒼たる琴平山の中腹にあります。雄大絢爛の造りで、こゝには應擧の描いた國寶名畫が澤山ある事も有名であります。

名閣

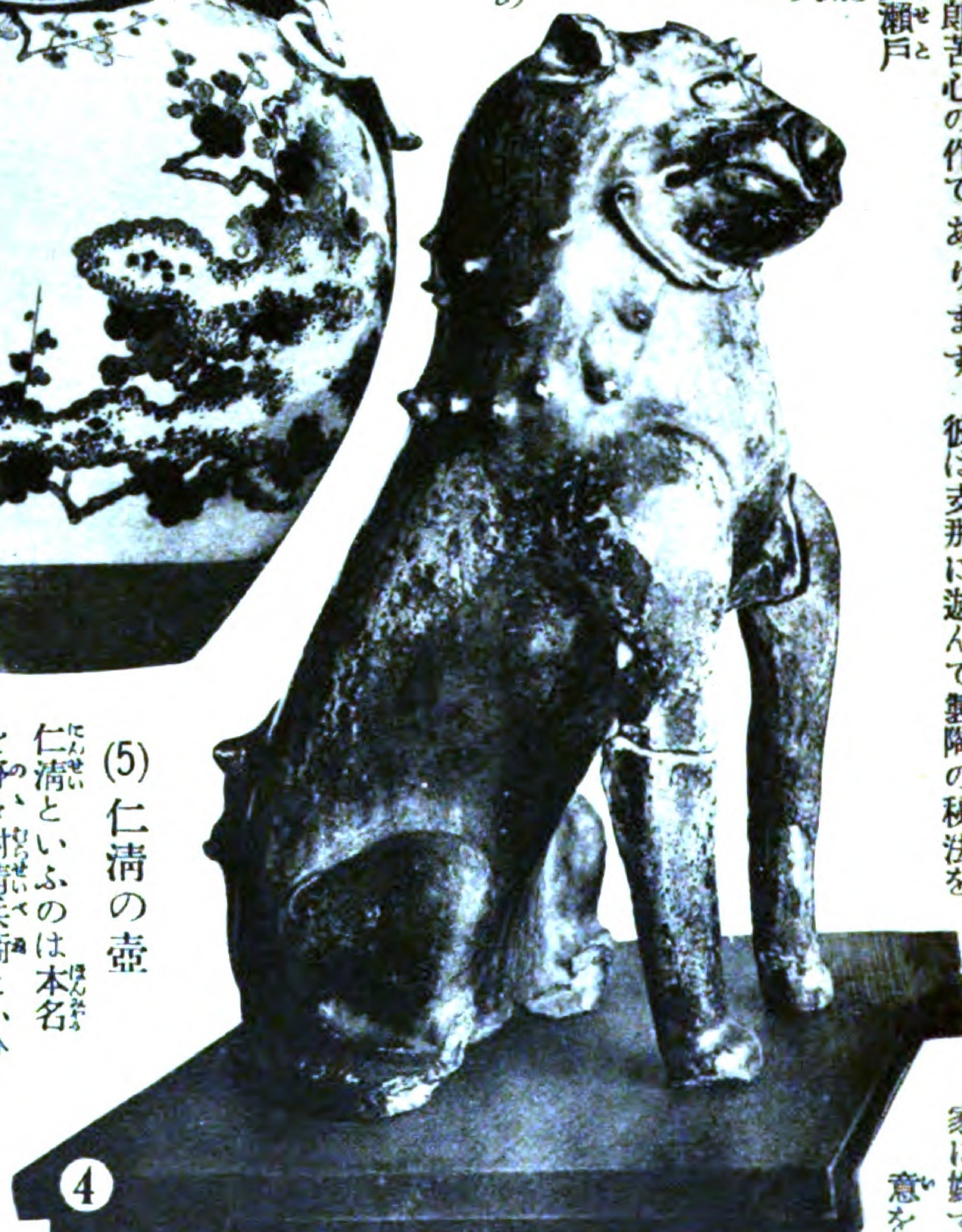
(3)飛雲閣 ―― 豪華壯美な桃山時代の建築は最も多く京都西本願寺に傳承されてゐますが、中でも飛雲閣は其の尤なるものであります。構造極めて複雜でしかも全體の調和といふ事が非常に苦心されてゐます。これは豐太閤の構へた聚樂第の名殘であります。



3

名什

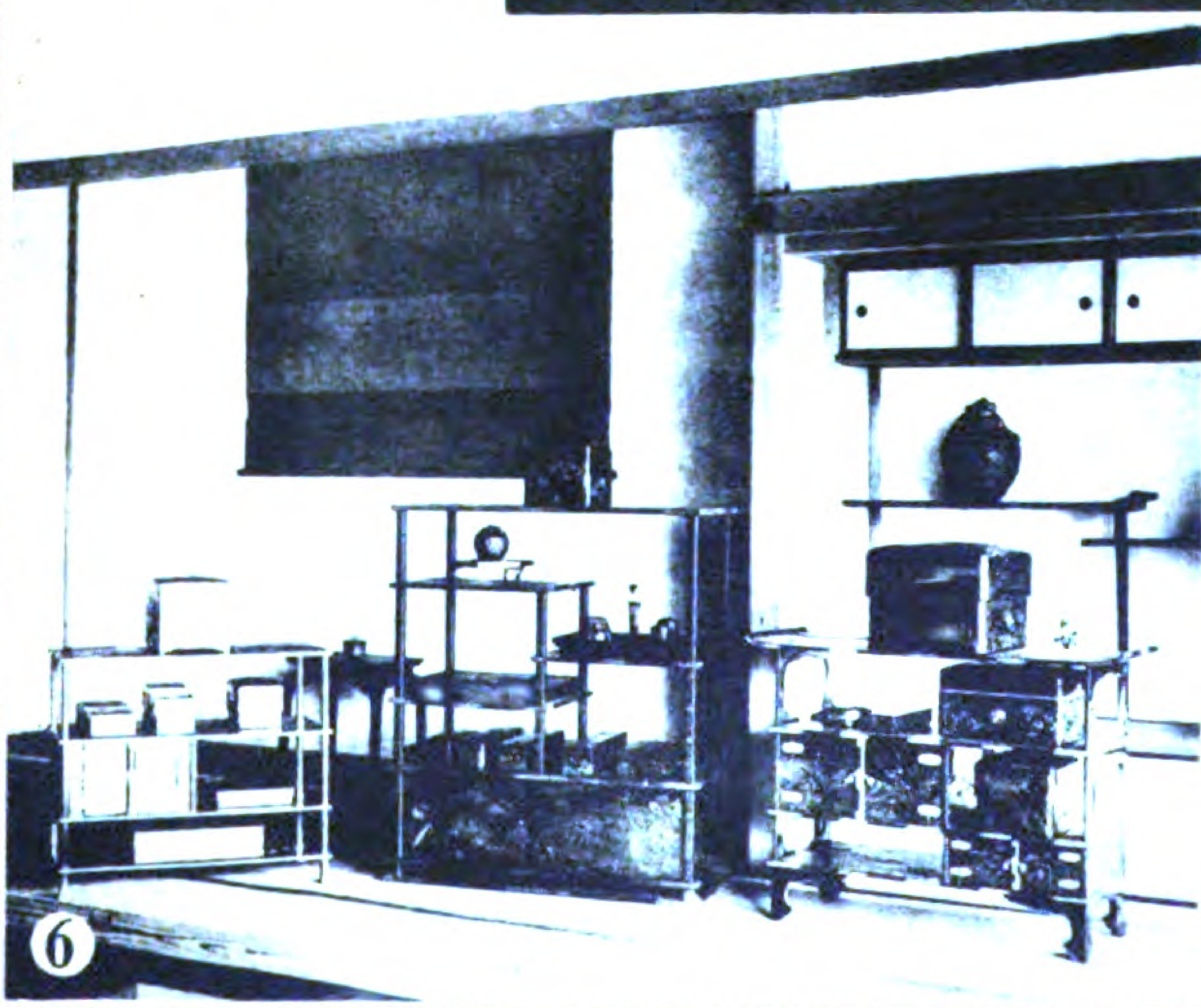




(4) 藤四郎の狛犬 ― 尾張瀬戸の深川神社に國寶となつてゐる陶器の狛犬があります。加藤四郎左衛門こと藤四郎苦心の作であります。彼は支那に遊んで製陶の秘法を探り、後瀬戸に窯を開いた名工で、所謂瀬戸もの、鼻祖であります。

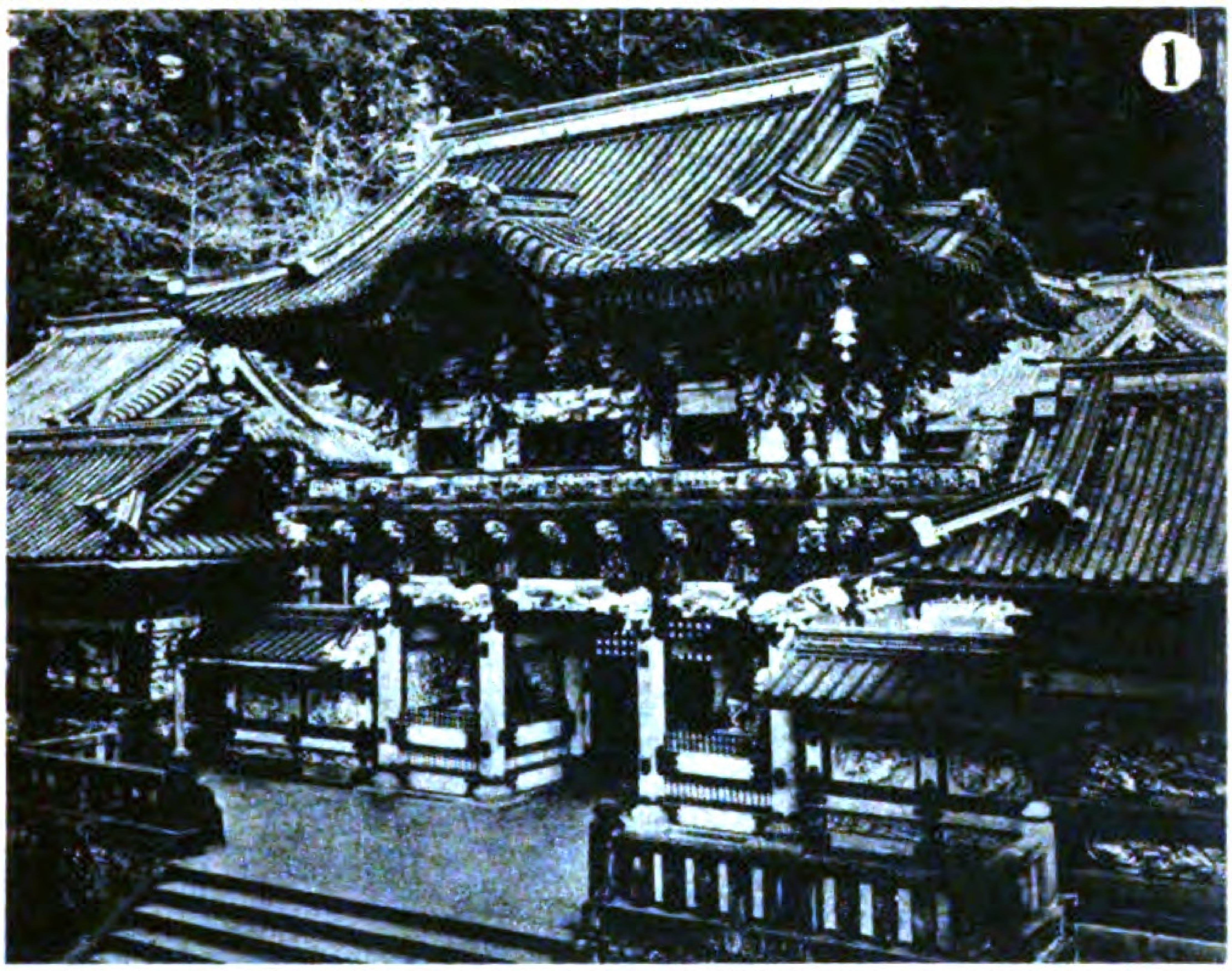
(5) 仁清の壺

仁清といふのは本名を野々村清兵衛といひ京都の名だたる陶工であります。仁和寺法親王から仁の一字を貰つた位です。此の茶壺は帝室博物館の所藏で紅梅色の見事なものであります。



(6) 初音の三棚 ― これは將軍徳川家光の女千代姫が尾州家に嫁する時の調度品で、源氏物語の初音の巻にある歌の意を取つて装飾化した優美の品であります。作者は幸阿彌長重で祖先には蒔繪にかけては由緒ある人達が多く出て居ります。この『初音の三棚』は今徳川義親侯の所藏であります。

名門



1

(1)陽明門 ― 世界に輪奐の美を誇つてゐる陽明門は、日光東照宮の正門とも見るべき重要なる建物であります。建坪は十坪程ですが工費は當時の金で二萬三千四百八十七兩餘、即ち時價に致しますと約百拾餘萬圓といふ莫大な金高となり、坪當り實に十萬圓を費してゐる理であります。起工は寛永十一年秋、竣工は同十三年春、使用大工の總延人員約七十八萬人とは如何に善美を盡し、大仕懸であつたかゞ想像されます。



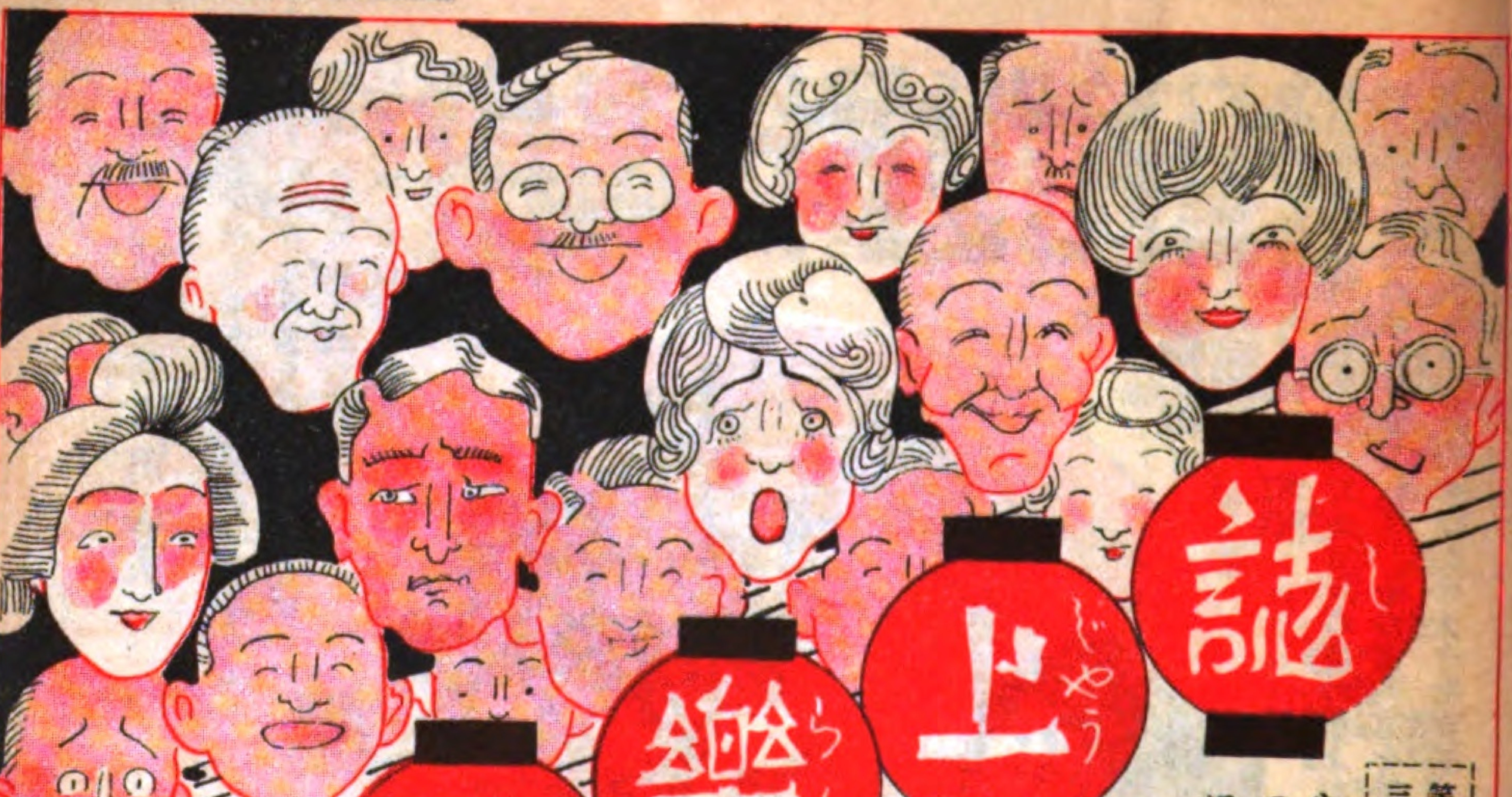
2

(2)唐門 ― 京都西本願寺の唐門は桃山時代の代表的傑作で、陽明門と共に日暮門とも呼ばれ、見事な彫刻や装飾が施してあります。殊に全體の形の美しい點で聞えてゐます。これはもと秀吉の伏見桃山城に在つたものを此處に移して建てたものであります。



3

(3)櫻田門 ― 井伊大老の變で有名な櫻田門は大震災後多少型式が變りましたが江戸城見附の名殘をとゞめてゐます。維新前は此の門を入ると櫻田、千代田などの町町で武家の役宅がありました。



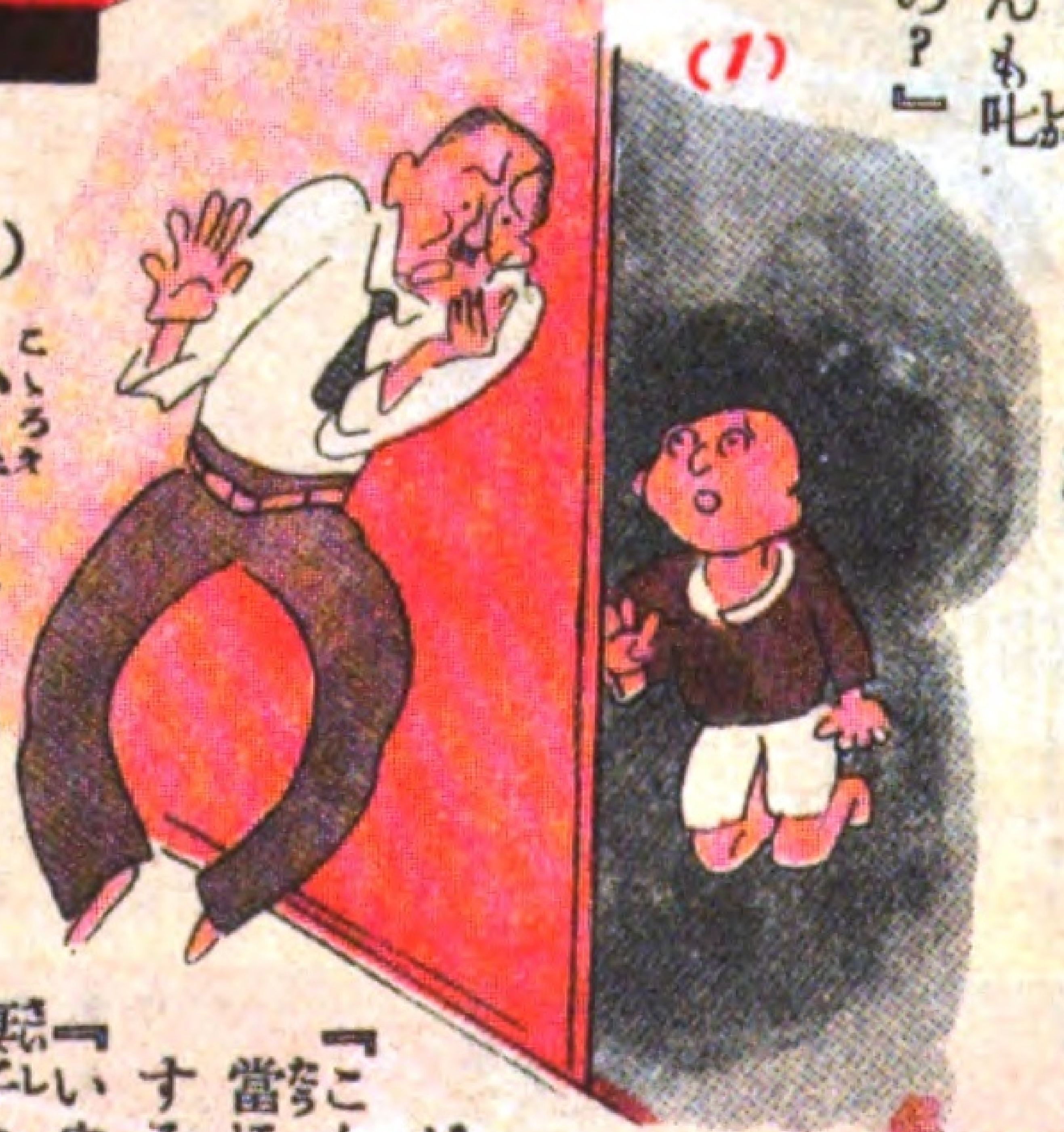
誌上樂天地

笑話三題

(1) お仲間

ある悪戯ッ兒、さん〴〵に惡ふざけをして母親に見つかり、折檻されさうになつたので慌てゝ押入の中に逃げ込んだ。折から父親外から歸り、その話を聞いて子供を押入から摺出さんと忍び足に近寄れば、子供は中から小さい聲で、

『お父さんも叱られたの？』



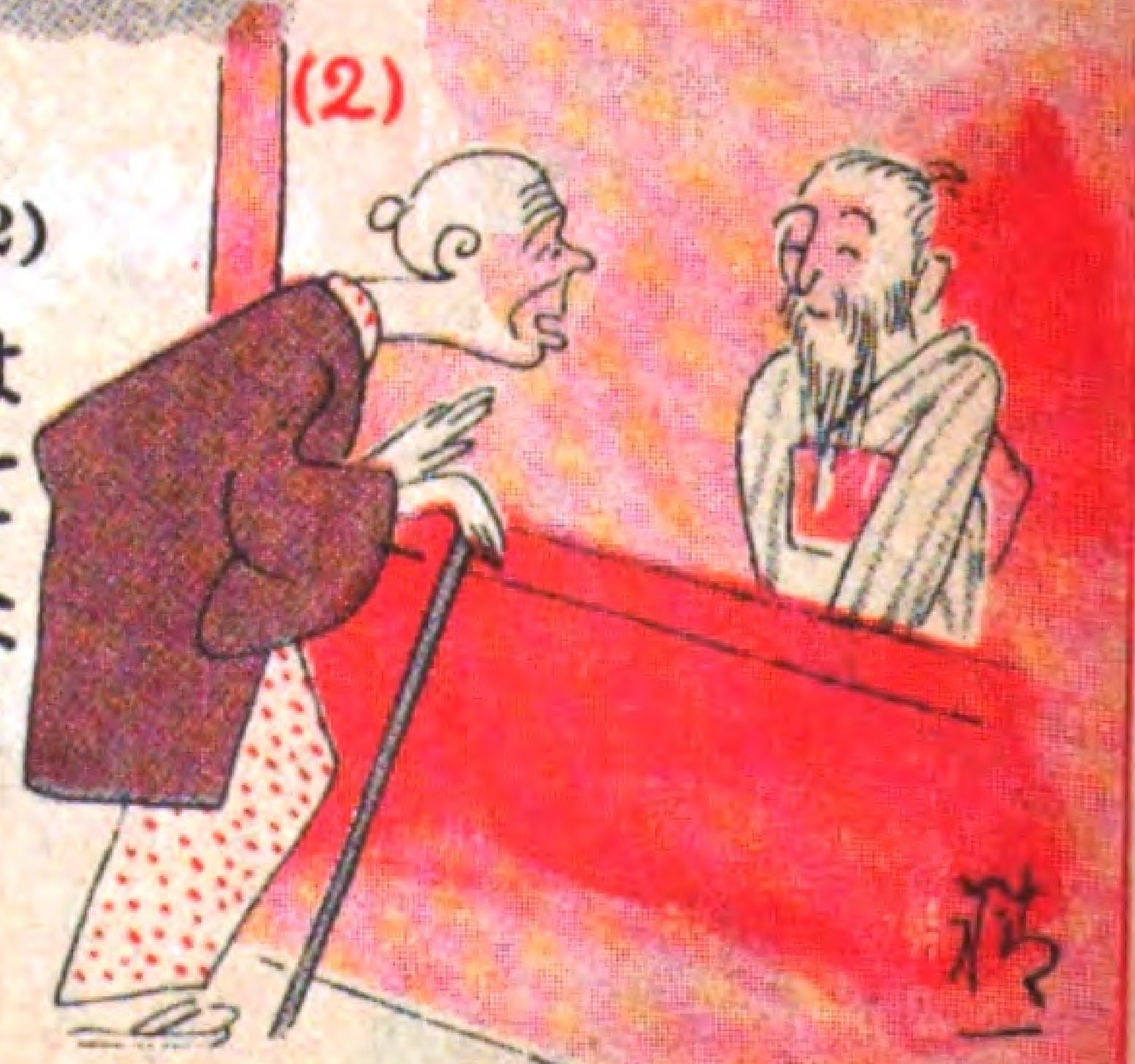
(2) はてな？

髭だらけの女の見世物を見ながら、同情のあるお婆さん。

『こんなところで人に見られて、本當にお前さん辛いだらうねえ？』

すると、その女、太い聲で、

『いや、これもやつぱり妻子のためです。』



(3) 心得たもの

主人、小僧に向つて『あの手紙は二通ともポストへ入れてくれたかい。』

『入れました。しかし外國行の方へ三錢貼つてあつて、內國行の方へ十六錢貼つてありましたよ。』

『そりやしまつた。で、どうした。』

『なに、私がちやんと直しておきました。手紙の宛名を書き換へときました。』



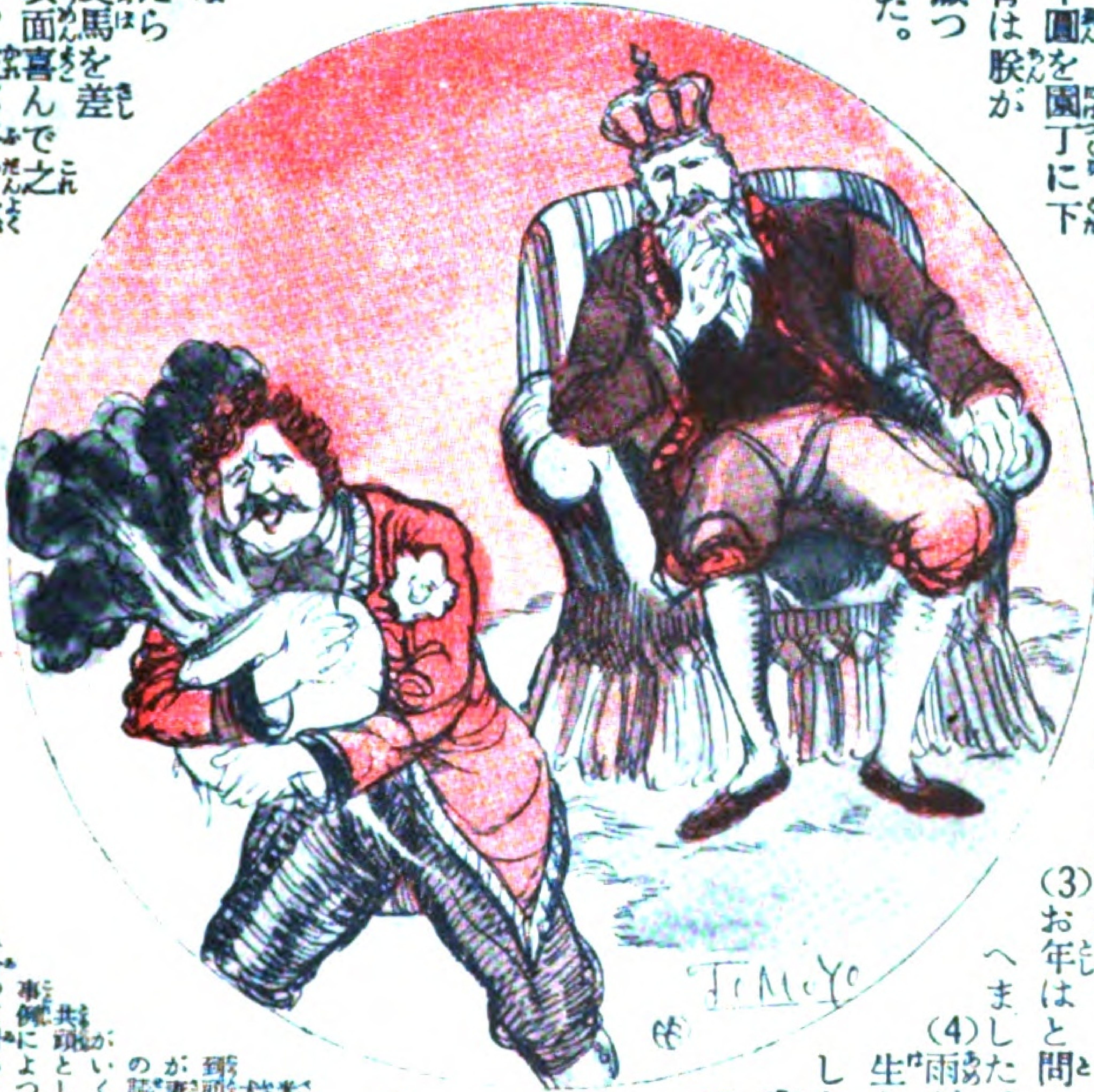
逸話

欲張者に御褒美

佛國王シャール五世の御世に一人の貧しい園丁が大きな蕪菁を獻上した。王樣はその志を褒め金千圓を園丁に下し賜ひ『その蕪菁は朕が沙汰するまで貯藏しておけ』と云はれた。

此の事が宮中一ぱいの評判になり、皆王樣の太腹に舌を捲いた。

その中でも欲の深い一人の宮内官が殊更に感に打たれ、もつとよい獻上物をしたらそれこそ途方もない御褒美に預るだらうと考へ一頭の良馬を差上げた。王樣は表面喜んで之を受納せられたが、彼が平常欲張であるのを憎んで居られた上に此の度の獻上がよくない了見から出た事を見徹されて、その宮内官を呼び『之を褒美に遣す』と下されたのはかの大きな蕪菁。



考へ物

(1)毎朝來るもので上から讀んでも下から讀んでも同じものは？

(2)兄弟あり弟は六歳。仲睦しく暮して居ます。兄の歳は？

(3)お年はと問へば五重の塔と答へました。幾つでせう？

(4)雨が降ると左に木が生え右に目がつきました。何でせう？

(5)榮えた木を切れば虫が出て光つた何虫でせう？

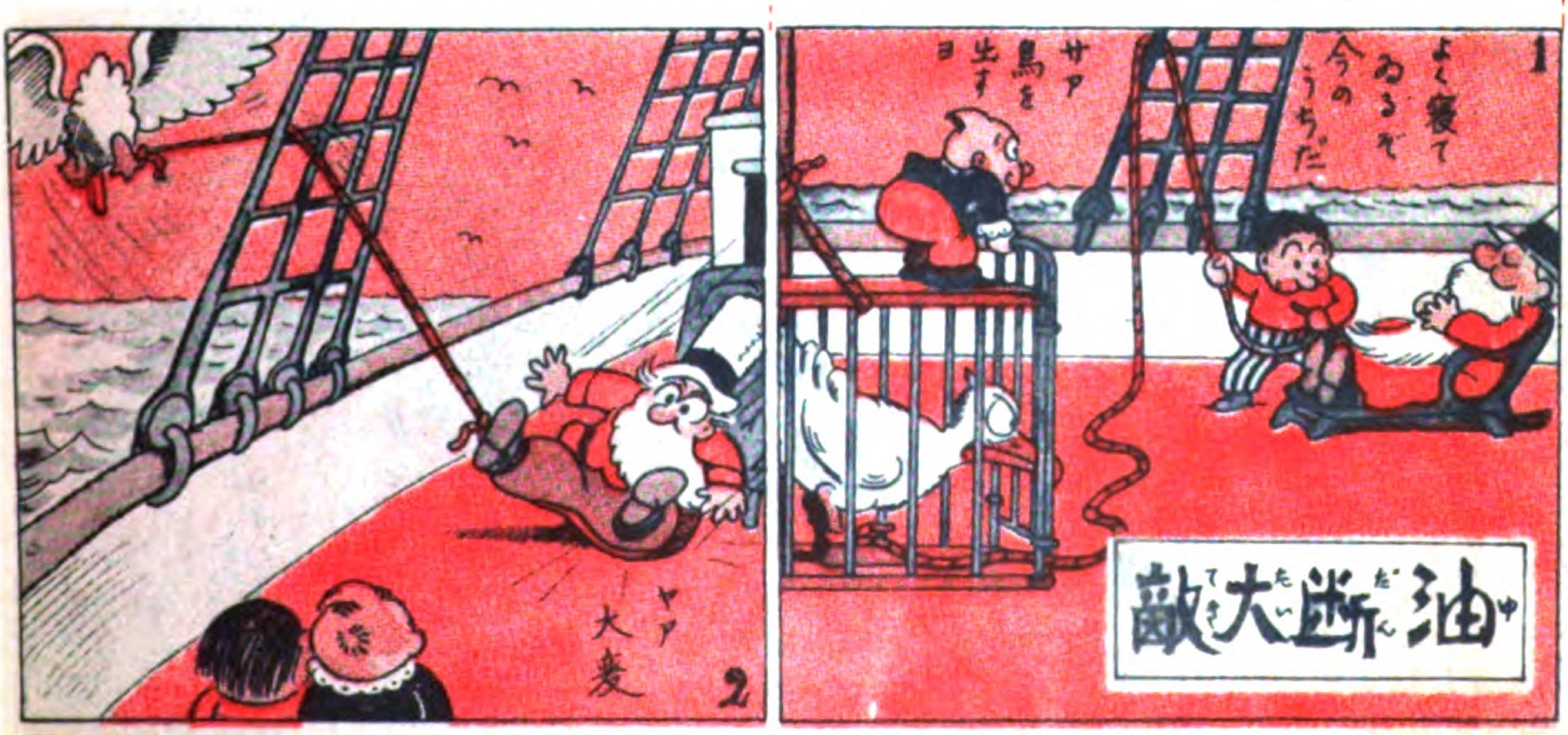
（解答は四八頁）

海外珍聞

子はかすがひ

米國のコーニリアスといふ男犬も喰はない夫婦喧嘩の末到頭妻君と別居した。ところが妻君は裁判所に別居扶助料の請求訴訟を起し、判事さんがいくら和解をすゝめても二人共頭として聞入れない。或る日の事例によつて此の夫婦が法廷でいがみ合つて居ると、そこへ今年四つになる息子がチヨコ〳〵と入つて來て『父ちやん母ちやん早くお出でよ、僕お家へ歸つて御飯がたべたいんだ、よう早くさ』これを聞いた流石の夫婦も思はず可愛い息子の手を左右から握り[illegible]出たく[illegible]。判事さんポカン。

油斷大敵



探偵奇聞

呼妻即犯人

むかし支那の湖州に趙三・周生といふ二人の旅商人があつた。ある日一所に南京に行つて一儲けしようと出發の日を約束した。その日になつて、周生が約束の渡し場に來て見たところ、先に來てゐる筈の趙三がゐない。

それで丁度そこにゐた船頭の張といふ男にたづねたが、船頭は『いや知らないね。』と答へた。『ぢや濟まないが、君ちよつと趙の家に迎ひに行つて來て呉れ。』と言ふので、張はしぶ〱趙の家に行つて、

『お女房さん〱。周生さんが渡し場で趙さんを待つてゐますぜ。』と言つた。すると趙の妻は不審さうに、



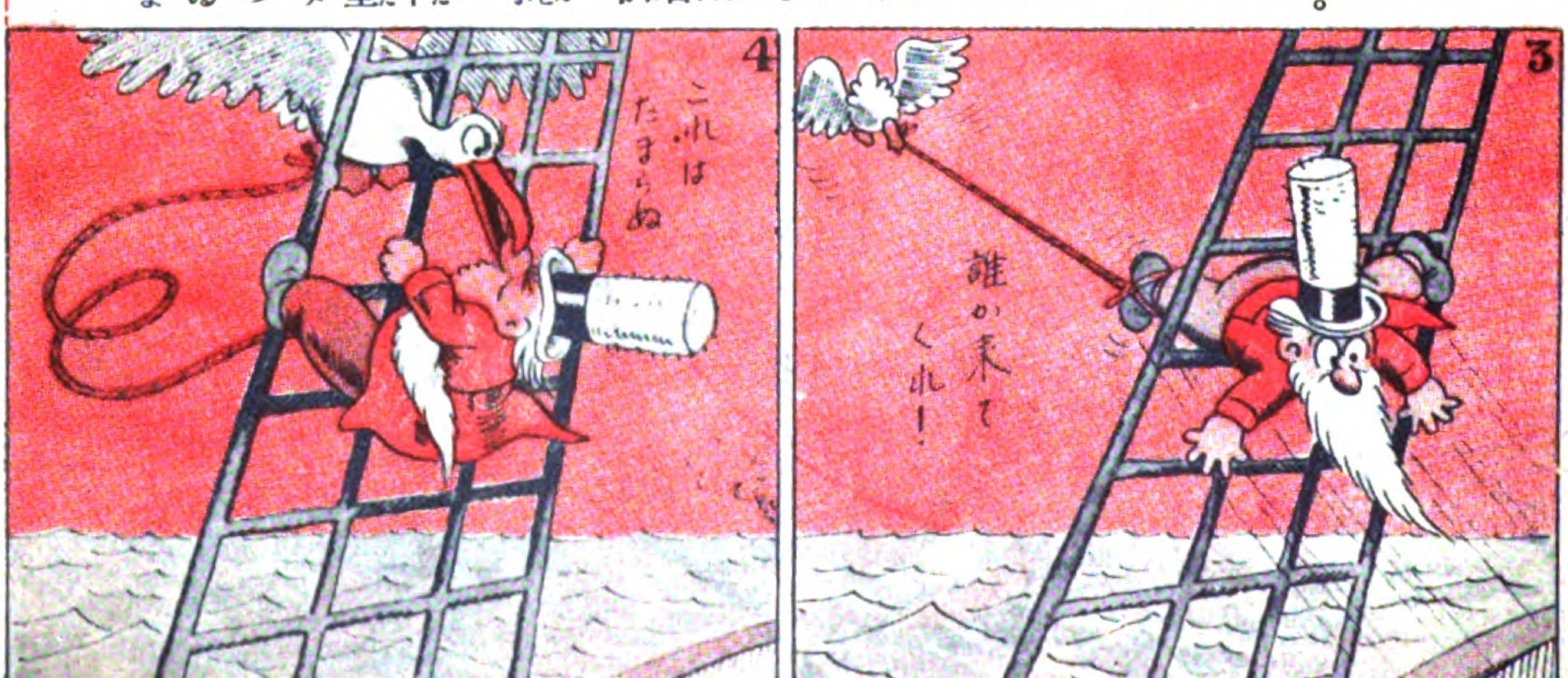
『おや、趙三は最う疾つくに渡し場に出掛けましたよ。居ないとは變ですね。』とおどろき乍ら、一所に渡し場に來て搜したが何所に行つたものか、趙の姿は見えない。

その内に、殺されて金も何も悉かり奪はれた趙の屍が、川の底から發見された。

趙三の妻は泣き乍ら直ぐ役所に訴へた。

いろ〱取調べたが犯人は解らない。それではと言ふので、その頃名裁判官として令名あつた揚判事が都から來て調べる事になつた。

彼は先づ一通り調書を下役人に讀ました。下役人は型の通り事件の運びを詳しく讀み出してゐた。『……張は先づ趙三の家に行き其の妻の名を呼んで周生が待つてゐる事を告げた……』云々、『待て!』こゝまで讀むと、揚判事は嚴そかに言ひ放つた。



『犯人は解つたぞ。船頭の張こそ怪しい。すぐ搦捕へて調べて見よ。』

調べて見ると、果して犯人は船頭の張であつた。彼はその朝早く、趙三が澤山の金を持つて周生を待合はしてゐるのを見て、誰も來ないうち趙三を殺して金を奪つたのだつた。

人々は揚判事の慧眼に怖入りながら『どうして解つたか？』とたづねた。すると揚はニッコリして答へた。『いや、別に六ケしい事ではない。船頭が趙の家に行つて、一番初めから妻君の名を呼んだと言ふことは、夫がその家に居ないと言ふ事を知つてゐるからだ。普通ならば、「趙さん、周さんが待つてゐますぜ」と先づ主人の事を言ふのが當然ではないか。』

新案手品種明し

○消える釦

さあ私の手にボタンが一つ載つてゐます、いゝですか、ところがちよいと手を握つて呪文を唱へて開くと、どうです、なくなりました。



（說明）ゴム紐の一端へつけ、ゴム紐の他端を釦の一端へ洋服の上衣の袖裏へピンでとめておき、手の甲から指の間を通して手のひらへボタンを出して見せます。手を握つて開く拍子に釦を指の間から手の甲へ跳ね返させればいいのです。一寸練習すれば直ぐ出來ます。

○落ちない水

コップに一ぱい水を入れてその上に紙をぴたりとのせ、圖のやうにさかさにしても中の水は少しも落ちぬ、なぜでせう。



（說明）初めコップに水を入れ上に紙をのせると、中央が凹みます。これは大氣の壓力の爲で、空氣のために押される重さは大象三匹の重さで押されるのと同じだと云はれます、倒さにしても水のおちないのもこの壓力のためで、この壓力は水を三丈四尺の高さまで押上げます。

○籠の中に金魚

目無籠に水がたまる、おまけに金魚が御覽の通り浮かんでゐます。



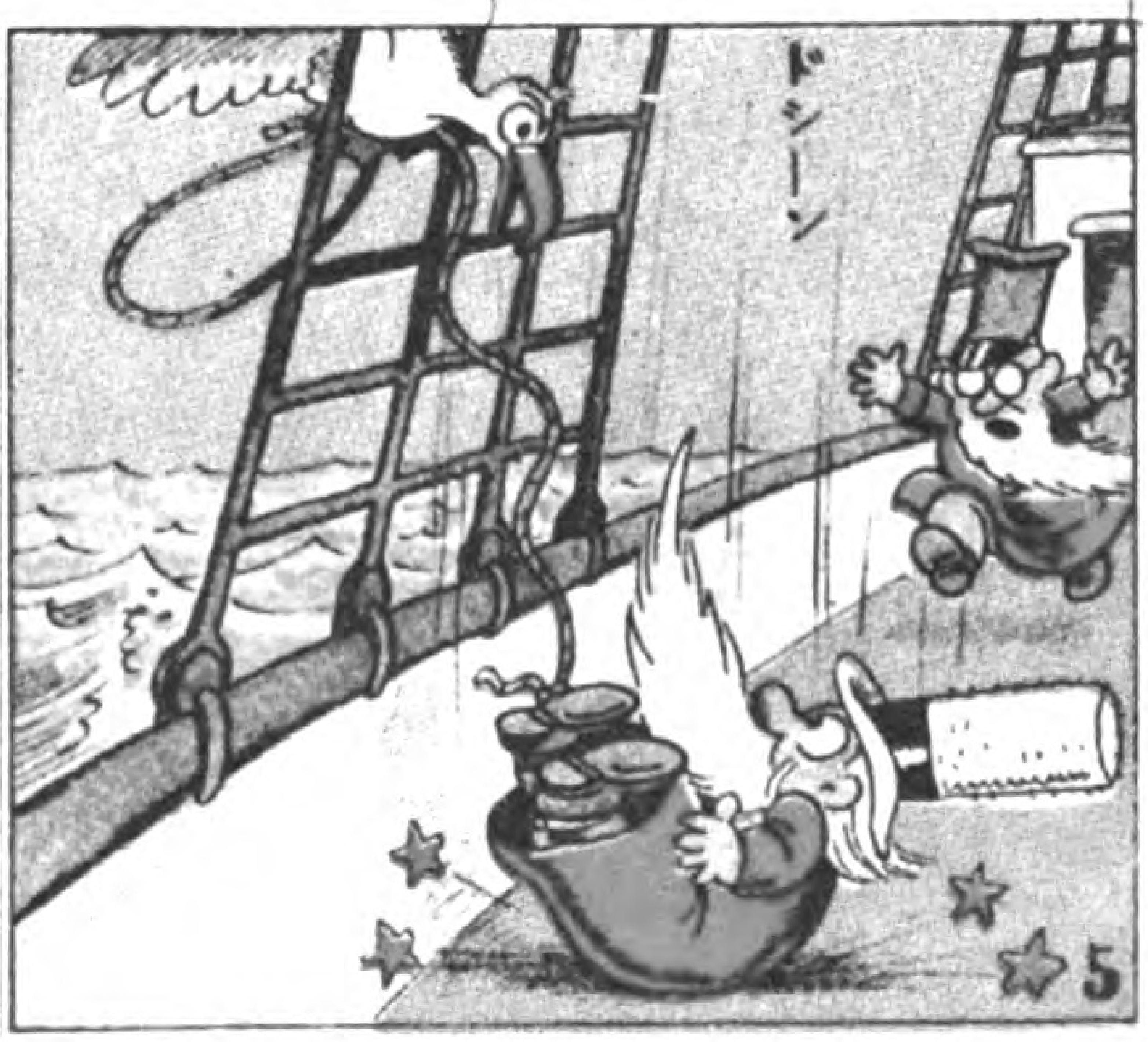
（說明）けれどこんな不思議はわけはない、先づ寒天を少しかためにに煮ませう、その汁を目無籠へ塗ります、しばらくして又塗ります、何度も何度もやりますと、目無籠は寒天でおほはれて、水を入れてももらなくなります。

○不思議のバナ、

バナ、を一寸ばかり皮をむいて瓶の中に差しこみますと獨りでスル〳〵皮がむけて行きます。何故でせう。



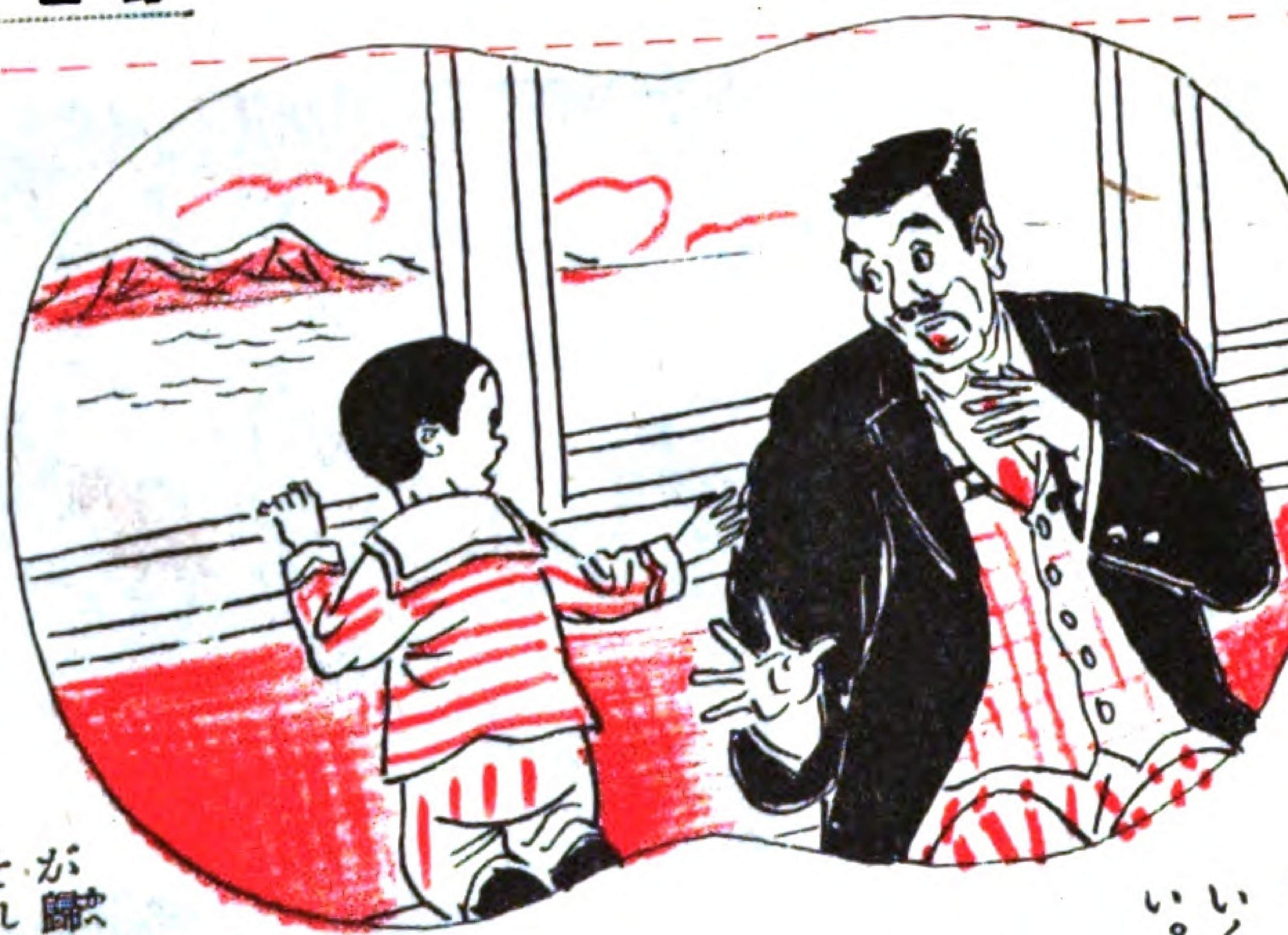
（說明）バナ、の太さと同じ位の口を有する瓶を用意し、石油に浸した紙に火をつけて瓶の中に落しスグにバナ、を差込みますと、中に眞空が出來てゐますので、バナ、の實を引込みます。





車中スケッチ

歸らぬ帽子



汽車の旅、腕白盛りの息子が窓から首を出すので、——

父親『危い。坊や、そんなに首を出すと落ちるよ。』

坊や『うゝん、大丈夫だい。』

いくら止めても肯かない。始末に困つて、背後から子供の帽子を取上げて隱し、

父親『ホラ帽子が落ちちやつた。』

すると子供は、急に火のつくやうに泣き出して泣き止まぬ。又々當惑した父親、今度は口笛を吹くと一緒に隱した帽子を出し、

『もう泣くんぢや無い。父さんが口笛を吹いて呼んだら、ソラ帽子が歸つて來た。』

それから暫く子供は温和しいので、父親他の客と話の花を咲かせて居る間に、突然子供が叫び出した。

——『父ちゃん〱、帽子を窓から投げたよ。又口笛を吹いて頂戴。』

何でせう？

足もなければ脛もない
けれど私は歩けます
口もなければ舌もない
けれど世界の人々が
一番知りたい事柄を
喋舌れる私は何でせう

(答) 柱時計

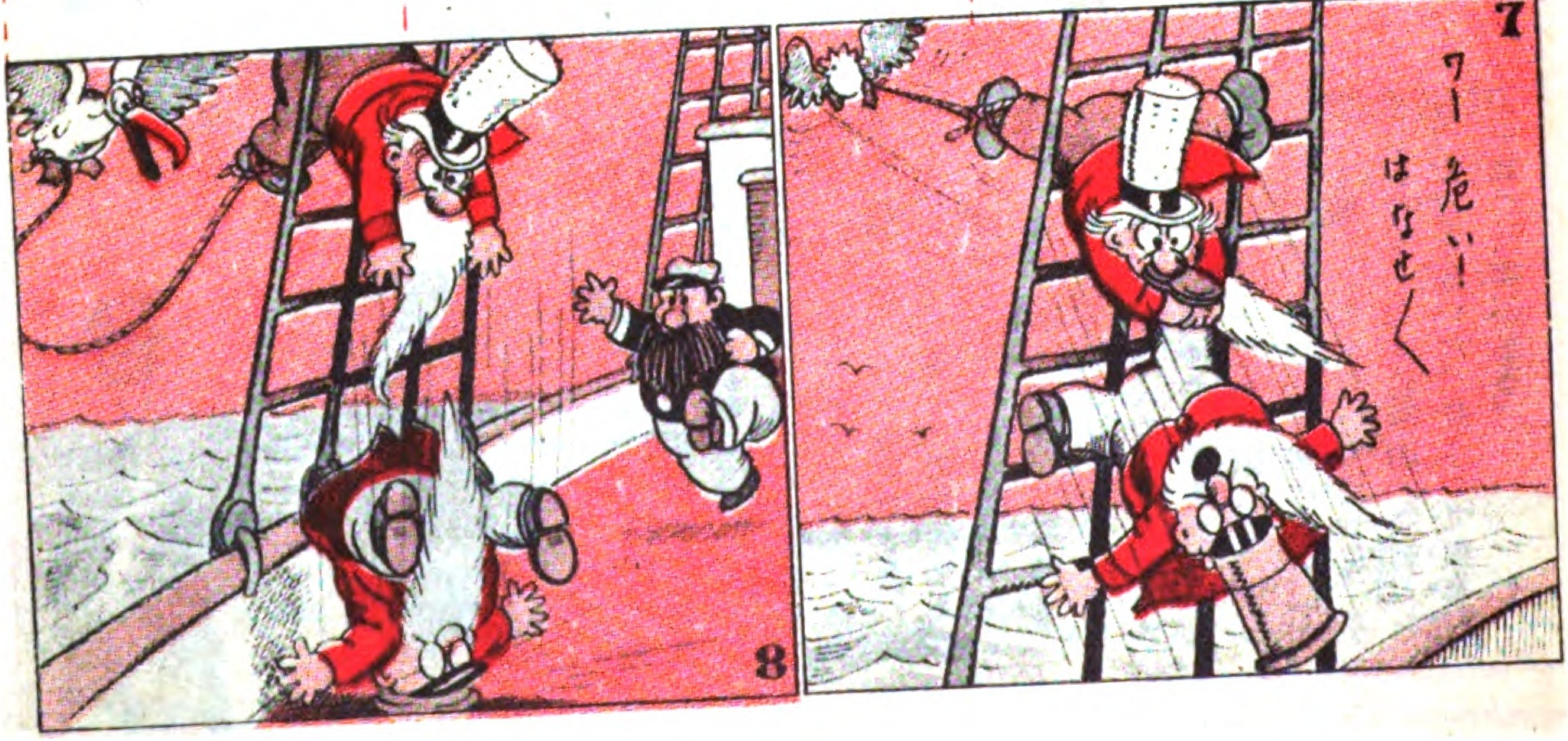
毛を拔いて

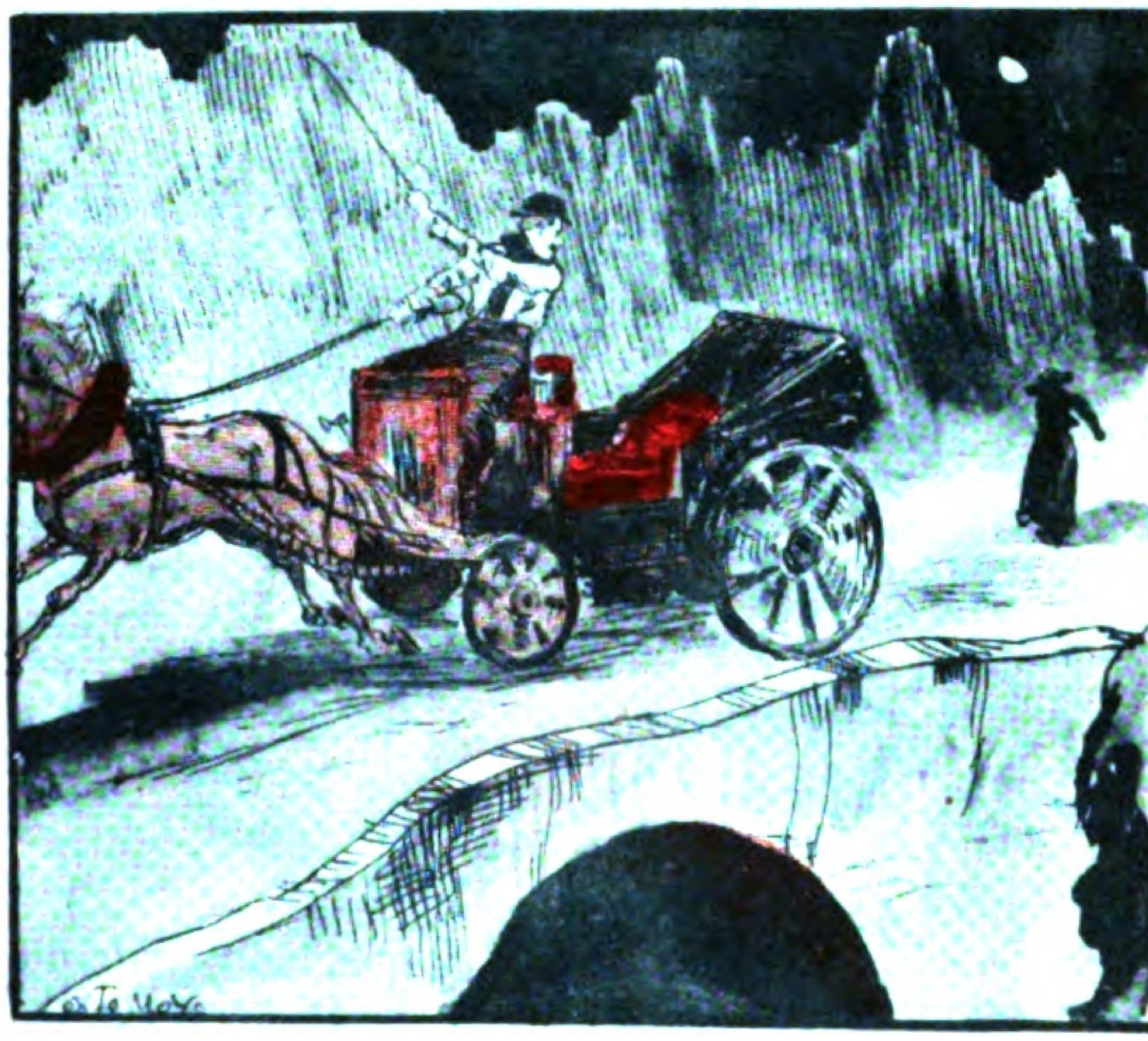
品を變らせて御覽に入れます。

○ハタケ(畑)……旗。
○オバケ(お化)……伯母。
○ケライ(家來)……雷。
○ハ　ケ(刷毛)……齒。
○フ　ケ(頭垢)……麩。
○ハシケ(短艇)……橋。

教訓川柳

孫の手の紅葉に婆の角が折れ
綻びを父にかくして母が縫ひ
家主をやりこめたので雨が漏り
正直は氏にもまさる系圖なり
世話女房亭主の足袋を繼いで履き





頓智物語

强盗置いてきぼり

ある英國の豪農が馬車を驅つて淋しい山路を通つてゐた。町の銀行から抽出して來た許りの大金が彼のポケットにあつた。間もなく一人の婦人が疲れたから乘せて呉れと言つて路で彼に頼んだ。親切な彼は勿論快く承諾して同乘さした。ところがフト彼は大きな帽子を冠つてゐる婦人の腮に剃り立てらしい鬚の跡を見つけた。婦人の姿ではあるが正しく男だ。『强盗だな婦人に化けて馬車に乘りこみ、俺から金を奪ふつもりだな。』と氣附いた瞬間、彼はそつとハンケチに紙屑を包んで路に落した。そして言つた。『アッ、困つた。御婦人、怖入りますがあれを拾つて下さいませんか、大金が包んであるんです。此の馬は暴れ馬で手綱が放せないんです。』もちろん婦人――實は强盗――は馬車から下りて、ハンケチ包みを拾はうとした。その際に豪農は馬車を飛ばして逃去つた。强盗置いてきぼりの術。

小話

彼女の理論

『妾議論好きな夫は大嫌ひですわ。妾、辯護士と結婚しようと思つて居ますの。』

『何うして辯護士はとても議論好きぢやありませんか。』

『でも、無賃ではしませんわ。』



剃刀を握つた幼兒

友人の家の三歳になる兒が、ある時鏡臺の中から、研ぎ立ての剃刀を出して、刄の上からギッシリ握つて了つた。ギッシリと言つても別に力を入れて握つたのではなく、只無意識に握つたまでで幸ひ掌は斬れなかつたが、若しかして力を入れたり手を動かしたりしては水も堪らず斬れて了ふことは解切つた事である。無理に取上げようとして拒まれた時などは却つて危險なので如何する事もならず皆蒼くなつた。此の時僕は萬ケ一と言ふ氣で、手早く僕の掌に墨でダルマを描き、『坊や、ホラ見て御らん、小父さんの手にダルマさんが居るよ、坊やのも居るから、逃げないやうにソウッと開いて御らん、ソウッとしないと逃げるよ。』と言つて握つた手を開いて見せた。子供は何の氣もなく至極靜かに剃刀を握つた手を開いた。此うして無事剃刀を取つた事がある。



名僧逸話

歌よむ女

浄土宗近代の高僧行誡上人が、横濱のある篤信家のところへ招かれて行つたことがあつた、そのとき同じ席に歌を作る婦人がゐて、場所柄もわきまへず、さも自分は歌の達人であるといはぬばかりに自分の自慢話などを滔々と述べ立て、高慢の風が鼻さきにチラついてゐた。その有様はまことに見苦しい醜體であつた。しかも、その婦人はお調子に乗つて頻りに上人に一首の歌を懇望するので上人もさらばといふので、前に差出された短冊に、

歌をよむ女房などは持たぬもの
亭主を尻に敷島の道

といふ歌をすらすらと書いて婦人に與へた。さすがの高慢チキな婦人もこれを見て身體ぢゆう冷汗を流したといふことである。



滑稽問答

(1) 池の傍に制札あり、曰く……
（答）勝手道具の名一つ、鳥の名一つ

(2) 手拭下げてぶら〳〵と……
（答）外國の都會の名一つ

〔解答〕(1) 釣る可からず（釣瓶・鳥） (2) 入浴（ニューヨーク）

小話 新聞

父『毎朝新聞を讀むと世の中が明るくなる』
三吉『さうさ、夕刊を見ると暗くなるし』

〔〕碁石拾ひ

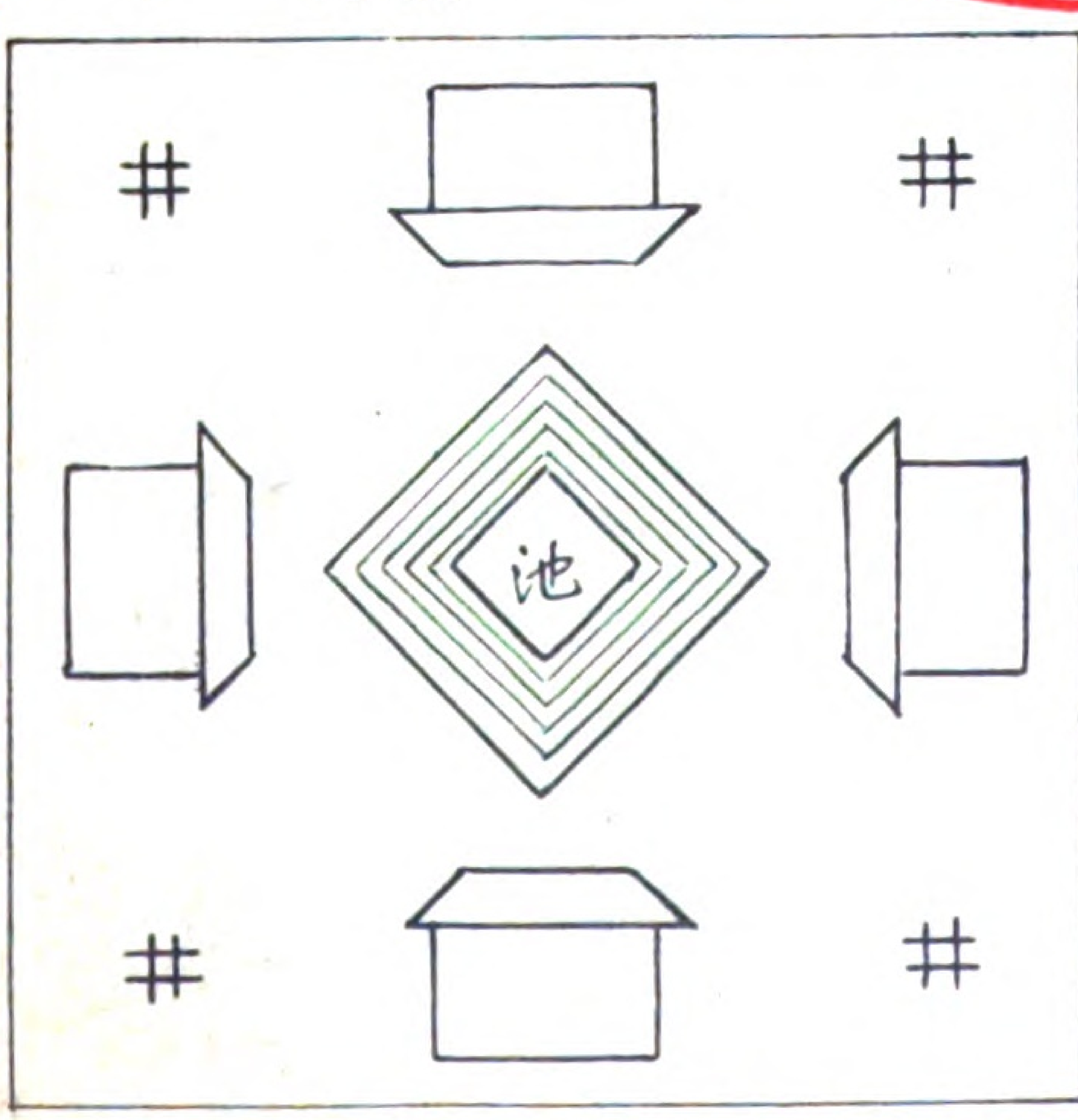
左圖の様に碁石が並べてあります。何處から拾ひ始めてもよいから同じ道を二度通らないで全部石を拾うて御覧なさい。

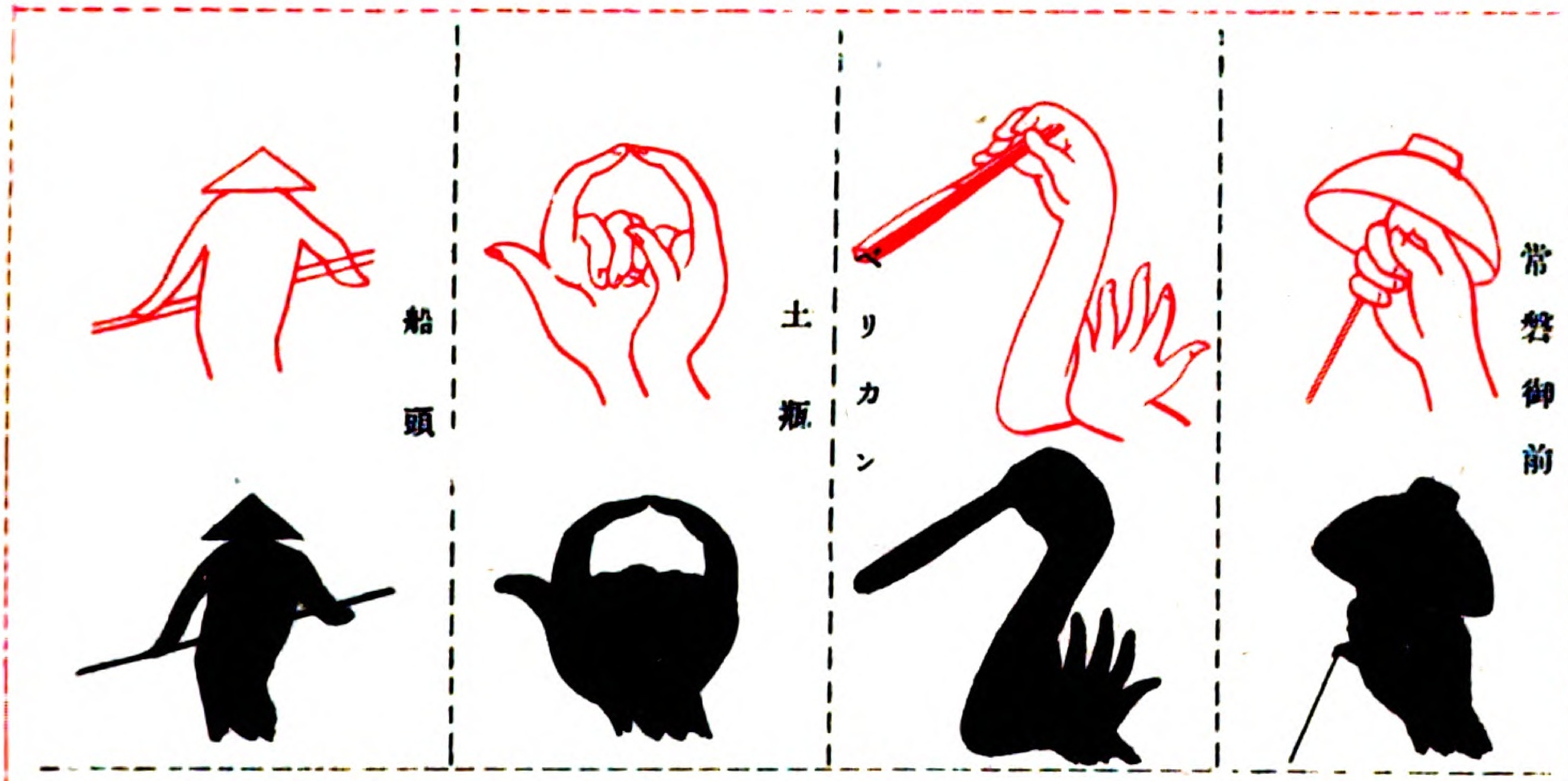


〔〕土地の分け方

左圖の様な土地があります。四人の者が面積も同じく池も等分に使へる様に分けて家を建てました。その分け方は？

—（以上解答四八頁）—





探偵掌篇

規則違犯



英京倫敦の事件。明敏な頭腦を持つ青年科學者ウイリイはいつも多額の負債に苦められて居た。その結果或る夜債權者である筋向うの酒場の主人を、無音銃で自宅の二階から射殺し兇器を早速高度の電熱器で熔解して了つた。

『お早う。ウイリイさん、之が拘引状です。』翌朝早々の警官にウイリイは驚いた。

『えッ。拘引状ですつて。だが、だがどうしてこんなにすぐに酒場の主人を殺つつけた事が判つたんだらう?』

『酒場の主人を殺した? 君が! ホ、ウ實は昨夜十時過ぎに君が酒を呑んだのが規則違反でやつて來たのだがね……』

青年科學者はアッと參つて了つた。

○繪さがし――同じ動物が三四居ます。



一筆描き

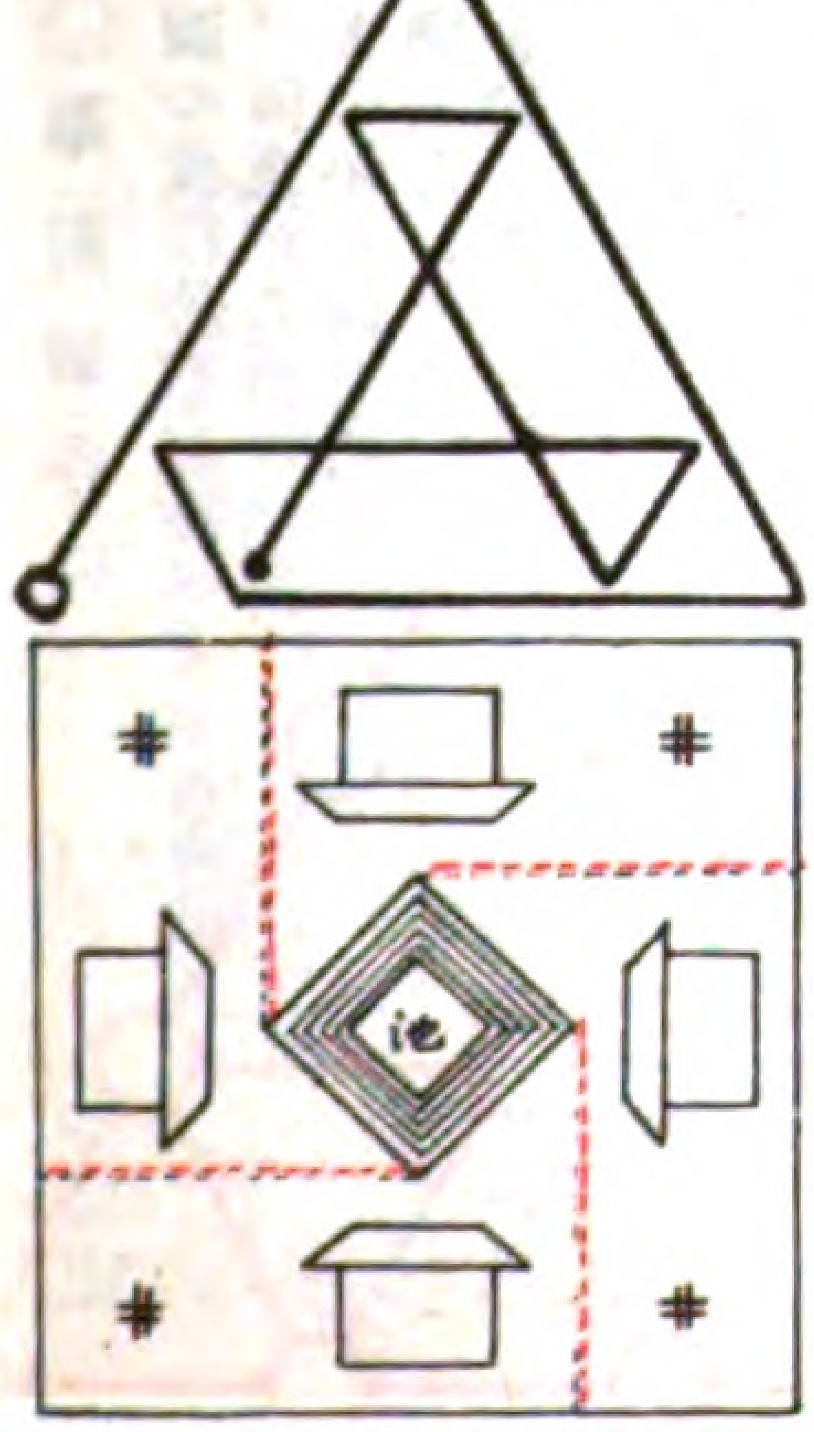
（眼は後から入れる）



解答

（四二頁の分）(1)新聞紙。(2)十二歳（なかむつまし）。(3)六十（五十の十）。(4)霜。(5)螢。

（四七頁の分）左圖の通り。





石榴の光

—十一月の頌—

田村彩天畫
小島政二郎題

この季節の美しさを味はうと思つたら、朝起をしなければ駄目だ。空氣は洗はれたやうに綺麗で、鑛物質的な冷たさが、稍寒さを刺戟する程度に爽かに快い。

朝日も、春や夏のやうに熟してゐず、眞冬のやうに酸くもない。新鮮で、キリリとしてゐて、しかも氣永に待てば温々と親切だ。

お聞き、あの梢の頰白の聲も、飽くまで澄み切つてゐて而も露けさを含んでゐる。

君は、あの石榴の結晶的な美しさを、かうした大氣に磨き出された色艶だとは思はないか。

彼の動きと其の信念

後藤靜香

○

信ずる。腹の中に出來上る。

此の時、もう其の仕事は半分以上出來てゐる。彼は大膽に着手する。他の人に不安と見えても信ずるものには先が見えてゐる。

○

完全を期しない。自分のした跡を見て不滿足な事が多い。併し、完全を期するならば、いつが來ても出來さうには思へない。彼は、行はない完全よりも、行ふ不完全を優れりと信ずる。

○

完全な理想に照して、人の仕事を批評するならば、あらは幾らでもあらう。併し、彼は其の不完全を知りながら『爲さゞるに優る』と信じてゐる。

○

勢よく走る自動車には、大抵なものが道をあける。まつしぐらに走つてゐると災難の方が遠慮するものらしい。

○

暑いとか寒いとかいふことも、世間並のおあいそには云ふが、實際のところ餘り感じない。感じて居るのかも知れぬが、それ以上仕事の中に引きつけられる。

○

車輪は抵抗によつて轉げる。

苦勞があるから仕事が出來る。

○

生きた仕事を通して見せつけた眞理ほど權威のあるものは無い。

○

『精力の續く秘訣がありますか。』
『ありますとも。』
『御傳授を願ひます。』
『第一、よく嚙んで少く食べなさい。』
『第二は』『同じ事です。』
『第三は』『同じ事です。』

○

腹の中で火が燃える。
其の力で仕事をする。
ストーブの代用にもするらしい。

○

燃える火が黴菌を燒き盡す。
此の故に病にかゝらず。
但し此の原理は獨逸の醫書に書いて無し。

○

自分には此の仕事が最も適する。其の方法も最善である。斯く信ずるとき、熱中しない譯に行かぬ。

○

彼は斯の如く働く事が忠である。それが孝である。それが妻を愛し子を愛する最善の道である。彼の徹底した利己主義は、本當の意味の利他主義に一致する。

○

最上最善と信ずる唯一の道
自分に與へられた唯一の道
どこかに死といふ溝がある。
そこで、ちよいと足を擧げて飛び渡る。
この道はどこまでも續く。
極樂淨土の大通りに通ずる。

○

歌舞伎でも帝劇でも、彌次喜多は東海道を歩いた姿で現はれる。
自分は、どこへ行つても自分を完全に發揮するが故に、無くてならぬ人間である。

噫！臺灣鎭護の神

北白川宮能久親王殿下を偲び奉りて

樞密顧問官 子爵　石黒忠悳

臺灣が我が新領土となつてから、早くも三十五年を經過した。皇化全島に遍く、文運日に日に進んで、事によつては本土よりも發達して居ると云はるゝ位、今や植民地としては、世界各國の範となつて居る。さり乍ら其の此處に至る迄には幾多の尊い犧牲が拂はれて居るので、就中近衛師團長北白川宮能久親王殿下が、金枝玉葉の御身をもつて、瘴烟蠻雨の間に、薨去遊ばされたのは、國民の永く記せねばならぬ事である。忠悳は當時野戰衛生長官の職を汚して居たので、近衛師團軍醫部長木村達、同師團附松本三郎の報告をうけて、何とも申樣のない哀悼の念に打たれた痛ましい記憶を有つて居る。

殿下が、近衛師團を御統率になつて、旅順を御出發になつたのは、明治二十八年五月二十二日で、同じく三十一日には臺灣の澳底灣に御上陸になつた。

『此度の日清戰役は、日本にとつては、實に大事な瀬戸際である』殿下は、已に上陸前、隨員の恩地轍にさう云ふ御言葉を御洩になつた。まことに恐多い事であるが、非常な御決心をもつて、臺灣の蠻土に第一歩を進ませられた。さて御上陸にはなつたものゝ、元より宿舍があるわけではない、海岸の砂地をえらび、草木を薙ぎはらつて、申譯ばかりの幕營を張り、怪しげな腰掛を見つけて來て、そこへ御据ゑ申した丈、毛布の用意すらもなかつた。かてゝ上陸早々なので、其日は糧食の分配がおくれて、午后三時になつても、午食がわたらなかつた。殿下は、降出した雨の中を御厭ひもなく、各幕營を御巡視になつて、士卒を激勵遊ばされたが、定めし御空腹にわたらせらるゝであらうと一同御心配申上げて居た。

すると、何人かしらぬが、畑から甘藷を掘つて來た。

『これは、結構だ、すぐさま殿下に差上げよう』

隨員の者が、これを砂中にうづめ、古木を集めて來て、蒸燒にした。當座の腰ふさげ、泥のついたまゝの燒芋を殿下におすすめすると、御自から皮をむいて召上つた。

『これは珍味だ、もし武運目出たく凱旋するやうな事になつたら、年々臺灣記念會を開いて、煨芋を喰べることに致したら何うだらうか』から仰せられたので、御側に居た軍醫部長木村達が、畏つて此の旨を手帳に記入した。

夜になつても、雨は歇まなかつた。それに名物の蚊が、襲來して、まんじりとも出來なかつた。殿下は天幕の中で、一夜を過させ給うたが、翌六月一日朝、御出發に先立つて、天幕前で從軍寫眞師に御撮影を御許し遊ばされた。これが殿下最後の御寫眞とならうとは、何人も豫期しなかつた事である。

此日は三日間の携帶食糧を用意して前進をつゞけ、殿下は頂雙溪の一民家に御一泊となつた。翌日は三貂嶺の踏破である。此處は、登りが二里、下りが三里半、それも險しい坂道で、先へ進んでゆく者の足が、後からつゞく者の胸を打つ位な急勾配である。殿下は、草鞋を穿かせられ、青竹の杖を御持になつて、一步一步づつ御登攀遊ばされた。何せ、土匪の狙擊の的となる危險があるので、目立たぬやうに勳章を御取除になつて、只軍服にキロットを召された丈の御姿である。



東京竹橋外、北白川宮能久王殿下の御銅像

『あれ、あれ、宮樣があの通りだ、勿體ないことだぞ』

落伍して、ぐつたりとなつて倒れて居る兵卒が殿下の御徒步のさまを見上げ奉つてムツクリと起上る。

『何糞ツ、こんなことでは殿下に申譯がない』

俄かに勇氣をもりかへして、勢だつてくる。その中に、どうと車軸を流すやうな雨になつたかと思ふと、又急に晴れ上つて、今度は燒きつけるやうな烈日が照りつける。殿下は、その雨に叩かれ、その日にさらされて、玉步を御運びになる御心勞は、いかばかりであつたらうか、皇國の爲とは申せ、御いたましき限であつた。第二聯隊坂井重季大佐の如きは、殿下の御前に立つて、草鞋が け泥まみれの御姿を拜すると、餘のことに胸がいつぱいになつた。

『殿下！』これ丈云つて、おじぎをした儘何とも口が利けない、只もう默つてしまつて、暗涙に咽んでゐたと聞いて居る。

◎

行く〳〵土匪を掃蕩して、午后には瑞芳に軍をすゝめ、少時御休息遊ばされたが、その間にも親しく負傷兵を御慰問にな

つた。

『しッかり手當をしてやつて呉れ』

軍醫に御言葉があつたのを拜承して、負傷者は我を忘れて、後から掌を合せて殿下の御姿を拜し奉つた。

午后八時頃金沙總局といふむさくるしい一室に入らせられたが、夜になつても、相かはらず糧食が行きわたらない。隨員の恩地轍が、ビスケット四十個ばかりと、懷中ソップを持つてゐたので、これを湯にひたして差上げた。

『非常においしかつた、恩地、おほきに』

恐多いといはうか、勿體ないと云はうか、やんごとなき御方が、僅かのビスケットを召上つて、隨員に御禮の言葉を頂くといふのは、あり得べきことだらうかと、恩地は人しれず泣き入つた。でも、殿下は至つて御元氣にわたらせられた。

『明日は、鷄籠でシャンパンの祝盃をあげる事が出來よう』

と、御機嫌よく、粗末な寢臺に御寢になつたが、そのまゝ雷のやうな御鼾聲をあげさせられて、ぐつすりと御休みになつた。此の夜は土匪の夜襲があるだらうと、一軍、聲をのんで警戒して居たのだが、殿下は、泰然として平生のやうに御熟睡になつた大勇の御態度は、流石に上野の戰爭此方、御艱難の中に御身心を鍛へあげさせ給うたものと拜察される。

翌日は鷄籠攻撃の火蓋が切つて放された。瑞芳から一里半も進んだ處で、前衛戰が始まつたらしく、敵彈が唸を生じて、殿下の御頭上をかすめて飛んだが、小ゆるぎも遊ばされなかつた。

戰爭中、晝時になつて、御食事を差上げようと、辨當を開いた。すると、百度近い暑さの爲、腐敗して了つた。よつて又々ビスケットを差上げようとしたが、湯水が一滴もない。管理部長が漸く湯を沸して、汚ないバケツに入れて持つて來た。

『殿下、御沸を持つて參りました』と申上げると、バケツを御覽ぜられて、

『小便でもしたものではないか』

笑ひ乍らさう仰せられ乍ら、此の汚ないバケツに入れた湯を召上つた。

その間も、砲聲は、ひッきりなしに聞えてくる。

辨當がくさる位なので、その日は、まるで焜爐の中に居るやうな暑さであつた。隨員が見兼ねて傘を殿下におすゝめした。

『どうも、折角だが此激戰の最中、照降傘も氣の利かぬものだな』

冗談まじりに仰在つて、御用ゐにならなかつた。で、相かはらず、兵士同樣烈日の下に御身をさらし給うたが、其中に又しても、空模樣がかはつて、細引を束ねて降るやうな大雨となつた。

『すは、雨だ』

今度こそは、殿下に御傘をさしあげねばならぬと、隨員早速背後から傘をさしかけて進ぜた處、顏色をおかへになつて、

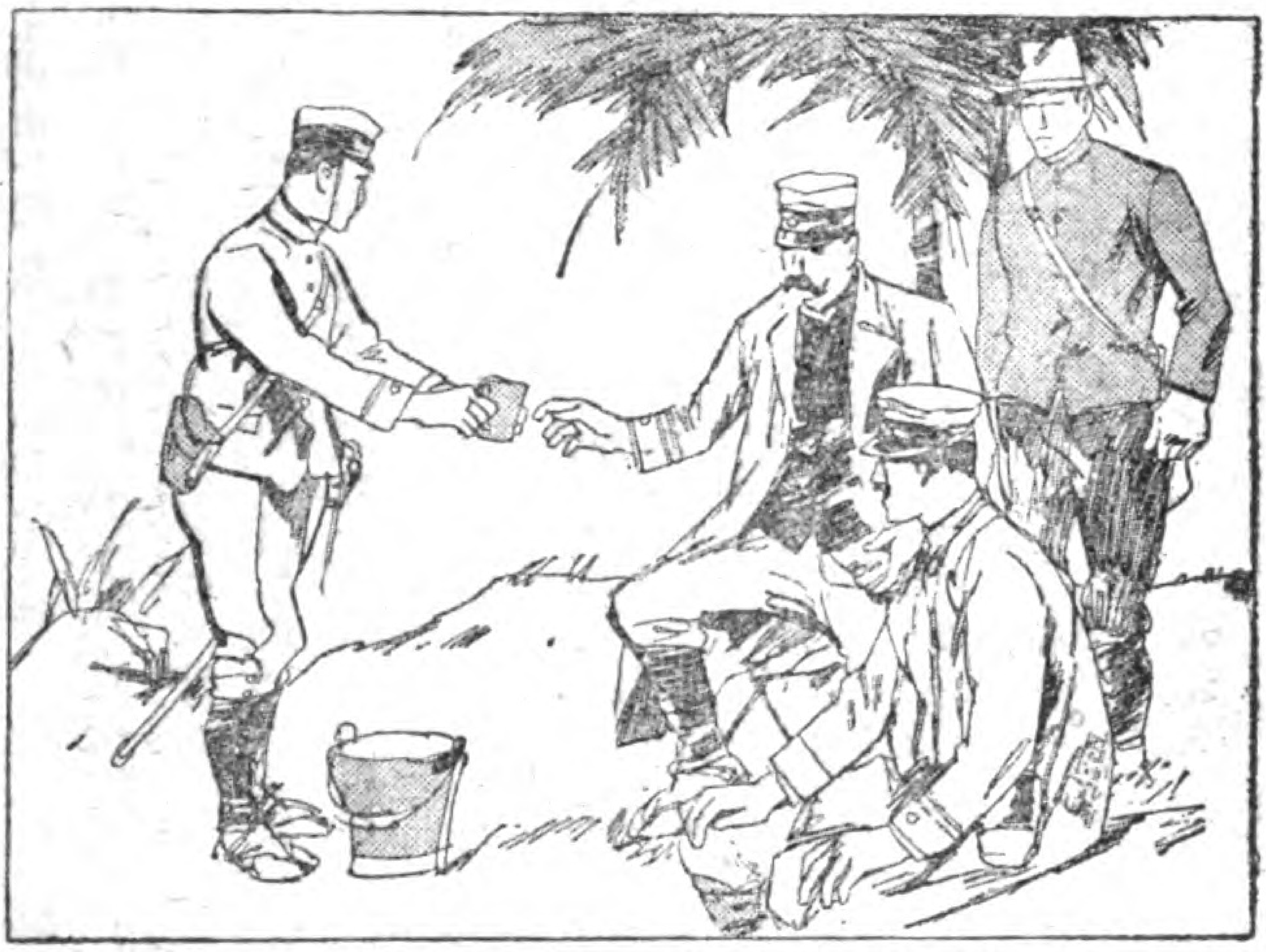
『みなの者が、ずぶ濡れになつて居るのに、自分ばかり傘をさすことはならぬ、止めよ』

屹となつて、雨中に立たれたまゝで、戰況を御覽ぜられて居

た。先には日干し、今度はずぶ濡れ、これではいかに頑健な體軀の持主でも、堪るものではない。しかし殿下は、飽くまでも兵士と共に艱難を共になさらうといふ有難い思召があつたので、御耐忍遊ばされたのである。

軍はすゝんで、基隆を陥いれ、六月十日には臺北を完全に平定遊ばされた。その間、純白の御軍服は元より御下衣に至る迄汗と垢とに汚れて、手もつけられぬ有様、だが御進軍の途中なので、何うすることも出來ない。臺北へついて早速御洗濯申上げようとした處、總督府から使者がたつて特に殿下の御召服を御雇の洗濯人にわたさうとした。

『いや、それには及ばぬ』と、殿下は御承知なく、『自分丈がさういふ特別の取扱をうけるのは好ましくない、皆のものと同じく、従卒に洗はせてくれ』



どうしても御聞入にならなかつた。

此うして、土匪以外に、炎熱と戰ひ乍ら、二ケ月の間、御苦辛の後、八月に入つて、彰化に入つた。丁度此時、乃木希典中將のひきゐる第二師團の兵が南方に上陸した。

『乃木は海岸に添うて進むので、我軍は山の手に傍うて進撃するやうに……』

殿下は、此う御命令になつて、嘉義に向つて、前進をつゞけた。安溪寮の近くに臨時に架設された丸木橋がある、殿下は御馬に召されて此橋をわたらせられたが、御馬は洋馬である、日本馬は身も小さく、小路を歩くのに馴れて居るが、洋馬は身が大きく小路の歩行に馴れない。それが爲、橋から後足を落したので、何かは以つて堪るべき、あツといふ間に殿下は御馬もろとも、ザンブと河中に墜落遊ばされ、御馬の下にならせられた。驚いて、殿下を御助け申上げたが、全身水に浸つて了つた、といつて、御着替の御襯衣がない。隨員の一人が、たつた一度着た着がへのシャツがあつたので、とりあへずこれを差上げて、御着かへを願ひ、其上へ鼠色の天竺木綿の外套を召されて安溪寮へ御到着になつた。殿下は果して其の夜御發熱になつた。

◎

後になつて隨員の話を聞くのに、七月二十九日、臺北を御出發に相成り、南進の途につかせらるゝ前夜、少々御不例にわた

らせられて、時々御下痢を御催しになつた。處が、もし御自分が、健康を害したとでも云うたなら、一同が心配するであらうといふ思召で、軍醫に診察を御命じにならなかつた、隨員のものにも、一言も御苦痛を御訴へにならなかつた。で、そのまゝ御平生の如く御進發になつたが、御晝食の際には、何一つ召上らなかつた。午後三時になつて、桃仔園の舍營地へ御着になると、折柄大雨が降り出し、かてて雷が鳴り出した。いつもなら、此れくらゐの雨には、御濡れ遊ばしても一向平氣で居らせられましたのに、此日は、隨員に向つて、

『外套を出せ』

此う仰せられた。隨員は驚いて、始めて殿下の御不例に氣づいて、すぐさま木村軍醫部長が拜診した。その時は流行下痢にかゝらせられたのであるが、これは幸、中壢御滯陣の際に御全快になつた。しかし、引きつゞいての御困難を押して、進撃をつゞけられた爲、つひに渡河の際御落馬なされたのが原因ならんか、又御氣分を害し奉つた。

翌日も御熱が下らぬので、しばらく此處に御滯在を願つたが、殿下は御聽しにならなかつた。

『自分がこゝに滯在すると、少くとも一個大隊が駐屯せねばならぬ、我師團は渡臺以來、各將卒共マラリヤの爲に冒されて、今日では半以上の戰鬪力を失つて居る、此の場合、一兵と雖も自分の爲に累ひされて、戰線へ送ることが出來ぬとあつては[illegible]下に對し[illegible]つて、[illegible]

も、前進をつゞける覺悟だ、駕の仕度をいたせ』

決然たる御言葉であつた。かくなつては、如何とも致しやうなく、隨員の者は涙をのんで、思召を奉ずることゝなつたが、駕籠などがありようはない。已むを得ず、御病體の殿下を擔架に御載せ申して、かねて御伴をして居た相撲連中に擔はせた。處が、彼等は力はあるが、此ういふことに馴れて居らぬ爲、時々肩をかへる。その度に御身が烈しく動搖するので、御苦痛の態に御見受け申した。途中で擔夫をかへさせ給うたが、御熱が四十度もあつて、御渇が甚しい。そこで松本軍醫正が、水を入れた銀瓶を携へて、隨行申上げ、時々これを差上げるやうにした。此間、殿下は御病中にもかゝはらず、御軍裝のまゝ、御靴をも脱がせられず、戰況を聞こし召されつゝ、御道中遊ばされた。

『いかゞでムりまするか』

擔架の日覆を開いて、度々御容態をうかゞつても、殿下は御苦惱を御訴へにたらなかつた。部下のものをして、心配させないといふ御心であると推し奉るにつけても、一同只恐縮して、言葉なく擔架のあとにつゞいた。

嘉義を經て、臺南についたのは、十月二十一日。先着の近衛師團の兵が居たが、旅團長川村景明少將、聯隊長坂井重季等、みなマラリヤにかゝつて、殿下を御迎へすることが出來ない。上長官では僅かに小島政利中佐一人だけ御出迎へに出た。[illegible]

の[illegible]、いかにマラリヤ[illegible]

も想像出來る。

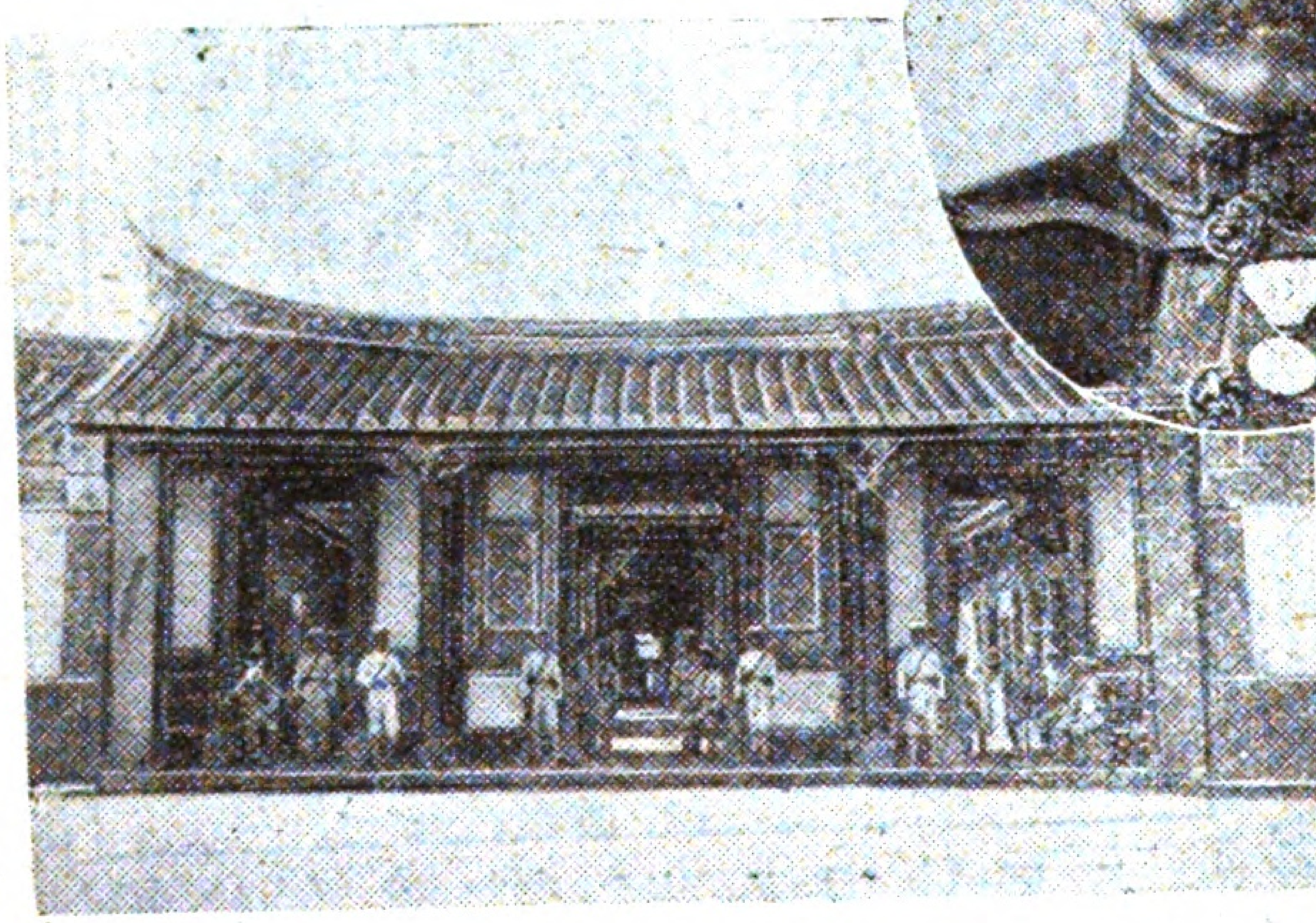
臺南到着後、殿下の御熱は、四十度一分に達し、一向降る容子がない。軍醫部長木村達の外に、第二師團軍醫部長醫學博士谷口謙も、御病床に侍して、ひたすら殿下の御恢復を祈り奉つた。大本營からは、特に天皇陛下の思召をもつて大連から軍醫監醫學博士西郷吉義を御差遣になつた。これらの國手は、全力をさゝげて、御手當申上げたが、つひに其の効なく十月二十八日には、危篤に陷り給うた。

その前日、總督府のものが、御病床に伺候して、

『臺灣も、殆ど平定致しました、これと申すも、畢竟殿下の率ゐさせ給ふ近衛師團の功勞でムりまして、師團の任務もこゝに完了致しました』

謹んで申上げると、殿下は御眼を開かせられて、御滿足さうに、かすかに御頷き遊ばされた。これが、御傍に居る隨員が、確かに御聽留になつたと認め奉つた事の最終であつた。





上、北白川宮能久親王殿下。下、當時の臺灣總督府。

かくて、十一月四日殿下は陸軍大將に御昇進に相成り、翌日薨去の告示があつた。御歳四十九歳にわたらせられた。臺灣では樟の大木をくりぬいたものが、最上の柩である、樟は香氣もよく、且内地にはない事なので、その式に則つて、御柩をつくり、御遺骸を納め奉つた。木村軍醫部長の話によると、殿下が臺南に御着後は、日々高熱で、御苦惱の御容子に拜したが、その中二度だけ御喜びになつた事がある。

一度は、妃殿下からの御文が到着してこれを御覽遊ばされた時、又一度は伏見宮殿下が御見舞に御出なされて御對面になつた時、更に今一度は、妃殿下の弟君なる伊達紀隆氏が拜謁せられた時、――渡臺以來、御艱難をつませられて、これといつて御慰め申すやうな事もなかつたが、此時だけは、心から御喜の態であつたと伺つて居る。

◎

殿下の御遺骸は、西京丸に御載せ申上げ、軍艦吉野護衛の下に、横須賀に入港したのは、十一月四日であつた。御兄宮小松宮彰仁親王殿下、北白川宮妃殿下、其他皇族方を

始めとして、文武の大官が御迎に出たが、御柩は重量二百貫もあるので、船から陸へ假橋をわたし、水兵三十餘人で擔ひ奉つた。

此際、妃殿下始め御近親の皇族方は、一度御棺の蓋を開いて尊容を拜し、御永訣遊ばされたいといふ御懇望であつた。兄宮にわたらせらるゝ小松宮殿下が最も、御心配遊ばされて、特に忠悳を御召になつた。

『此事については、石黒は職務上最も關係があるので、宜しく含んで居て貰はねばならぬ』

此ういふ仰があつた。

『御尤もでムります、長い間御病床にあつて、御看護を遊ばしても、薨去の後は御別惜しく思召すのが當然でムります、まして、殿下は遠く離れた新附の領土に於て、御かくれになつたので、妃殿下を始め御近親の方々が、せめて御遺骸になりと、一度御告別申上げたいといふのは、上下の別なく、さもあるべき事で、御心情は深く御察し奉る處である。さり乍ら、いか



に防腐の御手當は十分であるにもせよ、炎熱の地に於て、薨去となり、已に幾日かを經過して居ります、御尊顔がどう御變りになつて居るやも計り難く、萬々一、御棺を開かれました際、殿下の御姿が御かはりになつて居りましては、痛ましい御記憶が永久に消え去る時がムりますまい、それよりも御出征の際に於ける颯爽たる御勇相を長く御記憶に殘された方が御宜しいかと存じます、のみならず私が恐れるのは、尊體が腐敗の結果、有毒瓦斯を發生して、皇族方の御健康を害するやうなことがムりましては、恐多い次第でムります、石黒は、二つの理由により、故大將宮の御棺の御蓋を開かるゝことは、野戰衛生長官の職權をもつて、御許申上げることが出來ませぬ』

斷乎として、此う御答へした。もし、御許しがなかつたならば、忠悳は職を辭する覺悟であつた。然るに、兄宮の彰仁親王殿下が先づ御諒解下さつた。

『石黒の申すのが道理である』と、仰せられたので、御開棺の儀は御取止となつて、その儘御埋葬になつた。しかし、妃殿下始め御近親の方々の御愁傷のさまを拜し奉つて、忠悳は、何と御慰め申してよろしいか、殆んど言句に詰つて了つた。殊に、大將宮殿下は、明治十一年、獨逸から御歸朝になつて、陛

軍近衞局へ御初任の際、始めて拜謁して此方、十八年の間、忠悳は殊遇を辱うして居た。公用以外に、紀尾井町の御殿に伺つたのも何度の事であつた。

殊の外御酒を好ませられた。忠悳は、折々御目にかゝつては御酒の御減量を願つたことがある。

『又、石黒の減酒論かな』

御笑ひになつてゐたが、思ひ出せば、丁度殿下が、旅順を御出發になつて、渡臺遊ばす直前であつた。當時、兄宮彰仁親王殿下が、旅順に在らせられて、威海衞丸の船室に御起居遊ばされて居た。北白川宮殿下は、近衞師團長として、榮城子に御轉陣になつてゐたが、旅順へ御成になつて、兄宮と御對面になつた。忠悳は、五月十六日の夕方、官用を終つて、夕食をすませ、船に伺候した處、兩殿下とも御夕食をすませられて、甲板の上を御揃で御散歩中であつた。忠悳も、御後に從つて、御話を伺つたが、此時、北白川宮殿下は、ふと立停つて仰せられた。

『石黒、自分は今度臺灣へ行くことになつたが、彼方は、瘴癘毒霧の地と聞いて居る、もし病氣になつては、折角の御奉公がつとまらぬが、何か病を防ぐのに適當の方法でもあつたら敎へてくれぬか』

自分は、即座に御答へ申した。『左様で厶ります、キニーネ其他の用心藥はありますが、殿下に於かせられては、又石黒がと思召かも存じませぬが、御酒量を御減じ遊ばすのが第一で厶ります』

すると、御兄宮殿下が、

『む、それ、それ』合槌を打たせられて、

『實は今も夕食の時、德利が出たら、能久は若しこゝに石黒がゐたなら、此の德利は取片づけたらうに、居合はさなくて仕合せだと云うたよ』

滿面に笑をうかべられて、此う仰在つた。

『いや、石黒の厚意は感謝して居る、臺灣へ行つたら、酒は必ず平生の三分の一に減らすから……』

御手を御延しになつて、忠悳の手を此う堅く御握り遊ばして、『石黒、大丈夫だ、決して心配してくれるな』

淸らかな御眼をうるませられてじつと自分の顔を見守つて居られた。忠悳は思はず下うつむいて殿下の御手を押し頂いた。

迢々として夕闇迫る旅順港外の此のデッキの上での拜謁が、つひに最後となつて、六ケ月後には、樟の御棺に入つた殿下を横須賀埠頭に迎へたのである。

あの神々しい尊容、あの淸々しい御聲、英氣凜々、肥馬に鞭つて、蠻土に進撃された刹那の御姿を御察し申上げた竹橋外の殿下の御銅像を拜するたびに、ありし日の殿下の事どもが何くれとなく念頭に浮んでくる。去る七月十一日も、北白川宮御殿に伺候して、宮様方に、此の御話を申上げたが、今又、老餘の思出に、御維新前には輪王寺宮として上野東叡山に在し詳さに御辛苦を重ねさせられ、遂に臺灣鎮護の神とならせ給うた故大將宮殿下の御事蹟を茲にかき殘しておくことにしたのである。

（昭和四年八月十日訂校、八十五、況翁）

日本國民に感謝す

ツエッペリン伯號總司令　フーゴー・エッケナー

今回ツエッペリン伯號によつて、世界一周飛行を試みるに方り、貴國日本を訪問し得たことは、私共にとりて、無上の喜びとするところであります。日本は、私の永い間の憧れの國でありました。なぜかと申せば、日本は、ロマンチックな色と、神秘的な響きとを持つてをる國で、それが如何にも人間を魅惑するからであります。そのロマンチックな色を象徴するものは、櫻であり、その神秘的な響きを表現するものは、菊であります。而して、この櫻と菊とは、恐らく世界のあらゆる人々の憧憬の的であらうと思ふのであります。

私共は、荒涼たるシベリアを橫切り、日本の北邊に達し、それからだん／＼南下して來たのでありますが、日本の領土に入るに及んで、餘りにも著しい變化に驚ろいてしまひました。美くしい村や町の連なり、よく耕やされたる田畑の擴がり、豐かなる稻の穗波、實際日本は美くしき國、ロマンチックな國、神秘的な國であることを嬉しく思ひました。

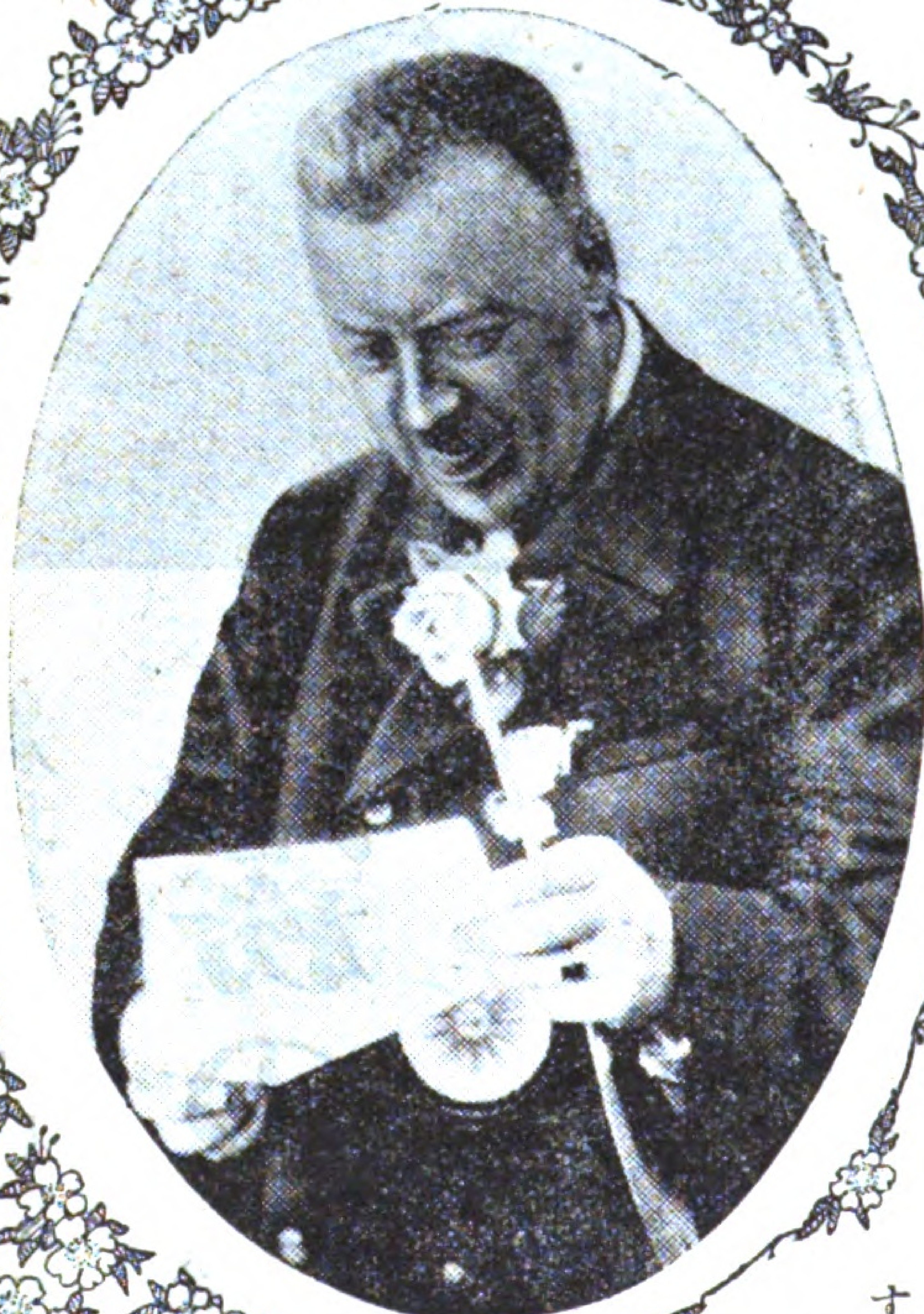
日本の美くしさは、豫て想像してゐたことでありますが、それよりも、私共の心を打つたものは、私共の、今日の日本訪問に對し、日本國民の上下を舉げて、私どもに示された心情の美くしさであります。日本とドイツとは、昔からなる交友の國でありますが、新樣にして層一層兩國の情誼が結ばれる



といふことは、衷心喜びに堪へないことでありま
す。私共の日本訪問が、斯くして兩國親善の上に多少なりとも貢献し得たことは、身に餘る光榮とするところであります。

更にまた私共が、日本及日本國民に對して感謝しなければならぬことは、日本國民が、航空事業の現在及び將來に對し、深甚なる諒解を持つてゐて下さるといふことであります。今日の世界一周飛行に對して、日本の官民が私共のために盡された好意に對しては、全く感謝の辭に窮する次第であります。

最後に、お互文明人として、科學の勝利と、世界平和の將來に對し、あらゆる努力を惜します、萬民協力の實を擧げることを念じます。それがためには、斯くして結ばれたる日獨の友誼をば、尚一層この目的のために進めて行きたいと思ふのであります。この機會を利用し、特に日本國民に感謝の意を表すると同時に、お互の親交の益々深からんことを祈ります。私共は、やがて故國に歸り着きました時には、日本國民の我我に對して示された御好意を、私共の同胞に傳へることを忘れません。



寫眞

昭和四年八月二十日、日比谷公園に於ける東京市民大歡迎會場にて挨拶を爲しつつあるエッケナー博士。



新掲載の長篇小説

霧の中の曙

野村愛正
挿繪 林唯一

求婚されて

明るい、匂やかな、葡萄色に澄んだ空、馬も肥えた秋である。騎馬が二騎、まだところ〴〵に昔の面影を殘してゐる武藏野を、土埃を立てながら、跑で、かぱかぱと疾驅して行つた。

『やつてるな!』

通りがかりの若い人達は、朗かな微笑で見返る。それもその筈、先頭を騎つてゐるのはまだ若い令孃で、横ツちよに被つた緣無帽の下からはみ出した渦毛、派手なジヤケツ、赤いネクタイ、騎馬袴――大きく燦いた眼、上氣した頰――美と健康! 青春は禮讚すべきだ。そして白皙の、スマートな青年紳士がそれにつゞいた。

コスモスが、あちこちの垣根に美しく咲亂れてゐた。やがてこの二騎は、練馬の

街を右に折れて、有名な大根畠を征服してぽつ〱建並んだ文化住宅の中の――稔つたわづかな稻田を見下して、丘がかつた中腹に、淡い黄色の、緑の屋根を持つた新築したばかりの洋館がある。その門内に馬を乘入れた。

『蘭子さん、どう？』

青年紳士は、令孃に手を借して馬から下してやつた後にいつた――數日前、蘭子は、この青年紳士の酒見から次のやうな意味の手紙を受取つた。

――かねて建築中だつた家がやうやく落成しました。馬を連れて迎へに行きますから、是非一度來てみて批評して頂きたい、云々。

今日がその日である。蘭子は暫く見上げてゐたが、

『とても立派よ！』と心からいつた。

年老つたのと、若いのと、二人の召使が慇懃に出迎へた。乘馬靴を柔かなスリッパに履替へてひと先づ應接に通り、少憩の後、酒見が自分で蘭子を案內した。客間、居間、夫人の部屋、化粧室、風呂場、食堂、臺所、それに日本座敷も三間、召使の部屋に、ベランダー――次男ではあるが、酒見の實家は千萬長者である。卓子、椅子、窓掛、絨氈、何から何まで眞新しく、落着きもあつて、油繪の額、置物、さま〲の美術品まで飾附けてある。殘らず見終つて、今度は居間のソファーに落着いて、

『廣いわね、素敵ね！』蘭子は繰返して、猶も少女のやうに惡戯らしく身體をぴよん〱動かしてみて『大變氣持がいゝわ。これですつかりご用意は出來たし……この上は、早くこの椅子のご主人をお迎へになることよ。眼の覺めるやうな美人をね。蘭子もお手傳ひして探すわ！』

酒見は、頰に指をあてたまゝ靜かに微笑してゐたが、取上げかけた紅茶の茶碗を再びおいて、

『そんなにお氣にいりましたか？』と、意味あり氣にいふ。

『えゝ、とても！』蘭子は無邪氣だつた。

『それなら恰度いゝ、どうです、蘭子さんが永久にその椅子に掛けてくれては？』

『あらッ……。』蘭子は、さッと眼許を紅く染めたが、すぐに自分に返つて、いよ〱陽氣に『揶揄ッこ？ いゝわ、それなら蘭子も負けてゐやアしない……！』

『さうぢやアない、蘭子さん、ほんたうのことをいつてるんだ！』酒見は眞劍な調子になつて『僕は、かうして家を新築したのもそのためで……今日のことも、豫じめ金井さんご夫婦の內諾を得てです。直接あなたのお氣持をお訊したいと思つてお招きしたので……。』

金井といふのは、蘭子が寄寓してゐる叔父叔母のことである。彼女は、ます〱眞赤になつて、

『まア、あたくし、信じられない。酒見さんが蘭子を……。』

とわづかにいつたが、耐らなくなつて立上つて窓に行つた。冷いガラスが、熱した額に快く觸れた。

『でも、お人が悪いわ。立派な家を建てゝ、それを見せてから誘惑なすつたり……。』

酒見は、また微笑して、

『恰度いゝ機會ではないでせうか。すべてのものが新しい出發點に立つので……家も、生活も、これから……。』

『それもさうですけど……。』

が、羞しさに胸がはげしくわく／＼するばかりで、すぐにはなんと返事をしていゝかわからない。蘭子は、やうやくいくらか自分を取返すと――掌を眼の上に翳すやうな恰好をしてもとのソファーに返つて來て、

『あんまり思ひがけなかつたのよ。蘭子、わからなくなつて……暫く考へさせて下さい。後で手紙でご返事するわ！』といつた。

『無論ですとも！』酒見も、さうあるべき筈だといふやうに頷いた。

話はそれで打切つたが、こんなことでなんとなく氣が重くなつた。そこで蘭子は、馬をよして、自動車で送られて、寄寓してゐる下落合の金井、つまり母の一番末の妹にあたる叔母の家に歸つて來た。

相談に故郷へ

その頃、蘭子は、あちこち、二三ヶ所からも緣談の申込みを受けてはゐたが、あんまり氣がすゝまないので、

『もうすこし……。』といつて、ぐづ／＼はつきりした返事もせずに日を送つてゐた。

が、酒見の申込みは、非常に快く聞かれた。同郷の出身といふので以前からちよい／＼叔父叔母の家に出入りをしてゐた關係から知合つたので、もう五年ほどになる――彼は、稀れにみる俊才で、卒業後も大學に殘つてゐる。未來の博士、大學教授が保證されてゐるにもかゝはらず、一面には學者に似合はない明るさもある。蘭子も、内心では尊敬はしてゐるが、

『でも、蘭子が、酒見さんの奥さんになるなんて、なんだか可笑しいわ。そりやア、愛さうと思へばいつだつて、だけれど……

……。』

今まで無心に、あんまり親しくしすぎて、さん／＼甘ツたれたり、我儘をいつたりして來てゐるせゐではあるが、それを除けば、第一、次男で、係累の煩はしさがない。財産はある。社會的地位や、名譽の、だん／＼自然に出來て來ることも請合は


唯一

れる。何より信じてゐる性格ではあるし――自分はたい。蘭子もはじめて結婚といふことに心を動かされて來て、二三日經つと、

『叔母さま、あたくし、一度、父や母に相談かた〴〵故鄉に歸つて來ようと思ひますわ。』

といひだした。

默つてその後の彼女の樣子を眺めてゐた叔母の貞緒は、にこにこして、

『それがいゝ、さうなさい、纏つてよ！』といつた。

その晩、蘭子は、机に向つて萬年筆を取上げた。第一行に『酒見さま』と書いて、

酒見さま――。

この手紙は、お約束の返事ではございませんのよ。あのことについては、いづれほかの誰かからお傳へすることになるだらうと思ひます。蘭子からは、これ以上は申上げられませんの。どうぞ、もう暫くお待ち下さいな。

そして相談のために故鄉に歸つて來ると認めて投函した。ある意味で承諾同樣なものを含んでゐたかも知れなかつたが、彼女も叔母と同じ氣持である。最早この上は、流れるまゝに任せておいていゝと思つたのだつた。

出發の日には、酒見も、わざ〳〵東京驛に見送りに來てくれた。あれ以來はじめて顏を合せるので、蘭子は變に手間取くたつて、口の中で呟くやうに、

『よくねえ！』といつた。

『いつお歸りになります？』

『さうね……。』いひかけて、蘭子は、ふと、眼の前を、眞白い婚禮服に白いボンネット、花束を抱いた自分の花嫁姿の掠めてすぎるのを見た。

また合ふ日、その日こそ、さうした姿で彼の傍に立つ式場かも知れない――。

『なるべく早く上京しますわ……！』

ほかにも見送りがあつたので、二人はあまり言葉は交さなかつた。が、いよ〳〵汽車に乘込んで、發車した時、酒見は、帽子を手にして、長目の髮を搔上げながら立つてゐたが――だんだん遠ざかるに連れて、蘭子の眼はいつのまにか熱くなつて濡れて來た。生れてはじめて男性に持つ離愁ではあつたが、一人になつて座席に返ると、

『でも……。』と獨語ちて、自分ににつこり笑つた。

もと〳〵彼女が故鄉の女學校を途中で上京して來て叔母の家に寄寓するやうになつたのも、いへばみんな結婚のためである。地方ではどうしても相當な人物を見付けることが困難だといふ親心からで――女學校を卒業して二年、さん〴〵故鄉の[illegible]

親が遠くで氣を揉んでゐたことも知つてゐる。それが、今、その望みどほりのものを持つて歸つて行かうとしてゐるのだ。彼女は安心してゐてい丶のだつた。

彼女は、膝を兩手で抱いて、いつも窓から外に眼をやつてゐた。が、景色などはちつとも映らない。さうしていつも長い東海道も、その折りに限つて退屈もしなかつた。

舊知の不幸

夜行を避けて京都の親類に一泊して、翌日故郷に向つた。T市の乘替へまで兄の辰郎が出迎へてくれて——それから三つ目、村の小さな停車場に着いたのは夕暮で、すぐに自動車が爆音を立て丶やつて來た。蘭子は頓驚な聲をあげて、

『あらタクシイがあるのね。いつ出來たの。誰が乘るの？』

『馬鹿にするない。今時、自動車のない驛があるかい！』

『ほ丶丶、叱られちやツた！』と燥いでいつて、蘭子はあたりを見まはしてゐたが『莊助はどうしたの、莊助爺さんは？まだ達者でゐる？』

『うん、まだ生きてるよ。』

莊助は貧しい、獨り身の老車夫である。蘭子は、まだT市の女學校に在學してゐた頃、土曜から日曜にかけての歸宅の際には、氣の毒に思つて必ず乘つたもので——當然、その馴染深い老車夫に迎へられるやうな氣持がしてゐたのに、豫期が違つた。それで氣にかけて訊いてみたのだつた。

が、無事だと聞いて安心した。

まだちよツと一里、自動車は、自慢にもならない、がた〴〵ひどく搖れる惡自動車である。それでも、蘭子は、三年振りに歸つて來た故郷を、なつかしげに、熱心に窓から眺めてゐたが——また思ひ出して、

『ぢやア兄さん、自動車が出來たでは、莊助爺さんも困つてゐるでせうね。まだ曳いてゐる？』

『い丶や、今では小學校の小使をして安氣にやつてるよ。』

『よかつたわねえ！』

『精二さ。莊助も年は老るし、一時はひどく困つてゐたがね、精二がいろ〳〵面倒を見たり、骨を折つて小學校にも世話をしてやつたりしてるのさ。』

『まア……感心ね、ほんとに精二さんは！』

『お前は、何かといふとあの男に感心するけど、おれア大嫌ひさ。馬鹿眞面目くさつて、餘計なことに口を出したがつて……。』

『だつて、あの方は、あたしには生命の恩人だからだわ……！』

といつて、蘭子は、深い溜息を吐いて默つた。

まもなく、お寺のやうに大きい屋根の、白壁土藏の幾棟にも取圍まれた生れた家が、黄昏の夕闇に融んで城廓のやうに見え

て來た。門をひらくと、めつたに開かない大玄關の扉が開けてある。それだけでも兩親の心遣ひがよくわかるのに——物音を聞いて、女中や、下男達が驅出して來てずらりと並ぶといふ歡迎振り、その後方には、父や、母の顏も見えて、

『蘭子さん、よく歸つて來ました。さア／＼お上り！』

いつに變らぬ慈愛の籠つた母の聲である。歸つて來てよかつた。ほんたうによかつた。蘭子は、いそ／＼と靴を脱いで式臺を上ると——ひとり遲れて、暗い影から、

『お孃さま、お歸り遊ばせ。ご無事で……おなつかしうございます！』

といふものがある。見返るとお妙である。久振りに會つた悦びに、蘭子は、居間で、兩親に圍まれて、東京のこと、叔父叔母の噂、その傳言、さま／＼の話に耽つた。詰らないことでも、その人達にはそれ／＼の意義を持つてゐる。お妙が傍から、お茶を淹れたり、菓子をすゝめたりしてくれる。このお妙がちよツと立つて行つた後で、

『お母さん、妙ちやん、どうしたの？　大變顏色が惡いわね。病氣？』と蘭子が訊いた。

お妙は、今でこそこゝの上女中をしてゐるが、小學校は蘭子と同級、二人は大の仲よしなのである。それで心配するのである。

『いゝえ、苦勞してなんだよ。兄さんが役場の金を費込んだんで……！』

『兄さんツて……精二さんぢやないでせう？』

『さうですよ、上の丈太郎の方ですよ。』

『跛がねえ。澤山？』

『千何百圓とか……！』

『まア、憎い丈太郎ねえ！』

蘭子も、まだその丈太郎を覺えてゐる。色の生ッ白い顏に素通の眼鏡をかけて、跛をひき／＼役場に通つてゐた。この頃では書記から收入役に出世してゐたのださうで、

『……本人は、とツくに、神戸とか、大阪とかに逃げてゐるんですよ。後を精二さんが引受けて、この秋の收穫が終り次第に土地を賣拂つて辨濟することになつてゐるのださうだが……家も殘るかどうですか。村を立退くよりほかはあるまいといふ噂ですよ！』と、母の兼子はいつた。

『まあ……それぢやアあんまり、精二さんや妙ちやんが可哀さうだわ！』

『さうですともねえ。精二さんはあんなに働きもので……感心な子だのにねえ……！』

その人の噂

まもなくお妙が再びその席に返つて來たので、ちよッと逸れはしたが、話題はやつぱりお妙のすぐ上の兄の精二といふ青年を中心に暫くつゞいた。母の兼子は思ひ出して、

『さう〳〵、精二さんといへば、蘭子さんはまだお聞きでないでせうが、去年の夏のはじめは大變だつたのですよ。おそろしい水喧嘩でね、ねえ、妙や……。』といつて、その精二に絡る一場の物語をはじめた。

昨年は、五月からかけて雨が尠く、六月にはひどい渇水になつた。その村には川上に立派な堰が設けてあるのでさして困難もしなかつたが、下の村々では植附が出來ない。ために堰が毀はれる心配が出



來てきて、毎晩、三人宛交替で夜番を附けることになつてゐた。

さうして、恰度、精二が不寢番にあたつた晩のことである。出て來た相手が、一人はまだ小學校に通つてゐる子供なので、徹夜は可哀さうだといつて返してやり、他の一人は横着者で、無斷で家に歸つて寢てしまつた。精二は知つてはゐたが、晝間の疲れのことを考へてやつて一人で見張つてゐると、運惡く堰の内に投身して自殺しかけたものがあつた。早速飛込んで行つて助けることは助けたが、瀕死の重態である。すぐに擔いで醫者の家に驅附けた、その暇に――襲擊を受けて、堰が破壞された。簑笠竹槍で押出した昔の水喧嘩と違つて、ほんの一人か二人の仕事である。ダイナマイトでやられたのだつた。

『……それからがまた大變でね、半鐘を打つやらして大勢で驅附けてみると、肝腎の番人が一人もゐないでせう。いろ〳〵詮議をすると、精二さんが返してやつたり、歸つて寢てゐるのを默つてゐたりしたので、一人で罪を着ることになつて……水といへばみんな狂人になるのです。驚いて醫者の家から引返して來た精二さんを、寄つてたかつて、擲るやら、蹴るやら……。』

『まア、ひどい！』蘭子は、身體を竦めて、その打擊を自分に受けてゐるやうに悲鳴をあげた。『でも、どうして辯解なさらなかつたのでせう、立派な理由があるのに！』

『それが精二らしいところぢや！』傍で聞いてゐた父の紳造も口を挾んで『責任は責任、人を助けたとは別物なのだ。だから逃げも隱れもせずに默つて罰を受けたのぢや！』

『そりやアその次の日なぞ、精兄さんが下の村のものに買收されたのだの、村を裏切つたのだのいはれて、さうございましたわ。後では氣の毒がつてくれましたけど……』と、お妙もいつた。

『それからがまたねえ……』と、母の綾子はつゞけて『その身投げをしたのが、隣村のおさわといふ若い百姓のかみさんでね、姑との仲の折合が惡くて自殺しかけたのだが……精二さんが仲に立つて仲直りをさせうとするが、姑が肯かない。いろいろ心配して一時、手許に預つてやつてゐたのですよ。さうすると變な噂までいひ振らされて……。』

『まア！　かさね〳〵災難ね！』

『ほんとにね。お妙も大變心配して……』

『いゝえ、あたし、精兄さんに限つてそんなことはないと思つてゐましたけど……たゞ、お母さんや、上の兄さんが、譯もわからず精兄さんにやかましくいひますので……。』

『それがどうでせう、今ではそのお庇で、非常に圓滿に暮してゐるのですよ！』

『偉いわ、偉いわ、ほんたうに精二さんは偉いわ！』と、蘭子

は心から感嘆していつて、深い吐息を洩した。

　こんな話を繰返してゐる間に、思はず吃驚するほど遅くなつた。蘭子は、兩親におやすみなさいをして狼狽て立上つて、かつては自分の部屋だつた離室に行つた――お妙が隨いて來て、いろ〳〵世話をしてくれる。お妙は内氣で、素直な娘で、縹緻もよかつたのに、今ではすつかり見違へるほどになつてゐるので、蘭子はいよ〳〵同情して、

『妙ちやん、聞いたわ、あんたの家のことをよ。そんなに窶れるほど苦勞して……氣の毒ね！』

　改めて慰めてやると、どうしたことか、お妙は、不意にぎよツとしたやうに顏色を變へた。が、やがて袂で顏を掩つて泣きだして、

『はい、有難うございます。あたしは構ひませんけれど、たゞ精兄さんに……。』といつてその場に泣伏してしまつた。

　精二は、非常に頭腦がよくて、高等小學校を卒業したきりだのに、小學校教員檢定試驗に及第して、その免狀さへ持つてゐる。が、自分で奉職しなかつた。父は早く死んで、一家は經濟的に苦しかつたので、

『兄さんの身體では百姓は無理だ。小作に出すほどの田ではなし、家業も廢める譯に行かないのだから、僕が代つて働きます！』

といつて、從來熱心に勵んで、今では村でも珍しいゝ力といはれるまでに一人の力で漕附けてゐる。そして母親は、どちらかといへば兄の丈太郎を餘計に可愛がるので、精二とお妙の兄妹は自然に結びついて、離れることの出來ない血と肉ほどに仲がいゝ――お妙が急にはげしく泣き出したことは、蘭子にもいくらか不思議でないではなかつたが、折角精二がそこまで盛上げてゐたのに、丈太郎によつてめちやくちやに壞されることである。慰められて却つて悲しみが新しく込上げて來たのだらうと解釋してしまつた。

作物の愛

　翌日、午前中は母も忙しい。生れた家でも久振りに歸つてみればなんとなく手持無沙汰である。そこで思ひ付いて、蘭子は、一人でふらりと散歩に出掛けた。

「さう、これが蘭子の、處女としての最後の故郷になるのかも知れないのだから……。」

　まだ[illegible]見のことはいひだしたいが、こゝまで來れば急がなくてよい。思ひ出をしみ〴〵樂んでおきたいといふ氣持になつて、蜻蛉の翔立つ田圃の小徑を拾つて行つた――秋はこの田舍までも賑やかにしてゐた。空中に無數にきら〳〵してゐるのは蜻蛉である。稔つた稻は半分だけ刈取られ、あそこ、こゝ、刈へ

てゐるもの、運んでゐるもの、穂を落してゐるもの、農家にとつては今が一番大切な、忙しい時期で、いづれも眞黒になつて働いてゐる。それでも律義な村人達は、蘭子に出會ふと叮嚀に被物を除つて、



『これは和田さんのお孃さん、お歸りなさツたですツてな。ようこそ！』

といつて路を讓つてくれる。わざ〳〵立上つて、斷髪に散歩用のジャケツ、脚を緊附けた絹の沓下、踵の小さな靴、すんなりした後姿を飾氣にとられたやうにいつまでも見送つてゐるものもある――氣が着くと、あちこちの辻々に小さな札が立つてゐて、

作物を大切にしませう
一筋の稲穂でも、おてんたうさまのお庇でみんなのために稔つてくれたのであります。粗末にしないで可愛がつてやつて下さい。望みどほりにお米にしてやつて下さい。

と書かれてある。誰の仕業か知らないが、よく行屆いた注意だと思つて感心した――

かなり歩いてすこし勞れて來た。そこで蘭子は、短い草が青々と天鵞絨のやうに敷詰めてゐる畦路を見着けて、暫く休息することにして腰を下した。

『會へるかしら？　會つて見たいわ……。』



散歩に出掛けて來たのも、一つにはさういふ期待があつたからである。無論、今日に限つたことでないが——痛みにも似た淡い悲しみが胸を流れる。さうして穗に出た草を無心に拔いてゐるうち、いつの間にか遠い子供の時に返つて行つて、彼女は昔したやうに丹念にその穗を揃へはじめた。

涙が、なつかしい涙が、ぽつちりと瞼の裏を濡した。たうとう彼女は腹ン匐ひになつた。この間にどれだけの時間が經つたか、束は左の指に溢れた——ふと、跫音が聞えて、

『どう、どう……はい、ご免なさいよ！』

吃驚して眼をあげると、がつしりした體格の若者が、稻を着けた牛を牽いて來る。蘭子は赧くなつて起上つて、

『あら、精二さん……！』

お妙の兄の精二である。狹い村であり、誰も外で働いてゐる。會へるだらうといふ豫感もあつたが――意外に早く出會つた。精二もにこ〳〵と古帽子を除つて、

『お孃さんでしたか。お歸りになつたと聞きましたが……お久し振りで……！』

妹の主家の令孃である。忙しい時ではあつたが、精二も挨拶だけでは行きかねた。二言三言世間並な言葉を交してゐるうち思はず長くなつて――二人は、畦に、並んで腰を下した。話も、自然、今、精二の一家に降りかゝつてゐる不幸の上に及んで來て、

『ほんたうにお氣の毒ですわ！』

と、蘭子は心から同情していふと――案外にも、精二は、左程氣にかけた樣子もなく、

『なアに、お孃さん、そんなことはなんでもないですよ。尤も、母は可哀さうですが……僕は、もと〳〵裸一貫の次男坊です。今までも、兄の土地を借りて働いてゐた同樣ですから……改めて第一歩からはじめますだ。小作からやりますだよ！』と元氣よくいふ。

『だつて……お骨が折れるでせう？』

『そりやア……僕もた、人間の有爲轉變といふもなアわからない、かういふ機會でなければ永久に世の中に出て行くことは出來ないと考へましてな、幾度も村を立退かうかとも思案しましたが……負惜みぢやアない、これでも世間に出ればなんとかしてみせるといふ野心だけはありますが……。』

『そりやさうだわ。あんたなら何をなすつても成功なさるわ！』

『しかし……僕は土が好きでしてな。土から生れるあの作物といふやつがとても可愛くて……お孃さんはご存じないでせうが、稻でも麥でも、茄子、胡瓜、みんな人間のいふことを肯くんですよ。早く大きくなつて、澤山生つてくれといつて、それだけの手當をして可愛がつてやりさへすれば、ちやんとその通りになるのです。棄てかねますな……！』

吶辯に、ぽつり〳〵と語る精二の聲には、ほんたうに土を愛するものゝ眞實さが籠つてゐる。そして見返ると、眞黑に陽に焦けた肌膚、八ツ手の葉のやうな掌、サムソンの肩、假りによき肉體によき精神が宿るものとすれば、彼こそ世の中の理想的な人間であるかも知れないと思はれるほどだつた。

過去のこと

大正×年と、十×年と、二度大洪水が起つて、この故郷の平野全體が一面の泥海と化したことがある。二度とも家が流れた。澤山の人が死んだ。はじめの折りのことは詳しく記憶して



ゐないが、蘭子の家では、後方の山の一部が崩壊して來て、納屋を潰し、一棟の土藏を半壞にした。次の時には――それは、篠突く豪雨が二日ほど降りつゞいた朝だつた。早くから半鐘が鳴り村の青年團や、消防組は總出で、

『洪水だぞ！　洪水が來るぞオッ！　みんな早くお寺に遁げて行けッ！』と、咽喉の破れるやうな聲で振れ歩いてゐた。

蘭子の家では、前回の例がある。殊に、その際あちこちで起つた山津波の慘害はまだ人々を戰慄させてゐるので、さうした危險から避難するために――恰度、蘭子が十三の、秋のはじめだつた。全家族が、下男、女中達に前後を

衞られて出掛けて行つた。

雨は霽つてゐたが、灰色の雲が暗澹と重く垂下つて、稲の穂先きだけがところ〴〵にわづかに見えてゐた。半ば水の中に沈んだ家もあつた――安全なお寺の境内まで行くには、山裾の田圃路を迂回するのである。要所々々には青年團員が立つて警戒してゐるが、まもなく水は蘭子の膝に來た。そこで蘭子は、一人の下男に脊負はれて行くことになつた。

逃げだす のが遅れたので、時には水が大人の腰まで來た。が、どうしてそんなことが起つたか。後で聞くと、脊負つてゐた下男が不注意に溝に踏込んだといふのであるが、不意にぶく〴〵と身體が沈んで來て、あッと思つた途端、一緒に倒れた――手だけで脊負つてゐたのに、どちらも狼狽た。手がはなれてしまつた。

それからどうしたか、蘭子は、はつきりとは覺えてゐない。とにかく悶躁いた。悶躁けるだけ悶躁いた。するとそのうち、棒のやうなものが、口からと鼻からと、お腹の力へ二度も三度もぐッと通つた。暫く經つて、

『お孃さん、お孃さん、しッかりなさい！　氣をたしかに持ちなさい！』

呼ばれて、ふと自分に返ると、水の中は中だが、誰かの肩に擔がれて、一本の大木の幹に縋り着いてゐた。助けてくれた男は、

『氣が着きましたか。有難い、もう大丈夫です！……さア、元氣を出して、その上の枝に摑つて下さい。いゝですか……。』

かうしてだん〴〵安全な枝まで引上げられて、落ちないために身體を幹に結きつけられた。蘭子は、かなり經つてから、その助けてくれた男が精二だつたり、登つてゐる木が隨分離れた田圃中にぽつかり一本だけ立つてゐる大榎だつたりすることをやうやく知つた――精二は青年團員の一人として働いてゐて急を見て敢然飛込んで來て救つてくれたのである。そして村に向けて無事なことを報告し、救助の筏を呼んで、

『お孃さん、泣かないでいゝです。もう大丈夫ですから……あれあれ、ご覽なさい、みんなが材木を擔ぎだしました。今に迎へに來てくれます！』

恐怖に脅えて、おろ〴〵顫へて泣いてばかりゐる蘭子を、精二はどんなにやさしく、力強く慰めてくれたことであらう。一生に二度とある筈のない經驗の中から、蘭子は、嬉しくて、有難くて、この恩は死ぬまで忘れまいと思つた――かうした出來事は、つい昨日のやう、殘らずのことをあり〴〵と覺えてゐるのに、もう足掛け八年も經つて、十八だつた精二も二十五にもなつてゐる。眼を擧げると、助けられた榎がすぐそこに見える。それなのに、その恩人は、將に墮落のドン底に陥ちようとし

てゐる……。

懐舊の情と、報恩の氣持に驅られて來た幽子は、ふと思ひ着くがまゝに、

『でもね、精二さん、小作にまで身を落されなくても……お金を借りて兄さんの負債の始末をして、それからあんただけ新しく獨立なすつてはどう？』といつた。

幽子は、父にその金を出してもらはうと考へたのである。

が、精二は手を振つて、

『いや、折角ですが、借金は眞平！　水呑百姓は働いて食べる、これが一杯でしてな、百圓の金の利子を拂ふ餘裕もないものです。ましてそんなに借りたら、最後には首縊り問題で……はゝゝゝ！』

屈託もなさゝうに笑つて、氣が着いて陽を見上げて、

『や、正午をすぎましたな。いろ〳〵ご心配して頂いてゐるやうですが、まアそのことはご安心下さい。身體さへ達者なら……僕は人一倍作物を可愛がつてやりますでな、作物の方も僕が好きで、どつさり收穫させてくれますだ。小作をしても充分やつて行ける自信もありますで……。』といつて腰を上げて『どうも失禮しました。いづれまた……さア、太郎や、晝飯に行かうぜ。……牛も可愛いものでしてな、可愛がつてやればよくいふことを肯いてくれますよ。はゝゝゝ！』

實際、牛が言葉を聞分けた。それまで溫順しく草を食つてゐたのが、モウと鳴いて、さきに家の方に向つて歩きだした。精二は、綱も附けずに、その後をのそ〳〵と歸つて行つた。

不審な逡巡

『幽子、酒見倘爾さんのご次男の話はどうしたのぢや。その相談にわざ〳〵歸つて來たのぢやらうが？』

その晩、幽子がぐづ〳〵してゐると、待兼ねたやうに父の方から切出した。母も傍にゐた。豫じめ東京の叔父叔母からいつて來てゐたので――酒見の家とは、二十里も離れてゐるが同じ縣、父同志にも面識がある。田舍でやかましい家柄や、資產などもほゞ釣合つてゐた。想像して歸つたとほり、兩親は大賛成でにこ〳〵して、

『わしもこの上もない良緣だと思ふ。人物の方はお前がよく知つとるといふし……早速、明日にも承諾の返事を出しておから！』

『お父さん、一晩……もう一晩だけ考へさせて……！』と幽子がいつた

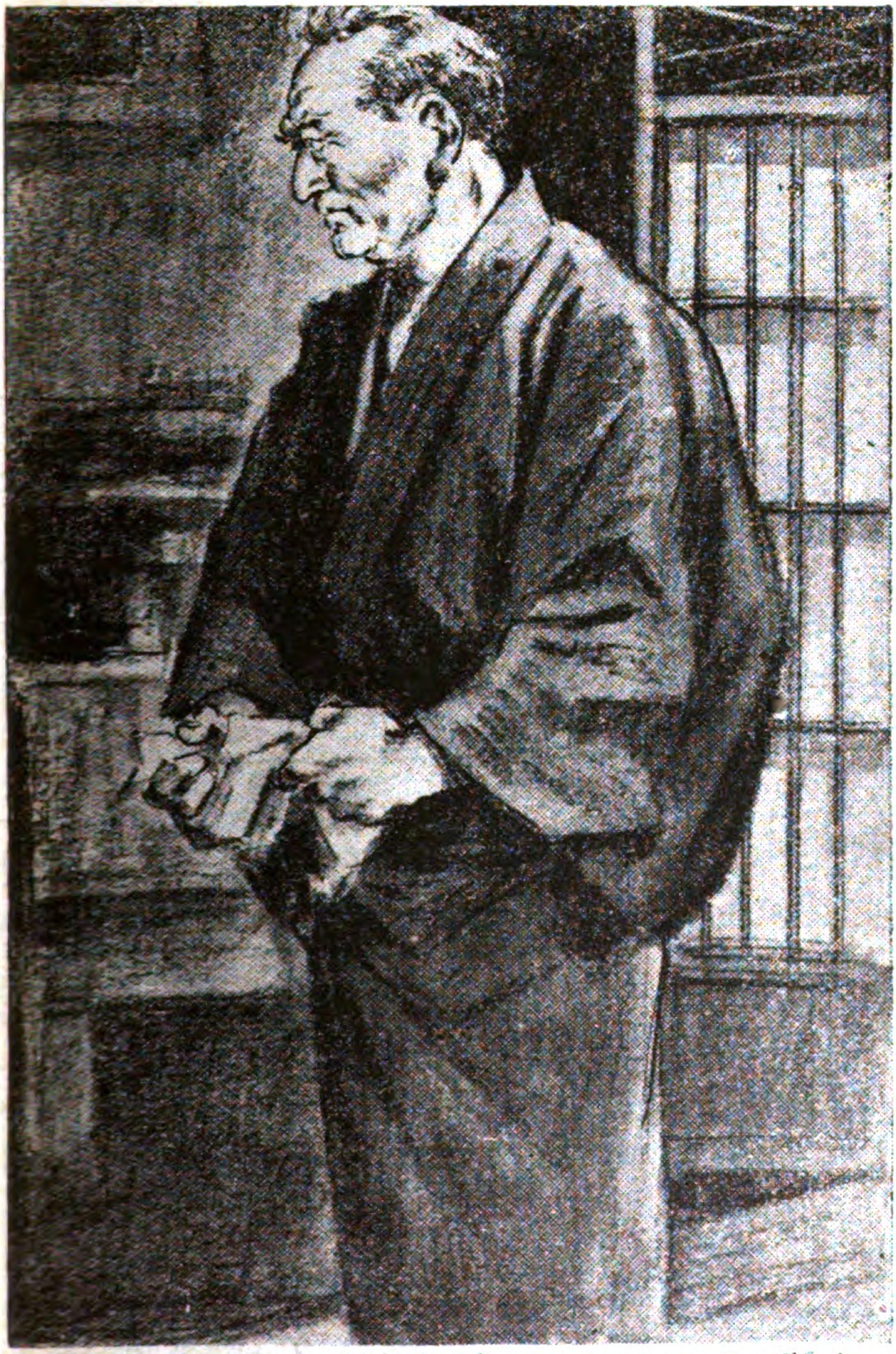
『どうしてなの？　お前、すゝんで歸つて來たのぢやないの？』と、母の兼子が不思議さうに訊く。

『えゝ、そりやさうなんですけど……でも、もう一晩……！』

両親は、顔を見合せてにツこりして、

『いくらでもお考へなさい、ですけれど……まア〳〵任せておきなさい！』

いざ決定といふことになるとなんとなく不安が感じられる、さうした娘らしさの躊躇だと解した。両親は飲込んでしまつた――蘭子も、あれほどの氣持で東京を出發して來たことである。今更考へることはない筈だのに、何故なのか。自分でもわからないのだつた。



たゞ、一莖の花が開いたために、全山が馨しい匂ひを放つ蘭もあるといふことである。蘭子は、一歩故郷に足を踏入れたすぐから、老いたる貧しい車夫の老後の安全を計つてやつた美しい話を聞いた。昨晩もそれと同じやうな噂で終始した。外に出ると『作物を大切に』といふ立札が立つてゐる。誰のしたことか、もう訊いてみなくもわかる。吃と土の愛を語り、作物の愛を語り、家畜の愛を語るのを聞いてゐると、自然に頭が下る。獨立獨歩、新しく第一歩のドン底から、裸體一貫で立上つて行かうとする氣概にも打た

れた——野にも、山にも、家の中にも、人の心にも、彼が、精二といふ一介の百姓の青年が滿溢れてゐる。故郷の天地は彼で一杯である……!

さう考へるのは、蘭子だけの贔屓目だらうか。

だが、笑つてはゐてゝ、今、彼の上には、眞黒な悲運の雲が蔽被つてゐる。それでも、彼は、必ず立派に切抜けて、一歩一歩築上げて行くに違ひない。それはそれに違ひないが——まるゝ七年、助けられた恩は死ぬまで忘れまいと繰返しゝ自分にいつて來た。それなのに、すこしも報いることもせずに、不幸を見棄てゝすうッと結婚してしまふ、

『それで氣が咎められるのだわ!』と蘭子は思つた。

そこで蘭子は、思ひきつて、

『あたくし、別に結婚が嫌だといふのではないけど……すこしお願ひがあつてよ。お父さん、蘭子に、お金を千圓ばかり下さらないこと?』といつた。

『どうするのぢや?』

『精一さんにご恩返しをして、さつぱりした綺麗な氣持になつ



て嫁きたいのよ……！』といつて、蘭子は、心にあることを詳しく語つた。

　助けられた當時、百圓といふお禮はした。が、その金は、一錢だつて精二が自分のものにしなかつたことは誰も知つてゐる――父の秦造は、はじめは容易に承諾する樣子も見えなかつたが、蘭子に熱心に說かれるといくらか心を動かして、

『そりやア、お妙も感心に働いてくれる。そのためにも三百や五百の金は出してやつてもいゝと思つたが、どうも相手が丈太郞ではな……が、精二なら信用出來る。精二が獨立するなら、遣るといふ譯には行かないが、貸さう。期限をきめて無利子で貸してやらう。』といふところまで折れて出た。

　蘭子は、まだいくらか不足だつたが、部屋に返つて一人になつて考へてみると、それ以上父に要求するのは無理である。それでもあの一家は一時の零落から救はれる。お妙も悅ぶだらう――。

『あんな方だから、精二さんは借りないといふかも知れないけど……いゝえ、蘭子、どんなにしても承諾させる……！』

　すこしは肩の重荷が輕くなつたやうな氣持である。蘭子は安心して、快い夢路にはひつて行つた。

散つた花

　その翌朝、蘭子が眼を覺してみると、母家の方がなんとなく慌しい。急いで起出して來て、はじめに出會つた女中を捕へて、

『小夜、なアに？』と訊いてみた。

　その女中は、眞靑になつて、おろ〳〵してゐたが、

『あの、お妙さんが、昨夜、家出を……自殺するツて……！』

『えツ、妙ちやんが……？』

　晴天に落雷した以上の驚きである。蘭子も仰天して、顏色を變へて飛んで來ると――下男達は、今、精二の家にも知らせ、村の人達も賴んで、大勢で搜索に押出して行かうとするところで、勝手の方はごッた返してゐる。母も父の部屋にゐるといふので、蘭子は、いきなり襖を開けて、

『お母さん、大變なことになつたわね！』といひながらはひつて行つた。

　そこには、兩親と、兄の辰郞の三人が鼎のやうに額を集めて何事かひそ〳〵語りあつてゐたが、不意に闖入して來た蘭子に、ひどく吃驚して、蒼褪めた顏をあげて見返つた。彼女は、その樣子によつて、早くも自分に聞かせたくない話をしてゐることを察して、

『だつて、どうしてなのよ？　何故、妙ちやんが……蘭子にはわからない……！』と獨語を呟いて、おろ〳〵と引返した。

暫く經つと、母の鉦子が出て來た。蘭子はすぐに捕へていろいろ訊いてみたが、

『それがねえ、理由が誰にもわからないのですよ。書置にも、申譯けのないことが出來たから死ぬとだけしか書いてないし……。』

なる程、書置を見せてもらふと、母のいふ通りである。それなら何を秘密らしく相談してゐたか。一抹の疑惑も浮ばないではなかつたが、努めてそれを除けて、たゞ〳〵死遲れてうろうろしてゐるところを捕つてくれたら――なぞと、切に無事なことを祈つてやつた甲斐もなかつた。正午近くになつて、十町ばかり川下の淵で、溺死體となつて發見されたといふ報知が來た。

あゝ、たうとうお妙は死んだ！　蘭子は、取亂さんばかりになつて、

『妙ちやん〳〵――可哀さうに！』と、ひた泣きに泣きだした。

が、何故自殺したか――あんなにも温順しい、間違ひなぞを惹起す筈はないと思はれるほど悧巧な娘だつたのに……？

いづれこれにはよく〳〵の深い理由がひそんでゐるには違ひないが、蘭子は、わからないことはわからないとして――あれほど兄妹仲のよかつた精二の心の傷みを想遣ると、友情の唆きが輪をかけて、胸も破れるやうな氣持がする。飛んで行つて慰めてはやりたかつたが、まさかその場に驅附けるやうなことも出來ない。悲しみをじつと抑へて待つてゐると、夕方になつて、やうやく檢死が終つて、死體を精二の家に引取つたといふ報知があつた。彼女はすぐに立上つて、

『お母さん、あたくし、行つて……。』

出掛けて行かうとすると、母は狼狽てゝ引止めて、

『蘭子さん、いけません。そんな場所に出洒張るものではありません！』

『でも、あたしと妙ちやんとは……。』

『いゝえ、行つてはいけません。お父さんがよくして下さる。あんたは家に落着いていらッしやい！』

『……？』

何故なのか。何故行つて、おわかれをしたり、お通夜をしてやつたりしてはいけないか。蘭子にはどうしても解されない。奧齒にものが挾つたやうではあつたが――いつになくきびしくいはれたので、まだ明日もあることだと考へて、詮方なくその日は思ひとまつた。

そして夜になつて、兩親と三人は同じ部屋に集つて――兄の辰郎は、隱れでもしたかのやうに、晝間から姿を見せない。が、話は一向はずまなかつた。父の泰造は、時々思ひ出しては

ほろ〱と涙を滴してゐる蘭子の氣を引立てるつもりで、

『蘭子、早速、今日東京に手紙を書いてやつたよ。』といふ。

『なんの？』

『承諾の返事だ、昨晩の話の。何を惚けた振りをしてゐるのぢや。はゝゝ。』

『さうを……。』とばかり、蘭子は、空ろな氣の拔けた聲で受けたきりだつた。

さうした出來事のあつた日に、結婚の話どころだつたらうか。またすぐ、氣拙いやうな重苦しい沈默が――おそらく、精二の家よりひどいだらうと思はれる沈默が、沈默につゞいて起つた。

すると、かなり遲くなつて、女中の小夜が顏を出して、

『あの精二さんがお見えに……。』

賣らぬ遺書

『何ッ、精二が來た？』

はッとしたらしい聲に、蘭子は、思はず父の顏を見た。ところが父ばかりではない。母も同じやうに當惑と、狼狽の色を浮べてゐる――小夜も困つたやうに、

『はい、はじめは若旦那さまにお會ひしたいといつてお越しになりましたのですが、さう申上げると、嫌だと仰有いますので、今度は旦那さまにお目にかゝりたいと……。』

『ふむ……ともかくも會つてみてやらう。どこにゐる？』

父の泰造は、餘ッぽど考へてからかういつて立上つた。蘭子もつゞかうとすると、

『蘭子さん、あんたはいけません！』

またしても母にとめられた。何か理由があるに違ひない。察して直接顏を合せることだけはやめにしたが、抑へがたい衝動に引摺られて、ひそかに襖の蔭から窺つた――精二は、わづか一日の間にどれだけ心を傷附けられたか、一目見ただけでもよくわかる。廣い臺所の、薄暗い内庭に、眼を窪ませ、憔悴しきつて茫然と佇んでゐた。泰造は、その前に突立つて、

『精二か、遲くなつて何んぢや？』と、はじめから焦々した、詰るやうな態度でいつた。

『お願ひに上りました。まことに申上げかねますが、若旦那に、一度、私の家にお越しが願へればと存じまして……。』

『どんな用事か？』

『はい、あの……妹は死にました。一緒に悲しみを分けて頂けたらと考へますので……。』

『お妙は女中、なんの理由があつて辰郎が出掛けて行くのぢや？』

溜息を吐いて、精二は默つた。が、やがていひ辛さうに幾度

も躊躇した上で、

『お羞しい次第ですが……お妙は姙娠してをりました……！』

物蔭で聞いてゐた幽子は、あッと小さな驚きの叫びをあげたが、急いで自分の口を抑へた。いつの間にか、母の兼子も、兄の辰郎も傍にやつて來て、同じやうに聽耳を立てゝゐる――父の泰造は、明らかに見苦しいほど狼狽した。が、すぐに押隠して、

『それがどうしたのぢや。お前のいふことを聞けば、辰郎がお妙をどうかしたやうにもとれる。が、餘計なことはいはんでくれ。辰郎は和田の大切な後繼息子ぢや。それとも、何か……證據でもあるといふのか？』

『これだけ申上げればおわかり頂けると思ひますが……まだご存じなかつたらご尤もです。お目にかけませう。』

といつて、精二は、餘儀なささうに懐中から一通の封書を取出して渡した。その封書はかなり厚かつた。泰造は默讀しだした。

『……お妙は、何もかも自分は惡くなかつたやうに書いてをりますが、そんな譯のものではありません。彼女も惡かつた。惡かつたが……弱い女でした。死んでしまひました……出來たことだ、死ななくても、この兄が、宥さないで、ひどく責めると……。』終りの方は獨語のやうにいひかけたが、精二の聲は涙に顫へて途中で消えた。

泰造は讀終つて、頷いて、

『よろしい、わかつた、金ぢやな。いくら欲しいのぢや？』

『滅相な。金ではありません！』

『さうぢやない。お前の妹は家孝行ぢや。相手もわからん種を孕んで、困つた揚句……死人に口なしぢや。辰郎の名を書いておけば、ともかくもお前の家が沒落せずに濟むといふものぢや。はゝゝ。遠慮なくいへ！』

『旦那、金を頂きに來たのではありません。お金は頂きません！』

『眞僞は別ぢや。辰郎の名がわしの眼に觸れた以上は、棄てゝおけんのぢや。賣れ。買はう。五百か。千か？』

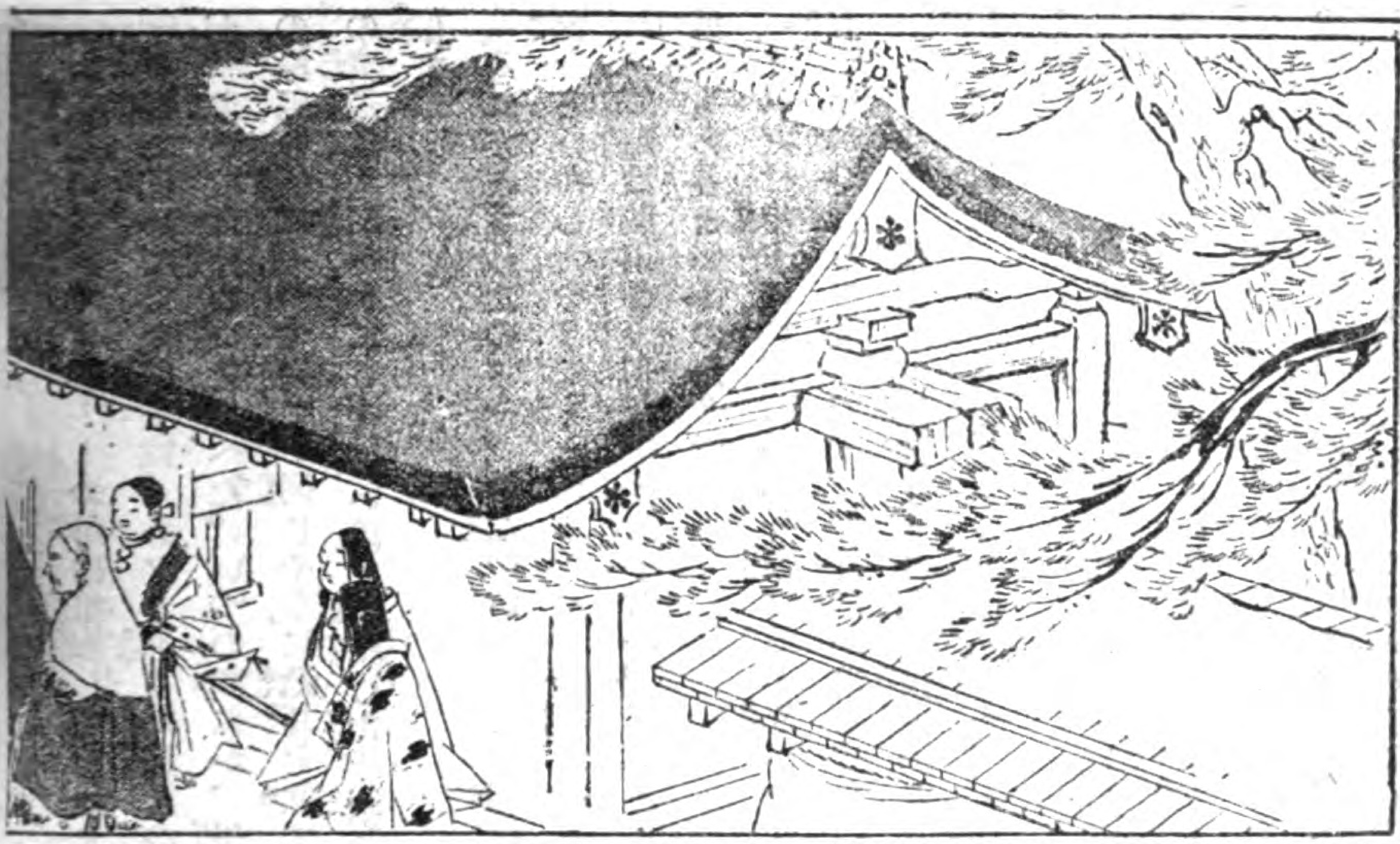
『妹の書置は賣物ではありません。賣るのはおことわりいたします！』精二は、きつぱりといつた。

『わからん奴だ。慈悲で買つてやるといふのに……それなら、なんのために遲く、人目を隱れてやつて來たかッ！　賣らんものならこんな出鱈目が何になる……！』

『あ、旦那、それは……。』

が、遲かつた。泰造は、持つてゐた封書をぴり〳〵と引裂いてしまつた――一瞬間、流石の精二もさッと顏色を變へた。怫然と握緊めた拳がわな〳〵顫へだした。

（つゞく）



戯曲 道元と時頼

中村吉藏作
尾竹國觀畫

時　寶治二年

登場人物

道元禪師
懷奘
玄明
執權 北條時頼
松下禪尼
平左衛門尉
松田彌三郎
波多野義重
奥方
侍女さつき
その他、北條家重臣、郎從、等
永平寺僧侶、群衆等大勢

場所　鎌倉及、越前永平寺

第一場　時頼邸門前

大門の左右は鰭板、三つ鱗の定紋附けた幔幕が内外に張りわたされて、ものものしい風情である。



（下部二三人、門前を掃き清めて居る）

下部甲。……何んでもこゝらのお加持坊主や祈禱坊主とは違つて、はるぐ入宋して修行して來られたえらい坊さんぢやさうな。

同乙。……ウーム、將軍家を京都からお迎へする時のやうな騒ぎぢやからな、よつ程えらい坊さんぢやらうよ。

同丁。それぢやア大勢のお供坊主がぞろぐつながつて來るのだらうな、ヤレヤレ又、鎌倉の米の値が上らうぞ。

同甲。シーッ……めつたな事は云ふまい。お上のお好きな事なら、今にこちどらまで坊主になれと御布令が、出ようも知れんぞ、その覺悟で暮らすことぢや。

同乙。ぐづぐしてる中に、もうお着ぢやらうぞ、叱られぬ前に、早く片附けよう。

（せッぐと掃き立てる、水をまく）

（早馬を走らせて見張の武士、松田彌三郎が門前に乘り附ける、ひらりと鞍から飛び下りて門内に急ぐ。

やがて門内から烏帽子、狩衣、指貫の正裝した平左衞門尉、その他の重臣、美々しく輝く袈裟法衣に包まれた律、眞言の僧侶等十數人に交りて、上﨟達も立現れそこらの板際に列ぶ）

平左衞門尉。（松田に話しかける）お供は大勢であらうな？

松田。私が見かけましたのは唯三人の旅姿のまゝの法師方でございました、いづれ御先き供の衆でございませう。

平左衞門尉。お迎ひの輿は切通しあたりまでは行つたであらうか？　唯今明日に御下向とだけで、くはしい事は一切御知らせがないので、こちらもま

ごついてゐるわけだが……。

松田。げう〳〵しい出迎など、御抑へ下されいと、そのお先供の法師方がくれ〴〵も申されましたが、こちらでは執權職の御申附もあり、さうもなりませぬからと、ことわつては置きました、……オヽ、あれに見えるのが、そのお先供の衆でございます。

（皆、その方に目を向ける）

（道元は懷奘、玄明を連れ、墨染の衣に麻の袈裟がけ、笠を着て身輕に扮裝ち飄々と歩んで來る）

平左衞門尉。（無雜作に）これは〳〵、遙々御苦勞に存じます、御先供の方々であられようが、禪師は間もなくお着きであられませうな？

玄明。（笠をぬいで）禪師とは、道元禪師のことでござりますか？

平左衞門尉。勿論、一同は斯うして道元禪師樣をお出迎ひしてゐますのぢや、執權職にも、松下禪尼殿も、今にこゝへ御出でなされる。

玄明。さてもげう〳〵しい沙汰ぢや、禪師はかゝる事が酷い御忌ひなので、この度もくはしい前ぶれもせず、御下向なされたのでござりまするぞ。

懷奘。（靜かに）禪師はこれにゐられます。

平左衞門尉。（聽き迷へる顏色）エ、この御方が――禪宗の御方は、とかく俗を嫌に強いて、人の惡い事をなさる習はしがあるさうぢや……禪師なら迎ひの御輿にお乘りなさつてる筈ぢや。

一同。まだ御輿は見えぬやうぢやな。

（向を見たり、こちらを見たり、人々は眼引き袖引き、さゝやき合ふ、出迎の僧侶等は嘲り顏を見合せる）

一人の律僧。貴僧等は、御先供の衆であられような？

一人の眞言僧。禪師が天下の執權職の御邸へ入られるに、墨染の衣、麻の袈裟がけでもありますまい、御先供の衆が、鎌倉者の肚膽を拔からうとて、じよう談を仰しやるのであらう。

平左衞門尉。この方々を、小休所に案內したが善からう。

松田。ハッ……何卒こちらへ……（と小門の方へ行きかける）

（道元、默つて立つてゐる）

松下禪尼。（茶色がかつた法服に袈裟がけ、門內からつか〳〵と走つて出て、恭しく禮拜）禪師さま、はる〴〵と、善うこそお越し下されました。

道元。（會釋）御出迎を受けて恐れ入ります。

平左衞門尉。御先供の衆でござります、尼御前にも、道元禪師を御存じの筈はござりますまい。

（一同、へんな表情をする）

松下禪尼。イヤ、道元禪師さまに違ひはありますまい、一目見れば御先供の衆か、禪師さまかは分ります。

道元。いかにも道元でござります。

（輿をかついだ者が近づいて來る、重臣も僧侶たちも、その方に目をやる、附添の武士が走り寄つて）

附添の武士。禪師さまは、何うしても、輿にお乘りなされませぬ。
平左衛門尉。してその中には？
附添の武士。御經卷でござりませう、これを載せてくれと仰しやりまして……。
（一同、呆氣に取られながら、道元に禮拜）
時頼。（烏帽子、狩衣、指貫、門内より出て來つて）禪師には、ようこそ御下向下されました、時頼、この上もなう本懷に存じます、尊い御導きによつて、佛になる機縁が來たのでございませう。（合掌禮拜）
道元。何卒さうありたいものと思ひます。
松下禪尼。さぞ御疲でございませう、何卒御通り下されませ。
時頼。何卒……。
道元。では御免……。
（案内されて、懷奘と共に門内に入る）
玄明。（お迎の僧侶等の方を振向いて）……本來は、國王、大臣に近づくなと仰しやる禪師が、度々の御懇望によつて、思ひ立たれ鎌倉への御下向でござりますぞ、黑染の法衣、麻の袈裟は釋尊出家の本懷徒らに金襴緞子に身を着飾りたがる近頃の僧侶はとかく佛心の暗さを、外面で光らさうとする心掛でがなござらうお互に、氣をつけたいものでござる、
（云捨て、スタ〳〵と入る）
—（僧侶等は顏を見合せて啞然とする）

第二場　（暗轉）

執權邸内、持佛堂、正面の一段高い處には釋迦佛の像が立ち、蠟燭が燃え、香がゆるくゆつてゐる、その下に近く、板敷の上に道元、時頼、松下禪尼が、坐禪し、廊下の柱の陰や、壁に向つて平左衛門尉始め五六人の重臣、松下彌三郎等も寂然と坐禪してゐる。

玄明、警策を手にして、そこの廊下から板敷の間を靜に廻つてゐる、平左衛門尉がしきりに眠つてゐる、眠を堪へようとして、膝を抓つたりしながら、又眠りこける、玄明、傍へ寄つてぴしりと打つ、左衛門尉は怨めしさうに玄明の顏を眺め、伸び上つて一座を見廻すと、松田彌三郎がコクリコクリとやつてゐる、その方を指でさす。

玄明、彌三郎の傍へ寄つて行き、ぴしりと打つ。
松田。眠つては居りませぬ、無體な事をなされるな。
玄明。シーツ……。
松田。某を打たれる程なら、あれ、あそこにも（と時頼の方を顎でさす）
（時頼は身動きもしないが頭はやゝ前に垂れてゐる）
玄明。シーツ（と叱つて、やがて時頼の傍へ進む、暫らく樣子を見る、打たずして退いて、又一めぐりする、平左衛門尉が又コクリ〳〵眠る、打ちかけて止める、彌三郎も眠つてゐ

る、輕く打つ、眼を瞠つて玄明を睨みすゑる。)

玄明。(一喝)下られいッ。

松田。何を云はるゝのぢや?(と反抗する平左衛門尉がハッと眼をさまして、松田を睨み附ける、松田玄明に引ずられて、しぶ〳〵と下つて行く。)入代つて、懷奘が入つて來る、一座を見廻してツカ〳〵と時頼の傍へ寄り警策で肩先をくらはせた、時頼、ハッとして姿勢を正す。

その樣子を眺めてゐる一人の重臣の傍へ近寄り、懷奘又警策を打下ろす。と默つて姿勢を直す、他の坐禪者も嘶然として緊張する、

遠く鷄鳴が聞え、寺々の鐘の音がひゞき合ひ、太鼓も聞えて來る)

道元。(口を開いて)、時刻なれば、朝の行はこれで終らう、度々申す如く、佛にならうと思はれるなら坐禪が一番大切でござる、無道心の者は一時半時の坐禪でも眠氣がさすが、無常迅速、念々に明日ありと思ふ事なく、今日、唯今ばかりと知つて、存命の程は佛道に隨はんと心がけ、ひたすら行を力められい、畢竟、佛道に隨ふことは無法利生のために、身も命も、心も捨てゝ諸事を行ずる事でござるぞ。

(一同敬禮)

時頼。(衆を顧みて)みなの衆はこゝを立たれい、時頼、折入つて禪師に御敎へを受けたい事がある……。

(平左衛門尉始め一同順々に退く、後には禪尼と時頼、道元、懷奘、玄明が居殘る)

禪尼。いづれ佛道の事であらう、妾もこゝにゐて差支あるまいか?

時頼。差支ござりませぬ、……禪師には何卒あれへ(と上座を指さす)

道元。(一寸と會釋して立ち、釋迦佛に香をくゆらせて合掌、上座へ直る)

時頼。永々の間、尊い御敎へを受け、已に戒をも授けられたお庇で、發し難い道心を發し、行じ難い佛道を行じようと、日日夜々に心がけ居りますせゐか、坐禪三昧にも漸く入りかけたやうに存じ、忝うございます、が今朝、坐禪して我、我を忘れ、自づと無念無想の境地に入つて、ハタと佛に出逢つたやうで何んとなく歡びに滿ちあふれて、心の眼をみひらくと、佛と思つたのは恐ろしい魔の姿をした異形の者に化つて來ました、しかもそれをつく〴〵と見すゑると、大曾祖父時政や、曾祖父義時が焦熱地獄の苛責に惱むやつれ果てた俤のやうでもあり、又祖父泰時が、刀葉林地獄に墮ちて、滿身に生血を浴び、何んとも云へぬ憂悶の目ざしで、のぞいたやうでもあり、靜まつた淵のやうであつた私の胸が俄かに、沸り立つて、パッと鬼火が燃え上つたかと思つた刹那、懷奘和尚の鉗打を受けましてございます、如何にしたら、かゝる一切の邪念を拂ひのける事が出來ませうか?

道元。それこそ爭はれぬ因果の道理でござる、先祖代々の罪業

は、子孫の身に報いて來ずにはおかぬ、今のまゝでは、たとへ佛に逢はうと力められても、隙さへあれば魔に附け入られませうぞ。

時頼。エ……それを恐れて居りますればこそ、身、不肖ながら道心を發して、日夕佛に仕へる覺悟を堅めた時頼でございます、今、伽藍を建てゝ居りますのも自行化他を成就せんが爲めの一つの行事であり、やがてはこの頭を丸めて、入道と名乘りたいと思ふのも、先祖の罪業消滅を願ふが爲めでござりますが、功德はありませぬか？

道元。功德はありませぬ。

時頼。では如何したらよろしいのでございませうか？

道元。先祖代々の罪業を消滅し、心から即身即佛を念じ、又行ぜうとせられるのが僞りでなかつたら、一切を捨てられい、世を捨て、家を捨て、身を捨て、心を捨てられい、中途半端はごまかしでござる。

時頼。……素より佛道の爲めに身をも惜まず、心をも捨てる覺悟では居りまするが、今天下を預る北條家の執權職たる私が、眼前の民百姓を捨て、直に世を遁れて叢林に入つては、天下は誰が治めませう？　それが佛の御心に適ふとも思へませぬ、先祖時政、義時に罪業があれば、又泰時の存生中の行事にあやまちがあれば、眼前の民百姓を慈んで、先祖の罪業を贖ふのこそ、眞の佛道に適ふものではございますまいか、如何でございませう？

道元。（端然として）その御答へをする前に、かねてから御尋ねしたいと思うた一儀がある、よき機會であるから、今こそ申さう、御身は佛道に入らうとするのが御本心であるか？　それとも佛道に入つたと、世俗に思はせようとなさるのが御本心でござるか？　如何でござる？

時頼。（顏を見上げて）素より佛道に入らうとするのが本心でございます。

道元。しかと左樣か？

時頼。禪師の御眼より見れば、まだまだ覺悟が足らぬでもございませう、それにつけても、禪師の御傍で一向專念に修行の功夫を積みたいと思ひますれば、あの建立中の伽藍の開山として、この鎌倉にお留り下されい、不肖は素より、道俗を末長く御導き下さるやう、只管御願ひいたします。

禪尼。かねて私よりもお願ひして居りますが容易に御承引下さらぬので、恐れながら殘念に存じて居りました、相模守殿の心からの今の願ひ、何卒御聞屆け下さりませ、さらば足らはぬ者ながら、御教へに化せられて、興法利生の御手びきにもなられる事かと存じられます。

玄明。この事は實は私へも度々御話がございました、この機會に、口を添へてお願申上ます。

道元。お寺の建立よりも、時頼殿の心の礎の据ゑ方がずつと大事でござる、時頼殿眞實、求道の御心あらば、家を捨て身を捨て心を捨て、又天下をも捨てゝ、ひたすら佛祖の道を行

ぜられい、佛祖は迦毘羅衛國王の位を捨て、乞丐の身となつて道を行ぜられた、まして名利に貪着する凡夫の身が、名利をそのまゝ身に着けて眞實の求道が得られませうか？それとも佛道を行ずるやうに、世俗に思はれようが本心ならば、それは又別の事でござる。

禪尼。眞實、佛道に入るには天下の民百姓を捨てねばなりますまいか？　禪師様のお教へは、嚴かな教へでもあり、又嚴さ過ぎるやうにも思はれますが？

道元。天下をも、民百姓をも捨て、佛道を行ぜよとは、佛道を行じて、天下をも、民百姓をも救ふ事でござる、佛道は世間、世俗のためにあるものではなく、世間、世俗こそ佛道のためにあるものでござるぞ。時頼殿に、この一大事を説くのは、大象に針の目を通れと勸めるも同然であるが、身心脱落の本意は、この一大事を押し切つて進むところにあるのでござる。

時頼。御教へ、ひし／＼と身節に沁みまする……しかし、時頼、天下を捨つれば、天下は如何に成り行きませう？

道元。その事は御心配には及ばぬ、憚りなく申さう、抑も北條家の執權職



は、陰謀の手で源家から奪ひ取られたものではござらぬか？　又承久の亂の時も　畏多くも三皇を島流しにし奉つて、下剋上の大惡例を示された、御身は御存じなくとも、先祖の罪業をそのまゝ受繼いでゐられる上は、今後子孫の繁昌は覺束ない、今天下は表面は穩かに治まつてゐるやうでも、底には渦が卷き返つてゐる、このまゝで行けば、恐らく北條家の滅亡も遠くはありませぬぞ。

禪尼。（驚愕の色）ヱ……先祖の業因で　北條家が滅亡すると仰いまするか？

道元。いかにも……

禪尼。（悶々して）如何いたしたら業因をのがれる事が出來ませうか、何卒御敎へ下されまし、……相模守殿、御敎を願うたが善い。（時頼は沈默、考へ込んでゐる）

禪尼。……佛寺を建立し、佛僧に供養しても先祖の罪業は消滅せぬと仰いまするか？

道元。百尺竿頭更に一歩をすゝめて、手を放ち、大死一番の覺悟が肝要でござる、即、北條家が私してゐた政權を直に朝廷に還し奉られゝば、先祖の罪業は消滅するばかりでなく、天下は自ら歸する處に歸して、民百姓もその堵に安んずる事が出來るでござらう、北條家の子孫も天罰を免れ、分に安んじて末永く榮えられよう、我が一身の名利



を捨て、一向に佛に成る道を行ぜられい、身心脱落はこの外にござらぬ。

禪尼。(合掌)……始めて眞の佛に逢ひ奉つた心地がいたしまする。

懷非。(涙を押へて)多年隨從した身でござりまするが、これ程までに御本心を打わつて御說きなされたのは始めてのやうに承はりまする。

時賴。(痙攣したやうな表情で)誠に大獅子吼を聞く思ひで、時賴、衷心から慄へ上りましてございます、加持祈禱で御布施を貪る僧侶たちの多い今の世にこれこそ空前の大導師、難有しとも忝しとも申上やうはござりませぬ。(合掌)

玄明。では、相模守殿にも、早速に大決心がついたのでございまするか？　天晴れの名執權……。

時賴。(躊躇しながら)……即座決心とは申しかねるが、いづれ皆とも談合の上、讓るべき天下は讓り、奉還すべき政權は奉還して、眞に佛道を行じたいと心から思ひ居りまする。

懷非。(沈着に)一期は夢の如く、光陰は早く移り、露の命は消えやすいものでござります、時は人を待たぬ習ひでございすれば、思切つて佛意に順ふ大決心をこそ願はしう存じます。

禪尼。(哀願的に)誠に北條家の一大事には相違ありませぬが、子々孫々の爲めでもあり父先祖への孝行でもあり、剩へ天下の民百姓の爲めにもなるとあれば、何卒よく〳〵思案して、世を捨て、身を捨てる覺悟をなさつて下さい、明日をも知れぬ年老つた母が、いつでも安心して目がねぶれるやうに……一期のお願ひ……(頭を低げる)

時賴。……即座にお答へも出來かねますれば、今三五日の御猶豫を……

道元。道元は十年でも、百年でも待ちませうが、無常は明日をも待ちませぬぞ。

時賴。ハツ……その儀は心得て居りまするが……

玄明。(執成すやうに)即座にとも申されますまい。

懷非。無常迅速は、現前の相でございます。

禪尼。(時賴を見て)……三五日の中に、しかと御返答を申上させます。

道元。御心に任せます。

時賴。(ホツとして)難有うございます、それにつけても、この鎌倉にお留りの儀は如何でございませう。

道元。それは御返事を承つた上で御返事いたしませう。

時賴。ハツ……何うもいろ〳〵忝う存じました、何卒御休息下されませ。

道元。ではよく〳〵御思案なされい。(起つ)

(懷非、玄明も起上る、禪尼は送つて入る)

(時賴。額の汗を拭きながら立つてゐる)

平左衛門尉。(もの蔭から立現れ)殿……とんでもない事を仰される禪師でございますな。

時頼。あれほど打わつて、ヅカ〳〵ものを云ふ御僧には始めて逢つた……私も膽を抜かれたぞ……。

平左衛門尉。あれはきつと朝廷方の廻し者でございませう、鎌倉の政權を京都へ返せとは蟲が善過ぎる、ウカとその手に乘るやうな、人の善い殿でもありますまいが……。

時頼。(思案して)それが果して佛道なら行じもせう。

平左衛門尉。イヤ、それこそ天下大亂の基、殿の佛いぢりも、世間への聞えになさるのは結構だが、ミイラ取りがミイラになられては一大事でございますぞ、何しろあの賣僧、生かしては返されませぬ。

時頼。勿體ない事は云はぬものぢや。

平左衛門尉。(刀の柄をたゝいて、後を睨み)殿に代つて私が返事をしてやります。

時頼。めつたな事をしては成らぬぞ。

平左衛門尉。殿こそめつたな御返事はなされますな……ウム、松田彌三郎にさしづめ、この役を申附けよう。

(時頼。默然と考に沈んで凝立する)

(平左衛門尉は、向うの方を睨んで立つ)

——カーテン——

第三場　鎌倉白衣舍

茅葺の屋根、上手正面に佛壇、座の中央に爐が切つてあり、縁が附いてゐる、庭前に白梅の花の咲いた老木、下手には小い柴戸、竹茶垣が廻らせてある。

懷弉は庭の一隅で薪木を割つてゐる、玄明は爐の灰をいぢりながら話しかける。

玄明。やつぱり鎌倉は暖かいな、もう梅があんなに咲いた、越前の山はまだ雪が深からうに。

懷弉。私はとかく賑やか過ぎて騒々しい鎌倉よりも、越前の山の中が慕はしい、この關東はもつと武骨で、飾り氣がなく、いぶし銀のやうな底光りのする處と聞いてゐたが、來て見ればとかく京都の眞似ばかりしたがつて、上も下も上邊飾りに飾らうとする、口で佛の事を云ふのも、心の癖性をいつはる方便のやうに思はれて、しら〳〵しい氣がするではないか。(薪を割る)

玄明。慥かに、然ういふところもある、だからそれを敎化して、佛道に入らせるのが、我々の勤め甲斐にもならうではないか？　腐れ切つた京都とは違ひ、今この鎌倉は天下の政治の權力を握つてゐる丈ピチ〳〵した活氣がある、この活氣に、佛の魂を入れるのが、興法利生の本とうの道に適ふものだと思ふ、それが即佛道を天下に行ふ事になるのではないか？

懷弉。それは世俗の情ぢや、禪師は世俗の情を非とせられる、信徒の頭數の殖えるのよりも、ほんとうの修行者なら五六人でも善いと仰せられる。

玄明。それはかねて知つてゐるが、この度の鎌倉への御下向も、始めは、容易に御承知がない、志があれば山川江海を渡つても來いと仰せられてゐた、それがとう〳〵足を向けられたのも、よつ程深い、大きな御發心からではあるまいか？このあひだ殿中で、思切つて執權職へ仰せられた言葉を何んと聞かれた？

懷奘。イヤ、あれこそこの度御下向の御本心ぢや、私した政權を朝廷に奉還したら、北條氏も救はれる、天下の民百姓も救はれる、そして王法と佛法とが一つに歸するといふ御趣旨であつた、傍で聞いてゐて、私は胸中が慄へ出すほど難有かつたぞ。

（薪を割る）

玄明。イヤ、一應は然うぢやが、北條氏が易々と政權を朝廷に還さう筈はない、禪師はつまりあの鋭い機鋒で相手の肚膽を拔いて北條家を禪師の前に屈服させられた、鎌倉一統が今後は禪師のお示附け通りに動く事にならう、即ち我宗が天下を動かす事になるからこれがほんとうの佛



法、王法一に歸すると云へるのぢや……さういふ御下心だと私は思ふ。

懷弉。ハ、、、、人さま〴〵の考へ樣もあるもんぢやな。（構はず、餘念なく薪を割る）

玄明。引ッ込思案ばかりするが能でもあるまい、禪師が始めは斷つて、後には、こゝへ下向されたのも、よく〳〵深い思召があればこそぢや。

松田彌三郎。（供侍一人連れ、醉拂つた赤ら顏で、ひよろ〳〵した足附で門内へ入つて來る、懷弉を見て）これは〳〵、納所坊主かと思へば禪師の一の御弟子と聞く懷弉和尚が、そのやうな卑しいまねをなされいでも善かりさうなもの、人手がなくば、薪割人夫はさし向へさせませうに。

懷弉。松田殿は、御機嫌でござりますな。（薪を割る）

松田。イヤ、今日はちよつとそこらまで梅見に出かけまして、一杯やりましたところ、いゝ機嫌になりました、……薪割りなら、……コレ、御手傳ひせいッ。

供侍。はーッ。（と立寄る）

懷弉。イヤ〳〵、それは御無用になされませ、これも修行でございます。

松田。へエ……この鎌倉の寺方には、そのやうな卑しい手業をなさる御坊たちはゐられませぬ、勿體なうございます。

懷弉。イヤ、手をあけて遊んでゐるのこそ勿體なうございま



す。（薪を割る）

松田。でもあなたのやうな方が、さうしたまねをなさらいでも善ございませう。

懐奘。イヤ、一日作さゞれば一日食はずで、何卒捨つておいて下さいませ。（薪を割りつゞける）

松田。ヘヱ……さうしたものでございますかな。（縁に腰を卸ろす）

玄明。（庭朶を折りながら鼻先であしらつて）御機嫌でございますな？

松田。（眼を光らせ）汝さんは、兄弟子にあのやうな働きをさせて、自分は座敷に据つて、それで善いと思はれますかな？

玄明。薪を割るも、湯を沸すも、皆同じ修行でございます。（火打筥を取つて、火を打つてゐる）

松田。（不平さうに）フーム、さう聞けばさうかも知れん……よし、一つ問答しよう。什麼和尚、その火は石から出るか、鐵から出るか？

玄明。貴殿は、父の子か？　母の子か？

松田。（低頭）まゐつた……ではまゐつたしるしに、この齋をさし上げたい、梅見屋敷で調へた品、禪師さまへもさし上げてもらひたい。（供侍の手から受取つて、筥に入れたものをさし出す）

玄明。それは〳〵（蓋を明けて見て）……はゝア、これは鎌倉海老の輪切のやうに見えまするが？

松田。形は海老でも、中味は菓子、一つ御試味なされい。

玄明。でも、それは御無體な……。

松田。（威猛高に）何も無體な事はござらぬ、イヤ、無體といへば貴僧は先頃、殿中で坐禪した時、現に眠つてゐられる執權職には威勢に恐れて、策を當てず、それがしばかりをひどく打たれ、恥かしめられ、退座までさせられた、武士としてあの無體は忘れませぬぞ、何の遺趣があつての事か？

玄明。これはしたり、坐禪は行ぢや、行中に打つは佛祖に代つて、するのでございまするぞ。

松田。それがしばかり打たれたは如何なるわけか？

玄明。寐ぎたなく眠られたれば打つたのでござります、遺趣もない、遺恨もない、唯慈悲ぢや。

松田。慈悲だと仰しやれば、遺趣遺恨は持つまい、こちらも慈悲で、これを持參した、さア、召上つて下され、イヤだと仰しやれば、そつちに遺趣遺恨があるのぢや、タヾでは歸りませぬぞ。（そつと刀の柄に手をかけて）

玄明。（領いて）よろしうござる、菓子とあれば頂戴せう。（取つて口中に入れる）

松田。（大笑）ハヽヽヽ、生ぐさいものを召上ると見えるな。（供侍も笑ふ）

玄明。（けろりとした表情）口は鎌倉街道なれば、貴きも行き、賤しも過ぐ、不思議はござるまい。

松田。ではかゝるものも、通行しませうな？（やにはに刀を拔

いて突きつける）

玄明。（昂然として）敵か？　味方か？

松田。（聲高に）そなた等は京都からの廻し者で、鎌倉を窺ふ爲めに來たものに相違あるまい、正しく鎌倉の敵だ、さア、これを喉へ通せッ。

玄明。（咳拂ひ）關がある、敵ならば、通す事はまかりならぬ。

松田。何んと陳ずるとも、今日はこのまゝには許されぬ、先づそなた等を血祭に上げ、ついで禪師の首を貰うて行くのぢや、（一刀を上段にふり上げる玄明は泰然として坐禪する、松田は氣を呑まれて躊躇する）

懷奘。（靜かに近寄り）これは無體な事をなさる、我々が鎌倉の天下を窺ふなどとは、以ての外の惡推察、國王大臣に近づかぬを本意とし給ふ禪師が、ワザ／＼山川江海を越えての御下向も、執權職からたつての懇望ゆゑそれを機縁として行化のために盡さう誠心からでございますぞ、唯佛道さへ成就すれば、我々は少しも身命を惜むものではないが、酒を借つて無益の殺生をなさるのは、それこそ鎌倉武士の名折ではございませぬか？

松田。如何樣に申されても、禪師は朝廷の廻はし者と睨んでゐる目に相違はあるまい、鎌倉武士の刀の錆になるのが忌なら、すぐに歸られたが善い。

懷奘。引留められても、留まらるゝ禪師ではござりますまい。

松田。一日居られゝば一日丈、鎌倉の運がちゞまる氣がする。刄にかけても、この怨敵を追拂はねばならんのぢや。

玄明。（濶然と眼をみひらき）それは自分の手で自分の首をしめるのでござらうぞ。

松田。何ッ？（刀をふり上げて迫る）

松下禪尼。（侍女を連れて、門外から驅入る）これは何の狼藉ッ？

松田。（それを見るより周章て、刀を納め）ヤ、尼公さまか？（箱など取片附け）醉うてのたはむれ、御免下さいませ。（供侍つれて逃走する）

禪尼。御けがはございませぬ？

玄明。（一禮）……ようこそ……おかげで別條ござりませぬ。

禪尼。禪師さまは？

玄明。奧にゐられますが、只今これへ御迎へいたしませう……何卒御通り下さいませ。（玄明は奧へ入る）

禪尼。（座へ上つて）懷奘どの、御せいが出ますな。

懷奘。尼公にはようこそ……今、一二本で薪も割り了へますれば、そちらへ參りまする。（薪を割る）

道元。（立現れ）ア、善うこそ。

禪尼。（恭しく一禮）……今日はチト折入つての御頼みがござります。

道元。さア／＼、遠慮なく仰せられい。

禪尼。（見廻して）あの、禪師さまお一人に……。

道元。皆、身内の者でございますれば、何を仰せられても差支はありませぬ。

禪尼。でもございませうが……。

道元。では二人とも、あちらへ下つて居れ。

（懐弉、玄明退く）

禪尼。外でもございませぬが、北條家は先祖代々の重る罪業の報いで、子孫の滅ぶ日も近いとの仰せを聞いて、老先短い私は夜もおち／＼眠られませず、晝も佛事看經に暮らしながら、胸先に千本の針でも打込まれたやうでヂッとしてゐられませぬ、相模守にも、この胸の苦しさを打明けていろ／＼說きすすめては居りますが、天下を朝廷に還し奉る一大事の大英斷は容易に附かぬげにござります＊



＊る、今明日の中にも、禪師に會ひに參られませうが、何卒、慾を棄て、未練を捨てゝ天下のため、又北條家のためにこの一大事を決行いたしまするやう、ひたすら御勸めが願ひ度うて、押して參つたわけでございます、佛の御威光と御力により本人の心がさう導かれまするやう御教化を願ひ上げまする。

道元。（頷いて）尼公がそれ程までに、佛の道に思入つて、この一大事を時頼殿に決行させたいとの御志、重疊に存じまする、俗人が俗人のまゝ、佛の道に適うとせらるゝのも、容易な事ではありませぬが、まして俗人が一切の俗情をかなぐり捨てゝ、まつしぐらに、佛に成らうとなら、先づ財寶を捨て、妻子を捨て、身命を捨て、心をも捨てゝかゝらねばなりませぬ眞に一大難事でございますが、時頼殿心から僞りなく、さう願ひ求められるなら、行じ難しとは思ひませぬ、拙僧も手をお借し申しませう。

禪尼。（合掌）有難う存じます何卒左樣お願申します、相模守は、自分が天下を捨てゝ世を遁れて叢林に入るのは容易けれど、母はキッと後で悔まれる、今こそ一時の機會でそれを勸められても、一切を喪うた後では、何んなに悲まれるか知れぬ、今の胸の苦しさの何千倍も苦しまれよう、功德にはならぬ、いつそ、母上を見送つての後に、禪師の仰る通りにするなどと申ますが、私はそのやうな愚痴丈は捨てました、サツパリ捨てゝ了ひました、何卒その事をも仰り附けて下さいませ。



道元。はア、それは奇特な心がけでござる、曹溪の六祖は樵夫でした、薪を賣つて母を養*うてゐられたが、一日市へ出て客の金剛經を誦ずるを聞いて發心され、母の許を辭して黄梅に參ぜられた時銀子十兩を置いて母の衣食の料に宛てられたとある、衣食の料を氣遣はれる御身分でもないから、時頼殿が眞實、それ程の御發心なら、母御前たる尼公のお喜びは如何ばかりか、まことに佛意に適ひ、天道にも合する事と思はれます。

禪尼。はッ……政治の道と、佛道と一つ口には行かぬと、折折、相模守、申されますが、その邊も何卒よく／＼御教へを……。

道元。委細心得ました、今日まで鎌倉に滯在したのも、この日本の一大事を、天下の爲めに決せん心でござりました。

玄明。(立現れ) 執權職殿が御越しでございます。

禪尼。(驚いて) エ……では、私は、どちらへか外させていたゞきませう。

(玄明が、禪尼を奥の間へ導いて入る)

(時頼、平左衛門尉、從者等を連れて門口に立つ)

平左衛門尉。頼まう……

玄明。(立出て) はッ――これは／＼……。

時頼。禪師どのはお在か？

道元。ようこそ、何卒……。

時頼。御免下されい……左衛門尉は暫らく遠慮いたせ、禪師どのと、唯二人でゐたい。

(平左衛門尉、從者等、退く)

時頼。(座に上つて、禮拜)……さて、今日こそかねての一大事

の御返事に參つた、又御教にも預りたうて……。

道元。如何なる御決心が附きましたか？

時頼。禪師のお勸め、いかにも心魂に徹して、眞に佛祖の道を行ぜんには、先づ財寶を捨て、妻子を捨て、又天下を捨てゝ不惜身命の修行をせねばならぬと悟りました。

道元。（寂然として）そう悟りが附きましたか？

時頼。それに僞りはございませぬ。唯、下智鈍根の身の、一足飛びにそれを行ずる事が出來ませぬのが、凡夫の淺ましさでございます。

道元。（眼を瞬つて）それは度々申した通り、下智鈍根は口にすべき事ではありませぬ、唯、志の至ると、至らざるとで、この心がけさへ眞劍なら必ず遂げられまする、それには世間の無常を思はれるが善い、朝に生れて、夕に死し、昨日見た人が、今日はゐないのが、眼前にある眞實の眞理でござる、あまねく一切を捨てゝ涅槃の眞樂を求められるに、寸分の躊躇もいらぬ筈でござる。

時頼。（顏色を窺ひながら）そこの道理はよく分りまするが、かねての仰せにも、佛性は必ず成佛の後に具足する、これを究めるには二三十年も工夫參學すべしとの御言なれば、私もまづその工夫參學がいたしたい。

道元。それで？

時頼。ついてはあの建立中の伽藍に何卒御留まり下されて、鉗鎚をお加へ下さらば何よりも忝う存じまする。

道元。その御返事なら前にも申上げた、眞實、それ程の御志があるなら先づ私した政權を還し奉るべき處へ還され、民百姓を落つく處に落附かせ、先祖累代の罪業を消滅させて、その後にこそ、工夫參學なさるべきではあるまいか？あまねく一切を捨てゝ遁世が出來ぬのは、我身を貪るやうで、實は我身を思はず、遠き慮がないのでございまするぞ。

時頼。御尤ではござりますが、第一に、母、禪尼が、しきりに遁世をすゝめながら、やはり心の底では、世俗に執着も未練も持つて居ります、母を安らかに、あの世へ送つて後、心靜かに天下を朝廷へ還し奉つても遲くはございますまい？

道元。（微笑）……未練があるのは、母御前で無うて、却つて御身ではありますまいか？たとへ母御前に未練があつても、恩を棄てゝ無爲に入る、眞實報恩者とは、この事でござりますぞ。

時頼。母は先づそれでよしとしましても、多年北條家の恩顧を受けた天下の大小名が騷ぎ立てませう、さすればこれが爲めに大亂の因とならうも知れませぬ。

道元。さう云つて打捨つておかれゝば、郎從の中にこの大亂

がやつて來て、北條家は永く亂らぬ兇になりませうぞ、今こそ斷の一字を要する時でござる。

時賴。（憂悶の顏色）……成程、それもさうでございませうが、時機を考へるのが政の要諦でございます、いつそ天下を子の時宗に讓り、已に戒を受けた私は、この際、剃髮して佛門に入り、佛道の修行を勵みながら、政治の後見をして機緣の熟する時を待ち、一擧に政權を朝廷に還し奉る方法を講じては如何なものでございませう？

道元。はゝア、朝廷に還し奉るではなく、御子息に、天下を讓らうとの御相談なら、拙僧になさらんで、外の方々にされたが善い、世俗と佛法とを兩足にかけ、中途半端でうまく世の中をごまかして渡るには、それもよござらうが、あまねく一切を捨てねば斷じて佛祖の數には適ひませぬぞ。

時賴。（悄然として）……御教は至極正しいと思ひながら、今のまゝの時賴には、チと重荷すぎまする。

道元。（嚴しい口調）眞實、求道の志があらば百尺竿頭一步を進め、兩手を放下して天下の重荷をその肩から投げ捨てられい、身輕になりますぞ。

時賴。そして佛道に入つたら何が得られませうか？

道元。（儼然と）何も得られませぬ。

時賴。そして……それから？

道元。それが佛性を成ずる事でござる。

時賴。そして……それから？

道元。この外に、佛法の求むべきものは何もござらぬ。

（時賴、低頭して捨てたい、捨たい、「一切を捨てたい……けれども捨てかねる、凡夫ぢや、私はあさましい、凡夫ぢや、憐んで下され……」呻吟する）

（平左衛門尉は、先刻から門外で立聽してゐる、松田彌三郞は後庭から現れて、地べたをはひ寄つてゐる）

禪尼。（奥から立現れ）相模守殿、妾は先刻からこゝへ參つて居ました。何卒、尊い禪師の仰有る事を疎かに聞いて下さるな、母は何の執着も、未練も持ちませぬぞ、先祖の罪業の消滅又子孫の滅亡の救はれる爲めならば、天下國家にも代へられますまい、ましてその天下國家は本來、朝廷の司り賜ふものを、臣下が私かに掠めて政權を横奪し、人天の道を曲げたのでありませぬか？この期に思ひ切つて、曲げられた道を元の直な道に戻され、そなたにはあまねく一切を捨てゝ、佛門に入られゝば、一人出家して、九族天に生ずるとやら尊い佛果が得られませう、……母が心からの願ひぢや、……一世の願ぢや、何卒聞入れて下され。（兩手をつく）

時賴。（その手を執つて押戴き）御尤とは思ひまするが、私は凡夫ぢや！…何卒憐んで下され……

禪尼。（わき上る涙を拭いて嘆息）性來、素直な人であつたが、政治にかゝは



つてから心に陰と日向とが出來たのぢや。それだけでも妾は悲しい……。

時頼。（苦悶の色）この迷ひも王法と佛法と一つにしたいと願へばこそでござりまする……唯佛門に歸して、天下國家が捨てられるものなら、人間何の惱みもいりますまい、母御前、最早、三歳の子供ではありませぬ。

道元。（瞑目）九五の位を捨てられた釋尊はまことに三歳の子供のやうなのお心の力であつた。（禪尼は、堪らず、ワッと泣く）

時頼。母御前……母御前……とにかく一應、館へ歸つて、今一思案いたして見ませう、御一しよに……（と手を執る）

禪尼。（手を振拂つて）何度考へても同じ事ではないか？

時頼。又、篤と考へ直して見ませうから、まア御一しよに……（又、手を執る）

禪尼。（又振切つて）……妾は禪師さまに最後のお願がある……そなたは一足先へ歸られい。

時頼。（暫く母を見て）……では御先へ……改めて又伺ひまする（悄然として座を下る）

（平左衞門尉が門を開いて迎へる、時頼は入る）

禪尼。……禪師さま、尊い法の心を一筆お遺し下さいませ、生涯のお記念に……。

道元、頷いて、そこの几上の硯と紙筆を引寄せ、さら〳〵と認めて渡す）



禪尼。（一拜して、朗讀する）

…あら磯の波も得よせぬ高岩に、かきもつくべき、のりならばこそ…。（押し戴く）

道元。怠らず、修行せられい。

禪尼。忝うございます。（禮拜）では御免蒙りまする。（見返りがちに門を出る、侍女が立迎へて共に退場）

懷弉。（奥から立現れ）さて〳〵政權といふものは、よつ程執着の深いものと見えまする。

道元。（頷きながら）オヽ…この土地にもう用はない、歸らう、身支度せい。

懷弉。はッ…では早速支度いたしませう。

玄明。（立現れ）夫は餘り性急ではございませぬか？　方々への暇乞にも二日や三日はかゝりませう。

道元。そちは跡片附して歸れ、…わらぢは？

（懷弉、わらぢを持ち出し、道元に履かせにかゝる）

道元。イヤ〳〵私が履く、自分の支度をするが善い。

懷弉。ハイ……。

（わらぢを履き、笠を持出し、手早く旅支度する）

道元。…さア、歸る…玄明、早く後の始末をして歸れッ。

玄明。はッ、心得ましてございます…イヤ、何うもとんだ急な事になりまして……。

懷弉。イヤあんまりゆつくりし過ぎた位ぢや。

（道元。飄々として歩き出す、懷弉後を追うて行く）

玄明。（後を見送つて）こいつは一寸驚いたな……何うも思切りの善い事ぢや……。

（松田彌三郎は縁先に立つて唖然として見送つてゐる、ふと、玄明と顏を見合せる、互に泣笑ひの表情）、

―カーテン―
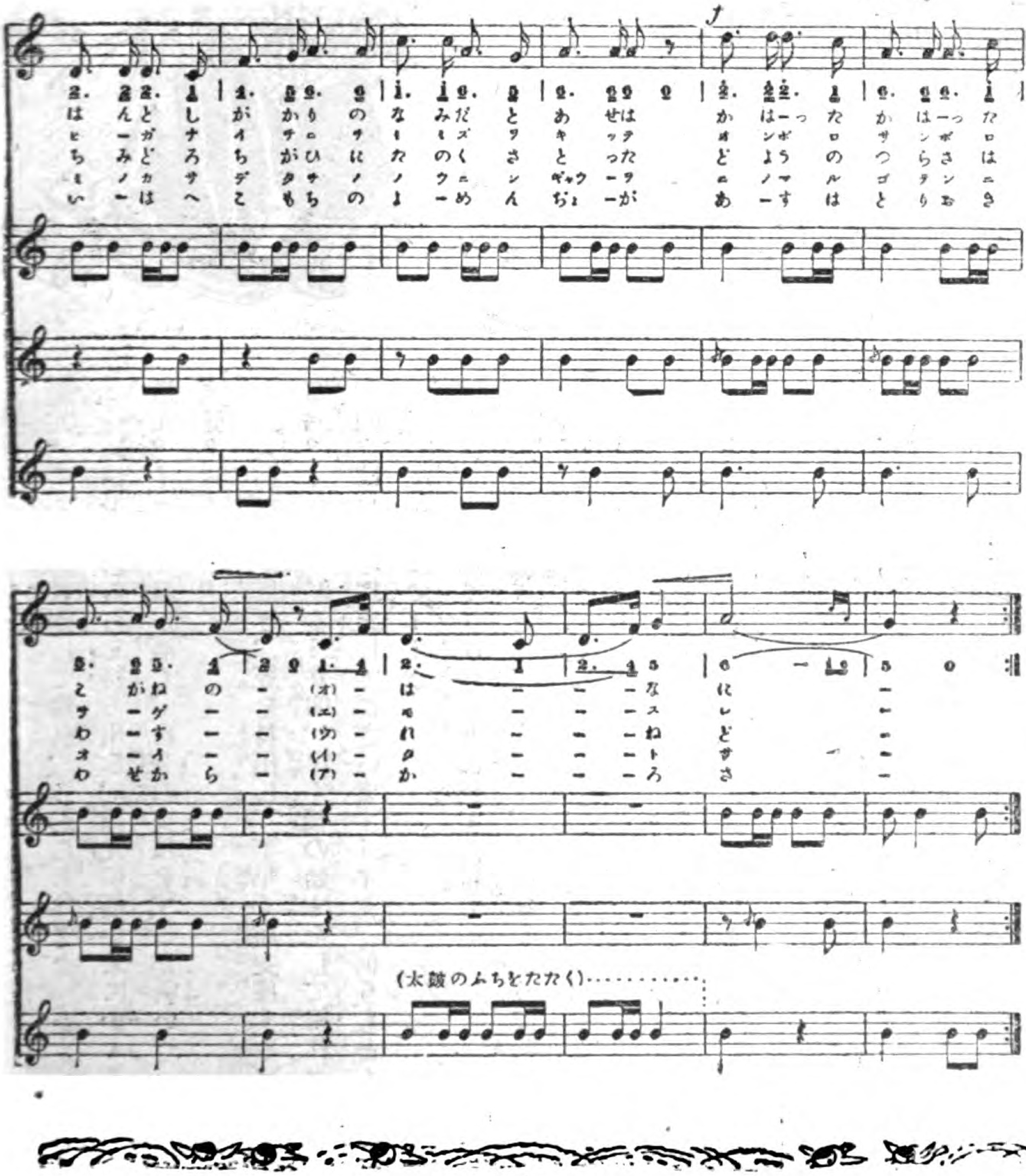
次號を御待ち下さい！

『道元と時頼』――これこそ中村吉藏氏が、多年苦心慘憺の結果、漸く出來上つた近來の大傑作です。次號に於ては局面一轉して越前永平寺の場面となり、聖僧道元を中心として、萬人を魅了せずにはおかぬ痛烈悲壯なる物語が、次から次へと展開してまゐります。必ず御一讀あれ。

豐年

横瀬夜雨作
弘田龍太郎曲
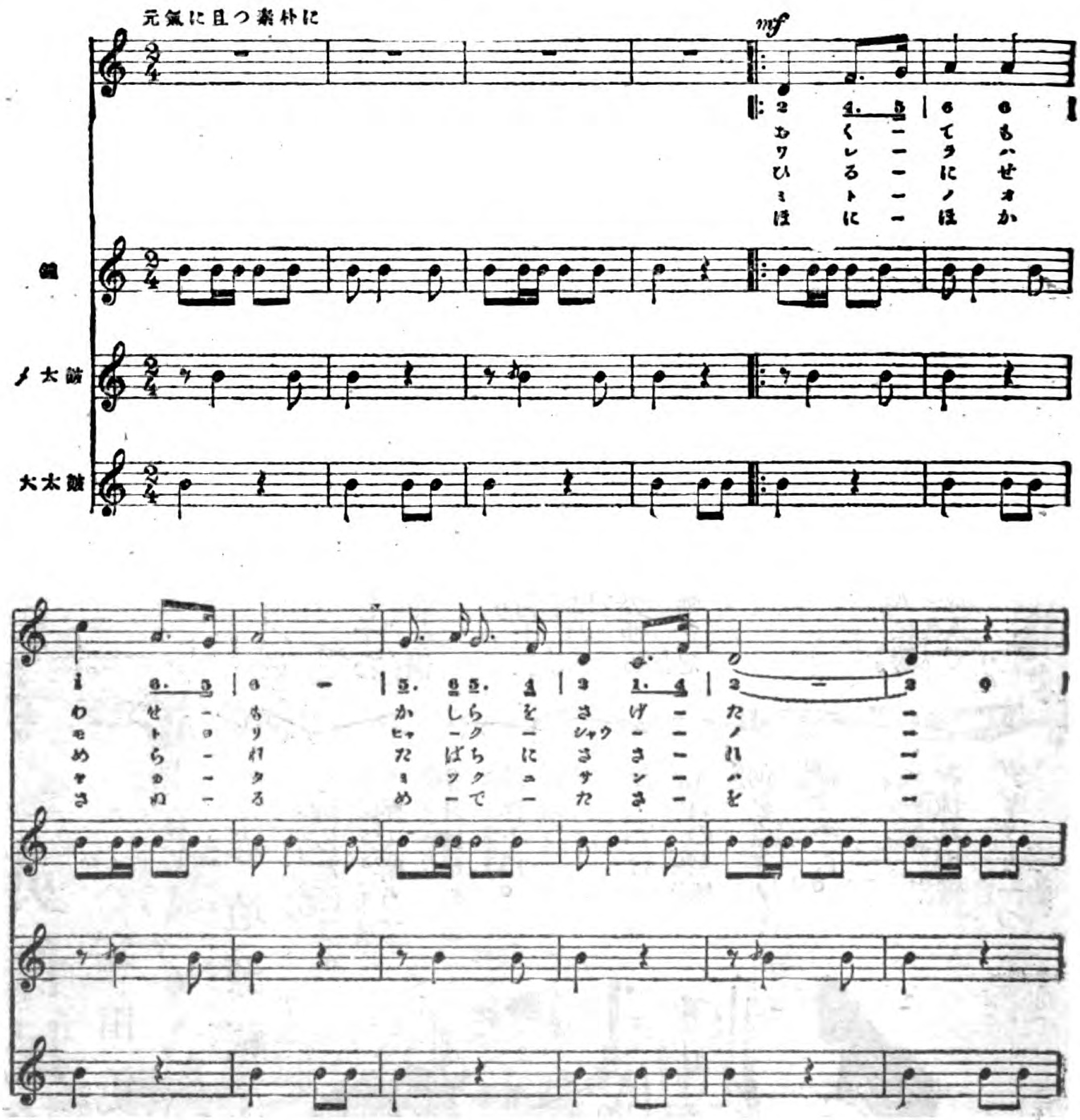
晩稲も　早稲も
頭を下げた
半年がかりの
涙と汗は
變つた〳〵
黄金の花に
我等はもとより
百姓の
日がな一日
蚯蚓を切つて
おんぼろさんぼろ
下げもすれ
蛭に責められ



田蜂に刺され
血みどろちがひに
田の草取つた
土用の辛さは
忘れねど

水戸のお館
光圀さんは
蓑笠出だちの
農人形を
二の丸御殿に
置いたとさ

穂に穂重ぬる
めでたさを
祝へ、子持の
嫁ん女が
明日は鶏鳴起
早稲から刈ろさ



人類愛の大理想

海老名彈正

人道の墮落

見方に依ると、今日の米國は、六十年乃至百年前に較べて、甚だしく墮落してゐる。人類愛に燃えた英雄偉人、雲の如く輩出した米國に、今や全く人類愛は影を潛めて、公然人種差別が叫ばれてゐるのは、何たる奇觀であらうか？

思へば過去の米國は、人道的偉人を數多生んだ國である。一八六一年四月十二日、サムター砲臺の一彈に依つて火蓋を切られた南北戰爭は、人道の鬪將、時の大統領アブラハム・リンカーンを中心とする北部諸州の人々の奴隷解放といふ燃ゆるが如き人類愛の義擧ではなかつたか？　そして五箇年間、彼等は、凡ゆる苦難を忍んで人道のために戰つたのであつた。

故に、佛蘭西の史家ラブーエは、

『リンカーンの偉大さは、シーザーに勝る。』

と讃嘆して止まなかつた。いな、リンカーンの偉大さは、世界の凡ゆる偉人に勝るであらう？　彼は單に一國一黨のための鬪士でなく、人類のために戰つた偉人であるからだ。

英傑民謠

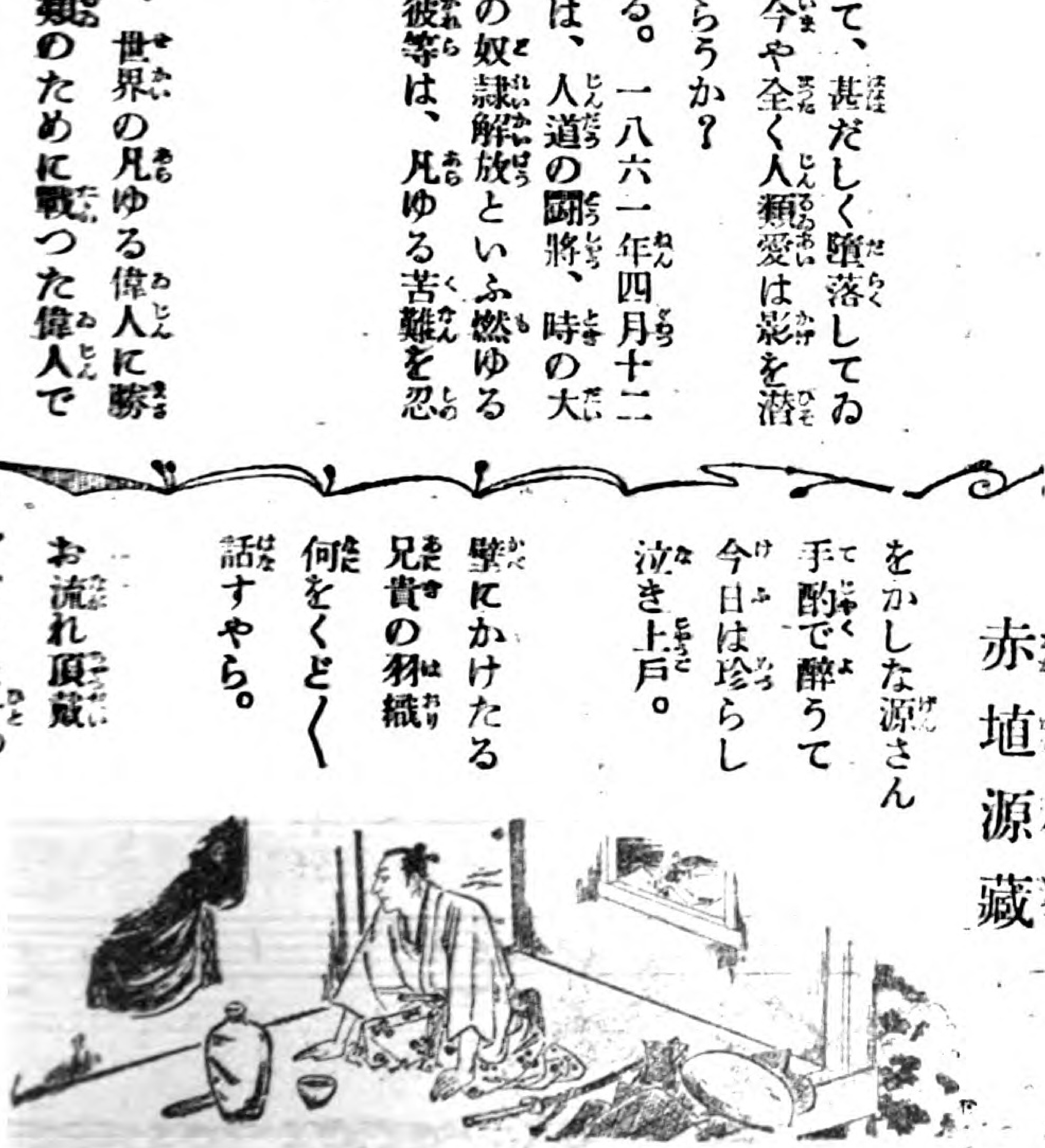
霜田史光

赤埴源藏

をかしな源さん
手酌で醉うて
今日は珍らし
泣き上戸。

壁にかけたる
兄貴の羽織
何をくど／＼
話すやら。

お流れ頂戴
グビリと一つ



併し、これもリンカーン一人の力ではない。當時の北部諸州の人民が、人類愛に燃えて、リンカーンを助けたからである。國民が人道に目醒めてゐたからである。アンクル・トムス・ケビンは、南北戰爭の先驅をなした名著といはれてゐる。著者ビーチャー・ストウ女史が、この書を出版する時、その賣れ行きを非常に心配してゐた。ところが、一度上梓さるゝや、洪水の如き賣れ行きであつた。一年を出でずして百二十萬部を賣り盡す盛況であつた。無論、虐げられた奴隷に對するストウ女史の愛と熱情が筆端に迸つて、讀者を熱狂させたには相違ないが、また國民に、これと共鳴する人類愛の目醒めがあつたことは否まれない。



海老名彈正氏

その米國だ!! それが六十年後の今日は何うか？ 口には自由平等を叫んでゐるが、それは同民族間の自由平等で、對外的には、黄色人種を排斥し、黒色人種や銅色人種を壓迫してゐる。六十年前に人種平等を絶叫した口で、露骨にも、『人類は生れながらに差別あり！』とさへ叫んでゐるのだ。

これが、人道の墮落でなくて何であらう？

『何人に對しても惡意を抱かず、凡ての人に仁愛の情を注がん。』

とは、リンカーン生涯の座右銘であつた。そのリンカーンは今猶ほ米國人の世界に誇る偉人であるが、この座右銘は、全く彼等から忘れられてゐるのも皮肉である。

これ、今生のお別れに——
うーい、皆さん
御機嫌よう。

居眠り西郷

所は江戸城
本丸の
大神柱に凭りかゝり
こつくり、こつくり
舟を漕ぐ
何んと西郷
御苦勞さん
志士の誠や
血や、汗や
粒々辛苦甲斐あつて
今日は江戸城
明渡し



行はれぬ四民平等

然らば、日本は何うか？

王政維新に依つて、日本は、國民的意識を與へられ、四民平等の道は開かれた。併し、實際は猶ほ平等ではない。今日に至つてまだある種の平等運動などの行はれてゐるのは、平等ならざることを裏書きしてゐるではないか。

封建時代、絶對優越な地位にあつた武士階級は、自ら農工商と同じ水準に下つて來たのは偉かつた。併し、農工商が、當時の特殊階級を自分等と同じ地位に引上げることを拒んだのは殘念である。これがために、四民平等の御趣旨が、ある一部に徹底しない結果になつた。勿論、聖旨中の四民とは、陛下の赤子全部で、一人として特別扱ひのあらう筈はない。

それのみならず、今や、臺灣人と朝鮮人とが、我等同胞中に加はつてゐる。これも政治的に、社會的に、まだ平等視されてゐない。過去の樣々な國民的感情に支配されて、優越なる國民が、微力なる國民を排斥し、壓迫し、又は卑しめるのは、卑屈なる精神である。か〻る精神のある限り、眞の大國民とはいはれない。

しかも日本は、今、それに惱んでゐる。臺灣の自治、朝鮮の獨立などを懸念して、愛せんとして愛し得ず、憎まんとして憎み得ぬ浮氣な心に自ら苦しんでゐる。

これは正しく國民の覺醒が足りないからである。國家的、民族的には、火の如き情熱に燃える日本人が、現在の米國と同じく、人類的には眞の愛が灼熱しない結果である。

人類愛！　これこそ將來の大國民の持つべき一大要素である。

何んと西郷
御苦勞さん
たんとお眠り
西郷さんよ
國事十年一日とても
安き眠りも
なかつたに
何んと何んと
御苦勞さん

靜御前

いとしの君は
奥州路
身は捕はれの
鎌倉に
舞を舞へとは
胴慾な

儒、佛、基督教の人類愛

過去幾百年間、儒教は、博愛主義の道徳を日本人に教へた。曰く、『博く愛する、之を仁といふ』曰く、『己れの欲せざることを、人に施すこと勿れ』と。

併し、實際を見ると、この道徳が徹底して行はれてゐない。孔子、韓退之の如き博愛の本家本元でさへ、夷狄の語を用ひた。人と禽獸との中間に夷狄といふ人類の存することを認め、博愛もこれには及ばなかつた。

また女子は何うか？ 己れの欲せざることは、人に施す勿れと說くが、その人とは男子のことで、女子は例外視されてゐる。金持は一身に妻妾三百とか、日本では女童とかいつて、女子は欲せざることを施されても已むを得ずとされてゐた。故に、君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の五倫が、絕對嚴正に行はれ、格式の秩序整然たりし封建時代には、何等の矛盾なく行はれた儒教も、一朝、四民平等の世となるや、忽然としてその威信を失墜し、嚴正な意味で、世道人心の羅針盤たることが出來なくなつた。

佛教の教義はその意味からいふと、卓越してゐる。始めから人類愛を說き、國民平等を叫んでゐる。

これは、佛教發生の地印度が、種族階級の最も八釜しい國であり、釋迦が、これを打破せんと力說した佛教であつたため、始めから人類愛に目醒め、その愛の光は、城壁や國境を踏破つて無限の際まで輝き渡つた。

然るに何故ぞ、この教さへも、歷然と男女を區別してゐる。女人不成佛といひ、變生成佛といひ、女子のみは特別扱ひを受けてゐる。無量甚深といはれた釋迦の慈

ソリヤ胴慾な。
いゝえ舞ひます
君が爲め
心も淸い
白拍子
義經さまの
前として
ソリヤ、前として
靜や靜々
小田卷を
繰り返しつゝ
わが君の
落ちる道程
おしはかる
ソリヤ、おしはかる。



悲心も、女子には甚だ薄く偏頗であつた。奇異の感なきを得ない。

その點は、基督教は徹底してゐる。

『人の我になすべきことは、爾亦人にもその如くせよ。』

この人とは、人格の謂である。階級、國民、民族の差別は勿論、男女の別さへ設けない。故に基督の愛は、隣人から民族に及び、更に國境を越えて、人類のあらん限り無限の果てまで續き、一人の洩れる者もないのだ。

基督始め、過去幾千年間、基督教徒奮鬪の歴史は、この境界なき人類愛を、偏狹な民族精神に囚はれた人々に植ゑつけんとして生ずる爭鬪軋轢の跟に外ならなかつた。

併し、今日猶ほ、その理想は行はれない。個人的には人類愛に目醒め、雄々しく鬪はんとしてゐる人々が、世界到るところに散在してゐるが、國として、民族として、人類愛に燃え立つものゝ一もない。心ある者長嘆息せざるを得ない。

世界を指導する大國たれ!!

併し、今や、その機運に向ひつゝある。

國際聯盟、不戰條約が即ちそれである。が、これも單に國の利害關係のみから考へるのでは淺薄である。列國中に勃興しつゝある人類愛が、血腥い戰場に人類相互が相戰ひ、傷き、斃れるを見るに忍びず、互ひに相扶けて世界平和の大理想を實現せんとして進みつゝあると見るべきである。

誰か、神の如き冷靜な心で、戰爭といふ人類の慘劇を眺め得ようか!? 戰爭を眞に喜ぶものは、未開人か、さなくば狂氣せる文明人である。民族意識から生ずる敵

山村風景

朝・百姓のうたへる

萩山藻の花

あいつは土百姓だと言はれたつて
構はないんだ
みゝずみたいな生活だと言はれても
構はないんだ
空が晴れて
風がやさしく
案山子が呑氣ににらめつこをいどむ朝
とても素晴らしい野の思想の中に
ぐいぐいと足をふみしめてみる
土の匂ひのしみこんだ體には
節くれ立つた指のやうな思ひが
ピチピチと跳ねあがつて
空へとどきさうだ

愾心が、國民を熱狂させて、敵に當るから、砲烟彈雨の中を勇敢に戰ひ、敵を斃して快哉を叫ばしめるのだ。

一度冷めて考ふる時、相互の行爲が、人類の正しい精神に反することを知るであらう。故に、日露戰爭中も、戰場にあつて相互に慰めあつたといふ美談もある。赤十字病院の如く、敵味方の差別なく看護をなす美しい行爲もある。明治大帝の大御心から、敵の捕虜に能ふ限りの優遇をさせ給うた例もある。戰ひつゝ、一方には人類愛の精神が、樣々な美しい行爲となつて現れてゐるではないか!!

何故もう一歩進んで、戰はずして、互ひに人類愛によつて相扶けようとはしないのか。それが國際聯盟や不戰條約の根本精神である。

二十年前まで武力主義で進んで來た日本が、今日では、この世界の新思潮に順應して、喜んで武器を棄て平和を希望せんとするに至つた。

併し、もう一歩進んで、日本が列國に率先して、この平和運動、即ち人類愛の運動に力めねばならない。世界に順應するのでなく、世界を指導する國民とならねばならない。それでこそ始めて、眞の大國民たる資格があるのだ。

誤解してはならぬ。戰爭を欲するものが、眞の愛國者であると。これは最も時代錯誤な思想である。國家を愛し、民族を愛し、而して人類を愛するものこそ、今日では眞の愛國者といふべきである。

併し兎にも角にも、今日に至つて、世界は漸く人類愛の滿潮に向きかけた。この大理想の實現は、猶ほ前途遼遠である。列國と共に我國民の一大覺醒を要する時機だ。

國民諸君!! 覺醒一番して、將來、世界を指導する大國民たらんことを期せられたい。

まるで小アユのやうに壯健に跳ねかへりながら……。

（懸賞當選）

樵夫の歌

中田猛夫

里へ十五里
深山の奧で
鋸を命の
おら丸太切
切つた丸太に
腰うちかけて
煙草輪に吹きや
山が鳴る
山が鳴り出しや
今宵は吹雪
吹雪吹け吹け
山颪
颪す吹雪に
埋れた小屋で
今日も寢ようか
孤しいて



（懸賞當選）

成功の五大要素

エフイシエンシー協會々長　池田藤四郎

アメリカの大成功者を、仔細に研究して見ると、そこに爭はれぬ共通點があるやうだ。石油王ロックフエラーにせよ、故人の鋼鐵王カーネーギーにせよ、何よりも先づ貯蓄の必要を說き、自分も少年時代から、それを守つて來た。

フランス人を祖先にもつロックフエラー翁は、大の無駄嫌ひで、何事も過度を避け、細く長く秩序正しく、其日其日を過すといつた流儀だ。その邊は、全くフランス人マル出しだとも言へる。

翁は七歲のころから、キチンくと金錢の出し入れを帳面につけ、九歲になつて一廉の商人振りを見せた程だ。

身のまはりの世話を焼くボーイは、毎朝七時翁の起床に先だつて、衣服の用意をとゝのへる。ズボンのポケットへは、必ず一方へ十仙銀貨、片方へ五仙白銅貨を、忘れずに入れておく。之は翁の貯蓄奬勵運動に對する其日の軍資金とも見るべきものだ。



九十歲で元氣に運動するロックフエラー翁

大人も子供も、何かのキッカケにきつと十仙銀貨か五仙の白銅を、翁の手から頂戴する。翁の相手になつてゴルフに勝つた者は、十仙にありつく。カルタで勝てば十仙、負けても五仙、食事の折、話の受け答へが上手なものは十仙お孫さんの接吻が十仙、それこれを合はせて、一日中約五十個の十仙銀貨を人手へ渡すといふことだ。之を一ケ年に積ると、一千七百五十弗以上の額に上るから、馬鹿に出來ない。

翁にすれば、ホンノ小金に過ぎないのだが、その宣傳力は大したものだ。翁は銀貨銅貨を人へ渡す毎に、

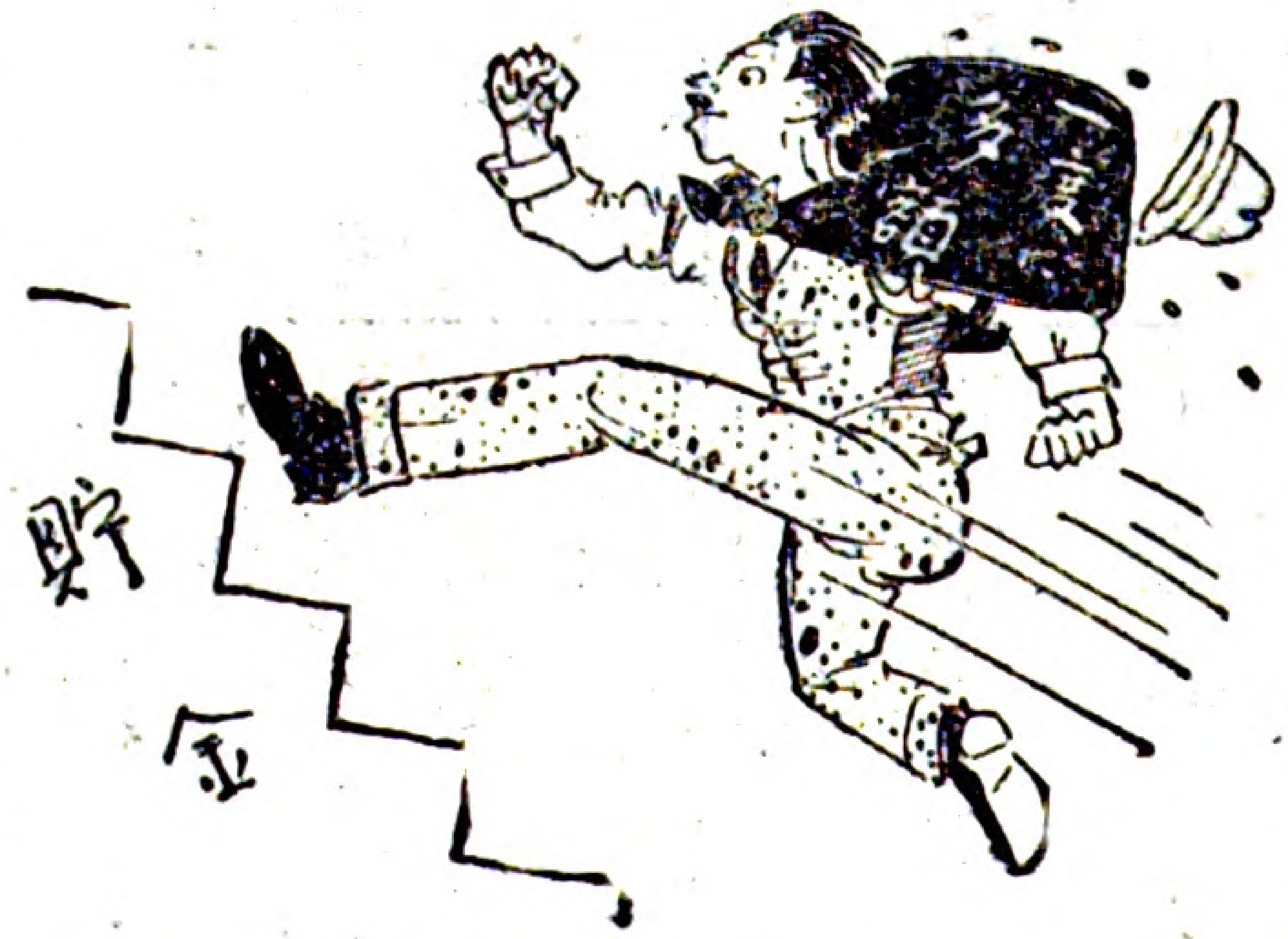
『サア之を貯めておいて下さい。』

と、必ず一言つけ加へる。翁は生れて始めて手に入れた十仙銀貨を、今でも手放さず大事に所持して居るさうだ。

アメリカ人は、人を雇入れる時、貯蓄のあるなしを、それとなく聞くやうだ。急に思ひたつて、一度に十圓貯金する人よりも、ジリ〱と五十錢づつ、二十回に貯金する人を喜ぶといつた風がある。金高よりも、辛抱を買つたものだ。

自動車王フオードは、四五年この方、切りに貯金の不必要を説いて居るやうだが、御自分が最初自動車製造に思ひ立つた時、親類や友人が少しづつ資本を出して呉れたのも、フオード自身の手に小金の貯へがあつたからの信用だ。一文なしでは、如何に金儲けの名案を持ちまはつても、他人がそれをオイソレとは信用しない。世界一の通信小賣業者ローゼンウヲルド氏は、今でこそ數億弗の資産をもつて居るが、子供の頃は、いろ〱の屑物を賣り廻つて、一錢二錢と克明に貯めたものだ。彼はそれを貯めて、母親の結婚記念日に、何か買つて贈つたといふ話もある。


自動車王ヘンリーフオード



故翁カーネギー曰く、

『誰彼を問はず、先づ第一に心得ておくべきは、金を貯めることだ。勤儉は、貯蓄から生れて來る。勤儉の習慣ほど大事なものはない。大資産の土臺は、そこにある。野蠻人と文明人とを區別するものはそれだ。勤儉は資産をつくるばかりでなく、人間の品性を陶冶する。』

勤儉貯蓄に次いで、成功者共通の資格は、正直の一點だ。商賣にも、政治にも、外交にも、その必要を悟つて居ながら、それを無視するものの如何に多きことよ。ツイ二三十年前までは、商賣に懸引はつきものであつた。カケ引は、巧妙に裝を凝したウソそのものである。

斯ういふ話を聞いたことがある。

ある大銀行で、給仕を一名雇入れようとした。丁度その時、受附へ客が來て、副頭取に面會を申込んだ。受附は、唯今不在だと客に斷つた。給仕に雇はれる筈の少年は、その有樣を見て、非常に不快を感じた。それとなく奥の方を見ると、不在な筈の副頭取は、チヤンとその席について居るではないか。其處に居ながら、留守をつかつて面會を斷るとは如何にも面白くな

いと、子供心にも肚に据ゑかねたものだ。

やがて、少年は副頭取の前へ呼出された。

『今日からお前を給仕に雇つてあげるから、精々働いて貰ひたい。人によつては居留守をつかつて面會を斷る場合もあるから、それを忘れないやうにするのだ。そこで給料は、どれだけ欲しいのかね。』と問はれて、少年は言下に、

『年俸一萬圓頂きます。』

と答へた。

『ナ、ナニを言ふのだ。お前は一體正氣なのか。途方もないことを言ふ子供だ。』

『壹萬圓はおろか、百萬圓積んでもウソつきにはなれません。』

とキツパリ言ひはなつて、少年は其場を立去つた。子供でも、このくらゐの見識はあつて欲しいものだ。

アメリカの澁澤さんと言はれた故ゲーリー翁は米國實業界の大立物、無類の正直者であつた。金融



鋼鐵王カーネギー翁



銀行王ベーカー氏



米國の澁澤さんといはれたゲーリー翁

大王モーガンに見込まれて、世界最大の鋼鐵會社に采配を振るやうになつたのも、元を質せば、その正直振りを認められたからだ。

その頃は、會社の重役連中に、舊式の資本家が大勢加はつて居て、世間の思惑などは一切構はぬといつた風であつた。重役會で決めたことが、世間へ洩れない内に、その秘密を銘々の相場に悪用するものが、相應に多かつたのだ。

正直者のゲーリー翁は、それが氣になつてたまらず、遂に一策を案じて、株式取引所の賣買時間が切れてから、重役會の重要決議を發表することにした。不德重役の相場封じは、斯うして巧に行はれた。

不正直で金を儲けた大富豪連は、何時とはなく奇妙に沒落して了ふ。悪錢身につかずとは、洋の東西を問はず、本當の理窟でもあるやうだ。

次に成功者共通の資格は覇氣大望である。米國の事業界に於ける眞の大人物は、言ひ合はしたやうに、大きな點に目をつけて居る。彼等には理想があり、大望があり、滿々たる覇氣がある。行き當りバツタリ、どうにかなるだらうといふ無方針で成功したものは、極めて稀だ。

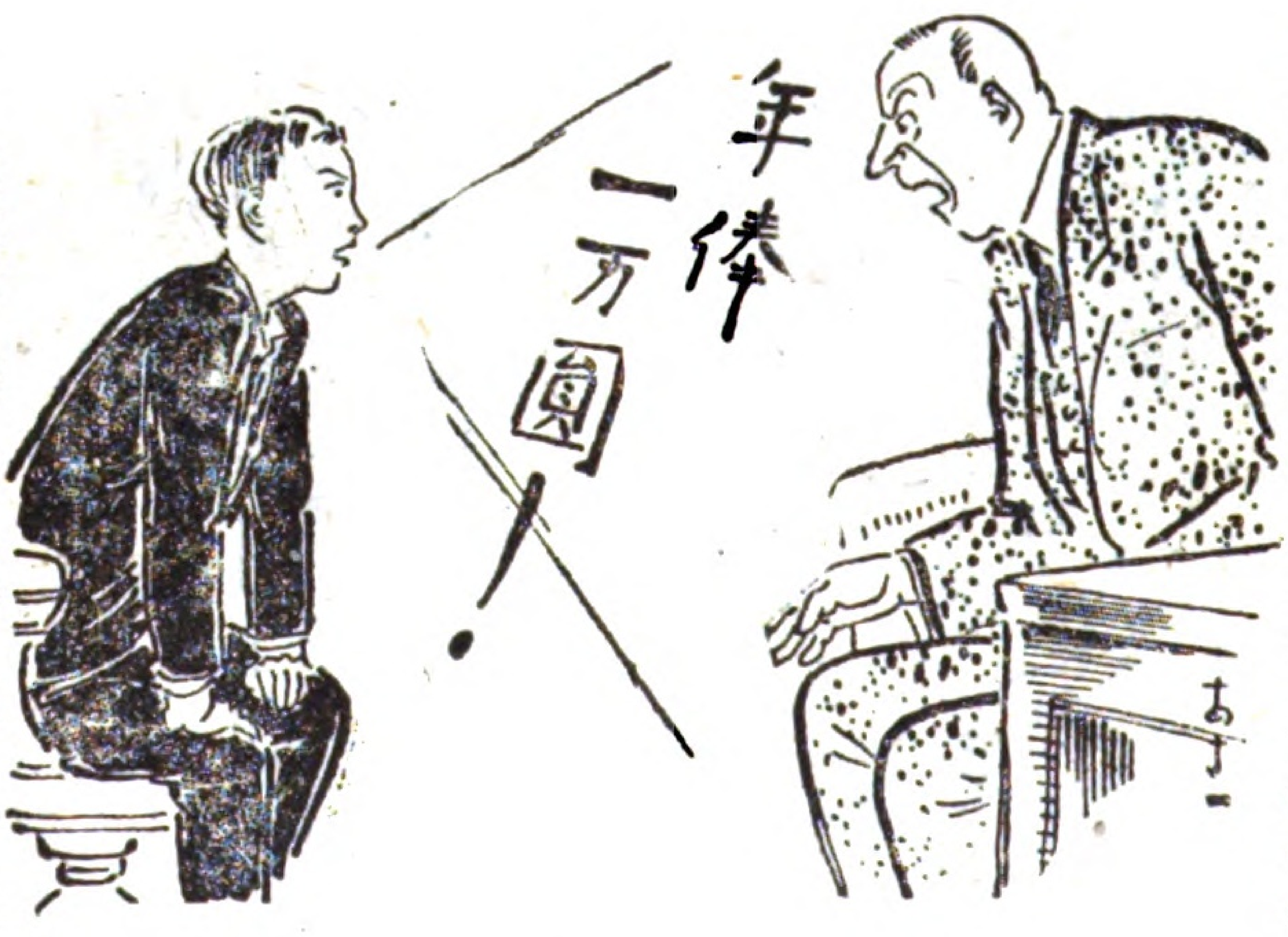
フオードは、全世界の人々に、動力といふ形で、重寶な奴隷を洩れなく與へようとして居る。碎いて言つて見ると、

吾々平凡人に、安自動車を賣つて何十人力かをあてがつて與れるといふ意味だ。世界中で一番安い自動車をつくつて、從來それを買へさうにさへしなかつた人々の手へ普く行渡らせ、更にモットモット安くして、自動車を普通の履物扱ひにしようといふのだ。

フォードの耕作自動車は、アメリカは申すに及ばず、世界中に散在する不毛の地を開墾して、食糧の供給を豐富にせんとする理想の下につくられもし、又賣出されもしたのだ。單にものをつくつて、數が賣れたら儲かるだらうくらゐの淺墓な考へ方では、大きく成功するものでない。

カーネーギー翁は、ある時、木橋の燒け落ちるのを見て、世界中の橋梁を、全部鋼鐵製にせねばならぬと考へ、それ〴〵の階梯を經て、終に其道の鋼鐵王と呼ばるゝまでに、鋼鐵事業を發達せしめた。

次に見逃してはならぬ成功の要素は教育だ。教育などは、どうでもよいと納まつて居ては、大成功が覺束ない。アメリカの大事業家は、正式の學校教育こそ受けたいにしても、必ず實社會の活きた學問を卒業して居る。學校教育——のみが、教育ではない。



フォードは、字もロクに書けぬくらゐの程度だが、ミシガン大學から大博士號を贈られた。寫眞王と言つて然るべきイーストマン老も正式の學校教育を完全には受けなかつた。その缺點を能く知つて居るから、自然獨學で勉强する。今日エディソン翁の成功を疑ふものは世界中一人もあるまい。そのエディソン翁が七歳の當時、學業不成績、前途の見込みなしといふ理由で、退校を命ぜられたことは、人が知つて居ない。ところが、この翁以上に、博士號を多く所持して居るものは、殆んど無いと言つてよいくらゐだ。

カーネーギー翁が、五十の手習を始めたことは、有名な事實だ。

子供の時分、不幸にして教育を受けなかつた米國巨人連は、不思議に何れも讀書家だ。

事情が許せば、正式の學校教育は望ましいことだ。それにも增して大事なことは、自分の目的に密接の關係ある事柄を、獨學で學ぶことである。

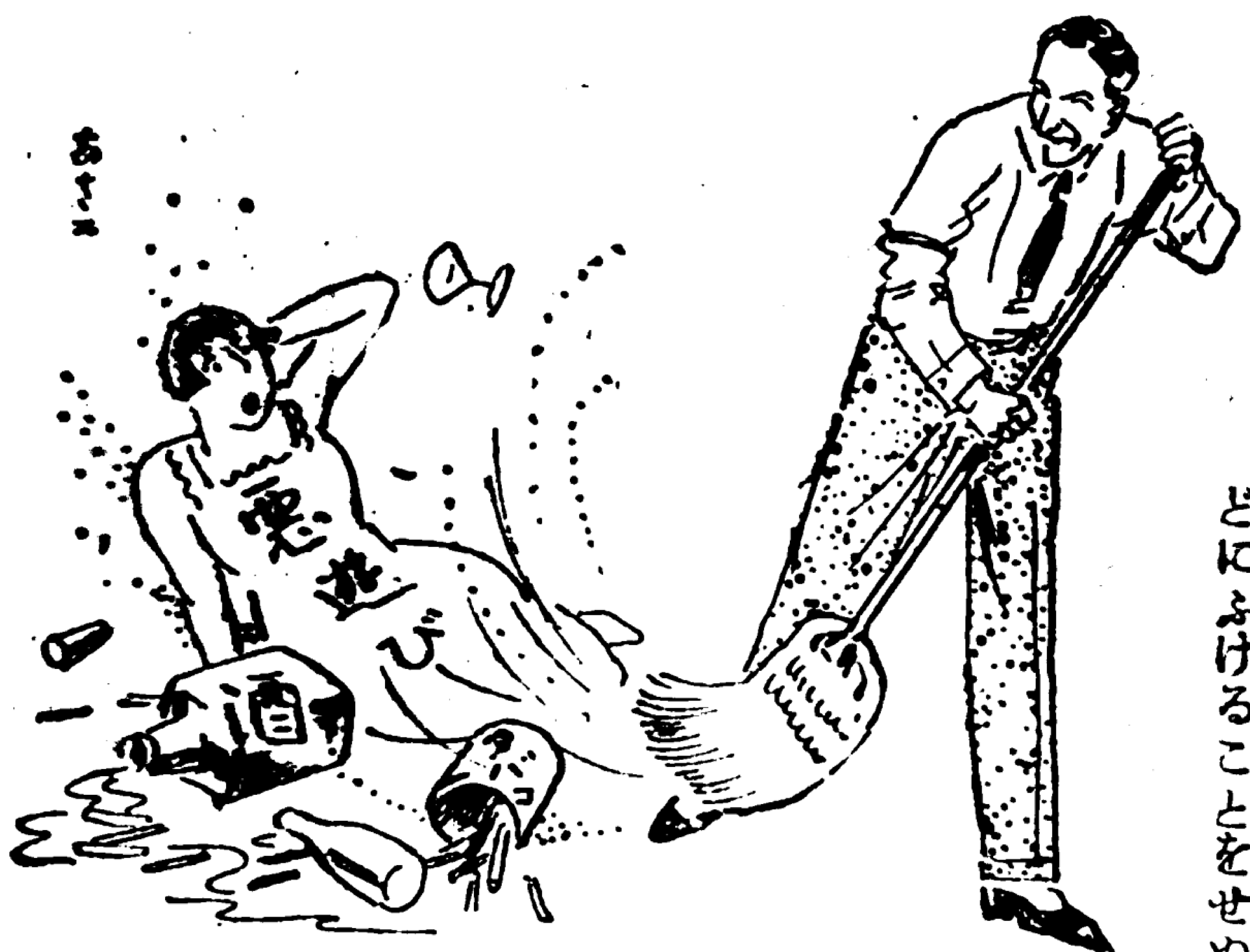
社會の進むに伴れ、錯綜せる世の事情に通じた者が、先頭に立つ。全くの無學では、成功不可能である。

最後に肝腎な成功者の共通點を擧ぐれば、それは健康である。

大成功者は、決して無理をしない。衛生を守り、健康を保護することに於て、普通人以上に注意を拂つて居る。

石油王ロックフェラーは、今年滿九十歳、相變らず元氣に充ちて居る。エディソン翁も八十二歳に達したが、依然として發明の研究に餘念なく、凡人の到底耐へきれぬ長時間を、研究室内で送つて居る。

ロックフェラー翁は、世評に反して、人間並みの食事を、充分に攝つて居る。朝食は、アッサリと片づけ、一日中の御馳走を午食時ときめて居る。胃には餘りよろしくないと言はれて居る苺のショートケークを一片、甲羅の柔い蟹を六疋、次いで豚のロースなどを、平氣で平げる。今でもゴルフは、一日として缺かしたことがないといふ熱心さだ。その合間々々には、自動車のドライヴを試みたりなどする。



フォードは、酒もタバコも一切近づけず、食も奢らず、極めて單純生活を信仰して居る。眞の成功者は、容易に氣をゆるめないから、調子に乘つて、宴會の掛けもちや、夜更し惡遊びなどにふけることをせぬ。

正しい生活とは、

1 善き習慣
2 良き食物
3 充分の睡眠
4 新鮮の空氣と深呼吸
5 充分の運動
6 澤山に水を飲み水を浴び
7 身に適つた服裝
8 正しい考へ方
9 勤勞
10 心配無用、

の十則を守るだけのことである。

大多數の成功者は、期せずして、以上の十則を徹底的に守つて居る。鐵道王ハリマンは、その内の健康に關する重要の條件を無視したため、六十二歳にして夭死した。

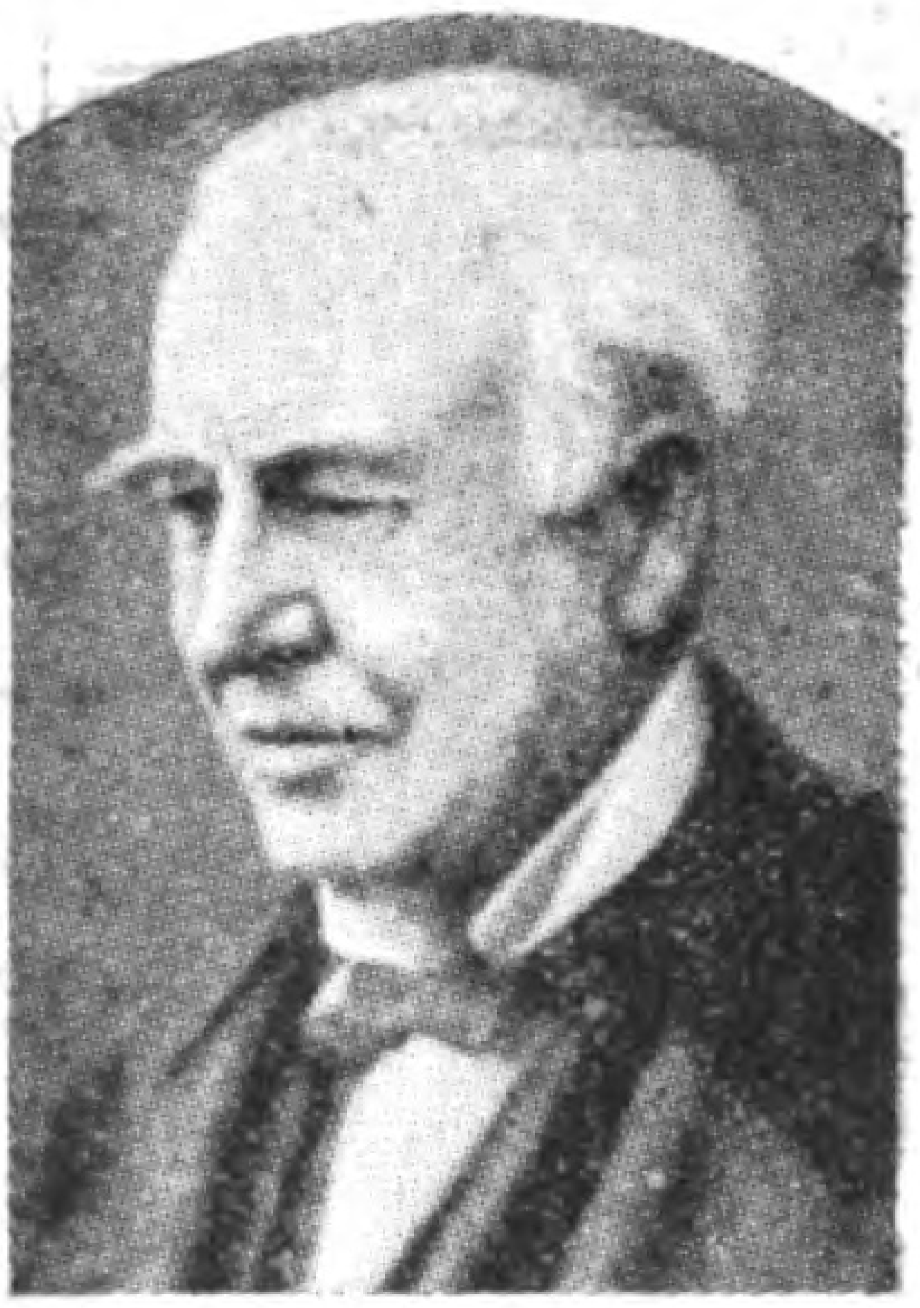
アメリカの銀行王ベーカー老人は、今年八十九歳、僅かの[illegible]

子に儲けた五百萬弗を、即座にハアヴアド大學へ一口に寄附したといふ決斷家だが、一日としてゴルフを休ます、矍鑠として壯者を凌ぐ氣力と體力とを併せもつて居る。

少しばかり金が出來、自動車のガス代に事缺かぬやうになると、いゝ氣になつて遊びまはるのが、能く到るところにゴロゴロして居るが、さういふ連中に限つて、終りを完うしたものがない。神經衰弱、花柳病、胃腸病などに祟られて、小金にかじりついた儘往生して了ふのが、彼等の運命だ。

ロックフエラー翁は、その富の殆んど大部分を基金化して、その金利を、あらゆる病魔の征伐用に充てゝ居る。それ程に、翁は衞生と健康とを重要視して居るのだ。

要するに、大成功者に共通の五個條は、



發明王エヂソン翁



寫眞機王イーストマン氏

一、勤儉貯蓄
二、正直
三、理想と覇氣
四、教育
五、健康

であると言つて差支ない。

この程、エディソン翁は、アメリカ四十八州の代表少年四十八名に向つて、五十七個の難問を發し、成績優良なるもの五名を選んで、本人希望の大學へ入學せしむることにした。この難問中、理化及び數學に關するもの十八問、その他は一般的のものであつたが、最高の成績を示してマツサチユセツツ工業大學へ入學したシヤトル市のハストン少年は、

『職業の何たるを問はず、成功に必要の最も重要の資格四點を擧げよ。』といふ問題に對して、

『覇氣、進んで働く意氣込、教育、精力。』

と答へた。之は實に味はふべき答案であると思ふ。（終）

目の使ひ方・耳の使ひ方・口の使ひ方

池田藤四郎

同じく目と耳と口とであるが、使ひ方によつて有効無効平凡非凡自由自在に働くものである。近來出色の名記事！　次號をお待ち下さい。

好敵手物語

世界大戰を繞る悲劇

——マクドナルドとロイド・ジョージ——

澤田謙

一

怒濤のやうに、宮殿前の廣場に押し寄せた、伯林の大衆に向つて、王宮のバルコニーに姿を現はした獨帝カイゼルは、颯ッと劍を拔き放つて叫んだ。

『獨逸が世界の覇を唱へるまで、この劍は再び鞘に



をさまるときはない！』

それが世界大戰のはじめであつた。歐羅巴大陸を、焔で包んだ戰爭熱は、島帝國イギリスまでも、押しよせて來た。

時は大正三年八月三日。——英國の内閣は、ひつきりなしに閣議を開いてゐた。開戰か？ 中立か？

『では、これで、開戰といふことに決まりました。英國民中、これに反對するものは、一人もありますまい』

首相アスキスは、何時もの貴族的な態度を失はずに、から言つた。すると卓子の向ふで、

『いや、一人ある』

と、突拍子もない聲で、怒鳴つた大男があつた。ハッと振り向いて見ると、

それはロイド・ジョージであつた。

『一人……とは誰だ』

『マクドナルドだ』

『うン、それなら知つてゐる。彼は絶對に非戰論を採つて動かぬ。……しかしたつた一人の反對のために、この國家の大事を枉げることはできまい』

するとロイド・ジョージは、も一度怒鳴つた。

『しかしマクドナルドの後には、四百萬の組合勞働者がある』

『いや、その勞働黨も勞働組合も、我々政府の開戰說に、好意を寄せて來たではないか』

それは事實であつた。はじめ非戰論を唱へてゐた勞働黨も勞働組合も、何時の間にやら變說して、開戰論に傾きつゝあるのであつた。そのなかで唯一人、動かぬのが勞働黨首領マクドナルドだけであつた。英國の輿論は潮のやうな勢で、開戰論に流れつゝあつた。その怒濤のなかで、取りのこされた一つの巖のやうに、マクドナルドは唯一人、戰爭反對を叫んでゐたのであつた。

……

そこでロイド・ジョージは言つた。





上　ロイド・ジョージ氏
下　マクドナルド氏



『勞働黨や勞働組合が、變說したのは事實だ。しかし勞働黨の首領だけは動かぬ。……彼は信念を持つてゐる。信念のためには、首がちぎれても後ろを向かぬ男だ。このまゝで放つておけば、マクドナルドは最後まで、戰爭の罪惡を叫んで、全國を馳け廻るだらう。……怖ろしい男だ。何とかしなくてはならぬ』

マクドナルドの信念の堅さを知つてゐる大臣たちは、このロイド・ジョージの言葉に、思はずシーンとして、考へに沈んだ。

結局、マクドナルドを內閣に迎へて、閣僚の一人として、戰爭に責任を持たせようといふことになつた。

使者は直ぐにマクドナルドの私宅に飛んだ。

二

マクドナルドとロイド・ジョージ。——それは奇妙な取り組であつた。

英國の議會は、一種の戰爭である。議場の作り方からして日本と違ふ。日本のやうに、正面に演壇があり、その背後に議長が坐り、大臣や政府委員がずらりと居並んでゐるのに對して、議員は政府黨も反對黨も演壇の方を向つて坐つてゐるのではない。英國の議場は長方形だ。その眞中に、幅一間ぐらゐの廊下のやうな空地が、ずらッと通つてゐる。それをさし挾んで、一

最前列の中央の椅子に、總理大臣と反對黨の首領とが、顏を向きあはせて腰かけてゐる。總理大臣の左右には、政府の諸大臣。反對黨首領の左右にはその黨の領袖幹部たち。――何れも對ひ合つて腰かけてゐるから、まるで碁盤のやうな形だ。

兩黨の首領が、僅か一間の空地を境ひに相對し、左右と背後に何百といふ代議士を擁して論戰する有様は、恰度、大將軍自ら陣頭に立つて、白刄を揮ふのと相似てゐる。

だから英國の政黨首領は、議場の駆け引に長じた老武者でなくてはならぬ。議會の空氣を逸早く握る戰士でなくてはならぬ。そして何時でも敵を叩き伏せる力のある雄辯家でなくてはならぬ。

この意味でマクドナルドとロイド・ジョージとは、英國議會に於ける好敵手であつた。

勿論、政府の首相はアスキスであり、その正面の反對黨は保守黨であつて、マクドナルドはまだ僅か四十二名の少數勞働黨を率うるにしか足りなかつたが、しかしマクドナルドの辛辣な雄辯こそは、政府自由黨の最も怖れるところであつた。そしてこれに正面から太刀打のできるのは、機智縱横のロイド・ジョージだけであつた。

そのころ、マクドナルドとロイド・ジョージの論戰こそ、まことに英國議會の花であつた。

二人はその生立ちにおいては、似るところがあつた。マクドナルドは蘇格蘭の水呑百姓の息子であり、ロイド・ジョージはウエールスの貧乏教員の息子である。二人とも、若いときから散々に浮世の荒浪にもまれぬいて、今日の地位を築き上げた人である。

「保守黨の連中は、まだ、貧乏小屋に育つた人間の時代が來たことを知らぬのだ』

と叫んだのは、ロイド・ジョージであつたが、それはマクドナルドとても同じであつた。

しかし二人の性格は、火と水のやうに逆つてゐた。ロイド・ジョージは野人である。そして激情の人だ。機智縱横で奇兵を用ふるに巧であつた。しかるにマクドナルドは、勞働黨の首領といはれるに拘らず、むしろ貴族的な風格を備へてゐる。大命降下したときのシルクハット姿がよく似合つた。彼は燃えるやうな情熱を、水のやうな理智に包んで、その言葉は針のやうに痛かつた。

にも拘らず、二人は好敵手であつた。そしてマクドナルドはロイド・ジョージの政治的天分を認め、ロイド・ジョージはマクドナルドの政治的信念を尊敬し、そこから二人の間に、奇妙な友情が湧いてゐた。

三

内閣からの使が來たとき、マクドナルドは鋭い直覺で、直ぐに感じてゐた。

『はゝア、ロイド・ジョージの天才が、俺を内閣に迎へようと言ふのだな』

彼はこの迎へに接して、行かうと思へば行けたのであつた。大臣の椅子は鼻の先にブラ下つてゐた。勞働黨も勞働組合も、それに賛成するのは、判りきつてゐた。

しかしマクドナルドは行かなかつた。

彼はその午後おそく、ダウニング街へと道をとつた。議會の通りは、群衆で一杯だつた。マクドナルドは、その人混みのなかを、誰にも見付けられず、誰にも呼びかけられずに、モーレー卿の家の門を叩いた。

モーレー卿は、内閣のなかで、唯一人、非戰論を採つて動かぬ人であつた。

マクドナルドの顏を見ると、モーレー卿はすぐに訪ねた。

『君、何うしますか？』

その間の意味は、訊きかへす必要はなかつた。マクドナルド



は即座に答へた。

『私は戰爭に反對します』

『私もさうです』

二人の間には、淋しい沈默が落ちた。

やがてモーレー卿は、口を開いて、今政府では、『白書』を發表して、非戰論者を葬り去る計畫があるといふことを話した。マクドナルドは聞いた。

『その「白書」とは、眞實のことを書いてゐるのですか』

『いや、何うして』

『それぢやあ、私は平氣です』

マクドナルドは、何時もの冷靜な語氣で答へた。そしてモーレー卿の許を辭し去つた。

モーレー卿は、まもなく辭表を出して、内閣を去つた。しかしマクドナルドは、これから苦しい戰ひを戰はねばならなかつた。

その戰場は議會であつた。

四

議會の空氣は、最初から險惡であつた。議會の床の上に、これほどギツシリ椅子が並べられたことは、二十一年間、あの歴史的な愛蘭自治法案が討議されて以來のことであつた。

首相が席についたときの重々しい顏、更に露西亞大使席の寂しさなどが逸早く新聞に報道された。

流石に外相グレー卿は、百戰鍊磨の政治家であつた。その演說は知らず識らずの裡に、議會を戰爭熱に導いた。保守黨のボナー・ローは、豫定の通りに、戰爭に贊成の意を表した。最後にレッドモンドの煽動的演說によつて、英國議會は戰爭熱で白熱化してきた。

この空氣の眞ツたゞなかに、マクドナルドは、起ち上つたのである。その聲は、しかし、何時もの冷靜を失はなかつた。

『事情が許すならば、私は今日、沈默を守り通したかつた。しかし事情がそれを許さないのであります。私は今し方聽いた二つの演說について、申し述べなければならぬ。その尊敬すべき方は、後年永遠に歴史に殘るやうな、大演說をなされた。それは頗るイムプレッシヴなものであつた。如何にその結論には反對なものでも、我々は氏の演說の人を動かす點は、これを認めなければならないであらう。が併し、氏は誤つてゐると、私は思ふのであります。氏の代表する政府も誤まつてゐると、私は思ふ。將來歴史の判決も、結局彼等が誤まつてゐたことを、明らかにするであらうと思ふ』

マクドナルドの言葉には、氷の刃のやうな冷かさと鋭さとがあつた。議場はシーンと靜まりかへつた。

『若しグレー卿にして、本日この議場に來て、わが國は危機に瀕してゐると言はれるのならば、それが何の政黨に訴へらるゝを問はず、何の階級に訴へらるゝに關せず、我々は氏に贊成

し、喜んで氏の後ろに從ふものである。喜んで、必要な金も提供しよう。いや、それぱかりではない。若し國家が危機に瀕してゐるのならば、我々は生命をも投げ出して惜まぬものであります。だが然し、私は、氏の演説によつて、國が危機に瀕してゐるとは思へない。明日氏の演説が、新聞の冷い活字となつて現はれたとき、わが國の大衆を説得しえないことを堅く信じてゐる。若し國の名譽が危機に瀕してゐるならば、われ等は飽くまで彼等と行動を共にしなければならぬ。併しながら、從來の政治家にして、國家の名譽について訴ふることなくして、その罪悪を行ひたることありや。クリミア戰爭は、國家の名譽のためだと言つて戰はれた。南亞に對しても、同じ名譽のために突貫させられたのである。そしてグレー卿は、今日、同じ國家の名譽のために、我々に訴へられてゐるのだ。……我々は過去の事例だけで充分である。何日われ等は、同じことを繰り返へさねばならぬのか』

　マクドナルドの聲には、殉國者のやうな、悲壯な叫びがあつた。

『私は知らない。しかし議會の感情は、私と反對であるといふことを感ずる。私は以前、すでにかういふ空氣を突き拔けて來た。たゞ一人節を持するといふことは、最後において酬いられる日があることを、私は信じてゐるからである。何が起らうとも、何を言はれようとも、如何なる攻撃が加へられようとも、我々は非戰論の信念に基いて行動するものである。なぜなら私は、心の奥の奥底において、それのみが正しく、國家の名譽と傳統とにそふ所以であることを、堅く信ずるからである』

　マクドナルドの演説は、議會に非常な激動を與へた。たゞ一人、眼ばたきもせず、この演説を聽いてゐる一人の男があつた。

　それがロイド・ジョージであつた。――例の大きな頭を、卓上に頰杖ついたまゝで。

五

　マクドナルドの演説は、勿論、議會の大勢を喰ひとめることができなかつた。却つてそれは、彼を益々孤獨にした。

　その晩、彼は議院内で、重要な會議に出席した。その席には、各政黨の巨頭が、内閣の閣僚とともに、全部顏を揃へてゐた。そしてその會議で、開戰は決せられ、直ちに最後の通牒は發せられた。

　マクドナルドは完全に獨りボッチになつた。これから八年の間、英國全部を向ふにまはして戰はねばならぬ、怖ろしい逆境時代が、この瞬間に決つたのである。

　一人の友人が、彼を慰めるやうに言つた。

『倅子はすでに投ぜられた。戰爭はもはや避けがたい。しかしこの戰爭はきつと不人氣だらうぜ』

すると、默りこくつてゐたマクドナルドが、突然に聲を放つた。

『馬鹿な。開闢以來、人氣のある戰爭になるだらうよ。見給へ、群集は狂氣になりかゝつてゐるではないか』

マクドナルドは議院の二階の窓を押し開いた。そこからは、熱狂した民衆の姿が、手にとるやうに認められた。

踊り際になつて、マクドナルドは、一瞬間、ロイド・ジョージと一緒になつた。

『マクドナルド君。いよ〳〵君と袂を分たねばならぬ時機が來た』

『さうだ。俺はこれから、全世界を敵にしなければならぬ』

『……』

『しかし、何時かは、また手を握つて談笑する日が來るだらう。それまでは……』

このときビッグベンから、深夜十二時の鐘の音が、殷々と響いて來た。マクドナルドは、親しさうに、ロイド・ジョージの肩に手をおいて言つた。

『ジョージ君。あれが第一卷の終りだよ。一エポックの終幕なのだ』

二人は無言の握手をして別れた。

それから八年、マクドナルドは、英國全土の迫害を忍ばねばならなかつた。彼が演壇に姿を現はすと、聽衆は『賣國奴』あるひは『叛逆者』と叫んで、石を投げつけた。殺到し來る群衆の難を避けて、裏門からこつそり逃げだしたこともあつた。彼は勞働黨首領の地位を退いたばかりでなく、二回もつゞけて落選した。

彼は全くの獨りボツチとなつた。

その間にロイド・ジョージは、戰爭内閣の首相となつて、あの幅廣い二つの肩に、英帝國の運命を擔つた。しかし彼は、そのとき逆境のどん底にあるマクドナルドのことを、かう言つてゐた。

『マクドナルドは怖ろしい男だ。いまに復活する。そして大英帝國は、彼の掌の下に動くやうになるだらう』（終）

事業界兩横綱の好取組

――大川平三郎對藤原銀次郎――

石山賢吉

實業界での好敵手と云へば、武藤對和田と極つて居た。處が、大正十三年に和田氏が死んで、是れは最う問題にならなくなつた。今日での好敵手は大川對藤原の右へ出る者がない。人物から云つても、事業から云つても、此の取組は武藤對和田に譲らない。横綱同志の好取組である。

紡績界の進歩は、武藤和田の對抗に原因する所が少くないが、製紙界の進歩も亦大川藤原の對抗に負ふ所が少くない。

『なにツ大川が！』

『なにツ藤原が！』



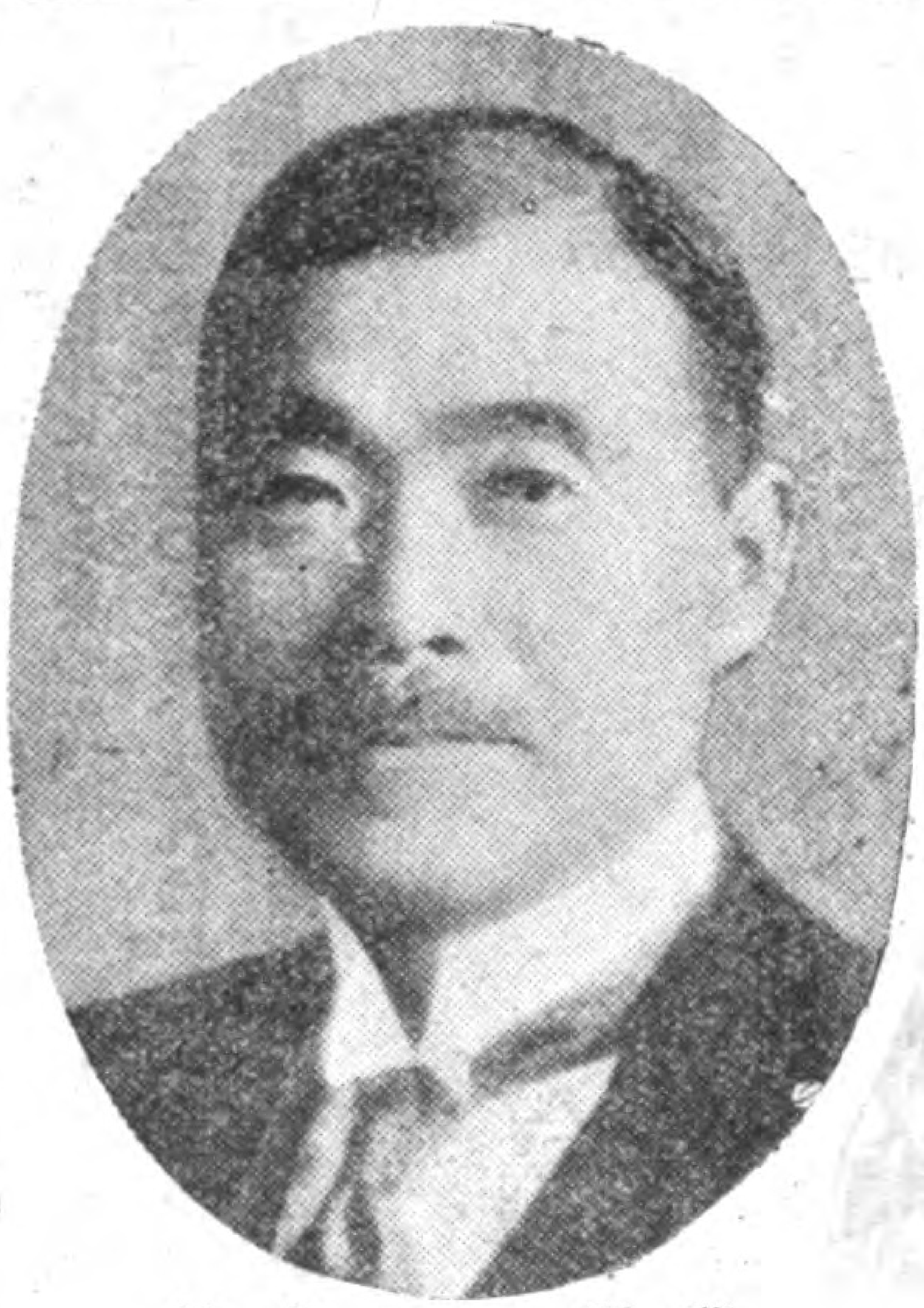
大川平三郎氏

と云ひつゝ、兩雄鎬を削つての對抗がどれほど日本の製紙界を進歩させた事か。

日本は、新聞用紙に於いては、既に數年前に世界いづれの製紙國にも比肩し得るやうになつた。續いて又一般印刷用紙の改良にも成功し、外國紙の輸入を撃退した上、進んで海外へ日本紙を輸出し得るやうになつた。即ち製紙の輸入國であつた日本は一轉して輸出國になつたのだが、進んで其の原因を究めて見れば、大川對藤原の競爭が其の原動力になつて居る。大川、藤原を先んずれば、藤原は大川に負けじと追ひ越し、マソラン競爭のやうな兩雄の對抗が日本の製紙界に長足の進歩をさせたのである。若し日本の製紙界に此の兩雄が出現しなかつたならば、到底今日の如き進歩をしなかつたであらう。

○

大川氏と藤原氏とは、製紙界の兩雄として相對して居るが、其の性格は正反對である。大川氏は自ら働く人であるが、藤原氏は人に働かす人である。大川氏は自ら先頭に立つて敵陣に臨む勇將であるが、藤原氏は床几に倚つて三軍を指揮する智將である。大川氏は謙信に似て居り、藤原氏は信玄に似て居る。大川氏は器用であるが、藤原氏は不器用である。大川氏は右と左の兩手が利く。右に右文字を書き、左に左文字を書く。左右に書き並べた其文字は寸分違はぬ程の兩手利きである。其の上、唄も歌へば、碁も打つし、將棊も指す。唄は歌澤が得意で、玄人の域に達して居る。やれば何でもやれ、直ぐに上手になる器用人である。藤原氏は唄などてんで問題にならず、酒も飲めないし、字も下手だ。聊か茶の心得があつて、將棊を指す位な處である。大川氏は獨學、藤原氏は學校出、大川氏は貧乏士族の小倅、藤原氏は豪農の息子。——性格も境遇も飽くまでも變つて居ながら、どちらも製紙界の大立物となつて相對して居る處が面白い。



藤原銀次郎氏

○

大川氏は萬延元年十月二十日の生れ、本年丁度七十歳である。生れ所は武州松山藩、藩に撃劍の指南をして居た劍術遣ひの長男である。大川氏は温和の父に似ないで、利かぬ氣の母の血を受けた。稍長じて藩の塾へ行き出すと、大分の才智が溢れて時々先生をへこませた。

『先生、二一天作の五と云ふが、あれはどう云ふ譯ですか』

十三歳の少年平三郎は算術の先生を捉へて斯う質問をしたのである。大概の先生は、割り言葉の由來など知らない。其の先生も返答に困つて何とか胡麻化さうとし、

『それは割り言葉で、譯など知らなくともいゝ。唯、さう覺えて居ればいゝのだ』

と答へたが、少年平三郎氏は中々それでは承知しない。家に歸つて頻に其の語源を考へた。

『二二天作の五と云ひながら、一を拂つて五をのつける……一は即ち十で、十の中に二が五つあるから、二二と天作の五と云ふのだ』

と、わかつた。一つわかると皆なわかる。忽ちのうちに算術の九々を皆な考へ附いた。

そこで、翌日塾へ行つてアベコベに先生に教へてやつた。先生は舌を卷いて驚いた。神童の名が藩中にひろまつた。

其の折柄、茲に一つの事件が起つた。と云つても、それは些細な私事であつたが、それが圖らずも神童平三郎の境遇を變化させる動機となつた。

大川氏の家は士族の貧乏暮しだから風呂などはない。近所の油屋へ貰ひ風呂に行くのを例とした。

或日の夕方、少年平三郎は例の如く油屋へ貰ひ風呂に行つた。たんまりあたゝまつて出ようとすると、只ならぬ物音が聽える。よく聽いて見ると、又例の婆さんが暴れ出したのであつた。

婆さんと云ふのは、油屋の主人の母親で、之に酒亂の癖がある。酒が好きでよく飲むが、度が過ぎると暴れ出す。其の日もチビ〳〵始め出し、到頭暴れ出したのであつた。女だてらにそこらの物を取つて抛り出す。イヤ大變な騷ぎである。表は一ぱいの人だかりであるが、油屋の主人は親の事だからどうする事も出來ない。



此の光景を見て取つた少年平三郎は、子供ながらも油屋の主人が氣の毒で堪らず、風呂から出るや、早速人だかりを散らしてやつた。

其の態度が子供らしくなかつた。豫ね〴〵此の神童の才氣に感服して居る油屋の主人は其の場の捌きに又新しい感服をし、遂に神童の爲めに一肌拔がうと決心した。

そこで、油屋の主人は大川氏の兩親を說き、

『斯る神童を田舍に擊劍を習はして置くのは惜しい』

と云つて、上京をすゝめ、東京へ出して學問をさせる事になつた。それは明治四年の事であつた。

東京へ出て來た少年平三郎は、親戚の澁澤をたより、同家に寄寓して、其處から神田の學校へ通つた。貧乏でも士族の子、郷里を出る時は、武士のたしなみで、腰に一本ぶち込んだものだ。然し、頭は散髪にして來た。是が當時のハイカラで、餘程進取の氣性に富んだものでなければ、頭髪を斬らなかつたものである。其の頃流行唄に、

斬切頭を叩いて見れば
文明開化の音がする

と云ふのがあつた位だ。

少年大川平三郎は澁澤家の玄關から神田の學校に通ひ、三年間熱心に獨逸語の勉强をした。これで獨逸語を覺え込み、獨逸語なら何でも讀めるやうになつた。

其の頃は兩親も東京へ出て居た。これも油屋の後援である。東京米子に學問修業をすゝめた油屋の主人は親もと云ふので、東京米社の株を買つて與れ、父親を其の仲買にして與れた。然し、父親は温良の劍客であるから、はげしい商賣の仲買には適さない。番頭に胡麻化されて忽ち破産して仕舞つた。そして、大川氏の



阿母さんが二ケ月續けて澁澤家へ金を十圓借りに行つた。澁澤氏の夫人は大川氏の阿母さんの姉で、大川氏とは伯母甥の間柄であるから遠慮がない。

『平三郎よ。お前のお父さんもあまり意氣地なしではがゆくてならぬ。なんぼなんでも食ふ事位は出來さうなものだのに……』

大川氏のお父さんの腑甲斐なさを痛歎した。

此の時大川氏は十七になつて居た。利かぬ氣のはげしい氣性だから、其の言葉を其の儘聽き流しにはしない。大に發奮して其の日限り學問をよす事にした。そして其の年新しく出來た王子製紙會社へ月給取に入れて貰ふ事にした。

其の時の月給は五圓だつた。お米が三圓しかしない時代ではあつたが、五圓の月給は安い。獨立して會社へ通ふ資格がないから、相變らず松田と云ふ副支配人の玄關番をしながら會社へ通つた。

大川氏は元來克明な生れ附きである。澁澤家に寄寓して居た

時でも、親類顔をせず、普通の書生と同じに働いた。イヤ寧ろそれ以上に働いた。朝早く起きて庭の掃除をし、雨戸を開け、座敷を片附け、緣側を綺麗に拭いて、それから後ちに學校へ通つた。王子製紙へ勤めるやうになつてからは一層働いた。親の失敗に發奮し、出世に燃えて居るのだから、其の意氣組が尋常でない。副支配人の家で、玄關番の役目を充分はたした上、それから會社へ出勤するのだが、それであつて會社には誰よりも早い。毎朝五時には必ず會社へ出て居る。出ると直ぐ着物を脫いで半裸體になつて働く。褌一つに襦袢一枚といふいでたちである。そして釜を焚いて機械を溫ためる。運轉の準備をして置くのである。一同が時間に出て來ると、直ぐ機械が動かせる。副支配人の家庭でも悅ばるれば會社でも重寶がられる。新入の青年大川平三郎は忽ち會社の評判男となつて仕舞つた。

然し、單にこれだけの事ならば、大川氏は必ずしも世間に類のない青年ではなかつた。大川氏には之に加へる他のものがあつた。それが大川氏の非凡な所である。

大川氏は研究心が旺盛だ。何事も新しく眼に見え、耳に入れば、其の儘にはしない。進んで其の本體を究めなければやまない。獨の塾で算術の先生をへこませたのも、持つて生れた研究心からである。王子製紙へ勤めるやうになつて第一に大川氏の研究心を刺戟したのは、馬力といふ數へ言葉であつた。これは、日本には無い言葉だ。馬力とは一體どう云ふ斷定なんだらう。と云ふ事を問題にし出した。之を問題にすると、又次ぎの問題が起る。石炭を焚くと蒸氣が起るが、蒸氣とは何か。其の起る蒸氣は何程の力があるものか。問題は次ぎから次ぎへと湧いて來る。大川氏は之を知る事を心掛けた。だが、それは算術の九九のやうな譯には行かない。大川氏が獨りで考へても問題の解決は出來ない。と云つて、それを敎はる先生はなかつた。

休日の或日、神田の本屋を冷やかして居ると、物理書が見つかつた。價を訊くと七十錢と云ふ。月給五圓の大川氏には堪へ難い負擔であつた。値切つて見たが、古本でないから負けない。大奮發でそれを買つて歸つて、讀み出した。其の本は生憎英語で書いたものであつた。獨逸語を學んだ身には勝手が違ふが、字引を引けば讀めない事もない。暇をぬすんでコツ／＼讀み出した。初めのうちは難澁であつたが、少し解り出して來ると、面白くて堪らない。自分が知りたいと思つて居る事を苦もなく敎へて呉れる。そして、それが片端から實地に役立つて行く。到頭其の本を、僅かな時間で讀みながら、一年で讀破して仕舞つた。

物理の終らぬ頃に化學の研究も始めた。それが終ると、經濟に移り、大概の事を皆な獨學で讀破して仕舞つた。

斯う云ふ風に、大川氏は、勤勉で、獨學で、其の上才智に富

んで居るのだから、其の進歩が著しい。會社では一番下端の工場員でありながら、一番役に立つ技師となつて仕舞つた。會社には其の頃二名の外人技師が居たが、言葉がよく通じないから、此の技師の指圖では工場が動かない。何をするにも大川大川で、大川氏は會社で無くてならぬ人物になつて仕舞つた。其の結果、遂に洋行させられるやうになり、斯くして氏の技倆は益よ上達した。

大川氏は明治七年に王子製紙へ入社してから三十一年まで二十六年間會社に勤續した。そして、一職工から身を起して遂に會社の經營者になつて仕舞つた。明治三十一年に王子製紙が三井家の經營に移つてから、同會社を去つた。そして獨立した實業家となつた。これからの氏は又非常の發展をなし、今日では富士製紙、樺太工業の社長として、製紙王と謳はれるの外、多くの社長重役を兼ねて居る。試に氏の關係會社を數へて見ると、六十五會社に及ぶ。其の資本金を合計すると六億八千萬圓となり、内拂込四億三千萬圓である。其の會社を種類別にすると、製紙會社九、拓殖會社二、交通會社一五、セメント窯業五、鐵會社五、電氣瓦斯會社九、銀行二、保險二、紡織會社二、炭鑛三、其の他十一である。そして、是等の會社に社長たる事二二、相談役たる事一二、其の他は平取締役と監査役である。氏は製紙王であると同時に又會社王である。

○

藤原氏は明治三年生れ、本年六十歳であつて、大川氏より十歳の歳下である。郷里は長野縣長野市に程近い一農村。裕福な農家に生れた人だけに、大川氏の如き經歴上の波瀾はない。慶應義塾卒業、松江日報創刊、三井銀行員、三井物産員と云ふ至極順調な徑路を辿つて居る。

氏は一見平凡の人である。然し、平凡の裡に深い機略を藏して居る。事が起ると、鋒鋩を現はす。底力の強い人である。忍耐力に富み、進んで機會を造らうとはしない。隱忍して機會を待つ。家康流の人である。堅實無類であると同時に、機會が來なければ自己の力量を示し得ない損がある。氏にして若し王子製紙を引受けなかつたならば、名を成さずに終つたかも知れない。事が起つて初めて自己の存在を明かにする人である。

氏が三井銀行員から富岡製絲の總支配人に榮轉し、其處に勤務して居た其の時、王子製紙にストライキが起つた。生憎、專務の藤山雷太氏が病氣であつた。三井家でも其の代理人を誰彼と物色した。事は頗る重大である。三井家の事だから、ストライキから崇る損害に驚かないが、時事新報の紙にヒドク心を痛めた。若しストライキの爲めに、一日でも時事新報を休刊さすやうな事があつては大變だ、と云ふので、其の人選に心を碎い

た。其の結果、白羽の矢が立つたのが當時未だ三十歳を少し出たばかりの藤原銀次郎氏であつた。

斯う云ふ時は、強い人物は却つていけない。柔よく剛を制すで、一見柔和な藤原氏が至當適當であらうと云ふので、衆議一決、早速電報で藤原氏を呼び寄せて、王子へ差し向けた。そうしたら、藤原氏も期待の如く美事に使命を果した。氏は先づ同業會社の富士製紙へ行つて應援を求めたものだ。事は一會社の問題ではない。新聞紙の休業に關するのだから、云はゞ天下の問題である。よろしく應援を頼むと云つて、技師と職工を貸す事を申込んだ。富士製紙では理の當然に服して其の申込を承諾した。是れで時事新報への供給は無事だつた。そして、ストライキもそれに力を挫かれて間もなく片附いて仕舞つた。藤原氏は少なからず男を上げた。それから三井物産に轉じ、十餘年の後ち井上侯の推　を受けて王子製紙の整理を引受ける事になつた。其の頃の王子製紙は、前經營者の積極政策が失敗して非常な窮地に陷つて居た。氏はそれを美事に整理して今日の如き立派な會社にした。今日の王子製紙會社は多くの會社から模範と仰がれて居る。其の經營が科學的なる點に於いて、其の基礎が鞏固なる點に於いて、今日の王子製紙會社は稀に見る良會社であつて、多くの會社から模範と仰がれるのは當然である。藤原氏は如何にして王子製紙を改革したか。藤原氏は組織的の學問をした人ではあるが、製紙事業には例のストライキ鎭定以前何等の經驗がない人である。大川氏の如く、製紙工場に成長し、製紙工場に學問した人とは違ふ。製紙事業に全然無經驗の藤原氏が如何にして王子製紙を立派な會社にしたか。

一言にして盡せば、其の原因は人の遣ひ方が旨かつた事に在る。藤原氏自身も相當に偉いが、それよりも人を働かす事の旨いのが氏の最大長所である。氏は此の長所を發揮して王子製紙の經營に成功したのである。

藤原氏が王子の整理を引受けたのは、明治四十四年の秋であるが、其の時王子製紙には四つの工場があつた。東京府下の王子と遠州の氣田中部と北海道の苫小牧とである。其の內北海道の苫小牧工場は出來たばかりであつた。然も、前經營者は此の工場を造つた爲めに蹉跌したのであつた。藤原氏は王子製紙の整理を引受くるや、一ト通り工場を觀て廻はり、然る後ちに改革案を作つたのであるが、改革案を作るに就いては、特に苫小牧に力を入れた。是が當時の病源であつたからである。

其の頃苫小牧に一人の米人技師が居た。工場建設の爲めに一年間米國から派遣されて來て居たのである。藤原氏は苫小牧を改革するに就いて先づ此の技師の意見を聽いた。是れは、今日になつて聞けば何でもないやうであるが、當時の事情からすれば、此の廣い藤原氏でなければ出來ぬ事であつた。ナゼかと云

へば其の次第は斯うである。

苫小牧工場は、前經營者が東洋一の製紙工場を造らうと企て米國に設計を頼み機械を頼み一切を米國式に造つた工場である。其の工場が旨く行かぬとあれば、其の罪は米國人に在る。それに改革案を訊くなど、方角違ひの事と誰しも考へる所だが、思慮綿密の藤原氏はそう單純に考へない。物事には理外の理と云ふ事がある。それに、苫小牧工場は米國の機械で米國の設計



たる以上、それが旨く行かぬに就いては、彼等に相當の言分があるに相違ない。須らく先づそれを聽くべきものとして、外人技師の意見を聽いたのであつた。

そうしたら、果して米人技師に言分があつた。彼は滔々として苫小牧工場が不可なる所以を辯じた。それに依ると、苫小牧工場は米國の設計通りに造られなかつた。途中、資金難に遭遇した爲めに、或部分手を拔いて、工場を完成した。その爲め全部の能力が一致しないで、瓢簞設備になつて居る。之を直さなければ到底豫定の成績は擧らぬと云ふのであつた。

成程、云はれて見れば其の通りである。前工程の碎木パルプを造る所が甚だ小さくなつて居り、之に阻まれて豫定の成績が擧らない事がわかつた。

藤原氏は米人技師の意見に基いて、早速苫小牧工場の改革案を作つた。そして、彼に對して尚ほも指導を乞うた。

處が、彼はそれを承知しなかつた。此工場は單に其建設が惡い許りでなく、働き方も惡い。工場員は少しも勉强しない。そして、一番働く職工が安い賃銀を取つて、何にもしない工場員が高い給金を取つて居る。こんな矛盾した事はない。これでは到底駄目

た。自分は自分の任務を終へたから、これより本國へ歸へると云ふのであつた。

藤原氏は自分が整理を引受けた旨を物語り、一年間の留任を乞うたが、彼は肯かないで歸國して仕舞つた。

然し、彼と藤原氏との交渉は、それなり斷絶しなかつた。藤原氏も其後六つかしい問題が起る度毎に、書面を以て屢々彼の意見を訊いた。彼も又喜んで之に答へて呉れた。その爲め、彼と藤原氏との間柄は非常に親密になつた。自然彼も其後再び日本へ來た。そして、種々新規の事を教へて歸つた。斯くする事前後四五回に及び、藤原氏が後年渡米實業團の一員として彼國へ行つた時は、彼は藤原氏を自からの自動車に載せて、幾百哩も走り、彼國の製紙工場を數多く見學させて呉れた。

然し、それは後ちの事で、藤原氏は米人技師から苫小牧工場の改革意見を聽き、それに基いて全工場を改革した。それと同時に遠州に於ける氣田中部の兩工場と東京府下の王子工場も改革した。これで以て瀕死の王子製紙が立派な會社に立直つて仕舞つた。それに勢ひを得て氏は更に樺太へパルプ工場を建設した折柄、歐洲戰亂が發生し、パルプと紙價が暴騰して大儲けをした。氏は是れで會社の基礎を固めた。

其結果、今日の模範會社と仰がれるやうになつたのである。

氏の外人技師利用は一人ではない。最初の米人技師はワッツウオーツと云ふのであつたが、是れは數年前に死んだ。近年は佛蘭西の技師と獨逸の技師を毎年交互に招聘して採長補短の道を講じて居る。佛蘭西技師はワーレンと云ふ米國育ちの技師で、是れまで二回藤原氏の招聘に應じて來た。獨逸の技師はアベールと云ふので、是れも昨年一回來た。前者は機械技師で後者は化學技師である。王子製紙の經營法がスッカリ科學的で、外國に劣らぬやうになつたのは、以上の外國技師に負ふ所が多いのである。

藤原氏は外人の利用が旨い位であるから、無論、部下に多くの人材を集めて居る。氏の配下には何處の會社を引受けても立派に經營の出來る人が幾人も居る。秀才雲の如しと云ふ有樣である。氏の人物登庸法は決して形式に拘泥しない。才能があれば其身分の如何を問はずドシ／＼引き上げる。苫小牧工場には職工上りの技師が一番高い報酬を得て居る。以て其全般を知るべきである。

藤原氏は多くの會社に關係しない。王子製紙と王子製紙の關係會社に重役たる外、電氣化學工業會社の社長を兼ねて居るだけである。それであつて、六十五會社の大川氏と相對して少しも下る所がない。氏の狹く深くと云ふ主義が重ぜられて居るのである。

大川氏は母親の氣性を受けた。藤原氏は母親にも似、父親に

も似た。キチヤウメンの一面は父親に似、才氣の半面は母親に似たのである。何から何まで違つて居つて、そして相對して居る所が面白い。

天才同志の五十七番將棋

―伊藤印達と大橋宗銀―

赤松月船

將棋の家元は三家ある。大橋本家、同じく分家、伊藤家――この三家は代々將棋所名人の位地を望んで、血をしぼり骨を削つて戰ひをつゞけたものであつた。今こゝに將棋所名人の系譜を擧げてみるならば、初世名人は大橋初代宗桂、二世名人は同じく大橋二代宗古、三世名人は伊藤家初代宗看、四世は大橋家五代宗桂、五世は伊藤家の宗印、六世は大橋分家の宗與、ざつとかういふ順序になる。

ところで、伊藤家は宗印の代に至つてその子に兄弟揃ひも揃つて非常な英才を簇出した。長男印達、二男印壽これは二十三歳で將棋所名人になつた二代宗看である。三男宗壽後に大橋家を繼いで八段、四男は七段の看恕。末弟看壽は死後名人を贈られたほどの達人。この中總領の印達はわづか十五歳で夭折したが、しかし兄弟中最も天分にめぐまれてゐた、十三歳の時すでに四段に進んだといふのだから、恐ろしい光り方である。

伊藤家の俊秀雲の如くなるに對して大橋本家五代目宗桂にはこれとおもふ目ぼしい子がなかつたので、養子を迎へた、即ちこれが印達と並んで本篇の主人公である宗銀にほかならない。

さて、親同志の宗桂宗印、これに大橋分家の宗與が加はつた三者必死の烈しい張りつめた關係は改めていふまでもない事乍ら、この關係がそのまゝ直ぐ彼等の後繼者達の上に反映するのは勿論當然なことで、かてゝ加へて、一方の伊藤家の後繼者印達がめき／＼神童の面目を發揮するに相應じて大橋宗家を繼ぐ可き宗銀も劣らず駿足をのして行くとしたら、いよ／＼以てこの對立競爭は加速度に發展せずにはゐない。又世間の興味も自ら兩者の上に集注されるし、又親達の心としても、一體自分の子にどれだけの力があるか、果して相手を凌駕し得るかど

ろか、これが知りたくてならない、勿論家名の起伏をかけてのことである、將來の將棋名人といふ大事を決することにもなる、兩者はどうしても行きつくところまで行かずには收まらぬ、戰雲は急又急。

果然！　挑戰狀は大橋宗家からさしつけられた。伊藤家に於ても何條拒むべき。固より望むところであるとばかり、快く戰ひに應じて立つた。時に印達十三歳、宗銀は十六歳。寶永六年の十月十日、菊花の香りに秋冷を犇と身に沁めた紅顏の棋士ははじめて盤上に相對した、連戰三年に及び對局實に五十七番、將棋史上空前にして又恐らくは絶後であらう大棋戰はこゝに幕を切つて落されたのであつた。宗銀が先手で、先づ七六歩と突き出した。

何を云つても印達は十三歳の幼さ、さし口はいかにも無邪氣に見える。宗銀は印達より三つの年長。成人して後の三つはそれほどの相違でもないが、子供の時の三つは相當に大きな隔りと思はねばならぬ。それに宗銀は元來が巧みな將棋であるから、印達はともすれば押され氣味であつた、併し乍ら、一體に伊藤家の將棋といふものは鋭く強く底にかぎりなき地力を藏してゐるのが特色で、押され乍らもじり〳〵とよく持ちこたへる。そして一度敵に間隙が出來たと見るや、猛然と切つて返す。その氣勢の盛んなことは寄つてもつけない位。伊藤家の寧馨兒印達であるからには勿論血統の特色は十分承けついでゐるべき筈であつた。中盤に至つて宗銀が四六銀で手をあやまつた時、印達こゝぞとばかり二五歩と急追。一たん勢に乘ずると飽くまでひた押しに、押して相手に息もつかせない、到頭七九角までで宗銀を追ひつめてしまつた。つゞいて二番、三番と連



勝した、こゝに於て宗銀たるものどうして蹶起せずに居られよう、四番目は力戰見事に功を奏してはじめて勝つた。しかし次番は又印達に名を成さしめた。印達は番を重ねるに從つて持ち前の銳氣を閃かし、無邪氣に見えたさし口もいつか影をひそめた。

五回戰つて四對一――この成績は、宗銀、いや宗銀の養父宗桂にとつて意外千萬であつた。六回目對局の日が來た、するとその日になつて、伊藤家からわざ〳〵宗印がやつて來て、

『甚だ申しわけもムいませぬが、この度の將棋はこれで打ち切つて頂きたい。』との挨拶であつた。

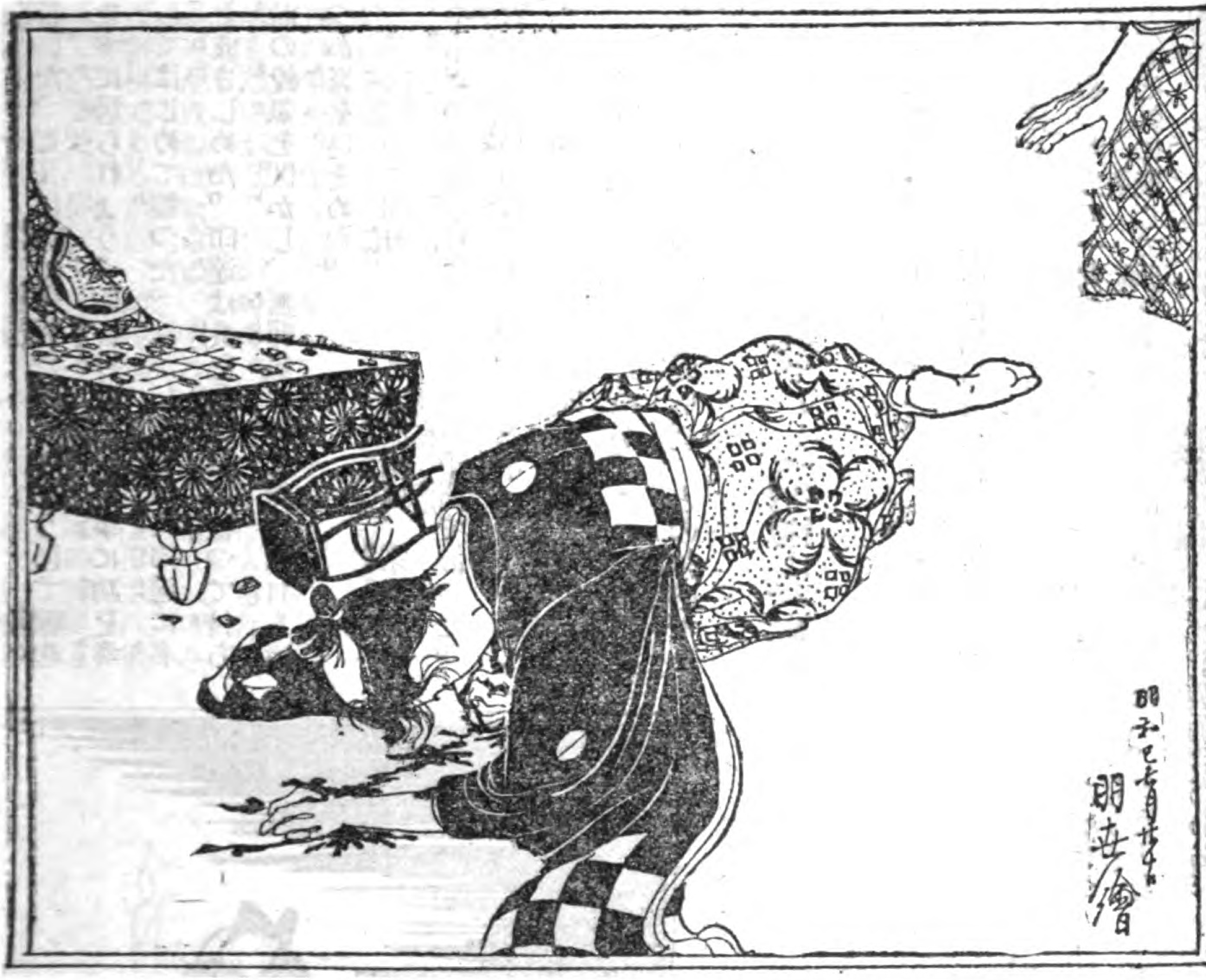
『それは又どうした次第で……』宗桂は不審の晴れぬ顏でたづねた。

『實は打明けて申上げますと、さし込み手合でなくてはいやだとかやうに印達がいひ出しました、何と云つても聞きませぬ。』

それはさうである、いくら勝つても平手で指すのだとしたら、勝つた力で一向氣乘りがしないわけで、やはり勝てば勝つたでそれに應じて駒を下すのでなければ面白くない。又實力を發揮することにもならない、印達の申し分は至極道理である。

しかし、宗印にして見れば、わが子も四段なら、相手の宗銀も四段である、同じ段位を持つてゐて、さし込み手合を申し出るといふのは相手に對する尊敬を些か缺くことになる、そこでいつそのこと打ち切りにしたいといふのであつた。これも甚だ分つた處置である。しかし、大橋家にしてみれば、戰士の面目にかけても、まして負け越しの弱目にある場合さういふ挨拶を受けてむざと退くことは出來ない。意地もある。プライドもある、立直つて相手を追ひつめるか、それともこちらが玉と碎けるか、覺悟のほぞをうんときめた大橋家では、





『よろしい、印達さんの云はれる通り、さし込み手合にいたしませう、そして飽くまでも對局をつゞけませう。』

と返答した。

さあ、かうなつて來ると戰ひは一味の悽慘さを添ふことになる。六回七回印達が勝つた、八回は宗銀の勝。そのあと九、十、十一、十二、と四回つゞけて印達が勝を占めたので半香落、卽ち印達が香を一つ下して戰ふことになつた。印達がますます出でてますます氣勢を擧げるのに、宗銀はと見れば、意氣頓に銷沈して、二十六番目には半香落が完全に香落になり、ついで角香落にさへなつた。宗銀は落膽のあまり病氣になつた、尤も疲勞も手傳つてはゐた。そのためか、寶永七年になつては二月以降、三月と七月とにわづか二回の手合をしたにすぎなかつた。身體を蝕まれたのは、寧ろ宗銀よりも印達の方が甚だしかつた、元來印達は父宗印の虚弱な肉體を受けついで、見るからに痛々しく面貌は青白、體軀はいかさま痩せほそつてゐた。

年は再び改まつた。卽ち寶永八年となつた、宗銀決死の奮鬪は幾度も盤面を盛り返したが、印達が蒼白の額に神經をかすかに顫はせ乍らも、あくまで勁くじり〳〵と寄つて來るおほどかさには、流石に强壓を蒙らずには居られない。宗銀の人爲が器用で才人で巧みを賴みとするだけに、大膽

石の印達に對しては遂に施すすべもなかつた。

五十番、五十一番、五十二番、五十三番と印達が勝つて、角香を交る〳〵下すのが完全に角落になつて了つた。五十四番、五十五番、五十六番の角落番ではさすがに宗銀が勝つた。若し五十七番をつゞけて勝つたなら。角香落に盛り返すことが出來る。二月二十八日、あゝこの日の戦ひこそ悲壮といはうか、悽慘と云はうか。もうすつかり病氣に蝕ばまれつくした印達は、丁と置く駒のひゞきにも一脈の鬼氣を迸らせて、宗銀が決河の勢ひを阻止しようとするのであつた、吐く息も熱苦しい。宗銀はと見れば、連敗の屈辱を一氣に雪がうといふ面持。

いづれが勝つか、はたいづれが敗るゝか。あゝしかし、この時、二人の心魂が緊張の最極點にあるとき、二人の肉體はいかに殘忍に破れつゝあつたか。悲壮である、悽慘である。宗桂と宗印は、この場面に直面して、しかもなほしづかに眺めてゐる、いや眺めてゐなければならなかつた、戦ひは兵家のつねである、戦ひに死するは兵家の面目である。しかし乍ら、この面目にかけて、二人の死を――刻々の死をしづかに、しづかに眺めてゐなければならぬのは、親の心としていかに辛かつたか。宗桂と宗印の胸中も亦涙なしには考へられぬ。

盤面は終局に押迫つて行つた。印達二七飛、宗銀が同と、と取る。印達三二金、宗銀五一玉、印達五二銀まで。印達は勝つた。宗銀の顔がはつと蒼ざめて兩眼に涙がにじんだと見るより先に、少し俯向いたとおもふ印達の口から、くわーッと紅い血が溢れ出た、と彼はがつくりとなつた。

印達は勝つたがしかし死んだ。宗銀もその翌年あとを追うた。印達十五歳、宗銀は十九歳。おもへば長い烈しい一騎打ではあつた。しかし、彼等がのこした血にいろどられた五十七番の棋譜は決して無駄ではなかつた、彼等が生命を打込めて指した指し口を研究することによつて、その後の將棋道は、俄然として精彩を加へたのであつた。

憲法發布背後の暗闘

――伊藤博文と大隈重信――

高木哲夫

一

グラッドストーンとデイスレリーとが相對峙したやうに、明治初期の政界に於ては、伊藤博文と大隈重信が相對立した。彼等は、維新の際は、御同様に一介の書生に過ぎなかつた、伊藤は、兵庫縣知事、大隈は九州鎭撫總督附の地方官をふり出しに、中央政府へのり出して來た。

二人とも才人だ、手腕も、力量も、辯口も、相伯仲して居る。たゞ、伊藤は長閥を背景にしてゐたが、大隈は佐賀出身で、有力な閥族の聲援がない。明治新政府に於て、三條岩倉兩卿が、一番手古摺つたのは、薩長人の跋扈である、そこでこれを抑へることは、是非とも人的才幹のすぐれた他藩人を重用するより外に途はなかつた。



伊藤博文公



『大隈こそ、その器である』

岩倉卿は、そこへ眼を着けて、大隈を擧用した。

伊藤がとん〳〵拍子に出世をすれば、大隈も亦これと雁行して、政機戰上に頭をもたげてくる。

大久保利通歿後の政府は、此の兩大關が對抗して、相降らな

かつた。折柄持ちあがつたのが、民選議院設立の問題だ、日本にも、憲法を作つて、議會を設けて、新しい政治組織に改めねばならぬといふ運動が、政府部内にも、民間有志の間にも、しきりに騒がれた。

『よし、憲法は、俺が作つてやる』

覇氣のある大隈は、すぐさま部下の矢野文雄に草案をつくらせ、有栖川宮熾仁親王殿下の御邸に參向した。

『明治十五年に憲法を發布し、十六年に國會を起すやうに致し度い、就ては意見書を認めて參りました。私擬憲法の草案も認めて參りました。殿下から陛下に御奉呈願ひます』

これを差出した。

かくと聞いた伊藤が膨れ出した。



大隈重信侯



『大隈の奴、怪しからん、憲法制定の功を己れに奪はんとして俺達に相談もなく、私擬憲法をつくるとは、以ての外である、……もし大隈の憲法を御採用になるならば、拙者は一日も朝廷に止ることは出來ません、冠を掛けて、野に下ります』

岩倉公に、斯う申し出た。

長閥中の中心人物である伊藤にダヽをこねられては、政府の

土臺がぐらつく、岩倉卿も、中に入つて、左右の分別もつかない。

つひに、大隈を追放することになつた。

これが、明治十四年の政變で、明治天皇が、東北御巡幸を終らせられて、宮中へ御還幸になつた七月十一日の夜、御前會議が開かれた。

大隈免官の勅裁を請ひ奉つた處、

『旨をさとして、辭表を差出させるがよい』

さういふ御言葉があつた。

よつて、辭職勸告の使にたつたのが、伊藤である。

『俺も、一緒に參りませう』と、西郷従道が、同道した。その頃の大隈の屋敷は、今の佛蘭西大使館の處にあつたが、夜遲く二人して出かけると、大隈は起きて居た。

覺悟してゐたと見え、すんなりと辭表を差出した。

二

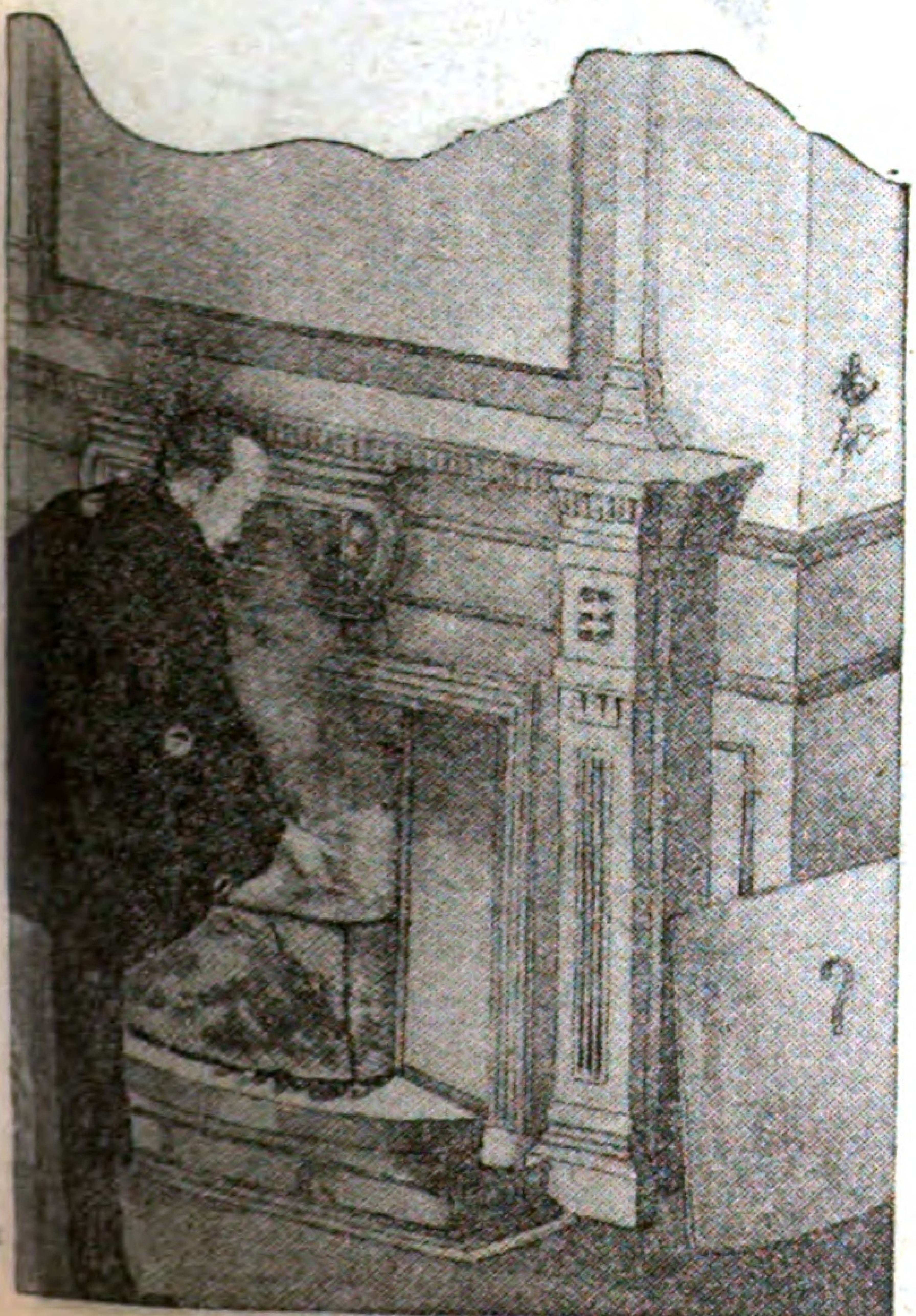
危ふく大隈から背負投を喰はうとした伊藤は、きはどい處で踏止ることが出來た。

で、明治二十三年を期して、國會を開くといふ詔が出て、今度は、伊藤が憲法を起草する大任を負うた。

『伊藤の奴、うまくやるかな』

内心、氣になつてゐた。

しかし、野に下つた彼が、政敵と對抗するに當つては、徒手空拳では何うにもならない。彼は、直ちに改進黨を組織して、伊藤の御手並拜見と出た。



國會開かるゝ曉は、堂々と伊藤を向うに廻して、舌戰の火蓋を切らうといふ考であつた。

伊藤は、伊藤で、憲法取調の爲、獨逸に派遣されたが、歸朝後は、せつせと起草にとりかゝつた。國會召集の期は迫つて、愈よ明治二十年となる。

伊皿子の別莊に乘りつけた二臺の大臣馬車、先の馬車から黑田淸隆、後の馬車からは、珍しや大隈重信がひよつこりと現はれた。

十四年七月、辭表を呈して以來、久しぶりの會見であつた。これは、黑田が、二人の間を何かと心配して、伊藤に會はせる爲、大隈をつれ出したのだ。

『やア』

會へば、やつぱり昔築地の梁山泊で、膝つきあはして、天下の大事を語りあはしたやうな態度になる。

『時に、伊藤さん、憲法の方は、もう出來上つたか』

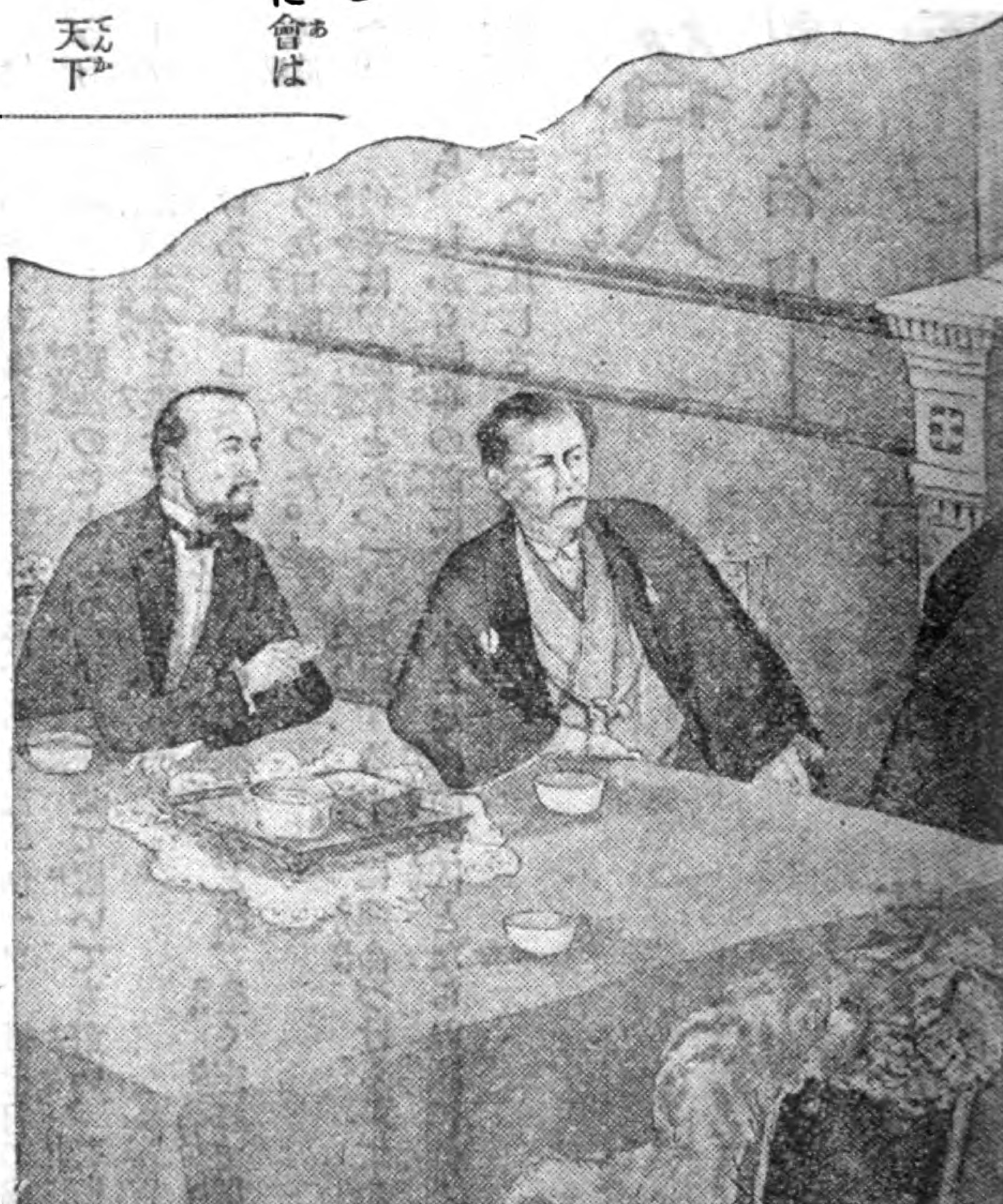
『折角今やつて居る』

『ついては、吾輩にも意見がある、かいて持つて來たので、見て貰ひたい』

意見書を取り出すと、伊藤の顏がさつとかはつた。

『折角だが、見るわけにはいかん』

『いや、ぜひ參考にして貰ひたい』



『君からこれをうけ取れば、俺はよし見なくても、他から見たと思はれる、憲法草案の中に、君の說と同一の個所があるとすれば、俺が大隈の說に左右されたと、世間からそういはれる、それは甚だ迷惑である、どういふ意見か知らぬが、君の意なら、もう此方で取調がすんで居る。もつて歸つてくれ』

『いや、吾輩も、君の處へ意見書をもつて來て、返されたからといつて、其の儘うけとれぬ』

『では、どうすれば好い』
『どうでもしてくれ』
『さうか、燒いて了つてもよいか』
『結構』

伊藤は、その草案をストーブの中へ投げ込んだ。それに火がうつッて、メラ〳〵と燃えるのを見乍ら、二人して、うはゝゝと笑ひ出した。

大隈が、喧嘩分れの後、伊藤の別莊へのりこんだのは、いはば謙信、單騎馬を躍らせて、信玄の本陣へ斬込んだ形。だが伊藤もさるもの、おいそれと意見書をうけとらずして、ストーブに燻べた處は、流石に智慧者である。

此の原案が脱稿して、愈〻樞密院に於て、逐條討議となつた際は、大隈は、黑田內閣に入つて、外務大臣の椅子についてゐた。

『十四年此の方のいきさつがある、定めし大隈が喧しい議論を吐くであらう、……だが、矢でも鐵砲でも、何でも來い、此方には、相手をする丈の準備が出來てゐる』

伊藤も、非常な決意をして、會議に臨んだもんだ。

すると、どうだ。大隈外相は、會議の最初の日に、一日顏を出した丈で、あとは姿を見せない。

伊藤は張りこんでゐた丈に、急に手持無沙汰の感がした。

『どうしたのだ、大隈は？』

容子をさぐらせると、そこは、大隈も、器が大きい。

『いや、草案を見て安心した、あれなら何一ツ、批を打つ處はない、……憲法のことなら伊藤に任せて置いても好い、吾輩は吾輩の本分を盡せば、それで好い』

けろりとして、十四年以來の出來事などは、全く忘れて居るやうな口吻であつた。

彼等は、政敵となつて、相對するやうに運命づけられてゐ乍ら、しかも國事の前には、小さな感情の囚とならぬ處に何とも云へぬ床しさがある。

鎬を削る二名人

——初代伯圓と初代伯山——

榎本芝水

「欺されたと思つてお客樣方、先ア聽いて御覽なさい。夫りやア巧いものですぜ」

笑を含みつゝ高座の上から、看板主初代伯圓の藝を、賞讃しながら紹介したのは、名人桃林亭東玉であつた。

この東玉の至藝に就ては、嘗て本誌の需めに應じ、その逸話を述べた事もあるが、東玉が天保の八年に大阪から江戸へ還り、同年六月兩國の回向院で、京都嵯峨の釋迦如來御開帳に際し、毎日參詣の群集雜沓を當込み、兩國橋南詰長左衞門の席へ出演し、際物の釋迦八相記を講じた時など、初日以來日々客止の盛況で、その巧みなる藝風を慕ひ、入門を望んだ者一時に十三人も有つたといふ位、高評江戸中へ鳴り響いた。

これを聞いた初代の典山が、折から今川橋の染川といふ席へかゝつてゐたが、ある日一寸支障があつて休席したを幸ひ、一度東玉の高座を聽いて見ようと、染川の席主吉兵衞を伴ひ、長左衞門の席へ入つた。その日も六百人からの入りで場内は一杯になつてゐた。典山と吉兵衞は、窮屈を忍んで隅の方に坐つてゐたが、やがて東玉が高座へ上り、張扇を以て机を一つ打ち、これから講談にかゝらうとすると、典山は吉兵衞を顧み、

『サアもう歸らうよ』

と促した。東玉が今上つたばかりで、まだ一ト口も辯じないのに、モウ歸らうといふのは變だと思つたが吉兵衞は典山のいふが儘に席を出た。典山は何やら考へ込んでゐたが、兩國橋まで來ると嘆息して、

『東玉は名人だなア』

と呟いた。吉兵衞はます／＼不審に思ひ、

『先生。貴方は東玉さんを一ト目見たばかりで、何うして名人といふ事が解りました』

と質ねた。典山は足を止め、

『何故といつて考へて御覽。六百人から入つて居る多勢の聽衆が中入の間はゴタ／＼ガヤ／＼混雜してゐたが、東玉が高座へ上り、張扇を一つポンと入れたら、あの通り水を打つた如く、一時にシーンと靜かになつたらう。あれはつまり東玉が一人で、六百からの聽客の魂を奪つてゐる證據だ。名人でなければそこ迄は至らぬもの、聽かずとも彼の巧いことは判つて居る』

典山は斯う說明して、後は多くを語らなかつたといふ。達人にあらざれば達人を知る能はず。一目して東玉の名人なることを知つた典山も、凡手でない事いふ迄もない。これは有名な逸話である。

それ程の東玉が、そりやア巧いものですぜと、折紙をつけた初代伯圓は、これ亦講談界故名家中の一人であつた。

彼は南傳馬町一丁目橫町、軍書講談席堀川嘉兵衞の倅で、幼

名を源次郎といつた。そして神田伯龍の門に入り、初めの名を伯海と稱したが、壯年の頃大阪へ赴き、具さに辛酸を嘗めて技を磨いた。

　といふのは、伯海の相弟子に、伯山といふのが居た。即ち伯山の初代である。その藝名から考へても察せられる如く、一は海、一は山、師匠伯龍の門下にあつて、左右の双璧に擬せられてゐたものに違ひなく、自然伯海と伯山は、同門の親交は別として、高座の上では敵味方の思ひをなし、猛烈な競爭をした。而して負けぬ氣の伯海は、暫らく江戸の地を離れ、充分に力を練らうと、扨こそ大阪へ赴いて、火の出る如き修業をしたのである。

　陽氣發するところ金石も亦透る。精神一度到つて何事か成らぬものがあらうぞ。伯海の刻苦精勵は報いられた。優良な素質は彌が上にも研磨せられ、幾多の經驗は甚深な修養を積んで、伯海は何處へ出しても危な氣なき腰の据つた堅實さと、縱横無碍なる藝才とを兼ね備へ、天晴れなる名手となつた。かてて加へてその快辯は、立板に水も事古りたり、實に古今獨歩の目さましいものがあつた。

　伯海は期せずして、浪華第一の人氣を占めた。名聲隆々と昇るばかり、伎藝は益々圓熟を極めた。然し伯海の望むところは、大阪で名を成す事ではなかつた。最早斯く迄に上達したからは、一刻も早く江戸へ歸り、同門の伯山を見かへして、師匠伯龍にも褒められようと、故郷へかざる錦の袖、數年目で江戸へ歸つたのは、嘉永も末の頃であつた。

　ところが人事また意の如くならず。伎藝の上達を示して喜ばせようと思つた師匠の伯龍は、伯海が在阪の不在中、惜しや故人の數に入つてゐた。そして神田の一門は、伯山がその頭領として、權力を握つてゐた。伯海の落膽は、そ



もく〳〵どれ程であつたらう。彼は師匠伯龍の墓に詣で、聲を放つて慟哭したが、今さら伯山の下風に立つことは、彼として忍び得るところでなかつた。そこで豫てより崇拜する、東玉の許を頼り、亭號も亦東玉に倣つて松林亭と號し、藝名を伯圓と改めたのである。當時伯圓二十五歳といふ。

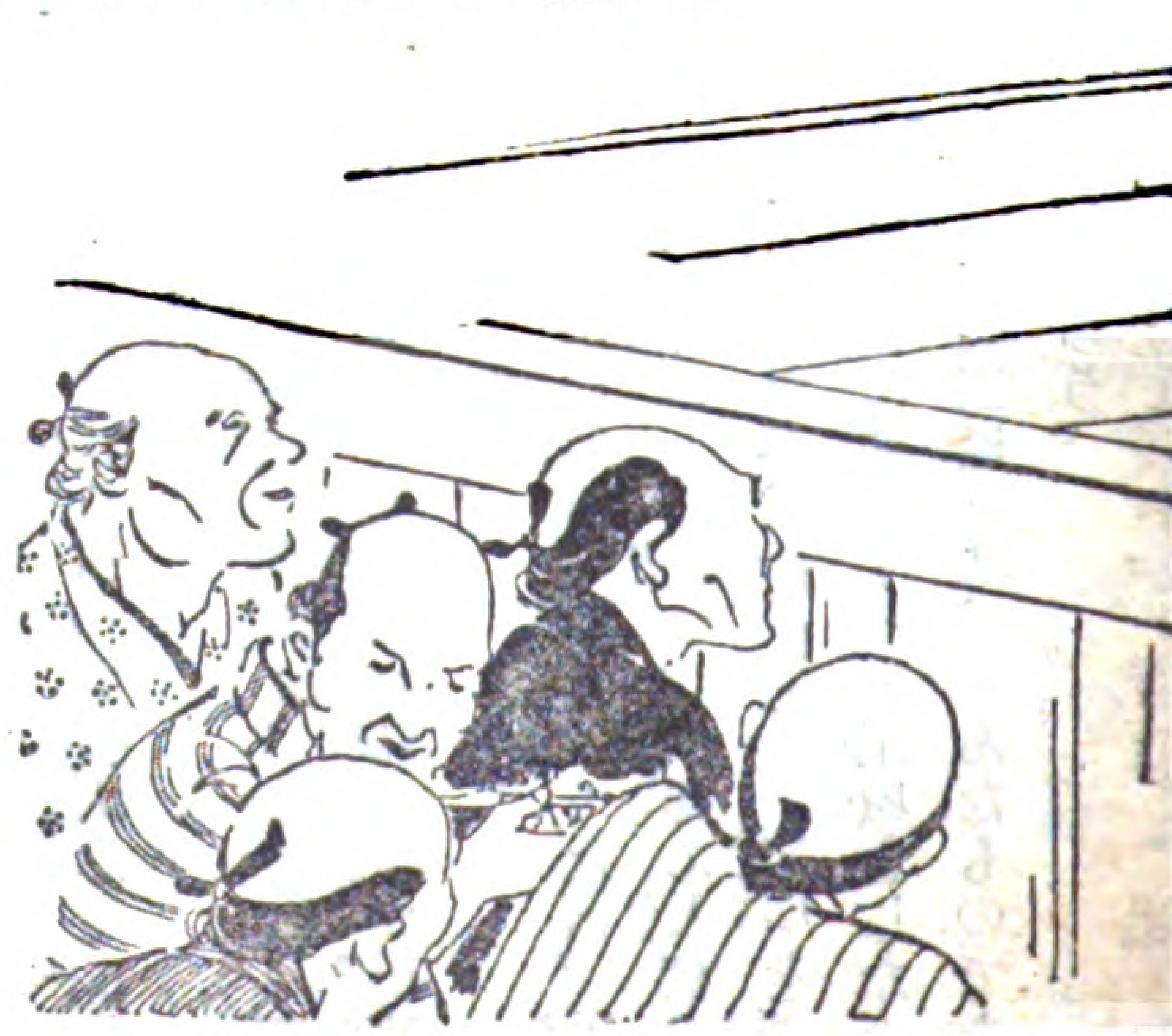
伯圓が改名披露の看板を舉げたのは、芳町の釜金といふ寄席であつた。此處で書席の眞打を勤めたが、歸り新參の悲しさには、江戸の聽客にまだ馴染がない。伯圓は元よりのこと、前名の伯海も、知る人が無いとあつては到底聽客を呼ぶことが出來ぬ。そこでこれも東玉に賴んで、前席をスケて貰つた。

東玉も伯圓が、自分を慕うてくれる心意氣を嬉しく思ひ、其乞に任せて補助に出演したが當時の木戸錢は、普通三十六文といふのが相場だつた。それ程物價の廉い頃であつたに抱はらず、伯圓は東玉に、一日一兩の謝禮をした。その豪膽推して知るべしである。

膽力の根柢には自信がある。伯圓の心中では、自分は本江戸の客に馴染は薄い。然しスケに出てゐる東玉の看板を見て、入場者へ一度自分の藝を聽かせたが最後、必らず堪能もさせる感服もさせる。心からの喝采を博して、必ずや評判を高めて見せると、これは確く信じてゐたのである。

東玉も亦彼の藝の非凡なるを知つてゐた。そして初看板初出演の伯圓のために、斯くはその前席で、充分なる紹介をしたのであつたが、恰かもその時、すぐ向ふ前の講釋場へ、出演してゐたのは伊東燕凌といひ、堂々たる當時の大看板であつた。

七代目市川團十郎が、歌舞伎十八番の『勸進帳』を、その創意によつて完成した際は、其母體たる謠曲の安宅よりも卓出した個所を設くる爲め、辨慶と富樫との山伏問答を取入るべく、講談の大家を招いて口演を聽いたが、その需めに應じたのが、即ちこの燕凌であつた。團十郎は舞臺でも、燕凌その儘口調までも眞似たといふ程、燕凌は調子もよく、且つ押出しの立派な如何にも大家らしい風采だつた。從つて諸侯方への所謂お座敷も多く、常に駕籠へ乘つて往來した。それ故權式も張つたもので、普通の寄席へ出る時は、木戸も破格に五十六文取り、表へは麗々しく、伊東燕凌先生御出席などと張出したものだ。



東玉は伯圓の紹介をしたあとで、更に一段と聲を強め、

『今、向ふの寄席には、伊東燕凌が出てゐます。燕凌はいふ迄もなく大家ですが、然し當席の眞打伯圓も、若年でこそあ

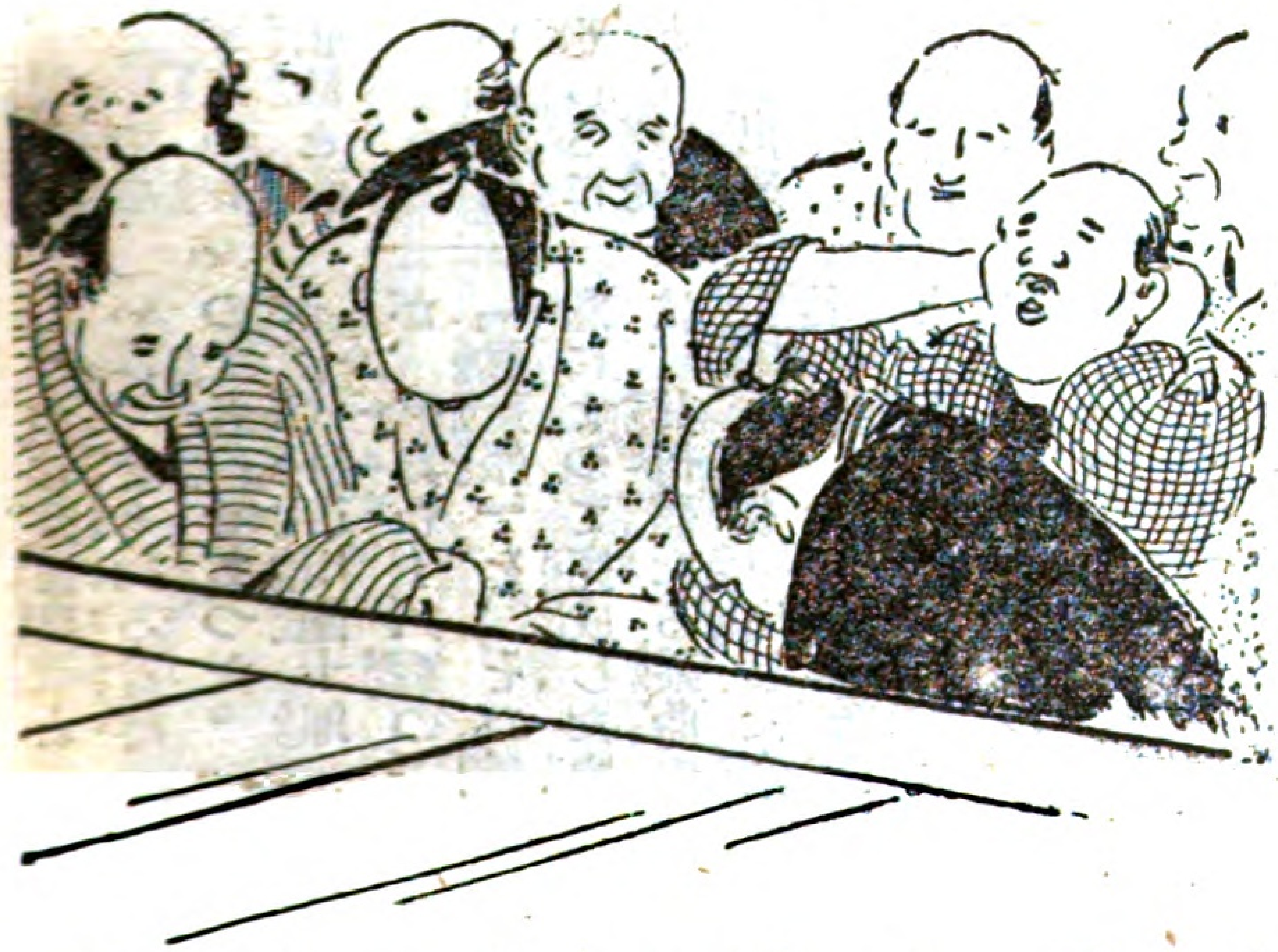
れ、巧いことは私がお受合申します。これを魚に譬へれば、燕凌は鯛でせうな。會席の膳には無くてならない。見たところも立派で、上にも下にもいゝ魚だが、伯圓の方は秋刀魚ですよ。秋刀魚はうまくとも下魚だが、季節に食ふとあの位うまい魚はない。鯛なんぞは敵はない位だ。伯圓の秋刀魚は而もハシリですよ。搗屋さんの惣菜には、チトなりかねる品物さ』

皮肉な口上で笑はせた。聽衆は斯くまでに東玉が裏書した伯圓、そも〳〵何んな藝かと非常なる興味を以て、彼の登壇を待ち構へた。中入も終つて伯圓は、期待に迎へられて高座へ登つた。快よい張扇の響き、伯圓の雄辯は火蓋を切られた。聽衆は先づその數言を聽いただけで、唖然として目をみはつた。堅唾を呑んで膝を進めた。伯圓の辯舌は、自由奔放流暢自在、宛ら天馬の空を行くが如く、流石は名人東玉の保證したゞけの事はあると滿場の聽衆を醉はせて了つた。

果然伯圓の名聲は、日ならずして嘖々たる高評を伴ひ、江戸中へ喧傳された。殊に得意とする義士傳中『忠臣二度目の淸書』などを講じ、かの寺坂吉右衛門が、但州出石へ預けられてゐる、大石の妻女や母親子供、乃至妻女の實父石塚親子に對ひ大石良雄以下四十有餘名の義盟の面々が、吉良邸へ討入の實況を物語る條になつて、四十七人の名から服装その得物、討入の次第働らきの樣子、首尾よく本懐引上げの顚末まで、息もつかせず述べ去り述べ來り、聽衆一同を恍惚とさせながら、ポーンと[illegible]やかに張扇を入れ、

『なんぼ吉右衛門でも、斯うは喋舌れなからう』

と云つては、ドッと笑はせる具合など、實に比類なき巧さであつた。



伯圓の評判が、斯くの如く高くなるを聞き伯山は心の動搖を禁め得なかつた。かくて彼は一日伯圓の高座振りを聽いた。そして呆然と舌を巻いた。

『これは到底自分などの及ぶ處ではない』

伯山は斯ういつて長大息を漏らした。

卽ち伯海の伯圓は、美事その志望を達して伯山に打勝つ事が出來たのである。

しかし伯山も亦凡手でない。彼は辯舌の上に於て、伯圓に及ばぬを知つたが、巧にその短所を避け、彼に匹敵すべき工風をした。その工風とは、どんなものであつたらう。

伯圓が復歸後の伯山は、僅かに

藝風を一變させた。彼は何の講談を讀むに當つても、最初はボツ〳〵デレ〳〵と、力を入れず氣も入れず、何の變哲もなく辯じてゐた。そして時には懐ろから、半紙を出してこれを引割き、紙撚を悠々とより上げて、それで耳を掘つたりしながら、至極のんびりと講述を續けた。これでは面白かるべき筈がない。聽客は退屈して伸つたり反つたり、欠伸交りで詰らなく聞いてゐた。而もこれが伯山の手段だつた。斯くて講釋が末尾に近づくや、伯山は俄に態度を改め、一時に反動的な緊張を見せて、トントン〳〵〳〵と疊み込んだ。即ちそれ迄ためてゐた面白さを、一度に集積して展開するのだから、前にだらして有つたゞけ、あとの引立つ事も一ト通りでなかつた。聽客は異常の興味を覺え、引込まれて聞ほれる。充分油の乘つて來た佳境に入つた處で、ポンと一席を讀み終つてあとに嫋々たる餘韻を殘した印象も從つて强かつた筈である。聽客は我を忘れて喝采し、伯山は巧いものだと感嘆した。

伯山はこの戰法を以て、强敵伯圓に對抗し互角の名聲を博する事が出來た。殊に天一坊の如きは得意中の得意で、彼がその利得により、天一坊藏を立てた事は、人のよく知る處である。



しかし伯山の門人中には、伯圓の藝を慕つて、彼の門に轉ぜん事を望む者もあつた。伯圓は言下に『そりやア可けねえ。伯山と乃公では、高座の上でこそ互に敗けまいと競つてゐるが、伯山は師匠の死水を取つた。乃公はその場に居合せなかつたから、師匠の死に目にも逢はなかつた。神田一門の統轄をする資格は、殘念ながら乃公には無い。伯山の弟子は即ち師匠の弟子、それを乃公が横取りしちやア濟まぬ。』斷然拒絶して肯かなかつた。師恩を思ひ道義を辨へた伯圓の精神、これあればこそ此至藝にも達せられたものと思ふ。

以上伯圓と伯山のこと、何れもその初代であるが、近世の事實だけに、好敵手物語といふ題目には、相應しからうと思つたので、此處にお取次した次第である。（終）

運動

三木露風

いざ吾等立ちて雄々しく
野球グラウンドに入らむ。
幾萬の人々われらに期待し、
我等の母校の健兒等應援す。
豈勇を振ふを得ざらんや。
さらば吾等必勝を期して
入場にあたり先づ幸先を祝ひ
心にかたく決するところあり。
運動競技を盛んにして、
我が國民の士氣を涵養せん。

テニス

サトウハチロー

父さん兄さん
お姉さん
母さんもいつしよにテニスです。
ふるラケットに
白い手に
秋の葉もれ陽ゆれて
ます
あつちへこつちへ
とぶボール
うれしくたのしく彈
む球。
今日は日曜
たのしい日
みんなの心もはずみ
ます。

青空

安成二郎

×
青空だ
カーンと鳴つてホームランの
歓呼の球が飛ぶ青空だ
×
青空だ
若い選手がすらつと立つ
飛び込み台の上の青空だ
×
青空だ
どんと合図が鳴りひびき
小学校の運動會だ

吉植庄亮

一高三高野球戰をマイクロホンを通じて聞きつつ

動

マイクロホンをとほして押しせまる一高の一高　明治節こゝの試合も人の山。
魂呼吸つかしめず。
金輪際打たねばならぬ本壘打を
うちて泣きゐる男子河本。
二十年昔にわれらもつちかひし一高魂のそのすごやかさ。

池部釣畫



篠原春雨

ホームラン十一月の空の色。
處女會の麥湯、バットの腕が鳴り。

江口渙

優勝旗ひらめくところ火の如く火よりも強き鬪ひのあれ。
そのかみの古き希臘の競技者に似ておほらかに君は鬪ふ。

井上康文

秋空は青と銀に輝き、
ランナーの脚は空間を馳ける、
聲援と激勵の叫びの交錯、
胸に描いた愛校の頭文字
脊にはりつけた勝利のNo。
おお　苦難の道を馳けてきた千五百米、
ギラギラと光る白いテープを
張りきつた胸で切るランナー
榮冠は輝く勝利の時、
秋空に飜る大日章旗。



松村中將

亡き父母を憶ふ

海軍中將　松村龍雄

◇四十年目に出た遺言狀

昔の武士が、ひたすら奉公の一念強く、戰場は勿論、平素でもその心懸を怠らず、生活の基調を全くこの一事に置いたその精進ぶりは、到底今の人の想像にも及ばぬ所であつた。

余の父も海軍の軍人であつたが、武士道的訓練を受けた人だけに、その風格には古武士の俤があり、日常の事まで極めて嚴格で、一歩も假借しないといふ人であつた。

例へば、その艦長をしてゐた頃、部下の書いて差出す書面の文字が、大小不揃ひであつたといふので、その自墮落さを八釜しく叱責した上、全部書き直させたと言ふ位。文字の大小位の些事でも、決して容赦しないほど嚴格であるといへば、他は推して知るべきであらうと思ふ。

といつて頑固一點張りの、所謂分らず屋ではなかつたことは、父の事を部下の者が、舶來艦長と綽號してゐたのでも證明されると思ふ。

だから、學術や戰略に就ては舶來艦長で、その人格を持する上には昔ながらの古武士その儘であつたといふに歸着するであらう。

父が、如何に己れの身を持するに、嚴肅であつたかを語る一挿話がある。

明治十一年の夏、父は天城艦に乘つて、朝鮮の元山方面へ測量に行つた。當時の朝鮮は瘴癘の地として危險視されてはゐたが、戰爭に行く譯ではなく、單なる測量に行くのであるから、死を覺悟して行くといふ程の問題ではない。

然るに父は、死を覺悟し、遺言狀を認めて出發した事が、父の死後四十年を經た大正七年に至つて始めて分つた。

當時私は亡父母の肖像を並べて揭げたいと思つたので、母の油繪の揮毫を、佐藤中將の肝煎で、小笠原丁畫伯にお頼みして貰つたが、忘れもせぬ七月十二日の事である、丁度、繪が出來上つたといふ通知があつた日、私は偶然にも母の簞笥を開けて見ると、昔の簞笥によくある二重底の中から、古ぼけた一通の

書面を發見したのである。

◇死んでも還らぬ覺悟

はてな！と思つて、よく檢べて見ると、明治十一年の夏、天城艦上で認めた父の遺言狀なのである。

父にあつては、遺言狀など書く必要のなかつた時であることは、前にも述べた通りであるから、私はよほど不審を抱きながら開封して見ると、その前文に先づ斯う書いてあつた。

『此手紙は天城艦が神戸下ノ關間廻發の報ありし上にて開封すべき事、それ迄は決して開封致すまじく候事』

軍隊の所謂密封命令である。

さて本文はといふと、

『死後は家を賣り、その金を銀行に預けてその利息で生活せよ。一ケ月親子三人と親戚の祖母とで、二十圓を經費とせよ。長男龍雄は病弱であるから、本人の志望に從つて何になるも善いが、二男の菊勇は壯健であるから必ず海軍の軍人となし、余の後を繼ぎ國家に報ぜしめよ』

こんな意味の事が、事細かに、溢るゝやうな熱誠をもつて書いてあつた。

こゝに至つて私は始めて、父の遺言を認めた心事に想ひ到る事が出來た。

父は、公務を帶びて航海する限り、公務を果すまでは、如何なる事情があるとも歸らぬ、一死以て公に奉ずるの精神であつたのだ。

果せる哉、朝鮮に着くと、疫病流行し、艦中死者病者續出、幹部では中野副長、先づ病み、山澄航海長ついで倒れ、一時は棺が後甲板に列をなすの慘狀を呈した。父もとう〳〵病魔の侵すところとなつたので、部下は心配して、

『是非、歸國せられたい。』

と勸めたが父は頑として應ぜず病を冒して測量の作業を遂行し、任終つて始めて歸國した。

それで遺言狀の用はなかつたものゝ、父の心中には、出發の時、既に任務を果すまでは死すとも歸らぬといふ、堅い決心があつたことが知られる。

愛の歌（一）



わが兒に

岡本かの子

たまきはるわれの命をきざみつつこのますらをを生ひたてにけり。

ますらをの心のうちぞ優しけれ可愛ゆしと云はんわが性のままに。

ひたむきなるなんぢがさがよささあれ世に和み暮らせとは母のねがひぞ。

この世なるえにしふかくして母よ子と和み暮さん短きこの世を。

をみなごのわれに足らはぬ節多し母の名に依り許せよわが子。



父は歸國後、伊皿子町に新築した家に入つて、靜養した。この家の二階は舶來艦長に相應はしい洋風のペンキ塗であつたが、東京で當時ペンキ塗の家は極めて稀であつたといふ事だ。蝶番などもまだ東京には無かつたもので、態々横濱へ買ひに行つた事を記憶してゐる。

併しながら、この新館も、父の病を癒すには何の効果もなく、翌くる明治十二年六月二十日、父は四十歳を一期として靜かにこの世を謝した。時に母は三十五歲、私が十二歲、弟菊男は六歲であつた。

かういふ父から受けた私共の家庭教育が、いかに嚴格であつたかは、多言を要せずして推知される事だらうと思ふ。

◇子を許さぬ母の涙

その後間もなく、伊皿子の家を某國の代理公使に月五十圓の家賃で貸し、私共母子三人は、白金の藥王寺に間借して侘住ひする事になつた。

これからの母の苦勞は、吾等兄弟の見るに忍びぬ涙ぐましいものであつた。三十五歲の若後家で、よく貞節を守り、我々二兒の教育を一身に引受け、あらゆる世の荒波と苦鬪を續けて來たのである。

母もまた父と同じく、武士道的な婦人であつたから、私共の教育には頗る嚴格であつた。

ある時など、私が金錢を手にして買物に出掛けると、通りかゝられた父の親友なる眞木男爵が これを見て、母に告げた。

『龍雄さんが金錢を持つて買物に行つたやうですが子供に金錢を持たせるのは良くないでせう。』

それを聞いた母は、烈火の如く怒つて、私を膝下に呼付けて嚴しく叱責した。

『欲しいものがあれば、何故お母さんに言ひません？ 軍人の子が自分で金錢を持つて買物に行きたいやうでは、お前の精神も知れてゐる。何といふあさましい事でせう。そんな子は我が子とは思はぬから、勝手にしなさい。』

何と詫びても聽かれない。子供心にも本當に困つたことを記憶してゐる。

愛の歌（二）

小春　金子薫園



一すぢに人を愛するわがこころいまもかはらず白菊の花

うしろめたき愛といはむや子をおもふこころと同じ白菊の花

小春日のわが世の道に摘める子の肩に手をおくはわろしや

この愛を淸しとおもふわがこころ慚づる色あり白菊の花に

愛憎のこころわすれてただに見むにほひ冷たき白菊の花

時勢の全く相違する今日、この事の善し惡しは別とせねばならぬが、かういふ一些事に對しても、母は一歩も假借しなかつた。これ亦その家庭教育の一斑が窺はれようと思ふのである。

◇嚴肅なる婦道の徹底

隨つて母は、己れを持する事も亦極めて嚴で、一旦嫁した以上は、どこ迄も其家を本位として、之に殉じなければならぬといふ教訓を、極端な程守つて、母の實家も當時困窮の狀態であつたが、

『生家の面倒を見る譯に行かない。そちらはそちらで相當の處置を取つて下さい。』

と撥ねつけ、反對に父の甥――私の從兄弟で困窮してゐる者三人まで引取つて面倒を見てゐた。それが何れも皆海軍に入つたので、一時は、私の一家から、相當地位にある海軍の軍人が、五人も揃つて出入りした事もあつた。

斯くの如く良人の家を本位とする嚴肅な母の態度は、父の生前にも嚴重に守られてゐた。

ある時など、父が航海中で留守であつたところへ、母の實母が何の豫報もなく、突然訪ねて來た事があつた。

『京都まで來たので、序にこちらへ來ました。』

『それはまあ、善くおいで下さいました。』

溢るゝやうな親しさで、母と娘は對面した。いろいろ話が彈む。と、夜になつた。祖母は當然宅で泊るつもりでゐると、母が言つた。

『誠にお氣の毒ですが、主人の留守中は、いくらお母樣でもお泊め申す譯には行きませんから、今夜は旅館へお泊り下さいまし。』

母の言葉に祖母は呆然とした。そこへ丁度來てゐた伯父の養母が、見兼ねて仲へ入つた。

『あなたの仰有る事は御尤もだが、外ならぬお母樣、二三日泊めてお上げなさい。御主人の方は私が何とか申譯いたしますから。』

立會人が入つたので、母も直ぐに納得して、祖母を泊める事になつたが、それでも母は直ちに父の許へ手紙を出し、父方の伯

愛の歌（三）



愛　太田水穗

草も木も鳥けだものも蟲けらも命あるものはなべて愛せり

霧かすみ塵も芥もあめつちの愛には洩るるものなかりけり

おもひ見よ億萬代のはじめより今にながれて盡きぬこの道

愛慾の海をながらに彌陀佛の慈悲の海ぞと知れるたふとさ

この海の大悲の波にながらふる命の果てを知るよしもなし



母のすゝめによつて、母を泊めました御許し下さいと報告することを忘れなかつた。

これらの事は、現代の主婦の考へでは、全然合點の行かぬ頑固な思想であり、或は人情の上かっは論ずるに足らぬ道徳と思ふかも知れないが、一旦嫁した以上は、その家を本位とする、良人の留守中は何人をも泊めないといふ、日本婦人傳來の精神である。そして將來も傳ふべき美徳であると私は信ずる。しかも愛は怯れ易く、義は怠り易い、私の母のやうに極端にこれを嚴守しても、それでやつと常道を保ち得るのではないかと思ふ。そこが私の、母を尊敬して止まない點である。

◇神聖なる一室

母はまた敬神の念が深かつた。後に私が家を増築した時も、『何はともあれ神聖なる一室を設けよ。』と私に命じて、そこには天照皇大神を祀め八百萬の神、また家の祖先代々の靈を祀つて、朝夕こゝに端坐して心を淨化する事を勸めた。單に偶像を禮拜するとか、御利益を得んが爲めの信心ではなく、超世間的な神聖なる神靈に接近して、己れの汚れた精神を絶えず淨化する事は、極めて必要なことゝ思ふ。

母はこの意味で、何か一身一家の重大問題の起つた時、または修養に關する事などは、必ずこの部屋を用ひた。私も、その感化をうけて、この一室へ入ると、自ら莊嚴な氣持になつて、ピンと心が引緊まるのである。現代は神佛といへば直ぐに迷信と誤解し、家庭はたゞ自由なるを良しとするやうであるが、自由な家庭にも、出來得れば一室位は侵すべからざる神聖な部屋のある事が必要ではなからうか。

兎に角、かくの如く、どちらも嚴格な父母の薫陶を受けた賜として、余等兄弟共に今日まで、不敏不才の質であり乍ら、幸ひに大過なきを得たことを思うて、亡き父母の靈に、深く感謝してゐる次第である。（終）

愛の歌（四）

殘されしわれ

若山喜志子



父なくて淋しめる子を遠くおきて旅寢をするもよんどころなき

片親の肩身せばきを見すまじとそらうそぶけどあやしきわれかな

ほしいまゝに生きて死にゆきしひとなれや殘されしわれは忍びがたきに

うつそ身はかりのすがたといふことの理知らでなげきつるかな

窓さきの竹のしげみのみそさゞい我かしはぶきに逃げてゆきたり

働く親子

民謡

白鳥省吾

黒部谷間を
ながれる水は
淵は翡翠に
砕けりや素絹

波にちらちら
紅葉も照つて
山も錦の
衣を着るに

いつも炭焼き

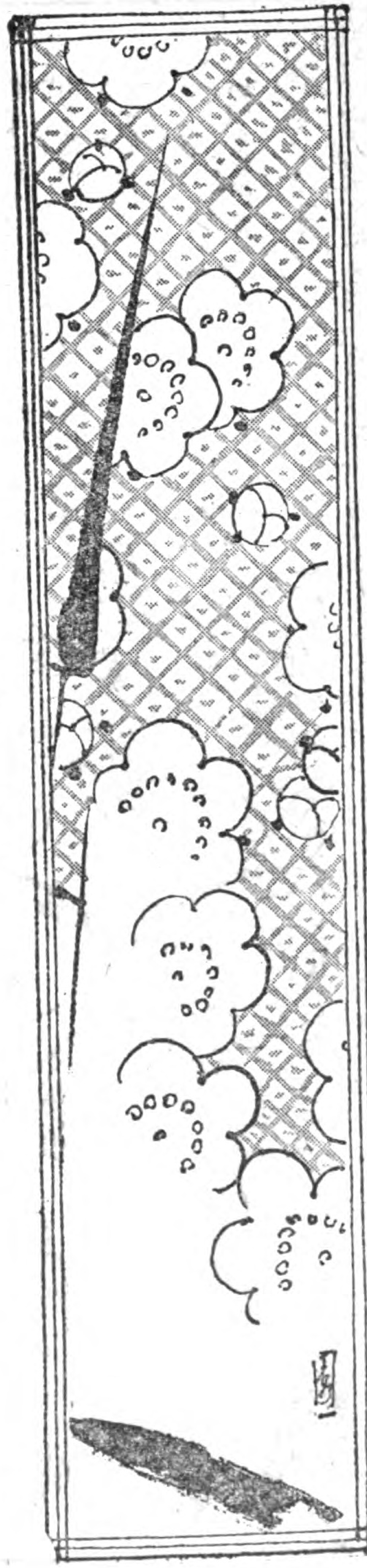
背負ふ炭俵
しかも花なる
二八のむすめ

親につづいて
吊橋わたり
町に炭賣る
深山の乙女



怪盗夜叉王

前田曙山
挿繪　山川秀峰



尋ねる背の君

天上天下唯我獨尊、我佛尊しと渇仰する玄蕃の頭上へ、無慚の大鐵椎を打下した朝臣の冷罵、如何に行々は我妻たるべき人とは言へ、水仕女同様の女とは何事ぞ。若しも當の相手が朝臣でなかつたら、火のやうな玄蕃の忿怒は、クワッと爆發して、物をも言はず、一撃の下に張り仆したので有る。現に彼の鐵拳は、思はず知らず、瘤々立つた巖のやうに握られて居た。

『御前何と仰せられる。怪しからぬ御意、玄蕃一圓合點が參り申さぬ。』

目を瞋らし、唇を食ひ反し、鹽辛を舐めた閻魔かと思はれる佛頂面を、朝臣は反つて興有るものに眺めるらしい。

『ハハア玄蕃、其方は相變らず元氣ぢやなう。』

笑つて聞き流さうとするのを、玄蕃は耳にも入れない。

『軈て御簾中とも御在すべき御方へ對し、右樣の御雜言、他人の聞く前も御座りまする。近頃興醒めたる事、畢竟御前の御恥

とも御座りまするぞ。』
四角四面に堅くなつて、双の肩先を隆々と欹立てた。
『其方も少しは江戸の水が沁みて、通人になつたかと思へば、何時まで經つても石部金吉ぢやな。』
『石部金吉とは申しませぬ。手前昔より望月玄蕃。』と、ニコりともせず邁二構へる。
『不可な、迂濶に洒落も言はれんな。』と、朝臣が笑はれたので、堪へ〳〵し右近も、堪らなくなつて思はず吹き出した。
『其望月のやうに、少と闕くなつたがよいぞ。……外に人が居るでは無し、皆内輪では無いか。』
『いや内輪などとは以ての外、之なる波多野右近は、姫君を誑らかさうと致す妖狐に御座りまする。』
又しても祟つて來た八ツ當り、右近は顔が火のやうに熱つた。姫の良人と定まつた朝臣の前で、歯に衣着せぬ玄蕃の素破抜に値つては悄氣返つて穴へも消え込みたいので有る。
『又しても左樣な事を言ふ、何を以て姫君を誑らかすと申すのぢや。』と、右近は眞赤になつて詰寄る。
『貴公の顔附が怪しからんわい。色白く眉秀でたる美男、何とも物騒千萬な面ぢや。』
他愛も無い玄蕃の當推量と知つて、右近は僅かに吻と安心した。愚直一方の玄蕃如きに、此腹の底が讀めるものでは無いと案外氣が易くなつたのだ。
『玄蕃、何を申すのぢや、美男ぢやから物騒と有るならば、予も物騒な顔に生れ變りたいものぢや。』と、何にも知らぬ朝臣の輕口。右近は只女のやうに婀娜なのに、朝臣は美玉の光の中に、キリリとした男らしさが籠るから、玄蕃の論理から言へば、實は一層物騒千萬で無ければならぬのだ。
『何に致せ此處は往還ぢや。……予が仲直り致させるに因つて、二人ながら同道したがよいぞ。』
『其儀至極に存じまする。』と、右近は謹しんで仰せを承はつた。
『いや御前、夫よりも先へ御館へ御供申上げまする。』
出會つたが最後、雷の鳴る迄は放すまじき玄蕃の見幕。
『いや玄蕃、姫の處へ參りも致すが、其前に其方達の仲を纏めねば相成るまい。』
『恐れながら夫には及びませぬ。手前共の事は些細な私事、夫よりも姫君に御安堵おさせ申すが專一と御座りまする。』
主筋の朝臣の言葉と雖も、強情我慢の强者、いつかな承引く事では無い。
『其方は井の中の蛙でな、姫より美しく、姫より尊い者は無いと思ひ込むが、世の中は宏大ぢや。予の參る喜見城には、龍宮の乙姫を見るやうな美女が、樽詰になつて、いきれ上る程仰山

居るのぢや。夫が左右から摺り寄つて、媚めかしく酌を致し呉る。男冥利に協つた極樂淨土ぢや。』

　中納言の高貴に在る者が、以ての外の遊蕩放逸、箸にも棒にも懸らぬ下賤の言葉に、右近迄が呆れ返つた。

『手前左樣な處はズンと嫌ひで御座る。』

と、膠もなき挨拶で玄蕃は苦り切る。

『其方は嫌と申すかな。』と、朝臣は返つて意外。

『兎も角姫君樣御館まで御運びを願ひまする。』

『其方が予の申す處へ行かぬと言へば、予も姫の許へは参るまいぞ。』

嫌應言はさぬ飛車取王手を懸けられて、玄蕃は忽ちウムと行詰つた。

『夫は御無理で御座る。御貞節の姫君は、明暮御前の御行方のみ御心痛遊ばされ、態樣に江戸へ下られましたも、御行方をお尋ね申さう爲に御座る。然らば其御心を愛でられても、是非之より御運び相成らねばなりますまい。手前共私の爭ひの爲、姫君との御再會一刻たりとも遲れますれば、手前申譯有りませぬ。』と、聲涙共に下るばかり、力を罩めた筋骨は、忠義



の爲に岩より堅い。

『折角ながら、姫は其方の内房では無い、予の妻なるに因つて、直参らうと參るまいと、只予の了簡任せでは無いか。』

『恐れながら手前は姫君の御家臣に御座る。家來として主へ忠節の爲ならば、此腹搔さばいても、御前をお館へ御供申上げねば相成りませぬ。』と、いつかな屈する事では無い。

『いや中々以て強情ぢや、石にあらねば轉ばし難しか……右近、其方は何と思やるな。』

『左様に御座りまする。只今より御前の仰せ有る極樂とやら喜見城とやらへ、我等兩人御供申し上げまするにより、一刻の後には、姫君館へ御入遊ばすやうなされましては。』

双力へ花を持たせる右近の取捌き。

『オウ夫が宜しい。然らば玄蕃、いざ一緒に參れよ。其後一同



打揃うて、姫の住居へ參ると致さう。』

『必ず左樣に遊ばしまするか。』と、玄番も仕方無しに折れて出た。

『予は武士では無いが、然樣に武士の姿を致す上は、決して二言は申さぬ。』

『然らば一刻だけ御供仕る。……自體其淨土と申すは、何れに御座りまするか。』

『淨土と申すからは、いづれ常所より西方に極まり居る。いざ然參れ。』

先へ立つて塲を下り始めたので、玄番は又驚いた。

『川の中に淨土が御座りまするか。』と突拍子も無い尋ねやう。

『ウム、淨土の出店が之に參つて居るのぢや。早う乘るがよいぞ。』

洒つた家形へヒラリと乘ると、中からは魂を摺り滅らす媚めかしき聲。

『アレ梅さま、おあぶなう御座んす。』

ドヤ〳〵と立現はれた白い顏。左右から手を執つて、朝臣を女いきれの懐へ吸ひ込んで行く。今迄暗かつた船中は、此時賑やかに輝やき渡つて、漂よふ白粉の香、媚めく袖の匂ひ、ときめく移り香、酒肴の用意は殘る方なく整のへられた。

『これ皆の者、夫へ參つた家僕はな、酒と女子が大好物ぢや、側へ寄つてよう待遇て遣はせ。』

人の惡い朝臣の入智慧、何にも知らぬ女達は、忽ちバラ〳〵と玄番の左右へ縋り附いて、

『マア主さん、よう御座んした。サア〳〵此方へ。』と黄色い聲々、毛だらけの手先へ、軟々した頰を摺り附けんばかりにチヤホヤする。鬼をも夜叉をも恐れぬ玄番は、軟らかな氣味惡さに、ブル〳〵と身を慄はして吃驚敗亡。

『あゝ寄るな〳〵、氣色が惡い。』と、泣き出さんばかり當惑の渋面、紅や白粉に觸られては蛞蝓に這はれるより心地が惡い。

姫を迎への呉越同舟

さらぬだに朝臣一人でさへ、雲間洩る月と輝やくのに、又しても光を増した右近の同船、媚めく船中の賑はひは一入昂まつた。女達は怪しからずハシヤギ出して、只嬉しさに顏を熱らせ、勤氣忘れてソハ〳〵する。

船は忽ち中流に滑ぎ出されて、ユラリ〳〵と艫押しの心地よさ。盃は右へ左へと回つて、春の夜の夢に桃源の花の洞を搜るやうな恍惚たる醉心地、朝臣も右近も魂を蕩らす中に飽まで遮二構へて苦り切るは鬼玄蕃、默りこくつてジロリ〳〵と一座の女共を睨め廻して居る。

『アレ旦那さん、御氣分でもお惡いか。ちとお話しなさいま

し、御船がお嫌ひで御座んせう。』

若く美しいのが、ヤンハリ玄蕃の側へ寄り添ふと、男の魂を薬研にかける妙なる女の匂ひ。

『コレ寄るな〳〵。』と、玄蕃は團扇のやうな大きな手を振る。

『オホホ、御狐さんぢや有るまいし。』

女は面白がつて尚も膝頭へ手へ置きかゝる。

『エヽ氣味が惡い、貴樣の手先はクニヤ〳〵して、溫たかい蒟蒻のやうぢやわい。』

身を竦めて避けようとすると、人の惡い女は、態と困らせるやうに臑の鬼毛を、白魚の指先で抓み上げた。

『マア丹波の荒熊のやうに、シヤリ〳〵する毛で御座んす事。』

グイと引張られて、玄蕃は以ての外の澁面を作つた。

『コレ痛い。』と身を石のやうにして縮み上る。

『旦那さんは赤銅造、痛い事は御座んすまいに。』

尚も面白づくに、手を這はして意地惡く弄りかける。流石の玄蕃も、相手が毀れ物のやうな蒲柳な女、手荒い事もならずに。

『痛いツ。』と叫んで、思はず突立つと、ドシンと低い天井へ打附けた石頭、ミリ〳〵と突拔いて、無慘に首が家根へと飛び出す。舟の中ではオホホホアハヽといふ止め度もない笑ひ聲。玄蕃は忙てゝ引込めようとしたが、顋が支へて左右無く入らず。下から見ると、首の無い生きた人間の人柱が出來たので有る。

『サア早う御入りなさんせ。』と、人の惡い女達が面白がつて、鳩尾を擽ぐる、胸毛を抓む。

『許せ〳〵。これや堪はん。』と、狼狽へる聲は家根の上に在り、太い足を突張ると、船は大うねりに蜿蜒打つて、女達がキヤツ〳〵〳〵と騒ぐ。

『いや、平生ながら瓢輕な男ぢや。』と、時に取つての思はぬ座興、船中湧くが如く笑ひ崩れる中に、忽ち乘込む山谷堀の棧の水。其處には早くも駕籠が揃へて有つた。

『御前、之は孰れへ參る事で御座る。』と聊さか不安。さしもの鬼玄蕃も、軟らか者の擽ばゆい折檻に値つては散々で有る。

『ハヽヽ、今の先申した西方淨土ぢや。默つて參つたがよい。』

嬲ての事に駕籠を卸されたのが新吉原の花の里、後朝の見返柳を五十間へ下ると、石疊を敷き詰めた大門の不夜の榮華は目も眩むばかり。

生れて始めての玄蕃は、呆れに呆れて、是非なく朝臣の後へ跟いて行くと、左右に點し列ねた誰哉行燈、久木萬字と書いた引手茶屋へ我家のやうに悠々と打通つた。

『御前、手前態樣な處は、以ての外。女臭うてなりませわい。』と、以ての外の挨拶、逡巡するのを、意地惡の女達が嫌

應もなく後から押上げる。

『ア、觸るな觸るな、汚れるわい。』

『そんな事言ひなんすと、夫船の中のやうに又胸毛を引いて上げますぞへ。』

　夫言はれては亂離骨廢。玄蕃は目鼻を一緒に歪めて、是非なく廣い梯子段を上ると、朝臣は早くも座に就き、少し下つて波多野右



近、如才なく酒の仕度が整のつて居る。

『サア酒ぢや〳〵。女帝今少し待て、龍宮の乙姫を見せるぞ。』

朝臣が馴れ切つた遊蕩子の態度に、女帝は無念の血を搾るばかりに歎かはしい。

『予が仲人になるに因つて、兩人とも以後害心を殘すなよ。』

三人一緒に盃を舉げると、待つて居たと言はぬばかり、女達は並々と酌をする。

女帝もモウ度胸を極めた、獻された盃なりや飲まずばならない。美女の唇とも見紛ふ朱の盃を啣んで、グイと一飲みにすると、天の美祿も啻ならざる灘の生一本、ジリ〳〵と腸へ沁む間も無く、御美事々々と右左から又酌を添へる。男子義に仗つて死をだも辭せず、況んや酒をやと、下地は好な米の水引受け〳〵飲む處へ。

『ソレ太夫さんぢや。』と、幇間末社の俄かのさゞめき、女帝が蛇より嫌ひな白粉の快よい香が、風なきに緩く媚めくと、裲衣の裾重氣にシヤナリ〳〵と入つて來たのは、今此廓に松の位の音羽太夫。

『梅さま、よう來てくんなました。』

肩と肩とが擦れ合んばかりに、衲りと朝臣の側へ臆面もなく坐り込む。

『よう早う參つたな。少しの間も其方が見えぬと、心寂しうてならん。』と、朝臣は脇息に片身を凭せて、他愛もなくウジヤ、ジヤける。

『女帝、龍宮の乙姫樣といふは、此音羽太夫ぢや、何と嬋娟な者であらうがな。』

劍次の無い朝臣の藁の海參と和へられた醜態に、女帝は突き飛ばされたやうに驚き呆れた。

『予を殊の外介抱致し呉る女子ぢや。其方からも禮を申してくれよ。』

女帝は顋門から湯氣を立てんばかりにいきり切つた賤しき君傾城に、眞骨頭の武士たる者が頭を下げるとは、子々孫々までの恥辱で有る。

『梅さま、主さんの御家來衆で有りんすかへ。』

音羽太夫は松の位の見識を以て、女帝の方へ秋波に眺を回らした。

『家來と申すでは無いが、予を劬はり呉る忠義者ぢや。』

『オヤ左樣で有りんすかへ。梅さまは妾の強う大切の方、よう御世話してくんなます。妾から御禮申しいすよ。』

何の心も無く言つたのだが、聞いた女帝は嚇と立腹した。音羽太夫は朝臣を良人でも有るやうな僭上の口吻。今迄堪へに堪へた耐忍が、此時に破裂したので有る。

『黙れッ。遊女賣女　禮言はれる拙者では無いわい、推參な女郎奴。』と、障子紙がピリリと裂けさうな大喝一聲、藝妓末社は驚いて消し飛んだが、流石は此廓を蹈まへて立つ音羽太夫、朱羅宇の銀烟管を左手に支いた儘、長い目の縹渺たる眼づかひ、斜めに女衒を見据ゑながら。

『遊女賣女と蔑みなんしても、其遊女賣女の居る廓へ來なんした主さんはへ。』と、意味深長な皮肉の針。女衒は眞赤になつて突立ち上つた。

『拙者は汚らはしき遊女などを買ひに參つたのでは無いわい。……いさ御前、御約束通り之より小梅御館へ御供仕つる。』と、眞赤になつて八相を睨まへる顔色は、百花に交はる黑松の上に刷くらふ鵰か荒鷲其儘、一度翼を伸せば、梅も櫻も落花微塵に碎けんばかり。

『女衒、其方は何といふ不粹ぢや、此通の花の極樂を振捨て、三指責の野暮な地獄の中へ行かれうか。少しは推察するものぢやぞ。』

『之は意外千萬、先刻の御約束は如何で御座る、波多野氏も聞いて居られまする、武士に二言は無いとの仰せ。』

苦しくなつては、今迄呉越の右近までを、耳證人の味方に引込まうとする。

『ヘヘヘア、右近は役の通り、女共から大切がられ居るでは無いか。其方も少と控かれい。……第一予が戻らうと致しても、』立上る事が出來ぬのぢや。』

『何故に御座りまする。』

『これ見い。太夫が此通内々に袖扯止めて居るのぢや、夫を振もぎるは野暮の骨頂、一生女子に嫌はれねばならぬぞ。』

飽く迄見下げ果た遊冶郎、之が三位の中納言かと思ふと、湯のやうな涙がハフリ殞ちるのだ。

『怪しからん事を。』と、言つたなり、女衒は息を溜めて嘯ぶき上るばかりに力むだ。

『モシ女衒さんとやら、手楠さんとやら、梅さまは今お越なんしたばかり、妾は何處へも遣る事ぢや御座んせん。』

郭育ちの人の惡さは、朝臣の膝へしな垂かゝつて、軟かい壓石に、ヤンハリと押へ附ける愉悦の折檻、朝臣の身體は見る見る蕩けて、今の間の口約束なぞは、千年も先のやうにケロリと忘れて行く。

女衒は其だらけ披れた朝臣の樣子を見ると、胸がムカ附いて座にも堪らず、眼も眩み頭も割れさうになつて、一散に廊下へ飛出した。見兼て後より追續つた波多野右近。

『望月氏、何處へ行つしやる。』

『いや殘念でならぬ。苟にも高位の中納言たる御前が、目も當られぬ彼有樣、如何に好色に御心を奪はれるとも、言語道斷で

御座る。」と、手放しで泣き出さんばかりの悲憤の歎き。
『いや御尤もながら、此處は遊里、御前の醉の覺められる迄待たつしやい。』
『いやならぬ、所詮御前が御館へ御入あるとは思はれぬに由つて、拙者之より小梅へ立歸り、取つて返して姫君を之へ御案内申す迄ぢや。』
玄蕃に取つては窮餘の一策、如何に放蕩三昧に身を持ち崩しても、目のあたり姫に値つては、流石にワヤクも言はれまいと考へたので有る。
『成程、夫は宜しき思ひ附、姫君が之へ參られたら、如何に御前でも、傾城の膝を枕にも遊ばされまい。然らば早々御案内さつしやれ。夫までは拙者が宜しいやうに取繕うで御座らう。』
と、案外の同心。
『何分頼み申す。』
玄蕃がドヤ〳〵と階子を下りて行くのを、上から見送つた有近の心中には、朝臣が魂飛ばす有頂天の遊興、酒池肉林の間に、香閨粉陣の女いきれを吸込む有様を、姫に一目見せたなら、百年の戀も醒めて、朝臣を見限るに違ひないのだ。同舟の難には呉越も手を握る親しみ、今迄睨み合つて居た玄蕃を煽つて、首尾よく姫を迎へ來させる上々首尾、ニツコリと笑つた會心の笑めきには、男に飽いた遊里の女も、身顫ひして飛び附くばかりの美しさが燦めく。

夜叉王の豫告

地獄の釜の沸え立つやうな忿激を以て、韋駄天走りに驅け附けた望月玄蕃、急いで館へ飛び込むで行くと若黨仲間を始め、小姓迄が眞蒼になつて狼狽へて居る。
『何としたのぢや、何事が有つたのぢや。』
不安の第一は姫君に繋る變事の心配で有る。
『夜叉王が御館へ推參と申して參りました。』と、口を揃へても、大きな聲は出し得ず、玄蕃の顏を見て、漸く吻としたらしいのだ。
『ナニ夜叉王が來ると、誰が言うたのぢや。』
『さう言ふ書附が御玄關式臺へ差置いて有りましたのを見出し、種々評定をしましたが、生憎望月殿は入せられず、是非なく御上へ差上げまして御座ります。』
『下らぬ事をお耳に入れるものでは無い。して何時來るといふのだ。』
『今夜といふ布令込みで御座います。』
傍若無人の怪盜夜叉王の奇怪の振舞で有る。柳營恩顧の譜代の輩、乃至は公儀御用達、其方江戸大切と噛り附く分限者を襲ふ共、曾て都方へ心を寄せる者には、指も指さないと聞えた

怪盗が、人もあらうに共京方に深い由縁の當館へ押入らうとは、以ての外の大膽なる振舞で有るとは想つたが、差當つては夫よりも大切なる朝臣の行方、其念願が屆いて邂逅つたので有るから、玄蕃は追ひ立てられる忙だしさを以て不取敢姫の居間へと伺候した。

『姫君御喜び遊ばされい。玄蕃こそ中納言樣に御目通り致しまして御座る。』

思ひもかけぬ不意の吉報に、姫は衾を辷り出んばかりに乘出された。

『何處で御目もじ致しましたかへ。』

玄蕃は先刻よりの一伍一什を、包ます隱さず述べ立てた。

『右の次第に御座りまするに由つて、姫君には一刻も早く中納言樣をお迎ひにお運び遊ばすやう。玄蕃御案内仕つる。』

右近に頼んでは置いたものの、彼是して朝臣に脱け出されては取返しが附かぬので有る。

『マア共樣な姪がましい處へ、お戯むれにおいで遊ばすとは、何といふ事で有りませう。妾が此處に住む事を、よも御存じ無くは有りますまい。』と、思ひ餘る怨みの愚痴、男優りの烈女も、ツク〴〵身の薄命が悲しくなる。

『御存じで御座らうも知れませぬ。然しながら中納言樣には、吾妻とか申す遊女に魂を奪はれ、[illegible]有頂天の有樣、殘念至極で御座ります。』

見榮が無ければ、聲を放つてワア〴〵泣き出しさうな有樣。

『御前が賤しい君傾城にお戯むれ遊ばすとへ。』

姫は思はず屹と刺戟された。氏素性なり、女子の嗜みなり、乃至身を護る武技にかけて、如何なる女にも劣るまじと思はれる姫の自尊心は、自らを捨て汚らはしき遊女を寵愛するといふ事に由つて、無慚に傷つけられたので有る。

『左樣に御座りまする。全く以て天魔波旬の仕業、尊き雲上人として、有られもなき御振舞と存じまする。』

焚き付けるのでは無いが、在の儘を有るが儘に、僞り飾らず言つて退けたのは、薪に油を添へるよりも激しい。

『妾御目通りして、御諫言するで有りませう。』

姫は決然として起つたので有る。人が是程迄に思ひを凝して、行衛を捜し索めて居るにも拘はらず、高位の朝臣とも有るものが、傾城遊女を寵愛して、朝廷への忠節を忘れるとは、言はうやうなき不義不忠、見下げ果た遊蕩漢で有ると、苛々する程口惜しさが込み上る。

『夫が宜しう御座りまする。』

同じ思ひの玄蕃は、更に止めようともしなかつた。

『玄蕃、嚮導してたも。』

『畏まりました。』

忿激に忿激する鬼玄蕃は、直様姫を案内して、朝臣の面皮を剝ぎ、二度と再たび悪所へ近寄らせまいと意氣込むだ。

怪盗夜叉王が今夜見舞ふといふ豫告が有るに拘はらず、姫と玄蕃とが俄かに他出すると知つて、館の男女は命も摺り減るばかりに顫へ上つた。

『姫君樣、夜叉王とやらいふ盗人が、今晩推參すると申して參りましたとやら、若し姫君樣御留守に押入りでも致しましたら、何と致しませう。』と、左右の侍女は齒の根も合はぬ有樣。いぢらしき迄にワクワクする。

『今晩參ると斷りを言うて



押入る盗人などは、世の中に有るものでは有りませぬぞへ。』

『いへ夫でも夜叉王と申すは、毎度さういふ前觸をして、必ず入ると申しふらしまする。』

『夫こそ其方達の聞き怖ぢといふもの。よし誠參るにしても、九刻過ぎと斷り書がして有るものを、夫迄には妾も玄蕃も戻りまする。若し夫より先へ參つたなら、衣類調度何なりとも、望む物を遣はしてたも。』

姫に取つては、夜叉王の襲來よりも、中納言に逢ふのが、焦眉の急で有る。

『望月殿、今貴下に外へ行かれては、夜叉王が當館を犯した節、防ぎ矢仕つる者が御座りませぬ。』

小姓達は襟首から水を注がれたやうに、思はず身ぶるひした。

『貴公達は何の爲に刀を帶するのぢや、曲者が參つたらば捨てなさい。手に合はずば死んで了ひなさい。敵は此玄蕃が取つて遣はすわい。』

玄蕃の眼中も只朝臣有るのみ、大賊夜叉王の襲來などは念頭に無い。姫としても同じ事、夜叉王などは問題では無い。此處で彼是して朝臣に逢ひ損ねると、變幻不測の朝臣の行動、風に漂よふ浮萍のやうに、何處へ流れ寄つて了ふか知れぬから、邂逅つたが最後、何處迄も我物に繋絆へて了はねば、安心がならぬので有る。

翠滴たる大前髮の男髷、溫たかき雪と匂やかな顔には、花も羞らふ薄化粧、女の嗜みの京紅の笹色、仄めく胸元の脹だみ、滑らな襟足の仄めき、有ん限りの美女の精根を蒸して、觸らば手も痺れぬべき氣品と、玄妙芳醇の旨味とを盛上らした綾羅の袂、精巧の擢縮置いた袴の褄さばき、靜かに乘物に召されると、傍に引添ふ鬼侍の望月玄蕃、指でも指す者が有らば、鬼でも夜叉でも一刀兩斷の見幕、八相を睨むで大道狹しと濶歩して行く。

大門外で乘物から立出られた泰姫、東へ下つて可なり磊落闊達の振舞はされたが、流石に不夜城の極樂世界は知らなかつたので、今更に仲の町の晝をも欺く萬燈の輝きに、美しい眉根を顰めつゝ、玄蕃の案内に從つて、往き來るさの浮れ男の中を分けて行く。

花にぞめきの人々は、婀娜なる姫の若衆姿に今更驚きの目を瞠り、知らぬ者は廓の中の色若衆が、戀の流れに浮み出たかと怪しみ、知る者は物好な小梅御館の春の朧を情に融かして、戀の道の修業かと目を欹立てた。

『オウ又參つたぞ。』

降一引手茶屋の出口にヌッと立つた玄蕃、其後には若衆姿の妖艶絶比な貴人。流石に廓知りの女達は、世にも貴とき猷之門跡」

の降臨と覺つて、眞蒼になつて二階へ注進するもあれば、忙てて土下座をするも有る。

『亭主は居らぬか。』

此時とばかり肱を張り、四方を睨めた玄蕃の大音聲。二階の床板まで、ビリ〳〵と響き渡らんばかり。唇食ひ反して苦り切る處へ、バタ〳〵と驅け來たのは、先刻船で供した十三四の小間しやくれた雛妓。

『アレ旦那さん、其麼に威張なんすと、又お臍の毛を拔きますぞへ。』

遠慮會釋もなくバツタりかじり附かれて、姫君の見る前、玄蕃は眞赤になつて膏汗を流した。

『えゝ何する。』

襟髮摑むで、猫の子を吊すやうに抓み上げたので、何にも知らぬ雛妓は、ワアツと悲鳴を擧げる。

『其方が毛を拔かれて來ましたとへ。』

姫までが人が悪く微笑まれたので、玄蕃は吃驚敗亡、痛く無く腹を捜られる心地がして、邪慳に雛妓を店先に叩き附けた。

『亭主、貴き姫君のお成りぢや。御出迎へ致



して、中納言樣御座敷へ御案内致せ。』
店から奧から、上を下へと狼狽へ廻る處へ、早くも下りて來たのは波多野右近。
『之は姬君樣ようこそお成り遊ばされました。朝臣樣はまだ快よく御酩酊に入せられまする。……右近御案内仕つる。』
香羽太夫の膝に縋れて、下樣の下卑た地唄を口誦む朝臣の取亂した姿を見せるのは、又となき恥と思ふから、右近は先に立つて出迎へたので有る。
姬は朝臣を諫める爲、右近は姬に愛想を盡させる爲、互ひの胸は呉越と隔たるが、狙ふ的は只一つの中納言雅信朝臣の醉興。玄蕃は南風に吹かれた三島虎魚其儘、虎鬚倒まの頬を脹らし、毛蟲の眉を尖らして的もなく拳を握り詰めた。

勝氣と意氣地

『これは思ひも寄りませぬ御目文字、妾は泰であります。其後は打絶えまして、御遣も御在しまさず、お嬉しう存じ上げまする。』
香羽太夫に膝枕した朝臣の前へ、脇目も振らずに靜々と寄つて、謹りとその前に兩手を支いた姬は、偕老の良人と許す人の淺ましき惰弱の有樣に、口惜し涙が血に咽へて、胸も裂れ心も泣かれるばかり、迫き込む腹立たしさが、喉に痞へるのを、凝と堪へて魂を失はなかつた。
玄蕃は遙かに隔だつて、蟇蛙の樣に兩手を突き、右近は斜めに席を避けて、事の樣を窺つた。今迄飲めよ唄へと、歡樂の宴に狂ひ踊つた幇間末社は、居堪まらずに逃げるも有れば、顏色變へて縮むも有る、流石に香羽太夫のみは、松の位の權識を以て、怯めず臆せず、朝臣に膝を貸しながら、片手を其肩へ置いた儘、身動きもせずにツンと澄し切る。
蟋蟀音を絶えて、俄かに變る天地の寂寞、山雨將に來らんとして、風樓に充つるの趣きが有る。
『御前、姬君に御在します。御前、御目覺め下さりませ。』と、堪へ兼た玄蕃が雷の如き忿激の聲。
『ウム何ぢや、姬君ぢやと。』
蹌踉ける聲に躓づきながら、朝臣は恍惚たる目を細目に開き、仰向け樣にマジリ〳〵と天井の節穴を數へた。
『姬君結構ぢや。……何方の姬か知らぬが、姬と聞いては賴母しいな。』と、まだ酒が人を飲む醉中の囈語。
『御前、泰姬君に御座りまするぞ。』
是でもかと言はぬばかりに、玄蕃は目を瞋らして焦れ込むだ。
『ナニ泰姬だと、……大宗の女房、堀左衞門尉と申す野暮の十の字の堤ぢや。……其樣な事は根中に一向さぬものに

候ぢや。喃此方の太夫。』と、何を言つても他愛が無い。
野卑とも、下劣とも、聞くだに耳の汚れの淺ましき朝臣の口吻、姫の蟀谷の薄絹の地肌には、見る〳〵蒼い筋が蠢めくやうに走つた。
『妾は泰で有りまする。御迎へに參上致しました。』
白銀の刀を以つて流水を斷つより鮮やかな切口上、朝臣は始めて向き變つて、朦朧たる醉眼に姫を眺めて怪訝の眉の曇り。
『オウ之は眞に泰どので御座つた。これは〳〵、何としてわせられた。いや面目も無い仕儀、平に見て見ぬ振にな。』と、流石に額の汗を拭く。
『妾は昨年より、如何ばかりか御所在をお捜し申上げましたが、皆目御行衛が知れませぬ。風の便には東の方に御在すと承はり、妾も御後を慕うて當地へ下り、只今は小梅の里に假住居、明暮御身の上を案じ參らせましたる處偶なくも此家に御在す由、玄蕃より承はりまして、妾自身にお迎ひに參じて御座りまする。』
夫とは言はねど、千萬無量の美女の怨言、沸湯の流れとなつて、朝臣の爛れた腸にキリ〳〵と沁み徹つて行く。
『これは〳〵、姫御自身の御出馬、中々以つて容易ならざる事、夫にしては雅信誠に以て恐縮、罰が中ると申すものぢや。』
と空々しい口上。

『恁樣に汚らはしき處に御座遊ばされ、忌はしき酒を聞し召しましては、尊き雲上の御身の障り、早々お立ち遊ばしますやう。』
莞爾ともせず、兩手を膝に正した姫は、瞬たきもせず朝臣の顏を見入つた。
『これは姫には強い御腹立、雅信も起きたいのでは御座るが、偖中々起きる事がなりませぬのぢや。』
起きられぬも道理、太夫の軟らかい手の、シツトリした重味は、言はず語らず朝臣を押へ附けて、千斤の壓石が有る。
『何故お立ち遊ばされませぬ。』
堪へ〳〵て、女の優しみを損ねまいとする姫も、稍迫き込むで來た。
『コレ泰どの、夫だに由つて野暮のヤの字と申すのぢや。これ見られい、太夫が此通り行つてはならぬと押へ申すでな。』
臆面もなく太夫の手に我手を重ねると、太夫も聊か羞恥みもせず、其儘左も快よささうに手を懸けて、思はせ振な切れの長い眥に、上から覗けば下から見上げる。
『汝、此淫けた賣女奴。』と、玄蕃は口から泡を噴き、姫は口惜しさに、逆卷く血が火の流れと化したのを感じた。
『誰が止めませうとも、妾がお迎ひに參じました上は、早御動座遊ばされる筈。……賤しい遊女の止める手元が、拂ふに拂へ

押入る盗人などは、世の中に有るものでは有りませぬぞへ。』

『いへ夫でも夜叉王と申すは、毎度さういふ前觸をして、必ず入ると申しふらしまする。』

『夫こそ其方達の聞き怖ぢといふもの。よし誠參るにしても、九刻過ぎと斷り書がして有るものを、夫迄には妾も玄蕃も戻りまする。若し夫より先へ參つたなら、衣類調度何なりとも、望む物を遣はしてたも。』

姫に取つては、夜叉王の襲來よりも、中納言に逢ふのが、焦眉の急で有る。

『望月殿、今貴下に外へ行かれては、夜叉王が當館を犯した節、防ぎ矢仕つる者が御座りませぬ。』

小姓達は襟首から水を注がれたやうに、思はず身ぶるひした。

『貴公達は何の爲に刀を帶するのぢや、曲者が參つたらば捨てなさい。手に合はずば死んで了ひなさい。敵は此玄蕃が取つて遣はすわい。』

玄蕃の眼中も只朝臣有るのみ、大賊夜叉王の襲來などは念頭に無い。姫としても同じ事、夜叉王などは問題では無い。此處で彼是して朝臣に逢ひ兼ねると、變幻不測の朝臣の行動、風に漂よふ浮萍のやうに、何處へ流れ寄つて了ふか知れぬから、廻遁つたが最後、何處迄も我物に爲終へて了はねば、安心がならぬので有る。

翠滴たる大前髮の男髷、濕たかき雪と匂やかな顏には、花も羞らふ薄化粧、女の嗜みの京紅の緋色、仄めく胸元の脹だみ、觸らば手も痺れぬべき氣品と、玄妙芳醇の旨味とを盛上らした綾絹の袂、精巧の摺箔置いた袴の捌さばき、靜かに乘物に召されると、傍に引添ふ鬼侍の望月玄蕃、指でも指す者が有らば、鬼でも夜叉でも一刀兩斷の見幕、八相を睨むで大道狹しと濶歩して行く。

大門外で乘物から立出られた姿姫、東へ下つて可なり磊落豁達の振舞はされたが、流石に不夜城の極樂世界は知らなかつたので、今更に仲の町の晝をも欺く萬燈の輝きに、美しい眉根を顰めつゝ、玄蕃の案内に從つて、往き來るさの浮れ男の中を分けて行く。

花にぞめきの人々は、婀娜なる姫の若衆姿に今更驚きの目を睜り、知らぬ者は繪の中の色若衆が、繪の流れに浮み出たかと怪しみ、知る者は物好な小梅御館の春の朧を情に融かして、戀の道の修業かと目を欹立てた。

『オウ又參つたぞ。』

降一茶屋の店口にヌツと立つた玄蕃、其後には若衆姿の妖艶無比な貴人。流石に聞知りの女達は、世にも貴とき秋之門卿へ

の降臨と覺つて、眞蒼になつて二階へ注進するもあれば、忙てて土下座をするも有る。

『亭主は居らぬか。』

此時とばかり肱を張り、四方を睨めた玄蕃の大音聲。二階の床板まで、ビリ〳〵と響き渡らんばかり。脣食ひ反して苦り切る處へ、バタ〳〵と驅け來たのは、先刻船で供した十三四の小間しやくれた雛妓。

『アレ旦那さん、其麼に威張なんすと、又お臍の毛を拔きますぞへ。』

遠慮會釋もなくバツタりかじり附かれて、姫君の見る前、玄蕃は眞赤になつて膏汗を流した。

『えゝ何する。』

襟髮摑むで、猫の子を吊すやうに抓み上げたので、何にも知らぬ雛妓は、ワアツと悲鳴を擧げる。

『其方が毛を拔かれて來ましたとへ。』

姫までが人が悪く微笑まれたので、玄蕃は吃驚敗亡、痛く無く腹を搜られる心地がして、邪慳に雛妓を店先に叩き附けた。

『亭主、尊き姫君のお成りぢや。御出迎へ致



して、中納言樣御座敷へ御案内致せ。』
　店から奥から、上を下へと狼狽へ廻る處へ、早くも下りて來たのは波多野右近。
『之は姬君樣ようこそお成り遊ばされました。朝臣樣はまだ快よく御酩酊に入せられまする。……右近御案内仕つる。』
　音羽太夫の膝に凭れて、下樣の下卑た地唄を口誦む朝臣の取亂した姿を見せるのは、又となき機と思ふから、右近は先に立つて出迎へたので有る。
　姬は朝臣を諫める爲、右近は姬に愛想を盡させる爲、互ひの勝は呉越と隔たるが、狙ふ的は只一つの中納言雅信朝臣の醉興。玄蕃は南風に吹かれた三島虎魚其儘、虎鬚倒まの頰を膨らし、毛蟲の眉を尖らして的もなく拳を握り詰めた。

勝氣と意氣地

『これは思ひも寄りませぬ御目文字、妾は泰であります。其後は打絕えまして、御逢も御在しませず、お嬉しう存じ上げまする。』
　音羽太夫に膝枕した朝臣の前へ、脇目も振らずに靜々と倚つて、犇りとその前に兩手を支いた姬は、偕老の良人と許す人の淺ましき惰弱の有樣に、口惜し淚が血に咆へて、胸も燃れ心も燒かれるばかり、迫き込む腹立たしさが、咽喉に痞へるのを、凝と堪へて禮を失はなかつた。
　玄蕃は遙かに隔だつて、蟇蛙の樣に兩手を支き、右近は斜めに席を避けて、事の樣を窺つた。今迄飲めよ唄へと、歡樂の宴に狂ひ踊つた藝奴末社は、居堪まらずに逃げるも有れば、顏色變へて縮むも有る、流石に音羽太夫のみは、松の位の權識を以て、怯めず臆せず、朝臣に膝を借しながら、片手を其肩へ置いた儘、身動きもせずにツンと澄し切る。
　萬籟音を絕えて、俄かに變る天地の寂寞、山雨將に來らんとして、風樓に充つるの趣きが有る。
『御前、姬君に御在します。御前、御目覺め下さりませ。』と、堪へ兼た玄蕃が雷の如き忿激の聲。
『ウム何ぢや、姬君ぢやと。』
　蹌踉ける聲に躓づきながら、朝臣は恍惚たる目を細目に開き、仰向け樣にマジリ〱と天井の節穴を數へた。
『姬君結構ぢや。……何方の姬か知らぬが、姬と聞いては懷しいな。』と、まだ酒が人を飮む醉中の囈語。
『御前、泰姬君に御座りまするぞ。』
　是でもかと言はぬばかりに、玄蕃は目を瞋らして焦れ込むだ。
『ナニ泰姬だと、……夫は予の女房、嬶左衛門尉と申す野暮のヤの字の塊ぢや。……其樣な事は夢中にて申さぬものに

候ちや。喃此方の太夫。』と、何を言つても他愛が無い。
野卑とも、下劣とも、聞くだに耳の汚れの淺ましき朝臣の口吻、姫の蟀谷の薄絹の地肌には、見る〳〵蒼い筋が盜めくやうに走つた。
『妾は姫で有りまする。御迎へに參上致しました。』
白銀の刀を以つて流水を斷つより鮮やかな切口上、朝臣は始めて向き變つて、朦朧たる醉眼に姫を眺めて怪訝の眉の雲り。
『オウ之は眞に姫どので御座つた。これは〳〵、何としてわせられた。いや面目も無い仕儀、平に見て見ぬ振にな。』と、流石に額の汗を拭く。
『妾は昨年より、如何ばかりか御所在をお搜し申上げましたが、皆與御行衛が知れませぬ。風の便には東の方に御在すと承はり、妾も御後を慕うて當地へ下り、只今は小梅の里に假住居、明暮御身の上を案じ參らせましたる處、圖なくも此家に御在す由、玄蕃より承はりまして、妾自身にお迎ひに參じて御座りまする。』
夫とは言はねど、千萬無量の美女の怨言、沸湯の流れとなつて、朝臣の爛れた腸にキリ〳〵と沁み徹つて行く。
『これは〳〵、姫御自身の御出馬、中々以つて容易ならさる事、夫にしては雅信誠に以て恐縮、罰が中ると申すものぢや。』と苦々しい口上。

『恁樣に汚らはしき處に御座遊ばされ、忌はしき酒を聞し召しましては、尊き雲上の御身の障り、早々お立ち遊ばしますやう。』
莞爾ともせず、兩手を膝に正した姫は、瞬たきもせず朝臣の顏を見入つた。
『これは姫には强い御腹立、雅信も起きたいのでは御座るが、偖中々起きる事がなりませぬのぢや。』
起きられぬも道理、太夫の軟らかい手の、シツトリした重味は、言はず語らず朝臣を押へ附けて、千斤の壓石が有る。
『何故お立ち遊ばされませぬ。』
堪へ〳〵て、女の優しみを損ねまいとする姫も、稍迫き込むで來た。
『コレ姫どの、夫だに由つて野暮のヤの字と申すのぢや。これ見られい、太夫が此通り行つてはならぬと押へ申すでな。』
臆面もなく太夫の手に我手を重ねると、太夫も聊か羞恥みもせず、其儘左も快よささうに手を懸けて、思はせ振な切れの長い眥に、上から覗けば下から見上げる。
『汝、此淫けた賣女奴。』と、玄蕃は口から泡を噴き、姫は口惜しさに、逆卷く血が火の流れと化したのを感じた。
『誰が止めませうとも、妾がお迎ひに參じました上は、早御動座遊ばされる筈。……賤しい遊女の止める手元が、拂ふに拂へ

ぬ事は御有り遊ばすまい。』

立たうとすれば遣らじと押さへ、止まらうとすれば連れて戻ると退引させず、桃と櫻の花の色香に押詰められて、朝臣は快よい薫の中に軟々と壓殺されねばならぬのだ。

『もし〳〵お姫さん、妾は賤しい遊女で有りんすけれど梅さまは妾が大切の〳〵御客さん。素人衆の此方さんに、手籠で連れて行かれいしては、妾の女が廢りんすに由つて、強う御斷わり申しいす。』

キツパリ言つて退けて、突と横を向いたのは、花街三千の名妓の中の名妓が、高貴の姫の威光に楯衝いて、見事宣戰の布告をしたので有る。此言葉一度出でては、引いて返らぬ梓弓、命を懸けても一歩も負けぬ廓の意氣地。素破やと一同は薄氷渡る思ひに手に汗握つた。



『妾は其方のやうな者には言葉を交しませぬ。』

太夫に松の權識が有れば、姫には櫻の氣位が有る。苟にも雲上高貴の御流れを引く身が、色を賣る君傾城と言葉を戰はすは、眞珠の光を掻き曇らす穢れで有る。

『もしお姫さん、強い御權識で有りんすけれど、此廓は晦日に月の出る處、嬉しいに泣き、悲しいに笑ふ色の諸分の綾襷、素人衆の知りいせん別世界、一夜妻と、言ひいしても、其一夜は妾の大切の配偶、素人衆に取られいしては、妾の顏が立ちいせんによつて、強う御斷り申しいす。』と、重ねて念を押す。

嗔恚の火焰が胸に燃ゆるかは知らず、表面は冷々淡々として、高貴の上臈を眼中にも措かぬ取澄した心憎き態度、何處を風がと烟草を鐶に吹くと、燦として搖れる櫛笄、女の誇の綺羅びやかな光が、銀燭に映じて、光彩人を照すばかり。さしもの姫も、未だ曾て目前我身に楯衝いて、斯まで大膽に言つて退ける女には出會なかつた。在樣は下樣の女といふものは、高貴の光に壓されて、愼ましやかに控へるものとのみ思ひ込んで居たから、自身で朝臣を迎へに來たなら、一も二も無く送り出すのみか、手を支いて詫び入るとのみ信じて居たので有る。夫が意外にも、柳の絲の撓めど折れぬ遊里の意氣地、頭一つ下げようともせずに、決然鮮やかに斷られたので有るから、姫としては生來始めての恥辱を蒙つたので有る。

『其方が斷らうとも、御前は妾がお連しますする。其方のやうな者は目通り協ひませぬ、退つて居や。』

『オホホ、妾が後から來たのでは有りいせん、お姫さんが勝手に後から來なんしたものを、妾を見るがお嫌なら、お姫さんの方から身を退いてくんなまし。御茶屋さんの二階の階子は、妾のやうな賤しい君傾城の上る處、高位のお姫さんの來いゝす處では有りいせん。』

漢楚呉越の有らゆる客を手玉に取つて、人擦れて居る太夫の度胸、さしもの姫も言ひしらまされ、呆れて其顏を見つめるばかり。夫を見た玄蕃は、少時も堪へず、火のやうに憤激した。

『汝ツ、御上に對して、無禮千萬の賣女奴、許しはせぬぞ。』

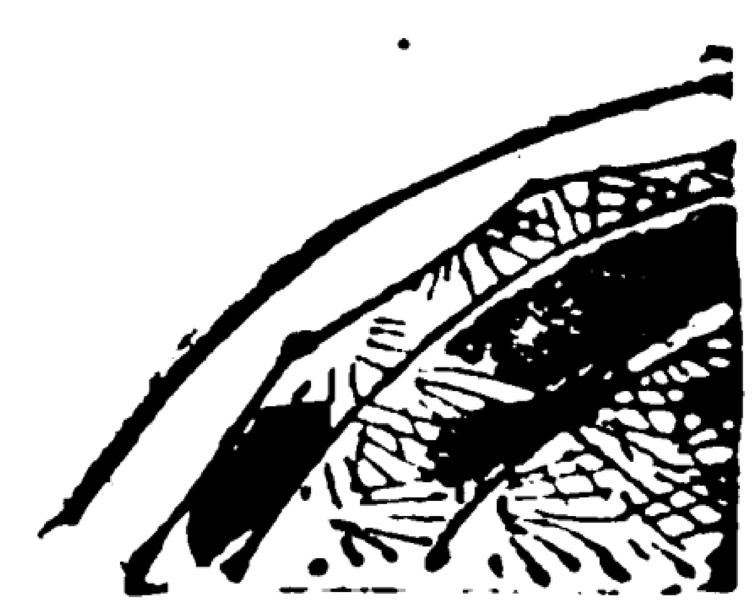
榮螺の拳を固めて俄破と立上つた。此拳一度閃めけば、花も錦も落花狼藉、太夫の權識も何も有つたものでは無い。然し其見幕を見て、益ゝ挫まぬ太夫の意地は、美しい孔雀の誇の尾羽を飜へして天風に舞ふの張が有る。

『オヤ、奴さん、妾を打たうとしなんすか。こりや面白い、打つなら打つて見なんし、お姫さんの御身分柄にも拘はりいせう、馬鹿らしうおす。』

『何を此奴が。』

待て少時も無い玄蕃の無法、奴と蔑すまれて躍り懸らうとするのを、後から扯住めた波多野右近。

『場所柄で御座る、待たつしやい。相手は執るに足らぬ女子で御座る。』



愢言はれて、玄蕃も是非なく躊躇つたが、夫でも指を咥へて引退るのでは無い。

『御前、いざ御引上げ下され、二枚舌を使はぬ御誓言で御座る。是にても御聞き濟なければ、玄蕃姫君への申譯、此場にて腹割さばき申す。』

玄蕃のは時に取つての威嚇では無い、全く赤い血を見せ兼ぬ見幕に、朝臣も餅に搗けば、さしもの太夫も之には辟易した。

『待て〳〵玄蕃氣短かな。』

『然らば御動座遊ばしまするか。』と退引させない。

『姫君思召しも如何、何卒今晩は一先御引上げ下さいまするやう。』と、右近も此時と思つて、始めて喙を容れた。三人の包圍攻撃に會つては、如何に有頂天の遊蕩子も拒みもならない。

『然らば折角ぢやによつて、今夜は一先小梅とやらへ參るであらう。右近其方も同道致したが可い。』

良人と定まる許婚の朝臣が居無い時ならば京んで御館へ參入したので有る。夫は空巣を覘つて巣くふ時鳥の覘ひ處で有るが、今目のあたり其人に會つて、其々御館へ引上げるのは、何と無く後めたいので、右近はモヂ〳〵した。

『右近、定めし迷惑で有りませうが、今一度住居へ參つてはたもらぬか。今夜は夜叉王といふ悪人も參ると申して来[illegible]

た。其方にも紹介せ置きたいと思ひまする。』と、姫も右近を放しとも無いのだ。狂風吹き去つた後の静けき微笑み。朝臣が席を立つと極れば、太夫に對して、姫は勝利の誇で有る。

『エツ、何と仰せ遊ばす、夜叉王が推參致すと申し出でましたるか、奇怪至極。』と、右近も怪盜の大膽に呆れた。

『彼奴御館へ參れば運の盡ぢや、江戸中の心配を此指先で捻り捨て見せるぞ。』と、玄蕃は始めて喜び勇むだ。

朦朧たる醉中にも、夫を小耳に挾むだ中納言雅信朝臣。

『ホホウ、世にも珍客が參るのぢやな。然らば予も同道して、姫の戀人に面會致さうぞ。』

夜叉王推參の一言が、反つて一同の好奇心を唆つたので有る。

『太夫、又明晩參るによつて、今晩だけは歸して呉よ。』と、朝臣は何處までも未練が有る。

『アイ梅さま、今夜だけは主の身體を主へ預けいす。あんまり粗匆に扱つて、摺り減してくんなますなよ。』

婉婉な切れの長い眼は、ジロリと姫を尻目にかける。腕づくに負けても、意地では退を取らぬのである。――つゞく――

正に突如！ 花の小梅御殿は、風流中納言と怪盜夜叉王との二賓客を迎へんとす。許婚に紫怨を喞つ麗人や、大賊に鐵拳を揮る闘士や、春宵千金の夢を破る覇麻の活劇は果して如何？ たゞ[illegible]を[illegible]んで[illegible]と共に次號を待つのみ。次號！ 次號！ 次號!!

早く！お申込

全三巻タッタ三圓

古今の名作落語、小噺、笑話、雜俳等、日本生粋の滑稽文學悉く集る

二度と得られぬ笑ひの寶庫！幸福の源泉！

見よ！諸名家激賞！！



法學博士下村海南先生曰く

い同じ一生である、笑へ笑

文學博士笹川臨風先生

品である。落語の價値はこ

建長寺管長菅原時保先生曰く……落語の目的は

以外の大道を發見し、眞理以外の眞理、教訓以外の教訓に接する事で

自働道話主幹西川光二郎

要がある。そこで人生に

文學博士谷本富先生

て、帝國國民教育の眞底なる

道會王松村介石先生曰く

てその中に武士道を含ませ

五高教授八波則吉先生曰く

氣を爽快にする一種の清涼劑だ。落語全集

小說家佐藤紅綠先生曰く……落語は江戸藝術

落語全集

近あれ!!



ってよい。落語を好まない人は文學が絶對に解らない。

不動銀行重役牧野元次郎先生曰く……落語全集の出版は實に有意なる企てゞある。世人も亦世界の平和の爲に大いに歡迎されたい。

增上寺貫主道重信教先生曰く……落語は人心の奧底にいたり人心の機微を察し何とも言ひ難き處を言ひ現はし說教講演以上である。

醫學博士高田義一郎先生曰く……世の中があんまりゆとりがなさ過ぎる樣に見えますから落語でも讀んで一つ大いに笑ひたいものです。

陸軍中將堀内信水先生曰く……落語氣分といふものは人間に一寸でも缺いてはいけない。この氣分がなければ立身出世は出來ない。

三越重役濱田四郎先生曰く……小說よりも講談を好み、講談よりも落語を好む小生は落語全集の發刊を聞き喜び之に過ぐるなし。

社會教育家加藤咄堂先生曰く……笑ふものは明るく泣くものは暗し、落語は明るく樂むべき我が日本が發明せる一の藝術である。

文學博士藤村作先生曰く……誰にも勸めたいのは笑の文學である。輕い笑の文學はこの意味で現代に生かすべきである。

小說家中村武羅夫先生曰く……笑ひのない人生くらゐ荒涼たるものはない。ユーモアと笑は人生行路の綠地であり救ひである。

この外、各方面より激勵、推奬のお言葉を續々頂き、社員一同感激奮勵、いよ〳〵最善最良へと苦心努力!

今直ぐ御近所の書店へ!

四六判函入、綾織裝釘、各卷八百頁、全三卷一册一圓〇申込金壹圓（但し之は最後の月の會費に當てます。）

本社へお申込の方は會費の外に郵送料一册につき十六錢づつ申し受けます。（東京市內六錢、海外二十六錢）書店に申込まれた方に對しても遠隔の地に於ては運送實費の御負擔をその書店からお願する場合があります。

發行所 東京本鄉 **大日本雄辯會講談社**（振替東京三九三〇）

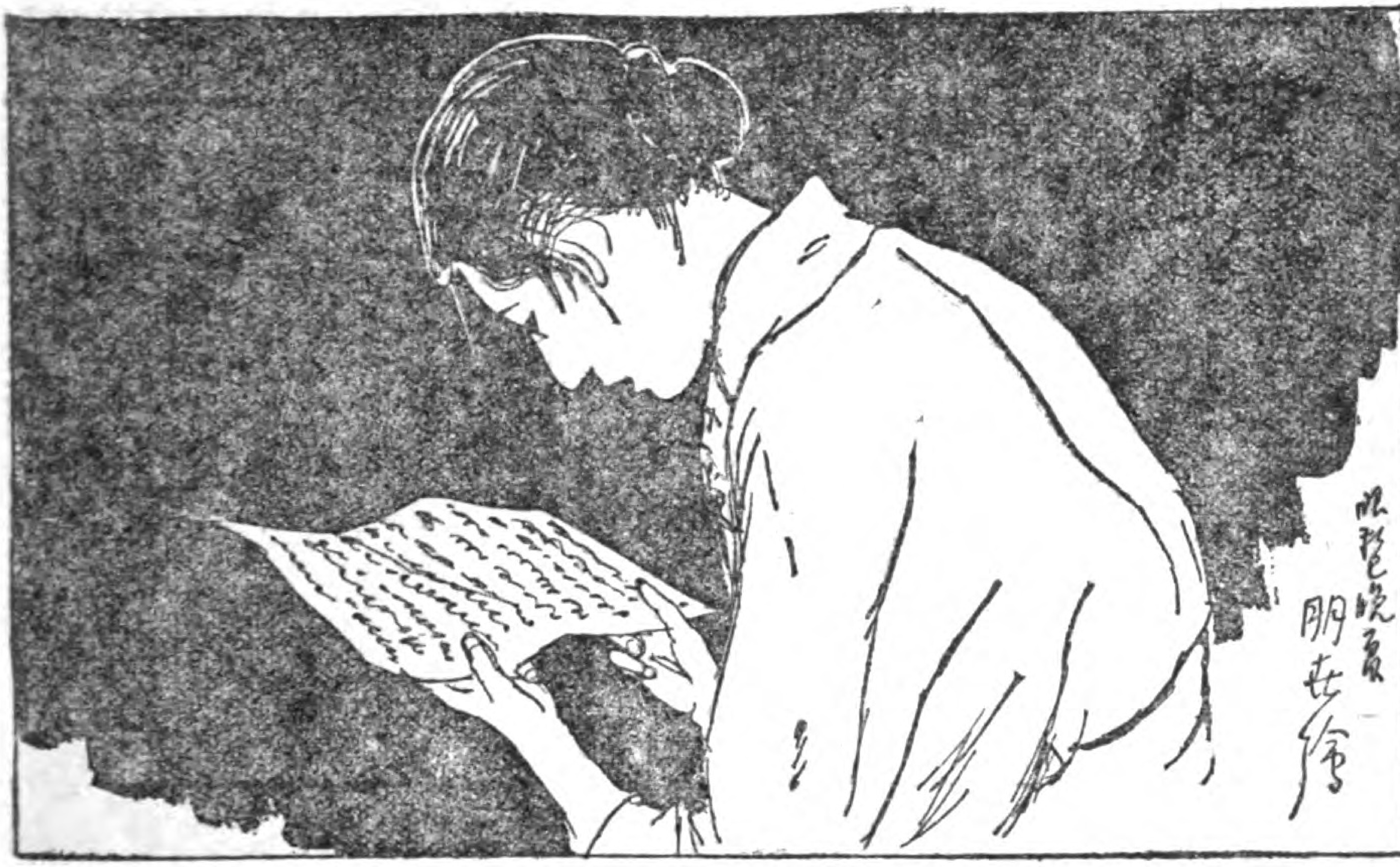
俚諺反對番附

番附	俚諺
横綱	稼ぐに追ひつく貧乏なし
大関	立つ鳥は跡を濁さず
関脇	好きこそ物の上手なれ
小結	得手に帆を揚ぐ
前頭	藝は身を助ける
同	旅は道連れ世は情
同	猿にもかんむり
同	袖摺り合ふも他生の縁
同	念には念を入れよ
同	人は一代名は末代
前頭	正直の頭に神宿る
同	渇しても盗泉の水を飲まず
同	縁の下の力持
同	子に勝る寳なし
同	酒は百薬の長
同	見やう見眞似
同	命あつての物種
同	邪は正に勝たず
同	氏より育ち
同	破れ鍋にとぢ蓋
前頭	親しき仲にも禮儀あり
同	情は人の爲ならず
同	目から鼻へぬける
同	經綸の才は堂より下さず
同	商賣、道によつてかしこし
同	可愛い子には旅させろ
同	苦しい時の神頼み
同	情に刃向ふ刃なし
同	餌で鯛を釣る
同	貞女両夫に見えず

行司	渡る世間に鬼はなし
	人を見たら泥棒と思へ
	坊主憎けりや袈裟までも
	罪を憎んで人を憎まず
年寄	朝起きは三文の徳
	果報は寝て待て

番附	俚諺
横綱	貧乏暇なし
大関	後は野となれ山となれ
関脇	下手の横好き
小結	弱り目に祟り目
前頭	粹は身を食ふ
同	旅の恥は掻き捨て
同	馬子にも衣裳
同	兄弟は他人の始まり
同	思ひ立つたが吉日
同	永い浮世に短い命
前頭	嘘も方便
同	毒を食はゞ皿まで
同	陰徳あれば陽報あり
同	子は三界の首枷
同	酒と女は敵と思へ
同	鵜の眞似をする烏水に溺る
同	命長ければ恥多し
同	人盛にして天に勝つ
同	瓜の蔓に茄子はならぬ
同	提灯につり鐘
前頭	親の物は子の物
同	自分は自分人は人
同	芋の煮えたも御存じない
同	女房と疊は新しい程よい
同	上手の手から水が漏る
同	泣く子と地頭には勝たれぬ
同	觸らぬ神に祟りなし
同	無理が通れば道理引込む
同	商賣は牛の涎
同	女寡に花が咲く

長岡規矩雄



母性美談

美しき秘密

西田鷹止

挿繪 神保朋世

千葉に、ずつと以前のことですが、『母の會』といふ集會がありました。名の通り、若いお母さん達の集りで、毎月一回づつ集合して、醫師、教育家等を招き、育兒衞生、子供の教育等につき、有益な話を聽くのを例としてゐましたが、或る月の會に、梅野さんといふ辯護士を招いて話を請うたことがありました。其時の梅野さんの話は、毎月の無趣味な講話と異つて、實に人情味豐かな小說的事實談でありまして、會員諸姉に非常な感動を與へたやうでありました。筆者は、その『或る母の話』を、今、梅野さんの言葉のまゝ、左に掲げようと思ひますが、どうか、讀者諸兄姉よ、其時の會員のつもりになつてお靜聽、いや、お讀み下さらんことを願ひます。必ずや、皆さんも、一滴の淚を惜しまれないであらうと信ずるのであります。

× × × ×

母性！ 母！ 皆さん、この言葉ほど、私の耳に神聖な響きを與へるものはありません。その尊き母の會に臨んで、同じこれも一人の母についてのお話をすることを得る私は、非常な光榮と思ふの

であります。

このお話は、私自身遭遇し、法廷の辯護にも立つた事件でありまして、八年前一昔前のことではありますが、其當時の新聞をお讀みになつた方は、未だに記憶に残つてゐるだらうと思ひます『子殺し女教員』として、當時、縣下の教育界を騒がしたものでありましたが、この事件には、未だ甞つて世間に發表されざる大きな秘密が隠されてゐるのでありまして、私のこの話の目的は、實は、その秘密を皆さんへお知らせするにあるのであります。

今玆で、皆さんの前に本名を申上ることは避けませう。假りに、中村千代さんと呼ぶことにします。で、八年前、この千葉町に、中村千代さんといふ兩親もない寂しい一人者の貧しい女教員が住んでゐました。二十五歳といへば、老嬢に近い方ですが、氣立は優しく正直で愛嬌があるといふので學校の教員仲間にも親しまれ、近所の口さがない女房連にも評判が好い方でありました。ところが、不圖、お千代さんが二ケ月ばかり行方不明になつたのです。勿論、學校には、病氣缺勤屆が出て居りましたが、彼女の行方については、彼女の最も親しい友だちすら知りませんでした。二ケ月の後、面窶れのした蒼白な顔をお千代さんが再び千葉町に現はした頃には妙な風評が盛んに立つてゐたのです。あの女は姙娠してゐた、子を産みに隠れたのだ、との噂です。けれども歸つて來たお千代さんの腕には、嬰兒の抱かれてゐよう筈はありません。

この風評が警察の耳に入り、内々調べて見れば噂は事實で、彼女が東京深川の知人の家に隠れて女の子を分娩したことまで判明しさて、その子を、どうしたかに、愈々嫌疑がかゝりまして彼女は檢擧され續いて彼女の驚くべき自白となり、遂に起訴されて、司直の手に移されることにはなつたのでありました。

お千代さんが、警察で自白したところによりますと、彼女は、深川から、千葉への歸りを、其當時、千葉、木更津へ廻航してゐた内海通ひの蒸氣に乘つたと云ひます。歸途にはついたものゝ、人妻ならぬ女、しかも、教育に携はる身が、どうして、私生兒を抱いて千葉へ歸れませう。船中、思ひ惱んだ末に、彼女は、子を殺し、共に自分も入水して死ぬ覺悟を決めたのでありました。心を鬼にして、先づ我子の喉を締め、窒息せしめて、屍體は海に投じはしたものゝ、さて自分の番になると、恐怖が先に立つて、死に遅れ躊躇してゐるうちに蒸氣は遂に千葉沖に着いてしまつたといふのであります。

これが、當時、世間に知られた、嬰兒殺し女教師事件でありますが、この事件に最も重要な人物であるべき子の父親、即ちお千代さんの相手の男の名が最後まで現はれなかつたことです。お千代さんは、警察の調べに於ても、豫審廷に於て

も、どんなに追求されても男の名は云はなかつたのです。

『その人の地位と名譽のために、それだけは訊かないで下さいまし。妾、斷じて申上ることは出來ません。』

　さう云つて、どんなに訊かれても、口を噤んでしまひます。このことは、愈々世間の好奇心を募らしたことでもありますが、一方裁判官には、强情な女、裁判の神聖を瀆す女として、同情を失ひ、彼女自ら極めて不利な立場とならしめたのでありました。

　私は、この事件の官選辯護人となりました關係上、彼女のために、情狀酌量論で進む考でありましたが、右のやうな始末では、私の辯論の効果はないものと思はなければなりません。で、私は、再三、未決監に彼女を訪うて、肩を叩きながら、なだめすかすやうに云つたものです。

『云つてしまひなさい。從順を示して下さい。同情を失つては、あなたの不利です。三年で濟むものも五年十年とやられますぞ。』

　けれども、彼女は、首を垂れるのみで、遂に、その名を明しませんでしたが、四度目に私が或夜、彼女を訪うた時でありました。流石に彼女も、私の熱心、厚意に對して、すまぬと思つたものか、遂に涙を流しながら、或る非常な秘密を告白したのであります。さうです。實に意外な、非常な秘密でありました。但し、彼女は、それを公判廷では勿論のこと、誰れにも口外してくれるなと、私の手を取つて哀訴するやうに賴んだのであります。私としては、その秘密を發表することは、彼女の一生を如何に不幸に陷らしめるであらうことから、救ふことが出來ると思ふのでありましたけれども、彼女自身それを望み、且つ彼女の心が安らかに、幸福を感ずる事であるならばと彼女の言に從つたのでありました。

　その後、八年間、私は、そのことを、私の胸一つに納めて誰れにも口外したことはありませんでした。それが、最近、或る事情のもとに、或人に語らなければならない場合となり始めて、彼女の秘密の總てを語つてしまつたのです。或る事情のもとに』――それを今、皆さんへお話しようとするのであります。

　で、順序として、話の續きを進めませう。右のやうな事情でありまして、お千代さんは、裁判官の同情を失ひ、遂に、殺人罪として、八年の處刑を宣告され獄屋に送られる身となつたのでありました。刑務所に行つてからのお千代さんは、極めて從順、實直で、模範囚であつたと聞いてゐます。その八年の間、絶えず彼女からは手紙が參りますし、私も月に一度は、必ず或る事を記した手紙を出してゐました。

　八年といへば長いやうなものゝ、月日の經つのは速いもので、滿期、二ヶ月ば

かり前に、お千代さんは刑期を終へて無事に出獄したのです。月々の手紙に對する感謝もありましたでせう。彼女は、慈父に對する敬愛の心を以て私に對してくれました。刑務所を出て一番に訪ねて來たのは私の家でした。身を寄する人も家もなき彼女、前科者として、顧みる人もなき彼女です。私は、彼女の此後の身の振り方も約して、暫く私の家に置くことにしたのでありました。

私の懇意にしてゐる人で、稻毛の海岸に別莊を持つてゐる山田さん（假名）といふ方があります。東京の或る會社の重役ですが、社の要務としては、月に三四度出社されるだけですから、大抵、この別莊を本宅として、長年の間、家族と共に、稻毛の方に居住してゐられるのです。家族といつても、夫人と、昨年から稻毛の小學校に出てゐる美代子ちやんといふ可愛いゝ令孃とだけ、他は召使たちで、寧ろ靜かな、寂しいほどの家庭なのです。

私が山田さんと入魂になつたのはお千代さんが刑務所へ行つた後のことで、私の方から交際を求めて懇意になつたのでありました。實はそれにも理由があつたのでありますが、そんなことを、山田さんに向つて、



おくびにも出したことはありません。山田さんが、園藝が好きなところから、その方で近づきになり、月に一二度は必ず會合して烏鷺を戰はして樂しむ仲となつたのでありまして、今では、學校時代からの友人のやうに親しく、無遠慮な間柄となつてゐるのであります。

恰度、お千代さんが、出獄して、私の家に居りました頃、山田さんの婆やさんが、暇を貰つて實家へ歸つたのです。これ幸ひと、私は、そんな機會が無くとも願ひ度いと思つてゐたことですから、早速そのあと釜にとお千代さんを頼みました。山田さんの方でも、そんな女教員をした事のある女なら、娘の家庭教師を兼ねて、この上もない幸、是非お願ひし度いといふわけで、即座に話はまとまり、其日のうちに、お千代さんを連れて行くといふ運びになつたのです。お千代さんは泣いて喜びますし、私も、重荷を卸したやうにほつとしたものでありました。

其後十四五日は何事も、ありませんでした。或日樣子を見に行つて見ますと、夫婦は、お千代さんの性質、氣立を賞めて、滿足して居ますし、殊に令孃の美代子ちやんには新しい婆やが、非常なお氣に入り、此頃では、お千代さんは、お孃さんのお部屋に床を列べて寢むことになつて、寢ながら、お千代さんが、お伽噺をしてきかせなければ、お孃さんも眠らないといふ有樣でありました。私も其日は非常に喜んで家に歸つたのでありました。

ところが、それから、二三日してからのことです。山田の奥さんが、あたふたと、車で私の家へ駈けつけて來られました。

『梅野さん、あなたもあんまりな方ではありませんか。婆やをすぐに引取に來て下さい。あんな女をもう一日も家に置くことは出來ません。』

えらい權幕なのです。

『ど……どうしたのです。お千代さんが何か不調法でも仕出來しましたか。』

『いえ、そんな小さなことではありません。前科者です。あの女は殺人罪で監獄に行つた女です。この頃、監獄から出て來た者だといふことを聞きました。しかも、我子を……産みの我子を殺した女ではありませんか。そんな女を、片時も娘の婆やとして、家に置くことは、出來ません。すぐに引取つて頂き度いのでございます。』

私は、早晩、やつて來はしないかを懸念してゐたことがあまりに早く來たことを悲しみました。併し、私としては、かねて覺悟してゐたことでありましたので別に驚きはしなかつたのです。たゞその恐れてゐた場合に直面しては、流石に、どう處置したものか躊躇せぬでもありませんでしたが、私は遂に決心しました。私が、何故に前科者と知りながらもお千

代さんを山田さんの家にお世話したか、お千代さんといふ女性が、どんな美しい、そして同情すべき女性であるかを殘らず、私の知つてゐるだけを云つてしまふ時が來たと思つたのです。

で、私は奧さんに申しました。

『奧さん、お腹立ちはお尤もです。申されるまでもなく、お千代さんは、前科者、この穢、監獄を出た女であることも事實です。併し、前科者と知りながら、何故、私が、あの女をお宅にお世話したか、あの女を解雇すると申される以上、私、何事も申上げてしまはうと思ひます。奧さん、お千代さんは、奧さんの思つてゐられるやうな決して八年の刑罰に値するやうな罪を犯した女ではありません。寧ろ賞讃すべく同情すべく美しい魂の女なのであります。』

『わかつてゐます。妾、何もかも、すつかり、あの女の昔のことは聽きました。あなたの仰らうとなさることは、あの女が、私生兒の父親の名を申さなかつたことでございませう。その男の名譽のために犧牲となつたのを美しいと云はうとなさるのでございませう。』

『あゝ、奧さん、今、あなたは、犧牲といふ言葉をお使ひになりましたね。さうです。あの女の身體と魂とは全く、その言葉に盡されて居ります。さうです。あの女は、男のためにも、犧牲となりました。その男といふのは、現在も猶、千葉の教育界に相當名を知られてゐる妻もあり子もある人です。私は、その人の地位を傷けたくありませんので、今茲で、その名を申上げることは避けますが、その人は、自己の地位を利用し、甘言を以て一小女教師であるお千代さんを自由にしたのでした。そして、お千代さんが身重になつたことを知るや、恐愕色を失ひその後、彼女を顧みず、お千代さんが、分娩のために東京の深川へ隠れに行く時、若干の金を渡したのみで、お千代さんに、絶對に、子の父親の名を口外せぬやう誓はせたのでありました。お千代さんはその通りをしたのです。どんなことがあつても、その人の名を口に出さなかつたのです。』

『梅野さん、それだから、あなたは、同情をしてくれと仰るのでございますか。そしてあの女に暇を出さないでくれと云はれるのでございますか。いえ、それは、いけません。如何にあなたのお頼みでも前科者を片時も家に置くことはできません。子を殺すやうな、我子の喉を締めるやうな恐ろしい……いえ、どうか、梅野さん、すぐに引取りにいらしつて下さいまし。お願ひでございます。』

『いえ奧さん、どうぞお聽き下さい。私のお話申上げねばならないことは、これからなのです。それは、あなたにも極めて關係の深いことなのであります。あなたは、今、あの女の過去を殘らず聞いたと仰いましたね。では、御存じであ

りませうが、お千代さんは、深川から千葉への歸途を蒸氣に乘つたと警察で申立て〻居ります。そして、汽船の中で思ひ惱んで、遂に我子の喉を締めて窒息せしめ、屍體は海に投じたと申立てました。併し、奥さん、それは、事實ではないのです。お千代さんは警察で全然虚僞の陳述をしたのでありました。蒸氣に乘つたのではなく、汽車に乘つたのでありました。けれども、嬰兒を抱いて千葉町へ歸れなかつたのは事實です。死を決したのも事實でした。途中或驛で下車し、子を抱いて海に投ずるつもりで、或る海岸をさまよひ歩いたと云ひます。其夜は美しい月夜であつたさうであります。共に死なうと覺悟は決めたものの、月の光に照らし見れば、傍に、無心に眠つてゐる我子、どうして殺すことが出來



ませう。自分が死ぬのは、敢て厭はぬけれど、この子だけは、どうにかして、永らへさせ度いといつて、千葉へ連れては歸られず、思ひ惱んだ末に、不圖、思ひついて、あの女は、その子を海岸の或る別莊の門前に捨てたのでありました。』

『えつ、その別莊と仰るのは、何處なのでございます。

私が、こゝまで話し來りますと、奥さんは顔色を變へてその海岸の名を訊かれたのでありました。

『その海岸でございますか？ それは、東京と千葉との間にある避暑地、海水浴場と申せば多分その別莊が何某の別莊であつたかも、もう奥さんには、おわかりのことゝ思ひます。でお千代さんは、其夜一睡もせず、海岸の松並木の中で夜を明かしたと云ひます。翌朝、別莊の前を通つて見ると、女中さんが牛乳を買つて歸るところだつたさうです。其時ばかり、奥さん、お千代さんは、兩手を合せてその別莊を拜んだと申します。我子が、この良家に拾はれて、幸福に育てられるかを思つた時、お千代さんの喜びは、どんなでありましたでせう。その、我子の幸福のためならばどんな犧牲を拂つても厭はぬと心を定めたのもその時でありました。それなればこそ、警察でも、子を殺したと申立てました。屍體は海に投じたと陳述しました。そして、我身は、八年の刑を受けて獄屋へ喜んで行つたのであります。私生兒として、世の日陰者として、貧しい一生を送らねばならない我子の身替りと思へば、それしきのことは、お千代さんにとつては、なんでもなかつたのです。何といふ切實な母！ 悲壯な母性愛でありませう。私は、この告白をお千代さんから聞いた時、人の子の母といふものは、それほどまでに、子のためを思つてゐるものであるかを如實に見せられて、淚と共に自づと襟を直したものです。奥さん、お千代さんは、最も憎むべき母として處刑されました。しかし、事實は、母として、最上位に置かるべきではないでせうか。あの女の前科は、褒狀に値するものです。あの女は、何も、法律上の罪を犯したのではありません。どうか奥さん、前科者などと仰らないで、末長く、お千代さんを、美代子ちやんの婆やさんとして、置いてやつて下さいませんか、どうか、お千代さんを幸福にしてやつて下さいませんでせうか。申上るまでもなく、その別莊といふのは、お宅でございます。』

皆さん！

私が、未決監に、お千代さんを訪ねて告白を聽いたといふ秘密は、以上の通りであります。その後八年の間、私の胸一つに納めて誰れにも、口外したことはありませんでしたが、右のやうな事情の下



に、遂に山田の奥さんに明かしてしまはなければならないことになつたのです。

こゝまでお話しすれば、恐らく、皆さんも、お千代さんが入獄してから、私が、山田さんに交際を求めた理由もおわかりでせう。また、每月、入獄のお千代さんに書き送つた手紙の內容もお察し下さるでせう。勿論、それは、美代子ちやんがどんなに幸福に成長して行くか、その折々の消息なのでありました。そして、お千代さんを、山田さんの家の婆やとして、お世話した私の心持もおわかり下さるだらうと思ひます。

それ等、總てのことを殘らず、語つてしまひます間、山田の奥さんは、ハンカチを眼に當てゝ聽いてゐられました。

『梅野さん、何も申しません。どうぞお許し下さい。お許し下さい。』

奥さんは、さう云つてお泣きになりました。

『奥さん、許してくれとは何を申されます。私の方から、お禮を申さねばなりません。美代子ちやんを我が子も及ばぬ程、愛しお育て下さいましたこと、お千代さんに代つて私からお禮申上げます。美代子ちやんは、ほんとに、幸福です。』

それから、奥さんは、其日、晩餐を上げるから是非、來てくれと云つて、私を稻毛の別莊へお連れなさいました。

其夜の晩餐！　山田夫婦と私と婆やさん四人は、可愛い美代子ちやんを中心に、食卓を圍んで、奥さんが、腕力をかけて、こしらへなさつたご馳走を、どんなに樂しく、お美味しく頂いたか、想像して下さい。私は、自分の事業が完成した祝賀會のやうな氣持ちがして、思はずビールの杯を重ねたものです。

申すまでもなく、お千代さんは、お孃さんの家庭教師として、婆やさんとして、永久に、山田さんの家に留ることになりました。私と奥さんとの話の一件は、お千代さんには知らせないことにしてゐます。よし、そのことが知れることがあつても、厚意と厚意を持合つた美しい感情の人々の間に何事も起らう筈はないではありませんか。私は、そのことについて、少しも恐れてはゐません。昨今のお千代さんは實に幸福で、每日、神樣に感謝してゐるといふ手紙を寄來してくれます。

皆さん。

私の今日のお話は、これで終りであります。私は、決して、お千代さんが行つたことを善いことゝして、皆さんにお勸めするのではありません。たゞ、世間に、こんな母親があつたといふことをお話したに過ぎないのであります。實は、これは、皆さんにでなく、世の人の子達に話すべきものであるかもしれませんが、皆さんにとりましても、思ひ當られることがあらうと思ひまして、お招きにあづかつたのを幸、私の遭遇した事實談をお話した次第であります。

最後に、どうか皆さん、今宵も、床を列べて、お孃さんに、お伽噺をしてきかせて居りますであらう吾が婆やさんのために、行末の幸福と平安をお祈り下さるやうお願ひして、この話を終ることにいたします。（終）

物識りビルデング

國名ローマンス

北米カナダの國名の起原には面白い謂はれがある。昔ポルトガルの探檢隊が最初この土地へ踏込んだ時、見渡す限り大きな雪野原だつたのですつかり失望し『カナダ』(ポルトガル語で『こゝは駄目だ』の意)と言つたことから始まつたさうである。

體格で氣質が判る

人間には生れながらに縱に延びる人卽ち『長い型』と、橫に廣がる人卽ち『幅廣型』とあるが、心理學者の研究によると『長い型』の人は概して理想主義で、氣むづかしやで、底意地が惡く、『幅廣型』はこれと反對で概して現實主義で、快活で、おしやべりださうだ。またこれを生理學者の研究に見ると『長い型』は他の多くの點で劣つてる代り腸だけは非常に強く『幅廣型』は腸が不活潑ださうだ。

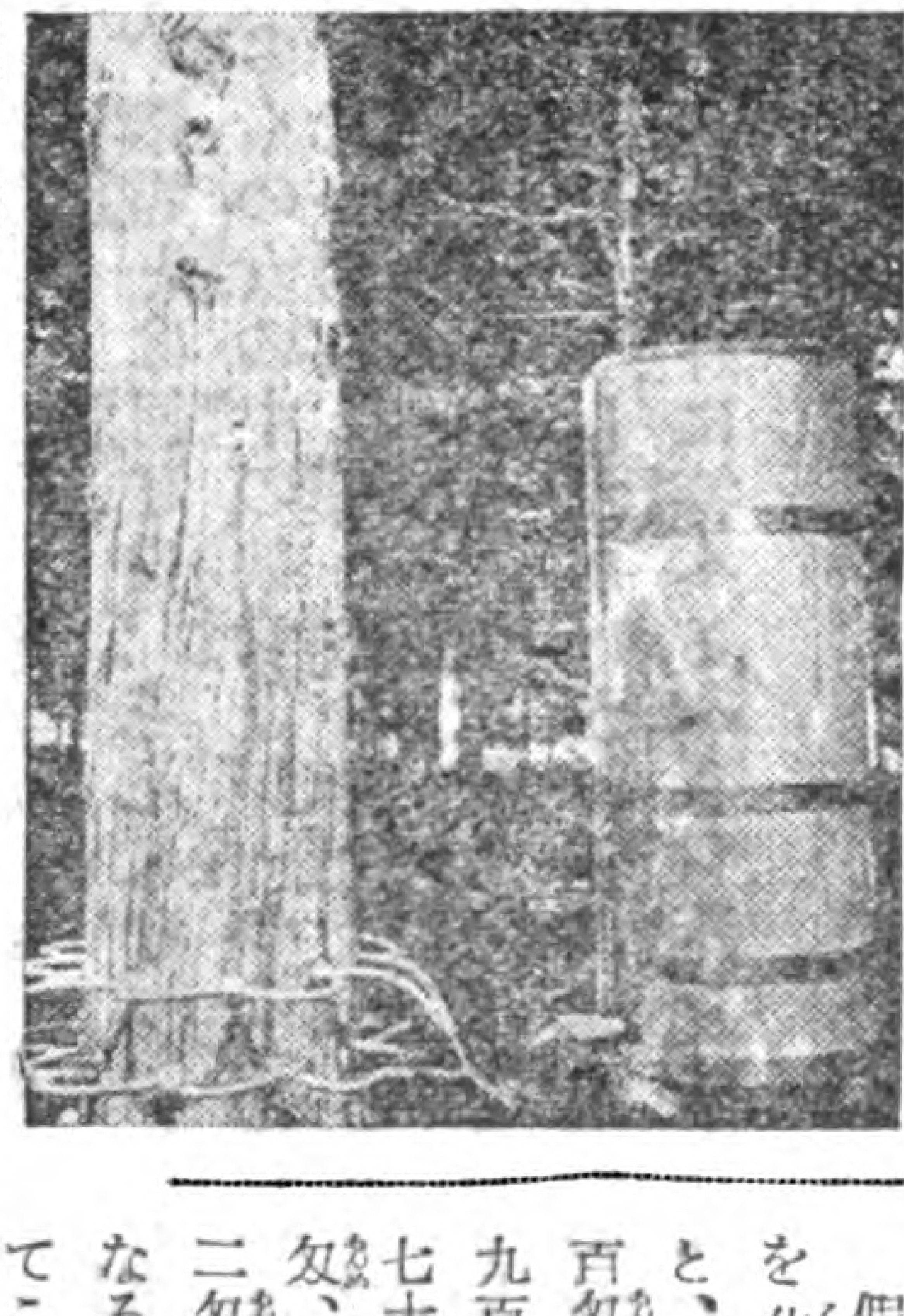
バターの始まり

アラビヤ人は古來、沙漠を旅行する際、必ずミルクを革袋に入れ駱駝の背につけて行く習慣があつた。ところが駱駝はゴクリゴクリと胴體を搖りながら歩くので、飲み殘したミルクが炎熱や震盪の加減でいつか革袋の中でバターになつた。

それを機縁にミルクを入れた革袋を駱駝に背負はせてそこらを歩き廻らせたり、またその革袋を何かの上で打ち續けたりしてバターを造ることを發明した。初め彼等はそれを膏藥代りにしてゐたさうだが、これが今日の食料バターのそもそもの初り。

電氣仕掛の發射

最近オーストリアの一發明家が、小銃の發射を迅速にするため電氣を應用して發射する裝置を工夫した。從來の指頭發射では十分の一秒以上速いわけには行かなかつたが、これによると千分の一秒で發射されるさうだ。



木工界の革命 →

最近米國では立木に各種の藥品や染料を注入して耐火、防腐、防虫、着色等任意の材木を製して多方面に應用してゐる。丁度人間が保健上乃至は治療上注射をやるのと同じ理窟で木工界の一大革命といふべきである。尤も我國でも生材染色法の特許權を得てゐるが、外國のやうに完全に工業化して重要貿易品とまでなつてゐるほどには未だ普及されてゐない。

人間一人の値段

假りに體重十五貫の健康な人間を化學的の元素に分解して見ると、水分九貫五百匁、炭素二貫三百匁、水素一貫三百五十匁、酸素九百匁、窒素四百十匁、石灰二百七十匁、燐百四十匁、加里五十匁、硫黃三十匁、ナトリウム二十二匁、鹽素二十二匁、鐵分六匁となる。尤も右は概算であるが、さてこれ等を時價に換算すると驚く勿れ人間一人の値段はざつと十圓といふことになつてしまふ。

名家百


沖野岩三郎氏


河井醉茗氏

甚だ不思議なる事實

沖野岩三郎

夫婦とは何ぞや、結婚とは何ぞや、そんなむづかしい事は知らないが、多くの男の中の私と、多くの女の中の彼女とが一つの家に棲んで、兎に角三十年間を過して來た。其の長い年月の間に私は彼女を嫌になつた事もある。彼女も私を憎く思つた事があらう。しかし私達は世界中で最も相助け合ひ相憂ひ合ふ二人である。『一體これはどうしたわけか』と問ふ人があつたなら、私は『甚だ不思議である』と答へる以外に答へるべき言葉をもたない。

實力

河井醉茗

人間五十の坂を越えるまでは、他の力に負けまいと無理にも力を出して蹉跌く人が多い。五十を越えると高いものは高いもの、低いものは低いものと他の價値が分ると同時に、自分自身の價値も分つて、持つてゐるだけの力を表はしてゆくだけで滿足するやうになる。

帝廟の瓦

新妻莞

北平から一泊の旅、明の十三陵に詣でる。國やぶれて山河あり、まことに星霜幾變轉、これが帝廟かと、呆るゝ荒れやうであつた。茫々たる草の間から現

字文



新妻莞氏



中村吉藏氏



西條八十氏

はれた乞食のやうな男、早口に、何やら喋つたかと見る間に、ひらり姿を隠したが、見ればそこな樓閣の屋上にあり、禁斷の黄瓦を剝ぐべく夢中である。帝廟の瓦、今は異國の旅人に賣られて、草莽の民の一椀の粥となる。時勢である。

大象の如く歩く

中村吉藏

右岸から曳つ張る力と、左岸から引つ張る力とが平衡して、急流を遡る船はまん中の安らかな水路を航走する、若し一方の岸でばかり引つ張つてゐたら忽ち淺瀬に乘上げて擱坐するだらう、その意味では右傾派と左傾派との對立は必要でもあり、必然でもある、兩方から引つ張られながら現實社會は——大衆は、中正の道を徐ろに、確かな足取で歩いて行く、大象の如く歩いて行く。

ベッドと夜具

西條八十

外國を旅した者は誰も知る事だが、一夜の宿のベッドでも、ベッドには限りない親愛を覺えるものだ。それはいつでも疲れた己を溫かく待ち受けてくれる氣がするからだ。だが押入から一々取出す日本の夜具にはその親しみが無い。これには待たれるよりも、寧ろ迎へに行つて來て貰ふ感じがある。だから疲れた夕には、日本の夜具は冷たく、悲しい。



時代小說

大醜女物語

本田美禪

挿繪 磯田長秋

寢首の價三千兩

『二千兩といふと大金だ』と僧は續けた。『斯ういふと何所までも子供あつかひにするやうで、氣まづく思ふかも分らぬが、お身の今の身分では、よし貰うても要らあたりで使ひ將すことは出來んでないか』

『ところが其れが出來るんだ』と駒市は傲然と、『おらもう唯の駒市じやアねえ、苗字も馬場とつけてむらつて、馬場駒市と名乘つてゐるんだ』

『苗字までも馬に因んだところはちよつと面白い』

『で、今は立派な侍、家來も四五人は自分で見立つて、抱へることになつてゐるから、本堵に鹿兒島へ行くとなりや、其奴等にも金を遣り、其れ相應な物の具や鎗や刀や、一通り戰爭の道具を買はして連れて行かなきやならねえ』

『無理もない考へだが、然し斯んな山の中では買ひ入れることは難かしからう』

『隣村へ行つて買つて行くんだ』

『成程』といつて僧は暫く、唯か實か駒市の心の底を讀まうとするやう、瞬を据ゑて駒市の面をじつと眺めてゐたが、日に燒けた黒い手で逆さに頰鬚を一つ撫でると、揶揄するやうに莞爾しながら、『いや分つた。では二千兩熊本で受取れるやうにしてやらう』

『いつ本當に受取れる？』

『然うさのう』僧はちよつと考へてから、『是れから直に飛脚を立てゝも十四五日はかゝるから、まづ來月の初め頃かな』

『何處で何うやつて渡してくれる』

『熊本の城下外れで――宇土街道で渡すとしよう』

『難有え、奴等も聞いたらば欣ぶだらう』

『その代り註文がある』

『何だ？』

『いふまでもない話說だが、十頭の馬を引きつれて當地をそつと逃げ出す以上は、今の主人吉良殿は將來お身の敵と見て、拙り間違へば寢首ぐらゐは搔く氣で居つて貰はにやならぬ』

『其れは少し亂暴過るな』

『いや』と僧は抑へて、『お身はこの浮世を離れた矢部三界の山中にゐて、天下の形勢を知らぬから、今の日本中の大名は、みな欣んで太閤の幕下となつて忠勤を勵んでゐるやうに思ふであらうが、其れは大いなる間違だ。腹ではみんな太閤何者、隙があつたらば取つて代つて――と不敵な事を考へとるのだ』

『其んなものかな』とませた態度で耳を傾けて聞いてゐる。

『で、朝鮮へ行つて戰爭をしてゐるその間にも諸大名等は、留守居の者に吩咐けて、わが本國の領分を擴げる事ばかり考へてゐる』

『本當かい其りや？』

『うん』と僧は領き、『假令ば長曾我部の留守居の者は、四國一圓を斬り取つて、太閤の手につかない以前の大長曾我部にならうとして居る。また島津家の留守居等は、宇土の小西、熊本の加藤の領地を責め取つて、九州一圓を自分の領地にする計畫を立てゝゐる』

『でも名護屋には太閤が朝鮮征伐の本陣をする、德川前田などといふ大々名を側に置き頑張つとるといふではないか』

『其れは然うだが、各大名共國元の領地はみんな人數が少なく、空屋同樣になつてゐる。其れに太閤にした許で、有りつたけの軍勢を朝鮮征伐に出してゐるから、内地において謀叛を起して、鬼のゐぬ間の洗濯を企ろむ者があつたところで、討手の軍勢は向けられぬ。其所が付目で、諸大名共に留守居に吩咐け、空巣狙ひをさしとるわけだが、その中でも島津家は、尤も大がかりにやつてゐるので、空巣狙ひの大將には、義弘公の伯父君、郡道院歲久入道晴蓑といふ人の腹心、湯の尾の城主、梅

北宮内左衛門盛定、同舎弟民部の兩個が撰まれ、數千人を引き連れて、まづ加藤家の領地たる佐敷の城から責め落す手筈がちやんと出來てゐるのだ』

『面白いな其りや』駒市は身を入込ませて、稚氣滿々の圓顔を輝かしながら漫にいつた。

『また東郷甚右衛門といふ晴蓑入道の股肱の勇士は、小西の出城八代を責め取ることになつてゐるので、爰一ケ月と經たぬ間に、南九州は又候ふ元龜永祿の昔に返つて、大戰亂の巷となるのだ』

『面白いな其りや！』

『だが今もいふとほり、鬼のゐぬ間の洗濯戰爭だ。空巣狙ひの行りッこだ。素捷い奴が勝を制する。強い連中には手柄は爲勝ちだ。お身も幸ひに吉良家を逃げ出し、大々名の島津家の家來となつて思ふ存分、出世の出來る身分になるのだ。その隨身の手初めに――今いつたやうに加藤家の客分として濱町の城主となつた今の主人の寢首を搔いて行つては什うだ』

『つまり行きがけの駄賃にだなア』

『然うだ』

『面白い、行つてこまさう』

『だが其方は容易にや行くまい』

『なアに多寡の知れたる泥棒ツ子、おら然うと行つて見せるよ』

『では其れで話談は極つた』

『待つた』駒市は冷笑しながら『二千兩は馬の値だ。主人御夫婦の首代は一體いくらくれるんだ』

『拔目のない事をいふ奴だ』

『當り前だよ』

『然し首の事は誰かれも俺は頼まれてはゐないので、いはゞ唯この場の座興に、試しにいつて見たゞけの事』

『嘘をつけ、お前は鹿兒島の間者だろ』

『何ツ？』と侍は驚きかけたが、不羈奔放、亂を欣ぶ自然兒の不敵な意志の歷々と現はれてゐる面を見ると、體を搖すつて破顔しながら『はゝゝゝ好ういうた。野僧の駒も同樣な餓鬼には感心な眼力だ』

『馬迦にすると肯かねえぞ』

『いや怒るな』今まではたゞ煽動と教唆に努めてゐた怪僧の態度はからり變更された。駒市などは眼中にないかのごとく、傲然と物云ひまでも尊大にした。『然う悟られては止むを得ぬから今は何も漸もいつて聞かすが、身も晴蓑入道の腹心中の一人で、大竹典膳といふ者だ』

『然うだらう、其の樣子では熊本の城下外れにでも忍んでて、加藤家や小西家の家を窺つてゐるんだらうけど、その變化家はどんな者かね』

『妙光寺といふ寺にゐるのだ。熊本から南へ向つて、宇土街道を二里ほど行くと、川尻といふ町がある。その町外れの寺だから、夜中でもすぐ分る。また四五人の同志が居つて、鹿児島との聯絡を取り……。いや、兎も角も然ういふ事情で、その妙光寺を根據地として大事の計畫を行つとるわけゆゑ、いつお身が吉良殿夫婦の寢首を掻いてまゐつても、すぐ安全に鹿児島へ落ちられるやうに手筈をしてやる』

憂慮さるゝ大難産

『で、首代はいくら出すんだ』駒市の方は單純だ。相手は何であらうとも、逃込む許は何處であらうと、取引さへ確實に出來れば好いといふやうな面色をしてけろりとしてゐる。

『夫婦で二千兩出すとするかな』

『其れは安い、もう千兩奮發まにや駄目だ』

『馬と首で五千兩か』

『然うだ』

『慾をかわくのは好いけれど、本當に巧く行れる積りか』

『うん』駒市は眼を光らしながら、『馬の方は家來に吩咐け、先へ今お前のいつた妙光寺とかへ牽かしてやつとく。首の方はおら自身で掻いて、鹿毛へ乘つて持つて行く。なアに多寡が八九里の道、一時の間に飛んで行けるさ』

『だが、餘程巧く行らんと、然う何も斯も一時に手を下すことは出來ないものだぞ』

『其れは無論だ。馬の方は兎も角も、御主人夫婦は人間だ、其れに大勢の家來もついてゐる。寢首を掻くにした許で、一時の間に兩個の首を打斬ることは樂じやアねえけど、何とか其所は工夫をするさ』

『巧く行くかな』

『大丈夫、行かねえ時ア捕つてこの素首を斬られるばかりだ』

『その度胸なら行くかも知れぬ』

『其所で手附としていくらかくれろよ』

『金か』

『無論だ』

『好し』

出したのは百兩包だ。

『はゝゝゝ何で金儲けをするか分らぬものだな』駒市は相を破つて、山吹色の百枚を黒い掌上で算へ一見ながら、『[illegible]ゑ、侍にはなつたけど、主人の家は新世帶、其れにまだ運上を集めてゐねえものだから勘定方はひい〳〵で、知行は名ばかりで貰つてゐねえ。小判といふものを握つたなおら生れてから今日が初めて、好いもんだなア金といふ奴ア！ 見てゐるばかりでもぞく〳〵して來る』

『其んなに金が嬉しいか』

『當り前よ。命がけで戰場へ出て、手柄を現はして大名になつても金がなくつちやア家來は膝斗抱へられねえ、また思ふやうな榮耀も出來ねえ、金さへありやア何でも出來らア』

『成程なア、餓鬼にしては老せた考へ。その考へで行つたらばまア大概はゆくだらう』

『では是れで今日は別れる』駒市は算へた小判を、また元のやうに紙に包んで內懷中へ捻込むと、つと起上つて老樹の幹に繫いでおいた愛馬の手綱を兩手で悠々と穩解き初める。

その有樣を怜悧は微笑みながら默つて見てゐた。渠は何者？自身では薩摩の間者、情義入道の股肱のやうに吹聽をしてゐるのだが、その實は阿蘇家の忠臣――いや其れは今爰では說くまい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

愛妾早苗は、主人雅樂之介の居方に續く局の中に設けられたる產褥に身を橫へてゐる。今曉來の陣痛に、もうへと〳〵となつたくらゐに身を苦めてゐるのだが、金內の名產婆お貞を呼びにいつた駒市が、いつまでしても歸つて來ぬので、周圍にあつて介抱してゐる典醫を初めお附產婆や、愛妾付の女中等は起つたり居たりして自烈てゐる。初產である上に、先月以來二度も三度も產氣づいては中止して、その度每に難產を豫想せしめた分娩が、今日のは特に難かしく、有ゆる惡い兆候が次第に濃厚に見えて來るので、周圍の者は氣が氣でないのだ。

雅樂之介も初めの中は、產室にゐて何呉と看護の指圖してゐたが、殆ど七轉八倒をして悲鳴を揚ぐる產婦の聲には人一倍に苦痛を感じて、終には聞くに堪へずして自分の居間へ逃げ歸り、其れぎり顏を出さなくなつた。

その中にあつて尤も苦しい立場に置かれたのは小雪であつた。側室の產む子にもせよ、夫の胤である以上、吉良家の大切な和子である。で、心では女中等と共に看護の勞を執り、斯ういふ時に夫に對するわが眞情を見せようと躍起となつてゐるのだが、極度に神經の昂奮してゐる產婦の胸を忖度すると、其れは迂濶には實行されない。據なく外にゐて、出來得るだけの注意を拂ひ、與へ得るだけの便宜を與へて、是非好結果を得さすやう考へながら間接に立ち働いてゐたのであつた。先月以來態々根本から呼び寄せてある產婆の手腕を、信賴するに足らざるものとし、金內村の名產婆お貞を呼ぶ事にさしたのもかの女の心盡しであつた。

で、駒市が迎ひに行つたと妹尾仁右衛門から聞いた時には、かの女は太く欣んだ。『駒が鬼眉毛で飛ばせたら瞬く間に歸つて來よう。事によるとお貞とやらを鞍の前輪に掻き乘せて、一緖

に連れて來るかも分らぬ』然う考へて周圍の者等と共に安心して待つてゐた。が半時と經ち、一時と經ち、一時半と經ち、二時と經つても、一向駒市は歸つて來ない。其所でまた仁右衛門を金内村へ飛ばせると、渠は一時して歸つて來たが、その復命は意外であつた。馬場殿（駒市の姓）は最前見えられ、婆を馬に乘せてお連れなすつた。もう疾に城中へお歸りになつてゐられる筈だと、家内の者は然ういつて寧ろ驚いてゐたといふのだ。

『其れは可異い、まだ駒市は戻つて居らぬ』『どうしたわけで御ざいませうかな』『ではもう一度行つて見や、途中にようく氣をつけて』『はッ』といふと仁右衛門は再び馬を飛ばして行つたが、暫くして歸つて來ると、途中では勿論會はない、何所を探しても馬場殿の姿は見えない



といふやうな奇怪な報告をしたのであつた。

その中に日は暮れる。

産婦はもはや苦痛に堪へかね、假死狀態に陷つてゐる。疲勞のために脳中油のやうな汗を掻き、綿のやうに瞑目してゐる眼蓋を漏れる睫毛の尖さへもうぴりゝとも動かさずにゐる。たゞ猛烈なる陣痛の來た時ばかりびく〳〵動いて、食ひしばつた齒の間から悲鳴を細く漏らすばかりだ。その中にまた時刻は經つて、五つの鐘が鳴つたのに、駒市は尚ほ歸つて來ない、いふまでもなく追ひかけ〳〵捜査の人は出されたのだが、其れはみな徒勞に屬して少しも消息は分らないのだ。

九つ近くなつた頃、大負傷をした駒市が、血みどろになつた老婆の死骸を馬に括りつけて歸つて來た。その辯解するところによると、駒市は金内でお貞に會つて、來意を告げて馬に乘せ、一直線に歸途に就いたが、杉木村の難道へかゝつた時に鹿毛が荒れ出し、あなやと思ふ間もなく、人馬共に左方の崖下へ眞逆樣に轉落をした。傷はその時に負うたのだが、打所が惡かつた爲めか人事不省に陷り、人心がついて四邊の樣子を眺めた時は夜中と覺しく、眼に入るものは黑暗々、果して何處に居るのやらその場所さへ分らなかつた。で、驚いて這ひ廻はり、手探りにして調べて見るとお貞は既に慘死してゐた。口笛を吹くと馬鹿毛がのそ〳〵此處へ寄つて來た。其んなわけでお貞の死骸を鞍にしつかりと括りつけ、不氣味な荷物を彼方此方へと彷徨うた揚句にやつと往來へ出て、今、恥面を拭ひもやらずに歸つて來たといふのであつた。

不安焦燥杞憂の一夜

餘人ならば兎も角も、破格をもつて騎馬奉行に拔擢された馬術の達人、怪童駒市の不覺としては、信用されぬ話説であつたが、事實なら止むを得ぬので、小澤等はたゞ苦笑で濟ました。

が、濟まされぬのは早苗の産だ。八つ頃からは足だけが出て、苦痛は一層激烈となり、放つて置くと母子共に危險な狀態に陷つて行く。今は荒療治をする外には、この難産を曲りなりにも解決をする法はない。和子様は諦めて、御産婦だけなりと救ひたい。然うした密議評定が周圍の者にされ出してゐる。そのくらゐだから産婦の悲鳴は絶望的の哀調を帶び、低く物凄く絞り出される。其れは實に斷腸の聲！　雅樂之介は産室と自分の居間の間とを、火のつくやうな不安に驅られて、夢中になつてうろ〳〵してゐる。

もう斯うなつては成行に任せるよりは仕樣がないので、小澤も遂に匙を投げ、自分の居間へ引取つた。だが眠りには就かれない。假令どんな變化が起つて、主婦としての自分の責務を執らねばならぬやうな悲しい事態に直面しないとも限らない。

で、かの女は樣に行燈の灯を常よりも大きく燃させ、お袖を誑話餌にしながら机に倚りかゝつて起きてゐた。

が、お袖の方は大歡びだ。隙を見て打斬つて、わが薄幸なる主人のために寃を除かうと考へてゐたその怨敵の必死の難産、勿化の幸ひでなければならない。從つて驟市が、迎ひに行つた名產婆を死骸となして連れて歸つた大失敗に對しては、かの女は滿腔の謝意を捧げた。『まア、何といふ氣の利いた過失をしてくれたんだらうね、馬に乘つては綱渡りでも爲さうな驟の名人が、いかに難道を走つたからとて、誤つて谷底なんかへ轉がり落ちる筈がない。是れは神樣のなすつた仕事だ。この樣子では狐めはお產で必と命を取られる。お目出度い、お目出度い！斯んな嬉しい事はない』などといつて雀躍してゐた。で、今奥方が分娩の結果を氣支うて起きてゐる眠氣ざましの伽をするその間にも動すると早苗攻撃の言辭を弄する。かの女の胸は難產を欣ぶ情で一ぱいなのだ。

『喃え奥方樣、あのまゝで狐めが、目を白くしてくれますと、殿のお心も本性におなり遊ばすで御さいませうから、袖は嬉しくてなりません』

『惡な事をいふものでない』小雪は色を作して窘めた。『早苗の事は兎も角も、生れる和子は殿のお胤で、當家のためにや大切な子であることはいふまでもない。また殿の御所行も、先月からは惡夢からお覺めになつたやうにお改めになり、加地を供に裏山へお入りになつて、劔道修行に御出精になつてゐられることは、和女も知つてゐるではないか』

『其れは存じては居りますが――ふむッ！』お袖は思ひ出し笑ひをしながら『那れは小兒の戲れで……。第一那んな生温いお氣込でしてゐらつしやつては、千年經つても一人前のお腕にはなりはいたしませんよ』

『和女はお稽古の現場を見たのか』

『へえ、遠くからこつそりと……』

『聽分けのない』小雪は厭な顏していつた。『折角のお思ひ立ちじや。決して隙見などいたしちやならぬと、那ほど堅く申して置いたに』

『でも貴女、氣になりますので……。勿論手前一個でまゐつて、立樹の蔭に忍んで、拜見いたしたので御さいますが、其れはもう可笑いの何のといつて莫迦々々しくつてお話說する事も出來ません』

『什ういふわけでの』

『でも貴女二つ三つ、太刀でお打合ひなさるかと思ふと直にお止めあそばし、お頭を撫でてゐらつしやるので、什うなすつたのかと思つて見ますと、お兩個共にお頭に瘤が出來たのを醫いてゐらつしやるので御さいますもの』

『でも最初には誰にしろみな其のやうなものではないか』

『けど貴女お兩個樣のは――ほゝほゝゝゝもう止めませう。殿下も仰せなすつたやうに、殿は生れつきお蒲柳な質、よくよく御鍛練あそばさなければお役に立ちはいたしませんよ。其れにあの加地といふ方……。那りや何なので御ざいます。殿が御朋輩同樣にしてゐらつしやるお人ですから、袖は成るべくは惡口は申したくないので御ざいますけど、動すると變な眼で手前を御覽なすつては……、もう〳〵考へても腹が立ちます。斯う申しては何ですけれども、一體殿下ほどの偉いお方が、どうして那んな柔弱な、腰拔ばかり左右においてお愛しなさるので御ざいませうかね』



『…………』小雪は不快さうに頭を垂れた。お袖は何の考へもなく、思つたことを正直に告白したに過ぎぬのだが、かの女には單純に然う解ることは出來ぬのだつた。

だが秀吉が什ういふ氣持で、この武士としては多くの期待を掛けがたき者を左右に集めて寵愛をしてゐたにしろ、大雅樂之介は源家の嫡流吉良家の再興を謀るため奉公をしてゐたもので、自分のやうな化物と祝言することを承諾したのも、必竟其れがためだつた。たゞ秀吉の怒りを買ふのを恐れたゝめに相違なかつた。が、何にせよかの女に取つては、其れは感謝すべき事柄で、献身的の眞情を捧げて酬ふべき事でもあるので、その考へで仕へて來てゐた。『いかなる恥もじつと忍ばう、いかなる苦痛にも必と耐へよう、要はたゞ弱い夫を強い武士として戰場へ送り出すやうにするにある。其れには何を放つて置いても、夫に武藝鍛練の氣を起すやうにさせねばならぬが、其れとても性急に然うおせがみをするのは好うない。潮滿ち來れば自から船は港から出る筈だ。まア當分はお氣のまに〳〵におさせ申して置く方が却つて上策であるかも分らぬ』然う考へて長い目で夫の行跡に注意してゐた。其所へ意外にも裏山へ入つて斯々との密告を得た。其れはどのくらゐかの女に取つては嬉しい事であつたらう。『妾に指南受けるのをお恥ぢになつてお獨りで御修行なさるのに相違ない。無理もない思召！　男子としては其程の強いお覺悟がなうては愜はぬ。案外お見上げ申した御性根……』と思つて狂喜したのであつたが、然しその心の底には、淋しいもの〻ないではなかつた。『矢はり何所までも妾の事をばお厭ひになつてゐらつしやるのだ。妻としてお側へ召すのをお厭ひなさるのは兎も角も、武藝御鍛練のお相手として召される事は何でもない筈！　其をさへお厭ひになる、お強顏いにも程がある……』然う考へると耐らなかつたが、何にせよかの



女に取つては、豫期しなかつた嬉しい報告！　この模様では追々と何かにつけて好い方へお變りなさるのに相違ない。まアもう少しの辛抱だ。然う考へて自から慰め、希望を將來に懸けてゐた。で、今のお袖の言葉も、かの女は無論適評として聞くには聞いたが、嬉しいものでは決してなかつた。

　このとき次の間の襖が開いて、閾の外へ何者か兩手を支いて平伏したので、小雪は屹と見ながら訊ねた。

『誰じや？』

『駒市めで御ざります』

『まア今時分案内もなく……』お袖も屹と見ながら詰つた。

呪咀調伏の藁人形

　その眼の前へ膝行して來て、行燈の灯の圏内へまた改めて平伏したのは、前髪立ちの自然兒駒市、渠は顔面の傷痕へ四ケ所も膏藥を張つて居り、左手の手首には仰山に布の繃帶を卷きつけてゐる。

『何しに來やつた』小雪は強く重ねて訊ねた。

『は、一大事が御ざりますだで……。不意に上つてはならねえ所と知つて居りながらやつて來ました』

『什ういふ事がの』

『是れを什うか御覧下せえ』差し出したのは白紙包みだ。

『まア、お金ではないのかい』怪しみながらお袖は見てゐる。

『然うでがす』駒市は主人の様子を氣支ふやうに一瞥して『から一が其れは手付で、後四千九百兩、受取る事になつてゐますだ』

『什うして其んな大金を？』

『而て何者から受取るの』と訊ねたのはお袖であつた。

『何でもねえ事を企らんでゐる馬鹿野郎から受取る事に極めてまゐつたんで御ざりますだが、奥方様！　掻い摘んでお話し申しますと、まア斯うなんで御座ります』渠は金内へ名産婆お貞を呼びに行く途中において遭遇をして怪僧との掛引の事を逐一話した。

　阿蘇大宮司の一族初め、肥後一國に潜伏してゐる兇徒の事は聚樂邸にて秀吉からも聞いて來たので、其等の者が諸大名等の外征中を奇貨として、謀叛を企てゝゐるといふのなら、別に驚きはしないのだが、厚き信任を太閤から受け、戰地にあつて諸大將等の魁をして奮闘してゐる島津、長曾我部の留守居等が、さる理由なき内爭を企てゝゐるといふことは信ずべき限りでなかつた。

『誠かや其れは？』

　聽き終つた小雪は訊ねた。

「はい、その坊主めは然ういつて、歸りながら殿様と奥方様の

餌を撒くやう、おらに頼みまして御ざりますだで、おらもまた欺された顏して引受けてまゐりましたが、その代りには五千兩、必と捲き上げて御覽に入れます』

『手付を出したところを思ふと、眞さら噓とばかりもいへぬが、然し汝は大金を騙り取つて何にする氣じや』

『奥方樣に差上げますので』

『何？』小雪は驚いて側にゐるお袖とじつと面を見合つた。

『斯ういふと駒市風情が、出過ぎた眞似をするやうで、相濟まんので御座りますだが、おら先達軍師から聞かされた事が御ざりますので、失禮ながら五千兩、いや千兩でも構はねえ、お役に立つやうな金を儲けて……と考へたので御ざります』

『加々爪殿から何を聞いたの』

『待ちや』と小雪は抑へた。

改めて問ふまでもない、軍師としての加々爪の語つた許は分つてゐるのだ。今新しく領地に就いて、領民からは一文の貢租の徴收もしてゐない。その逼迫した財政で、身代以上に大規模な居城の造營に着手した。その費用には秀吉から餞別として賜はつたあの棒狀の黃金と、加藤清正から借りて來た三萬兩を宛てたのだつたが、其れだけでは不足を感じて、未拂の分が澤山にあり、家臣に給す扶持のごときも、その一分しか給與してない。で、勘定方は火の車、この成秋に取り立てる貢租の脈を見る迄では、主人夫婦の日々の食膳にさへ事を欠く經濟狀態になつてゐる。もし優勢なる兇賊の來襲にでも會はうものなら、防禦は思ふやうには出來ない。軍師加々爪景治は、其所を考へて家中の者等に、勤儉力行を說いてゐる。戰國の武人としての氣魄の持ちやうを說いてゐる。從つてその演說中には當家財政の眞相を仄めかしたに相違ない。『子供心にも其れと悟つて……。まア何といふ頼母しい！』と思ふと熱い涙さへ出て、小雪は屹と駒市に詰問の矢を向けようとしたお袖を制止したのであつたが、金の事は兎も角も、薩摩家の留守居の者等が陰謀云々の一件は聞き捨てられぬ問題だつた。輕率には信用しがたき話說であることは無論だが、然ればとて不問に附すには餘りに事が重大すぎる。で、加々爪を密に招いて、意見を聞いた上で熊本へ急使を立てる方が好いかも知れない。話說の模樣では駒市を誘惑をした怪僧は、あの小倉にて立會つた老士の樣な氣がしてならない。もし然うなれば豫めその對策を講じて置かねば……！などと考へに耽つてゐると、夫雅樂之介が荒々しく廊下を踏み鳴らして入つて來た。

小雪は太く慌てながらも夫の顏色を窺つた。早苗が死亡したのでは……？と思つたからだが、然し事は意外であつた。

その鼻先へ雅樂之介は噛みつくやうな怒號を浴びせた。

『雪、雪！汝や憎むべき女だな』

『何うあそばしたので御ざいます』と驚きながら小雪は訊ねた。

『默れッ！』

『……』

『早苗が產を縮尻るやうに、汝や裏山の神木へ——あの忌はしき傳說のある楠の老樹へ丑の時參り爲をつたた』

『まア滅相な何で然やうな……』

『こ、是れを見よッ』

雅樂之介は齒がみをしながら、投げ出したのは藁人形、其れはこの部屋へ飛び込んで來た時から旣に渠の左手に緊と握られてゐたのだが、雅樂之介の權幕に氣を奪はれてゐたために、小雪を初め一座の者等は、つい氣がつかずにゐたのであつた。

『是れは何で御座います』

『惚けるな迂奴！』と地鞴を踏み、『汝の作つた藁人形だ。甲戌年の女——と胴中に書き、その胴中には大釘三本、手足には一本づつ釘が打つけてあつたのだ。汝が持つて行つて神木へ然うした事をしたのに違はぬ。呪咀の鬼となりをつて、早苗と共に躬の和子を亡き者にする考へで……。何と恐しい心を持つてゐた事だ。えゝッ！』と絕叫しながら、小雪の肩のあたりを蹴上げる。

『まア御前樣！』

『何をさらすだ』

と、お袖と駒市とは屹となる。



『控へや兩人』小野は驚いて咎めつけながら、夫の前へ兩手を支へて、『お疑ひのこの品は、誰が見つけたので御ざいます。どうして裏山の神木に打ちつけてあるといふ事がお分りなすつたので御ざいます』

『早苗の腰元が知つてゐたのだ。彼は先夜厠へ行く時、白衣をつけた異形の女が、頭に火のついた蠟燭を立て、裏山の方へ行くのを見たが、いさゝか思ふ仔細があるので今日までわざといはずに居つた。然しこの御難產！　先月から二度も三度も、斯うしてお苦みなさるのを拜見しては今はもう默つて居ることが出來ませぬゆゑ、何も斯も申し上げると看護の者共に告げたので、念のために裏山へ行き、探して見ると神木にこの人形が打ちつけてあつたというて孝齋が今弱の部屋へ持つて來たのだ』

『早苗の腰元と申すのはどの腰元で御ざいます』

『忠義者のあの縫じや』

『では決して虛僞をいふ氣支ひは御ざいませぬ。また孝齋にいたしましても、決して人を誣ひるため然うな事をするやうな不所存者では御ざいませんから、この人形は言葉のとほりに裏山にあつた物と存じられます』

『無論じや』



『しかし妾にはいさゝか覺えのない事で御ざいます』

『いふなッ！』と雅樂之介はまた鋭く浴せて、『縫の申すところによると、白衣をつけた異形の女は、汝の局からたしかに出た

のだ』

悲しき宣告

『で、お疑ひが妾にかゝつて……？』

『いふまでもない。汝自身の所業でなければ、袖に吩咐けてさしたのだ』

『まア情ない事ばかり！』憤慨しつゝお袖は叫んだ。『奥方様は安産の御願をお掛けなされればとて、さる邪悪な御願などお掛けあそばされるお方では――』

『黙れッ！』

『否え黙つては居れませぬ』お袖は強い反感の燃え起つてゐる眼を上げて昂然したる主人の面を睨めるやうに屹と見ながら、『また私にいたしましても、早苗殿のお腹の和子は、殿の大切なお胤ですもの、什うして其んな恐ろしい……』

『黙れ、黙れと申すにッ』と雅楽之介は噛みつくごとくに、『口では何といはうとも、雪の嫉妬、汝の僭上、身は何も斯も知つてゐるのだ。可哀想に罪もない……あれ、あの聲が聞えぬか。呪咀調伏に會はなかつたら、五體共に滿足に生れる筈の和子の體は、今その足を切られてゐるのだ。次には無理に引ッ張り出されて、胴、首、股、手と、爪を剝くやうに職々に切り裂かれて行くのださうだ。その拷問を受ける産婦の――あれ、あの聲が聞えぬか。生きながら地獄の呵責を早苗は受けてゐるのだぞ。罪もない哀れな産婦は、たゞ名ばかりの本妻の嫉妬の呪咀の的となり……。吁耐らぬ、聞くに忍びぬ。この雅楽之介の腸綿は寸斷々々になつて退けさうだ』と身悶えしながら、荒々しく室内を彼方へ此方へと歩いてゐたが、今投げ出した雛の上の藁人形に氣がつくと、足を擧げてはたと蹴飛ばし、『雪聞けッ！』と泣き伏してゐる妻の頭上をまた改めて屹と睨まへ、『この悲しみ、この怨みはどう考へても一生涯忘れることは出來ぬと思ふ。汝は身の仇敵だ！』

『……』

『で今夜茲で斷言をする。身の大切な世繼の和子を、汝の力で拵へて身に返すことの出來ぬ限りは、再び汝の面は見ぬぞよ。體は一つ城内に起臥をしてゐるにせよ、表と奥の交通は向後一層に嚴重に斷ち、いかなる事があらうとも、身の屋方へは汝の歩を踏み入れることを禁止する。勿論汝の屋方へは身も一歩も踏み入れぬ。申しつけたぞ、誓つたぞ。忘れるな雪！』雅楽之介は激しい音吐で、宣告すると踵を回して、廊下の方へつゝつと出て行く。渾身怒氣と怨みとで燃え立つてゐる其の歩は、來た時よりも一層激しく、廊下の上に荒ッぽく、跳ぶやうにして行くのであつた。

狂暴そのもの、冷酷そのもの、残忍その物を見るやうな主人

雅楽之介の後姿を、憎らしさうに見送つたお袖は何も泣き伏してゐる小雪の側へ膝け寄ると、背に手を置いて劬はりながら、

『勿論冤罪、斯うした物を作つてまでも殿のお心を迷はしまゐらせ、貴女のお身を浮かむ瀬のない淵に陥さうと企みましたは、一體何者で御ざいませうかね』

『さア……』小雪はそつと涙を拭いたが、それ以上何事もいひたくないやうに口を閉ぢ、顔を垂れて考へてゐる。

『貴女様も仰しやつたやう、あの總と申す狐の女中は、決して悪人では御ざいませんから、頼まれてもこのやうな恐ろしい事はいたしませんです。また御典醫にした許で、孰かといふと殿よりは貴女の方を大切に思つてゐる事は是れまでの所作でもよう分つてゐますし。どう考へても、このやうな恐ろしい事をする筈はないかのやうに考へられます。事によりますと殿が殊さら……』

『もう措きや』

『でも貴女このまゝで放つて置きましては貴女のお身の潔白が立たぬでは御ざいませんか』

『妾に少し考へがある』

『否え、不可ません。手前は行つてお縫を捉へて、一詮議してまゐります。御免！』

『まア待ちや』

と、小雪は止めたが、

その時はもうお袖の體は、廊下の上へ飛び出してゐた。

『奥方様！』駒市は眼を擧げて悼ましさうにかの女を眺めた。

『お〻駒市……』と小雪も窶の面を眺めた。

『厄介な事になりましたなア！』

『さア……』覆面の中に微笑を湛へた。もう眼の中には涙はなかつた。たゞ理智の氣が閃めいてゐた。

『外の事は兎も角も』

『いや』と小雪は抑へて、『殿が何と仰せにならうと、妾には覺えのない事、少しも案ずるには及ばぬが、汝が今申した一條、島津家の留守の者等が、陰謀云々の件については、軍師を呼んで今宵の中に評議を遂げておかねばならぬ。汝が今川の陣へまゐつて、すぐ來るやうに傳へて來てくりや』

『畏まりました』と駒市は急いで出て行く。

この時はもう曉天近く、鷄の聲が遠くでしてゐた。

この翌日、密書を持つた濱町の早馬は熊本の方へと飛んだ。

（つゞく）

いよ〳〵面白くなつた！　この怪賊の活躍によつて事件は益々外の方面に展開し、以下讀者をアッと言はしめねば措かないであらう。

東西笑話選

芝居

劇作家『今度の僕の芝居は如何だい?』

友人『全くよく出來てゐる。だが幕切れが不可んね。』

劇作家『ふん、どうして?』

友人『素敵に快よく見物を眠らせておきながら、あそこで女主人公がピストルでズドンと自殺するもので、皆吃驚して目を醒ますぢやないか。あそこは音のしない毒藥自殺にした方が可いと思ふよ。』



分解の惡さ

旅人渡船を呼んで大きな灘を渡りながら、

『此渡しで亡くなつた人があるね。』

船頭『誰も御座いません、私の弟が此七日前に河へ陥ちましたが、二三日經つて直に發見かりました。』

小賢大愚

ボロ――僕は今の家よりずつと安くつて綺麗な家を見付けたから引越したいんだが、どうも當分越せないので弱つてゐる。



ノロ――そりや又どうして?

ボロ――先達名刺を刷つたばかりで今の所番地が刷り込んであるから、それを使ひ切らぬと勿體ないからね。

鼾

和尚様『貴女は何うして私の說敎をきゝに御座らつしやぬな?』

老婆恐縮して『へエ、何うも私生れつき大きな鼾をかきますだで、定めし隣りの者がよく、寢られましねエだらうと思ひますので……へエ』



先方で

細君『貴方、心配にならないのですか?こんなに呉服屋の拂ひが溜つてゐても……。』

主人『なアに、呉服屋の拂ひは呉服屋の方で心配してゐるよ。』

捕虜

新任聯隊長歡迎の宴にて、新聯隊長自ら部下の兵卒に訓令して後

『まづ遠慮なく喰つて貰はう!酒も宿る敵兵だと思つてやるんだ。』

やがて、この宴會の終つた後、一人の兵卒が素早く二本のビールの壜をポケットに忍ばすのを見て、聯隊長、

『こらつ!何をする!何をしたんだ!』と咎めると、兵卒、案外平然として、

『ハイ。私は聯隊長殿の命令通りに致しました。この敵兵である酒を殺すことが出來なかつたものですから、思ひ切つてこいつ捕虜にしてやつたんであります。』



風の神

播州に風の神を祀る宮があつた。下り船の船頭が願をかけて追手風を求めた。五日六日と祈りに

祈つたが、一向吹いて來ないので、神主のところへ出かけて掛合ふことにした。

『實はお前より先に上り風の願がけがあつたので、今その方へ風が行つてるのだ。その方がすんだら、今度はお前の方へ廻すことにしよう。』



複數

教師——人の複數は何ですか?

生徒——人々です。

教師——よろしい。では子供の複數は?

生徒(やゝ考へてゐたが)——解りました。二た子。

ワンニヤンチー

犬と猫が欠伸をし乍ら話して居た。

犬『明日はいゝ日だらう?』

猫『ワン日つてニヤンの事?』

二階で鼠が『チーたちチーたち。』

醉拂ひ

氣の短い男、寢室の窓から首を出して、

『おーい、窓の下を通る奴!ガヤガヤとうるさいつたらありやしない!一體誰に怒つてるんだよ。』

醉拂ひ、窓の方を見て、

『誰と定つてやしないよ!もう自棄の八方當りぢや!こんどは一つ手前にかかつてやらうか。』



手慣し

さる裁縫職、裁縫を頼む人の持つて來た絨を少しづつ竊盗る癖があつた。或時自分の服を造つたのに、半ヤール程餘んだ。女房之を見て什麼した所由だと聞くと、



『此うい ふ鹽梅に手慣しをして置かぬと、肝心の時に忘れるかも知れぬから。』

借り一文ナシ

ある所に『一文』と呼ぶ珍しい姓の老人があつた。滑稽家で仲々の負け嫌ひ、近所の茶目公が一夜ひそかに『一文』と書いてある表札の下に『無シ』と落書した。さて茶目公が翌朝知らぬ顏で行つて見て驚いた!『一文無シ』の上に『借り』と大書してあつた。

計算

客『此の酒は一升幾らかね?』

酒屋『へえ、一圓五十錢です。』

客『ぢやあ一升貰ふとして、まづ五合注いで呉れ、……ぐーい、あゝ、うまい。』

酒屋『お代りを注ぎませう。』

客『もう不要——さてと、先刻一升貰ふ筈だつたな。するとまだ五合預けがあるな。ではその五合の代といま飲んだ酒代と差引にして呉れ、恰度帳消しだらう、あばよ。』

こいつは大變

世にも珍な吝嗇な男、友達に書面をつかはすとて、桐の葉に記しける。友達、讀み終りて後、使ひを呼び、さてさて、そちの旦那は世帶知らずぢや!この葉は結構焚きつけになる。肩をぬげ、とてわざと使ひの男の背中に返事を書きそのとめに、『御覽の後、火中々々。』



キング講座

人造人間の話

▽人造人間はどうして出來たか？
▽人造人間の將來はどうなる？

宮里富保

巴里郊外の怪盜

『はい左樣でございます。仰せの通り、全く珍らしい品でございます……』

頭のつるりと禿げた五十年配の寶石商は、こゝぞとばかり太鼓を叩く。

『――ペッギー・ジョンスといふ女優が、先達三十萬弗で手に入れたといふ百二十七カラットの世界一の青ダイヤも、これには及ばぬと存じます。』

『さう、してみると、この青ダイヤが世界一といふ譯ねえ。』

得意相に云ふのは巴里郊外に住む大富豪ド・ブリアン卿未亡人、巴里の社交界の花形といはれた美貌の持主。手にした七寶の小函の蓋を開いてじつと見詰めてゐる。

ピカリ……ピカリ……と、函の中の寶石は電燈の光を受けて、眩いばかりに反射する。

『左樣でございます。是非この品だけは、奧樣のお買ひ上げをお願ひ致します。』

寶石商は、ぺこ〳〵と叩頭をする。

未亡人の心は動いた。寶石を卓子の上に置いてじつと考へ込んだ。

その瞬間である。露臺の陰からぬつと入つて來た怪物が主客の方へ近づいたと思ふと、卓子の上の七寶の小函をむずと掴んだ。

『あッ!!』

と未亡人が叫ぶ。

『――何をする!!』

寶石商は、素早く、ズボンの衣嚢から小型の拳銃を取出すと、怪物の胸にピタリとつけた。未亡人は恐れ戰慄きながら、電鈴を押さうとする。

併し、怪物はビクともしない。

『お靜かに願ひます。私は人造機械人間です。あなた方の如何なる武器も、私のこの堅固な身體を傷けることは出來ません。抵抗は無駄です。』

明快な言葉で、しかも落着き拂つていふ。

成程見れば、たゞの人間ではない。鉛色の鈍い顏には表情一つない。落窪んだ眼窩は、まるで洞穴のやうだ。身體全體鈍い艶消しの金屬製。

ババン……

轟然たる爆音と共に、銃丸は寶石商の手から飛出した。

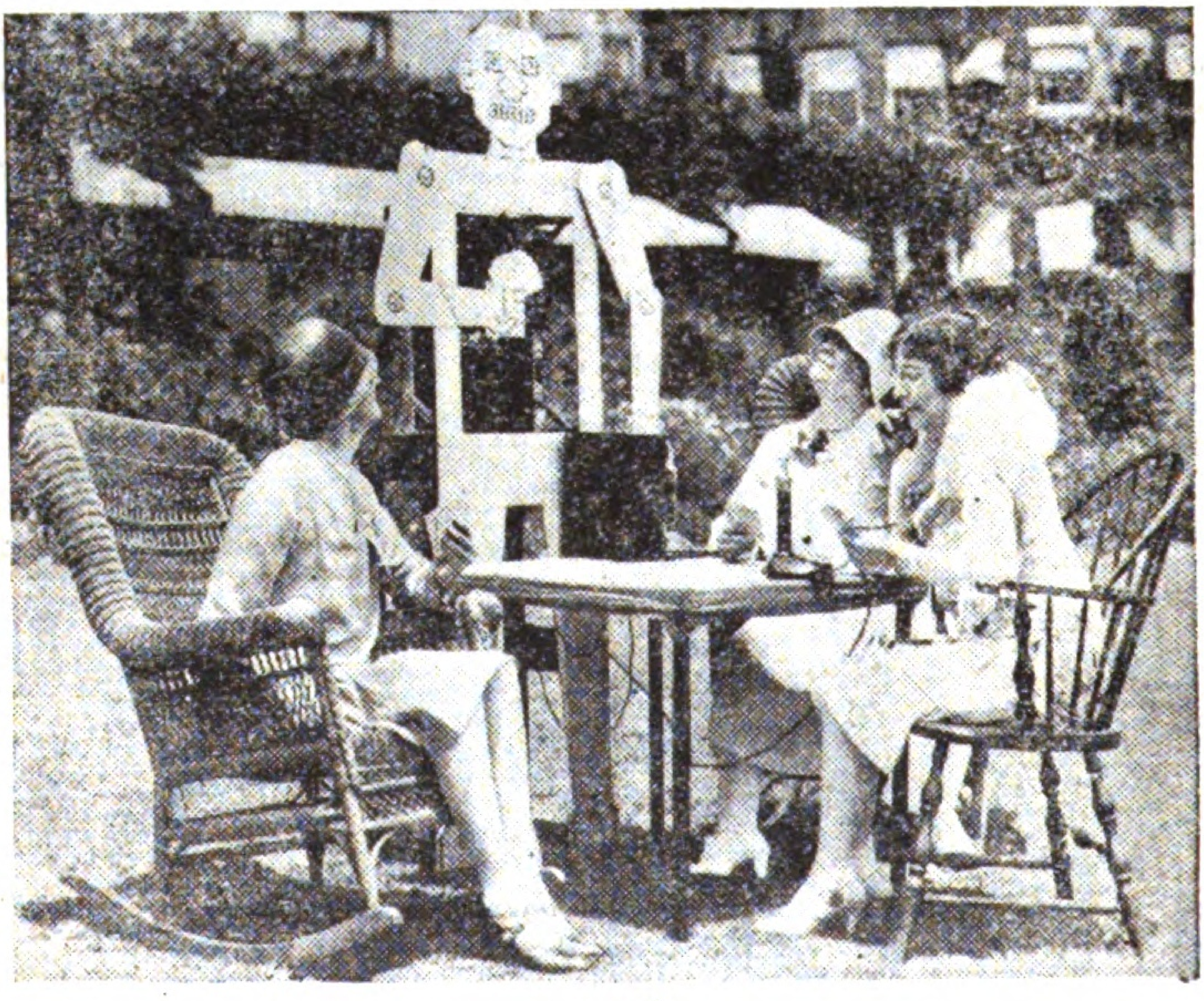
カチリ……金屬性の音と共に、銃丸は怪物の身體から外れ、怪物はのし〳〵と歩き出した。

『待て!!』

寶石商は必死になつて、怪物にし噛みついた。多勢の者が駈けつけて來て、この怪物を取卷いた。併し、怪物の冷たい身體は、ラヂオのアンテナ・ポールの如く微動だにしない。そして、數步後退りをしたと思ふと、右手を上げた。燃ゆるが如き眞紅な光線が、パッと兩眼から吐き出されたと思ふと、怪物は頭をぐる〳〵と振廻した。

其瞬間、不思議にもこの光線に觸れたものは、誰も彼も、眼が眩んで、バタリ……バタリ……と倒れてしまつた。

冷たい石の如き無表情な怪物は、その慘劇を見向きもせず、のつし〳〵と、庭園の闇へ消え去つてしまつた。

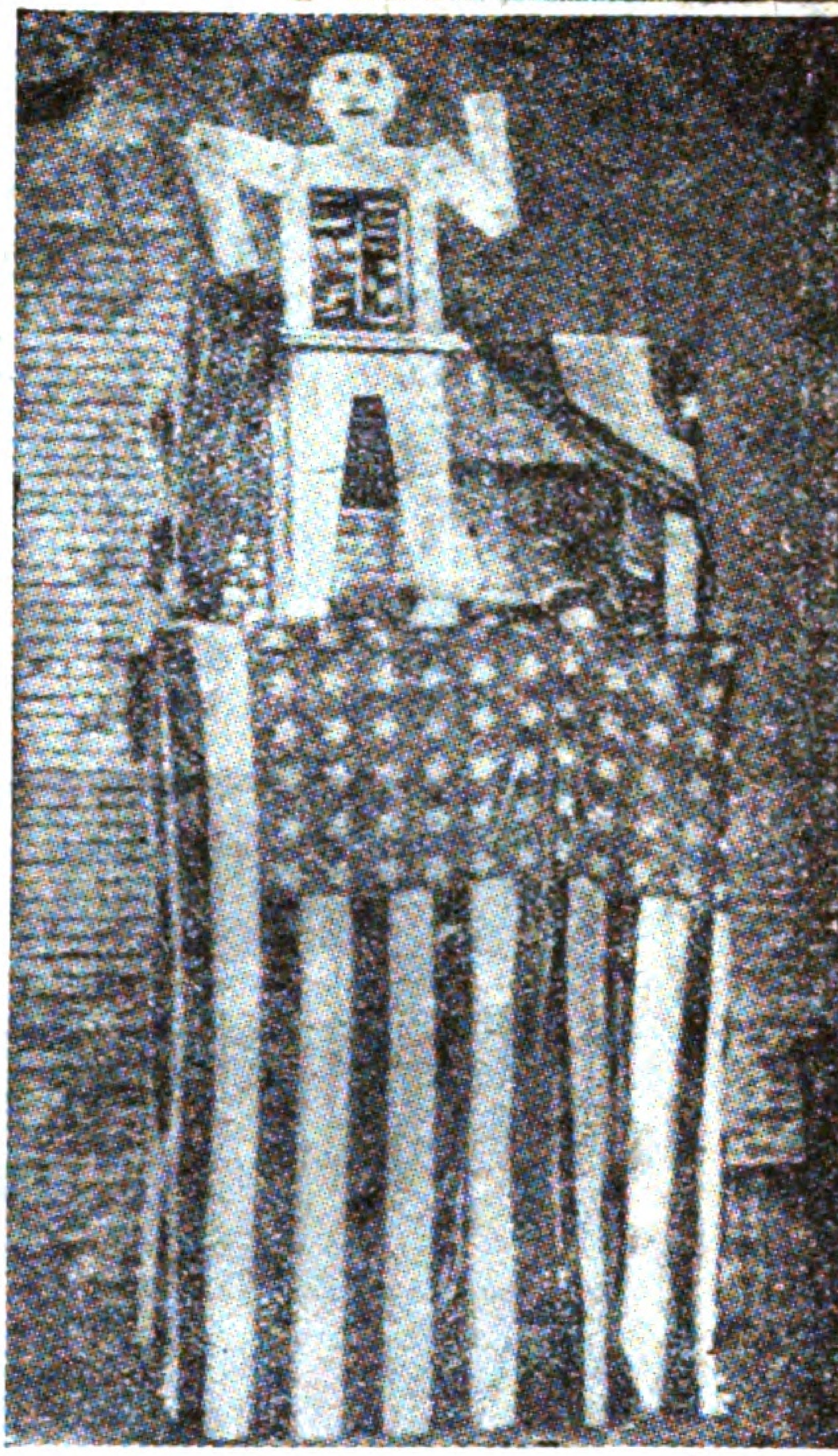


ウエスチングハウス會社の人造人間テレヴオツクスが三名の婦人相手にトランプ遊びをしてゐる光景

調法な人造女

巴里郊外に於ける怪盜出現——これは、單に私の想像である。併し將來、人造機械人間が犯罪の道具に使用される時代が來ないとはいへない。若しさうなれば、世の中は愈々恐怖時代となるだらう。

相手は精密な一個の機械だ。情け容赦のありつこはない、思



ワシントン記念晩餐會で公開實驗に供されつゝあるテレヴオツクス

ひ切つて慘酷な犯行も演ぜられようし、搜査も至極困難となるだらう、殊に犯人たる機械人間が、自由自在に空中を飛ぶことにでもなつたら、愈ゝ犯人の捕縛は不可能になる。

併し、我が愛すべき人造機械人間は、恐らくさうした犯罪の兇器として惡用される前に、人間にとつてもつと幸福と利便とを與へて吳れるであらう。

× × × × ×

ある青年紳士が、素晴らしい美貌の女と結婚した。併し、彼女は一見普通の女性と變りはないが、實は、人造機械人間である。皮膚は精巧なゴムで出來、艶もあり、彈力もあり、軟かい肌觸りの感じなどは、自然の人間に優ること數等である。掌内には電熱で不變の温度が保たれてゐるから、肌へ觸れても眞の肉體と何ら變らない。ふくやかな胸、調和のとれた四肢、ぱつちりと開かれた眼、凡ての點に於て自然人間の女性には求めても得られぬ程の美人である。

彼女は、歌も唄ふ、ダンスもする。青年と一緒に散歩もする。會話もする。……それでゐて、決して我儘もいはず、不平不滿も持たず、時々機械油を注ぐ手數の外は、食事もしない。

こんなわけであるから、都合の良いことは云ふ迄もない。かうなつたら世の中から女性の必要はなくなつてしまふ。

× × × × ×

或は又人造機械人間を賣る店が銀座邊に出來る。そこへ行くと、種種雜多な機械人間が陳列されてゐる。そこで吾々は自分の望み通りの機械人間を買ふことが出來る。

『女中が一人欲しいのだが……』

『左樣でございますか、こちらでは如何でございませう。拭き掃除と受付けを致します。實に恰好のものですが。』

こんな會話、アツチの店やコツチの店で、女中や女給が買はれて行く。女事務員や女車掌も、お好み次第で何でもある。

それが凡て、感じの良い美人であるとすると、自然人間の女性は全く恐慌だ。

今頃、こんな空想をしたら、誰でも莫迦らしく思ふだらう。併しこれは決して空想ではない。近き將來にそんな時代が乾度來るに相違ない。

そこで私は現在の人造人間がどの程度迄進んでゐるかお話して見よう。

人造人間發明の元祖

吾々人間を造つてくれたのは、アダムとイブを手で捏ねて息を吹き掛けて作つたといふエホバの神かも知れないが、人造人間發明の元祖は、小說家である。

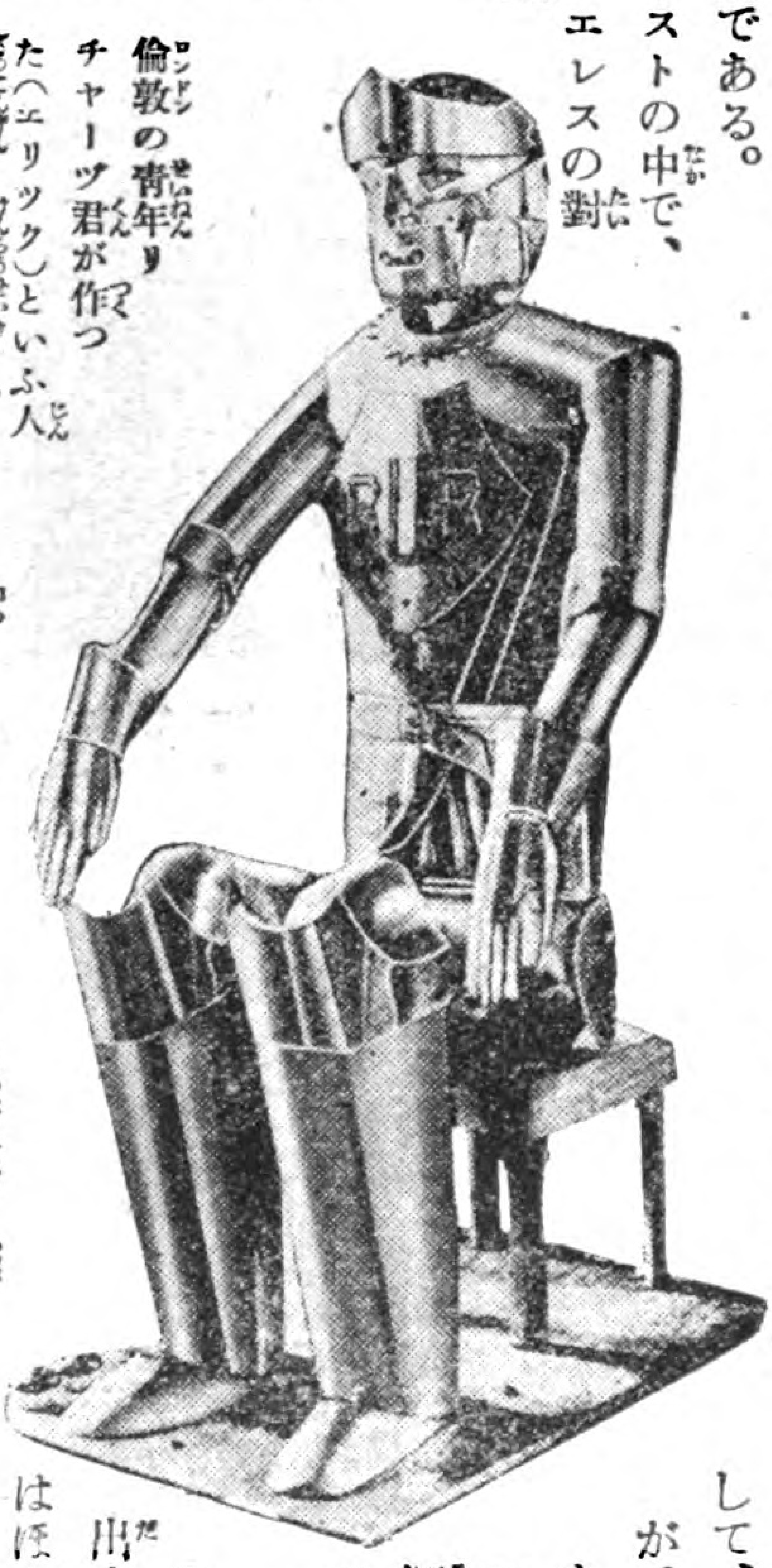
詩聖ゲーテは、ファウストの中で、ワグネルとメフィストフエレスの對話の一節に人間人造を暗示してゐる。

×　×

中古風の實驗室で、ファウスト（哲學者の弟子ワグネルが爐の火を見詰めてゐる、周圍は、奇怪な目的に使はれる種々雜多な手のつけやうのない機械類で埋まつてゐる。そこへメフィストフエレス（悪魔の家來）が訪ねて來る。

『やあ失敬、悪い意味で來たのではないよ。』

『好い星の下によくお出で下さいました。（小聲で）どうぞ、し物を言はないで下さい。しつかり息を殺してゐて下さい。今然すぐ大事業が出來上るんですから。』



倫敦の青年リチャーツ君が作つた（エリック）といふ人造人間一見中世紀のナイトを思はせるやうな異樣な姿を御覽下さい

『一體、何だね』

『人間が出來上るんです。』

驚いてゐるメフィストフエレスに、ワグネルが人間人造の說明をする。

『……こんな風にするのです。幾百といふ材料を調合して、この調合が大事なのですが、人間の原料をよく落着いてまぜ合はして、長い瓶へ入れて栓をして、それを適當に蒸溜します、すると仕事が默つて出來てしまひます。……』

こんな話をしてゐる中に瓶の中に小人が出來て物をいひ出す。……といふ筋だが、これはほんの空想に過ぎない。

もつと科學的に考へたものは、近頃の事でその代表的なものが二つある。

その一つは、チエッコの小說家カレルチアペクの戲曲ロボットで、これは大正十三年の夏、小山內薰氏の手で築地小劇場に上演されたことがある。

また他の一つは、獨逸のテア・フアン・ハルボー女史が、紀元二千年頃の科學文明を空想して書いたメトロポリスで、これは

ウフアが映畫にして、一昨年の春伯林と紐育とで同時に封切りをして、近代にない映畫藝術品として高評を博し、最近日本でも各地でその米國版が映寫された。

その筋は駄足であるから略すが、兎に角、夢想された人造機械人間の代表的のものといへよう。そして、その合理的な、深



模型品展覽會開會式に於て司會者代理として公衆に向つて口演しつゝあるエリツク（人造人間）

刻なる藝術家としての着想には、科學者も耳を傾けなければならぬ點が多いやうに思はれる。

留守居役する人造人間

かうした小說家の空想が、今は實際となつて現れて來た。

紐育のウエスチングハウス電機會社の技師ウエンスレー氏の發明の『テレヴオツクス』といふ人造人間が、最近に於ける成功の魁であつた。

その最初の公開實驗は、昨年の二月二十二日、ワシントン記念日に、紐育の記念晩餐會席上で行はれ、その精巧と確實さは、全世界の電氣學界に非常な人氣を捲起した。

その仕掛けは、振動數の異る三個の音叉と、敏感な同調繼電器と特殊な電話器を組合せたもので、何でも命令通りに機械を運轉したり、人の質問に對して直ぐ返事をしたり、極めて調法なもので、今日までの人造人間中、これが一番實用上の可能性がある。

然し、この人造人間に語るに、人語では薩張り通じない。音叉の振動率に合ふ三種の小笛を用意してゐて、それを吹き分けて話をする。

例へば、一人の妻君が、外出先から自宅のテレヴオツクスに、『歸るまでに入浴の仕度をしておけ』と命令するには、最寄の公衆電話へ飛込んで、自宅の電話を呼び出す。すると、出かけに自宅の電話の受話器とテレヴオツクスを繼いで置いたので、

直ぐテレヴオックスに通じ、ヴヴヴ……といふヴザー信號（家庭用電鈴の一種）が聞える。

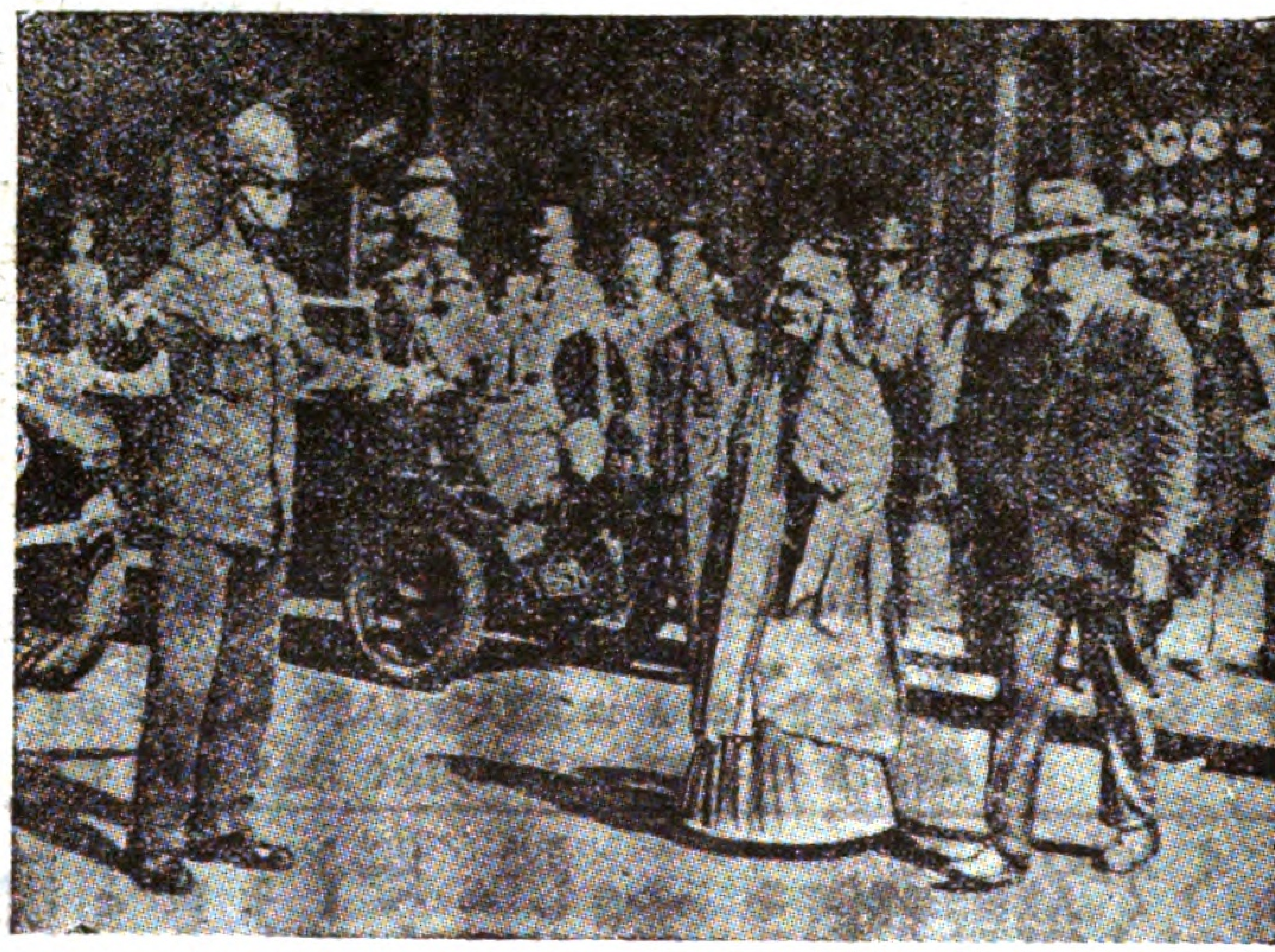
そこで懐中から三種の笛を出し、そのAを吹く。『始めるよ』といふ言葉に代る信號だ。するとヴザー信號が、はたと止む。そしてカツ〳〵といふ音がする。『承知しました、何を致しませう』といふ譯だ。

そこで妻君は、第二の笛Bを、ピッピッと吹く。これは『電氣風呂釜のスヰッチを入れよ』といふ命令。間もなく、スヰッチを入れましたといふ返事に、ブブッ、ブブッといふのが聞える。

暫くして、風呂も沸いた頃に、第三の笛Cを吹いて、スヰッチを切れと命令すると、テレヴオックスがヅヅヅといふ返事をする。スヰッチを切りましたといふのだ。

そこで電話を切つて、バスか圓タクで一寸一軒位買物に立寄つて歸宅すると、丁度好い温度のお湯が沸いてゐるといふことになる。

こんな風にして、出先から自宅のテレヴオックスに晩餐の用意を命ずることも出來る譯だ。



人造貴婦人ロボットが倫敦市中を散歩してゐる處（中央）右は發明者のロパート君、左は群集整理に汗だくの交通巡査

司會者を勤めたエリック

次に現れたのが、エリックといふ人造人間。これは倫敦の一青年リチャーヅ氏が、僅か六ケ月の苦心で產み出したものである。

英米の科學雜誌は、直ちにニュース寫眞を報道したが、機械裝置は、發明者が秘密にしてゐるため言及してゐない。併し、大體は分り切つてゐる。

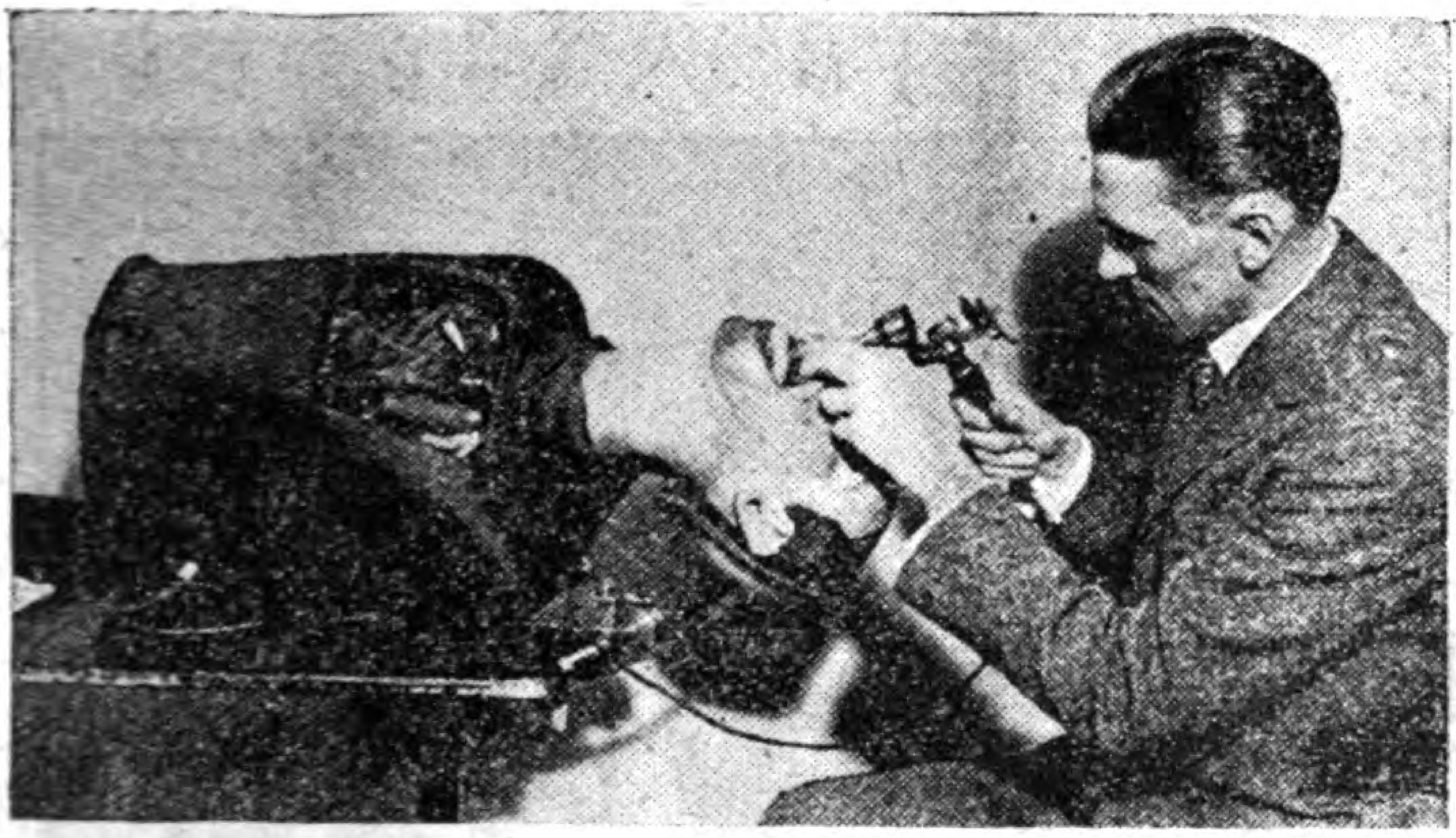
エリックは一見中世紀頃のナイトといふ扮裝で、嚴めしい鎧に身を固めてゐる。全身磨き立てたアルミニユーム板で張り詰めてあるから白銀色に輝いてゐる。體内には電燈線から電力をうける小馬力の電氣モーターが用ひられ、それに依つて大小數十個の齒車と桿を任意に動かし、各關節は梃子仕掛けで働く。蔭に隱れてゐる操縦者の、スヰッチの入れ具合で

動く。しかも巧妙な電話裝置で、話もすれば質問に對し一々答もする。

ある日、倫敦の王立演藝會館で、ある模型出展覽會が開催されたが、何かの都合で、開會を宣すべき肝腎の會長殿が出席出來なくなつた。期日が切迫してゐるので、委員達は氣が氣でない。すると發明家のリチャーヅ氏はいつた。

『宜しい。その開會の挨拶は僕が引受けた。』

そして、呆氣にとられてゐる委員達を尻目にかけて、家へ歸つた。愈々開會の當日となつた。リチャーヅが何んな挨拶をするかと待つてゐると、開會のベルの音と共に壇上に現れたものは、リチャーヅではなく、宛ら深海潛水夫の如き怪物が、キ、キ、……と金屬の軋る音と共に、悠然と壇上に歩を進めた。講堂數萬の會衆は、呆然として怪物に眼を注いだが、誰一人拍手する者もない。



墺國ウインナのフランツ・ハッリンガー博士が自分で作つた人造人間によつて肺臟及び咽喉から異物を取り除く手術を實演してゐる處

怪物は、應揚な態度で場内を見渡した後、巧みに頭を下げて一禮し、

『滿堂の紳士淑女諸君！……』

と、齒切れの良い口調で、演說を始めた。破れんばかりの拍手喝采が、始めて起つた。そして誰いふとなく、この怪物こそ、リチャーヅ氏發明の人造人間エリックである事が傳へられた。

エリックは、美事、當日の司會者の重任を果したのである。

大道を濶歩する人造貴婦人

それから數日後である。倫敦の西部街に、今度は、本當に股を擴げて歩く人造機械人間が、散歩をしてゐた。發明者はロバートといふ青年であるが、この人造人間は、テレヴオックスやエリックの如く、金屬板ばかりの無恰好なものではなく、立派な服裝をした貴婦人である。

さあ、この人造貴婦人の人氣といつたら素晴らしいもので、黑山の如き群集が街路を埋め、一切の交通が全く杜絶してしまふ騷ぎであつた。このロボツトといふ人造貴婦人の構造は至極巧妙になつてゐ

る。が、街を歩いたといふからテレヴオツクスやエリツクとは異つて、動力を電燈線から受ける事は出來ない。體内に總てのものが設備してあつた譯だ。

併し電池を用ひて直流電動機を動力としたとすると、長い距離の運轉は出來ない。又、強力な捲線發條を用ひたとすると、步が弱い筈だ。とすると、このロボツトの仕掛けこそ、出物といはねばならない。

人造人間の目的と將來

兎に角、今日まで發明された人造人間では、以上の三つが代表的なものであらう。

併し、人造人間とはいはれないが、これに類し、特別の用途と動作をする人形は、他に二三ないでもない。獨逸で發明された、店頭廣告用に漫畫を描く人形ポリグロツト・プツペ等もそれである。併し、こんな機械や人形でなく、本當の人間が人造されぬものだらうか？

現代の進步した科學では、肉體の人造はさまで不可能ではないが、魂の人造は不可能とされてゐる。

それで善いのだ、若し優秀な智力と強健な體力を持つ人間が、どし／＼人造されることになつたら、現在の人類は恐らく絕滅してしまふであらう。それこそ敵を造るも同然である。

併し、人造機械人間でも追々に發達して本文の初めの空想が實現するやうな時が來たら、これまた人類の一大脅威である。

十九世紀になつて機械が發達するや、歐洲では到るところで失業者を生じ、倫敦では、無數の勞働者が、

『我等にパンを與へよ!!』

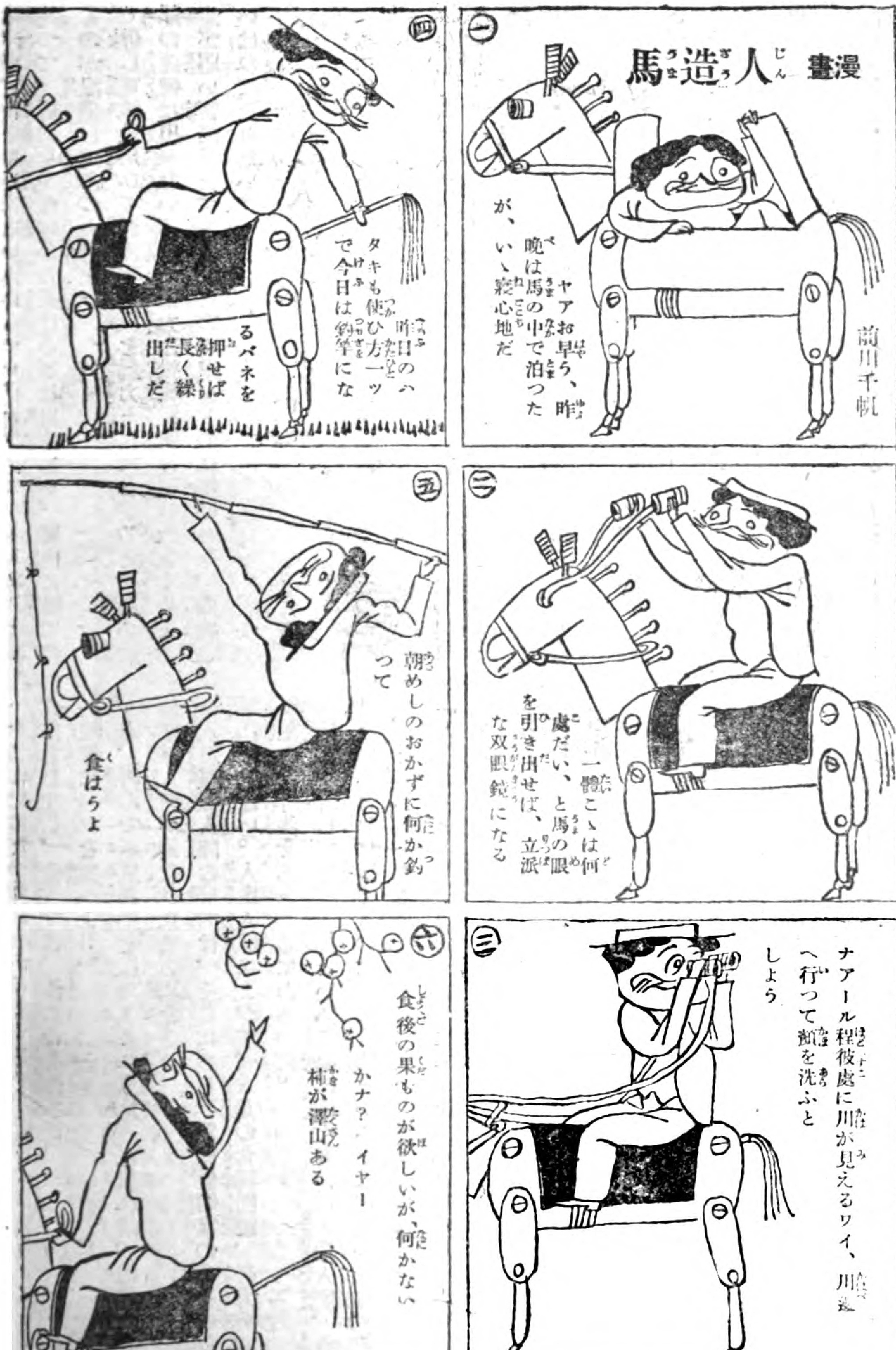
と、叫んで示威運動をした。これも見方に依れば、機械人間に自然人間が追はれたことになる。

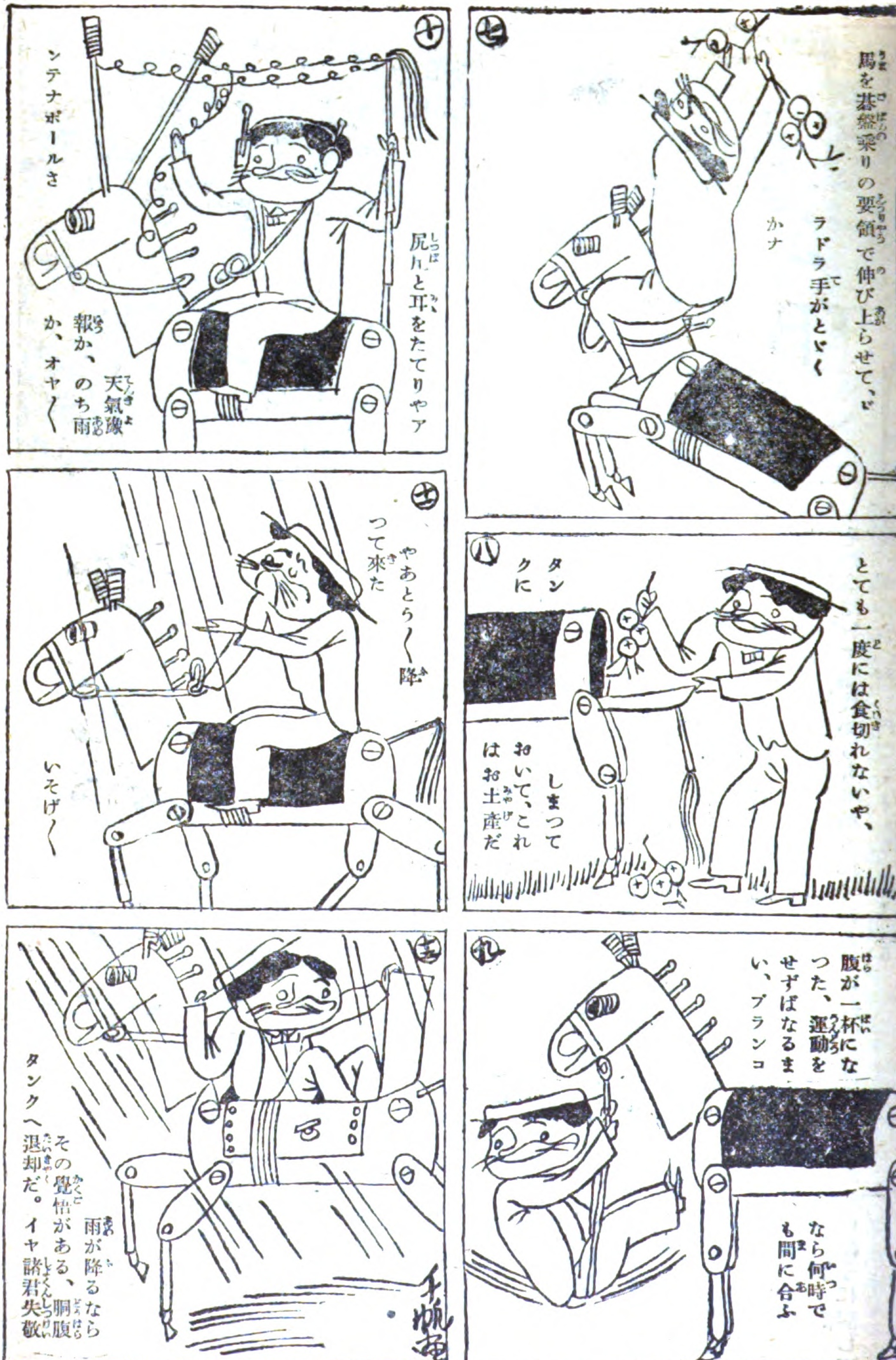
人造機械人間の目的は、そこにある。單に發明家の奇を好む戯れではない。人造人間によつて、人類の食糧問題、勞力節減問題等を解決せんとするにあるのだ。

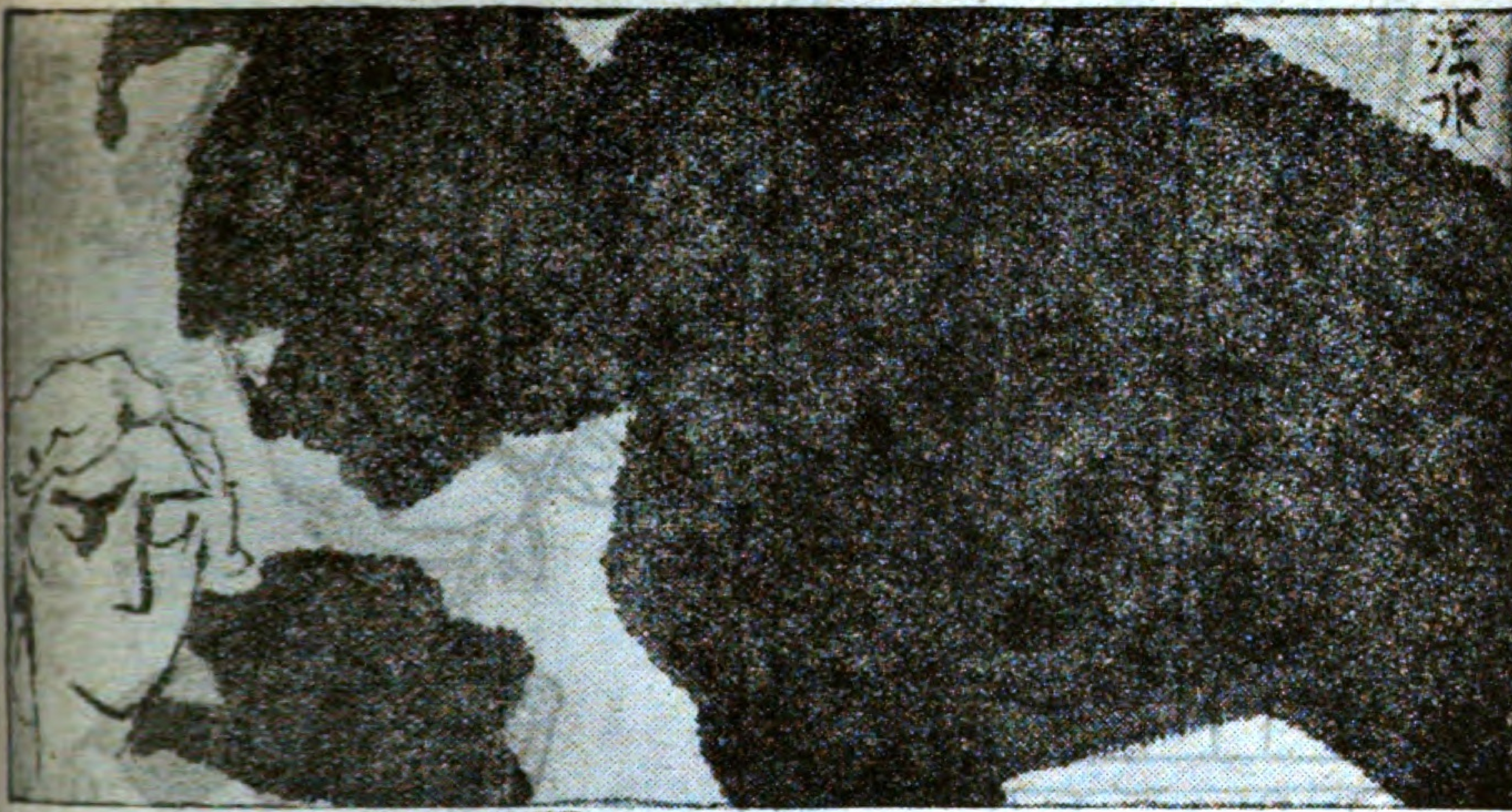
故に、若し將來、工場といふ工場に働くものは人造人間、會社といふ會社に働くものは人造人間といふ有樣になつたら、それこそ働かんとする本物の人間には一大恐慌であらう。

『人造人間を撲滅せよ！　我等にパンを與へよ!!』

と叫びつゝ、本物の人間が、大示威運動をする時が來るかも知れない。恐るべし／＼。（終）


漫畫 人造馬
前川千帆
ヤア お早う、昨晩は馬の中で泊つたが、いゝ寝心地だ
一體こゝは何處だい、と馬の眼を引き出せば、立派な双眼鏡になる
ナアール程彼處に川が見えるワイ、川邊へ行つて顔を洗ふとしよう
昨日のハタキも使ひ方一ツで今日は釣竿になる
バネを押せば長く繰出しだ
朝めしのおかずに何か釣つて
食はうよ
食後の果ものが欲しいが、何かないかナ？ イヤー
柿が澤山ある


馬を碁盤乗りの要領で伸び上らせて、どラドラ手がとゞく
かナ
とても一度には食切れないや、
しまつておいて、これはお土産だ
タンクに
腹が一杯になつた、運動をせずばなるまい、ブランコ
なら何時でも間に合ふ
尻尾と耳をたてりやアンテナポールさ
天氣豫報か、のち雨か、オヤ〳〵
やあとう〳〵降つて來た
いそげ〳〵
雨が降るなら
その覺悟がある、胴腹
タンクへ退却だ。イヤ諸君失敬



春遠からず

加藤武雄
挿繪 伊東深水

彼女の貞操

萩原禮吉の突然の訪問は、ひどく欣助をおどろかした。

欣助は、しげ子が自分の申出をどうしても承諾しないのを、心外な事にも不思議な事にも思つてゐた。彼は、彼自身が、彼といふ人間そのものが、しげ子にとつてどんなに厭はしい存在であるかといふ事などは些とも知らなかつた。だから、彼はしげ子の不承諾に就て、そこに何か特別な理由があるのだと、さう考へてゐた。

特別な理由――として、先づ考へられるのは、しげ子に愛人があるといふ事である。しげ子は何人かを愛してゐるのだ。その爲めに、自分と結婚する事を避けようとしてゐるのだ。

その事は曾て藤代からも暗示されてゐた。それで彼は、その未知の敵手に對して憎惡と嫉妬とを感じずにはゐられなかつた。

その敵手が、今彼の前に現はれたのである。そして、それがあの萩原禮吉であらうとは？

欣助は實に意外な氣がした。

——何だ？ あんな奴だつたのか？

ふゝん！ と、欣助は鼻先で笑つた。

——何の？ あんな奴が！

——欣助は、併し、それが決して輕蔑し難き敵手であることを感じた。彼は、裏心の不安を抑へる事が出來無かつた。

しかし、彼は强ひてその不安を打消すやうにして、再び、ふゝん！ と笑つた。何人があの女を愛してゐようが、あの女はもうおれの所有なのだ。あの女の處女を得た者はおれだ。あの女の一生はおれのもので無ければならない！

欣助は知つてゐた。しげ子のやうな性質の女が、いかに嚴しい貞操觀念で自ら律するものであるかといふ事を。彼女は、昨日ある男に許し、今日は又平氣で他の男に許す事の出來るやうな女では無い。然うした彼女の性質こそ、こちらの附目なのだ。

「お前が他の男を愛してゐることはおれも知つてゐる。だが、忘れてはならない。お前が處女を與へた男は此の榎本欣助であるといふことを。おれは信じてゐる。お前がどんなに圖々しい女であるにしろ、一旦おれに許して置きながら、何喰はぬ顏をしてその男の許へ戻つて行くやうな事は、決して出來ないであらうと。」

この言葉の前に、しげ子がどんなに力無く首を垂れたか？を思ひ出して欣助は微笑した。

さうだ。あの女は、恥を知つてゐる。一旦、賣つた貞操を、二度と役立たせ無いだけの良心を持つてゐる。

「は、は、は！」

と欣助は、つめたく、意地惡く、そして、さも心地宜げに笑つた。そして心の中で云つた。

親愛なる萩原禮吉君！ 君の愛人は貞操の何ものなるかを知つてゐる。斯くも貞操的な彼女を愛人に選んだ事に就て、僕は深く君の聰明に敬服する。だが、お氣の毒な事には、それ故に、君の愛人はもう決して君には戻つて行か無いだらう！

欣助は、その微笑の浮んだ脣に紙卷をくはへて燐寸を擦つた。そして、息を深く一口吸ふと、ふうツと吐き出した。ゆらゆらと立ちのぼる烟の中に、美しいしげ子の顏を、肉體を描き浮べながら、どうなつたところで結局勝利は此方のものだと思つた。

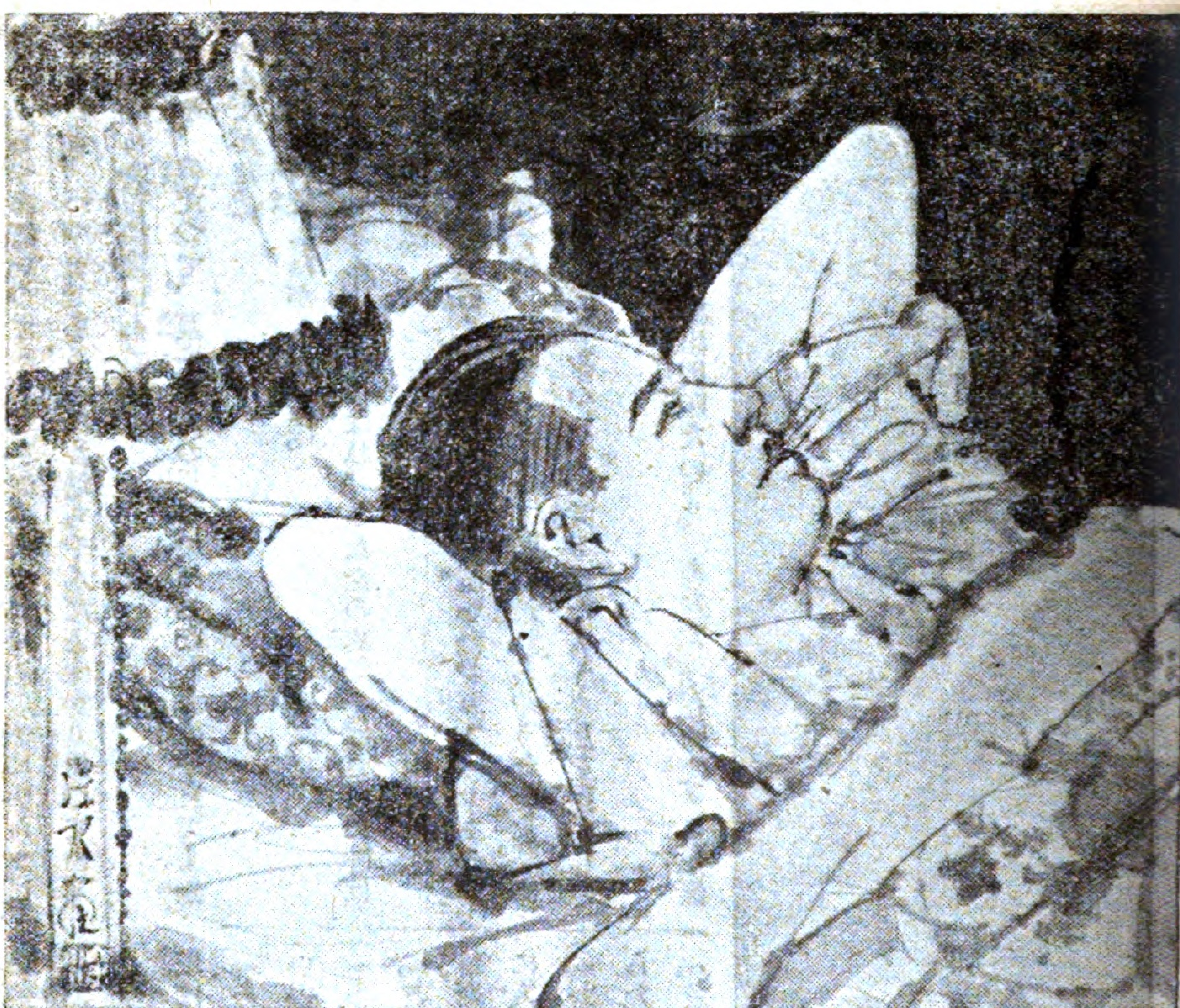
が、その一本の煙草を吸ひ終つた時、彼の心には、もう一つの不安がもちあがつて來た。

あの女は、決してあの男には戻らないだらう？ だが、その

代りに尼寺へでも行くかも知れ無い。
あの女が、あの男に戻らないとしても、おれから逃げて行つて了へば、つまりは同じ事だ。
——早く結婚してしまはないとあの女は逃げて了ふ。
さう思ふと、欣助の胸は、不安と共にはげしい焦燥が感じられて來た。
その焦燥に駈り立てられたやうにして、欣助は椅子から立ちあがり、ぐる〳〵と部屋の中を歩き廻りはじめた。
と、扉にノックの音がした。
『欣さん。』
さう呼ぶ聲がした。同時に扉が開いて、すつとはひつて來たのは、欣助の從姉に當る夏子だつた。
『や、夏子さんですか?』
欣助は思ひ掛け無い人だつたので、吃驚して眼をみはつた兩手を胸に組んで部屋の眞中に突立つたまゝ。



『ほ、ほ! 妙な格好をしてるのね。何をしてたの?』
と、夏子は、欣助の顏を見るや、例の皮肉な調子で云つた。
『一寸、考へ事をしてゐたんだ。』
『下手な役者見たいな思ひ入れをしたりして——何を考へてゐたの?』
夏子は、やゝ嘲りを含んだ大きな眼で欣助の顏を見やりながらつけ〳〵と云つた。夏子は、内科の權威で、麻布の方に大きな醫院を開いてゐる田川といふ醫學博士の細君であつた。大柄で色の白い、白牡丹のやうな豐麗な婦人で、年齢も欣助より一つ二つの姉だつたが、教養からしても、才氣からしても、はるかに欣助より上手で、一個の驕兒と云つていゝ欣助も、此の人の前では頭があがら無かつた。欣助はその遊蕩生活に於て誰はばかる者も無かつたが、此の人の非難だけは少し氣になつた。非難なら未だいゝが、それが皮肉となり、輕蔑となり、辛辣な嘲りとなつて迫つて來るので實にやりきれなかつた。
『それよりも、あなたはどうしてやつて來たんです? こんなに早く——。』
『早くもないわ。もう十時過ぎよ。』
『さうかな? もうそんなになるかな?』
『相變らずねぼすけさんなんでせう? 今、起きたばかりなのね?』



『うむ、昨夜すこし遲かつたんだもんだから。』
『相變らず、毎晩遲くまで惡あがきにあがきまはつてゐるのね。』
『いや、此頃は然うでも無いんだ。』
欣助は、まぶしさうに夏子の眼を避けながら云つた。
『どうだか？』
と、夏子は例の小馬鹿にしたやうな眼眸になつて、
『今、をばさまから散々愚痴をきかされて來たところよ。』
『ふゝん！　母親の愚痴なら別に珍らしくも無からう？』
『此頃はへんな活動女優なんかが押掛けて來るさうぢやあ無いの？』
『へんな――は無からう。立派なスタアなんだ。』
『何だか知らないけど、をばさまはひどく心配していらッしやるのよ。性質の惡い女にでも引掛かつてひどい眼を見せられるんぢやあ無いかッてね。』
『馬鹿な！』
『本當に親馬鹿ね。どうしてそんな欣さんぢやあ無い、ひどい眼を見せればつて見せられるやうなそんな

欣さんぢやあ無いつて事を、をばさまは未だ知らずにいらツしやるのよ。いつまでもうぶなお坊ちやんだとばかり思つてゐるんだからお目出度いわね。』

『いや、僕だつて、夏子さんの思つてゐるほどあばずれでも無いんだがな。』

欣助は苦笑しながら云つた。

『實はね、欣さん！　今日はね、あなたの事でをばさまに呼ばれて來たのよ。』

藤お納戸の地に白く觀世水の模樣を置いたジョーゼットの訪問着を着た夏子は、すらりとした下肢の流れるやうな線を斜めに見せて肘掛椅子に腰をおろし、胸元ではた〳〵と扇を動かしながら、

『ねえ、あなたの結婚問題なのよ。あなた未だ結婚する氣無いの？』

『無い事は無いんだよ。』

今も今、その問題であたまを悩ましてゐた時だつたので、欣助は思はず乘氣になつて云つた。

『あの相良のお孃樣はどう？　あの人を貰つて見る氣は無いの？』

『あの女なら先づ御免だな。』

『どうして？　あのお孃さんなら、容貌だつて惡か無いし、上等だと私思ふんだけどね。をばさまも、あのお孃樣は大分お氣に入つてゐるやうだしね。』

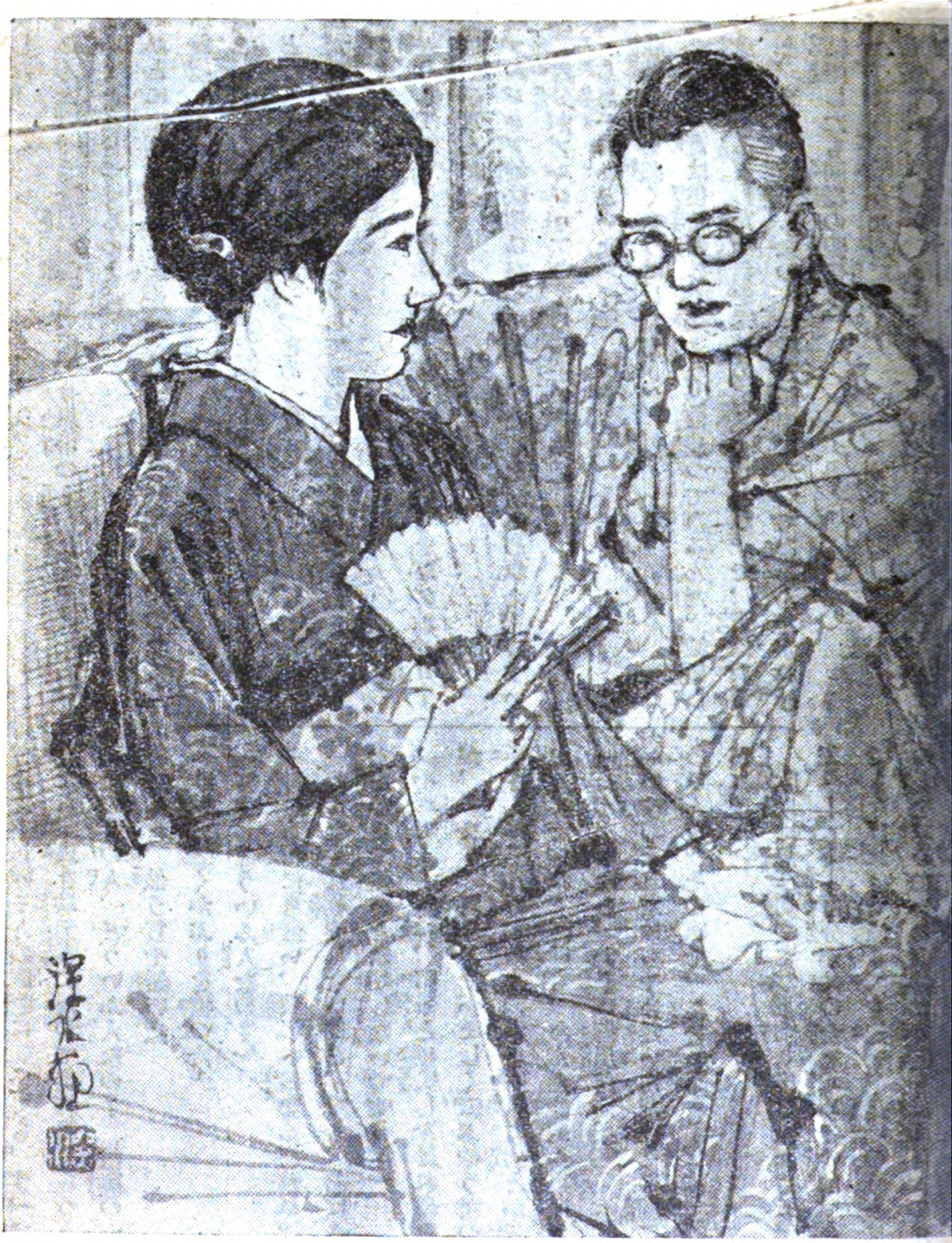
『おふくろがどんなに氣に入つたところで、貰ふのは僕だからな。』

『それはさうだけど、あのお孃さんなら、欣さんにだつて別に不足は無ささうだがね。』

『不足だな。僕は——。』



『まあ、贅澤な事を云つてゐるのね。あのお孃さんなら、欣さ



んなんかに勿體無いくらゐだわ。』

『勿體無いッて？』

『さうですとも。本當に勿體無いわ。あんたなんか、本當ならあゝした無垢なお孃さんを貰へる資格なんか無い筈よ。お嫁に來てくれるといふだけで、ありがたいと思はなきやならないのよ。』

『ひどい事を云ふんだなあ！』

と、欣助は苦

笑した。

『あんたのやうな男に對しては、世界中の女が排婚同盟を結べばいゝと私思つてるのよ。』

『ひとに結婚を勸めに來ながら、そんな事を云ふやつツて無いな。』

『でも、あんたが餘り生意氣だからよ。』

と、夏子はきツぱりと一つきめつけて、

『だけど、本當に、どうしてあのお孃さんが氣に入らないの？』

『どうしてツて——僕は一體、あゝいふ高慢ちきなブルジョア娘は嫌ひなんだ。』

『ブルジョア娘は嫌ひだつて？——妙な事を云ふわねえ。さういふ自分がブルジョアのどら息子の癖に。』

『どら息子はひどいなあ！』

欣助は頭を掻くやうにしたが、

『だがね、實は僕結婚して見ようとは思つてゐるんだ。結婚して少しきちんとした生活をはじめて見ようとね。で、實は或る女と、まあ、結婚したのも同樣な關係になつてゐるんだがね。』

『結婚したも同樣の關係？』

『え、まあ、然うなんだ。』

欣助は夏子を慕つてゐたが、この[illegible]では或る信頼をも寄せてゐた。しげ子との問題に就いても、すべてを打明けて賴んで見たら、良き助力者になつて呉れるだらうといふ氣がした。

『その女の人、どういふ人なの？　活動の女優さん？』

『いゝえ、然うぢや無い。』

欣助は強くかぶりを振つた。

『ぢや、どういふ人なの？』

『身分も何にも無い、貧しい娘なんだがね。』

『そんな事は構やしないけど、でも、をばさまは、ちやんとした處からで無いと承知しないでせう？』

『それで——無論、阿母と衝突しなければならないと思ふんだが、あまり、阿母がやかましく云ふやうだつたら、その時は夏子さんに賴んで、あんたから阿母に何とか云つて貰ふつもりでゐるんだがね。阿母も、あんたの云ふ事はよく聽くからね。』

『そんな事なら、お易い御用だわ。』

『いや、それだけぢやあ無いんだ。その前にもつと面倒な事があるんだ。その事で、僕は夏子さんに賴み度い事があるんだがね。』

欣助は思ひ切つて斯う切り出した。さうだ。此人に賴んで見よう！——自分が彼の女を求めるのは、今までのやうな戯戀でもなければ女漁りでも無い、最初のうちは兎も角も、今、彼の女を求めてゐる氣持は眞面目なのだ。眞面目に彼の女

と結婚しようとしてゐるのだ。此の眞面目な問題に對しては、此の人も屹度力を貸して呉れるであらう。

『面倒な事ッてどんなこと？』

『僕は是非その女と結婚しようと思つてゐるんだ。ところが、その女がどうもはつきりした返事をして呉れ無いんだ。それで、僕弱つてゐるんだ。』

『拒絶されたんだわね。まあ、いゝ氣味！』

夏子夫人は笑つた。

『拒絶されたといふわけでも無い。その女はもう僕のものになつてゐるんだからね。事實は、もう結婚同樣の關係になつてゐるんだ。』

『結婚同樣の關係になつてゐながら結婚する事を承知しない——と云ふんだね？』

『然うなんだ。』

『ぢや、つまり、その人はあなたから逃げ度がつてゐるんだわね。あなたとそんな關係になつた事を後悔してゐるんだわ。つまり、あなたは振られたんだわ。ほ、ほ！ いゝ氣味！』

『僕は眞面目に話してゐるんですよ。』

と、欣助は少しむつとして、

『尤も、それには種々の理由があるんだ。僕とそんな關係になる前に、愛してゐる男があつたらしい事も事實だし、それに、僕の申出が、どうも信用出來無いらしいんだ。』

『信用出來無いのが當然だわ。少しでも男を見る眼のある女なら、あんたの云ふ事なんか信用しないわ。』

『——さういふ意味でばかりぢやあ無い。僕の申出が、その女の耳にはひどく突飛過ぎるやうに聽えるらしいんだ。何しろ、その女は、僕が或るけちな珈琲店から拾つて來た女なんだからね。』

『勿體無い、御身分が違ひます——ツてわけなのね。ほ、ほ！ どんな女にしろ、欣さんには、女の方が餘程勿體無いと私なんか思つてゐるんだけど——。』

『相變らずどうも嚴しいなあ。』

と、欣助はもう一度苦笑したが、

『だが、僕としちやあ、今度は非常に眞面目なんだ。で、種々に云つて見るんだが、その女はどうしてもはつきりした返事をしないんだ。あんたに賴み度いといふのはそこなんだ。あんた一つその女に會つて見て、僕の代りによくその女に話して見て呉れませんか？』

『つまり、代りになつて口說いて呉れと仰有るのね？』

『いや、然ういふわけぢや無いが——。』

『然ういふわけで無ければどういふわけ？ ほ、ほ、ほ！ 意氣地の無い話だわね。欣さんらしくも無い話だわね。』



『何と云はれても仕方が無い。僕は今眞面目に苦んでゐるんだ。』

『お氣の毒樣と云ひ度いけど、矢張何だかいゝ氣味だつて氣がするわ。』

『いや、冗談ぢやないんだ。――夏子さん！　僕、是非あんたに賴み度いんだ。』

　さういふ欣助の顏には、抑へ難い苦惱の表情があつた。彼がはじめて、まことに愛する者の苦みを知りはじめたのであつた。

味方

　林町の家からしげ子が移つて行つたのは、欣助の家から然う遠く無い、

招魂社裏のあるしもた屋の二階であつた。その家の主人といふのが欣助の家の財産管理人をしてゐたので、欣助は略ゝ事情を打明けて、そこにしげ子を預けたのであつた。つまり、若しかしたら逃げ出すかも知れ無い彼の獲物に對して、財産と共に、その管理を——いや、監視を囑托したといふわけだつた。

それとなく監視の眼で、嚴重にとりかこまれながら、しげ子は憂欝な毎日をそこで送つてゐた。——家出をしたみち子の身の上が案じられて、夜の目も合はぬ事が多かつた。

そこへ、夏子が訪ねて行つたのは、ある日の午後の事であつた。

『突然お邪魔して——私、榎本の親戚のもので、田川と申しますのですの。今日は榎本に頼まれておうかゞひしましたの。』

夏子夫人は、こんな風に率直に切り出した。夏子夫人の鋭敏な眼は、一目で、しげ子がどんな女かといふ事を見てとつてしまつた。

まあ、素敵だわ、こんな人を見附け出すなんて、あの人としちや本當に出來過ぎてゐるわ、夏子夫人は然う心の中で繰返した。

しげ子は唯おど〳〵としてゐた。

『榎本はあなたと結婚したがつて居りますの。でも、あなたが承知して下さらないツていふので、がらにも無く煩悶して居りますのよ。』

笑ひながら夏子夫人が云ふと、

『まあ！』

と低くつぶやいて、少し眼もとのあたりを赤くした。

本當に此の人はおとなしい人だわ！　此の上品な美しさには、何處のお孃さんだつてかなひはしないだらう。此の人との結婚は、あの始末に了へないどら息子を新しい生活によみがへらせる事が出來るかも知れない。夏子夫人は然う思ひながら、

『で、私、それで榎本に頼まれておうかゞひしたんですけど、あなた、榎本と結婚なさることどうしてもお可厭？』

しげ子は夏子夫人の顏を見上げた。苦しく喘ぐやうな眼眸で。

『榎本のやうな男に、あなたのお氣が進まないのは無理もありませんわ。でも、どうせこんな風にしていらッしやる位なら、結婚なすツても同じぢや御座いませんの？』

『それは然うで御座いますけど——。』

『あなた、どなたか愛していらッしやる方がおありになるんですの？』

夏子夫人の言葉は飽迄も單刀直入だつた。

『いゝえ。そんな事でございません。』

『お隱しにならないでもいゝのよ。榎本は何だかそんな風に

云つてゐ、ましたけど――。』

『それは榎本さんの誤解で御座いますの。』

はつきりと黒瞳の澄んだ眼で、まともに對手の顔をみつめながらしげ子は云つた。

『然う？ぢや、榎本と結婚



し度くないと云ふのは、さういふ理由からぢや無いんですね。』

『え〻？』

と、しげ子はうなづいたが、

『榎本さんには種種御迷惑をお掛けしたんですから、こんな我儘を申上げちや本當に濟まないんでございますけれど――。』

『わかりましたわ、あなたのやうな方が榎本のやうな男と結婚し度く無いと仰有るのは當然の事ですわ。』

云つてしまつてから夏子夫人は、こんな事を云つては結婚の承諾を求めに來た目的とはあべこべになると思つた。が、今、しげ子を眼の前に見ると、夏子夫人は僞り難い實感として、さう云はずにはゐられ無かつた。

『い〻え。折角そんな風に仰有つて下さる御好意は本當にありがたいんで御座いますけど――。』



しげ子は辛さうに云つた。

『ですけど――ぢやあ、どうして、あんたはこんな風にしていらッしやるの？　あなたは――失禮ですけど、露骨に申上げますわ。かうして榎本の世話になつていらッしやるんでせう。榎本も、事實は結婚も同樣の關係だと云つて居りましたけど、どうしてそんな生活を續けていらッしやいますの？』

『私、困つてゐるので御座います。』

しげ子は夏子の顏を見上げて云つた。

『困つて？』

『えゝ。――榎本さんがどうしても別れさせて下さいませんので。』

『だつて、それはあなたの自由ぢやありませんか。結婚した者が離婚する場合なら相手の承諾が必要ですけど、結婚したんでも無いのに、何もそんなに自由を束縛される事は無いぢやありませんか？』夏子夫人は、ある苛立たしさを感じながら云つた。夏子夫人は、此の美しい、そしてすぐれた情操の所有主らしい女性が、そんな不自然な屈辱的な境遇に在る事に對して、同情よりも寧ろ腹立たしさを感じたのだつた。

『でも――。』と、しげ子は口籠つた。

『何故、逃げておしまひなさらないの？――逃げておしまひなされば いゝぢやありませんか？』しげ子は、相手の言葉に戸惑ひをした。反語では無いのか知ら？　とも思つて見た。何故と云つて、結婚の承諾を得に頼まれて來たといふその人が、まるで反對な事を云ひ出したのだから。

『あなたはあの男なんかにや勿體無い方だわ。あなたが、あの男の申込をお拒みになるのはもつともだと私思ひますわ。――だけど、それなら、どうしてこんな風に――。』

『私、あの方には種々御厄介になつたのでございます。母が病氣だつたりしたもので御座いますから――その母ももう亡くなつてしまひましたけど、でも、だからと云つて直ぐに別れさせて頂くわけにもまゐりませんの、それに榎本さんの方では別れさせて下さりさへすれば、こんなありがたい事は無いんですけど――。』

しげ子は膝をみつめるやうにして云つた。

『ぢやあ、お母樣の御病氣の爲めに、榎本からお金の世話を受けたので、つまり、その爲めに榎本とこんな風におなりになつたんですわね。大抵、そんな事だと想像しては居りましたわ。つまり、お金であの男にお賣りになつたんですわね。』

金で賣つた――と云ふその言葉は、ひどくしげ子の心に徹へた。しげ子は苦痛の表情で相手を見返した。

『私の申上げた事を氣になすつちやいけませんわ。お金で賣つた――と云へば、私なんかだつて矢張然うですわ。私自身の結婚だつて矢張お金で買はれた結婚でしたわ。』

夏子夫人は、あの十年前、父の沒落を救ふ爲めに、父への物質的助力を交換條件として、年齡が二十も違ふ男の許にとつぐ可く決心した時の灑の記憶がよみがへつた。そして――それから

十年間の、索莫たる結婚生活が思ひ返された。形式は結婚でも、實際は金で買はれた女奴隷の生活――何のよろこびも、何の幸福も無い生活だつた。

『でも、あなたは未だ結婚なすつたんぢや無いんですもの。ねえ、榎本からお金の世話になつたところで、それが何ほどのものでせう。あなたはその代りにお金なんかには換へられない大きな犠牲を拂つていらッしやるんぢやありませんか？ あの男なんかの世話になる必要が無くなつた以上、さつさと別れてお了ひになればいゝのよ。』

『ですけど、それぢや、あんまり――。』

『あんまり現金な氣がするんで、それで思ひ切つて逃げ出す事が出來ずにゐる――あなたのお心持は屹度然うなんでせう？』

と、夏子夫人は、ぴたりとしげ子の氣持を云ひあてゝ、

『でも、そんな事は要らない御遠慮ですわ。あまり、お人が好過ぎるつてもんですわ。ねえ、構は無いから逃げておしまひなさいな。』

しげ子は對手の顏を見た。その眼には物惑はしげな表情があつた。

『あなたは、私の云ふ事を、へんだとお思ひになるんでせう。ほ、ほ！ 結婚をお勧めしに來た私が、こんな事を云ひ出したんですから、へんにお思ひになるのも無理は無いわ。でもこれが私の本當の心持なのよ。私の誠意を信じて頂き度いの。』

『はあ。』

しげ子はもう一度夫人の顏を見た。夫人の眼は涙ぐんでゐた。夫人の心持が、次第にしげ子の胸に通ひはじめて來た。

『あの男は、お金の力であなたの大事なものを奪つたんですね。そんな人間に對して義理も何もありはしないわ。ね、別れておしまひなさい。あの男が別れさせなかつたら、逃げておしまひなさい。』

『……。』

『あなたも女、私も女よ。あなたは大へんお不幸な方らしいわね、私も不幸な女ですの。ねえ、私を信じて下さいな。私はあなたの味方よ。』

『ありがたう御座います。奥さま。』

しげ子の眼からは涙が流れた。

『逃げておしまひなさい。あとの事は私がひき受けますわ。それは、榎本も心からあなたを欲しがつてはゐるやうですけれど、榎本にはあなたと結婚して頂く資格なんか無いわ。私榎本にはよく云つてやりますから。――それでね。』

と、夏子夫人は情熱的に云ふのであつた。

『失禮ですけど、これからの事についても、私、出來るだけお力になつてさしあげますわ。ねえ、私、一寸お目にかゝつたばかりですつかりあなたが好きになつてしまひましたの。私、あなたのお友達になりませう。私の力で、何かあなたのお役に立つ事が出來れば、私、本當に嬉しう御座いますわ。』

（つゞく）

名士の談話室

英文・ヘラルド主筆　頭本元貞



政治家の理想が、世の中を指導するなんて事は所謂理想であつて、到底むづかしい事だと信じてゐた。所が今度といふ今度は明らかに私の信念が破られた。そうしてそれは洵に國家に取つて喜ぶべき事だ。濱口首相が、一度廟堂に立つて實踐躬行、或はラヂオに、或はリーフレットに天下に叫ぶ時、世の中は翕然として共鳴奮起してゐるではないか。それにしても考へねばならぬのは、人格の力だ、若し、濱口首相の人格にして國民を首肯かせしむに足るものがなかつたなら、百の呼號も千の努力も、一種の宣傳と見做して斯く迄に國民は共鳴しなかつたにちがひない。

漫畫家　田中比左良



民衆畫家（雜誌、新聞の畫家を假に斯う呼ぶ）の大きな苦痛は自己の滿足する繪を生のまゝ大衆に授けたとて不消化で良き糧になり得ない場合の多い事だ。そこで僕には處方箋的施畫と云ふ主張がある。これは醫者が、患者を診察して處方箋を與へるやうに、現在の操觚界（新聞雜誌の思想表情）を一種の病氣と見なしてこれに藝術的の調劑する。例へば、キングのやうな萬人の良き糧に供すべき雜誌の繪だつたら老人から子供に迄親しみを持たれる要素が何瓦、時代思潮的新鮮味何瓦、繪畫的品位何瓦、といふやうな普通藥に美術的創作慾といふ高價藥を何瓦、これを程よく調合して施して、根氣よく徐々に大衆の審美的情操を指導して行くと云ふ方法だ、一見藝術家として不純で微温ことのやうではあるが、決してそうでない。これこそ美的教養にあまりに幼稚な民衆に直接する現在の民衆畫家の執るべき途だと私は信じてゐる——。

東京市保護課長　船津新四郎



一口に社會事業といふが、託兒、防貧の保護方面、公營質屋、無料宿泊、公衆食堂のやうな福利方面、失業に對する職業紹介と云ふわけで仕事は頗る多岐に渉つてゐる。隨つて其費用も生易しい金ではない。東京市だけでも八百餘萬圓も費して約卅萬の人人に適當な施設をしてゐるのだが、都市が膨脹するにつれて、救助を必要とする人々は殖える許りで仲々理想に近づけない。殊に無自覺な地方青年や、田舍を食ひ詰めたものが、東京で一旗擧げようと集注して來る事は、此問題を益々困難にしつゝある。私は都市に於ける社會事業の達成の上からも、地方開發の上からも、地方民が己れの郷土を愛し、郷土にあつて生業を樂しむ風を切望して止まない。

俳優 市川三升



亡父（團十郎）が遺した教訓の中で一番私の感銘してゐる事は『どんな役に扮しても、其の人物になり過ぎないで、靜かに自分で自分を監督するだけの餘裕が必要だ』と云はれた事です。之はたゞに芝居の上許りではないと思ひます、自分のする仕事でも、自分の行でも熱心になる事は勿論結構ですが、又一面には、一歩退いて自己を省るだけの餘裕が是非必要だと思つてゐます。

帝國拳闘協會長 田邊宗英



私は野間社長が劍道奬勵のため非常の努力をされてゐる事に常に敬服してゐる一人だが、實際、劍道は單なる技術として見るべきでなく、立派な精神修養の方法である、私は此の精神を是非共拳闘にも及ぼしたいと始終考へてゐる。唯、劍道について私の遺憾に堪へないのは、大家と大家の大試合といふものが仲々見る機會がなく、よしあつても公開されない事だ。先般中山博道氏に逢つて、此話を持ち出した所、中山氏も頗る共鳴して『何とか機會を作るやう努力したい』と云つてゐられたし、頭山滿、内田良平兩先生も亦大賛成されてゐるので、若しこれが實現されたならどんなに後進の者を裨益するか分らないだらうと、今から樂しみにして待つてゐる。

醫學博士 高野六郎



昨年の秋、巴西の學士院長で而も精神病學の世界的權威のモレーラー博士が我國の衞生狀態視察のため來朝された時の事である。案内役の私と一緒に或る宿屋に泊り込み、食事のすんだ後で給仕の女中さんが食後のウガヒ茶碗を持つて來た。すると、モレーラー博士は、『高野さん、御國の方は實によい習慣がありますね、このやうに口腔衞生に迄注意を拂ふ御國では、嘸、傳染病等も少い事でせう、洵に羨ましい事だ。この茶碗は記念の爲、頂戴して歸ります』と眞面目になつて感心された時は、流石の私も冷汗をかいちやつた。

社會教育家 安倍季雄



今年の夏、滿洲へ講演旅行を試みた際、つくづく感心した事がある。それは滿洲で活動してゐる支那婦人の服裝が質素だといふ事だ。色彩は單純だし、地質は男子のものと殆ど變らない。金がかゝつてゐると云つても、精々五、六十圓が止めらしい。それに引換へ我國の現狀はと云ふと一枚の羽織に二千圓かけたの、一本の帶に千五百圓だしたのと云ふ噂をザラに聽く、而もそれが、羨望の的になつてゐると云ふに至つては慨嘆に堪へないではありませんか。整理、節約を必要とする今日だ或は美術、工藝方面の人達からはお叱言を頂戴するか知れぬが、松平樂翁公張りに、當局が積極的に、着物は何十圓以上罷りならぬ、頭飾りは何圓以下と制限したらどんなものだらうと此頃しきりに考へてゐる。



風雲天満双紙

佐々木味津三
挿繪 小田富彌

長蛇を逸す

一

――祈禱所は總檜造り百疊程の大きな部屋で、正面二重の高座には、紫綸子の幔幕を宮居絞りに張り廻し、器物、調度、いづれも金色まばゆい程な贅澤極りないものばかりでした。殊に平八郎の注意を強く引いたものは、そこに吊されてあつた二つの提灯です。いざと言はゞ、それを以つて唯一の抗辯の武器に使はうと言ふつもりからか、不埒至極にも九條家の御紋所を染めぬいてありましたので、高家を恐れぬ僣上な振舞ひに、愈ゝ怒りを增した平八郎は、格之助、正一郎二人を殘して、吉見九郎右衞門以下八人の者にそつと目配せし乍ら、信徒の群れに交つて、じりじりと八方に紛れ込みました。

かくとも知らず、やがて怪しく鳴り渡つた鐘の音を合圖に、四人の女童へ隨へ乍ら、しづしづと渡殿傳ひに姿を見せた者は、まさしく高麗橋袂の小間物問屋松兵衞方で、眼前ありありと見眺めた怪行者豐田貢です。

と同時に、三百名の上をも越してゐると思はれる信徒達は、生如來の姿にでも接したもののごとく、一齊にそこへひれ伏しました。それをいと滿足さうに見下ろし乍ら、正面高座に歩みよつて、勿體らしく座を占めると、それがいつも祈禱の手順であると見えて、四人の女童が膝行し乍ら、高座うしろの檜戸に近づいて、そこに下つてゐた四本の糸を引きました。

　それと一緒です。機仕掛にでもなつてゐると見えて、二枚の大檜戸が音も立てずにするすると左右に押し開かれたかと見えるや、檜造りの物々しい大祠堂の中から、五尺の上もあると思はれる豐國觀音の大きな木彫り像が姿を現しました。

『よッ。先生々々！　やつぱり十字架が首のところに光つてをりますぞッ。』

『しッ、聲を立てるな！』

　驚ろいて言ひ叫んだ正一郎を叱り乍ら、平八郎は炯々と鋭く兩眼を光らして、貢の行動にぢッと目をそゝぎました。

　と――それとも知らずに怪行者貢は、おもむろに膝行し乍ら、木彫り像を背にすると、さもまことしやかに言ひました。

『いつもの通り、お祈りを取次いで進ぜますゆゑ、御病氣のお方はおすゝみ下されませ。』

　その言葉を待ちうけるやうにして、貢の前に平伏したのは、いづれも愚直さうな三人の町人達です。

『死後昇天、仙壽滿留破羅伊僧、雲善主麿。』

『破羅伊僧々々、雲善主麿。』

　芙桑、黑住、御嶽、釋尊八宗いづれの法敎にもない異人語めいた祈りをあげると、まこと奇怪とも奇怪でした。物言ふ筈のない木彫りの觀音像が、さながら生あるもののやうに三人の祈に答へて言ひました。

『死後昇天、破羅伊僧々々、雲善主麿。』

　しかも應答したその一語一語が、銀鈴を振るやうなはつきりとした言葉でしたので、祈りつゞけてゐた三人の信徒は感泣せんばかりでした。

『有難うムります！　お有難うムります！』

　それを横柄に見おろし乍ら、冷やかに微笑すると、勿體らしく貢が次を促しました。

『お三方は日頃お信心が厚うムりますゆゑ、觀音樣がおきゝ屆け下さいました容子でムります。では、お次の三人、おすゝみ下さりませ。』

　しかし、次の三人が平伏するかしないかの時でした。それ迄ぢッと怪しの木彫り像に目をそゝいでゐた平八郎が、矢庭にすツくと立ち上ると、鋭く配下の者に下知を與へました。

『これ迄見ればもう澤山ぢやツ。それツ、みなの者、捕つて押へろッ。』

右に荒門弟の正一郎、左に一子格之助を引隨へて、信徒達の頭上を躍り踰え乍ら二重高座に殺到すると、五臟六腑にまでも沁み渡るやうな鋭い聲で一喝いたしました。

『愚民を惑はす不埒者めがッ。天滿の與力大鹽平八郎ぢやッ。神妙に繩うけいッ。』

不意を衝いた出來事に、狂信者一統のどよめき立つたのは言ふまでもないことでしたが、然るに太々しいのは豐田貢です。當然打ちうろたへて、血色を失ふだらうと思はれたのが、憎々しげに微笑すらも見せると、怯まずに言葉を返へしました。

『大方お越しなさるだらうと、お待ちうけ致してをりました。豐國觀音より靈力うけたこの豐田貢、愚民を惑はすとは何事にムります！』

『控へろッ。控へろッ。しかとの證據擧つて、平八郎手入れに參つたのぢやッ。神妙に繩うけいッ。』

『さうでムりまするか。繩うけろと仰有いますればうけないものでもムりませぬが、所司代詰の御役人方も、それゆゑにお二人までもお腹を召した筈、これなる紋所お目に止まりませぬか。』



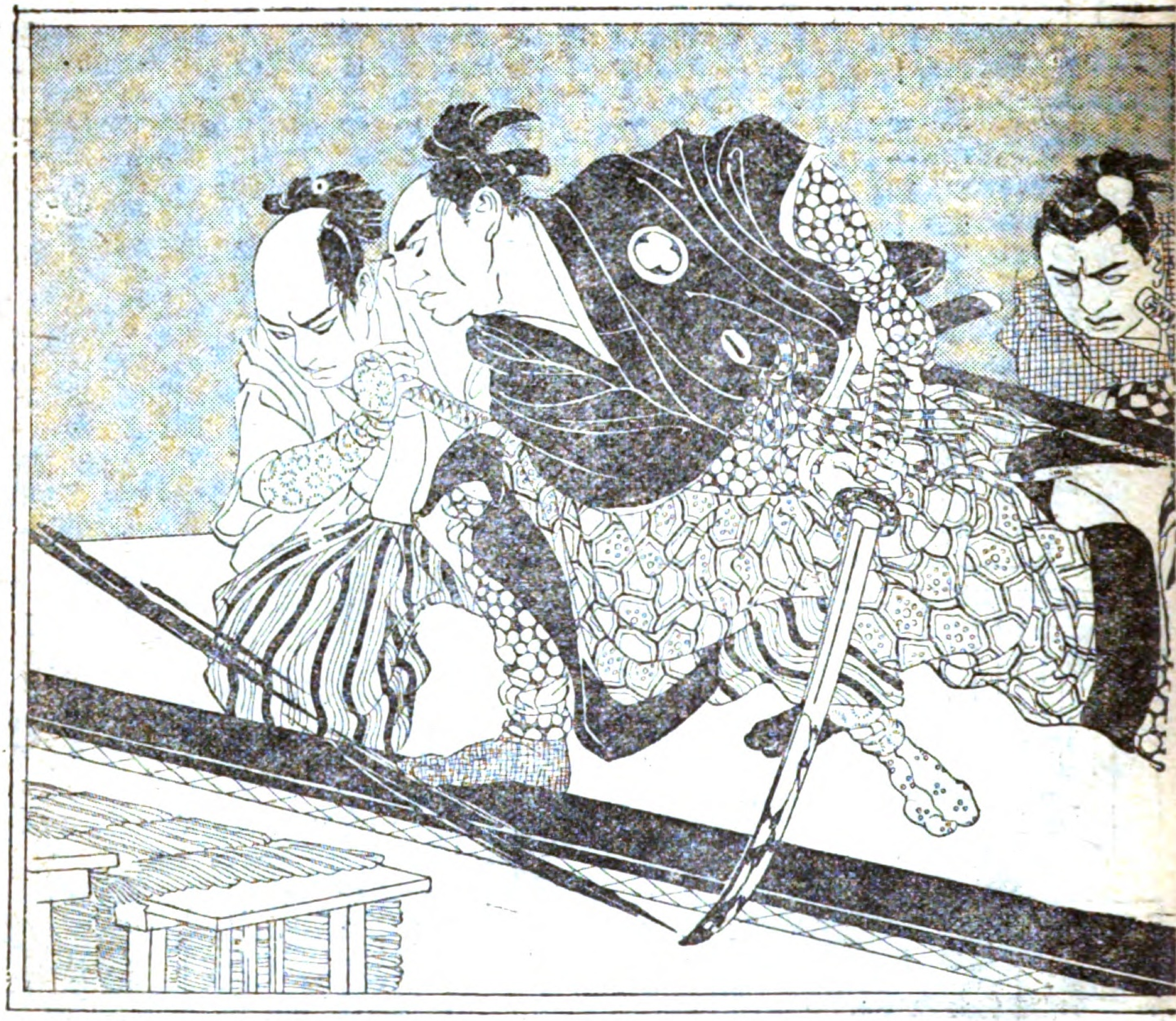
冷やかに應酬し乍ら、唯一の武器と言はぬばかりに指差したのは二張りの灯提に染めぬいた九條家のお紋所です。だが、言はせも果てずに平八郎はそれを抑へつけると、鋭く一喝いたしました。

『恐れ多いこと申すなッ。上御一人に御近親の御身分高い五攝家が、その方ごとき不埒者にお出入り許してなるものかッ。いちいちの怪行、みな證據が擧つてゐるぞッ。』

『なに！　怪行でムりますとな！　勿體なくも豐國觀音のお告げをうけて布教に隨ひまするわたくし、怪行とは聞きすてなりませぬ。しかとの證據お持ちでムりまするか！』

『持たいで何と致すか！　餘人は知らず天滿の大鹽平八郎が、汝を邪宗門布教者と睨んでの詮議ぢや！　豐國觀音なぞとは眞ッ赤な僞り、あれこそはまさしく切支丹伴天連共の信仰致すマリヤ觀音ぢや！　望みとあらば怪行の生きたる證據、この場に見せて遣はさうかッ。』

『これは面白うムります！　いかにもそれなる證據、拜見させて頂きませう！　その代り萬ケ一證據ムりませなんだ曉は、見事に割腹召さります



るな!』

『念もないわッ。正一郎! 格之助! 拔かるなよッ。』

叫びすて乍ら、プッツリ、大刀の鯉口切つて、怪しの大木彫り像に駈け近づくと、

『エイッ。』

裂帛の氣合もろ共、腰なる秋水拔き放つて、修練の一刀に斬り拂ひました。技は元より神道無念流の達者、得物は六世忠吉門人天明行廣の鍛へ打つた大身二尺六寸の直刄物です。見事なその一刀うけて、怪しの大木彫り像は、スパッと不氣味な音立て乍ら、胴から腰へ逢斬りに眞ッ二つとなりました。

と——、何たる奇怪! 只の木彫り像と思ひきや、空洞にくり拔いた胴の中には、まぎれなき人間がかくれ潜んでゐたのです。それと早くも看破つた平八郎の鋭い一閃に出會つて、觀音もろ共胴體二つとなり乍ら、血しぶきあげて無殘な屍をそこに曝露したので、信徒は元よりのこと、九郎右衛門以下十人の配下達も、等しくあッと驚きの叫び聲をあげました。平八郎また何の躊躇がありませうぞ!

『不埒者めがッ。さ! どうぢや! これでも愚民

を惑はす怪行でないと申すかッ。胴中に人間がかくれてをらば、いか程たりとも口が利けるわッ。平八郎の詮議をうけたは、せめてもの冥加ぢや。屑ぎよう繩うけいッ。』

確たる詐術の證據を信徒の面前で曝き乍ら、峻烈肺腑を抉ぐらんばかりに鋭く詰めよつたので、無論のことに一言もあるまいと思はれたのに、しかし貢は飽までも不埒でした。

『存じませぬ！　存じませぬ！　このやうな胴中の仕掛け、身に覺えないことでムります。無實の罪に穽し入れるため、御一統がかやうな企みしたに相違ムりませぬ。尊い御像に不淨な刄なぞお向けなされて、神罰蒙むりまするぞ！』

いざとならば最後の妖術を奮つて、ひと泡吹かさうと言はぬばかりに、冷然とせゝら笑ひ乍ら、言語同斷な佞辯を弄しましたので、嚇怒したのは平八郎です。

『まだ世迷ひごと申しをるかッ。九郎右衛門！　正一郎！　こやつをあれなる表の井戸まで引ッ立てろッ。これ程逃がれぬ證據つきつけられても、まだ四の五の申すならば、今一つ動かぬ詐術の機、瞠いて見するわッ。』



油斷なく配下の者に警固させて、犇めき騒ぎ立つてゐる信徒達を押し分け乍ら、庭先の井戸端へやつて行くと、あの奇怪な噴水を示した獻饌臺を、パッと蹴返へしました。

と――、まこと恐るべき慧眼でした。お賽錢の多寡によつて、噴きあげる水に高低のあつたも道理、獻饌臺の下にかくした璣仕掛のポチを足で押さば、自由自在に井戸水が噴き上るやうに巧みな仕掛けを施してありましたので、いかな怪行者も二つ迄詐術を看破されてはもう絶體絶命であらうと思はれたのに、だが、貢は飽までも不敵でした。

『みなの衆！　もう遠慮は要りませぬ！　神域を穢す不淨役人共、お取り押へなされませ！』

突然うしろに向つて下知を與へると一緒で、いつのまに窺ひ寄つて來てゐたものか、どよめき立つてゐた信徒の群の中から、バラバラと飛び出して來たのは、五分月代に殺氣をたゝへた八九名の拔刀隊でした。

『よツ。身の程知らぬ奴等が參つたな！　笑止な眞似を致すと怪我するぞツ。』

不意の襲撃に正一郎がぎよツとし乍ら言ひ叫んだのを、しかし平八郎は騷がずに下知を與へました。

『せくな！　せくな！　大方から參るだらうと待つてゐたわツ。黑光刺客團とやら申した弓削めの愚かな配下共であらう。格之助、正一郎、今日は平八郎が差し許す！　ゆるゆると生き胴試めせツ。』

『さうでムりましたかツ。弓削めの息がかゝつた奴等と分らば望むところぢや！　瘦せ浪人共！　行くぞツ、行くぞツ。』

斬れとの許しがあつたので、何條正一郎に躊躇がありませうぞ！　一尺八寸鮫鞘仕立ての大脇差しを拔いて放つと、血ぶるひさせ乍ら、ずいずいと、拔刀隊の双襖目がけて躍り入りました。つゞいて格之助もまた入り身星眼。兩名共にまだ前髮立ちの若者でしたが、一つは大鹽塾隨一の慓悍兒大井正一郎です。他はまた神道無念流の免許皆傳うけたる格之助。

『そらみい！　行くといつたらこの通り必ず行くぞツ。』



叫んだ聲と共に、刺客團のいち人は、正一郎のあざやかな車斬りをその腰にうけ乍ら、だッとそこに血しぶきあげつゝ、のけぞりました。格之助もまた同時にいち人――。

『父上、なかなかよい斬れ味で厶りまするぞッ。』

小氣味よげな言葉を言ひ残し乍ら、星眼雁落しに得物をつけて、じりじりとにじり迫ると、誘ひの隙と知らずに挑みかゝつた對手の劍を、ガッとはね返へしたのは、格之助得意の參想返へしです。

『これで三人ぢや。お次はどなたの番ぢや。』

『こやつぢや。こやつぢや。』

引きとつて正一郎が四人目を同じ車斬りに手もなくまた仕止めました。しかも慓悍兒飽くまでも餘裕綽々です。

『雑作がなうて、手持ち無沙汰ぢやわ。も少し強い奴はゐぬか。ゐたら遠慮せずに出い！ 出い！ 前へ出い！』

二

しかし乍ら八郎はその時、肝腎の豐田貢が、そのどさくさ紛れに乘じ乍ら、素早くどこかへ姿を消して了つたことにふと氣がついて愕然となりました。

『よよッ。小癪な眞似致しをつたなッ。正一郎！ 格之助、手間取つたら面倒ぢや！ 早う仕止めろッ。』

折角の長蛇を逃がすやうなことがあつたら事重大だつたので、下知し乍ら自らも天明行廣を拔いて放つと、殘つた刺客團目がけて、さッと躍り入りました。と見て、拔刀隊はむしろ笑止でした。さらでだに正一郎格之助二人の太刀先さへも持てあましてゐたところへ、恐るべき天滿の棟領の峻烈な荒太刀うけては、到底勝ち目なしと知つたものか、一合も合はさずに、どよめき騒ぎつゞけてゐた群集の中に紛れ込み乍ら、ちりぢりに姿を消して了つたので、いづれは祈禱所内か本殿内に逃げ失せたらうと、二人を引隨へ乍ら時を移さず驅け向ひました。

と――、その出會頭に、打ちうろたへ乍ら、驅け近づいて來た者は、配下の同心吉見九郎右衞門です。

『殘念なこと致しました。今ひと足のところで、貢の奴めをとうとう取逃がして厶りまするわッ。』

『なにッ、では、その方達が追うてゐたのか！』

『拔刀隊の奴等が拔きかゝつたのと一緒で、逸早く貢めが逃げ出しましたゆゑ、あとはお三方にまかせてと存じまして、見のがさずに追うて參りましたが、とうとうしてやられましたわッ。』

『妖術でも使ひをつたか！』

『はつ。壁の中へ消えて失くなりましたぞ。』

『なにッ、壁へ消えたとな！ 場所はどこぢや?!』



『本殿の奥でムります。』

『さうか。場所が分らば慌てるところもあるまい。案内いたせ。』

打ち騒ぐかと思ひのほか、落ち付き拂ひ乍ら、渡殿傳ひにそれなる本殿奥へやつて参りました。祈禱所の大廣間に比べて、ここはその四半分にも足らぬ建物でしたが、しかし祭壇に飾られた器物調度は、祈禱所の品々にもまさる贅を極めた南蠻渡來の高値な物ばかりでした。

『消えて失くなつたとか申したところはどこの壁ぢや。』

『その祭壇の横裏でムいますよ。』

『逃げ失せた時はどんな模様ぢやつた。』

『この部屋へ駈け込んで参りましたゆゑ、すぐにあと追うて参りましたら、どうした仕掛がムりますのか、その漆り壁がぽつかり口をあけて、そのまゝ姿が見えなくなつたのでムります。』

無論のことに貫一流の仕掛け壁であるに相違ないことが察せられましたので、平八郎は騒がずに近よると、鋭く烱々と目をそゝぎ乍ら、壁の構造を見調べました。

しかし、いかに調べ直してみても奇怪でした。仕掛けの壁な

ら、どこかにそれと思はれる不審な點があるべき筈なのに、何一つ怪しい節は見當らない尋常普通の塗り壁でしたから、いかな平八郎も思案に餘つて、ぢツとそこに佇んだまゝでした。

と――、その時、計らずも目についたものは、廣前に張りつめた板床のところどころに、不思議な十字形の嵌め込み細工が施されてあることでした。只の模樣と解釋すればそのやうにも思はれましたが、よくよく見調べると、貫がそこから消えて失くなつたと言ふ塗り壁の下にある十字形の一つが、他のはいづれも隙間なくきつちりと嵌つてゐるのに、その一つだけがどうした事か、心持ち盛り上つて、浮き模樣になつてゐましたので、こころみに踏んでみると、何たる奇怪！　それこそはまさしく探し求めてゐた秘密の仕掛けでした。六尺通しの塗り壁が、柱ごとするすると地中に下つて、ぽつかりとそこから地下に通ずる大穴が現れましたので、何條躊躇すべき！

『この先には必ず密室があるに相違ない！　正一郎！　先頭せい！』

『心得ました！』

下知がなくとも先頭は剽悍兒正一郎の望むところです。鐵扇にぎりしめ乍ら、躍然として先づ先に躍り入りました。それにつゞいて養嗣子格之助、三人目に平八郎、それから九郎衞門以下の配下七人。無論のことにいづれも足音忍ばせ乍ら、ひたひたと地下の道を辿りました。

行く程に、果然、三曲り目の曲り角を曲つた向ふから、ちらちらと灯りが洩れました。と同時に、ひそひそと言ふ話し聲です。

『何人位ぢやかそつとのぞいてみい！』

這ひより乍ら正一郎が覗いてゐた容子でした。が、意外な人をでも發見したかのやうに、驚き乍ら歸つて來ると囁きました。

『なんとしたのでムりませう！　弓削新左衞門の奴めが、熊の皮の上にふつくらと陣取つてをりますぞ！』

『なに！　さうか！　やつぱりゐたか。黑光刺客團の奴等がゐる以上は、どこかに潜んでゐるぢやらうと察してゐたが、こゝに揃うてゐるとは勿怪もない幸ひぢや。人數は何名位ぢや。』

『貫めと二人きりでムいますよ。』

『よしツ。いづれも拔かるなよ！』

天滿を立つとき用意して來た、催眠破りの玉藥なる庄司義右衞門創案の炮碌玉を、そつと懷中に握りしめ乍ら、平八郎は悠然と密室内へ這入つて行くと、微笑し乍らズベリと言ひました。

『弓削新左衞門！　一別以來ぢやな。』

『げえツ。』

ここばかりは見つかることとあるまいと思つてか、安神しきつてゐたところへ、餘人ならぬ天滿の棟領が、聲に無限の威嚇を示しつゝ、突如として姿を見せたので、汚漢新左衛門の愕然となつたのは言ふまでもないこと、怪行者豐田貢も、さツと血の色を失ひました。

だが、それは一瞬です。いざとならば貢の妖術に頼られるのを思つて、それに心奢つてか、新左衛門が太々しくせゝら笑ひ乍ら應酬いたしました。

『ここへ來たは袋の鼠ぢや。それ程腹が切りたうなつたか！』

貢もまたかくならば最後の秘術に訴へて逃げ伸びるより術がないと知つたか、膝立て直すと、その目に妖々たる凄氣をこめ乍ら、眠りの術を施しにかゝりました。

けれどもその時早く平八郎の手に要意されてあつたのは、細根木流の炮碌玉です。

『馬鹿者ッ。遲いわッ。』

叫ぶと一緒に、握りしめてゐた一箇をそこの平土間に叩きつけました。

『あッ。』



白煙もろとも轟然と擧つた大音響のために、最後と頼んだ術氣はもろくも打ち破れたので、貢、新左衞門のうろたへたのは言ふまでもないことでした。

『さうか！ もうこれ迄ぢや！ 貢どのあとを頼むぞッ。』

叫びすてると、拔け穴傳ひに身をひるがへし乍ら、卑怯にも新左衞門は一散に逃げのびました。そのあと追つて、正一郎、格之助、九郎右衞門の三人が殺到しようとしたとき、貢もまたなかなかにさる者です。素早く拔け穴口に駈け近づくと、少しでも追ふのを手間取らせようとのつもりからか、懐劍咽喉につき立て乍ら、身を以て穴をふさぎました。

『よよッ。』



打ちおどろき乍ら三人の者が、蹴倒してあと追はうとしたのを、だが、平八郎が落ちつき拂ひ乍ら命じました。

『罪を知つて自刄するとは健氣な奴ぢや。手荒にせずと、息の絶えるのを待つて遣はせ。』

『でも手間取りますれば、弓削めが逐電して了ふではムりませぬか！、

『せくには及ばぬ。この抜け穴はまさしく與のあの祠に通じてゐる筈ぢや。今頃はとうに瀬田が締めあげてゐるに相違ないわ。』

情けあるその計らひが、斷末魔の貢にも通じたものか、一世を震撼させた怪行者は、靜かにその手でおのが胸に十字を切り乍ら、安らかに息を引取りました。

『幸ひそこに油があるやうぢや。火葬して遣はせ。』

燃え上つた火焰の中に、貢の屍が包まれていつたのを見すまし乍ら、平八郎は迫らずに先頭へ立つて、抜け穴を奥へ奥へと辿りました。

と――、まさしく平八郎の言葉通り、その地下道の通じてゐた先は、本殿裏の道を隔てた森中のあの祠でした。

『捕らへましたぞ！ 捕らへましたぞ！ 弓削めを捕らへましたぞ！』

しかも推察通り、瀬田濟之助が、張らしておいた六人の配下と共に新左衞門を押へ取つて、そこに待ちうけてゐたので、平八郎は靜かに歩みよると、只ひとこと鋭く言ひました。

『力と頼んだ貢めも自刄したぞ！ 女子ですらも時を知らば處決するのに、見苦しう逃げ走るとは何たる無様ぢや！ さ！ 立ちませい！』

三

しかし、途中で宿駕籠を見つけると、平八郎は細心の注意から特に弓削新左衞門を乘せ移つしました。捕り餘した黒光刺客團の殘黨を恐れたからではなく、かりにも人の上に立つ與力の職を奉じた來歷ある者が、白晝縄目をうけて引き立てられて行くのを道行く人に發見されたら、一新左衞門の恥辱のみならず天滿組一統の名折れであるのを知つたからです。――天もまた平八郎の配慮を察してか、伏見街道にさしかゝつた頃から、黒黒と重く雲を垂れて、ポツリ、ポツリと粒雨を見せました。

そして淀へ行きついたのが丁度晝下り。

『誰ぞ舟を見つけて參れ。』

大川下りの苫舟を雇はせると、早瀬に乘つて、天滿組十八人の精鋭は、嚴重に弓削の監視をつゞけ乍ら、その夜の深更、首尾よく天滿東町の御奉行所に辿りつきました。

『夜中お起し申して失禮ぢやが、御奉行殿もさぞかし御待ち兼ねでムらうゆゑ、始終の顛末、九郎右衞門と瀬田の二人で、ご

報告申しあげろ。思はぬ土産物を召し捕つて歸つた旨も忘れるなよ。』

命じておくと、その土産物の弓削新左衛門は、別棟造りの揚り屋牢に自身引ッ立てていつて、屈強な牢番八人を選らみ出し乍ら、嚴重に張番させました。

かくして、漸く長蛇を押へ取つた平八郎は、そのあくる朝にも奉行所へ出仕して、すぐにも弓削新左衛門の制裁處決を講ずるだらうと思はれたのに、しかし事實は反對でした。それから三日の間、洗心洞の大書院に閉ぢこもつたまゝ、しきりに何事か熟慮を重ねてゐた容子でしたが、つひに決心成つたか、その三日目の夜の初更すぎです。

『格之助！　格之助！』

呼び招くと、猪突な命令を發しました。

『翁庵へ參つて、何ぞ餡物の菓子を一と折、至急に整へて參れ。』

『どこへお届けするのでムります。』

『要らぬ詮議せいでもよいわ。早う購つて參れ。』

いぶかり乍ら格之助が買ひ整へて歸つた一と折を携へると、たゞちに奉行お役宅へ伺候して、唐突に言ひました。

『突然でムりまするが、弓削めの命は手前にお下げ渡し下さりませ。』

『不意に異なことを申すが、何といたす所存ぢや。』

『表立つて處刑致しますれば、上役人の綱紀が紊れてゐたこと世上に吹聴するも同然でムりますゆゑ、一服盛る覺悟にムります。』

『なに！　毒殺致すつもりとな！　ふうむ！　さうか！　しかし、弓削とても武士の端しくれぢや。それならば情けを以つて自刃させたらどうぢや。』

『左様出來ればこの上ないことと存じまして、實は今日が日まで御出仕も致しませずに、とくと熟慮を重ねましたことでムりまするが、いつぞや城中で對決願うた折も、あの通り卑怯な振舞ひあつた弓削めにムります。きやつに武士の最期を待つは、木に縁つて魚を求むるやうなものでムりますゆゑ、不憫乍ら一服盛るよりほかに良策はないかと存じます。』

『ふうむ喃。人を見て法を説くと言ふ奴か。――よしッ。思ひのまゝに致せ。』

『では、御秘薬一服、お下げ渡し下さりませ。』

頷いて、用意の菓子に仕込むと、感無量げに携へ乍ら、たゞちに揚り屋牢に行き向ひました。

しかし、お役宅を出て、牢屋敷の方へ曲らうとしたその出合頭です。瀬田濟之助が、血相替へ乍ら驅け近づいて來ると、うろたへて言ひました。

『お！ 洗心洞の先生でムりまするか！ 丁度よいところでムりました。大變なことが起きましてムりまするぞ！』

『慌たゞしう何事ぢや。』

『弓削が、弓削めが破牢致しましたぞ！』

『なにッ。すりや本當か！ いつぢや？！ たつた今か？！』

『暮れ六つの見廻り時にはたしかに異常ムりませなんだゆゑ、ほんの今らしうムりまするぞ！』

いかでおどろかずにゐられませうぞ！ 物に動ぜぬ平八郎も愕然と色を失ひ乍ら、たゞちに現場へ馳せつけました。と同時に再びぎよつとなりました。何者かが手引して黒光刺客團の殘黨たちと連絡を計つたらしく、無殘に斬り殺された八人の牢番達の死骸と共に、そこの押し破られた牢格子の一本には、次の如き憎々しげな貼紙がしてあつたからです。

『ざまを見ろ。俺には無盡藏に味方があるわ。明日にも手段を替へて魔の手をのばしてやるから泡を吹くな。』

しかもその二日目の夕刻です。殘しておいた貼紙の魔の手といふのはそれであるのか、肝膽相照し、信任厚かつた東町奉行高井山城守が突如としてその奉行職を剝奪された旨のしらせが、門人瀬田濟之助によつて洗心洞に報道されました。

（つゞく）



諧謔小説

新家庭双六

佐々木邦
挿繪　田中比左良

上り。榮轉

里見君と徳子さんは細井家の自動車で家まで送られた。途中、動揺が激しくて二人の身體が相接した時、里見君は思ひついて、徳子さんの手をコッソリ握つて見た。徳子さんは握り返した。

『馬鹿ね。』

『馬鹿だ。』

と、これは運轉手のことだつた。好い面の皮だ。圓タクもこんなことをやられてゐるに相違ない。若夫婦にはぼつてやるが宜しい。

家に着くと間もなく、

『はて、何ういふ意味だらうかな？』

と里見君が首を傾げた。越すなと細井さんが嚴命を下してゐる。その研究だつた。

『籤引きよ、結婚てものは。』

と徳子さんは叔父さんの警句を胸に浮べてゐた。

『含蓄が深い。』

『名言ね。』

『何が？』

『結婚籤引き説よ。苦勞をした人は仰有ることが違ひますわ。』

『あれぐらゐのことは俺だつて考へてゐる。』

『でも仰有つたことございませんわ。』
『言はないけれど、然う思つてゐたんだ。』
『負け惜みが強いのね。立派な警句ぢやございませんか？』
『あんな長つたらしい警句はない。間が伸びてゐる。』
『でもあなたは寸鐵ですつてお褒めになつたぢやございませんか？』
『惡く言へば叱られるからさ。』
『狡いのね。』
『そこは下役だ。心得たものさ。お太鼓を叩く。』
と里見君は調子づいてゐた。
『あなたは何でございませうかね？』
『何が？』
『鬮よ。』
『悉皆感心してしまつたんだね。』
『等外ぢやなくて？』
『さあ。』



『空つ鬮かも知れないわ。』
『迚も重役つて柄ぢやない。』
『私も道々考へて心細くなつたわ。』
と徳子さんは見括つてゐる。新婚當時は重役まで漕ぎつけさうに思つたが、日數のたつにつれて本當の値打が分つて來た。
『空つ鬮だつたら何うする？』
『仕方ありませんわ。』
『恨まないかい？』
『えゝ。』
『諦めが好いんだね。』
『そこが鬮ですわ。これなら好からうと思つて引いたんですもの。』
『有難いな。大切にしてやらなければ濟まない。』
『何故？』
『空つ鬮かも知れないものを信用して來てくれたんだもの。』

と里見君もこの心掛けを忘れてはいけない。

『然う思つて戴けば、私も滿足よ。』

『重役にならなくてもかい？』

『え〻。』

『空つ閑でも？』

『空つ閑なんてことありませんわ。』

『一番惡く轉んでも等外だらう。まさか四十五十になつて路頭に迷ふやうなこともあるまい。』

『それは然うと、あなた。』

『何だい？』

『引つ越しは何うなりますの？』

『さあ、叔父さんは越すなと仰有つた。殆んど命令的だつたよ。意味深長ぢやないか？』

『母は越せと仰有つてゐますわ。』

『何うしたものだらう？』

『あなたは母よりも叔父さんがお好きでございますからね。』

『おい〳〵、よしておくれ。』

『私、越したいわ。』

『お前は叔父さんの心持が分らないんだね？』

『何故？』



『叔父さんは俺を轉任させる積りらしい。』

と里見君は心窃かに忖度を發表した。

『まあ！』

『それだから當分見合せろと仰有るんだ。四谷だからつて次第ぢやなかつたらう。』

『え〻。』

『轉任だ。何うも然うらしい。』

『何處でせう？』

『大阪か神戸か名古屋の中だ。ずつと飛べば福岡だけれど。』

『皆遠いのね。しかし俸給が上るんでございませう?』

『無論さ。榮轉だよ。』

『有難いわ。』

『しかし困ることがあるよ。』



『私も。』

『それさ。お前は汽車に乗れない。』

『里へ行つてゐるから宜いわ。』

『轉任となると、差當り頼まなければならない。』

『幾らお嫌ひでもね。』

と德子さんは一寸厭がらせを言つて見た。

里見君は至つて單純だ、考へたことを凝つと胸に納めて置くほどの器量人でない。殊に好い方の想像だから、誰かに話して、肯定して貰ひたい。獨り極めでは安心がならない。それで翌日執務時間中に、

『坂本君、君に一寸一つ判斷して貰ひたいことがあるんだが。』

と向き直つた。

『ほいツ。』

と坂本君は直ぐにペンを置いた。實は里見君のソハ〳〵するのが先刻から目についてゐたのだつた。

『昨夜細井さんのところへ行つたんだよ。』

『それから何うした?』

『頭を惱ましてゐた移轉問題が好い都合にでんぐり返つたんだよ。』

『何うして?』

『妻が越すことを話し出したら、細井さんはそれはいけないと

言ふ。引つ越しは當分見合せろと來た。』

『成程。』

『何ういふ意味だらうか？』

『さあ。』

『無意味だらうか？』

と里見君は眞正面から伺ひを立てた。

『待ち給へよ。』

と坂本君は周圍を見廻した。消息通だから、斯ういふことは自分の畑と心得て、他人の容喙を歡迎しない。里見君も憚るが如くヒソ〳〵と前後の事情を打ち明けた。

『成程。』

『何うだらう？』

『先づ家へ歸つて徳子さんを拜むんだね。』

『え？』

『惡いことは言はない。』

『冗談は兎に角。』

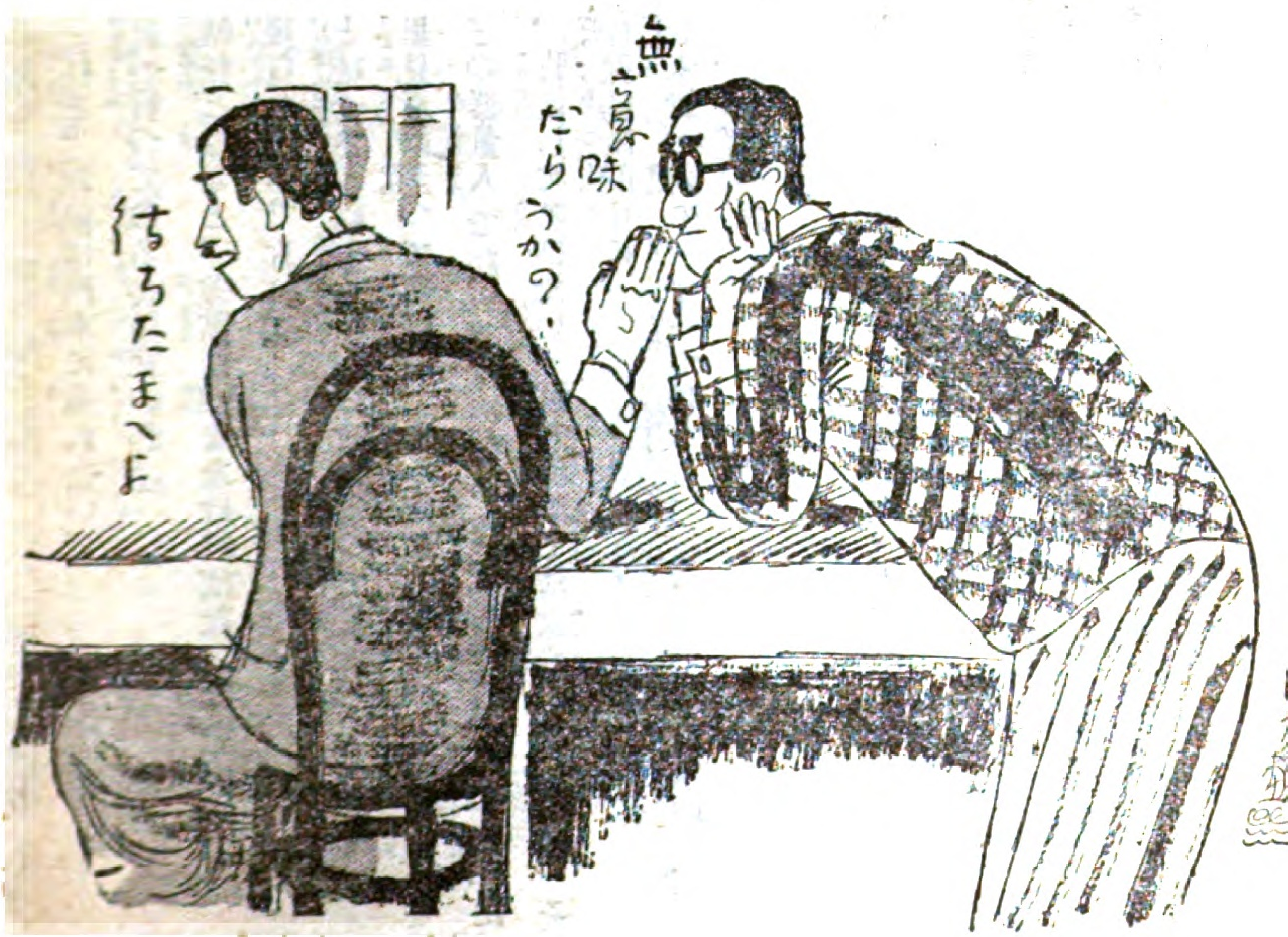
『榮轉だよ。』

『然うか知ら？』

『他に考へやうがない。矢つ張り御利益がある。』

『ヘツヘヽ。』

『これは庄司君の豫言が中つた。庄司君。』



と庄司君が立つて來た。

『恐れ入つたよ。』

と坂本君は鐵から棒に敬意を表した。

『何が？』

『恐れ入つたる御眼力。』

『それは當り前だが、何の口だい？』

『準女婿の口さ。』

『おい。よせよ。』

と里見君が制した。

『此奴が何うした？』

『榮轉らしいんだ。』

『言はないこつちやない。』

と庄司君が坂本君のお株を奪つた。坂本君は臆測の根據を説明して、

『僕は來月と睨むでゐるが、何うだらう？』

と意見を求めた。

『無論さ。斯ういふことは暮が切り換へだよ。しかし内命は一月前に出る。』

『するともう出てゐる筈ぢやないか？』

『鈍いね。』

『何うして？』

『里見君。』

『何だい？』

と里見君は聲を潜めた。

『大將、何か大阪の話をしやしなかつたかい？』

『さあ、一向。』

『それぢや二三日中だよ。』

『すると大阪だね？』

と坂本君が訊いた。

『然うさ。』

『君は何ういふ根據がある？』

『ハツハ、、。』

『何處から聞き込むだのかい？』

『何あに。』

『しかし妙に斷定的だもの。』

『肥塚君の前例から判斷するのさ。あれも準女婿だからね。』

『成程。』

『僕はこの夏から豫言してゐるんだ。ねえ、里見君。』

と庄司君は益々鼻を高くした。



『まあ／＼、內證にして置いてくれ給へ。僕の思ひ過ぎかも知れない、パツと擴がつてしまつて、轉任でも何でもないんだと、好い恥をかく。』

と里見君は內心幾分の疑惧があつた。考へて見れば、引つ越しはやめろと言はれた丈けで、他には何も具體的な捉へどころがない。

後刻、食堂で庄司君がヒソ／＼話しかけた。

『君。』

『何だい？』

『僕丈けに話せよ。』

『何を？』

『先刻のことさ。』

『あれはあれ丈けだよ。』

『昨日あたり課長から內意があつたんだらう？』

『ないよ。』

『匿すなよ。誰にも言はないから。』

『ないものは仕方がない。』

『變だね。』

『何故？』

『異動の辭令は暮の俸給日だぜ。もうソロソロ何かある筈だよ。』

『矢つ張り駄目かな。』

『何あに、大丈夫なことは大丈夫だけれど。』

『何うして？』

『僕が保證するよ。』

『君の保證ぢや心細い。』

『まあくく、默つて有象無象の顏を見てゐるのさ。此方の知つてゐることを誰も知らないでゐると思ふと痛快だ。びつくりするぜ皆。』

と庄司君は例によつて獨り呑み込んでゐた。

それから里見君は待ち始めた。突如轉任の辭令を出す筈はない。形式的にも一應意向を尋ねるに定つてゐる。

『里見君、一寸。』

と來れば、もう占めたものだ。細井さんなら給仕を寄越して、

『里見さん、一寸重役室まで。』

と改まる。

『そら、來た。』

と坂本君が羨ましがるだらう。

『見給へ。』

と庄司君は爲たり顏をするに相違ない。里見君はそんなことばかり考へてゐたが、細井さんからも課長からも音沙汰なしに數日過ぎた時、少々迷ひ始めた。

『あなた、何うでございましたの？』

と德子さんが毎日のやうに訊く。

『一向。』

『駄目ね。』

『さあ。』

と里見君は元氣がない。

十一月の晦日は例によつて、支拂が二十何萬圓かの超過だつた。德子さんはその報告をしながら、

『矢つ張り音沙汰なし？』

と良人の氣色を覗つた。

『うむ。』

『諦めものでせうか？』

『さあ。』

『私、詰らないわ。』

『捕らない狸の皮算用をするんだもの。』

『だつて。』

『果して轉任するとしても、二十五圓なんて、そんなに上りつこはないよ。』

と里見君は徳子さんの拵へた新しい豫算表に見入つた。

『でもあなたが然う仰有つたんですわ。これからは第二號も特別表で行くんですつて。』

『然うは問屋が卸しさうもない。』

『私、ソロ〳〵鬮が當るのかと思ひ始めたんですけれど。』

と徳子さんは家計簿の一頁に棒を引いた。

『未だ分らないよ。』

『それぢや上つて?』

『いや、鬮の方さ。それは二十年先のことだもの。』

『引つ越しも駄目、轉任も駄目ぢや、私、何んなに損をするか知れませんわ。』

『ハヽヽヽ。』



『笑ひごとぢやありませんよ。』

『誰を恨みやうもない。』

『私、もう一遍叔父さんのところへ上つて參りますわ。』

『何しに?』

『それとなく當つて見ますわ。』

『よしておくれ。俺は必ずしも轉任が希望ぢやない。』

と里見君は負け惜みを言つた。

『あなたは變な人ね。』

『何故?』

『これで芽を吹くんだつて、喜んでいらしつたぢやありませんか?』

『吹けば吹くで苦情もないさ。』
『いゝえ、あなたは矢つ張り片意地よ。』
『何うして？』
『細井の叔父さんのお世話になるのがお厭なんですわ。』
と徳子さんは里見君の心持を誤解してゐる。
里見君も世の常の青年會社員だ。三角形の一邊が二邊の和よりも短いことを知つてゐる。道案内さへあれば、無論捷徑を選ぶ。しかし手引が當てにならない場合は他に仕方がない。
『おれも男だ。』と發奮する。この激しいのになると、取り入り得れば上役で、然もなければ喧嘩だ。
『お天道さまはこの會社にばかり照らない。』
となる。お天氣都合で主義が何方へでも動く。
『厭つてこともないが、特別に引き立てゝ貰はなくても宜いのさ。』と里見君はもう旋毛を曲げてゐた。
もう一方、會社では庄司君が、
『君。課長から何かあつたかい？ 未だかい？』
と妙に急き立てる。
『駄目だ。』
『しかし大丈夫だよ。』
『何故？』
『君のは細井さんの關係だから、課長の手を經ないのかも知れない。』
『然う善意にばかり解釋してゐると失望する。僕も男だ。』
『豹變かい？』
『何が？』
『まあ〳〵、安心して待つてゐ給へ。』

『もうこの問題は打ち切りにしようよ。』
『諦めるのかい?』
『うむ。』
『何うしてこんなに焦らすんだらう?』
『え?』
『何あに。』
『もうよさうよ。詰まらない。』
『おこつたのかい?』
『うむ。變なことを言ふと撲り倒す。』
と里見君は氣が荒くなつてゐた。
或日の午後、重役室の給仕がツカ〳〵と入つて來て、販賣課の諸賢を見廻した。里見君は、
『來た。』



と思つたら、胸がドキッとした。矢張り待つてゐたのだつた。しかし、
『庄司さん、細井重役が御用でございます。』
とあつて、給仕め、庄司君を残して行つたのには多大の失望を感じた。
『何だらう?』
と坂本君も見逃さなかつた。
『さあ。』
『首ぢやあるまいか?』
『さあ。』
『お歴々と違つて、お互のところへ直接呼出しのかゝることはないよ。』
『然うさね。』
『彼奴、遣り過ぎるからね。』
『喋り過ぎる。』

と里見君は冷淡を極めた。坂木君は少時考へ込むで、
『これはナカナカ手間が取れる。』
と再び問題に戻つた。
『もう歸つて來るだらう。』
『時節柄だからね。心配だよ。』



『さあ。』
『因果を含められてゐるんぢやなかろうか?』
『此年は首なんかないつて保證してゐる先生だ。大丈夫だらうさ。』
と里見君は全く他事だつた。
そこへ給仕が又現れて、
『里見さん。』
と近づいた。
『はあ。』
と里見君はバネ仕掛けのやうに立ち上つた。
『細井重役が御用でございます。』
『はあ。』
『イヨイヨ來たね。』
と坂木君が囁いた。
里見君は重役室の入口で庄司君に摺れ違つた。咄嗟の間に庄司君は片目を閉ぢて何か傳へたが、通じ兼ねた。
『里見君、掛け給へ。さあ。』
と細井さんが請じた。
『はあ。』
『望月君から話があつたかね?』
『いや、一向。』

『ふうむ。』
『何でございますか？』
『この間から相談中だつたが、君、一つ大阪へ行つてくれまいか？』
『出張でございますか？』
と里見君は態と誤解した。
『いや、半永久だ。』
『はゝあ。』
『何うだね？』
『會社の御都合なら何處へでも參ります。』
『君の將來の爲めにも損はなからうと思ふ。丁度二人明くので、人選を望月君に賴むで置いたら、君と庄司君が適任だらうといふことになつた。』
『有難うございます。』
『遠方で御苦勞だけれど、若い中に彼方此方歩いて會社の事情に通じて置く方が宜い。』
『はあ。』
『此方から見ると責任のある地位だから、一生懸命でやつてくれ給へ。』
『はあ。』
『それぢや月末に辭令が出るから、その積りでね。』



『はあ。』
『宜しい。』
と細井さんは頷いた。もう歸れといふ意味だつた。

『何うだい?』
と庄司君が迎へた。
『驚いた。』
『僕は先月から分つてゐたんだよ。』
『何うして?』
『課長から豫め相談があつたのさ。』
『ふうむ。』
『彼方は君達新進の敏腕家に俟つところが多いと複數で來たから、君の分も察しがついた。』
『それなら然うと早く言つてくれゝば宜かつたのに。』
『口止めをされてゐたもの。』
『心配したぜ。』
『僕は可笑しくて仕方がなかつた。』
『君とは惡緣が盡きないんだね。』
『お互に。』
『宜しく賴むよ。』
と里見君は悉皆明るい氣分になつた。
『うまくやりやがつた。』
と坂本君は側から祝して、
『吉田君、川上君、一寸。』
と呼んだ。

『何だい?』
と二人は程距てた机から立つて來た。
『言はないこつちやないぜ。』
『何だよ? 一體。』
『豪いことになつた。』
と坂本君は例によつて最初から與り知つてゐたやうに吹聽した。
庄司君は里見君を小脇へ招いて話し續けた。大得意だ。
『僕が言つたらう? 此方の知つてゐることを誰も知らないでゐると思ふと痛快だつて。』
『うむ。』
『これだよ。』
『意味ありげに思つたが、何うも僕は鈍いよ。察し切れなかつた。』
『坂本君には可なり際どいところまで話したんだけれどもね。』
『しかし大將も全く寢耳に水だつたぜ。』



『鳩豆さ、氣が利いて間が抜けてゐるんだ。急所が分らない、あの男は。』

『悉皆皆出し抜いた形だね。』

『此方は初めからその計畫だもの。あれで一端消息通をもつて任じてゐるんだから、可哀さうなものさ。』

『君が呼ばれた時、首ぢやなからうかつて、心配してゐたぜ。』

『冗談言つちやいけない。首どころか、抜擢だ。上るぜ。』

『幾ら？』

『ハツキリしたことは分らないが、家賃ぐらゐは浮くだらう。』

『大きいね。』

『それに君。』

『何だい？』

『肩書がつくらしい。』

『然うかい！』

『係長らしい。心得つて字はつくだらうけれども。』

『有難い。』

と里見君は額を叩いた。これでも男だ。月收が二三十圓増すと、人生觀が違つて來る。

『準女婿は矢つ張り準女婿丈けのことがある。』

と吉田君は遠慮のないところを述べた。尤も里見君は聞いてゐない。

『里見君は特別だが、庄司君も豪い。抜擢だもの。』

と人柄の好い川上君が感心した。

『拔け目がないよ。』

『皮肉なやうでも、お互と違つて、何處かに立ち廻りの巧者なところがあるんだね。』

『ヘツへ、。』

と坂本君は鼻先で扱つた。

『何だい?』

『庄司君は頭のお相伴だよ。』

『何故?』

『細君さんだつて、里見君獨りを榮轉させる譯に行かない。事務への手前があらあ。しかも庄司君と一緒なら申譯が立つ。』

『成程。』

『附錄だよ、庄司君は。』

『流石に見てゐる。僕は餅屋だ。』

『實は僕も直ぐ然う思つた。』

と吉川君は好くないところを主張した。

『その爲め大阪では一人で宜い處を、二人前になつてゐる。』

『南無阿彌陀佛。可哀さうに。』

『あれはあゝした男さ。お相伴を拔擢と信じてゐれば、世の中も樂だよ。ハツハヽヽ。』

と坂本君は溜飲を下げた。

『何だい?』

と庄司君が寄つて來た。

『君は拔け目がないて話さ。』と吉川君が取繕つた。

『當り前よ。』

『しかし多少火事泥の傾向があるぞ。』

『何故?』

『會社から旅費を貰つて結婚に行くのは君丈けだもの。』

『そこさ。』と庄司君は益々得意だつた。『暮に大阪へ行つて嫁を貰つて來ることになつてゐる。』

『時に君は印度にゐたことがあるかい?』

『え?』

『印度だよ。』

『お姉さん色が黒いつて意味かい?』

『いや、斯ういふ話があるんだよ。印度の山の中で汽車が象と衝突して、支離滅裂さ。』

『何方が?』

『これは失敬。象さ。しかし乘客が寄つて群つて見ると、もう象牙がなくなつてゐる。何うだい? 世の中には隨分拔け目のない奴がゐるものだつてことさ。』

『庄司君なら實際それぐらゐのことをやり兼ねないよ。』

と川上君が保證した。

その夕刻、里見君は停留場から小走りをして歸り着いて、

『おい／＼、徳子。』と呼んだ。

『お歸りなさいまし。』

『芽を吹いたよ。』

『あらまあ！』

『大成だ。』

『本當？』

『嘘をつくものか。』

『嬉しいわね。』と徳子さんは手を取つて引き上げた。出世の見込が立てば、待遇も自ら違ふ。

食事中、里見君は一部始終を物語つて、

『これからが振り出しのやうなものさ。有望だよ。』

と意氣軒昂たるものがあつた。

『結構でございますわ。』

『感心したかい？』

『はあ。』

『豪いものだらう？』

『そんなに強要なさらなくても宜いわ。』

『ハツハヽヽ。』

『到頭二號表ね？』

『然うさ。斯うなると一號表の連中が氣の毒だ。』

『構ひませんわ。他は他ですもの。』

『二號表も特別だからね。』

『矢つ張り頼みになりますわ。』

『おれも男一匹だ。』

『あら、あなたのことぢやなくてよ。』

『誰のことだい？』

『叔父さんよ。』

『叔父さんへはお前からお禮に上つておくれ。』

『はあ。』

『兎に角、肚のある人だ。感心した。目につかないやうに引き立てゝくれるから有難い。』

『オホヽ。』

『何だい？』

『ホ。オホ。』

『何だよ？　顏ばかり見て。』

『私、嬉しいのよ。』

『お前に喜んで貰へれば、俺も張合が出る。』

『矢つ張り空つ圖ぢやなかつたわね。』

と徳子さんは滿足だつた。（をはり）

知つておきたい

銘仙の買方見分方

三須　裕

現在、銘仙の産地は伊勢崎、秩父、桐生、八王子、米澤、足利、越後等であります。就中伊勢崎、秩父は昔からの銘仙の産地として有名であります。

伊勢崎――伊勢崎の銘仙は縦糸が絹糸紡績で横糸は節糸を用ゐて、柄は模様、絣ともに銘仙界では一番いゝものとせられて居ります。値段も高いものが多くあります。

秩父――秩父の銘仙は從來は丈夫で幾ら洗濯をしてもはげず、長持するのが自慢でありました。これは縦糸横糸共に節糸を使つたからで、從つて、地が荒く柄が、野暮でした。それだけ流行から遅れて來たため、最近では方針を一轉して來ました。

足利――足利の銘仙は模様に非常に苦心してゐます。糸は伊勢崎と同じ組織です。唯足利物には糸數の多いものと少ないものとがありますから注意を要します。

桐生――桐生銘仙は足利と同じ歩み方をして居ります。

八王子――八王子は最近銘仙を少し出しましたが、柄行きに中々新らし味があります。

銘仙の標準値段……銘仙の値段は、近頃滅茶苦茶です。上は、伊勢崎物になりますと、二十圓近く、一方には四五圓位の安物が店頭に出てをります。

一體どの位が銘仙の相場であるか、分りかねますが、

模様銘仙　十圓以上
絣銘仙　九圓以上
新銘仙　十一圓以上

と言ふ處が標準相場でせう。

從つてこれ以下のものを買ふのは、『安物買ひの錢失ひ』かも知れません。

何故銘仙に値開きがあるか

何うして銘仙といふものにそんなに値の違ひがあるのか、それには色々の理由がありますが、先づ、

一、糸數の多少が値を上下します。普通銘仙は一幅に縦糸を二十算以上使ふことになつて居ります。が、それ以下のものはそれだけ値段も安くなるわけです。然しこれは素人の眼には見分けられません、とにかく同じ柄で値段に高いのと安いのとある時は、糸數の多少によるものと思はねばなりません。

一、無論、柄によつて値段に高低のあるのは言ふまでもありません、新らしい骨の折れた柄は何うしても高くなります。

一、また、縦横共に節糸を使つたものは、節が多く出てゐて見てくれこそよくありませんが、洗濯に強く、持ちがよろしいから値段は却つて高いのであります。反對に絹紡と節糸とで織つた銘仙は、ためらかで地は綺麗に見えますが、實用的價値は節糸の物より劣ります。

尚、絹糸と綿糸とを交ぜ織つた交織銘仙、綿糸ばかりでの綿銘仙、綿糸に人絹を應用したもの、綿布に銘仙式の柄を捺染した捺染銘仙等ありますから、買ふ時には相當の注意を要します。

格安銘仙の買ひ方……銘仙の格安物を掘り出すのは百貨店等の特賣部を漁るに限ります。此處には本當に安いものもあります、安いだけで品の悪いものもあります、これを見分けて、値段の割に良い品物を探し當てるのが買ひ巧者であります。これは相當の經驗が要りますが、前に述べた銘仙の値段の高下のあるのを考へて、少し柄は悪いが――と思ふ物を買ひますと、柄の上で少し流行遅れでも持ちのいゝ、實用的價値の十分にあるものが得られます、特賣部で柄の新しい物は、却つて格安物でないことの多いものです。

娛樂室



廻る、廻る、クルクル廻る。雜誌を手に持つて廻して下さい。

○海の讀み方さまぐ

川村恒夫（寄）

一、海膽の海
二、海老の海
三、海月の海
四、海鼠の海
五、海苔の海
六、海豹の海
七、海人の海
八、海星の海
九、海豚の海
十、海松の海

○滑稽洒落對話

○『洋傘を忘れて困つたなア。』
●『ソラ（空）見たか』
○『獸醫が汽車に轢かれたさうだ。』
●『それや犬死だ。』
○『盲人を欺した人があるのよ。』
●『ソリヤあんまりだわ。』
○『此の佛樣は彫刻が拙いよ。』
●『ブツブツ（佛々）言ふない！』

科學手品



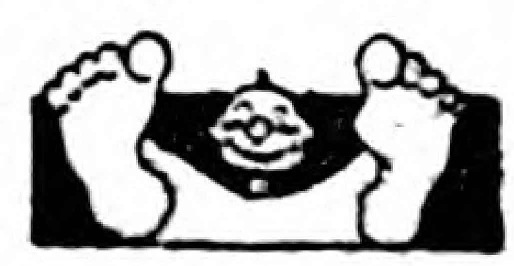
コップが火を消す

中西芳朗

空のコップで火を消して御覧に入れます（と、ムギワラで息を静かにうんと吹き込んだコップをローソクの上へ、水でもそそぐやうに、持つて行きます）はつ、この通り火が消えました。（喝采）



〔說明〕コップの中へ吹き込んだのは、たゞの空氣と違つて肺から出て來た炭酸ガスです。炭酸ガスは空氣よりも重く、火を消す性質があります。



笑ひ話

宿題―― 學校歸りの生徒（食料品店へ駈込んで）『をぢさん、一斤三十二錢の砂糖を七斤、一圓二十錢の紅茶を三斤、九錢のメリケン粉を八斤、それから七錢の卵を一ダース、みんなでいくら？』

店員『エーと、丁度七圓四十錢でムいます。有り難うムいます。』

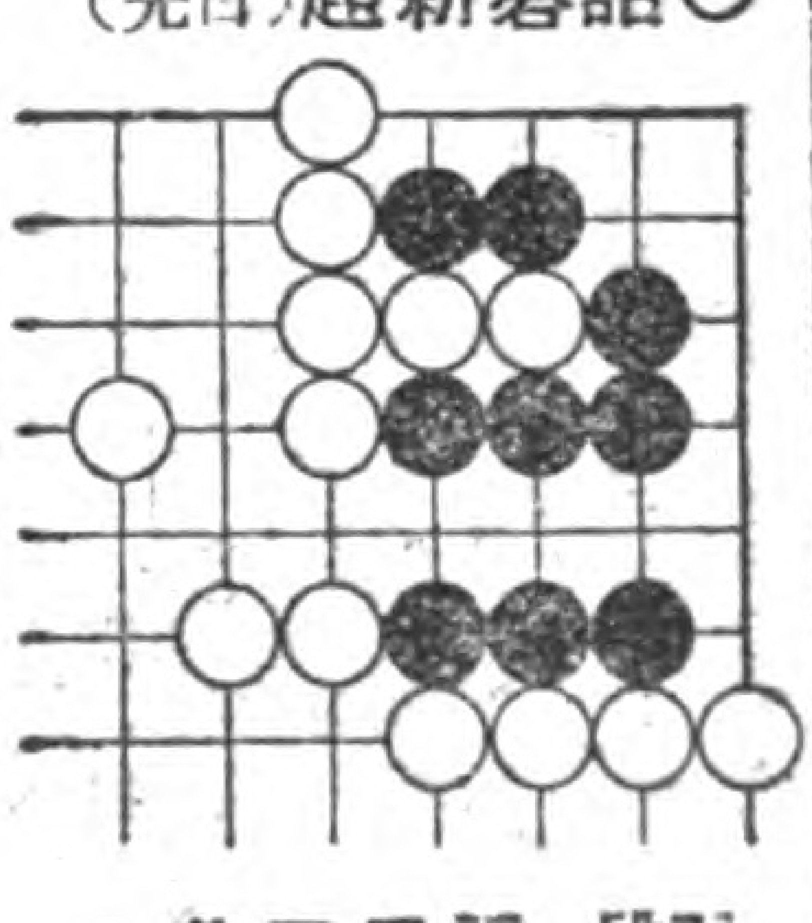
生徒『僕の方が有難うなんだよ。それで今日の宿題はみんな出來ちやつた。』



眞に迫る―― 犯人が『硝子物御用心』と書いた空箱の中へ逃げこんだのを見た巡査、棒でコツコツ箱を叩くと、中から低い聲で、



○詰碁新題（白先）



五段 福田正義

○詰將棋新題

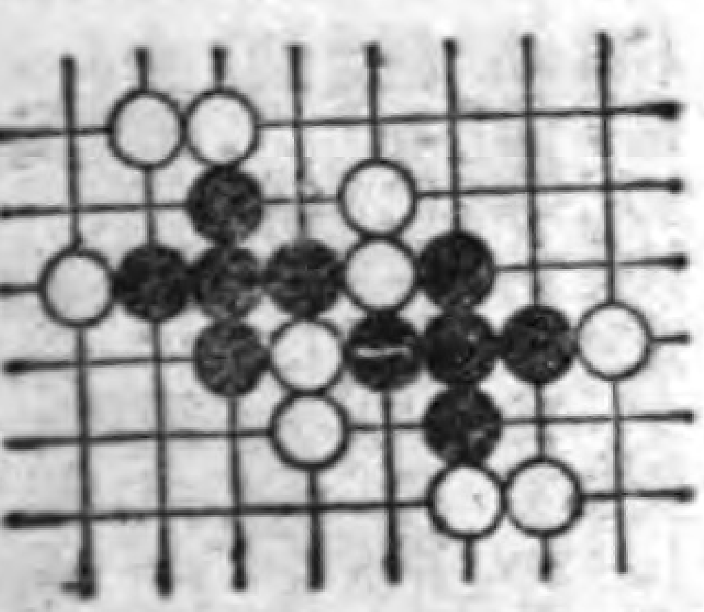


持駒 金 飛

四段 小林泰桂

○聯珠新題

珠叟 清水吾石



○本圖は黒も白も十手づつで（廿）迄打つた時（白は白）（黒は黒）で、右から見ても左から見ても全く同じ位置に同じ形を現はして居ます。――が之れは決して作り物ではない。黒必勝の定石通り打進んでかうなつたのですが、それはどう云ふ順に打進んだのでせうか。そして最後の（廿一）から黒が最も手輕く勝つには如何に打つてせうか！

本欄解答は三四七頁

犯人『カチヤ——カチヤン、カチヤン。』

・成秀——

裁判官『お前は他人の時計を賣拂つたと云ふが、何故そんなことをしたか？』

被告『つまり……その……なんです。……私は時計よりも、金の方が欲しかつたのです。』



呆然——

締切間際に辛つと、展覧會に出品の繪を描き上げた畫家、『氣をつけてくれ給へよ。この繪はまだよく乾いてないんだから——。』運搬人『なあに、平氣でさあ、これは仕事着なんですから——。』



これは どうも（入選漫畫）

遊佐 誠

母親、仲人に向つて『失禮ですが貴方はお獨りでいらつしやいますか？ 娘は先方の方より貴方の方が良いと申すのですが』



●これを何と見る？

△奥様は、釦と見る。

△炭屋は、タドンと見る。

○これを何と見る？

△坊やはお月様と見る。

△野球狂はボールと見る。

△植木屋は鋏と見る。

△斉藤洪はお皿と見る。

△女中は大根の輪切と見る。

△臆病者は、爆彈と見る。

△天文學者は、日蝕と見る。

△映畫女優は、ホクロと見る。

濁澄番附

東	行司・年寄・勧進元	西
ほん（本）	行司 ち（血）	ぼん（盆）
せん（栓）	行司 ぢ（痔）	ぜん（膳）
ふた（蓋）		ぶた（豚）
はら（腹）	年寄 こ（子）	ばら（薔薇）
かき（柿）	年寄 ご（碁）	がき（餓鬼）
かま（釜）		がま（蝦蟇）
からす（烏）	勧進元 か（蚊）	がらす（硝子）
てんき（天氣）	勧進元 が（蛾）	でんき（電氣）
ちやう（腸）		ぢやう（錠）

補恭一件（賞）

冠句『うらおもて』

○うらおもて、おんなじ様な西洋館。

○うらおもて、見て値をつける古着市。

○うらおもて、延つて見たし裏見瀧。

○うらおもて、離の分らぬ煤はらひ。

霞ケ浦の珍魚

水郷霞ケ浦には『とげうを』といふ魚が棲んでゐます。この繪の通り 中にはいつて卵を守つて居るのが雌で、外で番をして居るのが雌です。（N生）



○文字解き謎々

□『赤』の字とかけて、雪の日の道中と解く、

○心は、足がついて跡。

□『可』の字とかけて、往來の喧嘩と解く、

○心は、人が側に立つて何んだ何んだ。

□『ろ』の字とかけて、朝の白露と解く、

○心は、は（葉）の上にある。

□『二』の字とかけて、旅客飛行機と解く、

○心は、人を入れて天にのぼる



亞米利加密航記

ルーズヴェルトへ送る決鬪狀

布利秋
齋藤五百枝畫

一

『ジャップ！』

私は背後からいきなり此ういふ罵聲を浴せかけられて、むかつとした。ふりかへると、十七八の小僧だが、路傍の小石をつかんだ。

『ジャップ！　スケベイ！』

ぴうと、私をねらつて、石を抛げつけると、そのまゝ逃げ出した。

『畜生めッ』

思はず拳を堅めたが、もう姿は人ごみの中に吸はれて行つた。シャアトルの町の一角での出來事である。

私が、初めて日本を離れて、渡米したのは、明治四十四年四月中旬、兼ねて日本で知合になつてゐたシャアトル市在住の牧師ハンソン氏の家に落付いて會話の稽古をして居つた。だが二十四歳の青年、町に出ても、私の姿さへ見ると、市民が冷たい眼をもつて視て居るのが業腹でならなかつた。

私が渡米する前に、駐日米國大使オブライン氏と外相林董伯との間に、所謂紳士協約が成立した。それによると、米國は日

本の體面を重んじて、渡米移民について彼是いはない、そのかはり日本が自發的の意思によつて、渡米移民に制限を加へるものと信ずるが故に、その積りで居てくれといふのだ、で、日本もその時には、原則として勞働者の渡米を禁じ、ただ再渡航者、又は在米邦人の兩親妻子に限つて、旅劵を與へることにした。つまり双方紳士的な態度で、圓滿に此の問題を解決しようといふのだ。

しかるに、米國西海岸に於ける排日運動は休止するどころか、一層烈しくなり、且露骨になり。加州議會には、排日土地法案が提出された。

日本人の土地所有權を制限しろ、借地權を制限しろといふので、議會は殺氣だつて居る、民衆もそれに加勢して居る。私が渡米したのは、恰かも此ういふ騷ぎの最中である。

見るもの、聞くもの、一々癇癪にさはる。字書を引いては、毎日の新聞面を賑はして居る排日記事を讀みふけつてゐたが、日本人を犬畜生のやうに輕蔑して書きたてゝ居る。

私は、もう何としても堪らなくなつた。

『よし、どんな樣子か、傍聽に出かけて見ろ』

さういふ氣になつて、加州議會の開かれてゐる桑港へ態々出かけた。勿論、當時の私の語學では、議員の演説をきいても、ハツキリとは諒解出來さうもなかつたが、どの程度に議員達が昂奮して居るのか、その雰圍氣を窺はうとしたので。

行つて見ると、議員の紹介がなければ傍聽は許さぬと、撥付けられた。これには參つた。でも、左樣ですかと、引返すわけにはいかない。そこで、毎日議會の附近へ出張つて、傍聽人の出て來る樣子や、議員等の入場する有樣などを目撃して居た、何でも五日位つゞけた。

傍聽に押しかけた青年等でも、私の姿を見つけると、得たり賢こしで、ボキシングの要領で、つッかゝツてくる。つまり喧嘩をうりにくる。

『糞忌々しい奴だ』

腹はたつが、此處で手出しをしたら、群集が私をとらへて、私刑を加へかねまじき劍幕である。よつて忍び難きを忍んで、その場を外すやうにしてゐたが、どう考へても口惜しくてならない。

下宿のカリホルニヤ・ホテルへ引きあげて、いろ／＼考へて見たが、結局、私は一つの成案を得た。今になつて、冷かな態度で、彼是思ひめぐらせば、私の行動は突飛であつたといひ得るが、しかしその時は、元氣が五體に充滿して居た。かつて、環境が私の神經を苛だたせるのに十分であつた。

私は、かう思つた。

(これは、大統領たるルーズヴエルトが惡い、彼は、日露戰爭

當時から日本に對して好意をよせて居る。一九〇六年に、桑港に於て、邦人の小學兒童を別個の隔離學校へ移さうとした場合にも、加州に干渉して、隔離令を撤回させて居る、日本人として感謝すべき所はあるが、此度の排日運動に默認して居るのは怪しからぬ、一つ抗議を申込んでやらう」

血氣に任せ、日本文で檄を認め、これを譯してもらつて、タイプライターに打つた、そして白堊館のルーズヴェルトに送つた。

『閣下は正義を愛好する公明正大の政治家として、自分の平生崇拜するところである、然るに、今日始めて加州の地を踏んで見ると、至るところ、日本人を排斥して居る、米國は先に日本と紳士協約を結んで居る、日本はこれを紳士的に遵奉して居るにかゝはらず、米國人の此の態度は、果して紳士的といへるか何うか、自分は、閣下を崇拜はするが、閣下が米國の元首たる以上、その責は閣下にあるので、これを默視することは出來ぬ、自分は一日本人として、閣下に決闘を申込むものである、閣下が紳士ならば、いさぎよく立つて、自分と勝負を爭ふ義務がある、……何うか』



原文は、もつと激烈であつたが、内容の意味は、此ういふ

のだ。

私は、その時は、眞劍だつたのだ、捨身だつたのだ、ほんとうにルーズヴエルトと一騎討をやつて、國辱を雪がうと決心したのだ。――笑うて下さるな、逆せ切つてゐたのだ。

二

ところが、返事がない。又出した。それでも、何とも挨拶がない。更に又出した。都合三通、決鬪狀をぶツつけたが、梨の礫なので、最後には此方も苛り立つた。

『よし』

電報を打つた。

『人道と正義とを無視して、閣下が依然として、排日運動を默認するならば、私は身を挺して、閣下を刺さん』

暗殺の豫告だ。――隨分、無茶なことをしたものだが、其時の私の心持は、全くさういふ氣がした、これは侮辱をうけた在留邦人なら、完全に理解して下さると思ふが、賣名的行爲でも、何でもない。純眞無垢、始めて米國の土を踏んで、始めて米國人からさげすまれた一人の青年の義憤だつたのである。



果して、翌朝、まだ私が寢て居るのに、扉をノックする音。

『ミスター・ヌノ、警察の旦那が見えました』と、下宿の媼さんが叫んだ。

着物をきて、出て見ると、図體の大きな男が三人棒立になつてゐる、一人は制服をきた巡査だが、他の二人は背廣をきて居る。

『あなた方は、何者ですか』

刑事に詰問すると、彼等は、上衣の胸をあけて、シークレツ

ト・ポリスの略號、S.P. とかいたマークを示した。

彼等は、私に對して、同行を強要すると共に、素早く家宅搜索を始めた。すると、机の抽斗から、生憎私が打つた電報の寫しが現はれたので、のッぴきならぬ證據を押へられた。

『しまッた』

私は、顏色をかへたに違ひない。

（これは不可ん、警察へ引かれて行つたら、重大な國際問題にならんとも限らぬ、私一人はどうなつてもいゝが、これが爲同胞に迷惑をかけてはならぬ）

やつと、正氣づいた。それ迄は、云はば激情にかられて、冷靜な判斷を下す餘裕がなかつたのだ。

『お前は日本人か』

警察では、先づ私の國籍を確めにかゝる。

『日本人ぢやない』



突嗟に、否定した。

『何國のものか』
『支那人だ』
『旅劵があるか』
『ありません』
『此の電報のうつしは、何うしたのか』
『友人が、私の部屋に來て、それから打つたので、私のかいたものぢやない』
『その友人は何處に居る』
『華盛頓に行つて了つた……』
何と責めても、此れで押通し、自分の國籍は日本ぢやない、支那だと云ひ張つた。
しばらく經つと、支那の領事を呼んで來て、私と對質させた。さア弱つた、私は支那語は些しも知らない。
向うは、支那語で何か云ひ出した。
『實は私は、日本の横濱でうまれたので、日本人に引とられて、日本で育つた、で、日本語しか分らない、英語は多少出來るから、何ならば、英語で話して下さい』
からやつた。すると、好い按配に、此の領事は、日本に留學してゐたので、日本語が話せた。英語も無論出來たが、日本語で質問して來た。
『君は、支那人だといふが父は何處の生れか』
『それが分つて居れば、米國迄來てこんな苦勞はしたい、私の父は絹紬賣りで、父は母と私を横濱へ置去にして、本國へかへつてしまひました、其の中に母は死んだので、私は孤兒になつて、日本人に引きとられたのです、だから日本のことは何でも知つてるが、肝心の本國のことは何も知らない……』
我乍ら、うまい答辯だなと、感心した。
『さうか』
領事も、當惑したらしい、それでは調べやうがないので、そのまゝ歸つてしまつた。だが、旅劵のない擧動不審の奴だといふ廉で、警察では私を本國へ送り返すことになつて、移民局の手へ移された。
丁度、上海行の米國船インヂヤナ號が出る、いやも應もない、此の船へ乘せられようとしたが、私は、こんな困つたことはない。
逃出さうとしても、刑事が二人ピストルの彈丸に指をかけて、前後を護つて居る。
結句、私の身柄は支那領事からイ

ンチヤナ船長にわたされて、上海迄送り返される事になつた。

　船は出帆した。私は、何うしようかと思つたが、差當つて分別がつかない。懐にはまだ多少の金がある、旅券は襟の中に縫ひこんで、かくしてある。

（何處かへ上陸すれば何とかなるな）

　私かに、逃亡の計畫をたてた。船は香港を出て、途中、布哇のホノルルへ寄るので、そこで逃げ出さう、そして一旦布哇へ上陸して、又米國へ引返さう、――のるか、そるか、やツて見ろといふ氣を起した。だが、私が逃出すのが分つたら、船員も船長も、積まれものだ、見逃しはしまい、いさとなつたら、銃殺されるかもしれない、断行するならば、餘程巧みにやらぬと、一命にかゝる。

（誰か、船員の中で、私に味方をしてくれるものが欲しい）

　眼をつけて居ると、水夫長が、人の好さ相な男。私は、つとめて水夫長の御機嫌をとるやうにした。

　その中に、船は、ホノルルに寄港する前日となつた。

『どうなるか、當つて砕けろ』

　私は水夫長に秘密を打あけた。

『ホノルルで、どうか私を逃してくれませんか、お願ひします』

『何んだ、お前は、悪いことをしたのかい』

『いゝや、たゞ旅券がなかつたばかりに、本國へかへされるんだが、どうしても、アメリカに居たいんです』

『そいつは、妙だな、構ひやしねえ、逃げなせえ……だが、お前、俺だつて、只ぢやア承知しねえ、幾らかあるか』と、水夫長は、大きな手を出した。

『五十弗あります、これ丈、みんなあなたに差上げます、……お願ひだ、私を逃して下さい』

『すこうし、少いな、だが、みんな出した處はいゝ、ずんと氣に入つた、……俺が手引をしてやるぞ、待つてゐろ』

　水夫長は、商取引がすむと、うけとつた五十弗をチヤランと、尻ポケツトへ收めてしまつた。

三

　船は、ホノルル港外に横はつた。

　その晩は、幸に闇黒であつた、ホノルルの市街と覺しきあたりの空には、紅い帯を天にかけたやうに、ボーツと明るくなつて居た。星は一つも見えない。

『素的だぞ、これならきつと逃げられる、何でも、泳いで岸につきさへすれば、此方のものだ』

　私は、洋服も、帽子も、靴も、手廻りのものは、殘らず風呂敷につゝんで、ゴムの袋に入れた。これを體に引くゝつて、泳がうといふのである。

　夜は、刻々にふけて、時計一時過ぎであつた。

『さア、逃してやる』と、水夫長がやつて來た。
『俺について來い』
さういふので、彼の跡につゞいて、舷側に出ると、上からロウプを垂れてくれた。
『これに掴つて、下へ降りろ』
『よし來た』



私は、ロップに飛びついて、何は構はず、スル／＼と傳つて、ドブーンと、海水の中に身を躍らした。船では、水夫長ともう一人の船員と、二人だけが手傳つてくれたが、五十弗の金の利き目は恐しい。

『もうよいかッ』

船の上で、水夫長が叫んだ。

私は、それに答へようともせず、泳ぎ出すと、人のわるい奴だ。

『鮫が居るぞ、鮫にくはれるな、用心しろいッ』

大きな聲で怒鳴りたて乍ら、私を脅かして居る。

『善ツ、泳ぎなら、腕に覺えがある』

暗夜の海を拔手をきつて、泳ぎ出したが、船を離れると、遙か向うに、ポツツリと火の影。私は、これを目標にして、泳いだのだが、段々近づくと、魚を釣る舟らしい。人の影が、チラチラとうごく。

私は、泳ぎ乍ら、ハッとした。

(あの舟の男が、米國人だつたら、何うするか？)

もう金は一文もない、又船へつきもどされるのは知れてゐる。

(何うしようか？)

しばらく躊躇つたが、何せ、身がぐつたりとなつて、もう何うにもならない。一刻も早く舟にあがらなかつたら、此儘、溺



れて了ふ。それに、眼の先きに舟があるので、却つて氣力が弱つて來て、手足がうごかなくなつた。

『えゝ、まゝよ』

腹をきめて、此の舟に泳ぎついた。

『助けてくれッ』

手をあげて、聲をかぎりに叫ぶと、舟に居た釣手が氣がついた。

『難船か？』

『さうだ、助けてくれい』

やうやつと、へと〳〵になつて泳ぎつくと、彼は私を水から引きあげてくれた。火影にすかして見ると、有難や、米國人ぢやなかつた、布哇の土人である。

此の邊の土人は、みな英語が分るので、私は、難破の模樣を片ことと交りで話して聞かせた。

『お前は、大變身が弱つてる、魚を釣るのを止めて、俺の家へつれて行つてやらうか』

『どうか、さう賴む』



親切な土人は、私を舟にのせて、自分の部落へ引きとつた。

彼等は、フーラー族で、南洋系の所謂島嶼民族である。皮膚は、どす黒く、食物はパンを常食として居るが、生活は至極簡單である。エルルノ郊外に、蒲鉾小屋のやうなバラック立の彼等の住居がちらほらと見えるのは、みな此の土人の部落である。

私は、とりあへず、彼等の食客となつて、譯もなく、數日を過した。インヂヤナ號は、已うに出帆したので、追手のかゝる氣遣はない。

『此の島には、澤山日本人が居る、そこへつれて行つてやらうか』

土人が、さういつてくれる。だが、此のフーラー族の生活が、單調ではあるが、いかにも自然を樂しむ原始生活である。それが面白いので、格別日本人に會ひたくもなかつた。無一物だが、食べることには心配がいらない、土人も、私を厄介者だとも、何とも思つて居ない。

彼等は、よく飲み、よく食ひ、又よく踊る。月のあかるい晩などは、夕方から夜にかけて、椰子の葉かげの砂ツ原で、男も女も踊るのだが、米國人は、これをフラ〳〵ダンスといつて居る。裸體のまゝ、腰に一布もつけずして、踊るのだが、[illegible]の踊である。[illegible]笑しくて、吹き出さずには居られぬが、踊手は眞面目である。尤も正式に踊る場合には、顔から頸へ花をかけ、前に垂らして、腰から下へは、蔓のやうな繩のバレンを當て、足頸へも花束を結びつける。そこでフーラー・ダンスが、フラ〳〵・ダンスと訛したが、實際、日本のフラ〳〵踊そつくりだ。

此うして彼等の部落で生活して居ると、慾も得もなくなつて、自然を樂しむやうた心持になるが、しまひには、私も飽きて來た。

『も一度、米國へ渡らねばならぬ』

追放された桑港へ、再び危險を冒して、上陸しようとした。で、急に日本人に會ひたくなつて、廣島縣出身の中村某といふのを、知合になつたのである。

私は、彼に胸中の秘策を打あけた。

四

布哇から桑港へ石炭を積んでゆく船がある、これは蒸氣船のやうでもあるし、又帆前船のやうでもあるし、命艦の知れぬ船だが、コックの中に、田中といふ日本人が乘組んでゐた。

『俺が引きうけた』

彼が[illegible]込んでくれたので、私は、これに乘船して、桑港に向つた。そこで、[illegible]追ひ出された此の港へついて見ると、[illegible]



して居る。

『上れ』と、田中がいつた。

『だが、ワツチマンが眼を光してゐたんぢやア、迚もいけない』

『なアに、メリケン人は、金さへ摑ませたら何うにでもなる、こんな現金な奴はゐやしない、……俺について來いよ』

『大丈夫かね』

『心配はないよ』と、田中は心得たもので、ワツチマンに幾らか握らせて了つた。

『それツ！』

ワツチマンが見て見ぬ振をして居る隙に、ひらりと舟から上る、倉庫が澤山並んで居るので、その間をくゞりぬけ、やつと夜の白々あけに、町へまぎれこむ事が出來た。とは云ふものゝ、シヤアトルへかへるわけにも

ゆかず、元ゐた下宿へもどることも出來ず、かててポケットには、小遣錢が一文もない。あてどもなく田舍道をぶらついて居ると、私を呼ぶものが居る。

『おい、君』

『何ですか』

ふりかへると、一人の紳士だ。

『君は、密航者だらう』と來た。私はどきんとした、成る程旅券は有つて居るが、實際は密航者に違ひない。

『いゝや、さうぢやない』と首をふつたが、相手は薄氣味わるく笑つて居る。

『隱してもいかん、君の態度で分る、……しかし、大丈夫だよ、安心して俺のところへ來ないか、君の爲に仕事を見つけてやるがね』

『有難う、さう願へれば結構ですが……』

渡りに舟だ、私は、此の男についてサクラメントへ行つたが、仕事といふのは、野良稼ぎ。廣い野菜畑があつて、それへ水をまく、手入をする、朝から夕方まで、休む暇がない。だが、ここで働けば、先きへゆく旅費もたまると思つてゐた。ところが、給料をくれる氣色がない。スヱーデン生れの利口な女中が居たが、此女は一週間每に、きちん〱と給料をもらつて居るが、私丈にはわたさない。

三週間ばかり經つたので、催促した。

『何を云つてる、お前は密航者だから、只で働け、いやなら警察へ突出してやるぞ』

これでは、まるで奴隷だ。

腹がたつてならぬが、何とも仕樣がない。女中が聞いてゐて、ひどく私に同情をした。

『主人はあゝいつてるが、そんな馬鹿なことはあるものでない、わたしが屹度とつてあげます』

此の女が味方になつて、かけ合つてくれた爲、一人前の半分出さうと云つた。普通、野良稼の勞銀は、其頃四十弗即ち日本の八十圓が、一月の給料である、その半額二十弗即ち四十圓丈貰ふことになつて、二月働いた。で、四十弗貯つた。

すると、彼女は私のとこに來て、それとなしに入智慧をした。

『お前は、こんな處で働いて居ることはない、何處か外へゆきなさい、……出てゆくなら私が餞別をあげます』

『實は逃出すつもりだが、親爺に見つかると、又大變なことに

なるので、機會をねらつて居る』

『構ひやしない、今夜、わたしが手引をしてあげます、用意しなさい』

しめたと、私は、逃げ出す仕度にかゝつた、まさか此の女から餞別は貰へぬので斷つたが、聞入れない、そのかはりだといつて、トランクを一つ買つてくれた。

女中から内密に拔出す筋道を教へてもらつて、停車場に明方までに待つてゐた。好い按排に、因業な主人の眼づまをぬすんで、サクラメントを脱出し、久しぶりでシヤアトルへもどつて來たのは、明治天皇御登遐になつて、間もなくの事であつた。

ハンソン牧師は、私の顔を見て、びつくりしてゐたが、何しても無事であつたので大層喜んでくれた。だが、ルーズヴエルトへ決鬪を申込んだ一條があるので、私は、私の本名を名乘ることが出來ない。

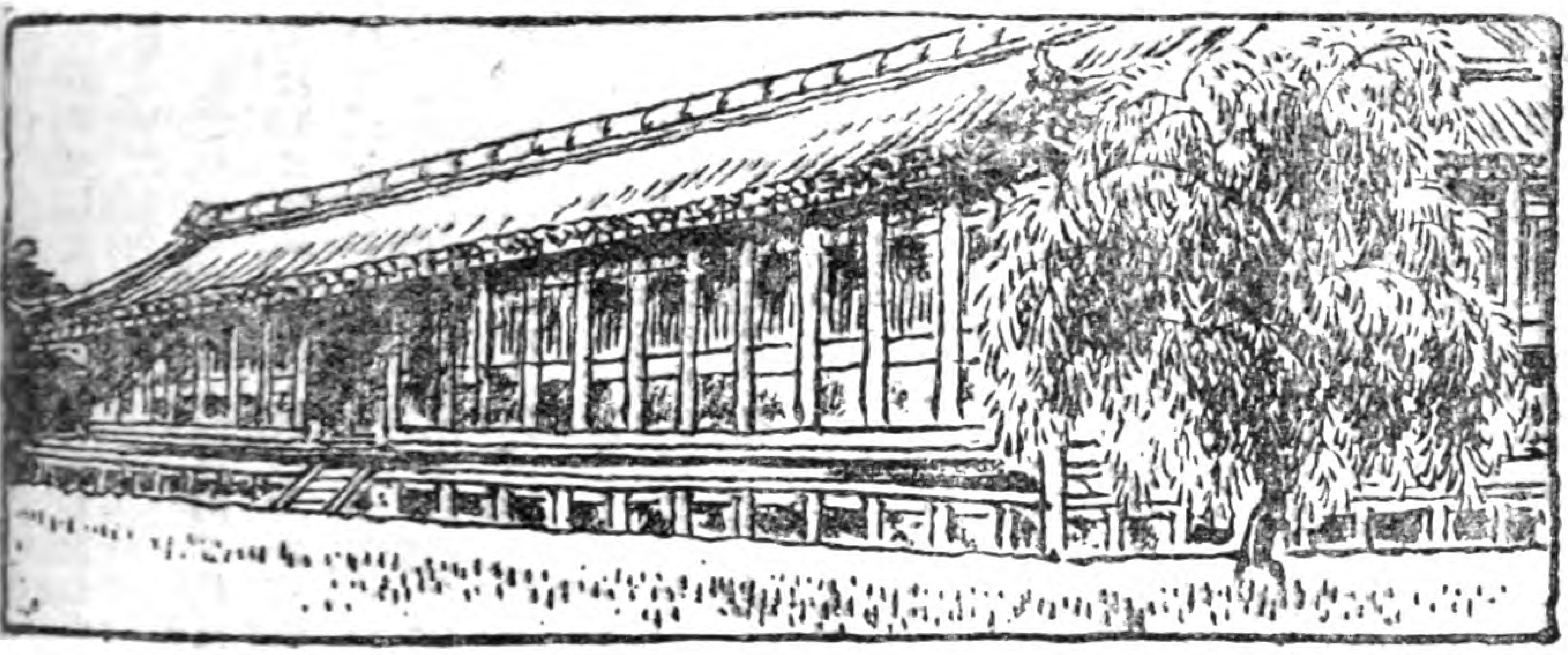
よつて、秋山蘇南と變名した。南の方で蘇生したので、蘇南といふ譯、私の異國に於ける生涯は、秋のやうにさびしく、孤獨であつた爲、秋山といふ譯。今でも、時によると、秋山蘇南著『排日の讐敵』と題する書籍を讀まれた人々があるかも知れない。あれは、私が、日本へ原稿丈送つて、二千部ばかり出版した、それである。

華盛頓大學に入つた時も、布ではない、秋山だつた。こゝには、前後三年通つてゐたが、その間誰一人として、私が、ルーズヴエルトに決鬪狀を叩きつけた布だとは、知るものがなかつた。

つまり布は、インヂヤナ號で、上海へ送り返された支那人といふことになつて、秘密は永遠に葬られた。今、日本にかへつて、ジツと考へると、ルーズヴエルトに果し狀をつけた私の行動は、血氣に逸りすぎたことで、決して自分乍ら感心はして居らない。しかし、あの時は、ほんとうに加州人の排日的態度が、私をして憤激させたのである。

『謹んで、私の妄擧を陳謝します』

と、改めて、ルーズヴエルトに電報を打ちたい處だが、牡蠣灘頭の風色、依然として昔の儘ながら、今や已に斯人亡し。せめて懺悔話をして、こゝにいさぎよく覆面を脱る事にする。(完)



長篇講談

三家三勇士

大島伯鶴
挿繪 井川洗厓

十八歳の少年和佐大八郎

周防岩國の城主吉川監物の家中御指南役の國次惣左衛門が許に於て、八重垣小太刀の極意を會得いたした和田庄次郎政直、功成つて江戸表へ立歸らんと、岩國を出立いたしましたが、往きとは違つて歸りは心ものんびりと氣もゆるやか、急ぐ旅ではございませぬから、中國筋から關西筋の名所々々を見物いたし、大阪へはいつてまゐりましたが。大阪は商業の地、その繁榮はまた格別、それよりして淀の川瀬の水車、これを舟にて眺めながら淀川を溯ぼつて伏見の京橋へ到着。直ぐに京都へ足を入れ、三條小橋の釘貫屋といふ旅籠へ宿泊いたし、翌日から見物を始めましたが、京は名所舊蹟の多い所、その結構は目を驚かすばかり。庄次郎、諸方を見物しながら、今しも差しかゝつてまゐりましたは、これも京名物の一つ三十三間堂。時は貞享三年四月十二日、ドッと揚がる鬨の聲は何萬人とも知れぬ大勢、俄か祭でもあるやうな有樣ですから、

庄「これ／＼町人、大層な人氣であるが、祭禮でゝもあるか」

○『いえ、お武家はん、お祭禮やおまへんのや』
庄『祭禮でなくて何だ』
○『三十三間堂に通し矢がおまんのやがな』
庄『ハヽア、豫て噂に聞及ぶ京の三十三間堂の通し矢。して誰がその通し矢をするのだ』
○『紀州の御家來はんでな、和佐大八郎はんといやはつて、好い男前だつせ。年は十八や』
庄『ウム、紀州の御家來か』
○『へえ、明六つから暮六つまで一萬本の數矢を積んで、その矢を通しやはりまんね』
庄『さうか。それは幸ひ、拙者も見て參らう』
○『そやけんどな、大變な人で、なか〳〵見られしまへんぜ』
庄『なに拙者が見られるやうにするから、後から附いてまゐれ』

和田先生、その町人を連れてやつてまゐりますと、成程黑山のやうな群衆。迚も中へはいれさうにもない。そこで和田先生、いきなり鐵扇の眞ん中を握つて、見物の間へ突ツ込んでグリ〳〵とこじり始めたから、見物は驚いた。

△『アツ痛い〳〵ツ、何したはんのや』
庄『どけ〳〵。町人などの見るものではない。どけ〳〵。どかぬと鐵扇で打ツ拂ふぞ』
△『ヤアお武家はんや〳〵』

武士の見識といふものは大したもの。かの町人は庄次郎の後に附いて行くので、どうやら矢來の際まで漕ぎつけましたから大喜び。

○『ヤア旦那はん大きに、こゝならよう見られまつさ』

和田庄次郎も矢來の際、目弥竹に手を掛け、三十三間堂の方を見ますると、ドーン、ドーン、ドーン、ドーン、ドン〳〵ドン〳〵ドーンと烈しき太鼓の音。矢場に立つたるは和佐大八郎、見るから美男子でございます。鼻筋通り口元尋常、眉毛濃く、凛として氣高き態度、年十八歳と申しまするが、見た目は二十一二にもならうかと、ちと老けて見える質、尤も武術に勝れ、一方に拔んでゐる者は若年でも何所となく大人びるものでございます。和佐大八郎といふ人の父は、紀州大納言賴宣公の家來和佐主膳正といつて一萬二千石の館持家老その力の慣でございますが、如何にしてこの通し矢などといふ大膽な企てをいたしたかといふと、これには仔細がある。この大八郎の師匠を吉見團右衞門といふて、この人が圖らずも尾張家の家來星野勘左衞門繼忠といふ弓取と通し矢の爭ひをいたしました。尤も當人同志はかゝる技の爭ひをしたくはないが、双方の主人が俗にいふ殿樣根性、各ゝ自分の家來の方が腕が上だ、いや此方の方が勝れてゐる、それでは技くらべをといふことになつて、

尾張公は星野を呼出して『決して紀州の吉見に負けるな。負けてはならぬぞ』といふ仰せ。紀州家も亦意地になつて『團右衛門、決して尾州の星野に負けることは相成らぬぞ。勝つて當家の威勢を輝かして呉れい』かういふ嚴命。双方の張合ひになつてみると、主命默し難く、こゝで通し矢の技くらべといふことに相成りました。六十六間といふ長い距離を射通すのですから大變。それを星野勘左衛門が六千本を通せば、吉見團右衛門が六千五百本を通す、勘左衛門が七千本を通せば、團右衛門が七千五百本を通すといふ有様で、初めの内は吉見團右衛門の方が勝れてをりましたが、時刻を過すに從つて勘左衛門の弓勢強く、終に暮六ツ、最後の太鼓を打切つた時に



は、吉見團右衛門の七千六百五十本に對して星野勘左衛門は八千本を通して、日本一の名を記した額を揭げるにいたり、この技比べは吉見團右衛門の負といふことに相成りました。そこが武士氣質、勝負に負けて君に合はせる顔がないと、團右衛門は

氣の森にも三十三間堂の縁端に於て唯一文字にかつ擲いて相果てました。この團右衛門の死んだ時が丁度和佐大八郎年十三歳でございました。七尺退つて師の影を踏まずといふくらゐ、昔の人は師恩といふことを大切にいたしましたが、大八郎、如何にもして師の恥辱を雪がなければならぬといふので、十三歳から十八歳まで、六十六間の矢場に立つて通し矢の稽古をいたし、最後は堋の際に三寸の的を吊し、それに針をさげて六十六間の距離をおいて、その針を射切るくらゐの腕前になりました。これならば通し矢もまさか爲損ずることはあるまいといふ自信がつきましたから、和佐大八郎、君前に出て、

大『恐れながら、何卒京都三十三間堂に於て通し矢の儀御差許しを願ひたう存じまする』

かういつて願ひ出ました。大納言賴宣公、お聞きになつて、

賴『大八郎、其方は何のために通し矢を望むのであるか。武名を天下に知らせよう爲めであるか』

大『ハッ、君の御仰せにございまするが、手前通し矢を致しまするは、見ン事爲了せて天下に其名を知られようため、己れの名譽を博さうための通し矢ではございませぬ。御承知の如く、前年尾州家家來星野勘左衛門のため敗れを取り、無念の一魂を殘して三十三間堂の露と消えたる恩師吉見團右衛門の恥辱を雪

ぎたき一心にございます』

頼『ウム、いかにもそれは神妙の願ひである。併し萬一爲損じたる時は何といたす』

　この時、大八郎、主君の御顔をしげ〳〵と見奉り、

大『恐れながら、萬一わたくし爲損じましたる節は、これまでの御高恩に對し奉り、御奉公の甲斐もなく、御別れを告ぐるはいかにも殘念にはございまするが、武士の面目、その場を去らず腹一文字に搔切つて相果て、二度と我君に見ゆる所存はございませぬ』

頼『ウム、立派な覺悟である。それほどまでの覺悟なれば、いかにも通し矢の儀差許すであらう。早々取計らへ』



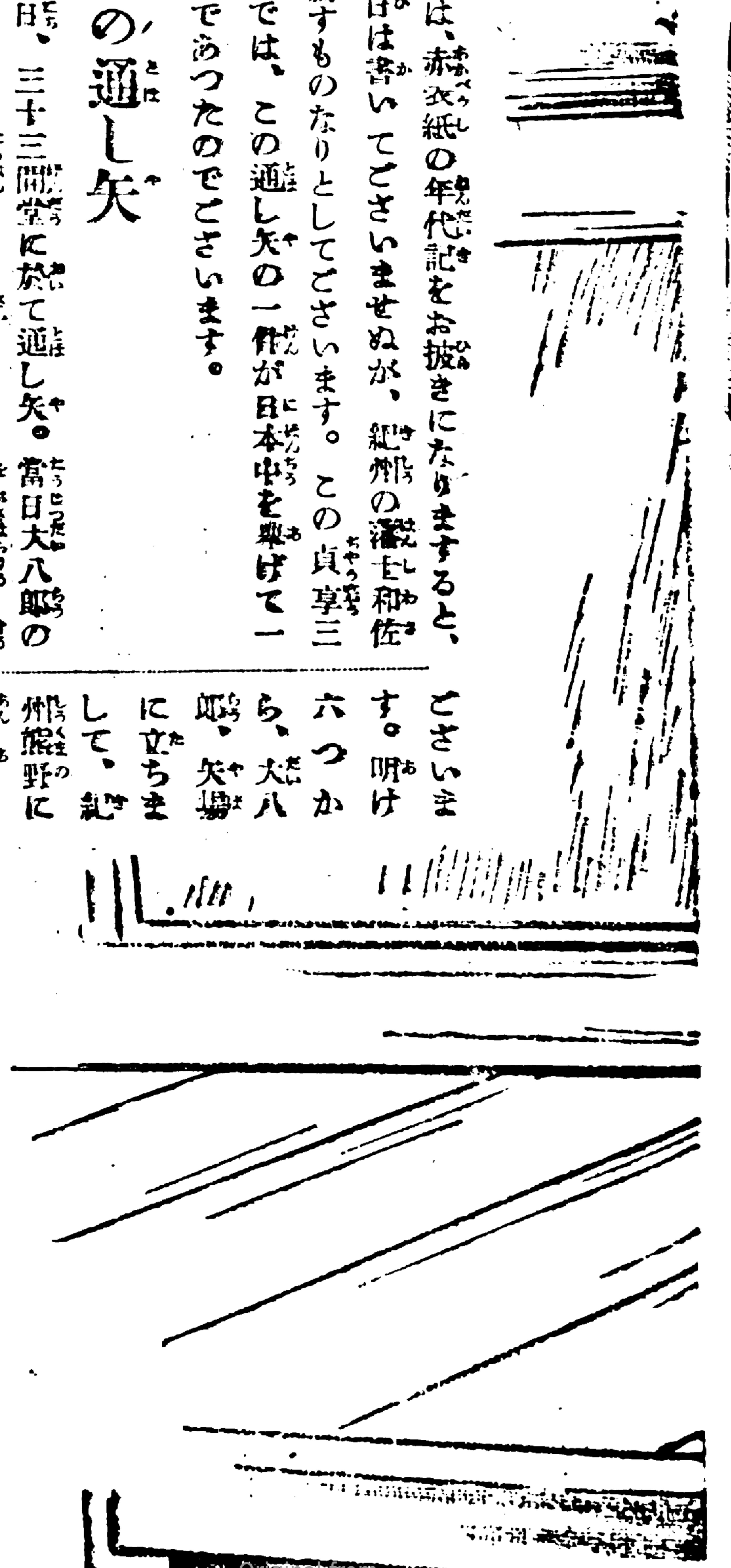
大『有難き仕合せに存じまする』

　そこで重役に御沙汰がありましたから、早速に京都所司代までこの事を申出る。京都所司代よりは畏れ多くも一天萬乘の君に奏聞を遂げまする。そこで直ちに御勅許。天下泰平納めの通し矢といふので、和佐大八郎、いよ〳〵矢場に

立つことに相成りました。それが貞享の三年四月十二日、この事が偽りならざる證據は、赤表紙の年代記をお拔きになりますると、貞享三年四月、日は書いてございませぬが、紀州の藩士和佐大八郎通し矢を爲すものなりとしてございます。この貞享三年といふ一年の中では、この通し矢の一件が日本中を舉げて一番珍らしい出來事であつたのでございます。

雪辱の通し矢

そこで四月十二日、三十三間堂に於て通し矢。當日大八郎の後見として立たれたのが、當年六十八歳になる、小笠原流の弓術の大先生小笠原備後といふ方。この人が矢渡し後見として、大八郎の傍らに中腰となつて、白鷺の羽を以て矧いだる遠矢を取つて渡します。この時、大八郎の持つたる弓は白張の籐弓、七分半の矢詰め、強い弓でございます。尤も矢場と申しても青天を見て通すのではございませぬ。廊下の緣端に立つて通すのですから、少し拳を上げれば庇を射削るし、少し拳が下がれば廊下を掃く。右に寄れば柱を射削り。左に寄れば何所へ矢が飛んで行くか分りませぬ。それがために弱い弓では通らない譯でございます。明け六つから、大八郎、矢場に立ちまして、紀州熊野に安置し奉る熊野權現に祈誓をこめたる事にて、何卒師匠吉見臺右衞門の恥辱を雪がせ給ひ、見事通し矢を爲了せまするやう、日本の神々の御加護を願ひ奉ると一心に念じながら、弓に矢を番へて切つて放てば、矢はシユーツ、シユーツ、シユーツと物音高く續いて飛んで行く有樣、その古の弓箭を見るが如くでございます。ドーン〳〵と、櫓にては盛んに太鼓を打ち鳴らす。數萬の見物は醉へるが如く、ワーツワーツとその妙術を賞めそやしてをります。矢來の際で見てをりました和田庄次郎政



直、腕拱いてほと〳〵感に堪へざるものゝ如く、

庄『偉い。あゝ紀州殿は良い御家來をお持ちなされた。過ぎし昔、鎭西八郎爲朝は強弓ひいての達人、又那須の與市宗高は扇の的を射貫いて天下に其名を知られしと聞く。この人々も三舍を避ける弓取りは、この和佐大八郎殿である。あゝ偉いものだ』

大きな聲で賞めてゐるから、驚いたのは見物。

『何やね、あの人は大きな聲で紟固振り廻してゐやはる。側へ寄つたら打やされますぜ』

人の噂を耳にも掛けず、和田庄次郎、熱心に大八郎の樣子を見てをります。そのうちに晝少々前になりますと、ドンドーン……太鼓が二つなると、矢がピタッと止まりました。これは一萬本の中五千本を通しましたので、まづ半ば通つたために暫時休息といふので、矢渡し後見小笠原備後が合圖に矢が止つたのでございます。

備『和佐氏、御目出度うござる。五千本通りました。さア幕張りにはいつてしばし御休息あれ』聲を掛けられて、大八郎、ホツと一息。總身ビツシヨリの汗を拭ひもせず、

大『御老先生、何とも一方ならぬ御丹精、お蔭の申上げやうもございませぬ』

備『いや／＼何の、お蔭に[illegible]。もう[illegible]、その上に一本も出れば天下一。いや、お目出度い〳〵。さア幕張りの內に……』

持つたる弓を注連の張つてある所に立て掛け、大八郎正純は備後の手を引いて幕張りの內にはいりました。さア數萬の見物はえらい評判。その中を小商人が、

『えゝお茶は宜しい。お菓子は如何』

寄席の中入りではございませぬけれども、なか〳〵の賑はひ。幕張りの中にはいりますと、早速醫者が來て、和佐大八郎の身體をすつかり診察いたします。兩の腕は靑くまどつて凝つてをります。さうでせう、七分半の矛詰りといふ強弓で、兎に角五千本の矢を通したのですから、腕に凝りが出るのは當然。醫者は藥でその凝つてゐる所を蒸し、服み藥を侑める。小笠原備後は茶をすゝりながら、菓子などを食べて、暫らく息を休めてをります。休息の時刻やゝ小半時に及んで、

備『さて和佐氏、最早汗も乾きましたらう。休息もこの邊で、再び矢場に立つて見事の弓勢拜見いたすでござらう』

急き立てられて大八郎、

大『御老先生、今一立ての御晶屓を……』

備『言ふにや及ぶ』

兩人、再び幕張の外へ現はれますると、待ち構へたる數萬の見物がドッと鬨の聲を揚げる。その[illegible]は四十にも及ばず、[illegible]、それから[illegible]へ

せんが、とにかく大層な人氣なものでございます。やがて和佐大八郎、弓を取つて、まづ最初に早乙の矢を脇挾み、一、二、三と踏込み、右の足を引いて四目に踏〆め、ガツチリ番へた矢は空にかゝる滿月の如く、キリ〳〵キリとひき絞る。傍らに控へてをりまする小笠原備後、後見の役としては此の初矢が一番むづかしうございます、右の膝を突き左の膝を立て、その肱を突き、頰杖をするやうにして、大八郎の脇の下から首を差入れ、坪と肱とを見比べて合圖をする。『それッ』といふ一聲、よつぴいて兵と放てばこは如何に。いかなる小手の狂ひにや、飛んで行つた矢は五十間ほど行つて庇へパチーン……外れたかと思ふと、弓が強いために白鷲の矢羽はとれて、ヒラ〳〵ヒラと風のまに〳〵飛んで行く。『しまつた』と大八郎、二の矢を番へて切つて放てば、廊下を掃いてこれも外れる。これは〳〵と思ふうち、矢は見る〳〵間に百二三十本の冗矢。さしもの大八郎正純、たゞ呆然として的を視つめてをりましたが、そこはまだ年が若い、早や眼は瀧なす涙。

『あゝ弓矢の神の加護はないか紀州熊野に鎭座まします熊野權



現の利益はないか。大八郎、今日の通し矢は、見ん事爲了せて天下に其名を知られんなどいふ卑怯の心からの通し矢でない。亡き恩師吉見喜左衛門先生の恥辱を雪がんためのこの通し矢。然るを如何にしてかくは爲損じたるか。あな情なや』

暫らくはたゞ呆然として失神の狀態でございます。數萬の見物も餘りの意外に呆氣に取られ、これまた何の言葉もなく、如何なることかと大八郎の方を視つめてをりまする。

大八郎悲憤の涙

この時、數萬の見物の中より天地に響けと大音を揚げたることにして、

『ヤア／＼和佐大八郎、卑怯未練なり。汝通し矢を爲損じたれば、其場を去らず切腹するの覺悟でないか。死に後れたるか。腹切れよ。命惜しみ、腹切ることを知らざるか大八郎。腹切れよ』



と呼ばはるものがございます。これを聞いたる和佐大八郎見物の方をハッタと睨めつけ、大『アヤ言ふな見物。さてこそ奴等は星野勘左衛門の配下の奴等なるか。ウーム、この大八郎が通し矢を爲損ずるやう、神明に掛けて祈つてありしよな。いかにも汝等が望みの如くに、今日の通し矢、大八郎爲損じたり、武士の面目、主君への申譯、見ん

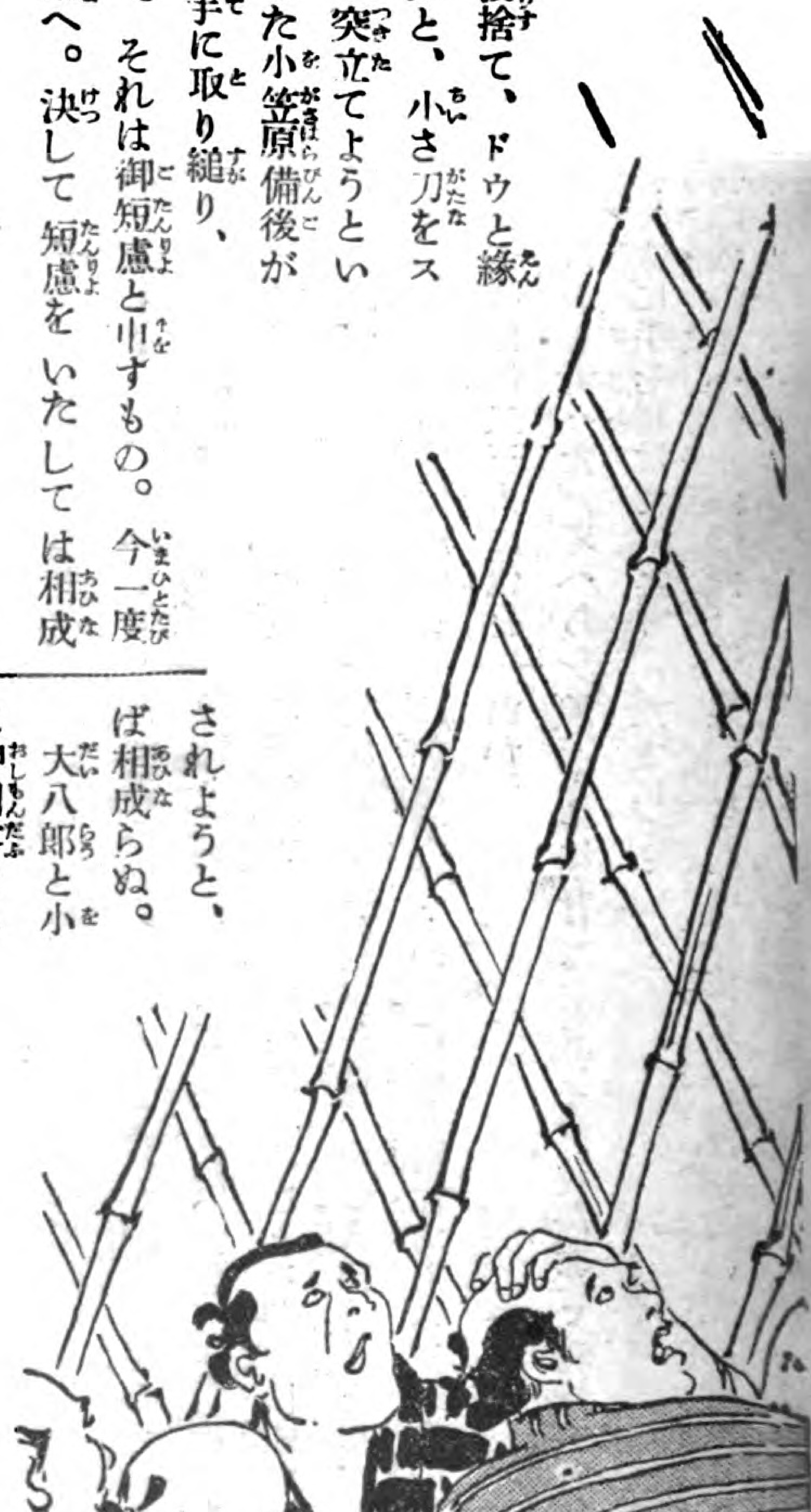
事此場に腹切つて見せうぞ。我が最期のほどを見て、後の世の語り草にいたせ』

持つたる弓をガラリと投捨て、ドウと縁端へ腰をおろしたかと思ふと、小さ刀をスラリと引抜き、今や脇腹へ突立てようといたしますから、側に見てゐた小笠原備後が大きに驚き、しつかとその手に取り縋り、

備『これはしたり、和佐氏。それは御短慮と申すもの。今一度氣を取直して矢場へ立ち給へ。決して短慮をいたしては相成らぬ』

大『いゝや、御老先生、何かと今日までの御丹精、御禮は言葉に盡されませぬが、運拙なくも通し矢を爲損じたるのみならず、見物の中よりあのやうな聲を掛けられましては、何面目あつて生き長らへることが出來ませう。人死する時に死せざれば死に勝る耻ありとかや。どうかその手をお放し下され』と、身を震はして振り放さうとする。

備『いやならぬ。見物が何を申さうとも、徒矢と申しても僅かに百二三十本、八千本に一本を出ても御身の名譽。さア今一度氣を取直して矢場に立ち候へ』



大『仰せではござりまするが、かくなる上は再び爲損じては耻の上塗り。どうぞその手をお放し下され』

備『いや、何と申されようと、短氣は愼しまねば相成らぬ。さア今一度…』

大八郎と小笠原備後が互ひに押問答をしてゐる。これを矢來の外に見てをりました和田庄次郎政直。

庄『ウーム、えらいッ』

〇『又始めやはつた、此のお武家はん、ようえらい〳〵いやはる人やな』

庄『ウーム、他事ではない。己れの身の爲に心得置くべきこと。おゝ惜しいことをいたした。なぜ最前休んだ、なぜ五千本にして休息いたした。倒れて後止むの心を以てこの矢場に立ち、五千本は愚か一萬本を一氣に通す心にはならなかつたか。なまじひ休んだために腕に凝りが出た。休んだために疲れが出た。

それゆゑ終にこの餓死じ。あゝ惜しきことであつた。併しこれは他事ではない。己れの事、良い學問をいたした。それにして、かゝる天下の名人を殺すは、紀州家御一家の損失ばかりではない、國家に取つての損失。いかにもして助け參らせたいものである』から考へると、庄次郎、矢も楯もたまらない。

庄『やア〳〵和佐氏、御切腹暫らく、申上げたき事がござる。その御生害暫らく、暫らく〳〵ーッ』

聲は掛けたが、何分にも矢來の入口が遙か向ふなのに、數萬の見物はワイ〳〵群がり立つてをりまするから、それを越して矢來の口まで行くことはなか〳〵出來ませぬ。矢來といふものは竹で出來てゐるもの、これを破るのは譯はないが、これを破れば天下の法を破つたも同じことでございますから、矢來を破るといふ譯にはなりませぬ。さうかといつて、數萬の見物を掻き分けて、少々御免などと悠暢にしてゐれば、和佐大八郎が腹を切つて死んでしまふ。えゝまゝよ、大功を欲する者は細瑾を顧ず、萬卒は得易く一將は得難し、たとひ見物二三人に傷を負はせても、こゝは大八郎を助けねばならぬと考へた。考へられた見物こそいゝ災難。和田庄次郎、矢來に手を掛けて『エイヤツ』といふ聲を掛けると、忽ち見物の頭の上へ飛上がつた。見物驚くまいことか。

『ヤア何しなはるんや。そないなことをされてはどもなりまへんがな』などといつてゐるうちに、パツ、パツ、パツ〳〵パツパツ〳〵と見物の頭の上を飛んで行く有樣、恰も木より木を傳はる猿の如く——。

『ヤア、武士が飛んで行く。とんだ武士や』

洒落てゐる奴がある。和田先生、見物の頭の上を飛越え飛越え、たうとう門の口までやつて來た。見るともう先口が一人來てゐる。黑羽二重も羊羹色の赤羽二重、兩山のまゐつてしまつた茶の無地の博多の帶を猫じやらしに結び、剝げちよろの大小を横たへ、模樣も何も消えてしまつた印籠を腰にさげ、古びた足袋に片ちんばの雪駄、これに破れた笠をかぶつて面體をかくしてゐる一人の浪人。これが門番の足輕と何か爭つてゐる。

浪『仰せ御尤もではござるが、和佐氏の御命も危きことゝ存ずる。何卒矢來の中へはいることを御許し願ひたい』

足『默れッ。何だ貴樣は、痩浪人の分際としてこの中へはいるとは何事だ。この所に張り廻してある三葉葵の紋所が目にはいらぬか』

浪『それは存じてをりまするが、たゞ和佐大八郎殿をお助け申したさに……』

足『和佐氏は餓死じたらば切腹の覺悟で國表を出立せられたものだ。通し矢を餓死じ、腹切つて武勇を遂げるは自業自得と申す

もの。貴樣達の知つたことではないわ。白痴者め』

言ひ爭つてゐるのを後で立つて聞いてゐた和田庄次郎、庄『ハハア、我等より先きに和佐大八郎を助けようといつて來てゐる者があるな。先口があつて見れば、まさかに乃公が搔分けてはいることも要らぬ。よし、この浪人を中へ入れてやれ』そこで庄次郎政直、後から浪人の袂をグイと引いた。

浪『何方樣でござるか』

庄『いや御浪士、承れば和佐大八郎の危きをお助けなされようとは實に感服いたした。一時も早くお助けが願ひたい。猶豫いたさば大八郎の魂の緒は切れ申す』

浪『いかさまお助け申したく、これまで驅付けましてござれども、御門士の方が拒んでお入れ下さらぬ』

庄『アハヽヽヽ、貴殿氣がお弱いな。なに門士とな。これなる足輕か。足輕のことを世間で何と申す。足輕がる〳〵苦しがる、鐵砲持たせりや重たがる、辨當持たせりや食ひたがる、女を見せれば抱きたがる、足輕三がるといふことを御存じないか。足々踵と申してな。人間の踵を狙ふ奴でござる』いや足輕が怒つたの何の。

足『何だ、貴樣は……』

庄『何でもいゝ。喧嘩は手前がお引受け申した。さアおはいり

なさい。早く〱』と、浪人の脊を押すやうにして中へ入れてしまつた。跡に殘つた庄次郎、

庄『これやい、足』

足『また足などと申すか。人間を捉へて足とは何だ』

庄『人間……人間ならば、もう少し物の道理が解る筈。第一貴樣は武士の情といふことを知らぬな。和佐大八郎といふ人物を、如何なる身分の者か存じてをらう。たとへ部屋住みにもいたせ、紀州家にあつては和佐主膳正といへる重役の御子息と承つた。貴樣達はその配下にある足ではないか。助けてやらうといふ者があつたならば、どうかお助けを願ひたいと、兩手をついて賴んでも助けていたゞくのが當然。虎の威を借る狐とはいひながら、餘りといへば憎くき奴。貴樣達は天下容るべからざる奴。この二三年人を殺さぬので腕がうなつてゐる。貴樣達の首打落してくれるから覺悟をしろ』刀の柄に手を掛けて、ジリジリと前へ詰め寄つた。

庄『さアそれへ列べ。首を切つてやるから』その權幕を見ると、門番が震へ上つた。

足『いえ、それには及びませぬ』庄『遠慮をするな』足『遠慮をしますよ』庄『馬鹿者め。意氣地のない癖にして、拒立てをする怪しからん奴だ。乃公もはいるぞ』足『左樣でございますか』庄『はいつて惡いといふなら覺悟がある。首を前へ出せ』足『宜しうございますよ。どうかおはいり下さい』庄『さア特等へ案内をしろ』活動寫眞ではあるまいし。煙に卷かれてゐる足輕を後目にかけて、庄次郎、大手を振つて門内へはいて行く。後を見送つた門番。



足『何だいあれは、まるで雷みたやうな奴が飛込んで來やがつた』

救ひの主は無名の浪人

こちらは中へはいつた和田庄次郎、浪人がどういふ助け方をするかと、後からついて來て見ると、今や和佐大八郎一刀を引抜いて腹切らんとするのを、小笠原老人しつかとそれを支へてをる樣子。浪人はその背後へ廻つたかと思ふと、『エイツ』手刀を以てピシ――リ打つた。ハツと驚いた大八郎、振返つて見ると、見も知らぬ浪人。それがいきなり大八郎の慄へる手首をしつかと攫つて、



浪『和佐氏、死は一旦にして易く、生は萬代得難しとやら。まづ、まづ〳〵御生害暫らく御留まりあれ』

大『ハツ、何れの御方かは存じませぬが、死なねばならぬそれがしの命……』

浪『いや、御尤もでござる。御無理もない。人間は死する時に

死せされば死に勝る恥ありといふこともござるが、併し助かるものなら、助かつたら如何でござる。何も無理に腹切つて死ぬこともござるまい。死なですむ道もござらう。まア〱拙者にお任せ下さい』

無理矢理に握つてゐる一刀を取つて鞘に納めさせ、大八郎の手を引いて、かの浪人、幕張の中へとはいつてまゐりました。

浪『さて和佐氏、それがしは被り物をいたしたまゝでゐる。定めし無禮な奴とのお叱りもござらうが、仔細あつて世を忍ぶ身の、人に面體を見知られることを厭ふものでござれば、何卒被り物はこのまゝお許しを願ひたい……さて貴殿の只今の爲損じ、あれは當然の事……』

大『エ、ツ、當然の事とは……』

浪『されば、最前五千本までお通しになつて御休息をなされた。あれがお惡かつた。それがために疲れが出たのでござる。道を歩く者、五里十里旅を重ねて來る。疲れたとて茶店に休めば、その後は却つて歩くことが出來なくなる。それと同じこと、一旦休息なされたのがお惡かつたが、今更言うても返らぬこと。さアその凝りをとつて進ぜる。稽古着をお脱ぎなさい』

大『はい……』言はれるまゝに、大八郎は衣服を脱ぐ。ちゥと見てゐた浪人が、

其處に[illegible]手當をなされた

やうでござるた』と、訊いた。

大『はい、こゝにをります醫者共が藥で蒸してくれました』

浪『ハ、ア左樣か……あゝそこにお在のお方がお醫者か』

醫『はい、左樣でございます』

浪『この凝りを藥で蒸されたか』

醫『御意にございます』

浪『ウーム、失禮ながら貴下方のお名前は……』

醫『手前は藪井竹庵と申する者……』

浪『名前が宜しくない。それではどうもこの凝りはとれさうもない……和佐氏、これは藥で蒸したぐらゐでは拔ける道理がない。ちとお痛からうが、御辛抱なさい』いひながら、グイと和佐大八郎の腕を押さへた浪人、これから起倒流の柔術で揉み始めましたが、その痛いの何の。すつかり揉みほごしておいて、小刀の小柄を拔いたかと思ふと、サッと腕に傷を附けた。ブーッと噴き出て來る血潮。凝り血ですからやゝ黑ずんでをります。その黑血の拔けるまで絞つて、純な血が出て來るやうになつたところで、腰にさげた印籠の中から血止めの藥を取出し、これをその切口へピタリと塗つた。昔の藥ですが、傷の即効藥として、金創切傷血止めの藥などといふものは、なか〱効があつたものださうでございます。そこで[illegible]術のやうたものを患部へつけ、其から繃帶を[illegible]

その用意周到なること驚くばかりでございます。やがて懐から折紙の間に入れてありました薬袋紙を取出し、

浪『さて和佐氏これなる薬は服み薬でござる。何に利くといふ薬でもござらぬ。たゞ御身が今腹を切らう、死なうとなさるその刹那、いかにお胸の中は張り裂けるやうであつたかと、お察し申す。つまりこれはそのお心を鎮める一つの清涼劑。これをお上がりなさるやう。併し何所の者とも分らぬ者が進らせる薬、迂濶に口には出來ぬ、若しこれが毒薬でゞもあつては一大事……と、まア思召さうも知れぬ。仍つて手前先きにお毒味をいたして御覧に入れる。御懸念なく召上るやうに』

こゝで浪人はその薬を自身に呑んで毒味をいたしましたが誠に行届いたもの。人に物を侑める時には、まづ自分が毒味をして出すのが禮儀。ところがよく人の家へ行くと御馳走を出して、『まづい物ですがどうかお上り下さい』などといふ。これは謙遜してお世辭にいふのでせうが、まづい物を人に食はせるのは失禮。『詰らないものですが』などといふ。詰らないものなら止した方がいゝ。又老人などと御飯を食べる時でも、『さアどうぞお年寄りからお先へ』などといふ。あれも間違つてゐる。まづ若い者が毒味をして見て老人に食べさせるが道。何でも初めて他人に物を侑める時は、まづ自分が毒味をして見せる

といふのが禮儀ださうでございます。

浪『さア粗味をいたしてござる。心おきなく上り下さるやう』

大八郎、喜んで、

大『忝けなうござる』とその薬を服み、大『お陰を以ちまして、兩の腕が大層輕く相成りました』

浪『左様か。それは何より。もうそれで宜しい。さア早くなされい。大分時刻も移つてござる。お早く矢場へお立ちなされ』

言ひ捨てゝスックリ立上つて行かうとする。

大『あいや、何れの御方かは知らねども、御恩の程は死すとも忘却は仕らぬ。通し矢相濟んだる後は御實家へお禮に罷り出でまする考へ。御住所御姓名を承りたう存じまする』と、袂に縋つた時に、かの浪人、

浪『アハヽヽヽ、これはしたり和佐氏、何を仰しやる。手前は名を名乗るほどの者ではござらぬ。寄るべ渚の捨小舟、取つく島のないこの身の上、今日居て明日は何方か白波の、所定めぬ浮浪の身、住所などのあるべき筈もござらぬ。山と山とは合ふ時はなくとも、人と人は合ふ時がござる。又合ふ道もある花の山。何れ再會』で、チョンと柝がはいり、『いたすでござる』と、これから下座の合方になつて花道へ……と、芝居ならばかういふ所ですが、こゝは花道などはありやアしませぬ。袂振り拂つを言ふ。相手は兎に角紀州家大身の息子、その人の命を助けたのですから、住所を告げて行けば、後になつて若干の禮が來る。これが大島伯鶴なら慾張つてゐるから、ちとお遊びにお出で願ひたい、府下瀧野川町字中里百四十八番地などといふに違ひございませぬ。よく慈善の寄附金に名前を麗々しく大きな字で書いて出してゐる人がございますが、慈善に出すなら何もあんなに大きく名を書いて出さなくてもよささうなものですが、金高が多いのは大きく書いて段々少なくなるに從つて小さく書く。同情の心からいつたら、同じ大きさに書くのが當然のやうですが、澤山出したのをよく分るやうに太く書いてある。淺間しい心が見えすくやうに思はれます。この浪人、名も名乗らず、縋る袂を振り切つて立去りましたが、始終の樣子を見てをりました和田庄次郎、思はず膝を打つて、『えらいかな浪人、見上げた人物。何れ何のなにがしと名のある者に相違ない。跡を尾けてこの浪人の名を知つて置きたいもの』と、昔は米が安いから人間も暢氣です。和田庄次郎政直、この浪人の跡を尾けて參りましたが、果してこの浪人は何者でありませうか。事件は急轉してここに一つの騒動が出來いたし、和田庄次郎、和佐大八郎と四條河原に於て眞劍勝負に及ぶといふ興味ある一條は、次號に於て詳しく申上げます。（つゞく）

急告!!急告!!

講談倶樂部十一月號を飾る

四大讀物！熱血躍る大快篇

◎**平賀源內**（歌舞伎座上演脚本）……**菊池寛**

一代の天才一代の奇傑世に容れられざる先驅者として傳馬町の牢に獄死した源內の數奇な生涯を描いた素晴しい大戲曲！

◎**處女爪占師**（駿河大納言大秘錄）……**吉川英治**

大衆文壇第一の人氣作者吉川先生が熱血を灑いだ一大傑作！美女快俠奇賊奸臣入亂れて息をも吐かせぬ大波瀾の面白さ！

◎**變幻女六部**（百五十枚の大長篇）……**前田曙山**

淫虐なる郡奉行の暴政に恨み泣く數萬の土民のために忽然現はれた救ひの女神――變幻妖異の秘法を修めた美しい女六部が生死の危機を潜りつつ義刄を奉行の頭上に加へんとする大活躍は實に痛快無類だ。

◎**殊勳の混血兒**（旅順陷落極秘の幕）……**朝名輝**

父は露國士官、母は日本娘、その間に生れた碧眼の混血兒が父の國を棄てて日本軍に隨ひ、乃木將軍の前に旅順要塞の大秘密を暴露する！壯烈哀烈、萬人熱狂の大讀物である。乞ふ稀有の大秘錄に刮目あれ。

● **この外講談倶樂部には小說講談實話奇談落語數十篇滿載面白いことは日本一！每號大評判！人氣大沸騰！**（定價六十錢）



落語 野球見物

柳家金語樓
挿繪 谷脇素文

段々と運動が盛でございまして、近頃では野球が大變流行いたして居ります、野球を知らない者でも、是非行つて見ようといふやうな事が幾らもございます、○『あゝ來たのかい、此方へお入りよ』△『へエ、へエ今日は、どうも驚きました』○『驚くことはない、お前さんを呼びにやつたのは外のことではないが、お前さん野球を知つてゐるのかい』△『へエ』○『野球を知つてゐるかよ』△『へエさうですな』○『野球はどうだい』△『へエ、どうもいけないのです、あれは駄目です』○『駄目かい』△『駄目ですへエ、小さい時分から嫌ひでした、親父は好きでしてね、七十二までやつて居りました』○『ハヽア、野球をかい』△『イエお灸……』○『お灸ではない、野球だよ』△『へエ、あゝ野球ですか』○『だからさ、今日は野球に行かうと思つてお前を迎ひにやつたのだ』△『あゝさうですか、アッハッハ、私は驚いてしまつた、何事かと思つたのですよ、だつて私が朝御飯を食べようと思つてね、お膳を出すとお宅から迎ひでせう、御飯を食べる間待つて下さいといつたら、待てないといふのでお飯を食べないで飛んで來たので、さうですかい、野球ですか、あゝ驚いた、野球ですか、野球ツて何です』○『何だ、知らないんぢやないか、知らないんだらう』△『知らないといふことはないのですけれども、唯齒が惡いものですから』○『オイ〳〵野球を食べる奴があるか、野球をお前さん見たことがないのだらう』△『へエさうです、私は一遍も見たことがないのですが、一遍見たいと思つてゐるので、今何所へ掛つて



居ませう』○『何所へ掛つてゐませうといふのはをかしいな、お前知らなければ今連れて行つて見せてやらうと思つたから呼びにやつたのだ』△『さうですか、今日行くんですか』○『だから一緒にお出でよ』△『さうですか、お供します、何所へ行くんです』○『野球場へ行くのだ』△『あゝさうですか、凄いなア』○『凄かアないが……此所が神宮のグラウンドだ』△『へエ』○『此所が神宮のグラウンドだ』△『へエ、グラ〳〵で』○『グラ〳〵ぢやない、グラウンド……』△『へエー、グラウンドといふのですかね、……此方

にも西洋館がありますね、是れは借金コンクリートでゞか』○『ナニツ』△『借金コンクリートですか』○『何だい、借金コンクリートといふのがあるかい、鐵筋コンクリートだよ』△『あゝ何でも其のキンクリートで……』○『お金を拂つてお出で』△『へエ』○『お金を拂つて中へ入るんだよ、二圓渡すから、是れで切符を買つてお呉れ』△『何所で切符……あゝ彼所で、さうですか、何所まで……』○『何所までといふ奴があるかい、それを出せば二枚來る』△『へエ……買つて來ました、大きな切符ですね』○『サア

其所へ切符を渡して中へ入るんだ……サア此所の梯子を上がるんだ』△『へエ、之を上がるんですか』○『此方へ來て〳〵、サア此所を下りるんだ』△『下りるんですか、上つたら上つた儘で宜いぢやありませぬか、上つたり下つたり、米相場なら狂つてしまふ』○『默つてお出でよ』△『ヤア大きな原だな、誰が此所で馬の稽古をするんですか』○『馬の稽古をする所ぢやアないよ、彼所が野球場だ』△『あゝさうですか、へエ彼所が野球場ですか、ハヽア野球ですかね、此の周圍の見物人は之を見に來てゐるんですか、

へ、アさうですかね、へエー、土が見え……ますね、良い土だな、成程平ですね、あれが何所か持上がるんですか』○『土龍を待つてゐるんぢやない、大地が持上がりやアしないよ、此所はグラウンドといつて此所へ野球の選手が出て來て野球をやるんだ、此所がやる所だ』△『あゝさうですか、やる所ですか、どうもをかしいと思つたんですよ、唯土だけぢや仕樣がないと思つたら此所でやるんですか、へエー、此の見物人は皆な親類ですか』○『馬鹿なことをおいひでないよ』△『知らない人ですか、へエー、大變な人ですな、儲かるだらうな……彼所の所へ出て來たのは何です』○『あれは皆んな選手だ』△『へエー、何所の戰爭で死んだので』○『何だか』△『戰死したんでせう』○『さうぢやない、選手といつて野球をやる人のことをいふのだ』△『へエー、やる人が戰死で、見てゐる人は重傷で』○『何をいふんだ』△『あの人達は皆んな變な衣服を着て居りますね、大きな字の模樣の付いた、今年はあんなシャツが流行るんですか』○『さうぢやない、あれはユニホームといふのだ』△『ユニホーム……あれがユニホームで、向ふがプラウトホーム』○『こんなものはないい』△『皆んな一つ宛裝ですね、あれで雌雄が分りますか』○『何だい』△『へエー、學校ぢや白と赤でやつてゐますぜ、赤勝つやうに……』○『子供だな、默つて見てお在でよ』△『へエ、あゝして遊んでゐるんですか』○『遊んでゐるのぢやない、ランニングといつて、身體の調子を定める爲めに彼所で足を踏んでゐるのだ』△『みつともない所で踏んでゐやアがる』○『默つてお在でよ』△『大勢居ますね、……アレ、旦那、旦那旦那』○『何だ』△『貴下御覽なさい、大きな手袋をはめやアがつて、大きな手袋だね、アレツ、皆んな片ッ方しきやないよ、吝ツたれだね』○『吝ツたれといふことはない、野球は皆んな片ッ方づつに定まつてゐる』△『へエ、飲紋で……』○『飲紋といふ形ぢやアない』△『變な形だね、あれで電車の……を落したら拾へやアしない、まるで……專門の手袋だね……アア……』



四

だい』△『御覧なさい、鞠放りをしてゐますぜ』○『鞠放りをするさ、野球は鞠放りぢやないか』○『ヘエー、私達は鞠放りを見に來てゐるんですか、一圓出して……ハ、アさうかね、有難い世の中になつたものだね、成程ね、どうも大きな奴が鞠を放つて遊んでゐるのを、一圓も出して見に來る、情けねえことになつたね、どうも馬鹿なことになるものだ、之を是非見て居てやらうといふ馬鹿な奴が……』○『な、な何だい、惡かつたね』△『ああ旦那居ましたか』○『何を言つてゐやアがるんだ、嫌だつたらお歸りよ』△『イエ結構です……旨いものだねどうも……ヘエー、あれは何といふので』○『キヤツチボール……』△『ヘエさうですか、何でも構はねえ……併し巧いものだ、放りツこをしてゐて落す人が居ませぬね、巧いものだね、あれで何ですか、疲勞れた方が負ですか』○『そんな野球があるか、疲勞れた方が負といふことはないよ、是からバッティング』△『ヘエー、バッチバッチで』○『バッチ〳〵ぢやアない、バッティングといふのだ、ソレ彼所へ持つて來たらう、あの棒で球を打つのだ』△『ヘエ、あの擂粉木で』○『擂粉木といふことはない、あれはバットだ』△『あれがバットで、向ふがスター、此方が胡蝶で……』○『煙草ぢやアないよ、あれで今打つんだよ』△『ヘエー、こい

つけは見物だね、あんな細いもので鞠が打てるんですか……あゝ打つた〳〵、隨分向ふへ飛んで行きましたね』○『ウム、今のがフライだ』△『ヘエ』○『今のがフライだ』△『ハ、ア成程ね、あれがフライですかね、今度はコロッケーで』○『コロッケーといふのはないよ』△『あゝ旦那、御覧なさい、彼所にゐる人の顔へぶつかつた、あれはメンチボール……』○『餘計なことをいふな、默つて見て居れば宜いんだ』△『是れでおしまひですか』○『バッテングはおしまひだ、是からシートノックだ』△『ヘエー、シートノックですか、イヨー待つてました、音羽屋ーッ』○『何をいつてゐるんだ、そんな賞め方があるか』△『賞めちやアいけないのですか』○『默つて見てゐれば宜いんだ、あの原ッぱの方に座布團が落こつて居ますね』○『座布團といふ奴があるか、ベース盤といふのだ』△『ヘエー、あれは何です』○『彼所をランナーが通るんだ』△『ヘエー旦那が○通るので』○『旦那ぢやない、ランナー、球を打つた人が通るのだ』△『ヘエー、彼所で一服やるんですね、一服やる爲めに印が置いてあるんで』○『さうぢやない、向ふがフアスト、此方がセカンド、此方がサード、向ふがホームだ』△『ヘエー、恐れ入つたものですね』○『分つたかい』△『イ、エ』○『分らないのに感心する奴があるものか』△『マア何でも宜いや』○『亂暴な男だな、人が教へてやつてゐるんぢやないか、覺えてお置きよ、向ふがフアスト』△『フア、フア〳〵』○『變だな、フアスト』△『フア、フアス、トですかな、ヘエー、さういふ見當に當りますかね』○『火事みたやうだね』△『是れでどうなるんです』○『默つてお在でよ、見て居れば分る』△『さうですか……彼所にゐるのは何です、洋服の上に龜の子の甲羅をあてがつたのを着て……』○『洋服の上に龜の子の甲羅……アレはアンパイヤだよ』△『ヘエ、あれが餡パンやで、さうですか、朝御飯を食べないで來たんですから……オイ餡パン屋ーッ』○『オイオイ餡パン屋ぢやないよ、アンパイヤといふのだ』△『何ですアンパイヤといふのは』○『相撲取でいへば行司だ、相撲の行司は野球のアンパイヤだ』△『さうですか、相撲の方の行司は木村庄之助といひ



ますね、あゝ相撲が木村で、野球が餡パンか、成程、緣があるね矢ッ張……ハ、ア木村に餡パンで、擊劍の方ぢやキヤラメルとか森永とか……』○『そんなことはいやアしない、默つてお在でよ』△『怒られてばかりゐるんだね……あの中央にゐるのは何です、彼所で手を廻してゐるのは……』○『あれはピッチャー』△『へエー、ペッチヤー』○『ペッチャーぢやアない、ピッチヤーといふんだ』△『此方でしやがんで、いきんでゐるのは……』○『あれはキヤッチ』△『へエ、キヤツキヤアで』○『キヤツキヤアぢやない、キヤッチといふのだ』△『へエー、是から始まるんですか』○『あゝ今アンパイヤが宣告をした』△『死刑の』○『死刑ぢやない、



プレーボールを掛けた』△『何所へ掛けた』○『何所へ掛けるといふことがあるものか、皆んなに掛けた』△『何時引つかゝつた』○『何時といふことがあるものか……御覽、向ふから一番バッターが出た』△『何です』○『一番バッタが出た』△『へエー、何所へバッターが出たので、あの草叢から……』○『草叢から出たんぢやアない。一番バッターといふのは棒を持つた人が來たらう』△『あゝあれがバッターですか、跡が鎌ッ切……』○『そんなものは出て來やしない』△『あれ

が打つんですか……ヨーッ巧く打つて吳れ、頼むよーッ、ヨーッとやつてくれ、カーテンと……オヤあれはどうしたんです』○『今のは見送り、ストライキだ』△『ヘエー、ストライキですか、どうもストライキだと思つたんだ、あれで止めてしまふんでせう』○『どうして……』△『束髪のストライキといつて……』○『さうぢやアないよ』△『一つ確かり打つてくれーッ、……アツ、打つた打つた打ちました……あれは何です』○『アウトだ、あれは死んだのだ』△『エエ』○『死んだのだよ』△『誰が』○『球を打つて向ふへ行つたらう、あれが死んだのだ』△『嘘でせう死にやアしないよ、歩いて來るぢやありませぬか』○『歩いて來たつて、あれで死んでゐるんだ』△『ヘエー、あれで死んでゐるんですか……ヤーイ確かりしろやーい、手前は死んでゐるんだ、遺言はねえかーア』○『默つてお在でよ……是れでおしまひ、今度は二番バツターが出るんだ』△『其の跡からキリギリスにこほろぎ……』○『そんなものは出やアしないよ』△『ああ打つた〳〵……あれはどうしたんで』○『あれはセイフだ』△『ヘエ、支那の政府で……』○『支那の政府ではない、セイフといつて生きだんだ』△『ヘエー、生きだんで』○『ウム、死んだのがアウトで、生きたのがセイフだ』△『ぢやア半分死んで半分生きてゐればアウセイですか』○『何をいつてゐるんだ……お前見てゐて分るかい』△『分りますとも、面白うございますね』○『面白けりやア明日又連れて來て上げるよ』△『どうかお願ひ申します、左樣なら……』



女房『お前さん何所へ行つて居たんだよ、お店へ行くといつて出て行つたツきり歸つて來ないぢやないか、何所へ行つて居たのさ』△『ベツチヤア』女房『何だえ』△『ベツチヤア……』女『ベツチヤアで惡かつたね……御飯を食べるかえ』△『アウト……』女『何がアウトなんだよ、御飯を食べないの、何方なの』△『キヤウキヤア……』女『どうせ私はキヤウ

キヤアだよ、子供が歸つて來ない内に食べておしまひよ』子供『お父さーん』△『ソレ歸つて來た、何だ』子『お父さん、あのね、お父さんにね、僕買つて貰ひたいものがあるんだけれどもな』△『何だ、變んな物を買ふんぢやアねえぞ』子『變な物ぢやアないんだよ、久ちやんも義ちやんも皆んなグローブを持つてゐるんだ、僕だけ持つてゐないんだ、グローブを買つてお呉れよお父さん』△『何だ、グローブなどを買ふんぢやアねえ、野球の道具を買へ』子『グローブといふのはお父さん野球の道具だよ、手へはめるだらう』△『ああ手袋の親方か』子『手袋の親方といふのはをかしいな』△『あれなら宜い、買つてやる〳〵、お前野球やるのか、感心感心、ぢやあ、グローブを二つ買へ』子『二つ……二つなんてお父さん要らないよ』△『お父さんもはめるから二つ買つて來い、サア十錢』子『十錢……お父さんグローブ二つ十錢ぢや買へないよ』△『負けて貰へ』子『幾ら負けて貰つたつて十錢ぢや買へやしないよ、どんなに安くつたつて十五圓するよ』△『十五圓……買つてやるがモウ少し待て』子『待てツて、何時まで待つんだよ』△『十年待て』子『十年なんて待てるものか、ようお父さん買つてお呉れよ』△『オイ』女『何だいお前さん』△『あの金庫から十五圓出せ』女『何を云つてゐるんだよ、家に金庫なんざアありやアしないやね』△『隣りの……』女『隣りの金庫など開けられやアしないぢやないか』△『明日買つてやるから今日は遊んで來い』子『お父さん、今日買つて呉れない……』△『明日買つてやるよ』子『詰らないな、今日買つて呉れても宜いぢやないか、僕が行かなきやア皆んなが野球が出來ないんだもの、皆んなで野球をやつてゐるんだから—△『お前が行かなきやア野球が出來ないのか、ぢやアお父さんが行つてやる』子『エヽ』△『お父さんが行つてやる、サア來い……ヤア皆んなやつてゐるな、感心々々』×『小父さん危ないから其方へ行つてゐてお呉れよ』△『何だ、小父さんにもやらせろ』×『駄目だよ小父さん』△『何でも構はねえから擂粉木を貸しな』×何だい擂粉木といふのは、バットかい』△『さうよ、バットでもリリーでも宜い』×『あんなことをいつてらア、ぢやア宜いかい』△『宜いとも、サア來い』×『左で打つか右で打つんだよ、小父さんの

は正面から打つんで危ないな、大丈夫かい』△『大丈夫だから一遍やらせろ』×『ぢやア一遍だけだよ、ソレ宜いかい、ホンボールをやるよ』△『宜し、ホンボールが宜い、嘘のボールはいけねえ』×『宜いかい小父さん大丈夫かい、皆んな守れよ、乃公が投るから……ヤツ……』△『アツ、ウーン……』×『ヤア小父さんがデツトボールで倒れてしまつた、あぶく吹いて伸びてしまつた……小母さん小母さん』女『何だい』×『小父さんが伸び



17

てしまつた』女『いけないね、伸ばすんぢやないよ、家の小父さん暢氣な人だから伸ばせば幾らでも伸びるんだよ……オヤ〳〵マア此の人は嫌だよ伸びてしまつてさ、お前さん確かりおしよ、お前さん、アレマア死んでしまつたのかよ』△『イヤ、セイフ……』（をはり）

紅茶のあと

◇

老婦人『坊ちやん、何をそんなに泣いてるの。』
坊や『だつて、だつて、僕にお休みがないんだもの。』
老婦人『どうしてなの。』
坊や『だつて、僕あまだ學校へ行かなんだものウ。』

◇

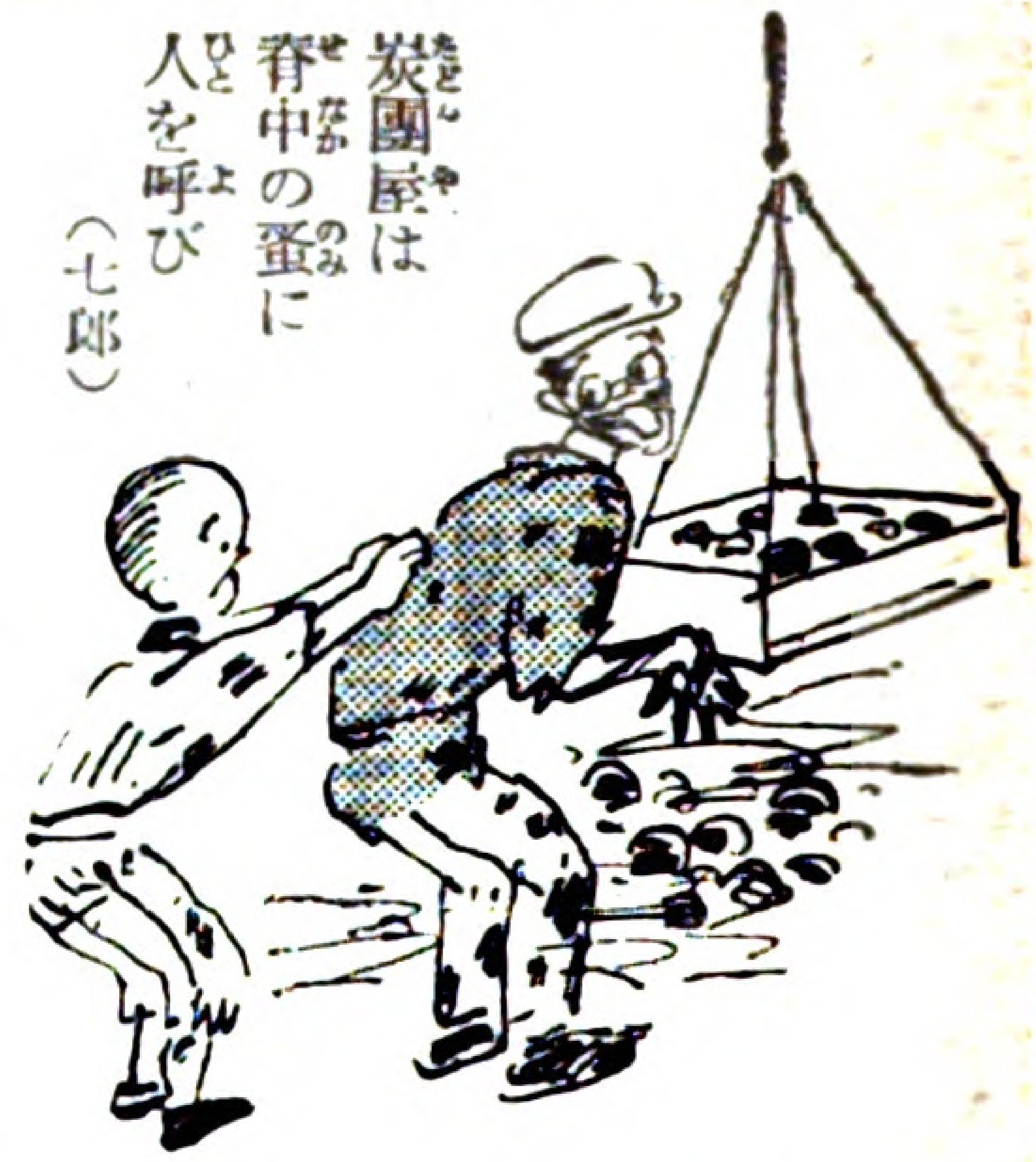
裁判官『被告は今の判決に異議があるか？』
被告『はッ！ちと刑期が長過ぎます。半分づつ勤めさせて貰ひたいもんで――。』

どんな人が將來一番見込があるか？

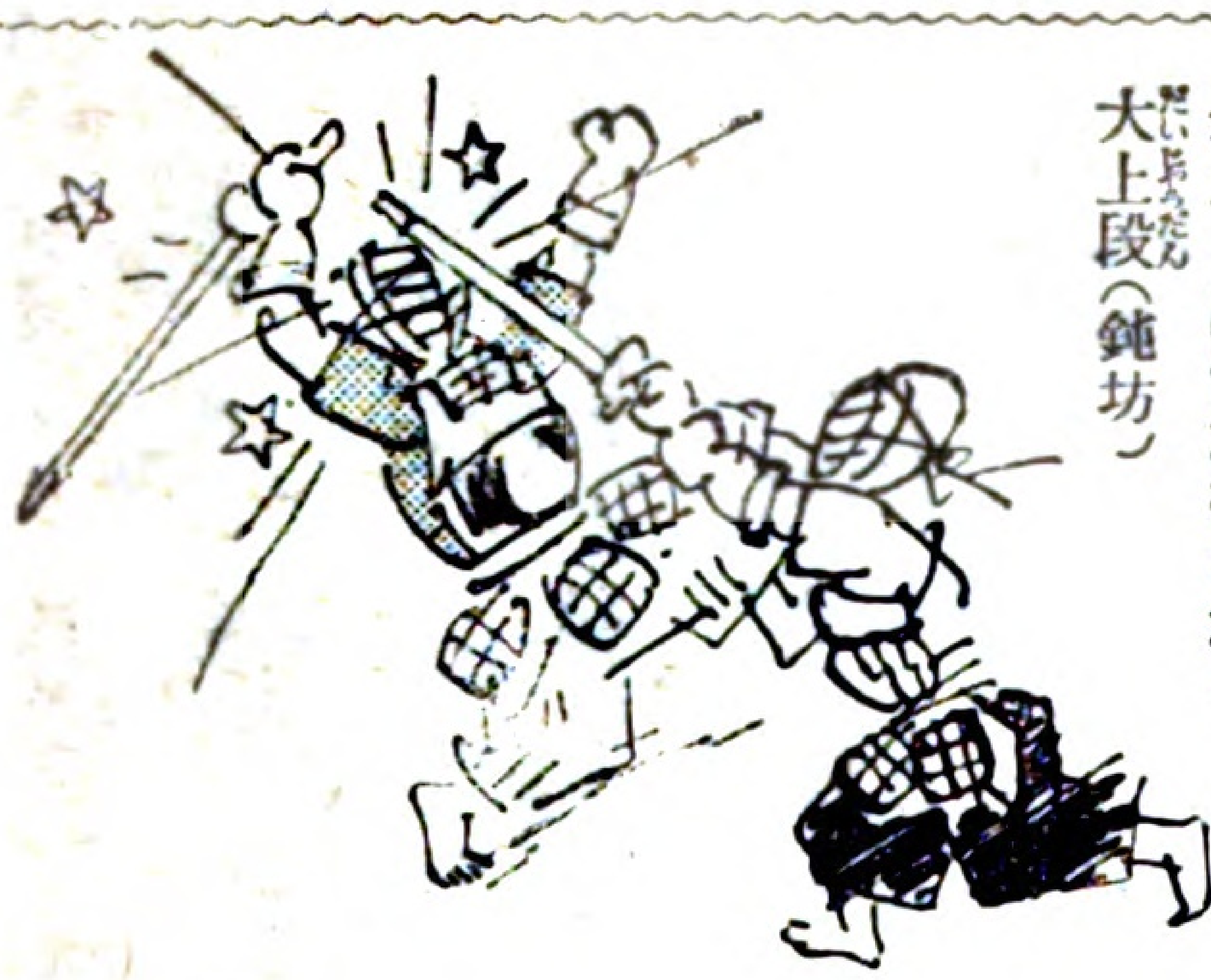
一世の英雄豊臣秀吉が、もと織田信長の足輕をしてゐた時、或る日の機智が主人に認められて、終に鰻上りに立身出世したことは既に諸君の知つてゐる話。

凡そ昔も今も、成功した人、出世した人は誰も自分獨りの力で偉くなつた者は尠い。皆主人とか先輩とかに『この者なら……』と見込まれて、引立てられた者が多い。――では、一體どんな人が將來一番見込みがあるか？　これは誰も知つて置きたい事柄である。

處で『現代』十一月號に、今この方面に最も適當な名士である岡崎邦輔氏、小林一三氏、鈴木喜三郎氏、及び嘉納治五郎氏に願つて、具體的に『こんな人が……』と推奬して貰つてゐるが、成程これを讀めば、現代に處して立身出世の秘訣ともなる有益な記事である。



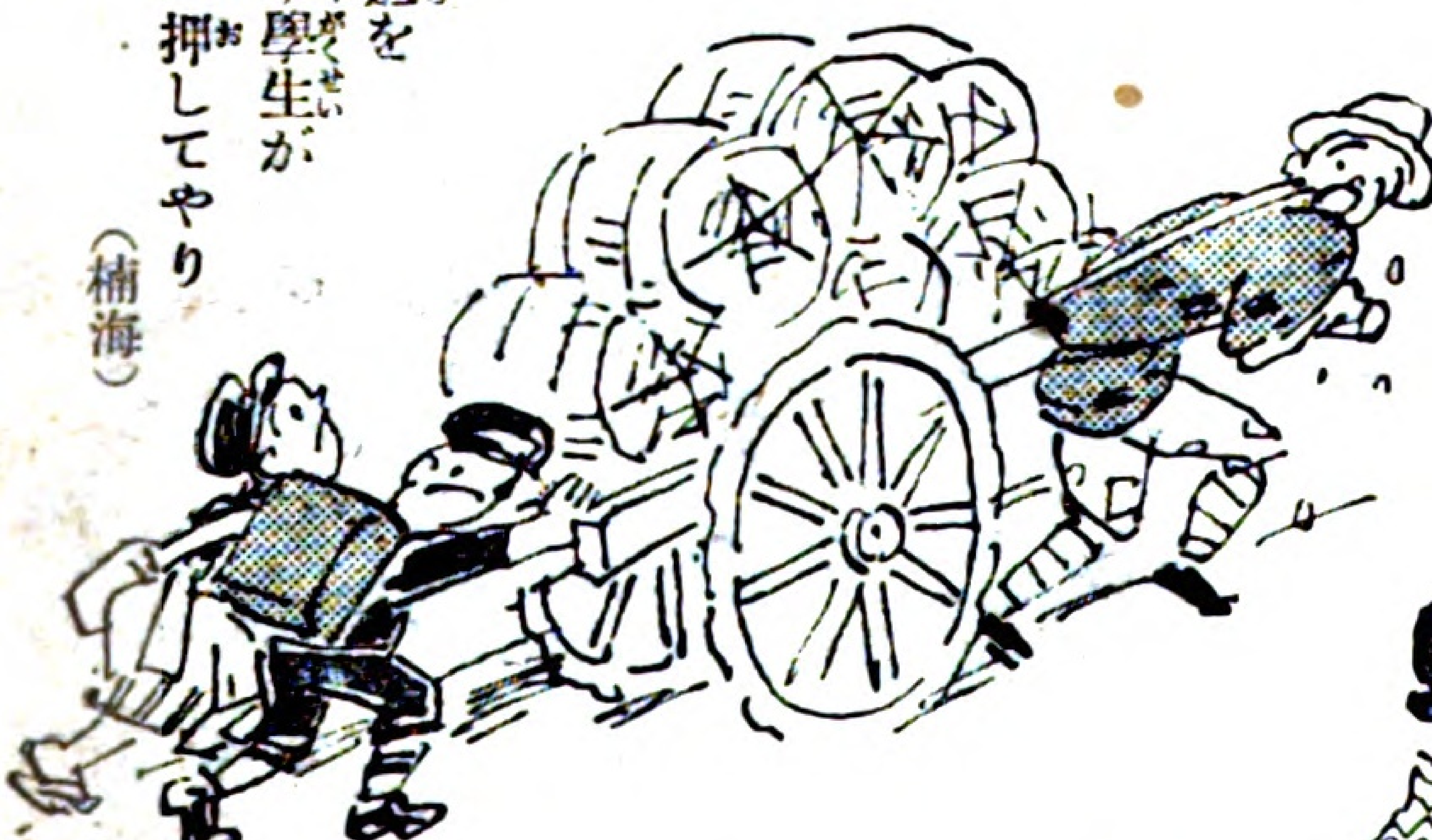
炭團屋は脊中の蚤に人を呼び（七郎）



先生の眞似が打たれる大上段（鈍坊）



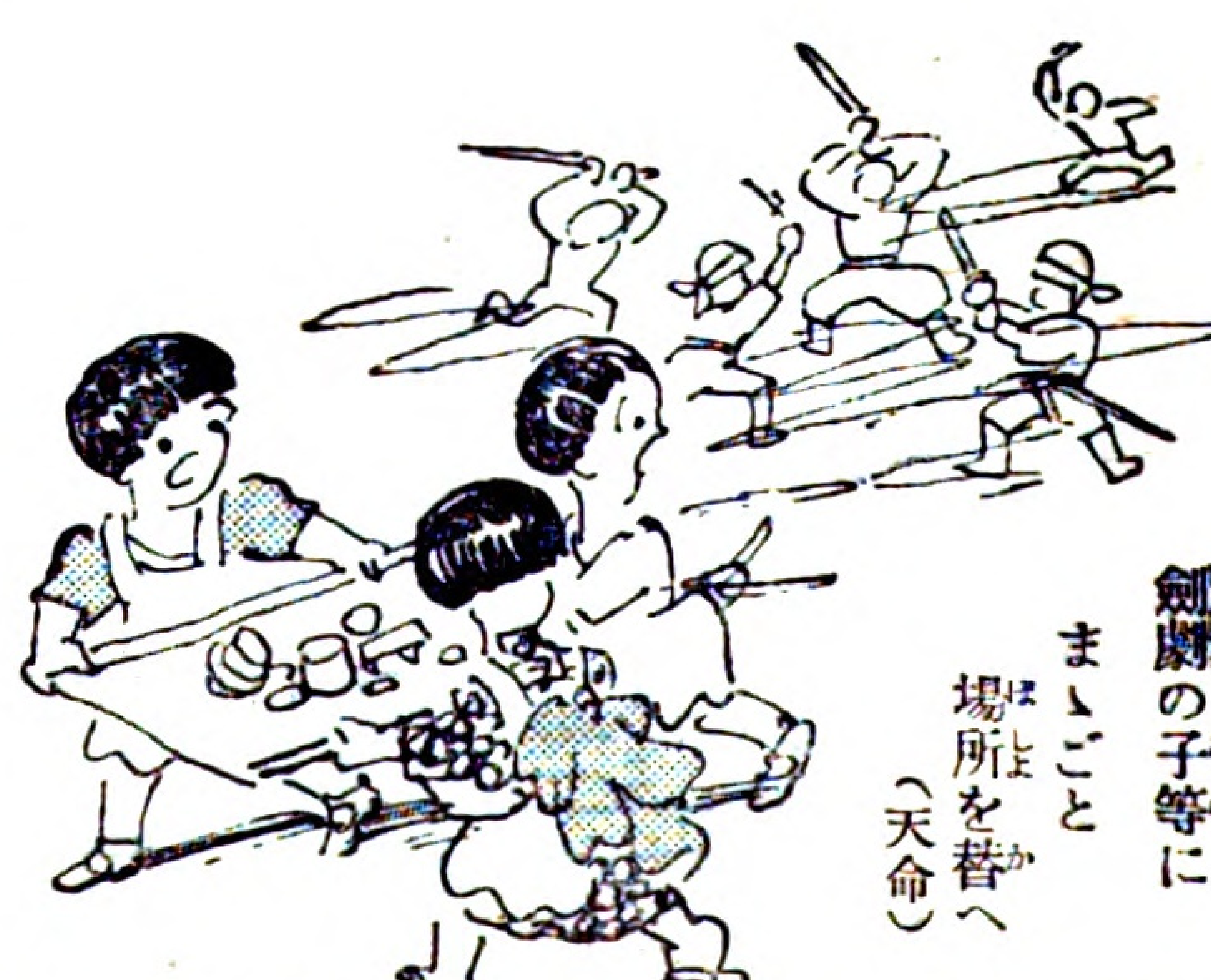
かゆくない顏を指環が見せたさに（出古坊）



坂道を小學生が押してやり（楠海）



吊革の亭主がなほす子の頭巾（痴佛）



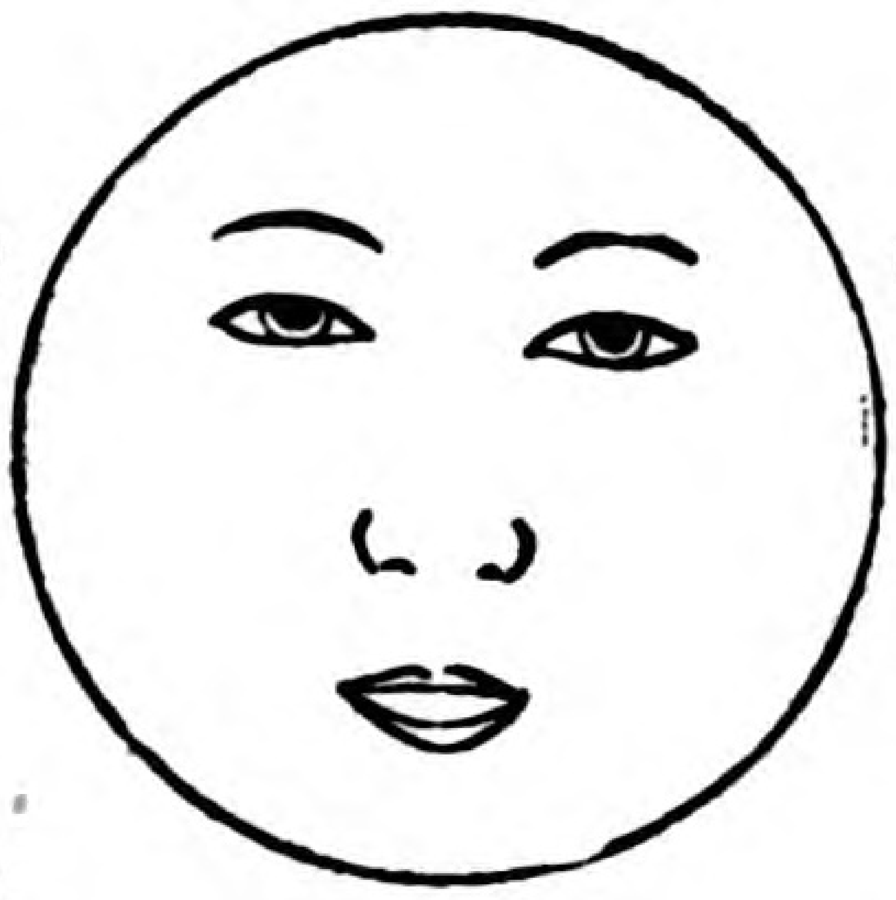
劍劇の子等にまゝごと場所を替へ（天命）

川柳漫畫

谷脇素文

萬人熱狂 智惠くらべ

（一）不思議な月



此の月の中に二つの顔があるといふのですが、何故でせう？

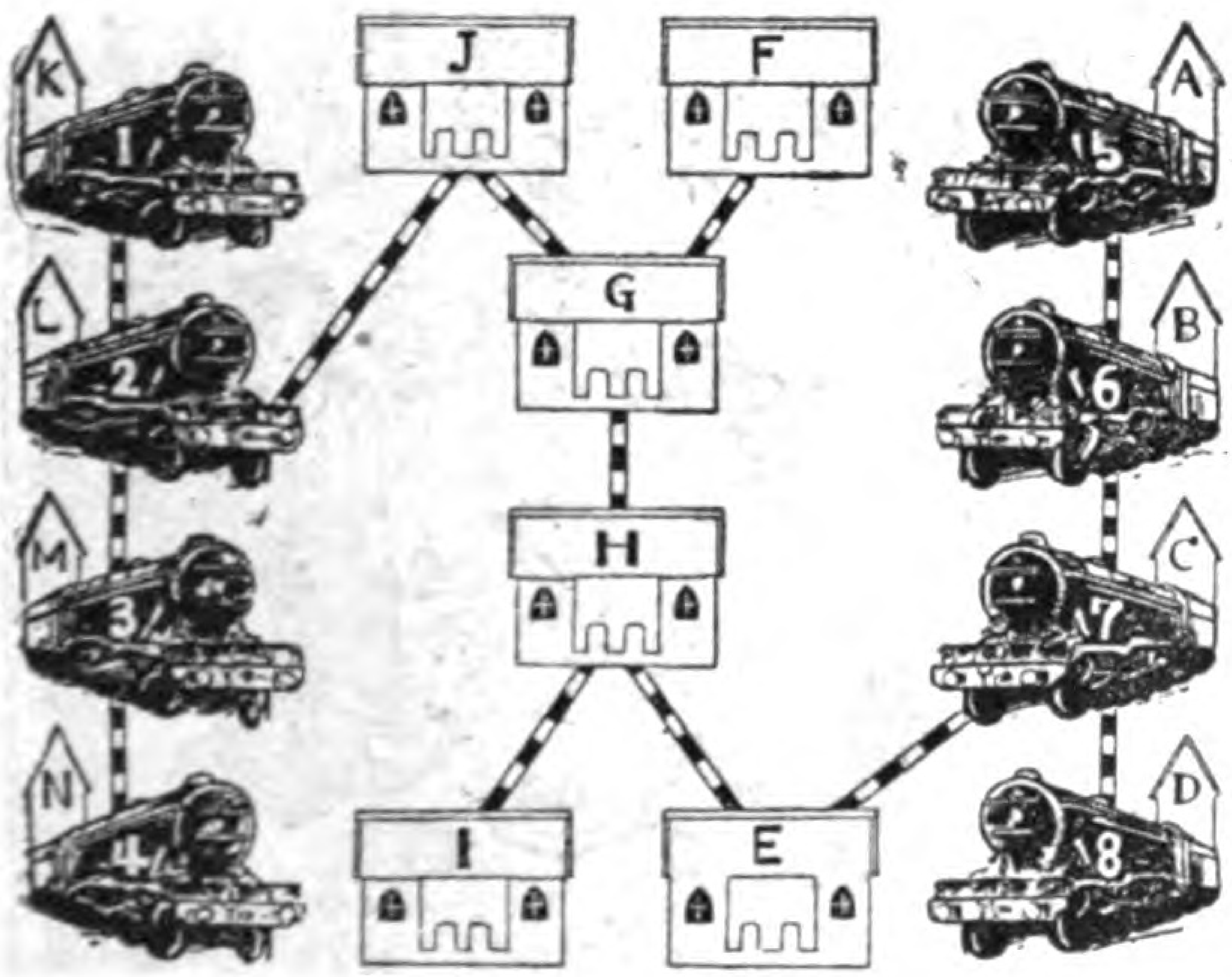
（二）マッチの問題

圖を見ると、二十本のマッチの棒で正方形が五つ出來て居りますが、今このマッチの棒を一本も減じないで之以外の狀態で接續した五つの正方形を作るには、どうしたらよいでせうか？

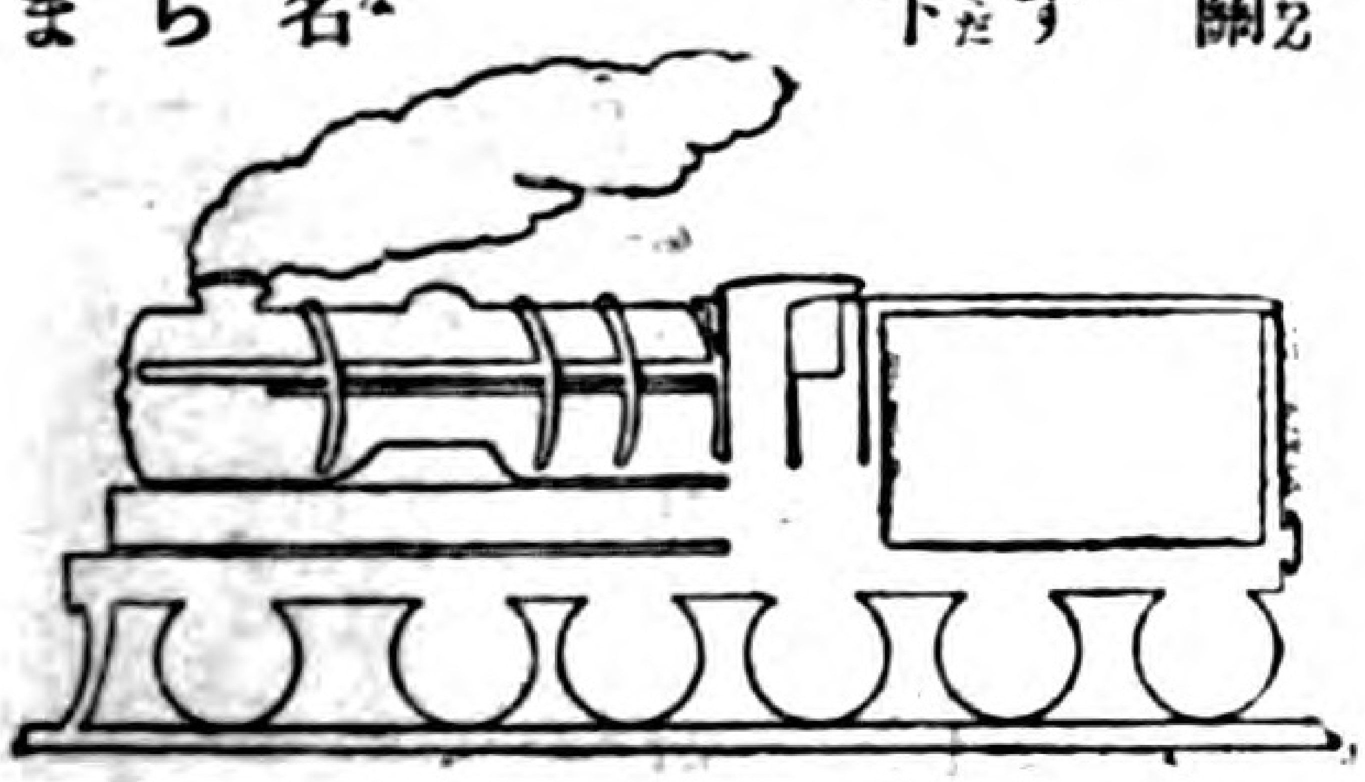


（三）八個の機關車

之は八つの機關車です。八機關車は圖の如くKからN迄とAからD迄の停車場に一つ宛停つてゐます。さて其一つ宛が動き出して1から4迄の四つと5から8迄の四つが全部その位置を代へて了ふにはどうしたらよいでせうか？（但し一つの機關車は何所迄も動きますが、途中で他の機關車を乗り越える事は出來ません又一つの停車場に二つの機關車が同時に停る事も出來ません。そして全體で動きは十八回と限られてゐます。



（四）下圖の機關車は一筆で描けます一つ考へて見て下さい。



（五）考へ物

(1) 百人一首の中で名前も、歌も共に濁らない人が一人あります。誰でせうか？

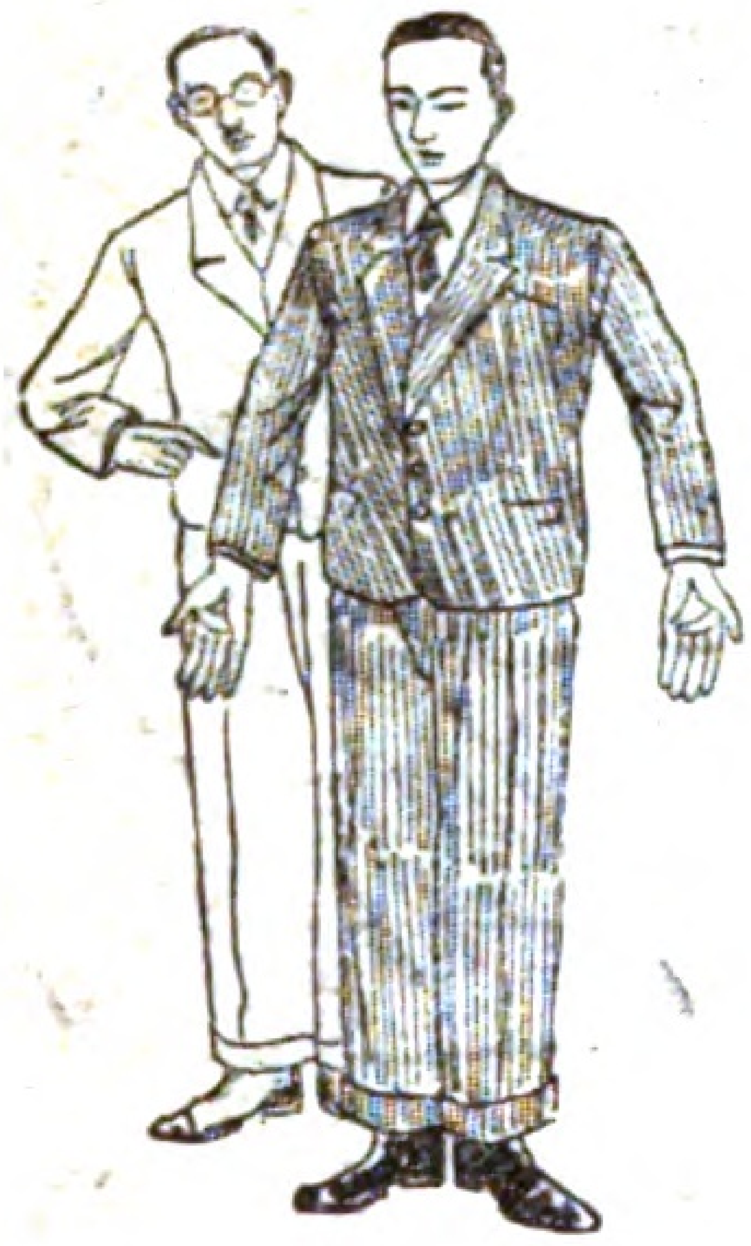
(2) 樫の木を賣つて、何の魚を買つたでせうか？

（六）何と讀む？（東海道線の驛名）

（イ）
（ロ）家士
（ハ）島島島
（ニ）十十八八　十十八八
（ホ）ぎ　ぎ

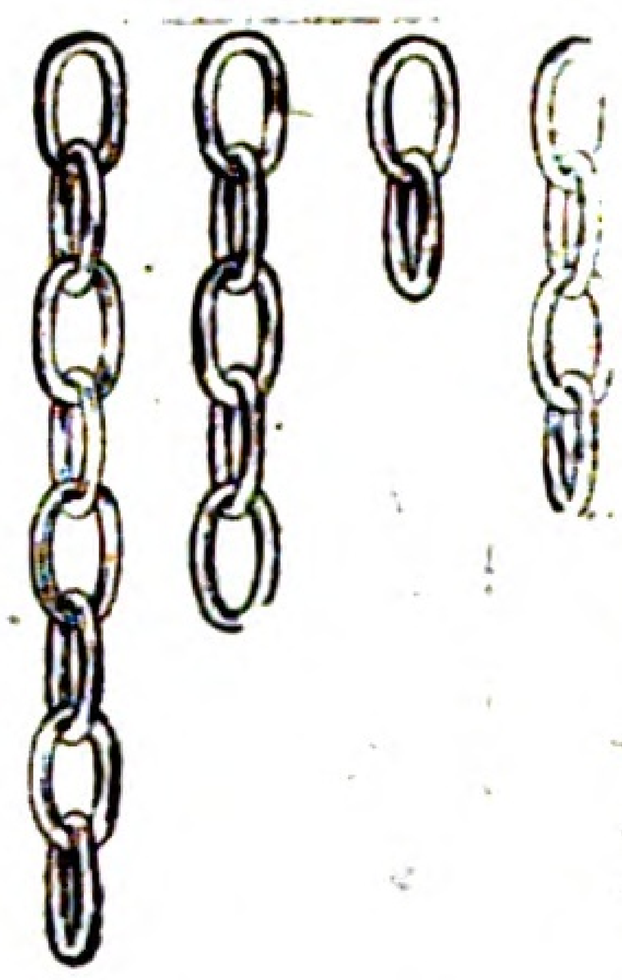
（七）屆かぬ場所

ポケットに入れたり、物で包んだりせずに、左手の指で觸れる事の出來ない體の外部の或點はどこでせうか？



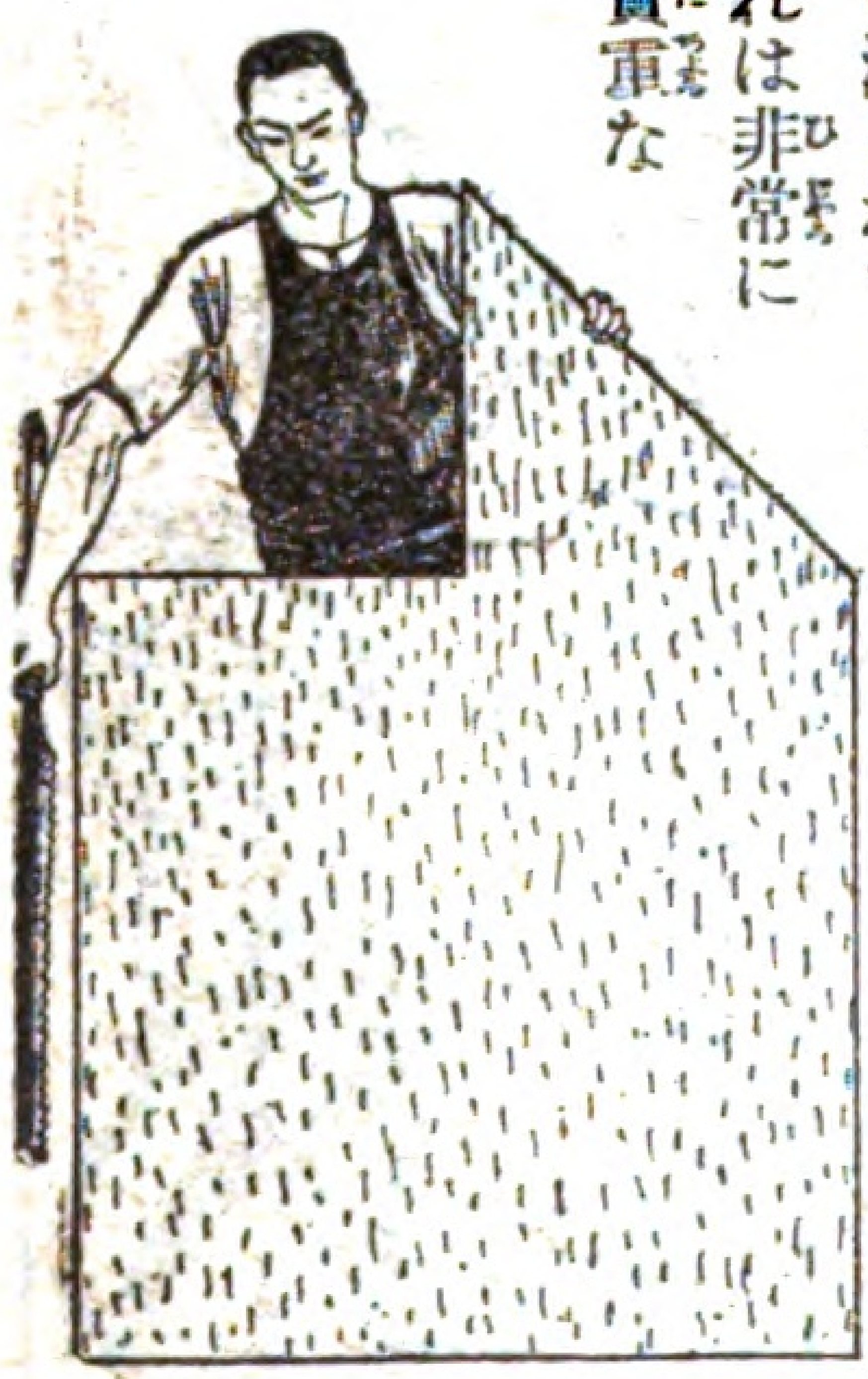
（八）鎖つなぎ

圖の樣な鎖がある。此の四本を一列の長い鎖につなぎたいのだが一つの鎖の環のつなぎ目をはなして又元通りにするには十錢づつかゝる。併し三十錢出せば新らしいのが買へるから三十錢より安くしたいのだ。どうしたらいゝだらう。



（九）大工の智慧

或る大工が圖の樣な形の木片をお得意先から渡されて、これは非常に貴重な木なので、少しも無駄にせず、眞四角な板を拵へてくれと云ふ注文を受けました。大工は悧巧な男だつたので、之を三つに切つて繼ぎ合せると、眞四角な物が出來上りました。勿論鋸屑が出たのは、仕方ありません。ハテどう云ふ風に三つに切つたのでせうか？



（一〇）自動車の速さ

或旅人が『私が一時間に三哩半の速さで歩いてゐると、自動車が素晴らしい速さで私の傍を通り拔けて行きました。それから、その自動車が向ふの角を曲つて見えなくなる迄に私は二十七歩だけ進んでゐました。そして私はその曲り角迄行くには更に百三十五歩ありましたよ。これで自動車の速度は分らないでせうか』と申しましたが、サアどうでせう。皆さんこれで分るでせうか。



（本欄解答三四七頁）



肥滿が離婚の理由

紐育株式取引場の組合員であるデー・エル・サミユエルスといふ男が此程その妻から奇妙な理由で離婚訴訟を起され、それに負けて毎週二百五十圓の別居手當を拂はねばならぬことゝなつた。此男は生れついて非常に肥滿して居て、體重が三百三十六ポンド（四十貫強）ある。妻はこれを苦情の種として、離婚を求めたのであつた。

その言ひ分に曰く、

『私は十六の時、或溫泉場で此男に會ひ、その時結婚を申込まれたが、あまりに太つて居るので否だと言つたところ、彼は結婚の後には食ふ物を少なくして瘦せるやうにすると約束した。それで遂に結婚することにした。それから暫くの間、夫は約束通り、成るだけ食べないやうにして、朝飯はぬきにして居たが、間もなく前の通り大食するやうになり、朝飯も家では食べないけれど、外でレストーランへ行つて食べて居ることが分つた。それで肥る一方で、先日も或所へ旅行中、夫は海老の料理を注文したので、それは食べてはならぬ御馳走の一つではないかと注意したところ、夫は非常に機嫌を惡くして、そんならもう何も食べないと言つた。かゝる次第で、毎日のやうに食べる、食べてはならぬと喧嘩が絶えない、到底同棲は出來ない』



といふのであつた。これに對しサミユエル

スは『自分はわざ〳〵妻の感情を惡くする爲めに大食するわけではないが、腹が空いてたまらないのである。自分は前の通り妻を愛して居る』と申立てたが、女天下の米國だけに裁判所では女の言分は道理であると判決して、その願を聞屆け、且つ既に述べた通り別居手當を支給することを命じた。

駝鳥の腹から金剛石

南アフリカの駝鳥の腹からダイヤモンドがコロ〳〵飛び出したといふ近頃耳寄りな話がある。話といふのは、南アフリカのカラハリ沙漠において或る獵師が二頭の野生の駝鳥を銃殺し、一頭の腹をたち割つたところ、不思議にも胃袋の中から五十三個の大きなダイヤモンドが燦然として現れた。驚愕した獵師は取りあへず今一頭の胃袋を調べるところこれにも亦十七個の大ダイヤモンドが入つて居た。



ところでどうして駝鳥の腹からこんなにダイヤモンドが飛び出すかと不思議がられたが、聞くところによると、何でもこれ等野生の駝鳥はダイヤモンドの無數に藏せられて居る人跡未踏のアフリカの奧地をかけ歩く際腹こなしに寶石を見つけてはこれを丸呑みにして了ふからださうだ。なほ此報道が一度傳へられるや、拔目のない慾張り連中は早くも南アフリカの遠征隊を組織し、しこたま駝鳥をふん捕まへて一躍金剛石王にならうと夢みてゐる氣の早いのがあるとか。

鹿の騎兵隊

スエーデン國に育つ大鹿は種々な點で馬に優つてゐるので、馬は追々鹿の爲めに驅逐されつゝあるさうだ。

第一走らせたら馬は到底鹿の足もとにも追ひつかないとのことだ。嘗てストックホルムで行はれた競馬に鹿が出場して美事第一着を占めたことがある。但し此時は鹿が馬の仲間入りは變だといふので賞品にありつけず馬鹿を見たさうだ。またスエーデンは鹿は昔から乘用動物となつてゐるが、若し罪人が鹿に乘つて逃げ出すと如何なる駿馬でも追跡し切れないといふことで、一時勅令で鹿に乘るこ



とが禁ぜられたこともある。

それからまた、鹿はどんな山道でも平氣で走るし、從つて僻遠の地へわざ〳〵道路を開かなくとも間に合ふといふので、郵便物の遞送に用ひて便利だといふことだ。

そんな爲めか最近軍事專門家の間には鹿の騎兵隊を創設して馬の騎兵に面喰はしてやらうと云ふ計畫が企てられてゐる。

世界一の長壽者

最近支那に當年とつて二百五十二歲といふ恐ろしく年取つた人がゐることがわかつた。勿論世界一の長壽者である。

李珍元といふ人で康熙帝時代（德川四代將軍家綱の時代）に四川省會理縣に生れたさうで、幼い時から藥種商を營み、方々の山奧まで藥草を採集しては渡世して來たといふ。そして驚いたことには今でも大の元氣で、話もはつきりし、人一倍食ひ歩くのも平氣で、今日までに妻をめとること實に二十三回といふ記錄もちで、現に六十歲の細君を持つてゐる。百歲と二百歲の時にはお上から長壽の御褒美も貰つてゐる。なほ李老人は見るからに顏が秀でて廣く、兩耳は福神のやうに大きく垂れ一見仙人そのまゝで、長壽者獨特の面貌を備へてゐるさうだ。



いよ〳〵今回發見されたとあつては人間長壽法の爲め貴重な研究資料を提供して呉れることであらう。

世界一の健康地

世界第一の人間の健康地はロシアの大陸北方の北氷洋中にあるノヴア・ゼムブラ諸島だとロシアの學者が主張し出した。そこは生肉を八ケ月も戶外へ放置し置いても腐らぬさうで、結局ここではすべての病菌が繁殖せぬといふ理由から右の主張をなされるに至つたさうである。



座談會 だより

興味ある 十一月號の計畫

××座談會、○○漫談會と座談會大流行のこの頃、何かとび切り面白い、そして實のある座談會をと、本社「婦人倶樂部」が苦心研究着々進行中のものに、

一、芝居と映畫 樂屋話し座談會

といふ、人氣俳優の苦心、失敗、滑稽縮尻等、他では聞かれぬ珍談持ち寄りのトテモ面白い會合です。更に、

二、家事と家政 やり繰り座談會

近頃呼び聲の高い節約緊縮の生活をお勝手元に迄及ぼした新工夫續出の評判の座談會！

皆樣！ メキメキ發展しつゝある婦人倶樂部定評ある十一月號を御覽下さいませ。






婦人は勿論男子も御覽下さい

婦人倶樂部十一月號の評判記事——

▲明治大正昭和代表花嫁すがた畫報（口繪）
▲新時代の奥樣資格……▲再婚幸福物語……
▲各界新進婦人評判記……▲新世帶日記……
▲みにくい顔を美しくした醫療法公開
▲黙りやの良人 不機嫌な夫 に對する妻の話の持ちかけ方
▲婚禮衣裳の選び方、仕立方、着附の仕方
▲姿を優美に見せる着物、羽織、帶仕立方
▲手輕に出來る裝飾手藝の作り方數種
▲手紋の神祕物語……▲婚約時代（實話）……
▲家庭醫療室……▲安價滋養料理……

……この外直ぐ役立つ話記事、評判の傑作小説續々發表！ 是非御味讀下さいませ。

婦人倶樂部 十一月號 **十月十六日發賣**（全國書店にあり、今より御申込み置き下さい）



こんな注意も必要

○人に道を教へる場合、洋杖や洋傘で方向を示すのは無作法です。殊に目上の人に對しては注意が肝要です。

○道で人に出逢つて話があつたら、片隅に寄るか、又は對手が先輩の場合は、其の人の行く方向に跟いて歩き乍ら話をします。

○親密な間柄で無い限り、他家の玄關先まで乘物を横づけにするのは愼しむべき事、少し手前で降りて、衣紋を整へてから訪ねた方が奥床しい。

○いきなり『御主人御在宅ですか』と言つて、『貴方樣は？』と取次に反問されてから名刺を出すなどは非常識の禮儀知らず。

○他家で御馳走になる時、鹽、胡椒、辛子等調味料が出てゐても、味の附いてゐる物にはなるべく用ゐない樣にします。これは主人側が料理の調味に對する謙遜から出すものです。

○珈琲の中へ角砂糖を入れる時、指でつまんで落すとポチヤンと汁が跳返つて恥しい思ひをする事があります。必ず匙で茶碗の縁の所から靜に入れるがよい。

◇若い婦人の醜い歩き方

此頃の若い女の人は大股に歩く風があります。活潑には見えます。しかしやさしみといふものがどうも體の線に出ません。殊に洋服を着た女の人は一層大股に歩く風があります。

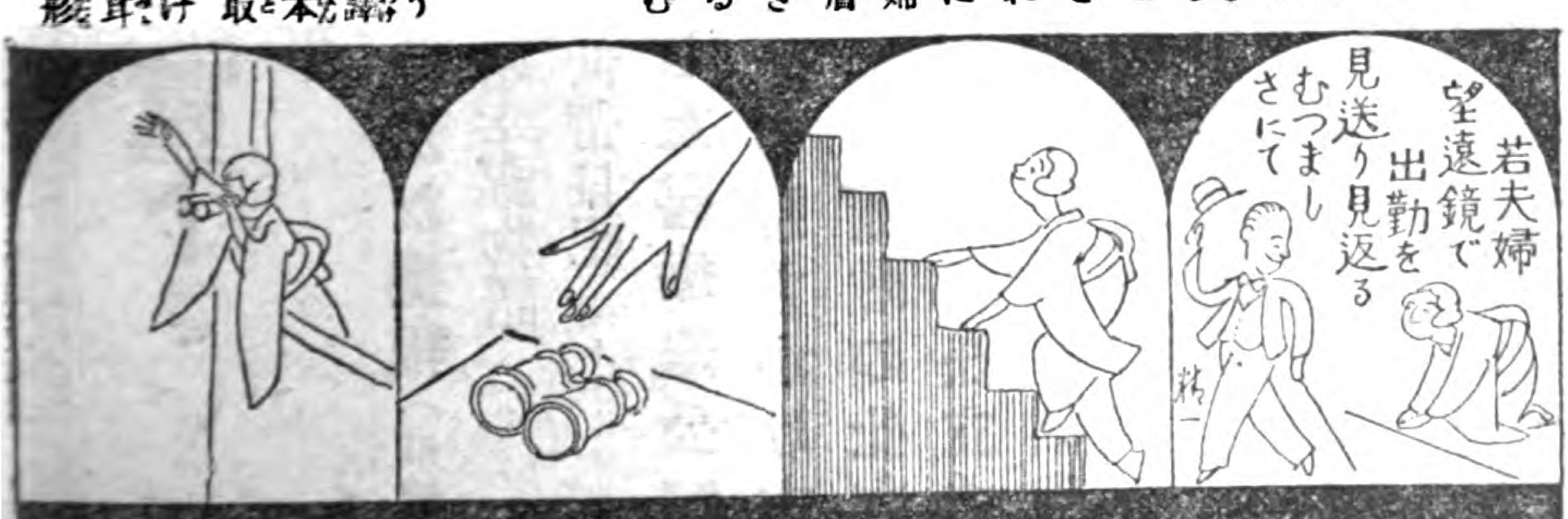


けれども西洋でも女の大股に歩くのと兩手を振つて歩くことは寧ろ恥とせられて、謹み深い者や洒落者は絶對にしません。洋服を着てゐる西洋婦人ですらさうであるとすれば、着物を着て歩く日本婦人の大股歩きは決して女の姿をやさしく見せるものではないと思ひます。改むべきです。

◇耳のお化粧



何といふ譯か、日本人、取り分け女の耳は、形



の悪い、耳の喰ひつき加減の悪い人が多いのであります。耳かくしは斯うした譯からも必要を感ぜられます。そこで耳は丸で出して終ふことはよして上半部は必ず髮でかくすべきであります。そうして一日一回はアルコールのある化粧水をガーゼにつけて、耳の內外を能く拭いてから耳たぼには頰紅をつけるべきであります。耳くそこそ溜つて居りませんが、耳の周圍、殊に中を眞黑にしてゐる人は可成り多く電車の中で見受けます。之れは男の方でも同じで極めて醜いものです。

◇ネクタイの扱ひ方

ネクタイの皺を伸す際に、表からアイロンを當てますと、長い間には地質を損じて、光澤も悪くなります。先づ中の芯を丁寧に伸してから、必ず裏から當てる事が大切です。一寸位の皺なら、鐵瓶の湯氣の上に翳して、座蒲團の下に敷いておいても結構です。

ゑばなし

霜は降るか

『ねえ一郎ちやん、早く來てごらんこんなに降つたわよ、眞白!!』

『やあい姉さんあんなこと云つてらあ霜なんか降るものかい』『どうしてさ』



『だつて霜柱を御覽、土の上にあるぢやないの、あつお父さまだ、ねえお父さん霜は降るんぢやないんでせう』

『さうです、霜は降るのぢやありません、屋根や草の上にある水分が、夜のつめたい間にそこで氷つたのが霜でせう、だから、霜は、ふるのぢやなくて置くのでせうね』

ご存じですか

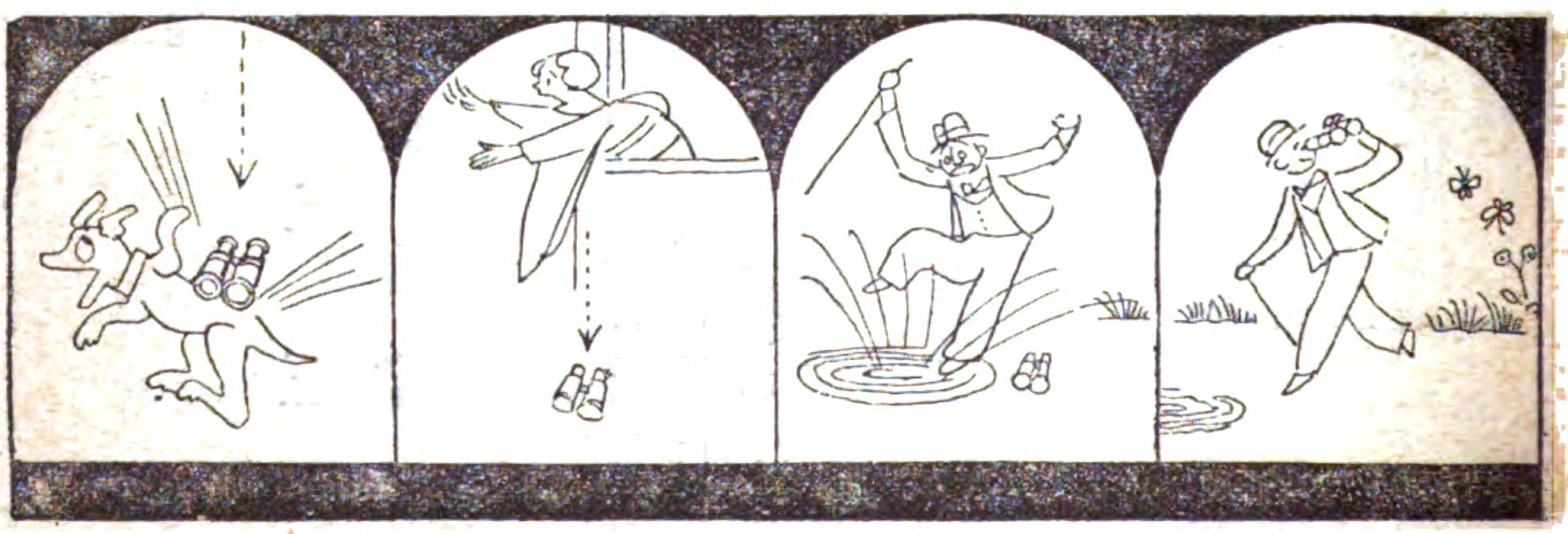
○何んでも揚物は油の眞中へ入れてはいけません。鍋の端から辷らせる樣に入れます。

○お酒の燗は德利を斜めにお湯の中へ入れておきますと、熱さにムラが出來ません。

○煮物をなさいます時、お醤油を一時に入れないで、二三回に分けて入れると、色よく味加減も適當のものが出來ます。

○澤庵や菜漬を一層味よくするには、大豆を炒つて粉に挽き、それを一側へ一握づつ振り撒いて漬けます。

○秋刀魚や鰯を焼く時、脂肪が火の上に落ちて燃え上ると黑く焦げます。其の際は火の上に鹽をふりまくと脂肪が燃え上りません。





名裁判物語

滿蒙開發の人柱

衆議院議員　牧野良三

小寺健吉畫

奇怪なる一語

第五十六議會も愈々最高潮に達しかけた一月二十六日、それは恰も、議會第一の呼び物とされてゐる衆議院豫算委員會の第二日目のことである――

在野黨の闘士中野正剛君が、人氣の焦點たる滿洲某重大事件を提げて、田中首相と白川陸相とに渡り合ひ、前日に引き續く猛襲、猛撃、熱し切つた中野君が、卓を叩いて肉薄するや、委員會の空氣は極度に亢奮して、正に白熱の頂點に達せんとした。

その折も折、田中首相は、

『宮中からのお召しの時刻が參りましたから……』

と一言、これはまた悠然と退席し始めた。野黨の面々、何條以て默すべき、

『卑怯だ！　卑怯だ！』

『逃げるのか!!　卑怯!!!』

忽ち首相めがけて一齊にいきり立ち、總立ちになつて罵り騷いだ。が併し、宮中のお召は前日來の事實で、既に時刻は切迫してゐたので是非もない。この事實を告げられた野黨の面々は、齒嚙みをして『長蛇を逸する』無念さを面上に漲らせ、殺氣は却つて一段の凄慘を加へた。

その時、首相に代つて答辯席に立ち現はれたのが、外務政務次官の森恪君である。

『君の答辯なんか無用だ、止せ！　止めろ!!』

『こら、止めんか！』『下れ!!』

野黨側から怒濤の如き罵聲が湧いた。併し森君は、それを物ともせず、喧騷の中に強ひて答辯を續けんとするや、突如、野黨の鬱憤は爆裂した。

『護摩の灰！　オイ、コラ護摩の灰默れ！』

K代議士が怒鳴つた。

『何ツ!? 護摩の灰? 護摩の灰とは何だ!!』

與黨側の五六人が、血相變へて立ち上る。

『護摩の灰ならまだしもだ、貴様は塔連炭鑛の被告人ぢやないか!』

又もK代議士が、毒々しく、威丈高に、かう叫ぶ。

『無禮なことをいふな!』

『無禮とは何だ!』

『懲罰だ! 懲罰だ!!』

怒聲、罵聲、肉薄、議場は今や鼎の沸くが如き混亂に陷り、また收拾すべからず――と見た堀切委員長、

『本日は空氣が大分惡くなつて來たやうですから、これにて散會します』

さつさと閉會を宣して立上つた。その機智と老巧さとは、敵をも味方をもアツといはせて、まんまと名委員長の名を擅にしたことは、第五十六議會切つての特筆的事實であつた。

しかもこの特筆的事實は、私の胸に、電光の如く更に他の特筆的事件を喚起せしめた。端なくも叫ばれた『塔連炭鑛の被告』の一語から、想起する塔連炭鑛事件である。

然り、この一語を耳にして、私は、實に、憤激悲痛、軀中の血が一時に逆流し、彈じかれたやうに飛び出して、いつの間にか、K代議士の身邊に肉薄してゐたのである。

それ程私を亢奮せしめたこの塔連炭鑛事件とは、抑も何であるか。

憶へば既に十年の昔だ。當時の滿鐵副社長中西清一氏が、時の原内閣と結んで、塔連炭鑛を二百二十萬圓で買收し、その内の數十萬圓を、政友會の選擧費に貢いだといはれて起つた一大疑獄事件である。大正十年の春から十三年の秋に入るまで、實に前後四年に亙る一大政治疑獄として、一世を震駭せしめた所謂滿鐵事件である。私は、この事件の眞相を知悉するもの、思はざりき端なくもこゝに聞く『塔連炭鑛』の名は、坐ろに當年を回顧せしめ、無限の悲憤、無量の感慨を誘はざるを得なかつた。私はその日、議會の控室で、十數名の同志議員に圍まれ涙ながら、一場の回顧談を試みさせられたのである。

スバらしく厖大だ

問題の人、時の滿鐵副社長中西清一氏は、稀に見る豪毅果斷、機略縱横な人物であつた。生粋の江戸ツ兒で、熱血に富み、常に日蓮の崇拜者であつたことも、よく彼の性格を示してゐる。大學を出てから始終役人生活をのみしてゐたが、寡默雄辯、何事もよく強記したことは驚嘆するばかりであつた。その中西氏が、前後四年間、大掛りな鳴り物入りの宣傳で被告席に立つたのは何故であつたか?!

事件の内容は、單なる中西氏一個の問題や一政黨に關する問題ではない。實に滿蒙開發の根幹たる我日本の國是に關する重大問題、眞劍な國策上の一大案件であつたのだ。

それが種々の理由や動機から、計らずも黨爭に利用され、政



中野正剛氏



田中義一氏



森恪氏

爭に惡用され、遂に犯罪事件として世間を騒がすに至つたのである。感慨深い私をして、少しく追憶に浸らして欲しい。

大正八年の春、新副社長中西氏が、任に就き、滿洲に赴くや、先づ茫漠たる大陸の天地を見渡して、果して何を感じたであらうか。無盡藏なる天然の大寶庫を擁しながら、財政の困難と情弊の堆積とで、經營全く行詰つてゐる當時の滿鐵を見て、彼は何を考へたであらうか。籌策自在の彼が、猛然として一大改革を斷行せんと決意したのは、寧ろ當然の事であつた。

果然、一大斧鉞は下された。曰く職制の改正と職員の大更迭、曰く二千五百萬圓の運賃値上げ、曰く千八百萬圓の増給増手當、曰く八千人の人員淘汰、曰く八十萬圓の購買組合設置等々等。この大袈裟な整理と改革とが、疾風迅雷、矢繼早に斷行された。しかもそれは殆んど彼一存の專斷で行はれたのであつた。驚異と不安、反感と嫉視、一部の理事や社員から、極端に異端視され、極度に憎怨の的となつたのも洵に當然といふべきで、後日の禍を培ふべき土壤は、かくして氏の身邊に準備された。

然るに、かゝる裏面的事實には全く無關心なる氏は、その危險な土壤の上に、氏の心血を濺いだ大事な種子の根を下ろした。それは即ち雄大なる滿蒙開發の大計畫、所謂『滿蒙五年計畫』であつた。

赴任早々の新副社長の眼に、先づ映じた滿鐵の問題は何であつたか、曰く、第一は、その豐富なる石炭に關する問題、第二は、開發の手の延びない鐵の政策、而して第三は、滿蒙到る處の野に横たはる農產物資の利用。以上の三者は、滿鐵の三大富源であり、滿鐵の使命であると同時に、また我日本の常に望んで止まない三大物資である。

唯この中の農產物資は、民間企業家の自由手腕に一任して差支へないが、前二者に至つては、獨り我滿洲鐵道會社のみこれを能くし得る事業であり、又實に滿鐵が、日本の國家と國民とに負ふ重大使命である。

時は正に歐洲戰亂直後で、鐵と石炭の兩事業は、國民の最も痛切に要求してゐた際であつたから、この二大政策を建てることは、正に當面の重大なる緊急問題であつた。

原内閣の遞信次官から特に拔擢され、滿蒙經營の大任を帶びた中西氏が、我が使命正にこゝ



中西清一氏



故原敬氏



松本烝治氏

にありと解し、直ちにこの二大事業に着手したのは、眞が達見の人といふべきである。

これはズッと後日のことであるが、彼が滿鐵事件の世評に氣を腐らせ、折々私の宅へ來て夜を更かしてゐたある夜、

『僕はこの滿鐵五年計畫案を、原さん（首相）のところへ持つて行つて、見せたら、原さんが、あの皮肉な赭顔一ぱいに笑を湛へ、「中西君よくそこへ氣がついたね」と褒められた時には、一寸得意だつたがね――』

と、感激の人中西氏は、若々しくポーッと頰を染めながら、兩眼には艶く滴を浮べて語つたものだ。

然るに何ぞ、この滿鐵五年計畫案こそ、彼を殺し、世間を騷がせた疑獄事件の中樞をなすものであるとは。こゝにその內容を少しく語つて見たい。

大事業の暗示

ものゝはずみといふものは面白いもので、彼が滿鐵に赴任して、仕事は鐵と石炭であると睨んで、愈々それに手を着けんと考へ始めた頃、彼のこの芽萠をしたばかりの小さい決心に、油を注いだ事件が起つた。

それは、彼の就任後三ケ月、大正八年六月二十一日の株主總會の席上で起つた事件である。有力な大株主數名は、從來の滿鐵の經營を散散にこき下ろし、微に入り細に亙つて非難攻擊の矢を放つた。新任副社長が、これで怒り出すか、それとも悄氣返るかと思ひの外、彼は昂然、襟を正して、斯う聲明した。

『諸君の御非難は一々御尤もに存ずる。滿鐵は、この重大時期に際し、事業の上にも、事業資金の上にも、全く行詰つてゐる。私は、次回の總會までには、その對策の具體案を立派に建てる決心である。そして若し、その時までに案を建て得なかつたならば、私は、滿鐵副社長として再び諸君に見ゆることをしないであらう』

これが彼中西副社長の言明であつた。株主連が、新參の副社長の度膽を拔く積りで放つた凡ゆる非難攻擊の矢は、却つて中西氏のために逆用され、この大見得切つての言明に、あべこべに株主連が度膽を拔かれ、その齒切れのいゝキビ〳〵した彼の言語と態度とに、すつかり魅せられたといふことである。

併し、その言明は、單なる空見得ではなかつ



井上匡四郎氏



俵國一氏



小日山直登氏

た。大法螺ではなかつた。確信ある新計畫の暗示であつたのだ。

かくて、彼の暑中休暇は多忙を極めた。事業計畫の調査と研究とには少なからぬ苦辛が拂はれた。そして涼風の立つ十月、彼は、新任主席理事松本蒸治博士を初め、幹部數名と共に、箱根の強羅に身を隱し、携へ持つた資料に依り、具體案の完成に沒頭した。そうして出來上つたのが、問題の五年計畫案であつた。案に曰く、一、速かに鞍山站製鐵所より鐵を出せ。二、撫順炭鑛より掘る石炭を倍額にして、一ケ年六百萬噸にせよ。三、それを向ふ五年間に實現せよ。四、これに要する資金全部を約五億圓と見る。五、內、二億四千萬圓は現在二億圓の滿鐵資本を、二億四千萬圓增資して四億四千萬圓とし、更に二億四千萬圓の社債を起す。(以上)

これである。迚も大規模なこの案が、確定案となつて間もなく監督官廳に提出され、原首相に示され、閣議の席に持ち出されて、總べて承認を經た後、大正九年四月、之がために臨時株主總會を招集して可決確定させ、愈々その實行が中西副社長の手に確かと握らるゝに至つた。當時彼の得意や想ふべしである。

二億四千萬圓の社債引受けのためには、既に十大銀行のシンヂケート迄成立し、金融にも何一つ不足なき迄に作り上げられたのであつた。

石炭計畫と撫順の露天掘

さて、この大規模な計畫立案の裏面に、逸してはならぬ重要な人物があつた。それは、採鑛冶金界の權威、時の東京帝國大學教授、貴族院議員子爵井上匡四郎博士である。

中西氏と井上子爵とは、學校以來莫逆の友である。中西氏のこの大計畫には、專門家たる博士の有する總べての能力と材料とがブチ込まれたのであつた。

元來滿鐵は、埋藏量五百億噸と稱せられる撫順炭鑛を有し、世界的にも『石炭の滿鐵』とまで謳はれてゐるに拘らず、經營の不備と缺陷とは、特に世界戰爭に依つて遺憾なく曝露され、當時の滿洲に於ける石炭總需用高一ケ年四百萬噸に對し、滿鐵の供給力は漸く三百萬噸を出でず、ために石炭に乏しい內地から高價品を購入し、それを滿洲値段で供給しなければならぬといふ不面目さへ敢てしてゐた。

そこで、彼は、滿洲に於ける炭鑛の統一的經



中橋德五郎氏



副島千八氏



山本条太郎氏

營、北滿並に西比利亞方面一帶に渉る燃料及工業動力の確保、工業的資源の開發に依る我經濟的努力の充溢等の見地から、石炭政策の確立に志し、一方撫順の年產額を倍額の六百萬噸にせんと計畫を立て、之がために用ひんとしたのが、卽ち有名な露天掘計畫である。

　露天掘とは、卽ち、巴奈麻運河開鑿に用ひたと同じスチーム・シャベルやエスカベーターを、撫順のあの廣大なる大地に噛みつかせ、全く運河を掘ると同じく土壤を摑み上げ、底から炭層を露出せしめ、大規模に、迅速に、そして最も經濟的に採掘しようといふ世界的大計畫である。

　この大計畫の立案と實行とのために、中西氏の最も信賴し、且つ利用せんとしたのが、井上博士であつた。博士は、このために招かれて、遂に撫順炭鑛の鑛長の職に就いたのである。

製鐵計畫と鞍山站

　次は、製鐵政策に關する鞍山製鐵所の新計畫である。

　歐洲戰亂の勃發以來、我國民の一番に壓迫を感じたのは物資の不足であつた。中にも、鐵の不足は最も痛切で、鐵自給策の聲は、一時、官民朝野凡ゆる方面に於ける切實な叫びであつた。しかも何人の目も等しく滿蒙の地に注がれたのである。

　時恰も滿鐵社長は、前の製鐵所長官として、又陸軍出身として、鐵には少なからぬ理解ある中村雄次郞男であつた。男は、當時國民の多大なる信賴と聲援の下に、滿鐵の一大製鐵事業の計畫を樹てたのが、卽ち鞍山站製鐵所である。

　然るに、不幸にも期待は全く裏切られ、四顧茫々たる平原に、徒らに偉大なる建物を見るのみで、製品は遂に銑鐵市場に姿を現すに至らない。のみか、これに投じた資本金は實に五千數百萬圓、その利子と經費とのみで年々六百萬圓以上を負擔しなければならない悲境にあつた。

　この難物を双肩に擔つた中西氏は、これを生かすか、それとも一思ひに潰すかの岐路に立つた。併し、鐵は要る、日本國民は如何に鐵を渴望してゐるか。しかも鞍山の擁する鐵鑛は、鑛量殆んど無盡藏といはれてゐる。如何なる犧牲を拂つても、製鐵事業は完成せねばならぬと、

中西氏は決心した。

『從來の如き乏しい資力、乏しい知識、乏しい技術では到底駄目だ、根本的にやり直さねばならぬ！』

中西氏は、かう決心すると、こゝにも井上博士の力を利用して、斯界の權威たる東京帝大の桂弁三、俵國一の兩博士を聘し、周到に、しかも迅速にその大計畫實行の歩を進めた。

斯くして井上博士は、撫順炭鑛の鑛長たると同時に、また鞍山製鐵所の所長を兼任する身となつた。

疑惑の的

然るに製鐵事業には、資金以上に必要なものがある。それは卽ち骸炭用の石炭である。

ところが、石炭の滿鐵でありながら、實はこの骸炭用の石炭が乏しい。埋藏炭五百億と稱せらるゝ撫順には、良質の骸炭用石炭は殆んどない。如何に鞍山站の鐵鑛が豐富にして、且その選鑛の研究が充分であつても、骸炭用の石炭の供給を得ぬ限り、一噸の鐵の製品も得らるべきではない。山村男の失敗の原



因が、それであつた。
　中西、井上兩氏の苦心と責任もこの一點に懸つてゐた。丁度その際だ。問題の塔連炭礦が、その持主たる東洋炭礦會社の専務取締役森恪君の手から、賣込み話が持ち込まれた。
　中西氏は、炭礦統一策の關係から、その申込みに一應の好意を持ち、早速夫々の機關に命じて調査させると、この炭礦が骸炭用石炭を出す炭礦であることが證明された。旱天に雲を得た如く、中西氏の滿面に喜色の浮んだのは當然であつた。否寧ろ、中西氏よりも、井上博士の心が動いたのである。そしてその買收の相談を進めた者も、買收値段の評價決定の相談相手として資料を提供したのも博士であつた。
　幾交渉の結果、大正九年四月、買收價格二百二十萬圓で取引は行はれた。
　然るに端なくも、この買收から問題の火焰が燃え上つた。今にして思へば、買收決定の經路にも、内容にも、價格にも、時期にも、而して買收の相手にも、總べて問題となるべき運命が抱かれてゐた。
　第一に買收の經路に於て、從來の理事幹部の反對論があつたのを罵倒して決定したこと、第二に世界の寶庫撫順を有する滿鐵が、何を苦しんでか、かゝる一小炭礦の買收に急いで多額の金を投じたか、しかも財政難を叫んで、社内の整理、社員の淘汰すら斷行した直後ではないか。しかも時機は、原内閣成立後第一次の總選擧の直前、買收相手は今現に政友會から立候補してゐる森恪君、しかもその價格は二百二十萬圓！
『これは正しく、政友會の選擧費を捻出するための、馴れ合ひ賣買に相違ない』
　事實に疑ひを抱く人々の目には斯う映つた。噂は忽ち疑惑となり、流言蜚語となり非難攻撃となり、遂に詰問追求となつて、大正十年の春二月、遂に政府彈劾の資料となり、間もなく三月七日反對黨の告訴となり、中西氏は法廷に立つの屈辱さへ受ける身とはなつた。
　併し中西氏は、囂々たる世論の中に立つて少しも恐れ動かなかつた。
『井上君さへ來て與れゝば、事件は直ぐ明かになる』
　中西氏は確信を持つて、親友井上博士の證言を待ちに待つた。その博士は、中西氏の滿鐵五年計畫案を携へて、時の撫順炭礦庶務部長小日山直登氏と共に、遠く歐米の旅に上つてゐたのである。

一片の金貨

　大正十年八月一日、待ちに待つた井上博士を乘せた船は、横濱に着いた。
　東京地方裁判所の檢事局は、瀧川檢事を派して、一通り船内訊問をなすと、直ちに博士を同伴上京して、その儘東京地方裁判所豫審廷で豫審判事の訊問が始まつた。
　異郷にあつて新聞のみで事件を見た井上博士は、何が何だか

薩張り判らない。極度の不安と恐怖に襲はれつゝも、一通りの訊問が終つて、休憩を許されたとき、博士は書記に尋ねた。

『一體誰が取調べられてゐるのですか？　福田技師も調べられてゐるさうですが、鳥渡會はせて呉れませんか？』

書記の眼が異様に輝いた。それもその筈、毎日幾十人の關係者の取調べで、博士の身上に疑惑の念を抱いてゐる矢先、證人中でも最も疑問の人物として、連日十數回の取調べを受けてゐる福田技師に面會したいといふ博士に疑惑を抱いたのである。

それのみでない。博士は更に馴れ〴〵しく懷中から外國金貨の一片を取り出して、

『書記さん、これで日本の金を五六十錢貸してくれませんか』

と、書記に金借を申し込んだ。船中から直ちに豫審廷に連行されたので、自宅へ歸る車賃がなかつたためだとある。

併し書記は、それを外國式な賄賂と誤解し、甚く憤つて、豫審判事に告げた。



判事の怒りは更に大變な權幕となつた。晴天の霹靂、博士は矢庭に大喝を喰らはされた。

意外に思つた博士は、

『賄賂!?　賄賂とは怪しからぬ、そんなに解するとは非常識も甚だしい！』

井上博士は憤然として抗辯した。

『非常識とは何だ！　神聖なる裁判所で、金錢を弄する貴公こそ非常識ではないか』

却つて高壓的に脅しつけられ、びし〳〵と突込まれ、ぐんぐんと苛めつけられ、果ては『拘引』で威嚇されたとき、博士は遂に强烈な恐怖性變態心理狀態に陷られてしまつた。

『こんなに峻烈な取調べをうけるやうでは、中西は、自分の知らぬ間に何んな恐ろしいことをしてゐるかも知れない』

と、博士は遂に親友まで疑ふに至つた。そして萬一中西の罪に連坐する

やうなことがあつてはならぬと、かゝる場合には屢ゝ起る强烈な恐怖性警戒心理狀態に陷つたのである。

そのため博士の陳述は、中西氏と次第に關係を絶たんとし、ために事實の眞相は益ゝ曖昧になり、事件は愈ゝ迷宮に入らんとした。

『井上さへ歸つて來てくれゝば』

と、それのみ賴みにしてゐた中西の期待は悉皆裏切られてしまつた。

『中西は大法螺吹きである、滿鐵五年計畫の如きも、己れの非を蔽はんために作られた全くの出鱈目である』

博士の供述によつて檢事や豫審判事の頭には直ちにこんな結論が築き上げられた。

そのため不幸にも事件が公判に移された後、中西側の人々は甚く博士の不德を非難する人が多かつた、そしてその人格を疑つた人が少くなかつた。



然し、私にいはせれば、それは誤りである。博士の不德がこの結果を齎したのではなく、この恐怖性警戒心理狀態が導いた變態心理の結果である。しかも、その原因は、事實の眞相を自己の豫斷に依つて握らんとした豫審判事の威嚇にある。否、否、それよりも寧ろ、運命の神が惡戲に投じた一片の金貨にあつたのだ！

禍は更に他にも

然るに、禍はそれのみではなかつた。剛直淸廉を以て聞ゆる小日山直登氏の上にも及んだ。氏は、以前、塔連炭鑛買收の際には、極力中西氏の遣り口に反對した硬骨人である。從つて人々も裁判所も、氏は中西に反對の證言をするものと思つてゐた。然るに、證人として法廷に立つや、氏の證言は全く期待に反した。

氏は斷乎としていひ放つた。

『今でも中西副社長の說に對して、私は反對意見を持します。併し、あの人を犯罪者と解するのは、以ての外です』

氏の陳述と態度とは、豫斷ある人々の目には全く不本意に見えた。心外に解せられた。畢竟これ、中西氏に懷柔されて僞證を敢てするものと斷定されてしまつた。そして蒸し暑い八月二十日、遂に氏を拉して未決監の獄内に投ずるに至つた。

更に氣の毒なのは、塔連炭鑛の賣主森恪君である。氏は、事件の初め七月十九日に證人として豫審廷へ召喚され、型の如く身分職業年齡を問はれた後、

『證人の資産は?』と問はれた。

『資産など幾らあるか判りません』

剛愎な彼は言下に答へた。この放言がウンと豫審判事の癪に觸つた。

『自分の財産が自分で分らんことがあるか!』

豫審判事は、物凄い權幕で怒鳴りつけた。しかも判事の態度に反感を持つた森君は、猪口才なりと言はんばかりに、

『さうですな、では一寸胸算用で計算して見ませうか。先づ滿洲と長江沿岸の投資額だけで、さつと七八百萬圓もありませうか』

『馬鹿なことをいふな!』

大喝一聲怒鳴りつけられ、びし〳〵と責め拔かれ、散々脂を絞られた上、留置後の森君の證言は、豫審判事に何の信用もたゝなかつた。のみならず堂々たる證言までほじくられて、事業上の秘密は曝露され、信用關係は根柢から破壞され、戰後の財界の反動に、非常な窮地に突き落された。

かくの如く、豫審判事は、森君を威嚇し、井上博士を萎縮させ、小日山君を脅しつけて、大いに征服者の矜を感じたであらうが、併しそれは、事實の眞相を究める正しい道ではなかつた。

一片の企畫が魔の路を開き、判事の豫斷が手を引いて、第一審の判決は、中西、小日山兩氏に對して有罪の宣告を下してしまつた。

時正に大正十一年十月十六日。

無告の人柱

判決の夜、中西、小日山兩氏を中心に、特別な關係者數名は、當時京橋の三十間堀にあつた大村屋に會して、善後策を協議した。四ケ年の努力効なく有罪の判決を受けた一同は、何れも沈痛な色を面上に浮べて相對した。

殊に熱情の人中西氏の無念さは想像の外であつた。――氏は永い沈默の後、公判以來斷然手に觸れなかつた酒盃にウヰスキーを注いで、

『如何にしても殘念だ、今夜だけは、酒を許して下さい!』

悲憤淋漓として一氣に飲み乾さんとした時突然、

『先生!』と大喝一聲、

一同はつと驚いて瞬ると、森恪君が、蒼白い顔に、眼

眼はら〳〵と涙を流しつゝ、中西氏を睨みつけてゐる。

『たとへ有罪の判決を受けても、我々は飽くまで君の無罪を確信してゐる。今から一層自重し努力して、君を青天白日の身にしたければならんと、一同悲痛な決心をしてゐる席ではないか。それに何事だ！ 高が第一審で失敗したからといつて、無禮にも吾々の前で自棄酒を飲まうとは、何たる淺薄な料見だ!! 今度の事件で、社會を騷がせ、政府要路の人々に迷惑を掛け、友人知己に禍を被らせた原因が、君の、その酒だといふことに、君はまだ氣が着かないのか！』

悲憤の涙を振り絞り、言々悲痛を極めた博士の訓戒に、中西氏の目にも頰にも早や熱涙が流れてゐる。否、中西氏のみではない、並みゐる一同、誰一人暗涙に咽ばぬものはなかつた。

實際熱血兒である中西氏は、滿鐵事件勃發以來、悶々の情遣る方なく酒盃を重ね、數日數夜飲み續け、遂に病院に運ばれたことも兩三度もあつた。そして、それが皆中西の惡評を招く原因であつた。

それを知つて、千萬無量の同情の涙を灑ぎつゝも、しかも強く切諫する高根博士の友情、私は今猶ほその光景を想ふ毎に、眼瞼の熱くなるを禁じ得ない。

無論、この事件は控訴された。第一審の判決理由は、中西氏の所謂滿鐵五年計畫案を事件發生後に捏造した虛構的事實であるとたし、撫順の露天掘も鞍山站製鐵所の計畫も、共に搭連炭鑛の買收を強辯せんための僞作と斷じ、結局、不用な炭鑛を、莫大な金額で買收したといふので、背任罪の成立が認められたのであつた。中村男さへ失敗した製鐵所が、中西のいふ如く單純に、迅速に成功するものとは信じなかつたのである。

然るに何ぞ、控訴の後二三ケ月すると、撫順の露天掘の狀況は日々の新聞に傳へられ、鞍山站製鐵所の製品は、市場に姿を現すに至つたと報道された。

事實は何よりも雄辯である。中西氏の供述は、種々の方面から遺憾なく立證されて、漸く無罪の判決を見るに至つた。

併し、慘虐な運命の鞭は、遂に、彼を再び活動の舞臺に立たしめなかつた。法律的にこそ淨められた彼は、遂に、社會的に、政治的に淨められず、澁谷の閑居に淋しい日を重ね、昭和二年九月二十三日寂しくこの世を去つた。

何たる殘虐な運命ぞ！ それのみか、數年後の今日議會の委員會の席上に、この事件の冷罵の聲を聞く。……しかも又何たる皮肉ぞ、同じ委員會には、鞍山站製鐵所の擴張計畫案が上程

され、中西氏の五年計畫は着々として進捗し、成功し、今や二十萬噸の製品が市場を賑はしてゐる。それを更に本年度は二十八萬噸に擴張せんとする計畫案が提出されたのである。そして中橋商工大臣をして、
『諸君、御安心なさい、今後十年にして、我國の鐵は、自給自足の確信があります』
と言明せしめる迄になつたではないか。
古今東西、一大事業完成の蔭には、常に幾多の犠牲ありとはいへ、これは又餘りにも痛ましい犠牲である。誠意國家のために盡しつゝ、無理解な人々の誤解から、却つて世の中から葬り去られねばならぬとは。



今年の六月、商工省の商務局長副島千八君が、新たに滿鐵に赴任するに際し、その祝賀の小宴の席上で私はいつた。
『副島君、忘れないで呉れ給へ。鞍山站には中西といふ立派な人柱が立つてゐることを!!』
然り、彼こそ鞍山の人柱だ、滿蒙開發の一大國家政策の根に埋められた痛ましい人柱だ。

號外を手にして

話は前に戻るが、大正十五年七月のことだ。私は飛騨の高山の町役場の樓上で、飛騨縱貫鐵道の報告をしてゐる眞中、突如、屋外に號外の聲を聞いた。何事ぞと怪しみつゝ、その一枚を取り寄せて見て、驚いた。井上博士が、政友會と分離した加藤憲政會内閣の鐵道大臣になつたのだ！　私はその瞬間、號外の紙上に、熱涙を浮べてゐる中西氏の顏を思ひ浮べた。
そこで、私は上京すると直ちに、鐵道省の大臣室に井上博士を訪れた。
『お目出度う』私は博士と堅い握手

をした。

『中西君は、近頃何うして居ますか？　一體私は、中西君に何うしてやつたらいゝのでせう』

博士の最初の語が、それであつた。そこで私は躊躇なく應へた。

『私は中西氏を貴族院議員にしてやりたい。それには反對黨たるあなたの內閣で、推薦出來れば、政治道德上の美擧でもあるしそれが又國家の彼に對する當然の義務でもあると思ふが……』

と語つた。博士も亦同感であると肯いた。然し、遂にその實現機なくして中西氏は逝いた。

思へば、人の運命ほど不思議なものはない。滿鐵事件の側杖を食ひ、未決投獄の憂目まで見た小日山直登氏は、山本滿鐵總裁に拔擢せられて、重役の要職に就いた。



私は氏が任命の日、書齋の棚から、黒絹で裝幀された歌集『獄に行く』を取り出して、今昔の感に打たれた。これこそ、彼が出獄の日の記念に、信子夫人と共同して出版した涙の歌集である。

また一方森恪君は、滿鐵事件以來、經濟的にも精神的にも苦境のどん底へ投げ込まれたが、彼は泣き言一つ口にせず、默々と、剛情に、政界を游いで來た。そして遂に田中內閣の外務次官とまでなつた。灼かれゝば灼かれるほど、叩かれゝば叩かれる程、彼の意志は益々鍊へ上げられる鋼鐵であつた。そして唯一人、中西氏のみ酬いられなかつた。

然し、見よ！　あの大規模な撫順の露天掘りと、あの天を摩する鞍山站製鐵所の煙突を！　中西氏は、その下に人柱となつて埋められたが、事業は耀々として生きてゐるではないか！

國民よ、感謝せよ！　この偉大なる國士中西淸一氏に、滿腔の赤誠を披瀝して、その人格とその國家的大事業に厚い感謝をせねばならぬ。これが我國民に殘された、中西氏に對する唯一**當然の義務でなくてはならない。**（完）

漫畫

魅力(チャーム)の世の中

散歩篇

田中比左良

都會の散歩　一

別に斯うといつて取立てゝいふほどの深い面白い刺激もない家外散歩の興味が、これが意外にも強く大きな人生の大魅力であることに氣付かなければいけない。銀座あたりの薄暮、まるで舞妓の髪飾のやうにチラ〳〵ピカピカと可憐に光る看板類の重りと、その間に嵌められた都會特有の艶かしう潤んだ大空を仰ぎ見るだけでも、都會散歩の有難さにしみじみと溶けこめるぢやないか。





都會の散歩　二

都會散歩の魅力の中散歩者の爲の施設として喫茶店の發展とこれの魅力を閑却するわけにいかぬ、銀ブラにしろ心齋ブラにしろ何處ブラにしろ喫茶店をマイナスしたら散歩の興の半分は削がれる。やや疲れた足をハイカラなソフアに休めて上等の舶來レコードを聽きながら香りの高いコーヒー紅茶を啜り、ハイカラ[illegible]カラいろんな散歩人種に包まれて包やかな都會氣分に浸れる、それでたつた十錢二十錢。

都會の散歩　三

今すれ違つた女學生は一寸スマートなスタイルだつた、次にすれ違つた處女は一寸好意の持てる顏付だ、先刻印象した青年はキリツとして、好もしい感じだつた。

斯様に行ずりの異性からさゝやかな芳香を浴びながらそぞろ歩く、この甘美はむろん戀愛と名付けるほど明瞭いものじやないから否定してはい



かぬ、こんなことが實は若人の情操を圓く和やかに育てゝ行く原因になるのだ。

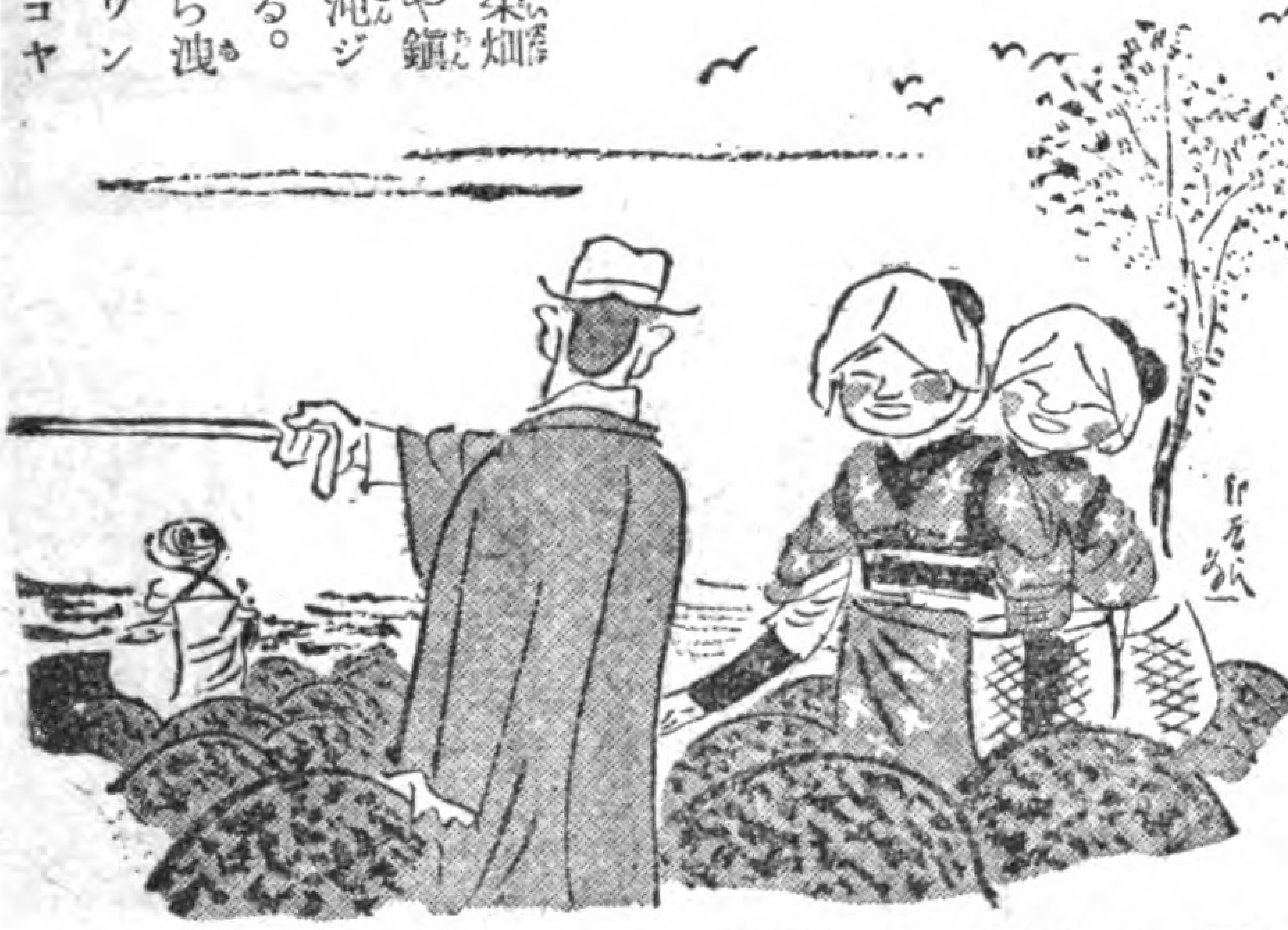


都會場末の散歩　四

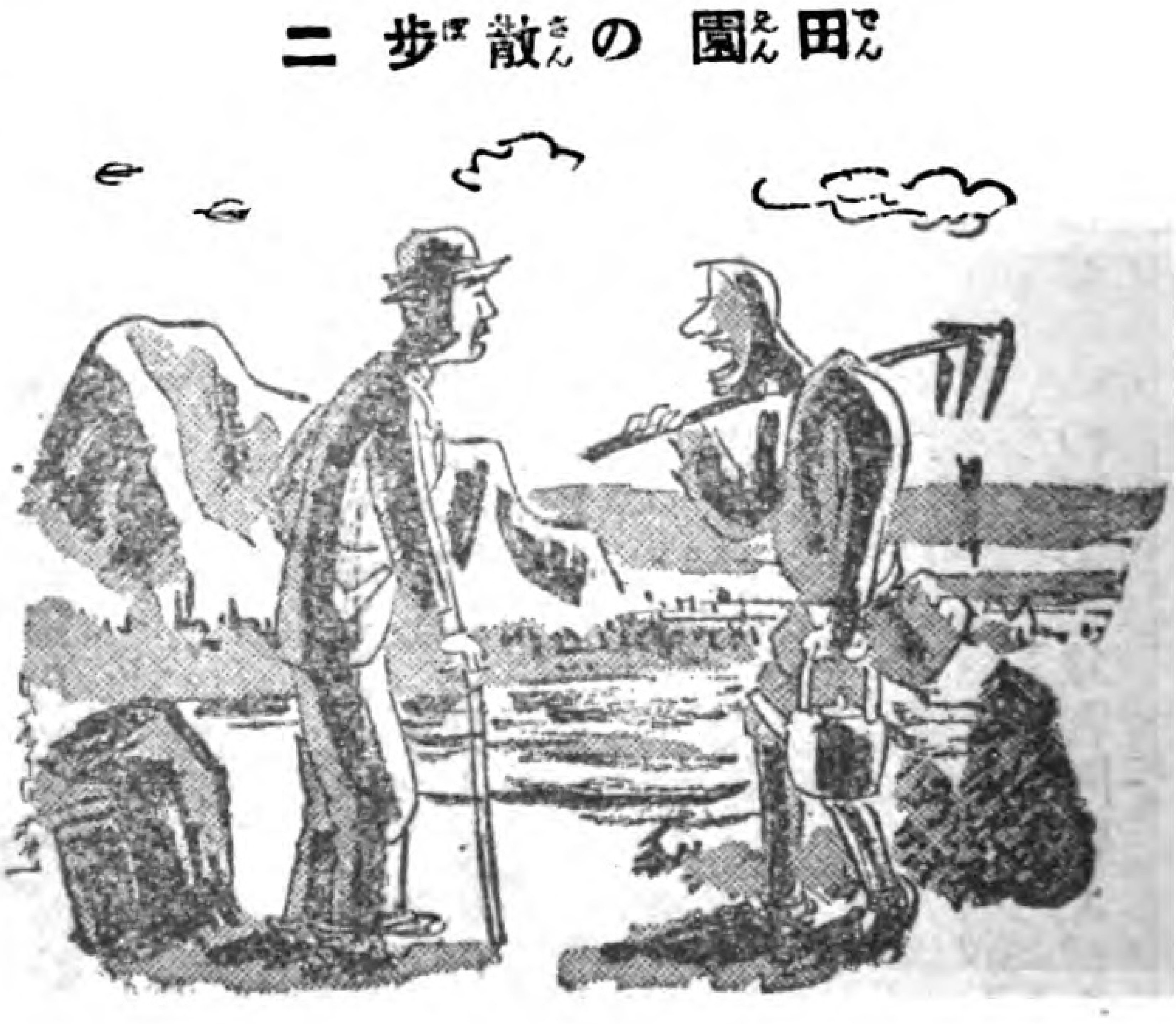
赤い瓦の小住宅や新築の棟割長屋、野菜畑や建築豫定地の草原、鐵道沿線の廣告板や鎭守の森、かうした自然物と人工物との混沌ジヤズの場末の散歩にも亦特異な魅力が有る。藁屋に挾まれたペンキ塗の安カフエーから洩れる安來節、泥足で走り廻る鰌掬ひのワンパク連、新鮮な野菜の色や畑の土の色、コヤシの匂ひに煤煙の匂ひ、郊外電車の軋りの音や牛馬の泣聲。

田園の散歩　一

茶を摘む娘に道を聞いたら、一人の娘が顔を染めて羞ひながら、でも懇切に行手を指し教へてくれる。一人の娘はその蔭でこつちを盗み見しながらニヤ〱笑ふ、かうした鄙びた而も純な感じの田舍の娘の姉樣冠りや赤い襷は、田園散歩の持つ一つの魅力である銀ブラのモガと同じだ。



田園の散歩　二



行きはよい〱戻りは辛いといふが、田園散歩程度の戻りの疲れで路傍の石か何んかに腰打掛けて薄暮の田園風景に見入るのも亦したはしいものである。おほらかなうすれ空に茜雲、田の面の果を籠め初める紫の靄、その靄の中から黒い大煙突が一本、靜かな眠りに入らうとする山々の落着いた姿、この風景にじつと見惚れると、野良歸りのお隣りの老人が善良な顔してトボ〱やつて來た。ではボツ〱世間話でもぶつくらはせながら、家路に就くことにしませうか。



佛陀と阿難

赤松月船

佛陀は年をとられましたので、いたく身の不自由をお感じになつた。そこで、左右のことをしてくれる侍者がひとりほしいと思はれた。弟子達は、われもわれもとそれを志願した。心から佛陀を敬ひ、佛陀を大事がる弟子達は、いづれも自分こそ身を粉にしてその任に當らうと思つたのであつた。しかし、弟子達の涙ぐましい熱誠にも拘らず、彼等の或る者は、彼自身が非常に老人であつた、或る者は又病弱であつた。或る者は侍者としてよりももつと他な事に預らせた方が適當だと思はれた。

佛陀はみんなの願ひをしりぞけられた。

教團の中にあつて舍利弗と共に上首の位地を占め、しかも最もよく佛陀のお考へを知つて居る目犍連。彼は早くも佛陀が、阿難を侍者にしたいと望んで居られることを察した。そこで、直ぐさま阿難のところに出かけた。

『尊者阿難よ、どうぞ世尊の侍者になつて下さい。』

と賴んだ。謙遜を何よりの德としてゐる阿難は、

『いゝえ、私にはその資格がございませぬ。』

といつて辭退した。

『しかし、世尊のお心は、あなたを措いてほかにはないのです。尊者阿難よ、あ

なたは世尊のお心に背いてはなりません。』目犍連は熱心をこめて云つた。

『あゝ、世尊は、私のやうなものを、それほどに思召して下さるのですか。尊者目連よ。あなたの仰せの通りです、どうして私が世尊のお心に背いてよいでせう。それでは私は侍者にならせて頂きませう。しかし、それに就いて、三つのお願ひがあります。一つには、世尊の身につけられた物を私の身につけないことです。二つには世尊が請待を受けられたお齋に行かぬことです。三つには、時を見計はなければ決して世尊のお顔を見ないことです。』

目犍連は佛陀に此の事を申し上げた。

すると佛陀は、



『目連よ、阿難が如來の衣服を受けず如來と共に食に赴かぬのは、阿難が侍者になつたのは慾のためだといふ他の譏りを豫知してゐるからだ。又時を見計はなければ如來を見ないといふのは、今如來は安穩であるかどうかを察し、弟子達を案内すべきか否か、もろもろの歸依者或は問法の人々を導き入れるべきか否かを判じ、ひとへに如來の動靜を亂すまいと慮る意味だ。目犍よ、阿難はまことに智慧明かな者だ。』

と仰せられた。目犍連は、阿難の俸仕、佛陀のそれを理解する深さをおもつて我知らず掌を合せたのであつた。

阿難は二十五年の長い間常隨の侍者として佛陀に仕へた、その間あまりにやさしい彼の心の故に他人の事に預つて一度だけ過失をしたが、佛陀からはつひぞ叱られた試しがなかつた。又阿難は佛陀の許に來るどのやうな人に對しても懇ろであつた。どのやうな人からも『阿難は貢高つてゐる。』といふ評判を聞かなかつた。

將軍と中尉

青山星城

カステルノー將軍は、フランスの乃木將軍である。歐洲大戰の時、ローレンの戰線を守つて、よくカイゼルが死物狂ひの攻擊に堪へ、堅乎として足一歩も國境より[illegible]しめなかつた。

將軍には七人の子があつた。末の子はまだ幼弱だつたので家に殘り、他の六子はいづれも國家の急難に赴いたが、長子次子三子相次いで戰死したのであつた。四子のジエラール中尉に、第七[illegible]に屬し機關銃隊の一隊を指揮してマルヌに在つた。獨軍は、マルヌがフランスにとつて軍事上重要なる地點であることを察知し、さらば奪ひ取れと人波をつくつて攻めよせた。しかし、此處を獨軍の手中に委ねては佛軍の戰略は一大くひちがひを生ずる、如何にしても之を死守せよ、といふ命令が司令部から傳へられた、その時、ジエラール中尉は同僚を顧み莞爾として、

『僕が生きてゐる間は大丈夫だ、一步だつて退きはしない。』と云つて意氣軒昂防備に就いた。

獨軍の砲火はジエラール中尉の一隊に集中された。しかも突擊、又突擊、陣地はしばしば危機に瀕した。しかし、中尉は惡戰苦鬪あくまで頑張つた、守りとほした。さすが獨軍もつひに力盡きて退却の餘儀なきを覺つた。あゝ敵影と離れゆくマルヌの空、[illegible]。だが、その一[illegible]た、[illegible]

つつあつた獨軍が放つた一彈は、凄じい爆裂をして六名の兵卒を倒し、中尉の肩と一腕とをはね飛ばした。中尉は直ぐさま野戰病院に收容された、けれども大重傷を如何ともすることは出來なかつた。『おゝわが愛するフランスよ。』

中尉が最後の一語はかなしくも感情のこもつたものであつた。

やがて、中尉の遺骸は司令部に運ばれた。父カステルノー將軍は、卓上に地圖を按じて居たが、これと見るより起つて敬禮を行ひ言葉



短く、

『わが兒よ、汝は人の選び得る最も美しい死を遂げた、わが全軍はフランスのために、又お前のために、必ず敵軍を打敗るであらう。』

やがて、ハンケチを取出してしづかに中尉の顏を覆ひ、又卓に向つて策戰に耽つた。

一軍の將卒は將軍の胸中をおもひ滂沱たる涙を拭ひあへなかつた。

牛連れ三孝

大倉桃郎

黑い牛の背に眉の白い老人が乘つてゐる。小綺麗な衣服を着け頭巾を頂いてゐる。二人の男と一人の女とが菅笠姿で牛の前後に供をしてゐる。三人ともに洗ひざらしの綿服の裾をからげてゐる。老人に比べると召使らしい身なりであるが、笑ひ語りゆく樣子では親子である。

牛はのたり〱と脚を運ぶ。

菜の花に風なごやかなお伊勢參りの道を、この一行がゆく。行ふ人たちが振返るほど風變りの旅である。

町に入ると女が牛の番に殘り、男二人が代る代る老人を負うて外宮内宮を參拜した。夕暮に宿へつくと、年かさの男が老人のためには上等の膳部を、めい〱の爲めには最も安價な食事を賴んだ。

親子にしては奇妙な注文、ごく〱の田舍者らしいから宿の者は可笑しがつた。障子外から袖引きあうて覗いたりした。

供の三人は夫れに氣づいても平氣であつた。その中の女に、宿の女中が好奇から、

『あなた方は何處からお越ですか。』と、質ねてみた。

『はい。二十里先の山家からでございます。』と、女は答へた。

『まあ二十里も先から、お老人を牛に載せてお出でかな。』

『はい。途中に山坂が多いものですから。』

『それなら駕籠が宜しくないかな。』

『いゝえ。私共は駕籠を賴める身分ではございませぬ。至つて貧乏でして、それで近所の旦那の牛を借りて來たのでございます。』

と、女は恥かしさうな顏もせずに、おとなしく質朴に語つた。

女中は部屋を出ると、くす〱笑ひ轉けたが、この風變りの一行は、次の年の春にも牛に老人を載せて神宮參拜に來た。その次の年の春にも來た。そのまた次の年にも。

××××

一行は同じ伊勢國一志郡川上村坂本の農杢平、おのぶ、佐吾の兄妹。老人はその父であつた。家は極貧であるが、父が參拜を第一の喜びとするから、毎年參拜させてゐたのである。杢平の孝心を見習うておのぶも佐吾も大の父思ひであつた。極貧であるからおのぶは嫁にもゆかず、佐吾も婿にもゆかず、兄妹三人同體となつて父に仕へてゐたのである。この事が領主藤堂大學頭の耳に入つて、表彰されたのはおのぶが三十九歳の時であつた。



女主人と職工

宮田修

『おい、ジム、何んぼお前が頑張つた處で、身體には勝てねえ。二三日はお暇を戴きネー。』

『だがなあ、トム、この位の傷で作業を休んぢや奥様に申譯がねえや。奥様が今の仕事をなさり初めた頃にや、あのお手がこれどころの傷ぢやなかつたぜ。』

母指にまだ生々しい鮮血のにじんだ繃帶をして、痛みを怺へて居る五十格好の老職工と、それを氣遣ひながらのぞき込んで居る若い職工とは、冬の日が淋しく射す工場の羽目に寄りかゝりながら、こんな話をして居るのであつた。

フイツシャー鐵床會社は、現主人の良人マーク・フイツシャーが米國第一流の鐵工場を建てようと云ふ大理想の下に、創始したのであつた。が、未だ機運至らず、平々凡々なる工場に過ぎなかつた。そればかりでなく一度其後繼者であつたクラーク氏が、不起の病の床に就くと共に工場は日に日に淋れ、その生命も主人の生命と同じ運命に傾いた。

此の時工場の取締りとして敢然起つた年若い一婦人があつた。クラーク氏の妻であつたアンドリユー夫人で、今では多くの職工達から神の様に尊崇されて居る現主人である。

夫人は夫の病、良人の苦心を痛感するや、決然自らハンマーをとり、菜葉服に身をかため、職工の仲間入りをしてその素志を繼がうとしたのであつた。

『女に何が』それが彼女の決心に報いられた最初の應答であつた。が、彼女は屈しなかつた。一意專心彼女は默々として働きつゞけた。一日も遲怠した事のない彼女の工場通ひ、若い婦人の身を以つて男職工一人前の仕事以上の仕事を平然とやつてのける健氣さ。是を見る者は自然とその熱烈さに動かされた。

この勤勉な夫人が仕事に就いて一ケ月程たつと、一週に一度位づつ工場に來ない日が始つた。やつぱり女だ、と一度感心した者が眉をひそめた頃、その休みの眞相が新しい讃嘆を人々の上に運んだ。この休みは實に彼女にとつて職工達の家族慰問に當てられたのであつた。夫人はそれらの人々を訪れ、或は慰めの言葉を、或は物品を施して歩いたのであつた。

浮足だつた職工達は、一勢に夫人の徳になびいた。曾て夫人を笑つた職工は、彼女の熱心に頭をさげ、怠け者は奮ひ起つた。

アンドリュー夫人は彼等の尊崇する主人であると同時に、彼等の親切な仲間となつたのである。而してパナマ運河の大工事に使用される一切の鐵床を納入し、一躍米國有數の鐵床工場となつた。

二

ユージャーシー州トレントのフイツシヤー工場は、爾來其の製品の確實さと、無比の烈婦人を工場主に持つ模範工場として廣く世界に名を知られて居る。



母子の人柱

山中峯太郎

○沈み行く羽織

渦巻く濁流は大雨に水量を増して、今にも堤を切らうとする。その堤の上に立つて、八人の男が、沈痛な表情をしながら、それ〴〵着てゐる羽織を脱いだ。



『では、投げよう！』と、一人が叫んだ。

『ウム！　一二三の合圖でな。』

『さあ、わしが合圖するぞ！　一、二、三！……』

聲の下に、八枚の羽織が、濁流の上に飛び散つた。同時に、八人ともに蒼ざめた。――矢の如き奔流は、投げられた羽織を、忽ち流して行く。と、合圖を掛けた男の羽織一枚だけが、見る〳〵うちに沈んで行つた。渦に卷かれて縞目も見えなくなると、そのまゝ流れに呑まれてしまつた。

『あゝ湯屋さんのだ！』と、一人が息をはずませて、喘ぐ樣に言つた。

『左樣！　わしの羽織が早く沈んだ。』と、湯屋はおちついて皆に言つた。

八人とも、近くの村の庄屋だつた。そのうちで最も有力な湯屋の羽織だけが、何故か早く沈んだ。

○妻の身をさゝげて

湯屋は家へ歸つてきた。見ると、妻のお鶴が白裝束をしてゐる。

『お鶴、供はならぬぞ。』と、湯屋は、妻の白裝束……死を迎へる姿を見ながら、この時も沈着いてゐた。

『いえ、お供よりも、どうぞ、わたくしを身代りに、堤の人柱にお立て下さいませ。』

『ならぬ！』

八人の庄屋が、誰か一人、堤の工事の人柱に立つべく、羽織を投げたのだ。湯屋は自分の袂へ石を入れて行つた。果して自分が、この犧牲の籤に當つた。覺悟は妻に言ひ置いて、堤へ出て行つたのだつた。

○山國川の犧牲

良人の身代りに立つといふ妻、その言葉を障子越しに聞いてゐた女中のお鶴は、自分の娘のお市の手を引いて、堤へ行つた。そこには七人の庄屋と、村の男女が立つてゐた。

『わたくしと娘を人柱にお使ひ下さいまし！』と、聲と共にお鶴とお市の母子は、抱き合つたまゝ、渦卷く濁流へ身を躍らせた。

福岡縣と大分縣の境を流れる山國川、毎年堤の切れる水害が、この年の工事に依つて救はれた。鶴市神社が今もそこに祭られてゐる。

稻束の行方

牧野清月

或る片田舍に、貧しい兄弟があつた。兄の方には妻もあり子供も二人あつたが、弟はまだひとりであつた。二人は別別に貧しい小屋を營んで住んだ、そし

て一わたりの田を仲よく共同して作つて居た。

それは、秋の收穫が終つた頃の話である。二人はいくつかの稻の束を半分づつ同じやうに分けた。或る夜、兄は寢床にはいつてから考へた。

『自分には妻もあり子供もあつて心を慰めてくれるものがあるが、弟はひとりで何を樂しむといふものもない、せめて收穫の多いのを樂しむよりほかはないのに、同じやうに取つては氣の毒だ。』

そこで兄は、起き上つて、いく束かの稻を弟の軒先にそつと置いて來た。

その夜、弟も亦寢床の



中で考へた。

『自分も貧乏だが、兄には妻もあり子供も二人もある。だから同じやうに半分づつ取るのはいかにもすまない。』

そこで弟は、軒先に積んだ稲の束をどれだけか擔いで、これもそつと、兄の家の軒先に置いて來た。翌朝見ると、兄の稲も弟の稲も少しも減つてゐなかつた。それは兄が持つて來ただけを、弟が又持つて行つたからであつた。兄も弟も昨夜のことは夢だつたのかな、と不思議がつた。その夜兄は、今夜こそはと思つて、稲を持つて行つた。すると弟も又今夜こそはと思つて同じく持つて行つたので、朝になつて見ると、やつぱり稲は少しも減つてゐなかつた。

「どうしたのだらう。」兄は小首を傾けた。

「何かこれには譯があるにちがひない。」

そこで、その夜稲を持つて行くと直ぐ歸らず、陰にかくれて様子を窺つて居つた。やがて、弟が出て來て軒先に置いたその稲をかついで出かけようとした。

月の明るい晩であつたから、何もかも見えた。兄は自分をおもつてくれる弟の心を電光のやうに烈しく胸に受けとめた。堪らなくたつて陰から飛び出すと、いきなり。

『弟!』

と叫んだ。兄の姿を見た時、弟は又弟で今までのことがすつかり分つた。兄のおもひやりがありがたかつた。

『兄さん!』

清い月の照る下で、二人は犇と抱き合つて聲をあげて互ひの誠情を喜び、泣きに泣いたのであつた。

獄中の兄弟

山川鐵也

野村靖子爵は、青年時代天下の志士として大いに國事に奔走したが、過激の言動をにらまれて遂に獄に投ぜられた。子爵は性來の我儘者で豪放一途の人であつたので、獄中からも、三日とあげず母堂の許に無心を言つてやつた、決してゆたかな家計でなかつたが、子煩悩の母堂は、そのたびやり繰りをして差入をせられた。けれども、その苦しいことは並大抵ではなかつた。

或る日のこと、獄吏が子爵に話すのに、

「おい野村、人間もいろいろだな、君のやうに親に無心ばかり言つてやる人間もあるかとおもへば、又獄中から母に仕送りをする人間もある。」

『ふふん。』

とその時はかるくあしらつたが、獄吏が行つて了つてから、何だかその囚人のことが氣になつた。

翌日子爵は、獄吏に向ひ、

『昨日の話しの囚人はどの部屋に居るのですか。』と問うてみた、

獄吏は、



『すぐこの隣りだよ。』と指差した。壁一重を境に、さういふ囚人がゐるかと思ふと、感慨は深かつた。

『一體どのやうなことをして仕送りをしてゐるのですか。』

『寫本をやつてゐるのだ、一字一字丹念に紙にうつす仕事だ、薄暗い部屋だから隨分骨が折れることだらう。』

『何ですか、やはり若い人ですか。』

『さうだね、君より少し年上かも知れない。』

『一つその人の姓名を聞かせて呉れませぬか。』

『入江といふ男だ。』

『入江！』子爵はびつくり飛び上つた。

『入江九一といふのだが、君の知人かね。』

『知人も知人、それは僕の兄です。』

いひしもはてず、子爵の眼からは涙があふれ出た。

全く入江九一氏は子爵の實兄であつた、入江氏も同じく國事に奔走して囚れの身となつたが、子爵とはちがつて、至つて情の深い從順一味の人で、まづしい家、心配に胸を痛める母堂をおもうて、せめて僅なりとも手助をせねば相濟まぬと、獄中ながら筆耕をしてその賃錢を送つて居たのであつた。

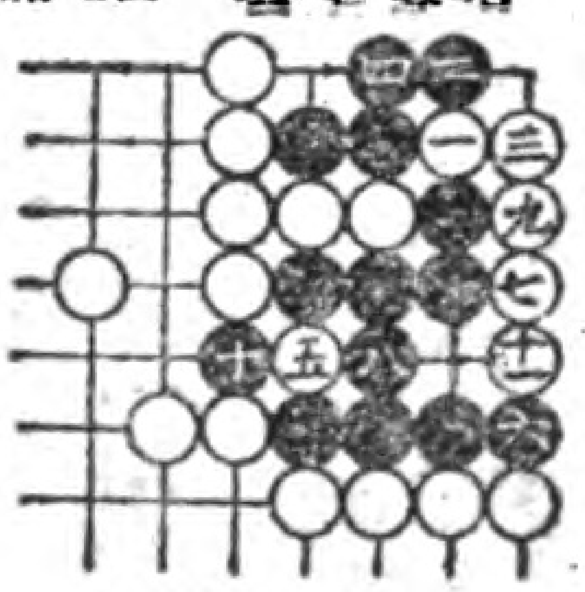
その後子爵は、わが儘の角を折つて、生れ變つたやうに殊勝な人間となつた、そして後來大成する基を作つた。

挿繪　石井滴水

娯樂室解答（本文二八〇頁）

詰碁解答

白先黑死

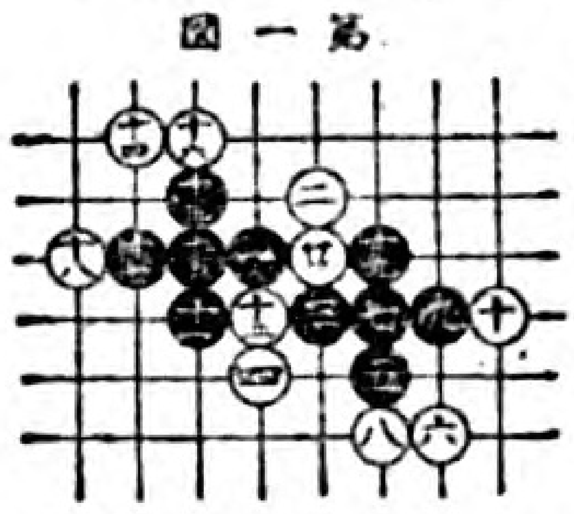


詰將棋解答

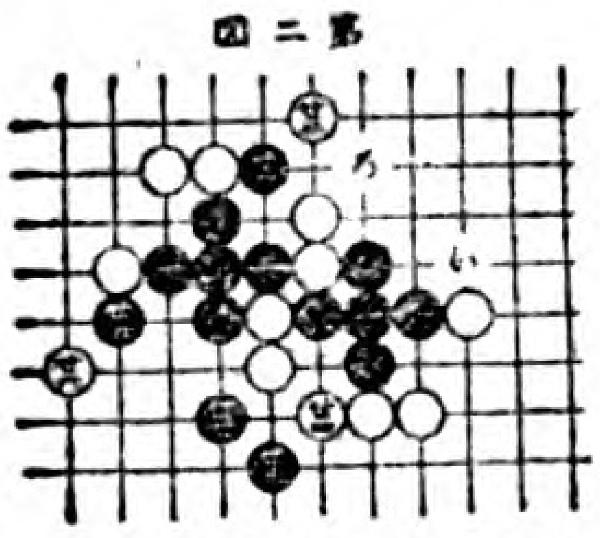
△五二飛▲三二飛アイ△二三金〇▲一一王△一二金▲同飛ノ同飛▲同土△二三銀ナリ▲同土△二九香打▲三二王△一二飛打▲三一王△二二飛ナリ▲四一王△五二桂▲五一王△六一香アリマデ

聯珠解答

第一圖



第二圖



◎白（廿）迄打進んだ手順は第一圖の通りです、△題以後、黒の追勝の筋は第二圖の通りで（廿七）で四三勝です（變化）（廿二）の對（廿三）止れば（廿五）に反△へ止（い）に引きを黒（廿四）白どちらへ止でも黒はめて（廿五）から、『廿の所と四追ろ』で勝ちます

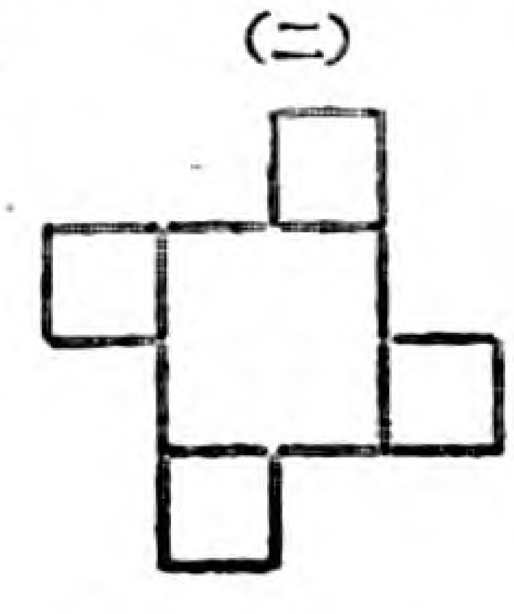
智慧くらべ解答（本文三一〇頁）

（一）



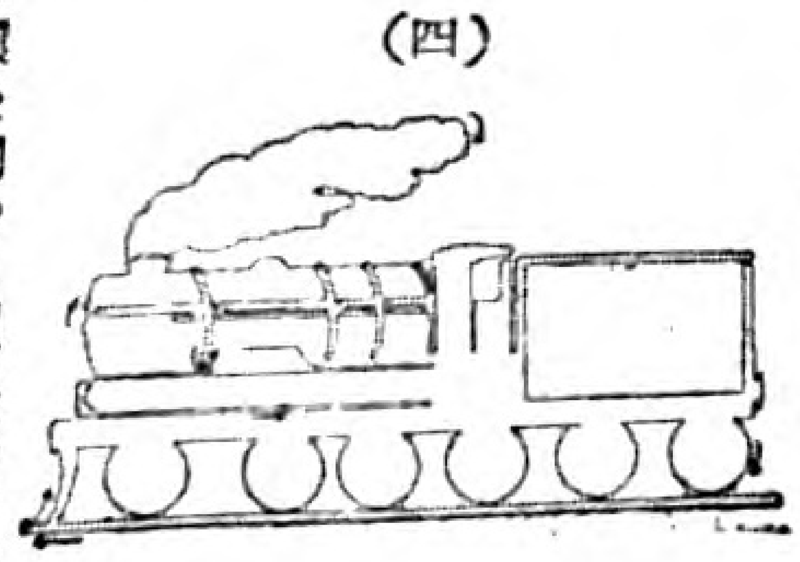
これで二人の顔になる

（二）



（三）先づ第一に7をFへ動かします。次に8を1へ動かします。次に2をDへ、1をCへ、3をKへ、4をEへ、8をNへ、7をMへ、4をLへ、1をJへ、6を1へ、5をFへ、1をAへ、2をBへ、4をDへ、3をCへ、5をKへ、6を2へ動かします。

（四）



（五）（1）蟬丸、これやこの　ゆくもかへるもわかれては　しるも　しらぬもあふさかのせき

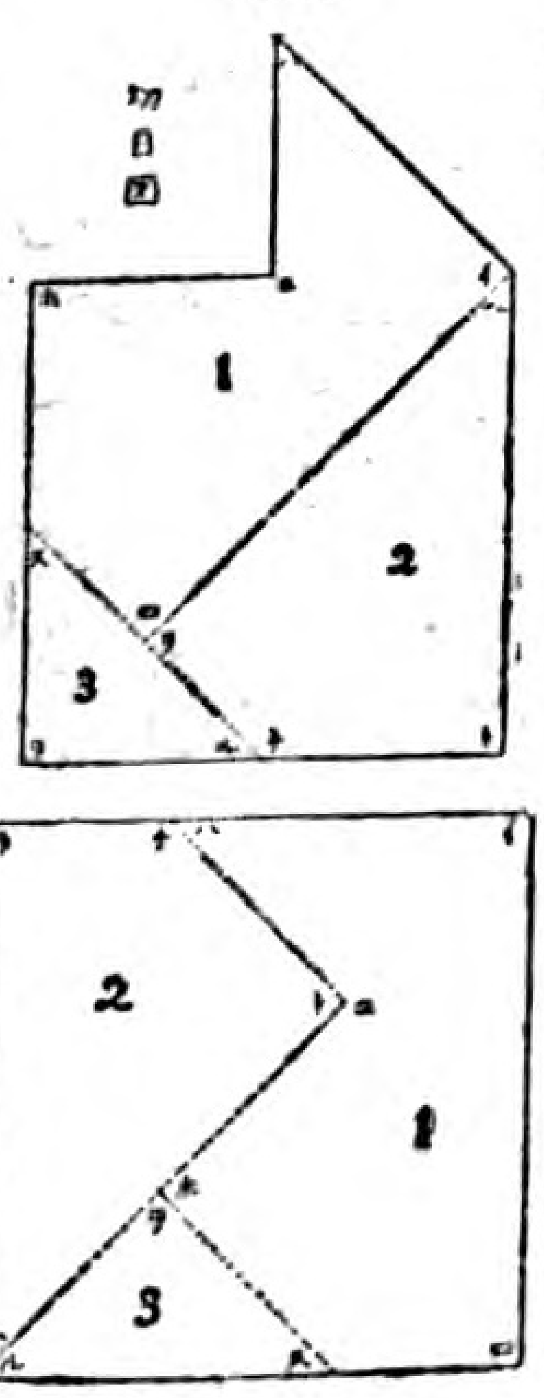
（2）鰹

（六）（イ）横濱、（ロ）平塚、（ハ）三島、（ニ）豐橋、（ホ）岐阜、

（七）左手の肘

（八）先づ二つつながつてゐる鎖の一つを切り離し、その一つで二つの鎖をつなぐ。すると環が一つと鎖二木とになるからその環を切つて鎖二木をつなぎ合せれば環を二つ切るだけで、つまり二十錢ですむのです。

（九）



（一〇）旅人が二十七歩歩いた間に、自動車は二十七歩と百三十五歩の合計百六十二歩だけを進んだ。卽ち旅人より六倍の速さで、自動車は一時間二十一哩の速力です。



錦を着て故國に歸つた
藤田嗣治畫伯

岩崎英祐

◇不朽の傑作

佛蘭西ルクセンブルグ博物館には、訪れる人の悉くの眼を驚かしてゐる一幅の名畫がある。これこそわが藤田畫伯の不朽の傑作「アミテヱ」で、日本の名譽のために萬丈の氣を吐いてゐる。實際巴里に於ける藤田畫伯の人氣は大したもので、日本の大使の名は知らなくとも畫家「フヂタ」で通らないところはない。氏は大正十四年佛蘭西政府からクロア・レージョン・ドヌール勳章を授けられ、現にサロン・ドートンヌ會員、ソシエテ・ナショナル會員といふ畫家としては最も華々しい肩書を持つてゐる。

然し氏が今日ある迄には決して一路平坦ではなかつた。汗と涙で織出されたその苦闘史を見逃すわけにはゆかない。

◇七萬人の競爭者

それは今から十六年前――大正二年の事である。歐洲航路の船上に、燃ゆるが如き瞳を以て遙か天涯を望んで居た白面の青年が後年の「世界のフヂタ」であらうとは誰しも氣付くものはなかつた。

憧れの巴里は七萬人の畫家の棲む巴里である。氏は上陸のその日から七萬人の競爭者を相手に、藝術に精進せねばならぬ運命に在つた。『よしッ！　俺は一つ巴里に踏止まつて日本人の眞面目を見せてやらう。これから鼻柱の強い西洋人と本場の土俵で裸相撲を取るんだ！』氏の負けじ魂は油然として胸底に湧いた。

かくして氏は過去の畫風を棄て、日本から持つて來た畫筆を棄て繪具箱を棄て文字通り裸一貫となつてスタートを切つたのである。そして大家かぶれの模倣は盡くこれを卻け、前人未踏の境地へと獨自の畫風を培つて行つた。

◇寢臺迄賣る

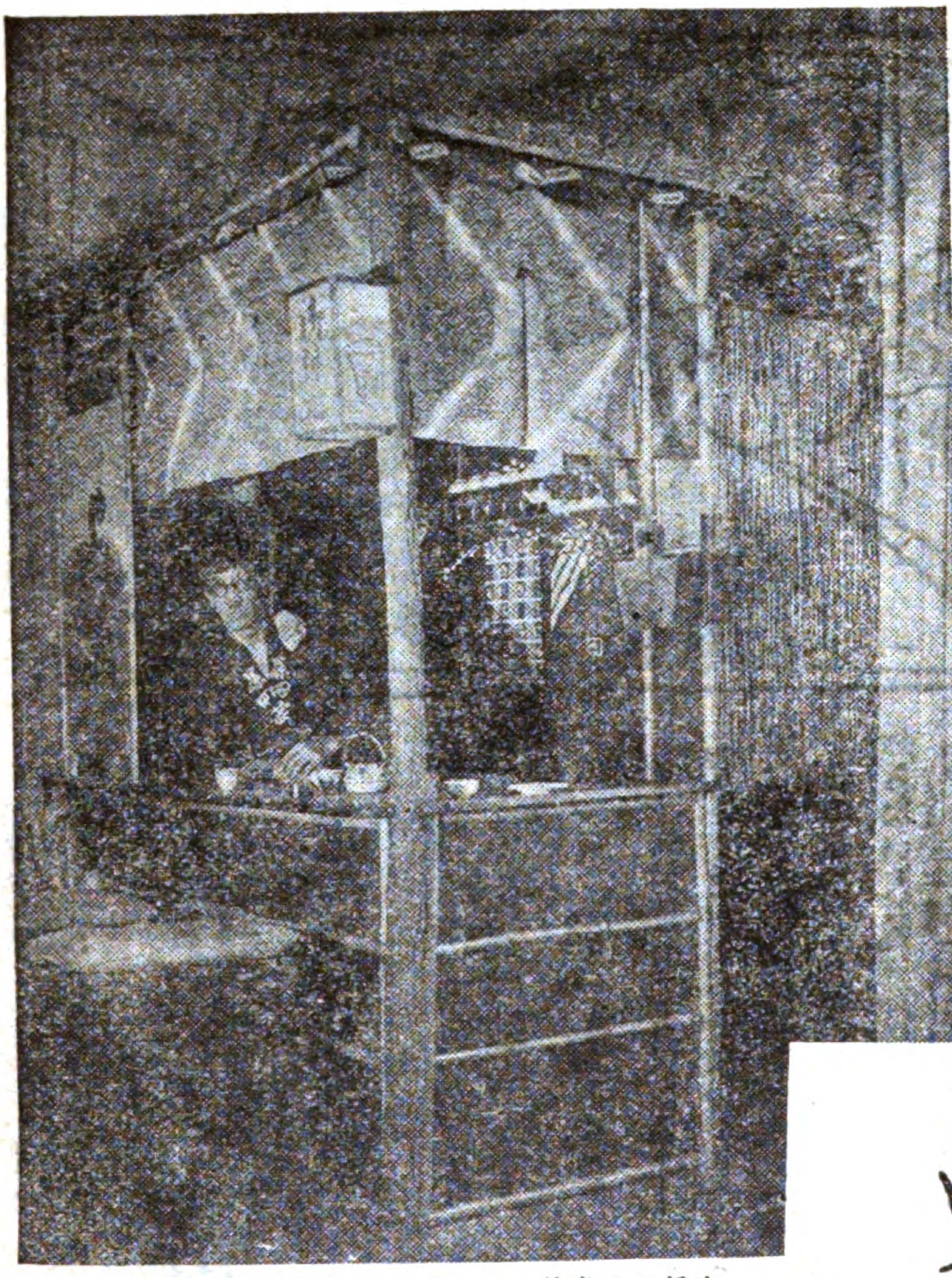
『俺は喰ふ爲には雇はれてモデルにもなつた。ペンキ屋もした。引越の手傳をして荷車も曳いた。便所の掃除人もやつた。それでも尚飢餓は遠慮なく迫り、仕舞には寢臺迄も賣拂つた。そして床板の上に寢て氷るやうな寒さに幾度となく死を覺悟した』とは氏の述懷である。氏は生活の上にも飽迄自主獨行で、故なくして一杯の水も他人に縋るやうな事はしなかつた。

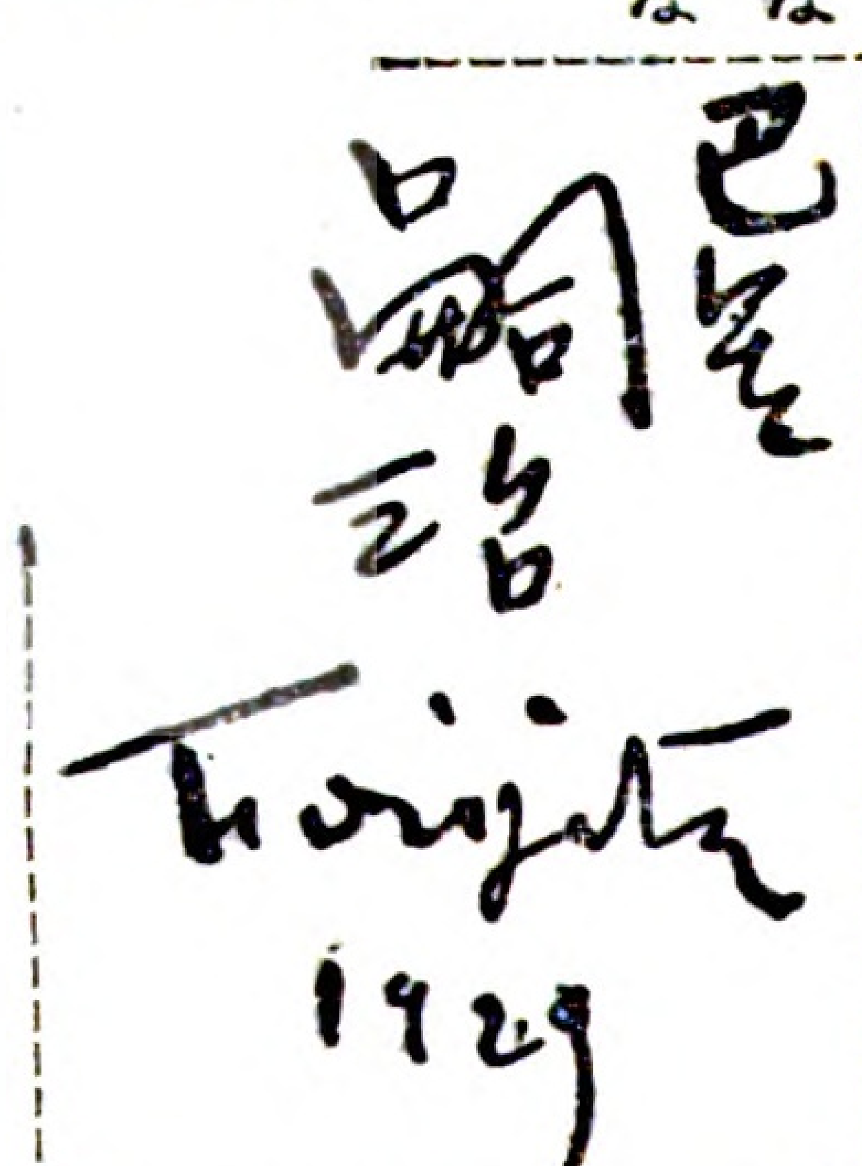
『萬一餓死しても後世に遺して恥ちぬ繪畫十枚丈け殘して他は盡く燒いて了つた。いや額も枠も椅子も机も薪の代りにみんなストーブへ放り込んで了つた』といふのもその頃の事である。如何に藝術

家らしい氣魄を示してゐるではないか。

◇世界の「フヂタ」

かくして汗と涙で彩られ數年の試練時代はすぎた。竟に努力の報いられる日が來た。氏の作品が一度サロン・ドートンヌに出品されるやその獨特の畫風は天下を驚かし、忽ちにして日本の畫家「フヂタ」の名は世間の話題を賑はした。そして作品は作品毎に聲名を高め、今では宏壯の邸宅に棲む立派な「世界のフヂタ」となつた。





寫眞上は畫伯のアトリエ内に出來た純日本式の料理場、一日のうちで何もかも作りあげたとはその精力と技巧に吃驚させられる。左は自筆のサイン。

◇錦を着て歸る

氏は十六年振りで此の秋日本に歸つて來た。然し決して十六年の間故國を忘れてゐたのではない。曾つて歸郷を勸める老いた親の手紙に接した時『俺は親不孝かも知れない。しかし希望を成就するためには一時の親不孝も泣いて忍ばねばならぬ。足腰を揉むやうな親孝行は姉妹に任せておけばよい。自分は男子として世界の人に承知の行く樣な大孝行して見せる』と云つて益々精勵したのである。

かくの如く藤田畫伯が今や畫壇の寵兒となり、世界的聲名を擅にしてゐる裏面には背水の陣を布いた一篇の哀史があつたのである。氏は今年四十五歳、相變らず粗服を纏つた無頓着の青年である。猫と柔道の大好きな畫伯、オカツパにロイド眼鏡の畫伯、思ひ出した丈けでも懷しい感じがする。



金儲けの話 五分間物語

谷孫六

金儲け法の第一條件は

——ある日のことである——

『五分間ばかりお目にかゝりたいと云つて、此方がお見えになりました』

女中が持つて來た名刺を見ると、全然知らない人だ。

『只今食事中でございますから五分間ばかりお待ち下さい、さうすると〆めて十分間になりますがお差閊へはございませんか、と伺つて御覧……』

自分は何時もさう思ふ。訪問する人は幸福だ、自分の必要に應じて何時でもお構ひなしである。玄關先の呼び鈴は自分への呼び鈴である。先方に用事が出來た時は茲へ來て鈴を押す。それは自分が茶を呼ぶ時に女中部屋へ押す鈴と同樣である。呼び鈴が鳴れば女中は何ごとを措いても飛んで來る。玄關の鈴が鳴る毎に、何ごとを措いても逢はなければならないのなら、自分に關係のない先方だけの要件で招びつけられるのと變りはない。

『結構ださうでございます』

女中が先方の旨を通じて來る。

『さうか、それでは應接間へお通しして、日用辭典を差上げて置きな』

『日用辭典と申しますと……』

『あの書棚の上にある字引だよ』

女中は不審さうな顏をして出て行つ

た、聽て恐れ入りながら通る客の衣擦れがする。女中は誰にでも差上げる番茶を運んで行つた。食事が濟む、あと二分ある。羽織を引かけて小用を足す。應接間の扉を開ける。

『初めまして……』

先方の人が立つ、自分が坐る、それで恰度五分である。それから先は客の時間だ。

客はお天氣の話だの、此の頃の景氣だのと云ふ月並な愛想からボツ〱初めたいやうな顔をしてエヤーシップを念入りにパイプへ差した。一分經つた。彼は此間に十八回の呼吸と七十回の脈搏を無駄にしてしまつた。

『五分間でしたな』

たまらなくなつて要件を促すと、客は少し狼狽したやうに、

『は……五分とは申上げましたが、お差閊へなければ、もう少しお邪魔いたしたいと思ひますが……』

して見ると五分間は面會を求める爲めの懸引だつたのだ。乃ち五分間は何の意味も無い五分間である。

『しかし五分間と云ふ時間があつたら、大抵の要件はお話し出來ること〻思ひますが……？電話は三分間で一通話となつて居る位です』

客は目を丸くした。

『それに大抵のことは其辭典にある筈です、御待ち下さる五分間を利用して、其字引でお調べになれば、私にお訊ねになることは解決するものと思つて居りました』

客の目は三角になつた。



『實はこの字引にないことなのでございます』

『……と申しますと……？』

『金儲けのことなんです、つまり金儲けの秘訣一條件と云ふやうなことを伺ひたいと思つて上りました』

『さうですか、それは何でもありません、働くことです、そして貯めることです』

客は何だか物足りないやうな顔をして、

『それにしても何かコツがあるのでは無いでせうか、貯めるにも、働くにも、只漫然と金儲けが出來るやうには思へませんが……』

『無論です、けれどもそれは何でも有りません、誰にも出來る簡單なことなのですが、誰もやらずに居

ることなのです』

客は何か手近のものでも探すやうな目附きをして、

『と申しますと……』

『それは、何でも金に見積ることです』

無駄を金に換へる工夫

客は身體中を耳にしたやうな緊張さで膝を乘り出して來た。

『即ち換算法ですな、そして先づ第一に無駄を金に換へる工夫です。我々生活のうちに何が一番無駄にされて居るかと云ふことを考へて、それを金に換へて行けば、ひとりでに金は儲かつて行くぢやありませんか』

『無駄と云ひますと、不必要なことですか』

『いや／＼、考へて御覧なさい、我々には目に見えぬ大きな無駄があります。不必要なものを買はないやうに工夫したり、棄てるものを利用したりする前に、その大きなものを活用することを考へなければなりません』

客は二三度首を捻つたが、思ひ出せないやうな顏をした。

『お判りになりませんか、それは先刻あなたが、お使ひになつた五分間です、我我はよく鳥渡五分間とか、五分ばかり待つて呉れとか、無意識に使つて居りますが、この五分間が却々馬鹿にならないのです』

『はゝあ、時間を金に換へるのでございますな』

『さうです、先づ時の偉大さを知らうぢやありませんか、我々が徒らに使用して居る五分間を中心として、時の流れを見つめて御覧なさい、あなたが先刻お待ちになつた五分間に、あなたが吸ひ込んだ空氣は約四十二石ほどです、あなたの心臓は三百五十回も搏動しました。あなたの膝に明るかつた光線は數千億米突もの先から來て居たのです。貴方のなさつた咳一つの響は十萬二百米突もの先へ行つて突あたつて居ました。電車は九町餘りも走りました、汽車は東京驛から新橋まで行つて居ます、上野驛を出た汽車は日暮里で止まつて居ました。フォードの自動車製造所では廿五臺の自動車が出來て居ます。日本全國ではあの五分間に子供が五人生れて居ます……』

數へ立てゝ行く數字に、彼は幾度かうなづき、幾度か目を瞬つた。

『恐ろしいものですな』

『いや他人ごとではありません、この時計を御覧なさい、チク、タクと動く音、平凡な話ではありますが、歷史を刻む音です、我々は過去を悔い、未來を待望します、過去と未來の間を刻むセコンドは決して容赦しません「いま」と云ふ言葉の云ひ切らぬうちに過去を作り、そして未來へ働きかけます。その「いま」我々は何をして居るでせう「いま」の累積が過去であり「いま」の集積が未來である眞ン中に居る我々が何も希望も無いぢやありませんか……』

私は自分の言葉に昂奮を感じた。彼は恐ろしきものに追ひつめられるやうな目つきで、兩手を膝の上に乘せたまゝ凝

して居た。しかしそれは恰度倫理の時間に温順しく聞いて居る生徒のやうな恰好だつた。

『あはツはツは、つまらない講義ですな、時に本文に入りませう、失禮ですが、あなたの月收はいくらになります……』

彼は掌に馴れた蝸牛のやうに、そろそろと首を擡げた。

五分間研究
一人に一問

『月給は百圓でございますが、年二期の賞與がありますから、加算すると一ケ月百三十三圓程になります』

『はゝあ、して見ると一日四圓四十三錢、一日八時間勤務として一時間が約五十五錢四厘、五分間で四錢六厘强と云ふことになりますな』

『なる程、時間を金に見積るとさうなりますね』

『さうです、かう考へて來ると五分間の無駄は四錢六厘の無駄、その間に煙草一本を烟にすると五錢四厘の無駄と云ふことになります、そして其失つたものは、どうしても歸つて來ません、次の五分間には次の生産があります、それを埋め合はすとすれば、倍以上に働かねばなりません』

『御尤もです……』

『ですから私は、時間の計算を秒、分、時と云ふことにしないで、厘、錢、十、圓、としたら、大抵の人は時間そのものゝ觀念が違つて來るだらうと思ひます。第一あなたが先刻五分間だけ逢ひたいと云つて來られたのも、時間だから何とも思はなかつたでせう、これが四錢六厘だけ下さいと云はねばならないとしたら、一寸考へさせられるぢやありませんか』

彼は頭を搔きながら苦笑した。

『一日に一錢づつ貯金すれば、一ケ年三圓六十五錢になると云ふことは、小學校の生徒でも知つて居る常識ですが、一日五分間づつ活用すれば一ケ年三十四時間强、これを金に換算すると



一時間五十五錢四厘としても十八圓八十三錢強の貯金が出來るといふことは氣がつかないやうです、これを全國民七千萬の人が一齊にやつたとしたら、十三億四千五百十萬圓と云ふ金が出來ます。即ち政府一ヶ年の豫算に近い數字が僅か五分間で生れようと云ふのです』

『素晴しいものですな……そこで其實行方法はどうなります』

『さあそれです、私達は先づ其五分間を考へなければなりません、どうです此話に興味が持てますかな、もし御氣に入つたとすれば、恰度今日は五分間研究會に當りますから、ゆつくりなすつていらつしやい』

『はあ、それは好い日に伺ひました、御差閊なくば拜聽さして頂きます』

『それは差閊ありません、しかし斷つて置きますが、五分間に何程の金が儲かる、五分間で何百圓の取引が出來ると云ふのではありませんよ、常に色々お[illegible]にし易い五分間を利用して、これを[illegible]に[illegible]

金儲けと云ふ利息算や、配當の計算とは違ひます。けれどもいづれの方面に活用しようと、それは必ず自身の利益であるに間違ひはありません、それさへ御承知なら氣の置ける人達ではありませんから、御聞き下さい』

玄關に呼び鈴が鳴る。

『來たやうですな、最初に來る人は或會社に勤めて居るAと云ふ人です、問題は朝出勤時間前の五分間を如何にするかと云ふのです』

『なる程……すると一堂に會合して問題を議すると云ふのではなく、一人々々いらつしやるんですな』

『さうです、これも時間の節約からで、一人一題、しかも五分間で解決しようと云ふのです』

『いや、これは御趣向ですな』

女中が名刺を持つて來る。

『直ぐお通ししな、御客樣ですがお差支ありませんと申上げてな』

待つ時間と例の五分間

『さあどうぞお這入り下さい……時間は正確ですな』

『はい、實は五分ほど早く伺つたのですが、五分間研究に五分の無駄をするなどは憲法違反ですから、御門の外で待合はして居りました』

『あツはツはツは、これはお堅いことですな、しかし其五分間は何か有効に御利用なさつたでせうな』

『どうもうまい考へが出ないものでしてな、しかし他人樣の門外でぶら／＼して居ると怪しい奴と見られる恐れがありますから、名刺入れを出して、平常頂いてある皆樣の名刺を整理して、手帳へいろは順に住所を控へて置きました』

『なる程、名案ですな、そこで本文の方は……？』

『さあ、それです、私は朝六時に起きます、顏を洗ふ、體操をやる、新聞へ目を通す、食事を濟ます、停留所へ行く、驛を[illegible]へる、これにも[illegible]

[illegible]

分六分と云ふ時間は帶に短しで、本を讀む譯にも行きませんし、仕方がないからもう一度新聞を見ることに致しました』
『はゝあ、新聞はどの面を御覽になりますか』
『まづ政治、社會とを第一番に見て、次に家庭欄、經濟のことは判りませんから、後まはしにして、時間があれば廣告面を見ます』
『ふむ、二度目も矢張り同じところを御覽になるのですか』
『さあ、どうも仕方がありませんから、小說や講談を見ますな』
『經濟面はどうです』
『その方は不得手ですから……』
『そこです、其五分間に不得手のものに目を通すことにしては如何です』
『しかし興味が持てません』
『それは見やうです、經濟面の數字の變化を御覽なさい、面白いものですよ、昨日は株が安かつた、しかし米は高い、生糸は、綿糸は、と見て居るうちに、明日の豫想をやつて見るのです、それは只何となく高い安いを當てゝ見るつもりで……それが當ると愉快なものです、しかし外れると不愉快です、そこで今度は的確に當てゝ見ようと云ふ慾が出て來ます、それには四圍の狀況を知らねばなりません、それから段々經濟記事に興味を持つて來る、經濟に通じて來れば立派な事業家です』
『なる程、いや有難うございました、名案の逆襲ですな、丁度五分です、では失禮いたしました』
Aは腕時計をチラリ見て立つた。玄關に呼び鈴が鳴る、Bが來たのである。
は手帳を出して熱心に鉛筆を舐めた。
軈てBは通された。
『もう少しで電車を乘り越すところでした』
『どうしてです……?』
『いや、私はいつも手前の驛から乘越しが氣になるものですから、降りる仕度を



してしまふ譯があるのです。丁度此間に無駄な時間があるのを發見して、今日は其試驗をやつて見た所です』

『ほう、それは耳寄りですな、しかし孰れ電車なり汽車なりでは讀書でもなすつていらつしやるんではありませんか』

『それがです、あと一停留場となると讀んで居ても氣が氣ではありません、そこで只茫然停車を待つと云ふことになります』

『なる程、それは尤理ですな、氣を揉みながら讀んだのでは實になりません……そこでどんな工夫を考へましたか』

● 電車の中と晝過の時間

『少しお恥しい話ですが、學問をやつて居ります、と云ひますのは、先達神田の古本屋を漁りました時に、恐ろしくボロボロな辭書を發見しました。なあに普通の英和辭典です、いくらだと聞きましたら五錢だと云ふのです、安いのも安い、が、ボロボロで手に取ることも何も出來ません、そこでまあ何にしてもと思つて買つて來ました。それを一日日向で日光消毒をいたしまして、バラバラにほごしてしまつたのです。そしてそれを二三枚づつポケットの中へ入れて歩いて居ります』

『なる程』

『そこで今日は試驗第一日と云ふ譯で、手前の驛から、其一枚を出して讀み初めました。却々面白いものです、同じ文字でもいろいろな譯し方があつたり、親切な單語があつたりして一寸興味を惹くものですから、うつかり乘り越すところでしたよ』

『いや、名案です、一日に一字覺えても一年には三百六十五字、鈍秀才も云つて居ましたな』

『あツははツは、とんだ誕くりですな』

『そこで本文の方は何でしたつけね、晝休みの時間の五分間をどうするかと云ふのでしたな』

『さうです、うまい考へも浮びません、しかし私は常に筆紙不精なので、いつも女房から叱られます、そこで此五分間を利用して、端書を書くことに致しました、筆まめ社交の極意と云ふ話だけは知つて居りますが、つい忙がしいにかまけて、手紙を受取つぱなしにする癖を矯正しようと云ふのです』

『結構です、人が人と交渉を親密に持つことは、財布を幾つも持つて居るのと同じことです、私なども是非其眞似をさして頂きませう』

『御採用になりますかな、それではこれで五分です、御邪魔いたしました』

Bは丁寧に挨拶をした。玄關の鈴が鳴る、Cが來たらしい。客は一つ一つ除外されて行く滿足にうつとりして居た。

Cが來た。彼は息せき切つて居る。

『いや、時間の觀念を普及することは急務ですな、今日はつくづく感じました』

『ほう、痛切ですな、何かありましたか』

『僕は茲へ來る前に、丁度時間を見計らつて一人訪問して來たのです。すると五分許り待つて呉れゝば[illegible]

と云ふものですから、承知して應接間で控へて居りました」

『それでは丁度宜いぢやありませんか、あなたの問題は、訪問して待たされる間の利用法と云ふのぢやありませんでしたか……』

『さうです、ですから其方は結構なのでございます』

『そこで今日は實行なすつたんですね』

『行りました。私は訪問することが勤めのやうな身分ですから、時に依ると應接間に三十分も一時間もぽんやりして居ることがあるのです、ですから五分間の利用としましても、自由に延長出來るものを選ばなければなりません』

『御尤も……』

『そこで私は反省カードと云ふものを作りました、そして自分が昨日したことの中で、やりそこなつたことは何か、また新らしく得たものは何かと云ふことを書きつけるやうに致しました。他人の應接室で算盤を出したり本を出したりする譯には行きませんから、自分の心を凝視ながら、それを一々カードに認めます、モーパッサンは水の上に寢て悔恨錄を書いたと云ひます、英國の科學者は



議の五分間を六百頁の大冊に書いたと云ひます、私は文士ではありませんから、文章を巧みに書き現はすと云ふことは出來ませんが、昨日の失敗を書きながら明日の成算を樹てる便宜にもと思ひまして、それを初めました、ところが考へて見ると私達のやることは失敗だらけです……』

『宜いですな、内省は明日の成果と云ふことがありますから……』

『宜いでせうか、ところが先方です、五分間として逢つて呉れた筈だのに、一寸御機嫌を伺つたら、漸く一時間に亙る御高説ぢやありませんか、こちらへ伺ふ時間は切迫して居るし、氣が氣ぢやありませんでした』

『アッはッはッは、早速反省カードの材料ですな……』

玄關で鈴が鳴る、Cは歸つた。客は時計を出して、

『私の五分も到頭三時間ほどになりました』

と苦笑した。

統計の妙と寝る前の妙

Dが玄關へ來た筈である、常に物堅いDは其儘上つて來ても良い筈だのに、取次が無くては通れないらしい。

『おい、お客さんだよ、誰も居ないか…………D君ぢやありませんか、どうぞお上り下さい』

Dは悠然と這入つて來た。

『時間は正しいと思ひますが……』

Dは他に來客があるのに氣兼ねして居る樣子だつたが、それと話したので、安心したものらしく、やをら腰を下ろして、

『今日は凄いものを發見しましたよ』

『なんです……』

『五分間の恐ろしさを……』

『と云ひますと、豈夫ナポレオンの「戰は最後の五分間」ぢやありますまいネ』

『いや、そんな古い問題ぢやありません、丁度こちらへ伺ふのに大森の停車場で讀んだ古新聞です』

『はあ……？どんなことが出て居りましたか』

『一九二九年八月八日です、ニューヨークで聯邦準備銀行の利上げを突然發表しました、大引前の五分間に、コンマーシャール・ソルヴエント株が三十三弗半、ゼネラル電氣株が二十弗、アメリカン電話が十五弗を初め主力株のスチール株まで七弗以上の急反落と云ふのです、當日の出來高五百萬株で直下り損が十億弗以上になると聞いては、五分間の力大たりと云ふべきではありませんか』

『なる程、大きなものですな』

『ところがそれからの事なんです、東京驛へ下りて出ようとするとあの雨です、お天氣のつもりで傘も持たずに出たものですから、二等待合室で雨やみと洒落込みました』



『なるほど……！』

『この間を利用して何か一つやらうと考へました。待合室には澤山の人が待つて居る、自分も汽車で何處かへ行かうとするには、かうして待つ時間がなければな

らない、それには何が良いかと考へたがら、見るともなしに見て居ると、驚くぢやありませんか、敷島と朝日で、五分間に十一箇ほど煙になつてしまひました。中には金口もバットもあるでせうけれど、一箱十八錢平均と見ても一圓九十八錢の煙です』

『うまいものを見つけましたな』

『尤も煙草專賣局で一年の製造高は二億萬箱と云ふのださうですから、五分間に割つたらこれでも足りないかも知れません』

『さうでせう』

『そこで私は五分間に相當する一種の統計をやつて見ようと思ふのです』

『それも有意義ですな、出來上つたら一つ大々的に發表して貰ひたいですな』

『一寸面白いと思ひます』

『そこで、あなたの問題は寢る時の五分間でしたな』

『さうです、枕に着いて眠りに落ちるまでの五分間と云ふのです』

『何か名案がありましたか』

Dは何思つたかニヤニヤ笑ひ出した。

『讀書も古いですな』

『……』

『明日の腹案ですかな』

Dは軽く首を振つた。

『寢て居て統計は一寸困難ですな』

『……』

『どう云ふことになりますかな』

Dは漸く口を切つた。

『私は健康を保持することも生活上必要なことと思ひます』

『勿論、健康は事業の第一條件です、努力は健康よりと云ふことがあります、精力の貯蓄は金錢の貯蓄より遙かに有意義です』

『して見ると私の案もパスしますかな』

Dは相變らずニヤニヤ笑ひ出した。

『どう云ふ方法です』

『いやお話しする材料が無いんです』

私は少し憤怒とした。

『冗談、只寢てしまふんぢやないでせうな』Dは大きな聲で笑ひながら、

『……深呼吸です……』

私は拍手を打つた。

客は丸くして居た目を細くして、

『なる程考へて見ると有るものですな、甚だ不躾でございますが、私も其會員にして頂けませんでせうか……』（をはり）

次號豫告

金儲の話 寶珠の玉

谷孫六

三方へ載せてお燈明を上げる寶珠の玉、開運出世の守り本尊、割つたら中から何が出る。小判か紙幣か、そんなものではない、眞ツ白な煙がスーツと立つ「汝等に云ひ聞かす、錢は目の前に並べてある、遠慮なく取るが宜い、手に觸るゝものみな錢だ、努々疑ふことなかれ」何處かで聲がする。その聲を聞きそこなつた人に讀んで貰ふ爲めに書く。

大日本雄辯會講談社ニュース

堀内中將閣下の書簡
―少年部の劍道修養を激賞―

目下、靜養旁〻、少年子弟の劍道猛稽古、其他の教養に盡力しつゝある本社野間社長の伊香保別莊に、突然、堀内中將閣下がお訪ね下され、劍道の稽古を御覽になり、一同に對して御親切な御訓話並に激勵の御言葉を下さつたが、更に御歸京の後、次の如き感激に堪へない有り難い御手紙を賜はれた。



『拜啓、炎暑嚴敷候處仁兄御始め御高堂御揃爾ゝ御多祥奉賀候　一昨日は突然御邪魔致して就中非常なる厚遇を蒙り奉感謝候　御道場に於ける仁兄初め御令息が率先して勇猛精進せらるゝ壯況を拜見し未嘗て無き爽快味を覺え申候　眞に仁兄の報國の御精神の湧き出る源茲に在りと直覺仕候　老杉鬱々たる下清泉流れて不盡竹刀の音と相和する妙味は決して他に見ざる處に御座候

百千歳經ぬる老樹の合間にて
竹刀の音を聞くぞ涼しき

竹刀の音の高久飛々きて
日の本の光りいや増す心地勢り

寔に國家興隆之本仁兄之御方針に在り益ゝ御奉公奉祈上候　特に仁兄の御健康上には充分の御注意を爲帝國前途切奉願上候　不取敢御禮旁草々
敬具

昭和四年八月十七日　堀内文次郎拜

野間仁兄

御令息樣前途頗有望益ゝ身心御鍊磨爲國家祈上候　御歸京後御遊びに御いで被下度發聲試合可仕候呵々
同車歸京せられたる各少年諸君が荷物等萬事世話し呉れたる有樣皆劍道精神より出で親切確實之美風を見る愉快に存候御社が發展する道を攄むれば即日本國家之發展策と直ちに相成候　政府當路者などが調査會など開かすに御社風に學べばよろしと信じ候（下略）

講談 修養 二大全集配本完了

昨秋豫約募集いたしました二大全集は、其後順調に進行、號一號といよ〱大好評裡にこの十月上旬を以て全十二卷配本を完了することになりました。愛讀者諸賢の御熱誠御後援に對し、茲に厚く御禮申上げます。

尚、序ながら、同全集について寄せられた本多林學博士の御書翰を紹介いたし

ます。

野口英世君ノ傳……立志奮闘物語（修養全集第十卷）ノ開卷第一編……ヲ泣カズニ讀メル人ガ世界ニアリマセウカ、讀ンデ感奮セズニ居ラレル青年が日本ニアリマセウカ、私ハ今日伊香保行ノ汽車中泣キツヅケニ泣カサレマシタ、ソシテ野口君ガ玉碎ノ男ラシサヲ羨ミ我身ガ瓦全ノ不甲斐ナサヲ憤リマス、修養全集ハ何レモ有益ナルガ、セメテ今回ノ立志奮闘物語丈ナリト、日本ノ一人々々ニ普ク讀マセタク切望ニ堪ヘマセン、

昭和四年八月二十二日　本多靜六

野間清治殿机下

人類の恩人 『エヂソン傳』大出版

澤田謙先生の熱著

來る十月二十三日はエヂソン翁が電燈を發明してから五十年目に當り、世界各國に記念祭が行はれます。

エヂソンの發明は電燈、電話、蓄音器、活動寫眞を始め大小數百種、見る人によつては世界第一の偉人、人類最大の恩人といつて居ります。



而もエヂソン翁が貧乏な新聞賣子から今日を得るには、波瀾萬丈、小說以上の面白い立志傳があります。

昨年ムツソリニ傳を著して天下を熱狂させた新人澤田謙先生、更にこゝに椽大の筆を揮つて『エヂソン傳』を著さる。青少年諸君は勿論滿天下の御一覧を切望します。（近日發賣）

世間や人情が解つて大變爲になる製本が立派だ、値段が馬鹿安い僕もとらう、私もとらうで、驚くべき大注文殺到、本社はテンテコ舞です。

〆切十月十日

まだお申込みのない方はお早く!! この機會を失はれては終生の恨事!!

『明治節お飾り人形』

來る十一月三日は明治節第三回の佳節に當ります。

本社は、此の明治節を最も有意義に迎ふる樣にしたいといふ考へから、雛の節句や端午の節句になぞらへて明治節の御飾りを謹製いたし、之を發表いたしました處、御承知の如く、各方面より多大の御賞讃御好評を博し各家庭で續々之をお飾りになるやうになつたことは、本社の非常な歡びとするところであります。

◇御尊像及び女官、文武の忠臣等の人形は、斯界の第一人者、白水荒雄氏の謹作になり、神々しさ美しさ、接する者悉く感嘆されぬ方はありません。

◇本社は、此の意義深いお飾りをゼヒ全國の家庭に備へられる樣との念願から、その一式を全く製作實費にてお頒ちする事に致しました。御希望の方は、左記宛ハガキで御申込み下されば、無代でカタログをお送りいたします。

宛名――東京本郷、大日本雄辯會講談社代理部

成る程これは面白い
評判の「右門捕物帖」を讀む

佐々木君推賞

三上於菟吉



佐々木味津三君の「右門捕物帖」は、雜誌連載中一度も缺かしたことのない僕の愛讀作物だつた。今度一本を成したのを手にするに及んで、右門の機智明識が、一篇は一篇と急速的に堆積し進展し、殆んど測るべからざる光景を呈してゐるのを見る。話風は縱横自在無礙闊達でどのやうな複雜な事件をも餘すなく說破し、筆路は艶妖暢達優美瑰麗を極めていかなる美女寡婦の面目をも躍如たらしめてゐる。而もこれが味津三君の捕物處女作だ。今後の進化を僕は踵をかゝげて注目しようとする。

流石に味津三君だ

直木三十五



佐々木味津三が、暫く消息を斷つたかと思ふと、いつの間にか現はれて、來たのが「右門捕物帖」であつた。その一番手柄を讀んでみると、岡本綺堂氏の名作「半七捕物帳」と匹敵すべき面白さである。

成程、こんなものを書かしても、味津三は味津三だけのことが

私の好きな美男

『林長二郎？』『ぢやないわ』『岡田時彦？』『うゝん』『ジョン・バリモア？』『當らないわ』『ぢやラモン・ナバロ？』『でもないの』『ぢやあ誰れ？』『近藤右門よ。それやとても素敵よ、私、すつかり氣に入つちやつた。ねえ、貴方も讀んで御覽なさいね。右門のやうな男が實際に出現したらと、もう斷然人氣なのよ』

祖父さん失敗

菊つくりに夢中らしい祖父さん、數日碌々姿を見せなかつたが、夕食のとき、『僕に右門ほどの明智があつたらなあ』と思はず獨語ちたら、孫さん達すかさず『あら、菊が泣くわよ。祖父さんも右門黨？ ぢやもう家中みんなだわ。兄さんも父さんも母さんもさうよ』に白狀して『年中變もなく二度讀んだ』

（以上、實話です）

◇ ◇ ◇

あると感心したが、この文はどういふもんだらうと、そこは友人の情として、多少の心配をしながら讀んでみるとなかなか面白い。三番四番と段々面白くなつて來る。

日本にも近頃探偵小說が多くなつたが、皆文章が拙い。味津三は此點にかけて、比較にならぬ名文である。それに、現代探偵作家は多いが、時代物の探偵作家は、老大家綺堂氏を除いて、佐々木味津三唯一人である。さうして、その味津三の代表作がこの「右門捕物帖」である。

江戸探偵物語の白眉

岡本綺堂

江戸を背景とした探偵物語も近時おひおひに現はれて來たが「右門捕物帖」の如きは正にその白眉たるべきものである。殊に題材を寛政度の初期に取つてあるので、幽暗怪奇の色彩が更に濃厚を加へて讀者を魅惑する力が強い。近藤右門といふ同心が、專ら活動して岡つ引は單にその手先として働くやうに書かれてあるのも其時代に相當してゐると云つてよい。長短十五種の捕物は皆それぞれの特色を具へて作者の想像力がいかに豐富であるかを證明してゐるが、就中「笛の秘密」「耳のない浪人」のたぐひは最も人を驚かすものであらう。いづれにしても「右門捕物帖」の一篇は目下流行を極めつゝある我が探偵小說界に一枝の新しい花を飾つたものであると言つても、敢て過賞ではあるまい。



×　　×

此人にして此名著あり

――惠まれたる淸秋の讀書子――



夜は長く、靜かで、凉しい秋は、まこと讀書の絶好季節である。讀書に餘り趣味を持たぬ人でも、この頃になれば、誰しもきつと、堪らなく何かの書物に親しみたくなる。讀書慾のかうして自ら起つて來る時には、可なり長時間に亙つての讀書も、心身を害することは殆どない。平常比較的讀書せぬ人でも、本當に肉あり血ある有益の書を樂しく讀めるこの時に、左の如き良書を紹介出來るのは非常な欣びであり、讀書子諸君のためにも大いに祝すべきであらう。

而も、それはいづれも、その著者にして始めて出來た名著ばかり。

先づ第一に、維新の志士、伯爵田中光顯閣下の「維新風雲回顧錄」がある。伯今や老いて悠々閑居の身、嘗て、砲煙彈雨の眞只中修羅の巷に活躍し、回天の大業を補翼し奉れる往年を追懷して語れるが本書、事實は小說よりも奇なりとは、正に本書の如きを言ふであらう。手に汗握る王政維新の活歷史である。（定價二圓送料十二錢　本社發行）



政界財界裏面の大人物として隱然たる勢力を有する杉山茂丸先生が、明治大正の偉人巨傑と交遊し、驚倒の大事件に參畫して縱橫の快腕を揮へる六十四年の回顧談「俗戰國策」は、波瀾萬丈小說以上の面白さ、その上靑年の修養書として此上なき稀世の快著なりと、大好評を博してゐる。

佐々木邦先生の名諧謔小說



脫線息子

定價二圓送料十二錢



愚弟賢兄

定價二圓送料十二錢



主權妻權

定價二圓送料十二錢



（定價二圓五十錢送料十六錢　本社發行）尙同先生には、明治大正の熱血躍る傑人傳「百魔」「百魔續篇」の二著がある（定價何れも二圓七十錢送料各十四錢　本社發行）



粹翰長の名で十二年の長い間衆議院書記官長の任にあつた故代議士林田龜太郎先生は、政界通として正に本邦隨一、その畢生の著「日本政黨史」上下の二卷は、憲政史上得難き名著である。本書一讀、何人も容易に政界の通曉者たり得る、立憲政治下の國民必讀の書である（定價上卷二圓八十錢下卷二圓五十錢送料各十四錢　本社發行）その外に藩閥軍閥財閥の葛藤の裏面を暴け出した「政界側面史」（定價三圓送料十六錢）の著書がある。

又、縱橫の筆鋒と多趣味の題材を以て、政界の巨頭を痛快に遠慮なく論評した久木獨石馬先生の「政界縱橫記」（定價二圓二十錢送料十二錢　本社發行）も再讀三讀愈よ興を深からしめる近來の快著である。



日本の眞價は、日本を離れて遠いところから眺めたときに始めて分るとは多くの人の言ふ所であるが、洋行する度に日本の本當の姿を瞭然と示してくれるのは鶴見祐輔先生である。排日の北米に單身乘り込んで、日本民族のために烈々の大雄辯を揮ひ、かの國民に日本の眞實を闡明し、彼等をして慚愧の涙を流さしめた「現代日本論」の一册は、我々日本人たるものも必ず一讀すべき世界的大文章である。（定價一圓六十錢送料八錢　本社發行）



自力成功者の典型たる、ヘンリー・フォード氏原著「今日及び明日」（加藤三郎先生譯）は彼の事業を知り彼の抱負を識るに最も良き書、現代青年に對し無限の教訓を含んでゐる（定價二圓二十錢送料十二錢　本社發行）

名士の聲

息もつけぬ面白さ

實業家 稻畑勝太郎

現代我が國には大衆對手の雜誌がずゐぶん多いが、その中でキングは、たしかに一頭地を拔いてゐる。材料の選擇に於て、編輯振りに於て。

第一變化があつて面白い。小說あり、講談あり、講話あり、隨筆あり、漫談あり、繪畫、寫眞、何でも御座れで、趣味、興味、交錯橫溢して、眞に息もつけぬ面白さだ。この點で私は常に編輯者の頭の良さに感心してゐるのだが、それよりも單に面白いことばかりに囚はれないで、そのうちに有益な教訓を加味してゐるのが嬉しい。取りわけ、堅苦しい教訓を、面白く讀ませようとする努力と苦心とを買ふ。それから、外國の小說や、外國の事情の紹介なども、新しい時代の雜誌にふさはしくてよい。

世間には往々無意義な雜誌もあるが、キングは、新時代に適應した有

キングポスト

新年號の準備全く成る

次號は歲末十二月號、口繪、グラフ、大讀物、盡く他に類例を見ないスバラシイものばかりで目下着々印刷所へ送りつゝある。十二月號は本年掉尾の活躍を示すもの、何卒十一月五日の發賣日をお待ち下さい。

次に、來るべき新年號は、一體どんな內容で、またどんな裝ひで諸君に見えんとするか？

研究に研究を重ね、案を練る事こゝに半歲、今や百般の準備は完成し、これを實行に移して社內總動員、獅子奮迅の大活躍ぶりはまるで戰場のやうだ。實に創刊以上の熱狂振りである。『これで面白い雜誌が、立派な新年號が出來なければウソだ。諸君！最後のヘビーを出さう!!』などと書いたビラがそこ〵へ貼られるといふ有樣。諸君、兎に角素晴しい雜誌が出來ます。切に新年號を御期待下さい!!

釣れなくなつた愛正氏

本月號より新掲載の「霧の中の曙」の作者野村愛正氏は大の釣り狂であるが、嘆じて曰く、

『天高く馬肥ゆる秋の釣りはいよ〵堪らなく素敵だのに、其暇が作れさうもないのは思うてもなさけないよ。最近の僕はまる切り書齋に籠城で。全時間と全精力を擧げ盡して「霧の中の曙」の執筆に懸命なんだ。明快に而して面白く、且つ感銘深いものにせねばならぬと、そも幾度想を練り、文を磨いたことだらう。飯より好きな釣りを捨てたは、實に此の一作を天下に問はん意氣込みの爲めなんだ』

と、釣りの不服から、作の抱負と意氣のほどを語つてゐられたが、——見給へ、第一回から堪らない面白さ！は、寔に氏のこの熟と意氣の結晶である。

C記者天をうらむ

秋雨つめたく降りつゞいた九月某日、かねてC記者が註文しておいた長靴が編輯局へ屆けられた。ところが、何と皮肉な事に、午後になるとカラリと晴れて陽がカン〵。編輯局での聖人君子と同人一同畏敬してゐるC君も、此時ばかりは天をうらんで『なぜ晩まで降りつゞけてくれないんだ。意氣颯爽、長靴穿いた凱旋將軍のやうな勇姿で歸宅し、家內を喜ばさうと思つてゐたのに！』と長靴片手にこぼすこと、こぼすこと。



『通信』の中より

◇十月號三四〇頁の五十錢玉物語は興味深く感じ入り候、讀

益な大衆雜誌だといふ刻印を打つに憚らない。

文句がつけられぬ

醫學博士 高野六郎

キングを讀んで第一に感ずることは、是は感心な雜誌だといふことである。編輯の主張が「樂しみながら修養が出來る」といふ點にあるらしいが、其の主義がよく實現されて居る。興味と實益が滿載されて居て、是以上に注文は出しやうがない。全く何でも載つて居て、これ一册あればそれで澤山と云へる雜誌である。

或る雜誌記者が來ての話に、キングは實に安い。あれ位の定價であんなに内容の充實した編輯は到底他の社では出來ませんと感嘆してるのを聞いたことがある。手に取つて讀んで見て成る程と首肯される。

何かアラはないかと卷尾の方から頁を逆にめくつて見た。所が卷頭の華かさ、誠實さが最後の一頁まで連續してゐるのに敬服した。

んでゆく中に何ともいへぬ眞理を悟り候。（神田、鼎山生）

佐々木味津三氏の麗筆冴えて風雲天滿双紙はいよ〳〵最高潮、面白くて堪らん。佐々木氏に感謝すると同時に、氏の御自愛を切に祈ります。（仙臺、杉木生）

◇當市の中田源太郎君はキング修養會を設け、祭禮等には御社發行雜誌名記入の標語ポスターを自費して市内要所に貼り、防火宣傳や衛生宣傳をなし、有益な雜誌の紹介に努めてゐる。讀者の一人として嬉しさの餘り報告申します。（富山縣高等學校内80A生）

◇十月號南洲將軍の『喋るな？而して行へ』の一文に感激しました。將軍の御説は我々の最も心掛くべき事と思ひます。（京都青木繁）

◇新年號もだん〳〵近づいて來た。キングがどんな素晴らしい裝ひで現はれるであらうか、私は今から樂しみにして待つてゐます。（長野縣渓泉生）

燦たり!!『日本精神』

前號に添付した特別附錄の折本『日本精神』は至る處非常な大好評、稱讃狀、感謝狀、日々山を成す有樣。中にも團體に轉載許可の懇請あつたもの富山縣大岩村青年團外數ケ所、青年團指導の助讀用に指定せるもの栃木縣[illegible]町トモシビ講話會外數十ケ所、其他全國津々浦々に亘り青年團、處女會、修養團等々、感激の書面と共に日々續々と大部數の註文依頼をうけつゝあります。動もすれば世道人心輕佻の風に流れんとするの傾きある時、幸に吾等のこの擧に共鳴せられる方々の斯くも多き事は皇國前途のため、洵に慶賀し祝福すべき事と存じます。

キング物識繪本

來月號には『キング物識繪本』といふ迚も面白い特輯ものがあります。私共の風俗習慣言語等百般のロマンス、由來が一目で解るといふ、處世社交の虎の卷。これさへあれば何處へ行つても話題に困らず、もてる事請合です。どうぞ樂しみにしてお待ち下さい。

雜報

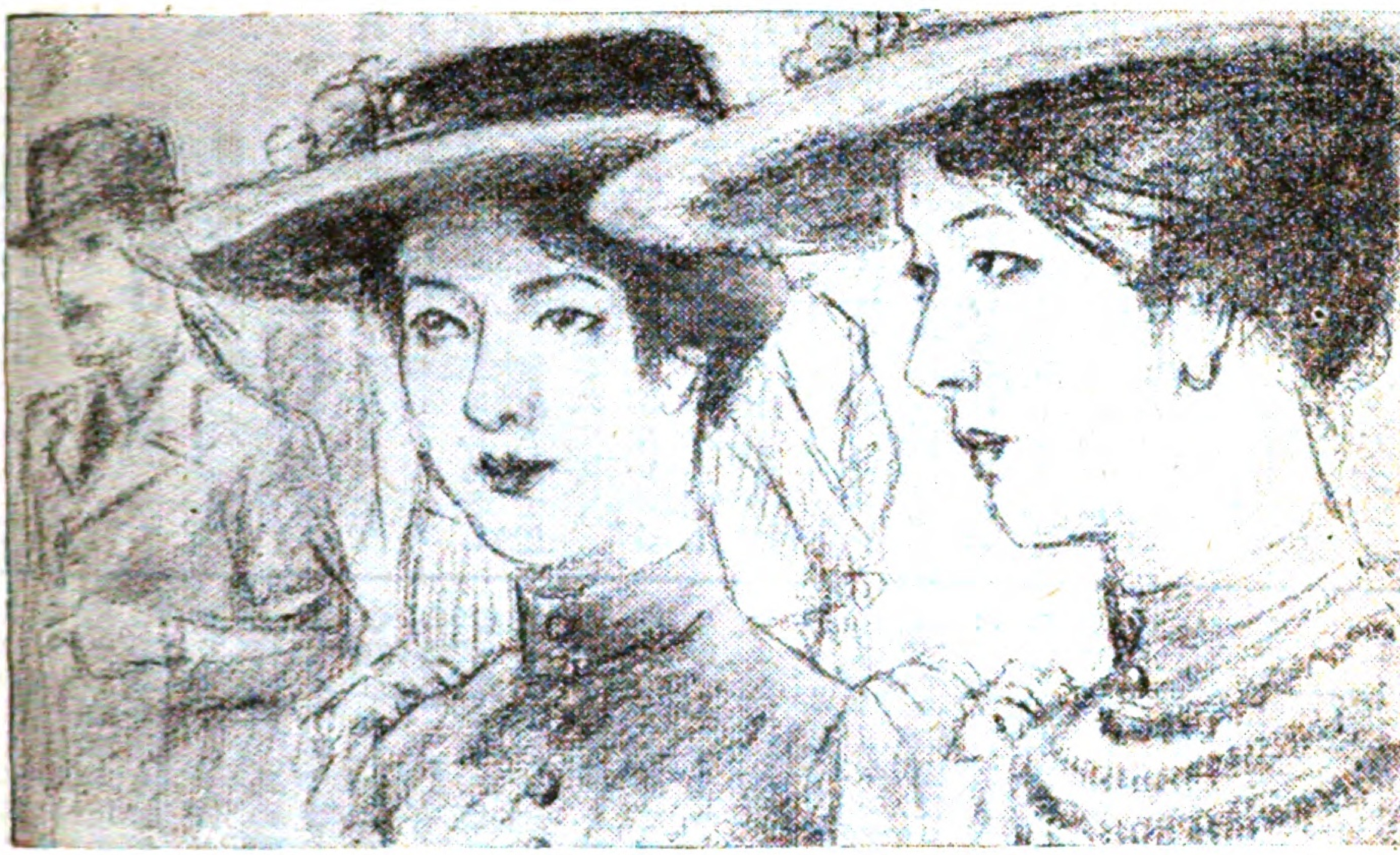
◇全國の川柳家諸氏へ――繪になりさうな川柳（[illegible]）を御寄せ下さい。採用句には畫を添へて本誌「川柳漫畫」欄へ發表――掲載誌を贈呈して謝意を表す。宛名、キング川柳係。

◇本號掲載豫定の「劍道大試合」は次號へ御讓りする事になりました。不惡思召下さい。

◇『新聞朝日』九月一日號所載――キングカード（キング九月號附錄）は附錄としてハガキ大の數枚を袋に入れて雜誌に添へられてゐるものである。この雜誌はいつも何か目新らしいからした企ての實行で讀者を喜ばせてゐる。このカードなどはそれらの中でも傑作だらう（中略）いろ〳〵の問題があるが實際坊やに質問されても一寸お父さん回答に困りはすまいか。その時にはそつと之を見ることだ。

本年掉尾の大活躍！

次號はステキな面白づくめ!!



理想小説

死よりも強し

鶴見祐輔

挿繪 野崎貞雄

一

『忙しいですね。先生』

『うん、この位のことで忙しがつちや仕様がないな、今の君の若さで。え、小笠原』

『いや、忙しくて面白くて怺らないんですよ』

『アッハハハハハ。あゝさうか。僕はまた君が、忙しくて閉口してゐるのかと思つたんだよ』

『いゝえ、先生、私は亜米利加へ着いてから、なんだか體ぢうがむずくして、愉快で怺らないんです。なんだかかう、誰かにぶつかつて見たいやうな、大きな聲でど鳴りたいやうな、喧嘩でも吹つかけて見たいやうな氣がして、かうじつとしちや居られないんですよ。

そこへ持つてきて、新聞記者が押しかけて來る。寫眞班が來る。電話が掛つてくる。お客が來る。手紙が山のやうに來る。電報がひつきりなしに來る。

や、ほーら、またトン〳〵と來た。

はい！　おはいり！』

『おい〳〵、日本語で、ど怒つたつて解らないよ。早く、戸のところへ往つて、開けて見給へ。

無暗に部屋に人を入れろばかりが能ぢやないよ。アハハハ』

『いや、また失策つたな』

と、小笠原剛は頭を掻きかけて、すぐ氣がついて、その上げた手を妙な恰好に天井に向けて、胡麻化しそこねて、

『アハハハハ』

と、自分で笑つて、戸口のところへ往つて、開けてから、すぐ中江先生のところへ歸つて來て、妙な顏をして、

『や、先生、若い女が立つてゐましてね。えーと、何とか言つたつけな。あ、さう〳〵マニキユアーとかをしますかつて、訊いてゐましたよ。なんです、マニキユアーつてのは？』

『アハハハハハ。君がやつて貰ふといゝ。アハハハハハ。マニキユアーといふのは爪掃除だよ。西洋人はみんな丹念に爪掃除をするんだよ』

『僕は、爪は自分で切りますから、女なんかに掃除して貰はなくても……』

『アハハハハ、君は生れてから、爪掃除なんかしたことはないだらう。

まあいゝよ。その女の人は部屋を間違へてきたんだよ、きつと。

話してやり給へ、この部屋には貴婦人はゐませんてね』

やがて小笠原がまた歸つて來ると、先生が、

『ね、米國のホテルは面白いだらう？　ホテルの中で、何から何までみんな揃つてゐるんだよ。米國のホテル生活に馴れると、とても不便で、普通の家には住めなくなるね。電話で寢たまゝ何千哩むかうとでも話しが出來る。手紙は部屋の前の郵便筒に入れゝばいゝし、新聞と手紙とは部屋に配達してくれる。食事も風呂も部屋で出來る。世界中の旅行の切符もホテルで買へる。荷物もホテルで直接どこへでも送つてくれる。

ホテルの部屋に寢たまゝでどんな用でも足せるものね』

『へえ！　そんなに便利になつちまつたら、みーんな寢て暮してゐるんですか』

『ところが、その反對さ。亞米利加人は、ホテルの部屋には夜寢るときの外は、居やしないんだよ。

朝早く起きて、事務所へ往つてまるで喧嘩腰で働いてゐる

んだ』

『何が、そんなに忙しいんでせう？』

『それが不思議だね。この亞米利加といふ國へ來ると、みーんな一樣に忙しくなるんだからね。どんな老人でもじつとしてゐられなくなるんだね。つまり氣候の加減だらうね。

どうもこの米國の空氣の中には、何か非常に刺戟的なものがあるんだね。だから誰でも米國に上陸した瞬間から、忙しくがさく／＼やり出すんだね。

氣候と人間との關係は、不思議なものさね。文明は悉く氣候の產物だといふ學說すらあるだらう？　だからこの國は、見てゐ給へ、この二三十年間に、歐羅巴の繁昌をみーんな取つてしまふからね。

どーんな偉い人だつて、怠けてゐちや駄目だからね。歐羅巴人のやうに、あゝ悠長にやつてゐたら、きつとそのうちには、米國人に追ひ越されてしまふ。

今日の米國は、働き盛りの青年のやうなものさ。國民がみーんな、精かぎり、根かぎり働いてゐるのさ。

つまり活動の停止さね。

活動してゐる人間は案外暇だ。ぼんやり何もせずに居る人間こそは、いつも不平ばかり言つてゐる。どうしたつて、人間は働いてゐるときが一番仕合せさね』

『しかし先生、働きたくつたつて、働く仕事がなければ困るぢやありませんか』

『さうさ、それが君、これからの國家の一番大切な問題さ。如何にして、國民を腹一杯働かすか、といふことがね』

『それは、どうすれば、いゝんでせう？』

『それが亞米利加の政治家の達見さ。將來の子孫の充分働けるやうに、建國當時の政治家が、遠大な計畫を立てゝおいたのさ』

『それは、どういふことです』

『それは、なんでもないさ。大西洋岸の小さい十三州の殖民地が、獨立國となると同時に全米大陸に擴がつていつたのさ。あの平和主義の第三代大統領ジエフアーソンですら、佛蘭西からルイジアナ州を買取つて、日本の四五倍もある領地を擴げてゐるだらう？

土地が大きくて天然資源が多いから米國には、いくらでも働けるだけの仕事があるんだよ。

偉い民族といふものは、小さい領土にちゞこまつてはゐないんだよ。ぐん／＼、全世界に押し出して行く。[illegible]のない國民は、いくら小領土を擁ねたつて、つまり活動[illegible]さ

世界を敵とする經濟戰にならなければ、失業問題の解決なんて出來やしないよ』

と、言つて先生は、ふと氣がついたやうに、

『吉川と、小早川はどうしたい？』

と訊いた。

『え、あの二人はさつき、華盛頓行の汽車の支度をすると言つて、領事館の人と一緒に出懸けました』

と、話してゐるときに、トン〳〵と戶を叩く音がした。

やがて小笠原の開けた戶口から、どや〳〵と入つてきたのは、小早川輝男と、吉川勇と紐育の總領事の友田正一郞だ。

『や、先生、素敵な報告がありますよ』

と、小早川はうれし相に、にこ〳〵しながら、

『大統領のローズヴエルトが、明日の晚ご飯に先生をお招きするといふことです。ね、友田君』

『えゝ、さうです。先程華盛頓の公使館から長距離電話が領事館へ掛りまして、大統領が明晚、中江先生お一人にお眼にかかりたいから、晚ご飯においで頂きたいと申すさうです。どう致しませう』

『勿論、受けるさ。今日の夜行列車の寢臺は取れたらうね』

『えゝ、それは一行の分、全部取りました』

『あゝ、さう、それは有りがたう。僕は華盛頓の用事のすみ次第、すぐ太平洋岸にむけて、眞直に立ちますからね。荷物は全部まとめて、今夜發てるやうにして下さい』

『えつ？　それでは紐育はご見物なさらないのですか？』

『え、紐育の用事はゆふべ濟みました。若い連中には氣の毒だが、急いで日本に歸らなければならない』

驚く四人の顏を、交互に見ながら、中江眞人は微笑した。總領事の友田が歸つて、親しい一行だけになると先生は、初めて口を開いて、

『實はね、紐育へ着いて見たら、日本から秘密の手紙が着いてゐてね。近々に政變があるかも知れない。それまでに歸つて來てくれといふんだね』

と、靜かに言つてから、

『それから、もう一つ面白い手紙はね。綾子と道子と二人して、船に乘つて桑港まで迎へに來るといふんだね。丁度いいから、キヤリフオルニアを見せてやらう。歸りの船は賑かになるぜ。アハハハハ』

と、先生は愉快さうに笑はれた。

勇と輝男は、思はず若くなつた。

氣樂なのは、剛一人だ。

『や、そいつは五月蠅いな、女なんか』

『おい小笠原、世話は君に頼まないよ。アハハハハハ。あとで二人に聞かれたら怒られるぜ』

『や、しまつたなあ。先生、どうか内證ですよ。どうか〳〵』

と、本氣になつて言つたので、四人は思はず釣り込まれて、あはゝゝゝと哄笑した。

二

『先生！ どうでした』

と、白亞館の夜食から歸つて來た中江眞人をつかまへて、剛がせき込んで訊いた。

『え、昔の通りだよ。いきなり飛び出してきて、ハロー！ マビー！ つてね。僕は學生時代には、眞人が六ケしいものだから、みーんな亞米利加人はマビ、マビつていつてたからね、だから、いきなり、マビ！ だらう？ アツハハハハハ。可笑しな男さね。夫人は穩やかな人でね、物靜かに色々なお話をして居られた。それに小供たちが、みーんな腕白盛りでね。家族ばかりの團欒で、實に愉快だつた。まるで大統領て感じは、ちよつともしなかつた。』

『へえ！ 偉いなあ。僕も總理大臣になつたら、そんな風にや



るんだなあ』
と、暉が言つたので、暉男と勇とが、思はずどつと吹き出してしまつた。
先生も愉快さうに笑ひながら、燕尾服のまゝ廣い部屋の一隅のソーフアーの上に樂々と身を伸して、



『話しの多い男でね。矢つぎ早に色々のことを聞いたつけ。日本の武士のことを、小供に話してきかしてくれといふのでね、僕は色々の話をさせられちやつた』
『それで、ご用事は？』
と、暉男が心配相にきくと、
『それがまた例のローズヴエルト式さ。食事がすむと、いきなり僕の左の二の腕をぐつと鷲掴みにして、おい、僕の書齋へ來い。とかうなんだね。
さうして、二人で書齋に入ると、ちやーんと部屋の戸を閉めて、まるで別人のやうに嚴粛に話し出した、世界の形勢をね。
それで一時間ばかりの間に、すつかりお互の意見が合致した。もうこれで大丈夫だ』
先生は、感慨に堪へないやうに、さう言はれてから、
『これで僕は、今夜このまゝ死んでも、思ひ殘すところはい。男一匹の仕事は仕遂げた』
と、誰に言ふともなく、靜かに言はれた。
若い三人は、默つて深い感激にうたれた。
華盛頓の夜が、窓外に森々と更けてゆく。先生も弟子も、いつまでも默つたまゝ、別々の感慨に耽つてゐた。

三

『どうも限しのない大きい國ですね』
『さうだ。日本とはちと違ふだらう？』
『えゝ、なんだか手掛りのないやうな、しまりのないやうな國ですね』
『うん、野原ばかりだらう？』
『えゝ』
廣い寢臺車を、晝のうちは疊んで座席とし、乘客は左右の兩側に、前後に向ひ合つて坐つてゐる。大きい窓の外には、ミシシツピイ平野が果しもなくつゞいてゐる。
剛は中江先生と向き合つて、さつきから話し込んでゐたのだ。
『この果しない廣い野原を旅をしてゐると、實際恐ろしいやうな氣がするね。
この廣い自由な大地から、どんな人間が生れてくるか解らない。
あのリンカンにしたつてさうだね。あんなずば拔けた大きい人物は、どこの國にだつて滅多に生れてくるものぢやない。
いや生れることは生れても、小さい國では、周圍の人が、せせこましい五月蠅いことを朝晩云つて、いつの間にか小さい人物にしてしまふ。始末に困つたものだ』
と、先生は茫々とはてしなくひろがつてゐる左右の平野を眺めながら、嘆息された。
『しかし先生、日本にだつて、豐太閤や、西郷南洲のやうな大きい人物が出たぢやありませんか』
と、しばらくして剛が言つた。
『うん、それは秀吉や南洲は、ずば拔けてゐた。しかし考へて御覽。あの二人が、どこかもつと大きい國に生れて、腕一杯働いたとしたら、どんな仕事をしたと思ふ？』
剛は成程と思つた。
『どんな偉大な人物でも、舞臺が大切だ。この廣い世の中に、人物は居ないわけではない。たゞ時世時節に廻り合さないんだ。またさういふ時節にめぐり合はしても、思ひきり働ける舞臺に出るのが六ケしいんだ。
何も政治家に限らない。
文章家にしても、英語で文章を書く人と、和蘭語で書く人と、どれだけ幸不幸があると思ふ？ 英語で書く人は、世界の三分の一か少くとも四分の一の人の耳目には觸れるんだ。
しかし、和蘭語で書いては、精々百分の一か、五十分の一の人の眼にしかつかない』シエークスピアが、モロッコに生れ

たとして見給へ、世界に果して、どれだけの影響を與へたか。人間の運不運といふものは、恐ろしいものさね』

『……』

ある決心が剛の胸の中を走りすぎた。

『さうだ。僕も大きい世界に出て働けるやうな準備をしなければ駄目だぞ。小さい日本の中に閉ぢ込められてゐたんでは駄目だ』

彼は、激しい感慨のため思はずぞーつとした。

四

そのあくる日、車は廣い〳〵ミシシツピイ川を渡つた。

『あつ！　ミシシツピイ！』

と、勇と剛が、思はず一どきに叫んだ。

中江航人は、同じやうに立ち上つて、車窓から碧い脚下の水を眺めながら、

『世界一のミシシツピイ』

とつぶやいた。

『君たちは、マーク・トウエーンを讀んだかね』突如として、先生が三人に訊いた。

『え、マーク・トウエーンのどの本ですか』

と、鐵男がしばらくして訊きかへした。

『ハツクルベリー・フヰンさ』

『いゝえ』

『まだです』

『僕も讀みません』

と、若い三人が言つた。

先生は微笑しながら、

『駄目だね！　さう無學では』

と、揶揄つて、

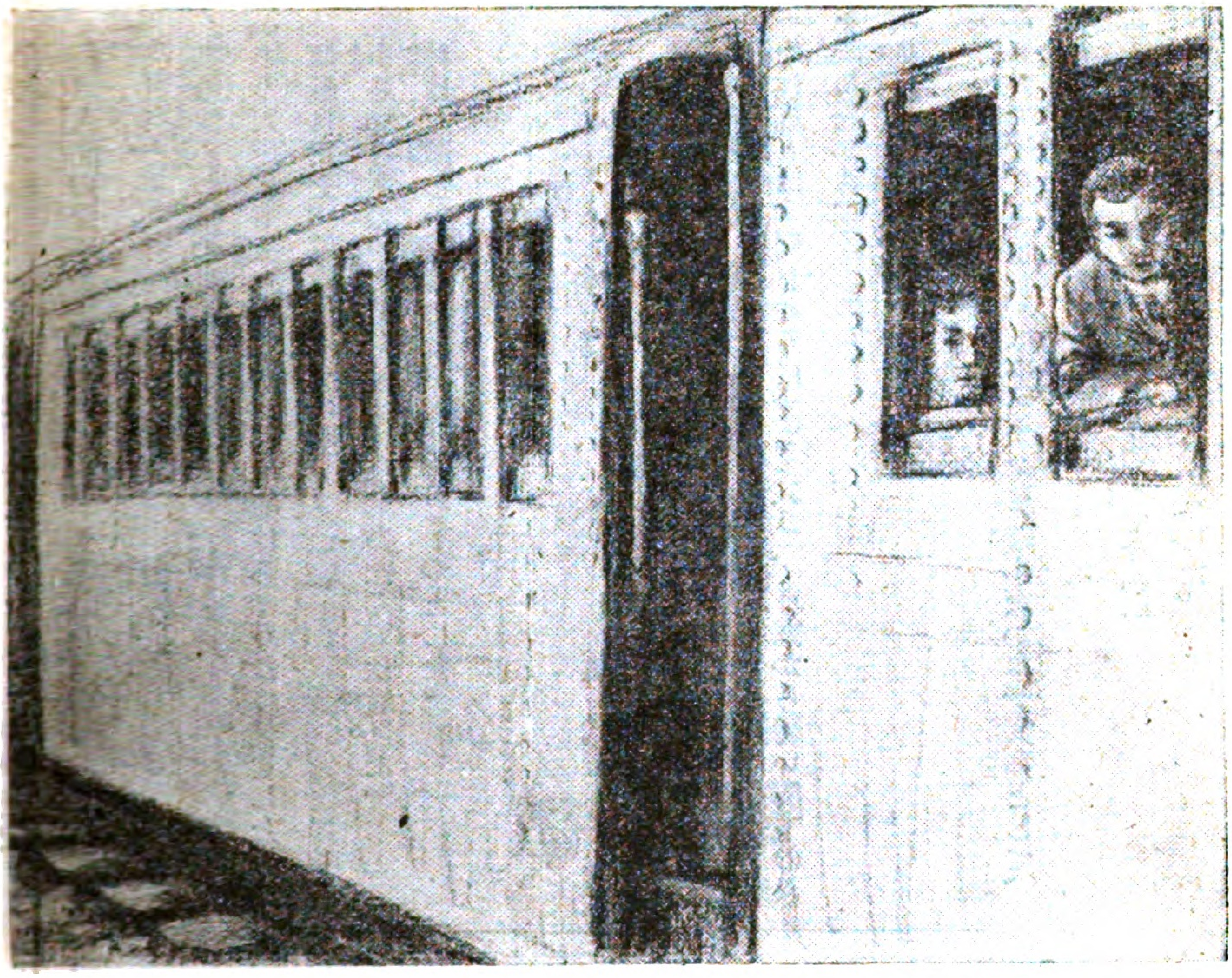
『亞米利加人らしい亞米利加人は、詩人のホヰツトマンと、小説家のマーク・トウエーンだよ。この二人は、亞米利加以外の國では生れない』

と、しばらく默つてから、

『マーク・トウエーンは、このミシシツピイ川のほとりで育つたんだね。だから彼の作品を見ると、この大きい世界一の川と、この全世界の穀物倉と言はれるミシシツピイの大平野の心持がよく出てゐる。

ことにこのハツクルベリー・フヰンといふ小供が、黑ん坊の奴隷と一緒に、一隻の筏に乘つて、蘆荻の生ひしげるこの大きい川を、下へ下へと流れ下つてゆく光景ね。

「ケーローはまだかーい？」とすれ違ふ船に聞きながら、あの洋々たる大河を、南へ南へと下つてゆく少年フヰンの姿ね。



あれは實によく、この大きい川の精神と、この川のほとりに住む少年の心持ちを描いてゐる。あゝいふ大きい野原と川との生んだのがマーク・トウエーンで、彼のやうな心持ちの米國人の作るのが、二十世紀の亞米利加だ。あの空想的な、自由な、冒險的な、さうして黑ん坊の奴隷を救はうといふ一種の男氣ね、それが西部亞米利加の精神だ。

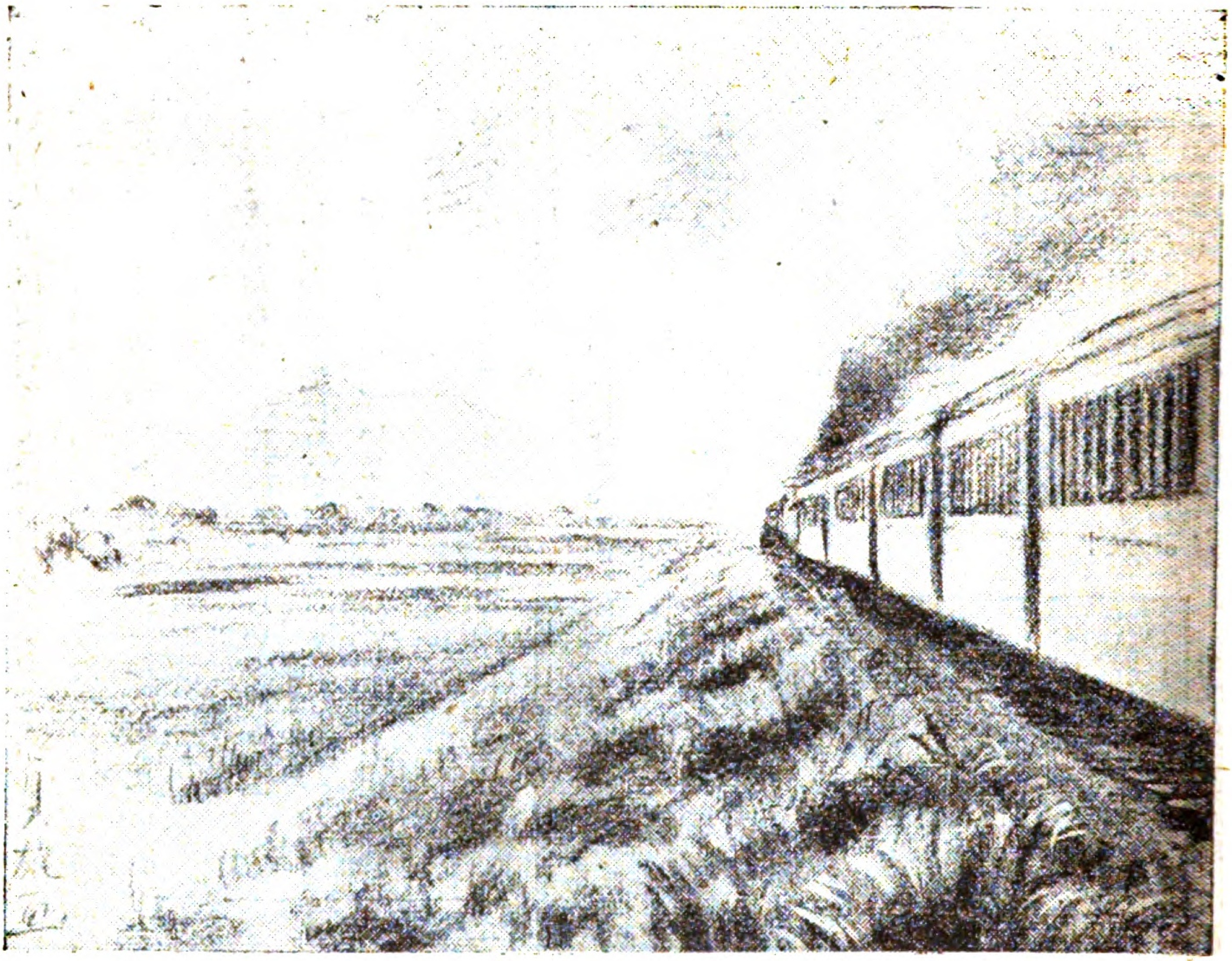
紐育へ上陸した歐洲移民のせゝこましい心持ちとはまるで違ふ。だから紐育の都會を見た人では、亞米利加は解らない。亞米利加は露西亞と同じく廣い廣い平原の農民の作つた國なんだよ』さう言つて先生は、ハックルベリー・フキンの物語の筋を一と通り話された。

その翌日、一行は落機山の溪谷を渡つて、見渡すかぎり荒蕪のネヴアダ州に出た。

さうして　ネヴアダを横斷し盡すと、シエラ・ネヴアダの峻嶺を宵闇の中に走り終つて、翌曉眼さめると、車は世界の樂園と呼ばるゝキヤリフオルニア州の平野を駛つてゐた。

五

赤黛い砂地の平野を走りつくして、キヤリフオルニアの青草の原に出たときの氣持は、旅する者が一樣に、終生忘



れがたき印象として記憶するところである。
見渡すかぎり青い野菜や穀物、さては三四尺の高さの葡萄園の打ちつゞくのが、キャリフォルニアの平野である。ところどころに白い羊が食を喰んでゐる。大空は拭いたやうにつや〳〵して、一纖の雲りもないやうに碧い。日射しが赤々と滿天に充ち〳〵てゐる。さうして肌に快い微風が、青草と果樹園との上を、あるかなきかの軟かさをもつて吹きすぎてゐる。
かゝる温和な風色に相應はしい西班牙風の家々や、西洋建築中で一番日本趣味に近い木造平家建の農家が、廣々とした庭をめぐらしてそこゝに立つてゐる。
日本の五月ごろと覺しい輕羅を身につけた人々が、何のこだはりもないやうな風に、悠々とこのうちを歩いてゐる。
氣候と風色に惠まれ、食物に富んだこのキャリフォルニアの地を、全米國の人々が、四十八州の寶玉のごとく珍重する。
小笠原剛は、早くから寢臺から飛び出して、顔を洗ひ身支度をすると、同行の連中を叩き起して、大はしやぎに、はしやいでゐた。
『愉快だなあ。

どうだい吉川、素敵だなあ。とても怺らないね。え、亞米利加にも、こんなところがあるのかねー、素敵だなあ』
と、鼻が平べつたくなる程、顏を窓硝子に押しあてゝ、感心して窓外の春色を眺めてゐる。
『そんなに氣に入つたら、こゝに歸化したらいゝだらう』
と、先生がうしろから揶揄はれると、
『えゝ、歸化してもようございますね。毎日こんなに愉快なら』
と、剛が苦もなくキャリフオルニア人になつてしまふ。
『ところが、駄目なんだよ』
と、先生がまたうしろから續ける。
『え、何が駄目なんです』
と。剛は窓に顏を押しつけたまゝ訊く、
『東洋人は歸化不能なんだ』
『や、それで安心した。いま歸化するなんて言つて、それぢやすぐ歸化しろなんて言はれやしないかと思つてね。アハハハハ』
と、剛は初めて窓から顏を離して、笑ひながら振り返つて、先生と向き合つた。



『アハハハハ、ぢやないよ』
と、先生は珍らしくむきになつて、
『これは、これからの世界の大問題だぜ』
と、たしなめるやうに言はれる。
剛は少し見當が違つたので、梟が晝間出たやうに眼をパチクリさせながら、
『えつ？』
と、訊きかへす。
『吉川と小早川は知つてゐるだらうが、このキャリフオルニア

といふところは、本來は支那移民で鐵道を敷いて開けたんだ。ところが支那人があまり多くなつたといふのでね、今から二三十年前に、支那人排斥運動が起つて、入國禁止になつてゐるんだ。今は日本人を歡迎してゐるが、いづれおつつけ日本人が殖えると、きつとまた日本移民の排斥が起る。
見て給へ。きつと起る。
その時は、この移民問題といふものが、きつと日本と米國との間の大問題となるよ。
いや、これは日本と米國との間だけの問題ではない。きつと東洋民族と西洋民族との問題になる』
さう言つて先生は、天地の一切の恩寵に惠まれた麗はしき加州の沃野を見渡された。
『へえー、こんな奇麗なところがですか?』
と、剛がうつかり言ふと、



『だからさ。奇麗なところだから問題になるんだ。天地の恩恵の満ちた土地だから、各国民族が争つて入らうとするのだ。醜くい争は、いつも美しいものを中心として起るのだ』

先生は慨然として、さう云はれた。

その先生の一言を、小笠原剛と吉川勇と小早川輝男とが、二十幾年の後に沁々と想ひ起す日がきた。

六

『さ、降りるんだよ』

と、先生は三人を急がした。

太つた人のよさゝうな黒ん坊の寝台給仕が、一行の荷物を、せつせと寝台車の端の乗降口の上に積み上げた。

『かうして積んで見ると、大變な荷物だね』

と、輝男が堆かく積み上げたスート・ケースや手下鞄を眺めながら言ふ。

『これはさうさ、一行四人で、世界を一周しての歸りぢやないか』

と、剛が頗る大人振つたことを言つたので、先生が噴き出して、

『アハハハハ、小笠原も仲々常識的になつたね。矢つ張り外國の旅はするもんだね』

と、揶揄ふ。

『だつて先生、この位のことは……』

と、抗辯しかけてゐるときに、汽車がすーつと音もなく止まつた。

『おい、ついたよ。早く降りないと』

と、吉川がせき立てる。

『まあ、さう急いだつて駄目だよ。この手荷物をすつかり下してからでなくては、誰も降りられやしないよ』

と、先生が静かにたしなめた瞬間に、

『やあ！　來た！　來た！　來てるよ！』

といふ頓狂な小笠原の聲が、三人の耳を驚かした。

『おい、なんだい、だしぬけにそんな大きな聲を出して……』

と、言ひかけた吉川勇の聲が、途中でぐつと閊へた。

勇は眞蒼になつた。

その次に、小早川輝男が、蒼くなつた。

『やあ！　よく來たね！

お迎へかい？　どうも有りがたう！』

といふ朗らかな中江眞人の聲が、明るい南國の朝日の下で響き渡つた。

『先生！　お歸り！』

『先生！　お達者で！』

さういふ二人の若々しい女の聲がしたと思ふと、綾子と道子との姿が、車のすぐ下の木の乗降場の上に現れた。

白に樺色横縞の絹のスウェターの下に、純白な絹のスカート、白絹の靴下、白いキッドの靴。黄色いリボンの帶の白い麥藁帽を心持ち斜めにふうはりかぶつた綾子の姿が、明るい陽の下で、冴え〴〵と涼しかつた。

道子は白のゆるやかな絹の上衣に、紺のスカート、心持ち樺色の絹の靴下に赤靴、紺の麥藁帽、何時のとほり血色のよい顔をして立つてゐた。

悦びと期待とが、二人の顔一杯の表情だつた。

『お歸り。よかつたね。アハハハハ、まだ日本に着いたわけぢやないぢやないか』

と、先生は車上から笑つた。

『だつて……』

と道子は快活に笑ひながら、

『だつて先生、こゝまでお着きになれば、お歸りになつたも同じことだわ。オホホホホ』

と車上を見上げながら言つた。

もうその時分には、寢臺給仕は一行の荷物をすつかり乘降場の上に下しきつて、車の乗降口が空いてゐた。

中江先生を先頭に、一行四人はどや〴〵と停車場に降りた。

桑港對岸のオークランド停車場だ。大勢の客が、赤帽をきた運搬手に荷物を持たせながら、急ぎ足に渡船の方に歩いてゆく。大陸横斷の四日の旅がすんで、愈々明るい桑港に着くときの心の悦びは、米國を旅する者の、何度も何度も、新しく感じることである。

天心から洪水のごとく降り灑いでくる日射しを肩に帽子に靴に、一杯に浴びながら大勢の旅行者は、悦びに輝きつゝ大きい渡船の上に乗つてゆく。ざは〴〵、ざは〴〵といふ話し聲が、いたるところに滿ちてゐる。

女たちと一行の四人との挨拶がすむと、その人波のうちに揉くまれながら、中江眞人は若い女の秘藏弟子二人と語り合ひつゝ歩いていつた。

『いつから來てゐたの？』

『一週間ほど前ですわ』

『よく二人だけで來られたね』

『だつて先生、たゞ船に乗つてゐればいゝんぢやありませんか。私たちだつて、その位のことは出來ますわ』

『それは、船は何でもないさ。しかし上陸のときと、上陸後に少しも不自由はしなかつたかね』

『えゝ、それは電報で父が、こちらの正金銀行の支店長の關吉様にお頼みしてくれましたので、すつかりお世話になりまし

たの』

と綾子がいふと、

『それに兄の關係で、外務省の方が、こちらの領事館にお頼み下さつたので、上陸のときなどは、それは樂でしたわ』

と、道子が付け加へる。

廣い渡船は、十人ほどの人を乘せて、綽々と餘裕がある。一行は大きい階段を昇つて二階に出た。微風がどこからともなく、そよ〳〵と吹いて來る。

『キヤリフオルニアは、何時來ても愉快だね』

と先生は誰に、言ふともなく言はれた。

氣のひろ〳〵と軽いのは、先生と剛だけであつた。ほかの四人は、とり〳〵に心が重かつた。

『や、動き出したぞ。奇麗な水だなあ』

と、剛は大聲に言つてから、

『海の風に當つたら、急に腹が空いちやつた。あ、さう〳〵今朝はまだ朝飯を食はなかつたんだなあ。困つたなあ』

と言つて、

『先生、困りましたね。ホテルへつくまで何時間かゝるんですか』

と、なさけなさうに訊いた。

『アハハハハハ』

と、先生はうれし相に笑つて、わざと時計を出して、

『さうさね、これから四時間位はかゝるだらうよ』

と言ふと、

『や、そいつは弱つた』

と、剛が全く弱つたやうに頭を掻きかけて、氣がついて、帽子を一寸なほした。

先生は可笑しいのを我慢して、くすり〳〵笑つて居られると、道子が横から、

『まあ、先生はお人が惡いのね。四時間なんてかゝるもんですか。三四十分でせう』

と言つて、

『それに、このお船にだつて食堂があるぢやありませんか』

と知らした。

剛はすつかり元氣附いて、

『痛快々々！ それぢや、すぐ往かう、誰か僕と一緒に來ないか？』

と叫んだ。

『みーんな行くよ。汽車から降りたお客さんは、みーんな朝食はこの船でしてゐるよ。さあ往かう、君達はもう濟んだかい？』

と、二人の女性にきいた。

『えゝ、濟みましたけれど、お伴しますわ』
これで一行は、領事館から出迎への書記生の岸を加へて七人、どや／＼と食堂へ往つた。
『大きいまくは瓜だなあ！』
と、剛が食卓に坐るなり言つた。
『おい小笠原、世界を一周してまだ、まくは瓜とキャンテロープの區別が附かなくちや困るね――』
と、先生が言ふと、
『や、こいつは失策つた。
しかし、甘いなあ！』
と感嘆する。
『さうさ。亞米利加に來る樂みの一つは、果物のうまいことさ。殊にキャリフオルニアの瓜と來ては、とても世界中どこへ往つても見られないね。
しかも、それが安いぢやないか。小さい西瓜位の大さのこの瓜が、産地の畑では日本の金で、六つで五十錢だからね』
『日本より安いですね、先生』
『冗談言つちやいけない。日本でこんな瓜を食べようものなら、一つで七八圓するよ』
『へえ――、さうかなあ。それぢや、こゝに居るうちに、うーんと喰ふことですね』
と、剛が本氣で言つたので、一同は思はず、ドッと哄笑した。あちらこちらの食卓の人々が、びつくりして一行を見た。
『さうね。船賃分だけ食ひためるかな』
と、先生が言つた。
『しかし、先生もあまりお嫌ひぢや、ないやうですな』
と、大きい瓜を喰べながら、剛が言つた。
『オホホホホ、面白い小笠原さん』
と、綾子が初めて笑つた。
『まるで學園に歸つたやうだね』
と、先生がうれし相に言はれた。
『これで、東京へ着いて、今度の仕事の報告を、織田侯にすましたら、愈よ久しぶりで氣輕な書齋人の生活に歸れるかな』
先生は獨言のやうに、さう言はれた。
その言葉が妙に、ある不思議な豫感をもつて弟子達の耳に響いた。彼等は何といふわけもなく、たゞひいやりした。
（つゞく）

●愛讀者諸君！
是非三九八頁の御願を御覽下さい！



二宮尊德

武者小路實篤
挿繪　尾竹竹坡

妻

彼の最初の妻は彼に失望した。

又彼と一緒にゐては面白くなく、又辛抱が出來なかつた。彼は一家の主人とし、又夫として、あまりに天下のことを考へすぎてゐた。

彼は普通の人が見ると變りものだつた。貧しい生活に彼は甘んじた。彼は自分の一家のことを顧みるにしても、自分の家を富さうなぞとは考へなかつた。

彼には力がありすぎるのに、その力を他につかひすぎた。

普通の女にとつて彼と一緒にゐることは面白くないにちがひなかつた。又こんな人と一緒にゐてはいつまでたつても面白いことはないと思つたにちがひない。

彼の方から出したのではない。妻の方で出たのだつた。

妻に出られた翌年彼は三十四で十六の波子を娶つた。之は服部家に行儀見習奉公に上つた女だつたのを、服部夫婦がこの女ならと云ふので金次郎に世話したのだつた。

今度は波子の方で、金次郎を信用し切つてゐた。波子の父は齡がちがひすぎると云つて心配したが、波子はよろこんで自分からすゝんで金次郎の妻になつたのだつた。

その時金次郎は服部家の整理をすませて六年たつてゐたわけだ。

この君主あつてこの臣あり

話は少し前にもどる。

金次郎が三十二の時、藩主大久保忠眞侯が老中になつた。その祝ひで藩中の孝人奇特人三十七人が賞美されることになつた。そして金次郎もその奇特人の一人であつた。

その表旌にはかうかいてあつた。

『兼々農業に精出し、心懸宜しき趣相聞、尤人々次第は之あり候へ共、よき儀にて、其身は勿論、村の爲にも相成近頃惰弱なる風俗中殊に一段の奇特之儀に付ほめ置、役勤るものは其身忘りては萬事相屆ざる事にて小前の手本にも相成儀故、彌よ相勵み申すべく候』

金次郎は賞められすぎてはゐない。だが彼の德、彼の勤勉が人々を感化しないことは出來ない。熱は低きものにつたはる。そのやうに熱心に働くものゝ熱は他の人の心につたはらないことは出來ない。たゞその熱心が強く根氣よく、つけ燒刃でないことが必要だ。

大久保侯はそれ等奇特人の名前のかいてあるかきつけを生涯懷からはなさなかつた人だ。大久保侯の懷のなかで金次郎の名が段々大きくなり色こくなつていつたことは想像することが出來る。

彼は金次郎の樣子を注意してゐた。彼はこの男こそ自分が私かに待つてゐた男ではないかと思つてゐた。

彼は自分の藩をもつて天下の範にしたかつた。それにはしつかりした人物が必要だつた。彼は私かにその男を求めてゐた。だが中々そんな男はゐるものではない。處が彼はさう云ふ男を遠く求めて得られなかつた男が、實に自分の藩中にしかも一百姓として生きてゐるのを知つた。彼はその男に力一ぱいの仕事をさせて見たかつた。だが當時の社會では一百姓の彼に藩の政治を任せる事は不可能なことだつた。それは地面を天にするやうに出來ないことだつた。だが大久保侯は思ひ切れなかつた。金次郎の力倆を存分にふるはして見たかつた。それで時々金次郎を擧用しようと内意を下して見たが、いつも家老に反對された。そして二宮金次郎のやうなものを採用して、その云ふこと

をきかなければならない位ゐなら死なして下さいと云ふものさへあつた。

その時、大久保侯の分家に旗本の宇津なにがしと云ふ人がゐた。その領地内は四千石で、下野國芳賀郡の物井、横田、東沼の三村がその領地だつた。櫻町にその陣屋があつた。

土地がわるく、石穀が乏しく元祿時代には人家が四百五十軒あつたが、今では百四五十軒切りなく、それもお互に利害衝突して訴訟ざたが絶ることがなく、貧乏のどん底におちて、田畑は荒れ次第になつてゐた。

四千俵をさめられる所が八百俵きりをさめられなくなつてゐる。宇津家ではどうすることも出來ず、困り切つてゐた。

大久保侯はそのことを心配して今迄に數千兩の金を費やし、又いろ〳〵の人をつかはして復興させようとしたが、いつも失敗した。そして誰も手がつけられず、ほつておくより仕方がなかつた。人間業ではどうすることも出來ないと皆思つた。



大久保侯は其處で二宮金次郎のことを考へ、この男でなければこの仕事は出來ない、この男なら出來るかも知れないと思つた。それで金次郎にこの仕事をさせるやうに家老に話した。家老達はよろこんだ、金次郎にもこの仕事は出來ないにきまつてゐる。彼も人間にちがひない。そして之が出來なかつたら、藩主の二宮信用もなくなるにちがひないと思つた。

其處で二宮の處に使ひが出され、野州櫻町の復興の爲に働くやうにと云ふ命令が下つた。

金次郎は例によつてすぐ承知はしなかつた。「私のやう

な卑しいものは、そんな大業は出來ません』と斷つた。しかしその斷りはきかれなかつた。再三、再四又使ひが來、藩主の意志をつたへた。そして金次郎が立つてその仕事にあたつてくれるより他に櫻町を復興させることは出來ないから是非やつてくれるやうにと金次郎に御下命があつた。だが金次郎は三年の間承知しなかつた。

だが藩主の方も根氣がよかつた。そして遂に二宮金次郎は立ち上つた。

『それ程迄にも私を信用して下さるのに之以上お斷りするのは男らしくない』彼はさう思つた。やす〳〵と彼は仕事にはかゝらない男だ、そのかはり立ち上つた以上は、他の人のやうに途



中でどうしても駄目でしたなぞと云ふ男ではない。

しかし彼はすぐ承知したのではなかつた。

『それ程迄におつしやつて戴くなら一度よくその地に參りまして調べてから御返事いたします』

彼の答へは何處までも用心深かつた。

そしてお許しを得て、彼は下野の櫻町へ行つて一軒々々の樣子をしらべ、土地をよく見、水理の具合や、人情のありさまを見た。彼はものをあまく見ない、都合よく見ない、彼は冷靜に又數學的にすみからすみまでしらべないではやまない男だつた。

彼にはどうしてこの土地がすたれたか、之をよくするにはどうしたらいゝか、それには何が必要か。彼はあらゆることをはつ切り頭に入れて歸つて來て言上した。

『土地は實にやせてをりますし、人民は實に怠けてをります。』

しかし仁政をおほどこしになつて人民によりどころを與へられ、そして農事に骨折るやうに導くことが出來ましたら、復興の望みはないことはありません。だが仁政を御ほどこしにならなければ、この土地はどうにもならないと思ひます。しかし金は一文もお下しになつてはなりませぬ。今迄金を多くお下しになつたので仕事が出來なかつたのだと思ひます』

大久保侯はおどろいて云つた。

『お前の云ふことは正しいが、しかし金がなくつてどうしてやつてゆけるのだ』

『殿樣が金をお下しになると土地のものがその金に目がくらみまして、お互に金を手に入れようと思つて、お互に妬み、恨み、憎みあひます。そしてお互に非難しあつて利を貪り、お互に信じあふことが出來なくなり、一致してことにあたることが出來なくなります。之が金をお下しになる弊害と思ひます』

『お前の云ふことはいゝが、それならどうすればいゝのだ』

『荒れた土地を開くには荒れた土地の力でやり、貧乏を救ふには貧乏の力でやればよろしいと思ひます。金なんかいりません』

何處までも金次郎は金次郎式の言葉でお答へするので、藩主は全く見當がつかなくなつた。

『荒れ地を開くのに荒地の力でするとはどう云ふわけなのだ』

『荒田一反を開いて一石とれるといたしますと、その内五斗を以て生活にあて、あとの五斗を以て翌年の開田料といたしまして、毎年さうして、ゆきますと、財を用ゐないで何億萬の荒れた土地が開けるわけで御ざいます』

大久保侯はそれをきくと微笑みを禁じることは出來なかつた。そして心で思つた。

『二宮式無手勝流だな』

金次郎はなほつゞけて云つた。

『宇津家の領地は四千石になつてをりますが實際は八百石です。ですから再興出來るまで八百石を以て分限として戴き、それ以上をお求めにならないで戴けば、あとは土地の人の自力によりまして開墾してゆくことは、吾邦をひらいた人々が一文の金もつかはずに開墾してゆきましたやうな精神でやつてゆきさへすれば、一金の用財もお下しにならずやつてゆけるはずです。私に全部お任せ下されば十年で必ず功を奏しておめにかけます。しかしこゝに一つ難かしいことが御ざいます』

『それはなんだ』

『土地を開くことは難かしいとは思ひませんが、よくしらべて見ました所、すつかり出來上つても二千石不足いたします。今のまゝですと四千石と云ふ名だけは保つことが出來ますが、苦勞して、いくら金をかけてもあの土地では二千石以上をとること

とは出來ません』

『それは又どう云ふわけだ』

『あの土地は實によくない土地で御座いまして、薄地の土地では一反と云ふ名で實質二反の土地がなければ民は飢渇を免れません。處があの土地では一反と云つてゐる土地が實地はかつてもかつきり一反で御座います。之では民が生活が出來ず、他方へ流れ出るのは當然で御ざいます。いくら復興しましても今のまゝでは又すぐ亡びることはあきらかで御ざいます。民を安らかにしますにはどうしても二反を一反と見なければなりません。ですからいくら金をかけても四千石が二千石になります。どうしても四千石宇津家で必要でしたら名實ともに四千



石ある土地をわけてお與へになる力が、おとくかと思ひます』

『お前の云ふことはよくわかつた。しかし不毛な地を不毛なまゝにしておくのは私の本意ではないから、お前の云ふ通り二千石になつてもいゝから、再興するやうに骨折つてほしい。そしてもしお前が心配するやうに、二千石減じたら、成功したのち他の土地であと二千石はおぎなふことにするから心配せずに、骨折つてほしい』

『ありがたうございます』

『この君主あつてこの臣あり』と云ふ氣持が、二人の心にひつたりした。金次郎はます／＼決心を新にし、藩主はます／＼金次郎を信用した。

こんなことを云つた男には藩主はまだ逢つたことがなかつた。

より大きな孝行

しかし藩主が信用すればする程、二宮の失敗することを望むものは多かつた。殊に失敗して歸つて來た人々は、

『土百姓に何が出來る』

と思つた。そして内心金次郎が成功することを恐れた。なんだか金次郎は他人に出來ないことを平氣にやつてのけさうに思つた。

しかし金次郎は平氣で大事がやれるものでないことは百も承知してゐた。

彼はいよ／＼この大業につく前、いろ／＼彼らしい考へ方をした。何事も徹底的に考へないではやまない彼の頭は、こゝでも働き出した。野州にゆくとなると自分の家のことは考へてはゐられない。自分は家を再興することを本願にしてゐた、今家のことを考へると、野州にゆくのは馬鹿氣てゐる。勿論彼は損得でものを考へる男ではなかつた。彼は人道の立場から考へた。忠孝の立場から考へた。

君の命をきゝ君の心を安ぜようとすると、自分の一家のことは考へる暇はなく、折かくもう一歩と云ふ處で家のことはすてなければならない、之は先祖にたいしてすまないことではないか。忠ならんとすれば孝ならずと云ふ立場におかれてゐるやうな氣がした。

だが彼は君に忠になることが即ち孝である。自分の一家のことを考へるよりは何百軒のことを考へることが孝である。すたれた一家を起すより、すたれた町をおこす方が孝である。

彼は巨萬の富を得るよりも、多くの人の生命のために働くことを孝だと思つた。それで彼は先づ先祖の墓へお參りして、自分の信じてゐることを報告した。それから例によつて人をよんで、彼は自分の決心を語り、苦勞をいとふならば別れようと云

ふ決心をのべた。妻は元より夫と死を共にすることを誓つた。

其處で彼は家や土地を賣つて三つになる子供をつれて野州に出かけていつた。その時彼は三十七だつた。

彼が櫻町に近い、谷田貝驛につくと、二三の人が彼を迎ひに來て居、土下座をして跪いて彼に挨拶をし、そして彼が遠くからわざ〱來てくれたことを心からよろこんで見せた。

彼はあつさりそれに答へた。

そして彼は御馳走に呼ばれた時それを丁寧に斷つて云つた。

『少しでも早く櫻町へゆきたく思ひますから、失禮いたします』

そしてその人達とはなれると彼は妻波子を顧みて云つた。

『今の男はどう云ふ風に見える』

『よささうな方ですね』

『馬鹿。あゝ云ふ奴がゐるから恐ろしいのだ。油斷が出來ないのだ。いゝ人間と云ふものはこつちから呼んでも中々來ないものだ。あゝ云ふへつらひ方が恥かしくなく出來るものはこつちを利用しようと思ふものに限る。今迄來た男は、皆あゝ云ふ男の云ふことを信じて、いろ〱のことを行ふので、善人は怨み、惡人は利用しようとかゝるのだ。用心しないといけない』

『本當にさうおつしやればさうですね』

迫害

彼はいよ〱仕事にとりかゝつた。

彼は毎晩十二時頃にねた。そして二三時間もたつかと思ふともう起きて諸帳簿をしらべ、冷飯に湯をかけて食べ、そしてあかるくなると同時に村中を一まはりした。そして日が出てまもなく家に歸つて來て、又事務をとり、そして又外へ働きに出るのだつた。

彼の働きぶりは超人的であつた。誰も眞似が出來ない。だから彼は土地のことは何から何まで知つてゐた。

しかし彼は自分の考へ通り行はないではゐられなかつた。彼には豫算がちやんと立つてゐた。所が彼の精神がわかるものは殆んどなかつた。彼のすることが人並とちがつてゐることで彼を信用しようとはしなかつた。そして彼のやり方についていろいろ非難した。しかも彼の命令が絶對的に力をもつには、彼の位置がよくなかつた。彼は何と云つても田舍の百姓であつた。武士達に命令する事はむづかしかつた。同等の位置にゐる人が二人はゐた。そしてそれ等の人が金次郎のやり方に贊成出來なかつた。又土着の人達が、金次郎のやり方に贊成出來なかつた。彼等は勤勉な生活になれてゐたかつた。放縱に流れてゐた。

その上小田原藩の人々は時に金次郎の仕事のよくゆくことを



望まないで、邪魔するやう煽動した。

服部家の時は彼の云ふことは誰も反對しなかつた。だからことがしよかつた。今度はいたる所で反對者にぶつかる。彼にいくらいゝ考へがあつても實行が不徹底ではどうすることも出來ない。しかし金次郎は、日々決心を新にして、ます／＼自分のなすべきことをした。

彼は人々がやすきにつきたがるのに反對し、又道路をつくつたり、荒地を開くことをすゝめたりすると、「自分の田畑さへ耕すことが出來ないのにどうして開田なんか出來るものか」と云ふ。其處で仕方なしに、加賀越後の人をよんで家をつくつてやり、農具を與へたりすると、自分達を保護せず、他國人によくすると云つて腹をたて、之を冷遇して居にくゝさせ、逃げだすと快哉を叫ぶ。

いくら金次郎が誠意をつくしても、誠意は通じない。

かくて金次郎は三年の間、馬の耳に念佛を云つてくらした。その內にいくらか金次郎の誠意を認める人はあつても、それは外にはあらはれて來ない。そして



金次郎の仕事の邪魔をするものが、時を得顔をふるまつてゐる。

金次郎もこのまゝではいけないと思つた。それでとう〳〵身分いやしい私にはどうすることも出來ないことを申し出て、免職を願ひ出た。だがお許しはなかつた。それは元より金次郎も知つてゐたにちがひない。そしてそのかはりに、金次郎の位置は高まり、そして上役の二人の人は江戸づめにまはされた。そして宇津家から彼のよき共働者横山周平がかはりにつかはされて來た。

其處でいくらか仕事がはかどり出した。

しかしまもなく又小田原藩から豊田正作が赴任されてきた。この人は正直ものではあつたが、有名な強情張りで自我心がつよく、他人の云ふことなどきかない、藩中の持てあましものだつた、一難去つて一難來たるとはこのことで、さすがの金次郎も之には閉口した。



彼のしようと思ふことは一々難くせをつけられ、そして役が金次郎の上なので金次郎の意見は用ひられないことが多く、いくら方針をたてゝも途中でその方針がげられた。

金次郎はどうしたらいゝか、日夜考へた。

そして彼は最後の手段をとるより仕方がなか

つた。彼は妻をよんだ。そして、『お前に一寸厄介なことがたのみたいのだ』と云つた。

妻は更つた夫の言葉をきいて容易なことではないと思つた。

『お前は之から朝おきたら、おつかれでせうと云つて豊田様にお酒をすゝめてくれ。そして出來るだけ多くのませるやうにしてくれ。あの人が居てはこの村はたすけることは出來ない。あの人は私の云ふことをきくやうな人ではない。私のすることは片端から反對し、又こはしてゆく、だからあの人が酒によつて、私の仕事には一さい口だしの出來ないやうにしてもらひたい。之は面白くないことだが、それより他に方法がない。是非さう云ふ風にしてほしい』

夫を信じ切つてゐる妻は承知した。そして朝から豊田に酒をすゝめた。豊田は大よろこびで酒をのんだ。そして巧みに酒をすゝめられて彼は毎日醉ひつぶれた。そして金次郎の仕事を邪魔することは出來なくなり、土地の人も自分の不平を豊田に訴へることが出來なくなつた。

だが土地の人の反對は益ゝひどくなる許りだつた。實際誰が來てもしくじつて歸るのがあたりまへである。誠意は通じない、努力は報いられない。そして恨みとひがみと中傷が彼を傷つけた。



彼が遠い慮りですることは皆誤解された。そして金を思ふ

やうに補助されない人々は金次郎を憎んだ。そして金次郎の誠意を疑ひ、悪人だとまで思ふやうになつた。

そして大勢があつまつて、とう／＼辛抱が出來ずに金次郎を中傷して訴へた。

大久保侯も金次郎を信じてはゐたが、默つてはゐられなかつた。それで、金次郎をよんで様子をきいた。

金次郎は畏るゝことなく云つた。

『私は何度も私の力が足りないのでおことわりしたか知れません。もし私のやり方に不服がある人があれば、それにこしたことはありません。どうかそのものに櫻町の再興の仕事をお任せになつて下さい。私には私の考へより他にいゝ考へは考へ出すことが出來ませんから、それを御信用下さらないでは私は手をひくより仕方が御座いません』

金次郎の確信は岩のやうなものである。かけひきは少しもない。全力をあげてやつてゐるのだ。俯仰天下に耻ぢないのだ。彼は自説をまげる餘地はないのだ。自分のやつてゐることに少しもまちがひを見出してゐないのだ。自分のしてゐることを信じてくれゝば櫻町は復興する。だが自分の云ふことをきかれなければ櫻町は益ゝ荒れるばかりだ。それは火を睹るより明らかだ。彼が一歩も譲歩しないのは當然だ。定見なきものゝ言葉で動かされる位ゐなら、何にも自分が出かける必要はない。

大久保侯は矢張り二宮だと思つた。信じないわけにはゆかなかつた。そして彼を讒言したものを罰しようとした。しかし金次郎はそれをとめた。『悪氣でしたのではないのです。私の心がわからなかつたゞけなのですから、どうかそのまゝにしておいて下さい』

大久保侯は老中の役をしてゐていろ／＼の大名にもあひ、又有名な人物にもあつたが、この男のやうに一言一句自分の力で反對する餘地を與へない男にあつたことはなかつた。二宮の一言一句は本當のことにふれ、こつちから反對しやうがなかつた。

『戰國時代にこんな男が生れてゐたら、俺の力が使はれたらう』ふとそんなことが頭に浮んだ。人間にはその人のもつ威力とも云ふべきものがある。人によつて大小がある。相對するとその大小が自づと感じられるものだ。そして大久保侯は金次郎の持つて生れた威力がやゝもすると自分にさへ打ちかつ力をもつてゐることを感じないわけにはゆかなかつたのだ。

それが侯には不思議に思へた、だが不思議ではなかつた。二宮金次郎は、毎日毎日、朝から晩まで、夜中に目をさましても、彼の考へることは私のことではなく、櫻町をどうしたら復興出來るか、又人間はどう生きるのが本當か、それを考へぬいてゐた。彼の頭も彼の身體の如く鍛へぬかれてゐた。（つゞく）

街頭御難

的場朝二



(1)『これや叶はん』――脊の高い彼はバスへ飛び乗つたが、座席がなくて。御覧の通りの恰好。首が痛くて脊骨が痛くて足が痛くて。



(2)『いや、どうもつ参たなア？』――我慢がしきれなくなつて彼はバスを降り、やれやれと足腰を伸してアクビをやつたら、お客と間違へてか圓タク征め。



(3)『ちえッ！　じれつたい』――結句、圓タクなら事が早いと乗込めば。諸々方方、道路普請でこの始末。

道草



〔1〕ドン『ああ……重い重い！いやになつちまふな!!』



〔2〕ドン『もうやめたツ、凧の方がいいや』



〔3〕シン子『をばちやんあすこにドンちやんのヴァヰオリンが落ちてゐてよ』



〔4〕マザー『今日は何を習つて来ましたの？』

ドン『タコタコアガレ、テンマデアガレ』

(4)『これは散々だ、歩いた方が早いや』いよ〳〵氣を腐らし、又車を降りたところを撒水車に見舞はれ、忌々しや新調のズボンが臺なし。



(5)『何んテ間が惡いんだい』——ウンザリして電話で用を濟まさうと公衆電話を見つけて來て見れば、こゝも先客滿員なり。



(6)——業を煮やして戻つてくるとダシヌケに物陰から御用!!!と惡垂れ小僧共に飛び出されて流石の彼もギヤフン。『莫迦ッ！吃驚するぢやないか』



兵隊さん

〔1〕パパ『兵隊さん何をやつてるか知つてるかい』



〔2〕ドン『知つてるよ、雀を追つてるんでしよ』



〔3〕パパ『違ふよ、戰爭のお稽古をしてるんだよ』



〔4〕ドン『いいえ、矢張雀追ひだ、あんなに澤山、ネ、ネ、ネ』

パパ『ハハーン成る程』



「キング編輯局一同より」

滿天下の愛讀者諸君に熱願!!

◇是非此の一文を御讀み下さい
◇是非聖なる御援助を願ひます

讀者諸君！　私共がキング創刊以來五星霜、夢寐だも忘れなかつた事柄は如何なる犧牲、如何なる努力も惜します、人力の限りを盡して天下萬人の期待に添ふやうな立派な雜誌をつくる事にありました。お蔭を以て今やキングは日本の雜誌界を風靡し、素晴らしい勢ひで堂々と世界的に進出しつゝあります。これ偏に讀者諸君の熱烈なる御聲援、御同情の賜と衷心より感謝致して居ります。今更申す迄もなくキングの使命は、天下萬人が輝かしい希望と明るい和樂に生きる事であります。それ故

キングの愛讀者が一人增え二人增える事はそれだけ國を清くし、世を明るくする所以だと信じます。

讀者諸君！　キングの赴くところ醇風起り、良俗起るの報を聞く每に、私共は益々力を得て只管キングのために精進努力致して居ります。此の國民的雜誌を如何なる山間僻地にも每戶一冊を頒ち、如何なる職業の人にも必ず一讀を乞ふ事は私共畢生の念願であります。現在に於ても東洋一の發行部數を有するキングが、何故これ以上の讀者を求め、發行部數の大擴張を希ふのでありませうか。それは

キングの愛讀者が一人でも多くなる事は、より良い

雜誌をより安く讀み得る所以であるからであります。

讀者諸君！ 試みに現在日本に於ける五十錢定價の雜誌に就て御考へ下さい。紙質、頁數、體裁は勿論、口繪に記事に總ての點で如何にキングが頭角を拔いてゐるかはスグさま發見出來ませう。換言すればキングは質から云つても量から云つても日本一に安い雜誌といふ事が出來ます。ところが今若しキングの讀者の數が二倍三倍になれば今日以上に頁數を增し、印刷を美しくし、內容を豐富にする事が出來るのであります。かくして良い、安い、爲になるキングの眞價が益々發揮されるわけであります。此處に於て

天下百萬の愛讀者諸君の御熱誠に訴へ、發行部數の大擴張を企てるものであります。

讀者諸君！ 雜誌は天下の公器であります。キングは私共のキングに非ずして天下のキングであります。一日と雖も皆樣の熱烈なる御後援なくしては居られないのであります。何卒私共の微衷を御察し下さいまして天下のために『數分の時間と一錢五厘の切手』を御犧牲に願はれますれば幸甚であります。それは讀者諸君の御知合の中で、まだキングの讀者でない方がありましたら、購讀をお勸めして頂くと同時に、その方々のお名前を直接本社に御通知願ひたいのであります。洵にお手數恐入りますが、**本號の卷末四一七頁の『はかき』に購讀を御勸めしたい方々の住所氏名を御記入の上御通知下さい。**尙各種印刷物をお送りして、一層の御援助を頂きたいので、御知人にお頒ち下さる枚數を併せて御記入願ひます。呉々も諸君の御援助を期待し、信じて居ります。

今回御盡力を仰ぎました方々は特に『キング特志愛讀者記念芳名錄』に記載し永久に保存して常に感謝の意を捧げたいと存じます。

胃腸病・肺病等一般虚弱體質者に

「素晴しく効くにんにく藥草」

夏まけを防ぎ精力衰退にも妙です

蒜と（にんにく）いふ藥草は昔から胃腸病、呼吸器病等に効果がある事を一般の人々がよく承知して居ります。然し何故其の藥草が一般家庭に常用されないかと申しますに、「一口ににんにく臭い」といふ事で折角天惠の藥草も其の球根の皮下から發散する强烈な惡臭と辛味の爲に、萬人が萬人之を口にすることを躊躇するものです。

支那や朝鮮あたりに參りますと朝夕の料理の中に多少に不拘之を混合して居ります爲に初めてその料理を戴きますと一種言ふべからざる異臭の爲めに折角の料理にも進んでわんを重ねる勇氣も出ません。

榮養から見た蒜の價値

然るにそれは間違つた考へで、にんにくには非常に强い殺菌力と解毒の効がある所から丁度私共が刺身を食する時に藥味としてワサビを添へるのと同じな習慣になつて居るのです。尚之を榮養價値の方から見ましてもヴイタミンの含有量の豐富なことは野菜類中第一でありますから、

實に「にんにく」は整腸に又强壯榮養料として誠に貴重な理想的自然藥であります。その中でも特に効果の著いのは急性慢性の胃腸病、肺病その他呼吸器障害等に對してゞありますが、非常に强烈な殺菌力を持つて居りますから夏期の下痢消化不良にも適應して胃腸を整へる事、實に妙であります。

見違へる程よくなる

又性來體質が弱く精力元氣の乏しい人が用ひますと、不思議に氣力を旺盛ならしめ、特に夏まけを防いで食慾を増進して夏の衛生を

埃よけ、虫よけ、濕氣除けに……

お洋服の保存法

―最も簡單で手輕な―

洋服は手入が惡かつたり保存に注意致しませんと折角高價な洋服も型崩れがする、色がさめる、又一寸の油斷で虫に喰はれて二度と着る事が出來なくなつて失ひます。

西洋では早くからお洋服の保存に高價な洋服簞笥の代りとして各家庭で大きな紙製の袋などを用ひ非常に重寶して居りますが未だ日本にはさうした便利なものはありません。

所が今回長山先生が御考案になつた洋服保存器は使つて實に重寶、便利で全體が極く上質な紙で作られ内部に洋服を吊下げて口を閉ぢれば外氣を完全に遮斷する様になつて居りますから絶體に虫に食はれる心配もなく、濕氣にもならず完全に保存する事が出來得る重寶品で、各家庭から大評判です價は實費用一圓八十錢外送料二錢と言ふ安價ですから地方にも好い品です。御希望の方は送料三十錢を添へ本社代理部へ御申込み下さい。

覺えなくなります。又冷え症の御婦人などに非常に効果を奏することは幾多の實例に依つても明な事であります。この驚くべき卓効を數へ擧げれば際限なく近頃專門家及び識者間にも賞用せられては居りますが、何分にも生そのまゝではあの苦辛いのと臭氣の强烈なる爲めに一般の人や病氣に惱める方が殊に御婦人やお子様方などに常用出來なかつたのは誠に遺憾な事であります。

それならば、どうすれば何人にもこれを容易に攝取することが出來るかと永らく苦心研究いたしました結果遂ひに「にんにく」から精を製出し丸藥としたものが即ち近頃大好評の强壯劑「にんにく丸」であります。

誰にも飲める丸藥に

この「にんにく丸」を一日毎食後十粒位宛連用しますと急性慢性の胃腸病或は消化不良等も何時か忘れた様に治り、長年の肺病心臓病等に適應して毎日生のにんにく二三箇を服用して居ると同様の効果が得られます。之に依つて身體が見違へる程丈夫になつたのや病弱の體質を改造したと言ふ様な實例は澤山にありますが、殊に夏やせ夏まけの甚しい人が用ひますとメキメキ恢復して見違へる様になつた事も従來の實驗で明瞭に認められました。尚蒜丸は服用後口中から惡臭を出さないと言ふ事が特長でありますから全くの蒜嫌の女や小供にも容易に服用する事が出來、それに化學的の他藥品などと異り全然副作用等の心配もなく、天與の自然藥ですから服めば翌日からテキ面にその効果が現れて參ります。

近來「にんにく丸」の効果が認められ全國は勿論遠く北米や南洋の各方面の方々も非常に賞用されて居ります。

尚にんにく丸の價は三百粒入約十日分一圓七十錢九百粒入卅日分四圓五十錢送料内地十八錢領土五十五錢東京市本郷區駒込坂下町四八大日本雄辯會代理部（振替東京六六二九番）に御注文下されば速く御送り致します。どなたもこの貴重藥を御試し下さい。

喘息病者は今が峠

速く用心すればこの冬は苦痛不知

◇喘息は今が最も危險

暑からず寒からず普通の人なら食慾もズット進んでこんな結構な季節はないのに喘息の人に取つては、唯今が最も難關生死の境。實に地獄の一丁目なのであります。然も喘息の苦しい事は今更申すまでもない事でこの患者は、あちらでも、こちらでもゼーゼーと邊で見る目も氣の毒な、苦しみと悶えを訴へて居られます。斯樣に喘息は苦しい病氣でありながら世の多くの方々の中には不治の持病と諦めて終生を苦しみ通した人も少くありませんが、近來醫藥の進歩の結果合理的な療法もあれば又怠らない平素の養生攝生によつてその發作を未然に防ぐ事も六ケ敷い事でなく元來喘息は病氣の性質上發作の兆ある毎に、押へ押へして行けば今の難關も極めて氣輕に一度の苦しみもなく通り拔ける事も出來るのであります。然も之から愈々寒さに向ひますと喘息は無遠慮に何時襲つて來るか知れません。

◇殊に五年十年の慢性に

なると、とても一通りの事で治るものでありませんからその場合は是非藥の力に依る事でありますが藥にも一時的な頓挫藥もあれば苦痛押へての注射もありますが、何れも一時的のものや習慣性のものは最初から避けねばなりません。然し茲に數年來その成績を報道し讀者諸賢に大確信をもつて御推奬して居ります、喘息名藥として評判の高い「喘息エキス」はこの場合も效驗を大にして御奬め出來る最良藥で本社で御紹介以來已に滿六ケ年を經過し、安全無害而も習慣性とならず效力の著しい事は喘息藥中隨一の名聲を博し其の愛用者全國津々浦々迄及び最早社會的試驗の合格品であります。

◇激しい發作もピッタリ止る

雜誌「鍛錬」主幹古賀誠氏は十數年來難治の猛烈な喘息持ちで醫者も藥もないと諦めて居た程でしたが、本社の「喘息エキス」を試みられてから全く鎭靜して、今では喘息のぜの字もなくなり煙草も酒も平氣で飲むしマラソン選手そつちのけの健康になつたと心から感謝を寄せられて居ます。又澁澤子爵堀內中將閣下をはじめ、その他知名の士にこの「喘息エキス」を愛用さる向も少くありません。

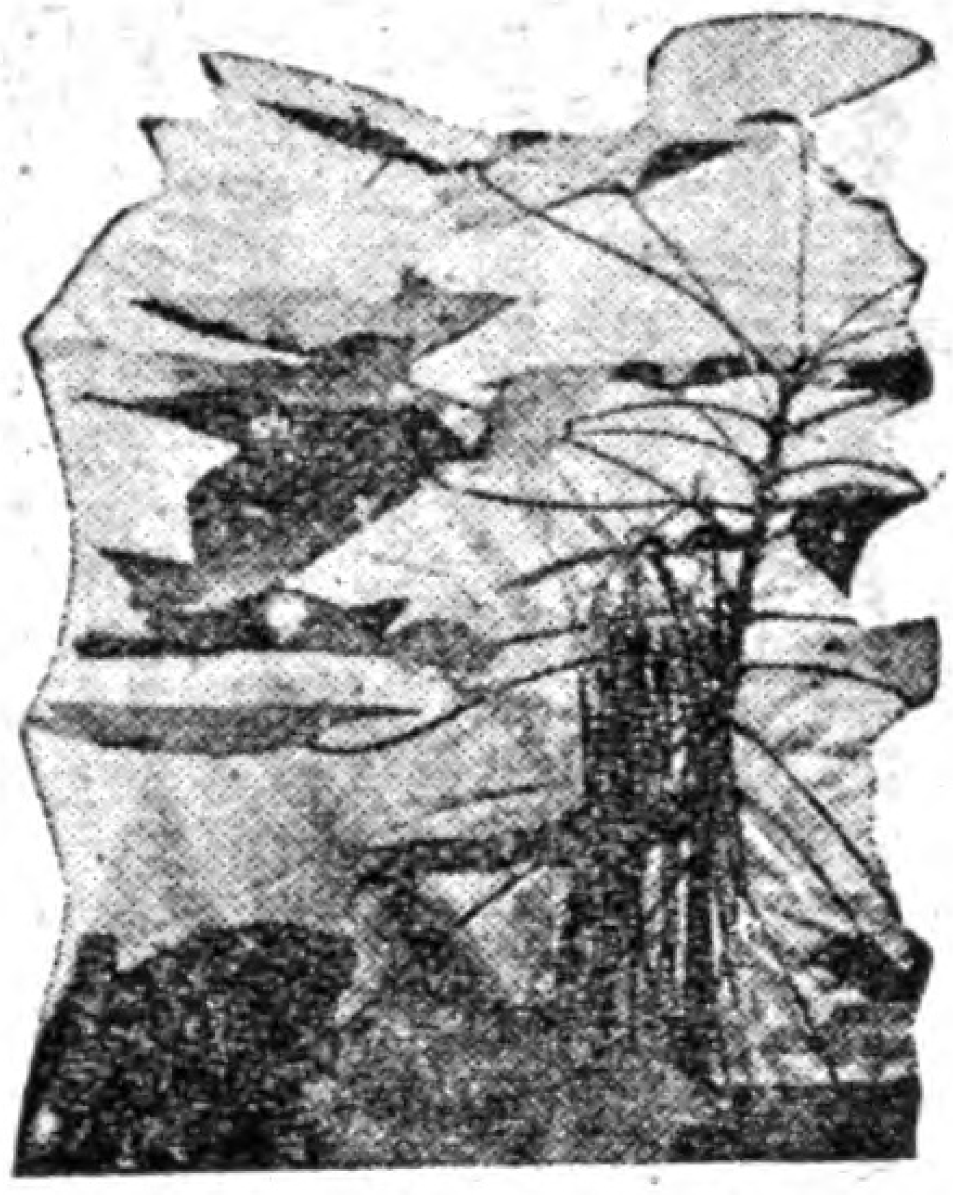
激しい發作が起り息苦しくて堪らぬ場合、この「エキス」を一匙お湯に溶いて飲みますと不思議や大抵は大風が凪いだ樣にケロリと鎭まり、又發作の前兆ある時に服用すれば完全に其苦しみから逃れる事が出來ます。

喘息にこの樣な效果がある程ですから氣管支加答兒は勿論、治療最も困難とされて居る百日咳にも非常な效驗が認められます。餘り效果が覿面なので服用者は何か劇藥でも配合してあるのではないかと疑はれますが、それは全く安心の『喘息エキス』は全然無害の藥劑で習慣性や中毒性を起すなどの事が絕對にないのであります。

喘息根治の秘訣は輕い中に治療することにあります、少しでも發作の氣味があつたら一刻も猶豫せず此の『喘息エキス』をお用ひになり、發作を押へ〳〵して行けば必ず何時ともなく忘れる樣に根治させることが出來ます。

各地有名藥屋にもあります。

喘息エキス試用分一圓三十錢、小卅回分二圓五十錢、中六十回分四圓八十錢、大百回分七圓（送料內地十五錢領土五十錢）東京市本鄕駒込坂下町講談社代理部　振替東京六六二一九）



支那產の木さゝげ

腎臟病、尿毒症に
素晴しくよく効く
支那天然產「木さゝげ」に就いて

皇漢藥堂　栗原廣三

◇知らぬ間に犯される

醫學が進步しない頃は全身の浮腫や血色の惡い樣な、俗にじり〳〵と衰弱する病氣は總體的にただ水氣黃疸など謂うて何等適確なる治療法を講ぜず、往々にして治療の機を逸し遂にどうすることも出來ない重體に陷つたものが多かつたのであります。

元來腎臟炎の徵候としては全身の浮腫と尿中の蛋白を見る位の極めて自覺症狀の緩慢なる爲めに、現在自分がこの病氣に罹つて居りながら一寸氣付かぬと言ふのが此の腎臟病の特徵で、それと知らず保險などに加入しようとして、保險醫から發見される例も澤山あると言つた程度で、既に自分に氣が付いた頃は心臟も血管も犯されて、頭痛や眩暈がしてくる、それ故若し身體に浮腫が來たとか、殊に顏面にむくみがあるときは、體內の鹽分の排泄が妨げられてゐる證據で、之を放任しておきますとあの恐るべき尿毒症に罹る事になります。

斯樣なわけで腎臟病は初期に於て最も完全なる處理方法を講ずる事を第一といたしますがその治療手段として腎臟の排泄機能を高めること血壓をなるべく低くすることで尚心臟を強壯にし、腎臟に迷惑をかける樣な肉類や鹹辛きものを喰べないことが大本でありまして、つまり腎臟に刺戟を與へないで而も腎臟の働きを完全にする適當な藥劑を求むると言ふことが治療の大眼目であります。

◇天然藥きさゝげの特效

然るに從來の腎臟藥の多くは所謂利尿作用をのみ專門として且つそれが化學藥であるため、時に依つては却つて腎臟機能に障害を起す事さへもあり、その他西瓜や商陸などいろいろ民間藥草も用ひられましたが、それもかの萎縮腎の如き腎臟機能の變化に際しては有害とならぬとも限らぬので、あらゆる臨床醫家がこの無刺戟性利尿劑の搜索發見に腐心しつつあつたのでありましたが、先頃計らずも支那湖北の山中に自生する「きさゝげ」が偉大なる效果のあることが判明し、已に今日まで多數醫家の實驗に據りますと、

『きさゝげは單味で顯著しい腎臟機能促進劑なり且ついろ〳〵腎臟內の尿毒を一掃し而して何等の副作用がないから久しく連用しても差支へない』と言ふ結論に達し只今

では唯一優良な腎臓藥として安心して皆樣に御紹介出來る樣になりました。

かつてこの「きさゝげ」が腎臓炎に特效ある事に就いては、三宅花圃夫人、三宅やす子夫人によつて雜誌「女性日本人」誌上にその詳細が發表された事もありますが、其後今日まで多數實驗者の報告を綜合しますと、

◇『きさゝげ』は尿毒を起す虞れある患者に對して極めて快速なる利尿作用を爲すが爲めに大いに良好である。

◇『きさゝげ』は蛋白尿を排除するのみならず其の分解產物を一掃するから心臓の故障を未然に防止する。

◇『きさゝげ』は身體組織内に滯溜する水腫をとるから血管壁の硬化を豫防する等。

斯樣な藥理的作用が實驗の結果一々適確に證明されて參りました。

『きさゝげ』は漢名を楸と言ひ支那湖北省に產する落葉喬木で七月頃淡黃色脣形の花を開き九月頃に長さ約三十センチメートル位の頗るさゝげによく似た莢に實を結びます。この實を凡そ二匁乃至三匁位水三合に煎じて約半分迄に煮つめこれを一日の服量となすのでありますが、これを用ひると大熱を發して百分の幾何と言ふ程尿中に蛋白が增加した樣な腎臓でも直ちに熱が下り、千分の幾つといふ位に蛋白も減じ、やがて徐々に恢復といふ事になるのであります。然しこの場合一種の苦味があつて服用し難い時はもろこしの實又黑豆を炒つて混じて煎じると苦味もとれ珈琲の樣な味になります。即ちこの「きさゝげ」が腎臓炎に卓效あることが一度世上に傳りました處、各階級を通じて賞用され、然も無刺戟性でどなたにも用ひられ、その效驗は次から次へと偉い評判となりました。

『きさゝげ』に就て　　記者

『きさゝげ』の效果が單に評判のみでなく實際に顯著であらゆる他の藥劑より遙に優れた效力を認められ近來續々要求される向が御座いますが、これは年中限りなく有ると言ふものではないのでこの時機を外すと又遺憾ながら御須ちする事が出來なくなりますが漸く採取期に入り精選したるものを幾分手に入れることが出來る樣になりましたから御入用の方は賣り切れぬ内至急御申込み下さいませ、價は一包(約一ヶ月分)一圓二十錢で、送料内地十二錢領土四十五錢です。

御申込みは東京市本鄕區駒込坂下町大日本雄辯會代理部(振替東京六六二一九番)へ

「フケぬけ毛をピタリ止める」

日本に初めて出來た理想的完全品

クイン一ツで香油とポマードの代用になる

フケが多くて頭が痒い程氣持の惡いものはないのみならず、フケは非常に毛髪を荒しますから毛髪は自然榮養や發育を妨げられて段々赤く細くなり艶を失ひ遂には脱落して了ふ程淋しい感じのするものはない。男女を問はず頭髪の拔けたり白毛が出來る程淋しい感じのするものはない。

フケや拔毛は單に毛髪を洗つたり粗雜なフケ止液や在來の怪しげな毛生藥を振りかけた位では何の効果もないばかりか徒らに安價なアルコールに刺戟されて毛質及皮膚面を害する事も實に甚しい。

唯一度でピッタリ止る

本社が特に推薦する『クイン』は純植物性の毛髪榮養料を主としてあらゆる科學の原理を應用し超人的な方法に依り精製された事は申すまでもなく、その不思議な作用は皮膚の深部にまで及びフケの發生をピッタリ止めてしまひます。

・一度用ひると二十日位はどんなにひどいフケでも全く嘘の樣に止り常用すれば永久少くなつて數回後にはあれほどヒドかつたフケ拔毛が全く根本から取除かれて氣分も自然と晴々して參ります。

而も奇妙なことは若はげ髪が薄く切れ易く光澤のない方などが常用すれば必ず一切の惱みを拭ひ去つて眞に一點のフケもなくなり若々しい漆黑な生き生きした頭髪を保つ事が出來ます。

ポマード・香油の代用に

又頗る重寶な事に『クイン』はポマード代用になりますから平素ポマードや水油を御用ひになる方もこの『クイン』一つで何にも入りません（勿論香油と併用するも可）頭髪を短かくして居られる方に使用して三四時間後に直ぐ洗ひ落してもその効果は變りなく然も粘つく事がないから用ひた後の爽快さは又格別でその中に含有する高貴な香料は馥郁として身に迫りそれが如何にも[illegible]と深い教養を發揮するために上流階級の方々は爭うて愛用して居ります。

德川侯爵御夫妻の如き口を揃へて、このクインの實効を賞揚なされ『外遊中なか〳〵純良な頭髪化粧品がなくて困りましたが、今回贈られたクインは全く說明書と寸分違はぬ不思議な効果に驚いた、然もサラ〳〵して少しも粘付かず拔毛もピッタリ止つて本當に晴々しました』と尚鶴見前代議士も『私は頭が痒くなると止め度もなく痒くなつてたまらぬ程ヒドイフケ性なのにこのクインのお蔭で忘れた樣に快復しました』と喜ばれて居ります。

頭髪病を防ぎ毛質をよくする

新發明のフケ拔毛止『クイン』を一度用ひて二三分すればすべてのカユミを忘れ不快味を一掃しフケや拔毛を完全に止めます。又あらゆる頭髪病を防ぎ完全無害に純良な頭髪を生育する作用のある事は全く之までに見る事の出來なかつた科學の力で正に實驗した記者の體驗より眞に優秀品として切に各位に御すゝめ致します。この新發明のフケドメポマード『クイン』は特に御希望の方へ、お頒ちいたします。たゞ御斷りいたしておきますことは、多くの原料のうちで、容易に得難い一品があつて一回の製數に限りある由でありますから、一切れになりますと、約四十日間はお待ちを願はねばなりませぬ故お申込はお早く御願ひ致します。

お値段は一圓と一圓八十錢兩用二圓五十錢の三種、送料は三個まで內地十二錢海外は三十錢五十錢で、[illegible]本品[illegible]お頒ちいたします。

醫者も患者も渇望して居た……

肺結核直接吸入療法

關田月江兩博士激賞・僅か一度で効果が解る

・肺病は癒るか？

元來肺結核の癒ると言ふ事は第一には患者の榮養が亢進し體內の白血球が十分に活動して黴菌を食ひ殺して了ふ場合と第二には病氣の場所の周圍に堤の樣なものが出來、そこで病氣になつて居る肺組織を取り卷き俗に言ふ固るといふ外にはないのでありますから從來の內服藥等では胃腸內の分泌物に依て非常な變化を受け肝腎の肺に行くまでにはどれ丈その成分を吸收されるか殆どその効力の點についても疑しいものであります。事實に於てこの肺結核の根本的全治療法乃至は全治藥と言ふものは遺憾ながら未だ今日まで發見されなかつたのであります。

世界唯一の吸入療法に成功

然るに今回苦心研究の結果、漸く呼吸器に對して直接作用ある吸入藥ゲンコールを創製せらるゝに至りました。この高級吸入藥ゲンコールは單に坊間のありふれた賣藥類の比ではなく、全く進步した現代科學の生んだ賜で、その偉大なる殺菌力によつて肺組織や全身に及す驚くべき効驗は、全く豫想外の好結果をさめ實驗者悉く感嘆激賞して居られます。

敵を見極めて彈丸

然も他の內服藥などと違ひこの吸入藥を用ふるならば敵を見極めて彈丸を放つも同樣でありますから、その効果は百發百中然も全身的に榮養をよくし局部的にはこの卓越した直接療法をしたならば之れこそ全く理想的な治肺療法で之迄幾多の臨床實驗に於ても此の偉大るな治驗を認められ愈自信を得て茲に天下幾十萬の同病者救濟の爲一面私に誇を感じつゝお報せ致す次第であります。

何故そんなに良く效くか

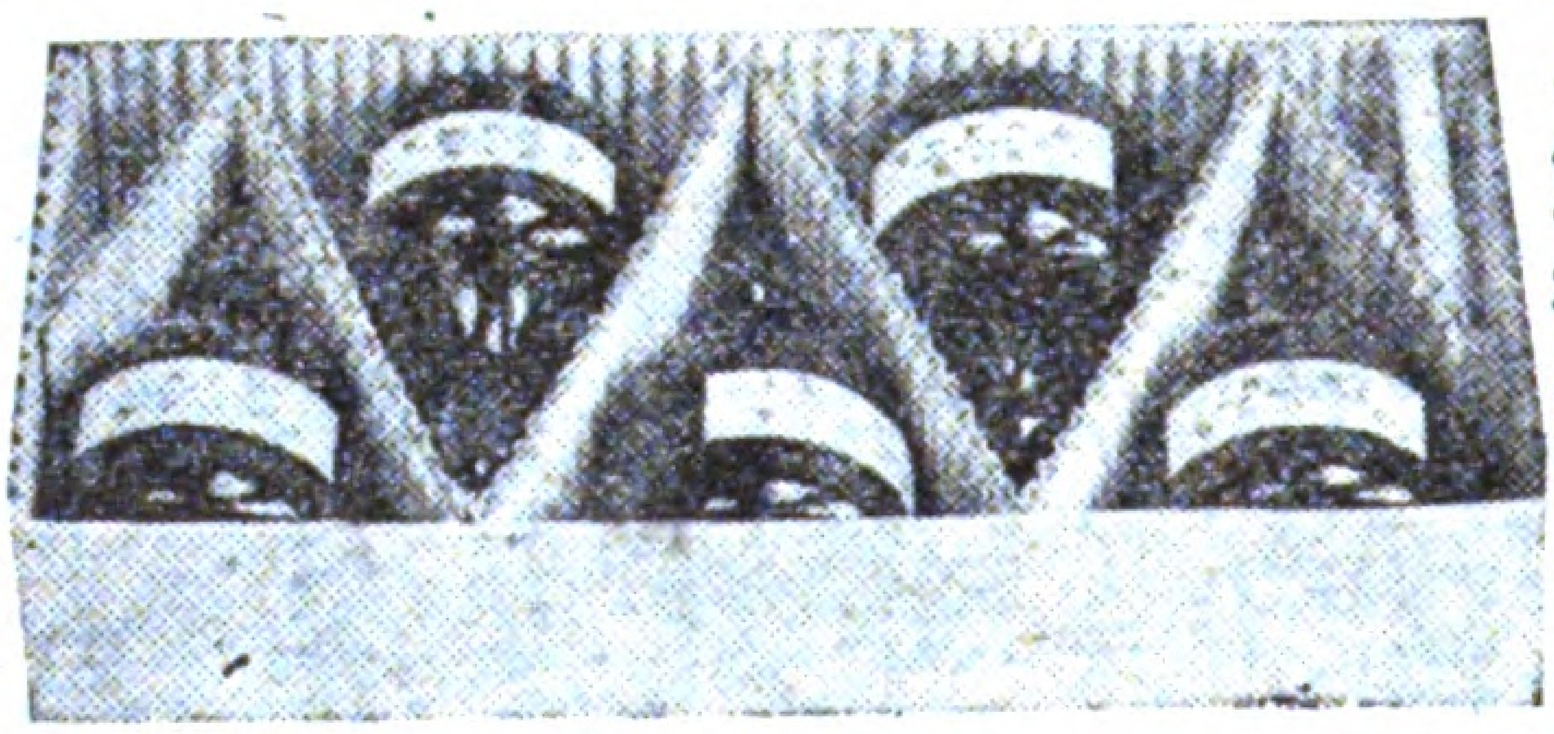
僅か一回の吸入でもその効果が現れ初期の者は申迄もなく二期三期の者でも自覺症狀を非常に輕減し治癒を促進させます。

元來肺結核には內服藥より直接療法の吸入が良いといふ事は東西の大醫が認めて居りながら未だ今日までに實現し得なかつたものをはじめてゲンコールに依つて公表されたもので肺患者と言へば醫師は直に海岸か山地に轉地をすゝめるのは空氣氣候が良いからでゲンコールは茲にヒントを得て居乍らにして海岸に居ると同じ空氣を吸ひ得る樣にし特にこの藥の有効成分の一である有加里の如きは有加里樹の葉から取つたものでこの葉は空中の酸素をオゾンに變る作用がありこの樹のある處には肺患者はないとさへ言はれて居ります。

之はほんの一成分に過ぎませんがその他殺菌劑、粘液を溶解するもの等の高貴藥を多量に配劑してその効力の偉大なる事は多數實驗者報告に依つても明かなる事實であります。

咳が止り蘇生の喜び

東京戸塚町三三六 寺田保正氏曰く 私は幼少の頃から身體が弱く前後二回も肋膜炎に罹りました、又昨年九月初め頃から咳嗽、喀痰、寢汗等があり夕方になると微熱が出ましたから近所の醫師の診察を受けました處右肋膜炎と左肺門腺結核であるとの事で爾來醫薬に親んで居りましたが朝起きた時に咳がひどく出嘔吐をさへ催す事が屢々でした、處がゲンコール吸入薬を早速使つて見ましたら其の日から咳も減り痰も少く氣分も晴々しく食慾も進み日々に健康を取り戻し今では非常に元氣になりましたと又**神戸三ノ宮三澤彌太郎氏**は喀痰の多く出るのに困りぬいてゐましたが今回發見された吸入薬ゲンコールを使つてから喀痰は薄くなり痰のきれが非常によくなり胸がスートした様な氣持になつた、結核病者で海岸等に轉地療法等も意のまゝにならぬ方又常に塵埃の多い中に働いてゐる人等などは是非吸入したいと言はれ、**東京牛込早稻田鶴巻町 市川喜伴氏**は私の知人二人までかなり重症の肺を病つたが不思議に良くなつたので、咳の爲に苦しめられ身體がだん〳〵衰へて行く私も**ゲンコール**を使ふ氣になりやつて見ましたが實によくきくのに驚きました、先づ一回丈で咳も減るし氣分も大變よくなりました。



絶望の淵より救はれた子供

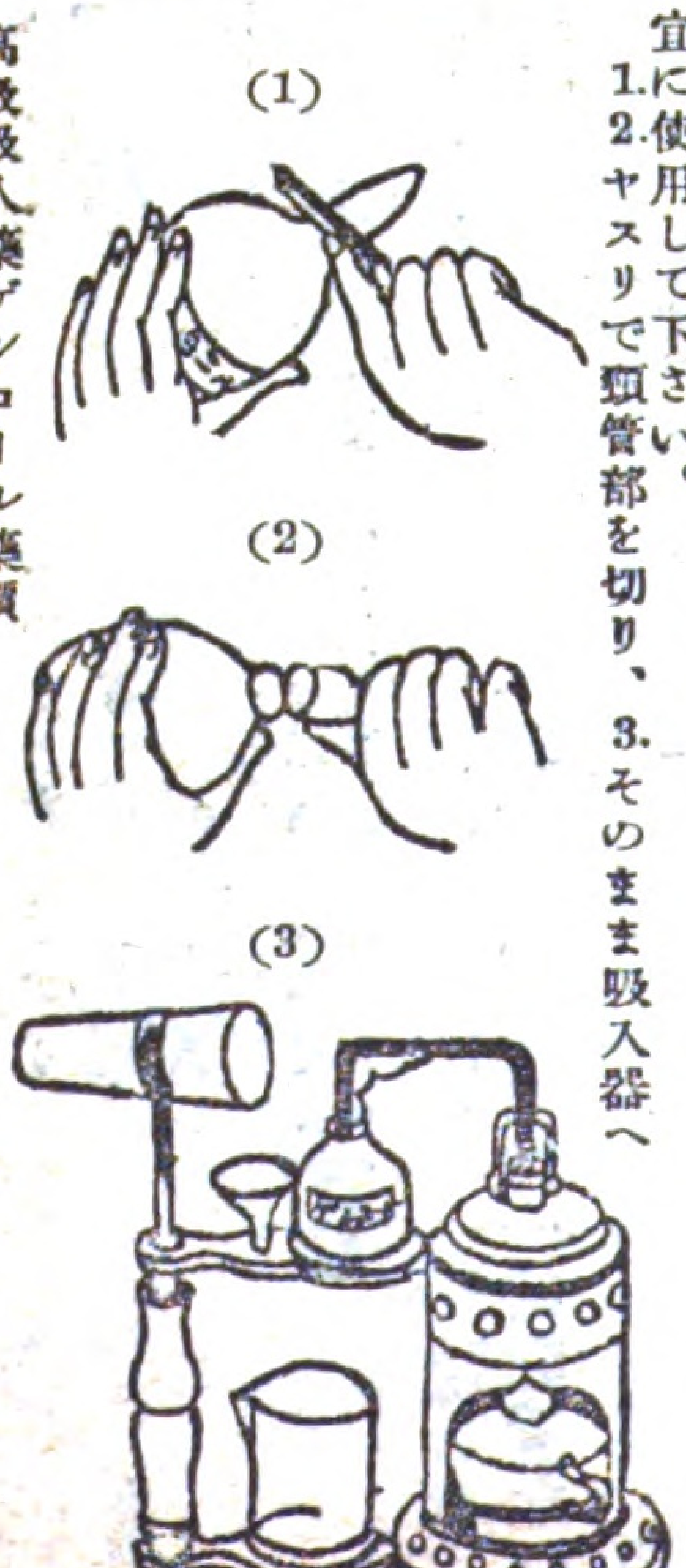
去年の冬私の子供は痲疹に罹り遂に肺炎を併發しその上、膿胸とか言ふものまで起しセキは出る痰は出る呼吸困難となり體温は高く脈など素人には觸れなくなりました。勿論醫者から注射や薬や酸素吸入やと出來る限り手も盡くしましたが最早如何ともなし難く死を待つのみとなりました。その折思ひ切つて人の勸めるまゝに吸入薬ゲンコールを吸入させて見た處不思議やそれからグン〳〵とよくなつて俗に「煎り豆に花」はこの事だと家中涙を流して喜び合ひました。

附記 今迄に内服薬や注射をやつても一向に効果のない方は是非一度御試し下さい。勿論それ等の治療をやり乍らこの吸入薬を御使用する事も良策で決して副作用等起す心配はありません

ゲンコール吸入に依つて喀痰は稀釋となり喀出し易く咳嗽を鎮靜せしめ、呼吸困難を緩和して殺菌消炎の諸作用に依り肺結核治療を促進する事は勿論でありますがその他喉頭結核、氣管支カタル、肺炎、百日咳喘息等にも卓効あると盛に賞用せられて居ります。

吸入薬ゲンコールは普通用アンプレー（圓形の硝子球）に入れたもので使用の折には添付のヤスリで頸管部を切りそのまゝ吸入器にかけて適宜に使用して下さい。

1.2.ヤスリで頸管部を切り、3.そのまま吸入器へ



高級吸入薬ゲンコール藥價
普通用アンプレー五個箱入（約二百瓦）一圓八十錢補給用德用瓶（約五百瓦）二圓二十錢病院用（大德用）（約一千瓦）三圓五十錢送料内地二十五錢領土六十錢

發賣元 東京市本郷區駒込坂下町四八
大日本雄辯會講談社代理部
振替東京六六二二九番

見よ！此の徹底療法を……

神經衰弱・老衰等に斯の如き卓効

難治の陰萎—不感症—早老と雖も最早悲觀の必要なし

文明國人の入割迄は神經衰弱に冐されて居ると云ふ程に本病は世界各國に蔓延して居るのであります。

就中性的神經衰弱が其の大部分を占めて居ります、性的神經衰弱……とは生殖器の障害、例へば陰萎、遺精、夢精、不感症の症状に神經衰弱の一般症状が伴ふのを云ふのでありますが、此の性的神經衰弱の中で陰萎は最も重症で何人も非常に苦悶とする處のもので、今日迄之が治療には、下等動物のホルモンとか又はヨヒンビン等が唯一の治療劑として行はれて來ましたが、効果は不確實て且つ一時的でありました、ところが嬉しい事には今では根本治療藥『精壯』なる内服藥が發見されましたので一般神經衰弱は素より陰萎、早老、老衰と雖も何等悲觀の必要が無くなりました。

驚くべき神祕作用

我々の體内にはホルモン腺と云ふ腺がありその腺から絶えず一種の分泌液を產出して居ります、この分泌液が我々の腦力、神經、並に生殖作用に非常に重要な働をするもので、若し此の產出が衰へると、すぐ腦力も神經も精力も衰弱すると云ふ驚くべき結果になるのであります、されば此のホルモン腺の强健化を計り分泌を旺盛にすれば、如何なる重症の腦神經衰弱も性的神經衰弱も根本的に驅逐し早老者、老衰者をも眞に若返らし、血も…肉も…精神も青春化するのであります。

斯樣な神祕的作用あるホルモンを發見し、神經衰弱の治療に一大幸福を與へて只れた人は英國の大生理學者スターリング先生であります。

「精壯」の効果は一時的でない

『精壯』は實に此のスターリング先生の大學說に基き研究發見された新々藥で、服用ば直に體内各種ホルモン腺や一般神經の榮養となり神經、ホルモン腺を强健化し、分泌を旺盛ならしむるもので、在來の特効藥と稱するものに見る一時的の刺戟、一時的の興奮、一時的の鎮靜、或は又下等動物の不純なホルモンの力を借り一時的の補給を目的とせる姑息な物とは雲泥の相違があるので御座います。

一般に此の種の藥には不眞面目の物が多いので弊社は之等と混同さるゝを恐れ、絶えず第三者の地位にある服用者の全快實驗例を發表し『精壯』の眞價を證明して來ました。左に最近の二三例を御紹介致します。

◇全快の早いのに驚いた

東京市京橋區皆川ビルヂング

盈興社祕書　坂本　三郎殿

中央大學時代に病つた神經衰弱は轉地、藥療法、精神療法とあらゆる手段を講じたが、遂に根治するを得ず慢性となつてしまつた。學校を出てから京濱電氣鐵道株式會社に入社したが頭の具合が悪いので退社し其の後も一二の會社に入つたが皆同じ結果に終つた。昨年の夏雜誌キングで精壯の偉効あるを知り服用する事になつた、服用して驚いた事は三日目既に七時間の熟睡が得られ精神實に爽快頭痛、頭重が著しく輕減したのであつた斯様な適確に奏効した例は今迄のどの藥にもない事で僕は非常な自信を得て服用を續けたので確に全快も早かつたのだと思ふ。今ではこうして多忙な役をつとめて居るが健全な頭腦となり一日として欠勤した事がない。

◇在來の藥に比し遙に勝れり

石油興業株式會社々長　小林正一郎殿

『精壯』服用の結果は、(1)翌朝より自然の便通がある、(2)精神爽快となり安眠が得らる、(3)心身の疲勞が不思議となくなる。

以上の如き成績にて在來の健腦、強精劑に比し遙に勝り又眞面目な藥劑であると思ふ。

◇數年來の陰萎が根治す

東京市外澁谷町　岡本弘三郎殿

何を服用でも更に効果のなかつた七年越の陰萎が『精壯』服用一ケ月餘りで不思議に回復し、一廻りも昔の若さに返つた事は只々感謝の外ありません、この藥の偉効は私ばかりでなく私の會社にも一人私同様のが完全に治つて居ります。

◇激務にも疲勞せず

丸ノ内ビルヂング

帝都建築組合會計課長　小川限一殿

煙草と酒が過ぎ近年兎角腦の具合悪く困つて居たが、本劑の服用によりめき／＼好くなり此の頃は無理な執務を續けても何等疲勞せず元氣旺盛頭腦又頗る明晰となり誠に喜んで居ります。

◇精神爽快にて安眠が得らる

新橋演舞場株式會社取締役　竹内　弘殿

此の年になつて若返らう等の氣持はなかつたが『精壯』を服用と精神爽快にて安眠が得られると云ふので、ついやつて見る氣になり服用始めたが、結果は案外良好で頭の具合と云ひ、身體の具合と云ひ確に調子が好い、それに心身の疲勞回復には實に妙である。

◇身心共に若返る

東京市小石川雜司ケ谷　中村文一殿

六十の坂を越してからは急に年をとり友人や知己から老衰したと迄云はれて居た私が本劑を用ひ始めてからは段々と元氣回復し近頃は容貌迄活氣を帶び生々して來たので、今度はあべこべに若返つた／＼と羨見される樣に迄變つて來ました『精壯』は精力や氣力の衰へた者の回復には此の上の無い良藥だと確信致します。

『精壯』を服用し全快されし方々は世の迷へる多くの同病者の參考となりますれば奮つて實驗全快例を御投稿願ひます御迷惑にならない限り順次に發表致します。住所氏名は御名記の事誌上匿名は其の旨御記入願ひます。

精壯を御希望の方は左記代理部にて一手にお取次ぎを願つて居ります。

藥價、小瓶（六十錠入）約一週間分、金貳圓五拾錢、大瓶（百八十錠入）約三週間分金七圓、送料内地十五錢、領土五十錢、東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京八六二九番）へ

各種懸賞當選者披露

六月號誌上及新聞紙上募集　聖なる感激に滿ちた作品の部

小　説

應募總數二千五百九十一篇中一等に該當する作品がありませんでした。依つて二等受賞者を三名となし、一等賞金貳千圓也をその方に廻して分配贈呈することに致しました。

二等（賞金壹千圓宛）三名

良寛　東京府荏原郡玉川村下野毛　江原小彌太
天明動亂悲鳥　東京市外蒲田町北蒲田　香好光一
愛國　靜岡縣沼津市市場　松本浩二

三等（賞金五百圓）一名

否婚同盟　和歌山縣伊都郡隅田村　森本眞青

秀逸（賞金五拾圓）一名

寢椅子の謎　大阪市天王寺區上汐町　高田一草

同上（賞金貳拾圓）二名

赤牛　尾道市東御所町　宮本安吉

八、九月號誌上募集　キングカード考へ物の部

解答　1西郷隆盛、2六十五日、3繭、4約五百〇參萬圓。

正解者七萬四千五名の中から抽籤の結果左記五百名が入賞者に決定致しました。

東京　笹尾良治　渡邊幸雄　上杉義一　太田正巳　相澤光一　矢島初五郎　阿部常信　竹内敬二郎　近藤茂樹　庄田光　關口進　内藤八郎　小寺美子　蒲香寅雄　石川二美代　早川濟　伊東和夫　藤井作造　齋藤永久　相良正元　梅澤敏雄　加茂幸四郎　飯村德保　今泉統三　山本浩　河野登子　山本茂夫　髙井一郎　土井一郎　田島富美子

光谷敏夫　木村景吉　木下祐三　野崎愛子　丸岡直哉　金杉益男　東直光　菊地秀　卜野紀　入江晦治　町田英一　玉木千代子　木村正義　清水忠夫　長澤良久　小松眞一郎　和田延雄　中澤桝次郎　井尻正三　田森滿藏　上村陽一　木下公彥　神林亘　橋本正三　辻正顯　大谷盛　吉田岩雄　太田祐一　野上誠　氏家正太　大澤松子

土屋喜六　澤島德濟　田村一郎　竹田元信　**京都**　人見由紀子　平賀捨夫　石田靜枝　寺田幸二　城戸道雄　玉井英雄　高木敬一　松本靜子　正善與一郎　大橋忠也　岩村定五郎　吉川榮一郎　加藤武二　野口勝二　八木糸　**大阪**　畑中善一　井村正明　中村閑子　高橋登三郎　原田英子　中川義秀　鵜楠枝　丹羽末之亟　栗原二郎　伊藤三郎

櫻井忠治　稲葉慶雄　伊藤政弘　西田德次郎　松本トク　奥谷平吉　龜井志郎　瀧澤春吉　安井美雄　木下新吉　長坂関子　森本忠良　前田貞三　奥野義治　加島國吉　田中文造　高畠義夫　宮野隆明　伊藤筌夫　山内善之　石原邦夫　阪田義雄　大浦正吉　新谷濟　藤原靜子　八重垣雲助　武市ハルエ　可部マサ子　桑野政治　服部安枝　**北海道**

或る妻の貞操（住所至急御通知を乞ふ） 南郷二郎

選外佳作（二十四名）

妖迷樓傳奇 山梨 前田榮
鬘 千葉 柳澤義雄
飼戀泡沫繪草紙 福岡 寺部造尋
青春 福岡 谷六朗
人間フライ 東京 伊藤健
紅紫亂渦繪卷 和歌山 長谷部宏
誠は勝てり 東京 永瀬英一
直情日記 東京 蛭川霽月
海王星 埼玉 江口丈爾
不孝者の復讐 愛媛 本富士雪夫
友情 長崎 江口良子

美しき曙 東京 夏川澄
業線 福岡 奥園俊明
骸骨の怪異 東京 村上正臣
熊虎物語 宮城 高橋二郎
苦い紅茶 愛知 三木小雨
梅霖の事件 愛知 船橋猛男
吾輩は猫である 東京 竹音喜代
民衆の愛人 東京 坂田雅夫
霧に描く武者繪 東京 藤田白夢樓
凶星 青森 信乃東洋男
愛は恐む 京都 望月憲雄
生命の香り 靜岡 高橋芳朗
黎明前 山口 長瀧谷英治

講談落語

應募總數一千五百九十八篇中一等に該當する作品がありませんでした。依つて二等受賞者を三名となし、一等賞金一千圓也をその方に廻して分配贈呈することに致しました。

二等（賞金五百圓宛）三名

金鯉究物語 市外龜戸町七丁目 永瀬英一
角櫓の怪 三重縣津市一番町 寺田誠一郎
八方破れ 芝區三田豐岡町 長岡定敏

同じく三等に該當する作品がありませんでした。依つて三等賞金貳百圓也を左記二名に分配贈呈することに致しました。

賞金壹百圓宛 二名

住谷良子 齋藤長一 香田日出子 黑松淸 西原二郎 林正直 大村和夫 山口徵信 敎賀正利 仲山初夫 小松貞美 伊藤興吉 池淵安藏 長島一 栗山篤子 齋藤一男 青山婦花 佐藤辰男 豐舩豐 藤田孝郎 三品政夫 大沼淺次郎 村木榮子 奥井靜子 白島一典 神奈川 池田保次 小館榮吉 三枝敬子 門脇淸吉 山本滿夫 大關徹 川島正子 勝山堅司 大江一男 高村順二 山崎隆 前川秀雄 若杉松代 日野有 高井勝禰 落合熊治 桑島商司

西文雄 森本元子 押木理平 村田彌吉 德井完治 兵庫 中村春子 西山医三 野村博 濱口正一 後藤隆一 田村正一 森永佐太郎 三好ゆく 高田邦三郎 青木太郎 中村道子 坪田花江 蒸本太郎 武内英雄 森茂也 藤田芳子 原田茂治 山地勝美 梨本滿男 外山重章 佐伯三男 山本ひさの 鵜野一三 松村綾子 濟落平太郎 畑行雄 森惠一 埼玉 島崎常次 淺見孝子 菅原菊太郎 遠山順二郎 寺尾正雄 市川武夫 岡村實 橋爪甚衞 群馬

高橋博 矢島佐助 豐田牧 吉田英市 石塚賢司 中島敬夫 江角ふく子 荒井八郎 濱田眞秋 千葉 大木太郎 熊坂喜德郎 渡邊郁洋 能條廣 大塚勝 佐藤勇 押火たま 川上文子 茨城 宇野稔 塚田武治 萩野谷貢 海老原喜也 舟田敬直 飛田藤吉 後藤政二郎 栃木 大貫喜代志 神山太郎 鈴木壽 戸張光一 相馬常敏 大座篤治 岩崎三千雄 北村勳 奈良 池幡新治 今井キンジ 津田深 三重 澤田正秋 西村英雄 皆川明

片山彌三郎 伊藤はるを 鈴木章 森田正 伊藤源一 愛知 林正夫 岡田誠一 上田金一 牧野二郎 酒井浮 杉戸由春 堀井米男 水谷義利 北川庄三郎 中野武雄 加藤與一郎 石田金石 小田五一 加藤久美 石原喜助 櫻戸文子 奥田美知明 角谷梅吉 靜岡 村松よし 岩田シン 村松慶一 久野古夫 吉田大三 鈴木六四 赤堀昇 村木務雄 石川茂 大久保謙 勝山八十次 太田喜一 山梨 雨宮國雄 藤田きく子 中村正次郎 名執三郎 滋賀

夫婦料理　東京府下池袋　竹内松太郎

南蠻茗荷　京都市左京區鳥居町　藥師川信一

秀逸（賞金參拾圓宛）三名

三本脚の烏泉寺　千葉縣安房郡古川區沓見　間立素男

無錢遊興　福島縣石城郡勿來町　村田みのる

瘤　東京市外高田町雑司ヶ谷　畑雄三

選外佳作（三十七名）

鶴峠の仇討　東京　松岡青岐
釋迦ヶ嶽の出世相撲　熊本　森坂春宵
垂穗の響　靜岡　大石嘉平
青葉山築城譚　東京　佐々木信
近世武士道報國記　千葉　中村巖
發明行進曲　東京　深谷翠波
施しの先生　東京　鈴木長公
軍隊生活　廣島　林何首鳥
落語大會　福島　梅宮重郎
吾輩は鼠である　神奈川　鈴木增藏
素人探偵　富山　大上貫治
テレビジョン　東京　田中鐵二
名刀の所有主　東京　萬三平
白衣觀世音像　東京　田中佐規
デパート　東京　住吉晋里
野球狂　三重　寺本俊則
病の味　東京　久司島三樹

南海鐵砲變　長崎　青野牧人
弱い荒武者　茨城　齋藤陸
正直の頭　神奈川　鈴木增藏
本能寺餘聞　東京　山内盛夫
頓智醫者　東京　若林碌二
家主孝行　神奈川　高津隆介
大川友右衛門の最期　東京　川崎浪夫
忠孝豆腐屋　大阪　阪中紅潮
野球狂時代　愛知　武藤無茶苦
曲者は二人　東京　島田石秋
武士　福島　月岡一路
片山一文字　東京　林田夜人
十字架祕文　神奈川　日津文子
行旅死亡人　千葉　渡邊寛
孝子二十餘年錄　?　木村績齊
驚異二枚繪双紙　愛知　高橋俊
傾慄地獄　東京　南部彌一
嫁ヶ君新年宴會　神奈川　佐倉屋興足
捨てたる武士道　山口　平川シヅカ
忠誠二人男　東京　伊藤秀二

北安多大清綾江明細大服熊岡林長田大水藤若中森新長齋富福橋佐青川小新千福今佐吉西大菊菊菊
川村田井水口橋井島部崎崎中塚料澤林澤井井谷藤澤本佐々木山村原野薬井藤村井江地地地
三良皐野平千部城憲啓島昇
和治千辰太大鎮辰市信忠俊七利八遼久義萬正榮織祭秀幸太常一靜六忠壽代龜
男郎代郎郎二己雄男一六次夫男寛郎水夫德龜三誠重吉夫郎男子郎治男昇見範峯美松西榮

皆六岩阿三上島小青柿山櫻村福不山阿高五井佐尾岡秋吉森高高柳福牧西竹今石山高田宮森宮富山
川角部宅野山原崎田田上澤井本橋十上藤形崎藤橋橋山野原井本谷中野崎司
寅手友森形光嵐綱田井彦川千山
久之東口正正眞藤芳術隆三宮市三次盛榮榮德三吉廣董惠利武
齊康助雄ク浩道實幸美雄江武二郎次政郎吉郎雄健文一治郎城松士博矢子知洋昇榮

吉湯田藤藤新戸島工大川今鈴笠今黒片井島尾穴稲大島渡大矢笠瀬平鈴伊藤中長西小泉廣香酒久尾
田武村野枝谷井藤掛端子木井井正山上坂山田江利脇野岡田木原原野田田林井保田
左清潤代幾軍横美山龜喜島
津三秀嘉吉鐵幸政太太留益軍嘉和繁朝秀留道代三松存一三清利美利ナ
寛子好郎山正市藏治藏吉郎郎兒榮治光夫江一夫夫夫夫茂子郎子男美混登次子文子男ク

藤西澤村多佐山佐山林大植御和百大田那大鍋西西高田香和森柳浪豊大神立長紅高ソ久野惠武福小
井本田村幾々々崎平田江歌井森谷川條田田口田原味森垣野鍋槻米川田井川
恒山木口木山島川友櫻喜知卯周
太久義一文末友保綱さ治昌素定酒義光俊四惠久精文萬臣如之正健
郎清雄忠敏一子義壽正一榮き夫子久雄濱男一子夫郎美一遠雄一子一司實助敏久典

詩歌其他

詩歌其他の當選者中「詩」の當選者は去る九月號で發表濟みであります。

秀逸（賞金五圓以上宛）四十五名

○中西はつ子（東京）○野村喜美子（大分）○河合一路（愛知）○大沼萍歌（東京）○大澤住重（神奈川）○田中利重（大阪）○小田與太郎（廣島）○北原水沙子（東京）○歌川京之助（大分）○大塚豪（東京）○廣原幸吉（茨城）○干卷源五郎（青森）○上野多門（神奈川）○淺岡唐紅（大阪）○西笛傳（朝鮮）○高橋晩水（熊本）○藤田政雄（東京）○柴崎與志雄（北海道）○岡實（茨城）○花王嘉芳（富山）○並里梅夫（熊本）○末吉狐山（福岡）○志水賢四郎（愛知）○田上斗潮（熊本）○菱木奇雲（東京）○長谷川雄之助（靜岡）○藤節夫（福島）○金田健（神奈川）○宮崎三治郎（東京）○べく平（神奈川）○和佐田鈍刀（長野）○辻一夢（奈良）○小川雨後亭（東京）○深澤唐人（靜岡）○中村迷柳（同上）○ゆき路（靜岡）○土居増雄（福岡）○遠山角之進（東京）○濱修（兵庫）○濱田一男（愛知）○堂屋敷竹次郎（福岡）○大竹秀治（千葉）以上順位不同

選外佳作

○萩井信一○石渡石汀○中野隆介○宮孝雄○大澤信重○松本斜○福原邦一○森三彦○泉圭介○齋藤昇一○藤本巖○末廣武彦○牧野正雄○竹下津芳○山本勳○早川燕○伊藤夕村○竹田青芽○錦小路芳豈○美骨○池野歩沙○太田凌楓○岩野實○山野井三郎○青山溪○明井殘紅○高津智伊子○木村仁輔○佐久間平八郎○淸水影逸○椿高朗○森田錄水○岡本利男○水野國太郎○池田勵一○大野靜鄉○村山燕

森晴治　中村三郎　森貞緻　渡邊新　岡部史子　益田照夫　菅修一　川島秀一　古田康成　中川市郎　小森山誠　長谷部嚴　永光吉平　中島實　大分　原田芳子　山本篤　稻月薰　齋藤守　藤古厚雄　首藤力

宮崎　尾辻元　日高光男　山下英太郎　中村哲夫　佐賀　福田義夫　寺田忠次郎　生方文夾　林敏夫　寺崎季雄　熊本　坂口勝　大塚亨　清藤春子　片山國男　石原一好　近藤和男　中川健二　長崎　宮崎晃

杉原正男　小笠原正己　井上熊太郎　久保田諸雄　隈部永人　井田一行　鹿兒島　色紙正義　富永松大　伊藤助市　松元都子　長坪末弘　沖繩　比嘉十九　伊波興德　朝鮮　加藤清行　岩坂松巳　武田秀彦　山口春雄　入江國太郎

岸本源一郎　金文玉　青木盈子　河野紳浩　井上淺吉　臺灣　鈴木政治　江火龍　小澤博　鄉奕鴻　樺太　石井ツヤ子　石井淳　佐久間仲夫　大柿武三郎　支那　原田敬子　安藤久子　宮松一年　中澤一賀　平岡榮一

キング原稿の部

七月號誌上募集

○隠れたる名人

一等（賞金五拾圓）一名　鼠捕りの名人　大阪　隈英夫

二等（賞金參拾圓）一名　梅さん　兵庫縣　井口文雄

三等（賞金拾圓）一名　鐵砲名人物語　朝鮮　川口榮治郎

佳作（銀カップ一箇宛）十三名　○甲斐太郎（東京）○横田長吉（同上）○阪中紅潮（大阪）○深澤仲治（東京）○並木二十一（香川）○清原恭壽（兵庫）○河野信（長崎）○三好清馬（愛媛）○室町澤夫（大分）○三面高貞子（長崎）○藤澤紫水（岡山）○前田詠次郎（靜岡）○林喜一呂（愛媛）以上

選外佳作　○樹下石山人○三原美子○中澤風郎○中村專司○青木豐○鈴木英夫○小谷幾二

○興味ある人物

一等（賞金五拾圓）一名　名物人間傘男　大阪　阪中紅潮

二等（賞金參拾圓）一名　S谷の仙人　高松　芙留川文彥

三等（賞金拾圓）一名　今機富樫左衞門　岡山　藤原謹一

佳作（銀カップ一個宛）七名　○三原美子（群馬）○菊池柳湖（秋田）○小林儀太郎（東京）○瀧澤弘（同上）○渡邊藤四郎（靜岡）○藤木純一（岩手）○藤本鶴松（山口）以上

選外佳作　○半澤國八○中田立義○藤本露二○石橋珠夫○曾天民

○不思議な人又は奇蹟的事實

一等（賞金五拾圓）一名　生きながらの土葬　靜岡縣　渡邊藤四郎

二等（賞金參拾圓）一名　質倉に泣く女の子　神奈川　吉井小三郎

三等（賞金拾圓）一名　鴨綺談　大阪市　岡本麻須夫

佳作（銀カップ一箇宛）六名　○後藤純一（山形）○宮崎一義（北海道）○はじめ生（朝鮮）○日當瀨源七（鹿兒島）○磯崎正喜（大分）以上

選外佳作　○田代勇○小坂金之助○藤本鶴松○林喜一呂○小堺利作○山田實溫○小澤木志

單獨漫畫

一等（賞金五拾圓）一名　親父の教訓他一點　横濱　志村常彌

二等（賞金參拾圓）一名　「石橋を叩いて渡る男」が釣に出かけたら　京都　大野利一郎

三等（賞金拾圓）一名　犯人は誰？（他一點）大阪　山田誠

佳作（銀カップ一箇宛）十五名　○和久田笑利（神奈川）○森比呂志（同上）○金子伊男（東京）○平野鍵治（同上）○井原勇（長野）○遊佐誠（東京）○安藤勇起（神奈川）○松村敏三（靜岡）○坂下敬美（神奈川）○路尾定二（愛知）○辻政一（大阪）○菊本敏夫（兵庫）○田村辰三（群馬）○岡田まさ路（神奈川）○濱野孝則（富山）以上

定價表

	內地滿洲支那（送料共）	外國（送料共）
一冊	金五拾四錢	金七拾錢
四ヶ月	金貳圓	金貳圓六拾錢
八ヶ月	金參圓九拾貳錢	金五圓拾貳錢
一ヶ年	金五圓七拾六錢	金七圓九拾六錢

◎特大號及増刊號は右表の外でございますから、それだけ餘分に申受けます。但し前金御拂込の方はその中より差引き計算いたしますから何卒御了承下さいまし。

謹告

◯弊社の圖書雜誌の御註文は總て前金の事◯振替貯金にて御送金は口座受入手數料金壹錢御同送の事◯郵劵代用は必ず一割増の事◯雜誌代前金の相切れ候節は最終の雜誌帶封に「前金切」の印を捺し次の前金領收まで發送停止◯前金は本誌到達を以て領收の事と御承知の事◯御註文書狀宛名は「大日本雄辯會講談社營業部」の事◯郵稅不足又は未納の郵便物は請取不申候◯弊社發行諸雜誌廣告料は御照會次第御報知可申上候

昭和四年十月三日印刷納本
昭和四年十一月一日發行（第五卷第十一號）

編輯人　淵田忠良
發行人　廣瀨照太郎
印刷人　高木島三

東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川（二三五・二三六・二三七・二六〇・一五二一・三五九六）（五九八一・六九八二・七〇八八・七七七四・四一五〇）

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

◎キリトリセンから丁寧に切りとつて下さい。
◎切手は正しくはりつけて下さい。

キリトリセン

郵便はがき

こゝへ一錢五厘の切手をはつて下さい。

東京市本郷區駒込坂下町四八

キング懸賞部 行

キリトリセン

寸鐵ニユース

◇麝香を造るために毎年殺される麝香鹿は十萬頭にも達するが、主に支那の西藏や四川の山奥に産するもの。

◇蟲眼鏡は今から五千四百年も前旣に使用されてゐた事が埃及の發掘物から發見された。

◇米國のフォード自動車會社は世界最大の工場だといはれ其中に敷設された鐵道は百哩。工場では毎日千九百噸の金屬が熔される。

◇今度南米ブラジル國の某地に世界最大の埋藏量を有する鐵鑛脈が發見された。

キリトリセン

あなたのお知合で讀者に勸めたい方の住所氏名を三人でも五人でも下記へ御記入下さい。

住所（氏名）	住所（氏名）	住所（氏名）	住所（氏名）	住所（氏名）

（宣傳印刷物の枚數を左記へ）

枚

あなたの住所氏名

キリトリセン

◎書き落しのないやうによく氣をつけて下さい。

◎文字は必ず楷書でハッキリお書き下さい。

◇オランダの或る老船長は永い經驗から割出して潛水艇式の構造を有する沈まぬボートを工夫したと。

◇盆栽は日本の特産物であるが、佛蘭西では今日日本をも凌ぐ位盆栽術が進んで來た。

◇義齒と云へば金か白金だが、今度パリでダイヤの義齒が流行しレビウの踊子などが鋲齒でニコリとするとピカリと光るといふ寸法。

◇人の身長を計るのに一番簡單な方法は、その人の中指の長さを二十倍すれば可い。これで見ると奈良の大佛樣が立ち上ると百尺になることになる。

KING.
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan.
Entered as second class mailmatter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可 昭和四年十月三日印刷納本 昭和四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）